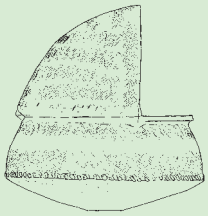
財団法人市原市文化財センター調査報告書第98集

上総国分寺台遺跡調査報告XVI

市原市長平台遺跡



２００６

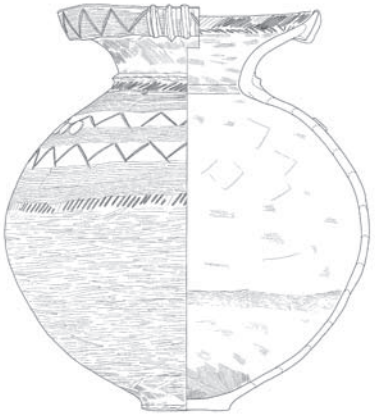
市 原 市 教 育 委 員 会

財団法人 市原市文化財センター

財団法人市原市文化財センター調査報告書第98集

上総国分寺台遺跡調査報告XVI

市原市長平台遺跡（ちょうべいだい）



２００６

市 原 市 教 育 委 員 会

財団法人 市原市文化財センター

201 号墓出土土器

202・203 号墓および 1 号土壙墓出土土器

288 号墓出土土器

289 号墓出土土器

序　文

市原市国分寺台地区は、古代において上総国分僧寺・国分尼寺が建てられるなど、上総国の政治、文化の中枢を担っていました。また、本地区の土地区画整理事業に伴って発掘調査された諸遺跡では、旧石器時代にまでさかのぼる先人たちの足跡が辿られており、この台地が居住好適地として往古より連綿と利用されてきた歴史が明らかにされています。

今回報告する長平台遺跡も、その土地区画整理事業に伴い 1981 年に発掘調査された遺跡の一つです。

この発掘調査では、弥生時代中期以後の村落のひろがりが確認され、さらに弥生時代から古墳時代にかかる変動の時期に築かれた墳墓が発見されました。これらの墳墓と一部の竪穴住居からは、伊勢湾地域と技法を同じくする土器の出土を見ており、激動していた当時の社会情勢を推理しうる重要な材料を得ることができました。

本書は長平台遺跡から出土した遺物や遺構について記載した報告書です。今後、これらの情報が学術的な分野で比較・検討を重ねられることを期待します。そしてまた、はからずも今日の利便と引き換えになった遺跡とその発掘調査の意義を、永く広く伝えることは我々の責務であるとつねづね感じております。これらの成果が社会教育の場においても市民の方々によって、多方面に活用されることを願ってやみません。

発掘調査から本書の刊行に至るまでには、文化庁文化財部記念物課、千葉県教育庁文化財課、旧上総国分寺台遺跡調査団、旧市原市国分寺台土地区画整理組合並びに地元関係者の方々に多大なご尽力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

平成 18 年 2 月

市原市教育委員会

教育長　山中　齊

例言

1　本書は千葉県市原市惣社字長平台（現惣社 2 丁目・3 丁目）に位置する長平台遺跡の発掘調査報告書である。

2　報告書作成に至る整理作業および刊行は、市原市教育委員会の委託を受け、財団法人市原市文化財センターが実施した。

3　発掘調査および整理作業は以下の通り実施した。

発掘調査：上総国分寺台遺跡調査団が実施した。

昭和 56 年 4 月 4 日～昭和 57 年 2 月 22 日　担当者　半田堅三

整理作業：基礎整理（担当：半田堅三・田中新史）の成果に基づいて、財団法人市原市文化財センターが実施した。

平成 15 年度～平成 17 年度　担当者　小橋健司

4　本書の執筆と編集は小橋が担当したが、第 2 章第 1 節旧石器時代の遺物の項は安井健一氏（千葉県教育振興財団）、第 2 章第 4 節縄文土器の項は西野雅人が執筆した。出土土器の胎土分析については（株）パレオ・ラボに依頼し、分析結果を第 3 章として掲載した。また、遺物の探索には田中新史氏の協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

5　出土遺物と記録に付された遺跡のコードは「070」である。なお、「212 号」・「213 号」・「214 号」の遺構については、遺物注記も国分寺台地区の古墳通し番号「288」・「289」・「290」で行われていることから、本書では「288 号」・「289 号」・「290 号」として記述した。また、グリッド番号については、調査時に南北軸・東西軸ともにアルファベット大文字で表記しており紛らわしいため、南北軸：数字、東西軸：アルファベットに改めた。遺物注記と対応する旧グリッド番号については、全体図（第 5 図小文字グリッド名）を参照されたい。

6　添付 CD-ROM には、本書と同じ内容の PDF ファイルと、遺物観察表のファイルが収録されている。遺物観察表他の表組は PDF の他、カンマ区切りテキスト（.csv）および Microsoft Excel（.xls）形式でも収録している。PDF ・Excel 形式の閲覧・印刷には、それぞれフリーウェアの Adobe Reader、Excel Viewer 2003 等が必要である。

7　出土遺物と記録類は市原市埋蔵文化財調査センター（〒 290-0011 千葉県市原市能満 1489）に保管されている。

8　整理作業（平成 15 年度以降）に参加した補助員は以下の通りである。

高山房子・半田朋子・平松みちる・福田八生・松永寿子・三浦奈津子（遺物・図面）

池内順子・宮澤直美・山中敦子（トレース）　安藤眞由美・小倉るみ子（DTP）

発掘調査および整理作業に際しては、多くの方々と機関から御助言、御助力を賜った。ご芳名を記して感謝申し上げる。（敬称略・五十音順）

青山博樹・荒井世志紀・甲斐博幸・加部二生・白井久美子・鈴木啓治・鈴木直人・長瀧歳康
長原　亘・新田浩三・能城秀喜・野口行雄・廣田吉三郎・深澤敦仁・三浦和信・山崎　武
北区飛鳥山博物館・千葉市文化財保護協会・袖ケ浦市郷土博物館・木更津市立金鈴塚遺物保存館
千葉県立上総博物館・千葉県立房総風土記の丘

凡例

1 遺物実測図の縮尺は、土器 1/3、石器 1/2 を基本とする。例外は図中に注記している。

2 遺物写真の縮尺は、平面写真は土器約 1/3、石器約 1/2 を基本とする。立面撮影遺物とガラス玉は任意縮尺である。また、技法・調整の拡大写真は写し込んだスケール（最小 0.5mm 目盛）の通りである。

3 遺物実測図における赤彩部はスクリーントーンおよび赤色で表現し、拓影については断面図脇のドットで有無を示した。

4 平面図は座標北を基準に方位を示している。磁北は座標北に対して西へ 6° 30′ である。

5 遺物観察表等の数値は、推定復元の場合「？」を付け、欠損のある現存部位を表す場合「(〇〇)」のように括弧でくくって示した。なお、「遺存」は実測図ではわからない円周方向の遺存程度を大まかに表現したものである。上半だけでも一周していれば 100 とした。

6 遺物観察表における色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』に基づき記載した。また、同じく胎土は、肉眼で確認できる混入粒の種別と量で表現した。

7「〇〇形土器」は基本的に「〇〇」と略記している。

8 遺構平面図における番号のない遺物ドットは遺物注記との対応ができないドットである。また、土層断面図に土層番号および注記のない箇所は調査記録のない部分である。

9 遺構実測図中の「K」は現代攪乱坑を表す。

10 竪穴住居跡・墳墓の面積は、基本的に遺存部の反転によって形状を推定復元したものを、デジタルプラニメーターで 2 度計測し、平均値をとっている。竪穴住居跡の「上端」・「下端」は想定プランの上端線と下端線の範囲を計測したもの、「柱間」は想定柱穴配置プランから柱穴分を差し引いた面積である。竪穴住居跡の「主軸方位」は、主柱穴・竪穴形状・炉の位置を勘案し、座標北を 0° として時計回りに表現したもので、「竪穴深度」は付近地山から、「主柱穴深度」は床面からの高低差を示す。主柱穴の番号 A・B・C・D は主軸に向かって図面上の左上柱穴から時計回りで付しており、4 箇所に満たない場合は間欠をおいて、順序を守って与えている。床面ピット a・b も同様で、推定される貯蔵穴・ハシゴ穴に対してこの順で付しているが、貯蔵穴がない場合は、ハシゴ穴を a としている。

11 遺構実測図中のエレベーション図はすべて平面図の標高記録から作成したものである。

12 第 1 図は国土地理院発行数値地図 200000（地図画像）・数値地図 50m メッシュ（標高）、第 2 図は同院発行の数値地図 25000（地図画像）千葉・東京・横須賀、第 3・4 図には 1/500 国分寺台土地区画整理事業現況図を用いた。また、写真図版扉は国土地理院による昭和 36 年撮影の航空写真を用いた。

本文目次

巻頭図版
序文
例言
凡例

第１章　発掘調査の概要
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の概要 …… 3
第３節　遺跡の周辺環境 …… 3

第２章　検出された遺構と遺物
第１節　旧石器時代の遺物 …… 9
第２節　弥生・古墳時代の遺構と遺物 …… 18
第３節　古代以降の遺構と遺物 …… 191
第４節　遺構外出土遺物 …… 195

第３章　土器胎土の材料分析 …… 203
第１節　はじめに …… 203
第２節　試料と方法 …… 203
第３節　結果 …… 206
第４節　考察 …… 210
第５節　おわりに …… 213

第４章　調査成果のまとめ
第１節　検出遺構の変遷 …… 216
第２節　弥生時代終末期方形周溝墓と出土遺物 …… 220

挿図目次

第 1 図　市原市周辺の地形 …… 1
第 2 図　関連遺跡の位置 …… 2
第 3 図　周辺の遺跡 …… 4
第 4 図　調査区周辺の遺構分布状況 …… 5
第 5 図　長平台遺跡遺構配置図 …… 7
第 6 図　旧石器調査トレンチ …… 10
第 7 図　石器実測図 1 …… 11
第 8 図　石器実測図 2 …… 12
第 9 図　石器実測図 3 …… 14
第 10 図　石器実測図 4 …… 15
第 11 図　石器実測図 5 …… 16
第 12 図　竪穴住居跡分布図 …… 19
第 13 図　1・3 号竪穴住居跡実測図 …… 22
第 14 図　1・3・6 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 23
第 15 図　2 号竪穴住居跡実測図 …… 25
第 16 図　2 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 26
第 17 図　2 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 27
第 18 図　4・11・12・18 号竪穴住居跡実測図 …… 28
第 19 図　4・11 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 29
第 20 図　11・12 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 32
第 21 図　12 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 33
第 22 図　5・79 号竪穴住居跡および出土遺物実測図 … 35
第 23 図　7・8・9 号竪穴住居跡実測図 …… 36
第 24 図　7 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 37
第 25 図　7 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 38
第 26 図　8・9 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 39
第 27 図　10・15・16 号竪穴住居跡および出土遺物実測図 40
第 28 図　16 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 41
第 29 図　10 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 42
第 30 図　10 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 43
第 31 図　13・14 号竪穴住居跡実測図 …… 45
第 32 図　13・14 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 46
第 33 図　14・17 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 47
第 34 図　17・20 号竪穴住居跡実測図 …… 48
第 35 図　19 号竪穴住居跡・23 号遺構および出土遺物実測図 50
第 36 図　22 号竪穴住居跡実測図 …… 52
第 37 図　22 号竪穴住居跡・23 号遺構出土遺物実測図 … 53
第 38 図　21・41・42・43・45 号竪穴住居跡実測図 … 56
第 39 図　21・41・42・43・45 号竪穴住居跡実測図 … 57
第 40 図　41 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 58
第 41 図　21・42・43・45 号竪穴住居跡出土遺物実測図 59
第 42 図　25・27・28・29 号竪穴住居跡実測図 …… 60
第 43 図　26 号竪穴住居跡および出土遺物実測図 …… 61
第 44 図　25・27 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 63
第 45 図　28 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 65
第 46 図　29 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 66
第 47 図　29 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 67
第 48 図　30・70・71 号竪穴住居跡実測図 …… 68
第 49 図　30 号竪穴住居跡および出土遺物実測図 …… 69
第 50 図　31 号竪穴住居跡実測図 …… 70
第 51 図　31 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 71
第 52 図　32・33・34 号竪穴住居跡実測図 …… 73
第 53 図　32・33 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 74
第 54 図　35・85 号竪穴住居跡および 34・35 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 75
第 55 図　36・37・38・68 号竪穴住居跡実測図 …… 78
第 56 図　36・37・38・68 号竪穴住居跡および 36 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 79
第 57 図　37・38 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 80
第 58 図　68 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 81
第 59 図　39・40 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 82
第 60 図　39・40 号竪穴住居跡および出土遺物実測図 … 83
第 61 図　44・60・61 号竪穴住居跡実測図 …… 84
第 62 図　44・60・61 号竪穴住居跡および出土遺物実測図 85
第 63 図　61 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 86
第 64 図　46・47・48・49・72・73 号竪穴住居跡実測図 88
第 65 図　46・47・48・49・72・73 号竪穴住居跡および 46 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 89
第 66 図　48・72・73 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 90
第 67 図　72 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 93
第 68 図　24・50・51・52・53 号竪穴住居跡実測図 …… 94
第 69 図　24・50・51・52・53 号竪穴住居跡および 24・50・51 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 95
第 70 図　52・53 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 96
第 71 図　54・55・56・67 号竪穴住居跡実測図および 56 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 98
第 72 図　54・55・56・67 号竪穴住居跡および 55・56 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 99
第 73 図　54 号竪穴住居跡出土遺物実測図 ……101
第 74 図　57・58・59 号竪穴住居跡実測図 ……102
第 75 図　57・58・59・66 号竪穴住居跡および 58 号竪穴住居跡出土遺物実測図 ……103
第 76 図　57 号竪穴住居跡出土遺物実測図 ……104
第 77 図　57・59 号竪穴住居跡出土遺物実測図 ……105
第 78 図　63・64 号竪穴住居跡および出土遺物実測図 …107
第 79 図　65 号竪穴住居跡および出土遺物実測図 ……109

第 80 図　69 号竪穴住居跡および出土遺物実測図 …… 110
第 81 図　74・75・76・77・78 号竪穴住居跡実測図…… 112
第 82 図　75・76・77 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 114
第 83 図　78 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 115
第 84 図　80・81・84 号竪穴住居跡および 81 号竪穴住
居跡出土遺物実測図 …… 116
第 85 図　80 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 117
第 86 図　84 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 118
第 87 図　82・83 号竪穴住居跡および 83 号竪穴住居跡
出土遺物実測図 …… 119
第 88 図　墳墓遺構分布図 …… 121
第 89 図　201 号方形周溝墓実測図 …… 124
第 90 図　201 号方形周溝墓実測図 …… 125
第 91 図　201 号方形周溝墓中心埋葬施設実測図 …… 126
第 92 図　201 号方形周溝墓中心埋葬施設出土遺物実測図 127
第 93 図　201 号方形周溝墓周溝内埋葬施設 B および出
土遺物実測図 …… 129
第 94 図　201 号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 130
第 95 図　201 号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 131
第 96 図　201 号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 132
第 97 図　201 号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 133
第 98 図　202・203 号方形周溝墓・1 号土壙墓実測図 … 134
第 99 図　202 号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 135
第 100 図　202・203 号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 136
第 101 図　1 号土壙墓出土遺物実測図 …… 137
第 102 図　204 号方形周溝墓および出土遺物実測図 …… 138
第 103 図　204 号方形周溝墓実測図 …… 139
第 104 図　205 号方形周溝墓実測図 …… 140
第 105 図　205 号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 141
第 106 図　205 号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 142
第 107 図　206 号方形周溝墓実測図 …… 144
第 108 図　207 号方形周溝墓実測図 …… 145
第 109 図　208・209 号方形周溝墓実測図 …… 146
第 110 図　208・209 号方形周溝墓実測図 …… 147
第 111 図　209 号方形周溝墓埋葬施設実測図 …… 148
第 112 図　209 号方形周溝墓埋葬施設実測図 …… 149
第 113 図　210 号方形周溝状遺構実測図 …… 150
第 114 図　211 号方形周溝墓実測図 …… 151
第 115 図　211 号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 152
第 116 図　288 号方形周溝墓等高線図（調査前） …… 153
第 117 図　288 号方形周溝墓実測図および等高線図 …… 155
第 118 図　288 号方形周溝墓中心埋葬施設実測図 …… 157
第 119 図　288 号方形周溝墓中心埋葬施設出土遺物実測図 159
第 120 図　288 号方形周溝墓方台部埋葬施設 B 実測図 … 160
第 121 図　288 号方形周溝墓出土遺物（周溝南西部）実測図 161
第 122 図　288 号方形周溝墓出土遺物（周溝南西部・北西
部）実測図 …… 162
第 123 図　288 号方形周溝墓出土遺物（周溝南西部）実測図 163
第 124 図　288 号方形周溝墓出土遺物（周溝南西部）実測図 164
第 125 図　288 号方形周溝墓出土遺物（周溝北西部）実測図 165
第 126 図　288 号方形周溝墓出土遺物（周溝北西部）実測図 166
第 127 図　288 号方形周溝墓出土遺物（周溝東部）実測図 167
第 128 図　288 号方形周溝墓出土遺物（周溝東部）実測図 168
第 129 図　288 号方形周溝墓出土遺物（周溝南部）実測図 169
第 130 図　288 号方形周溝墓出土遺物（位置不明）実測図 170
第 131 図　288 号方形周溝墓出土遺物（位置不明）実測図 171
第 132 図　288 号方形周溝墓出土遺物（位置不明）実測図 172
第 133 図　288 号方形周溝墓出土遺物（石製品）実測図　173
第 134 図　289 号方形周溝墓実測図 …… 175
第 135 図　289 号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 176
第 136 図　289 号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 177
第 137 図　289 号方形周溝墓出土遺物（石製品）実測図　178
第 138 図　290 号方形周溝墓実測図 …… 180
第 139 図　290 号方形周溝墓実測図 …… 181
第 140 図　290 号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 182
第 141 図　215 号方形周溝墓実測図および等高線図 …… 183
第 142 図　215 号方形周溝墓周溝内埋葬施設実測図 …… 185
第 143 図　216 号方形周溝墓実測図 …… 186
第 144 図　23 号遺構実測図 …… 187
第 145 図　3・4 号土壙墓実測図 …… 188
第 146 図　5・6 号土壙墓実測図 …… 189
第 147 図　7・8・9 号土壙墓実測図 …… 190
第 148 図　遺構外出土遺物（土器）実測図 …… 192
第 149 図　遺構外出土遺物（土器）実測図 …… 193
第 150 図　遺構外出土遺物（縄文土器）実測図 …… 194
第 151 図　遺構外出土遺物（瓦）実測図 …… 196
第 152 図　遺構外出土遺物（土器・土製品）実測図 …… 197
第 153 図　遺構外出土遺物（石器）実測図 …… 199
第 154 図　遺構外出土遺物（石器）実測図 …… 200
第 155 図　遺構外出土遺物（石器）実測図 …… 201
第 156 図　遺構外出土遺物（石器）実測図 …… 202
第 157 図　遺構分布変遷図 …… 217
第 158 図　遺構分布変遷図 …… 218
第 159 図　遺構分布変遷図 …… 219
第 160 図　朱調製用石臼の類例 …… 223
第 161 図　形状の共通する手焙形土器 …… 225

表目次

第 1 表　検出遺構一覧 …… 17
第 2 表　竪穴住居跡一覧 …… 21
第 3 表　方形周溝墓一覧 …… 120
第 4 表　201 号方形周溝墓出土銅釧観察表 …… 128
第 5 表　201 号方形周溝墓出土ガラス玉観察表 …… 128
第 6 表　288 号方形周溝墓出土鉄剣観察表 …… 159
第 7 表　288 号方形周溝墓出土ガラス玉観察表 …… 159
第 8 表　瓦観察表 …… 197
第 9 表　胎土中の岩石片の分類と組み合わせ …… 211
第 10 表　胎土分析を行った試料 …… 214
第 11 表　土器胎土中の粘土と砂粒の特徴 …… 215
第 12 表　千葉県内における弥生時代終末期前後の鉄剣・鉄槍出土遺跡 …… 221
第 13 表　千葉県内の手焙形土器 …… 224
第 14 表　土器・土製品観察表（CD 収録データ）
第 15 表　石製品観察表（CD 収録データ）

図版目次

巻頭図版 1　201 号墓出土土器／ 202・203 号墓および 1 号土壙墓出土土器
巻頭図版 2　288 号墓出土土器／ 289 号墓出土土器

図版 1　遺構写真　調査区全景
図版 2　遺構写真　288 号墓・289 号墓
図版 3　遺構写真　1・2・3・6 号
図版 4　遺構写真　7・8・9・10・11・12 号
図版 5　遺構写真　14・15・16・17・19・20・21 号
図版 6　遺構写真　22・24・25・28・29・30・31・32 号・289 号墓
図版 7　遺構写真　33・34・35・36・37・39・42・43 号
図版 8　遺構写真　44・45・46・48・49・51・52・53・54 号・1 号溝
図版 9　遺構写真　55・57・58・59・60・61・62・63 号・209 号墓
図版 10　遺構写真　64・65・70・72・76・77 号
図版 11　遺構写真　77・78・82・84 号・1 号土壙・5 号土壙
図版 12　遺構写真　201 号墓
図版 13　遺構写真　83・84 号・201 号墓・202 号墓
図版 14　遺構写真　33 号・202 号墓・204 号墓・205 号墓・216 号墓
図版 15　遺構写真　206 号墓･207 号墓･209 号墓･290 号墓･215 号墓
図版 16　遺構写真　36 号・216 号墓・288 号墓・289 号墓
図版 17　遺構写真　210 号墓・288 号墓・289 号墓
図版 18　遺構写真　1･3･4 号溝･旧石器時代調査トレンチ・調査風景・現代の炭窯
図版 19　2 号土器
図版 20　2・3・4 号土器
図版 21　6・7・8 号土器
図版 22　9・10 号土器
図版 23　10・11・12・14 号土器
図版 24　14・48 号土器
図版 25　21・22 号土器
図版 26　27・28 号土器
図版 27　28・29 号土器
図版 28　29・31・33・35 号土器
図版 29　40・44・46・52 号土器
図版 30　54・57 号土器
図版 31　54・57・61 号土器
図版 32　61・64・65・68・69・72 号土器
図版 33　72・76 号土器
図版 34　77・83 号・201 号墓土器
図版 35　201 号墓土器
図版 36　201 号墓土器
図版 37　201 号墓・202 号墓土器
図版 38　84 号・203 号墓・288 号墓・1 号土壙土器
図版 39　288 号墓土器
図版 40　288 号墓土器
図版 41　288 号墓土器
図版 42　288 号墓土器
図版 43　288 号墓・289 号墓土器
図版 44　289 号墓・290 号墓土器
図版 45　205 号墓・加茂遺跡 C 地点土器
図版 46　加茂遺跡 C 地点土器
図版 47　201 号墓・288 号墓金属製品
図版 48　201 号墓ガラス玉

図版 49　201 号墓ガラス玉
図版 50　201 号墓・288 号墓ガラス玉
図版 51　44 号 7 底面籾圧痕・288 号墓ガラス玉
図版 52　1・2・3・4・5・6・7 号土器
図版 53　7・8・9・10 号土器
図版 54　10・11・12 号土器
図版 55　12・13・14・15 号土器
図版 56　14・15・16・17・19・21 号土器
図版 57　22・23・24・25・26・27 号土器
図版 58　27・28・29 号土器
図版 59　29・30・31 号土器
図版 60　31・32・33・34・35 号土器
図版 61　36・37・38・39 号土器
図版 62　40・41・42・43・44・45・46・47・48・50 号土器
図版 63　50・51・52・53・54 号土器
図版 64　54・55・56・57・58・59 号土器
図版 65　59・60・61・63・64・65・68・69 号土器
図版 66　69・72・73・75・76・77 号土器
図版 67　76・78・79・80・81・83 号土器
図版 68　84 号・201 号墓・202 号墓・203 号墓・204 号墓・205 号墓・211 号墓・288 号墓・1 号土壙土器
図版 69　288 号墓土器
図版 70　288 号墓土器
図版 71　288 号墓土器
図版 72　288 号墓・289 号墓・290 号墓土器
図版 73　290 号墓・遺構外土器
図版 74　縄文土器・瓦・砥石
図版 75　石器（288 号墓・289 号墓）・旧石器（7 図・8 図・9 図）
図版 76　旧石器（7 図・8 図・10 図・11 図）
図版 77　石器（153 図・154 図・155 図・156 図）
図版 78　土器細部調整（21・27・29・30・32・35・37・42・68・72 号・201 号墓・202 号墓・288 号墓）
図版 79　土器細部調整（24・29・36・57・76 号・201 号墓・288 号墓）
図版 80　土器細部調整（30・37・52・54・60・68 号・201 号墓・202 号墓・203 号墓・288 号墓）
図版 81　土器細部調整（26・28・38・44・57・68・69・80 号・288 号墓・289 号墓）
図版 82　土器細部調整（2・10・68 号・205 号墓・288 号墓・遺構外）
図版 83　土器細部調整（10・31 号・205 号墓・288 号墓・290 号墓・加茂遺跡 C 地点・遺構外・表採品）
図版 84　土器細部調整（288 号墓・289 号墓）
図版 85　土器細部調整（14 号・205 号墓・288 号墓・加茂遺跡 C 地点）
図版 86　土器細部調整（28・29・30・31・32・41・64・76 号・288 号墓・290 号墓）
図版 87　土器細部調整（10・12・14・32・34・35・79・80 号・201 号墓・205 号墓・288 号墓）
図版 88　土器細部調整（12・28・32・33・36・46・65 号・201 号墓・288 号墓・289 号墓）
図版 89　胎土分析顕微鏡写真（1 ～ 5）
図版 90　胎土分析顕微鏡写真（6 ～ 10）
図版 91　胎土分析顕微鏡写真（11 ～ 15）
図版 92　胎土分析顕微鏡写真（16 ～ 20）
図版 93　胎土分析顕微鏡写真（21 ～ 25）
図版 94　胎土分析顕微鏡写真（26 ～ 30）
図版 95　胎土分析顕微鏡写真（31 ～ 35）
図版 96　胎土分析顕微鏡写真（36 ～ 40）
図版 97　胎土分析顕微鏡写真（41 ～ 45）
図版 98　胎土分析顕微鏡写真（46 ～ 50）
図版 99　胎土分析顕微鏡写真（51 ～ 54）
図版 100　胎土分析顕微鏡写真（胎土中の粒子）

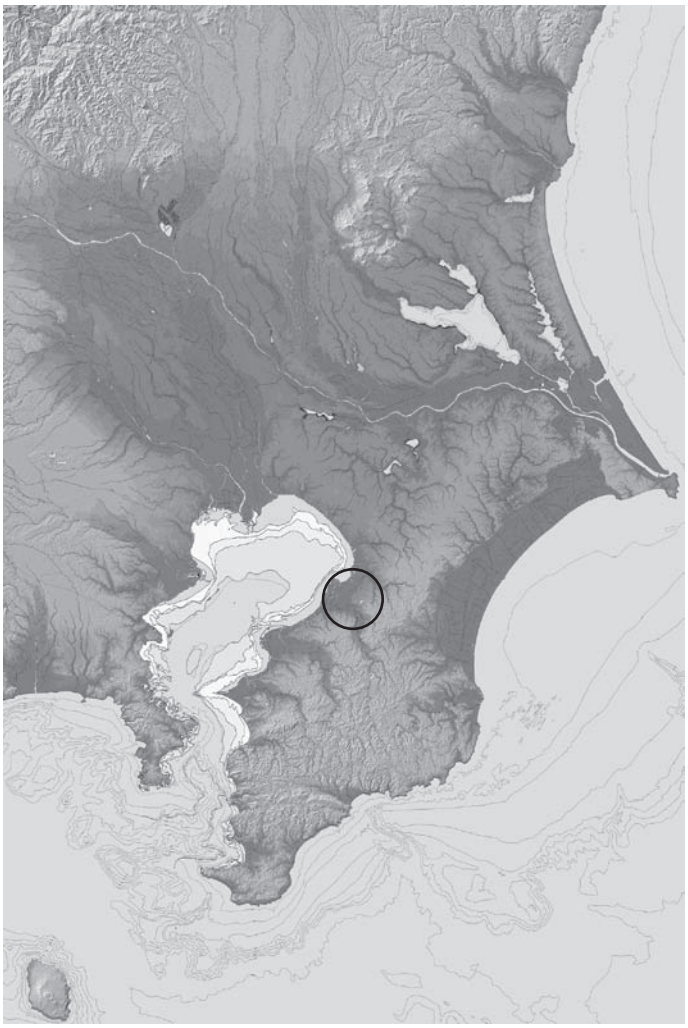
第 1 章　発掘調査の概要

第 1 節　調査に至る経緯

東京湾東岸の首都圏外縁に位置する市原市では、1950 年代半ば頃からの全国的な高度成長の中、海浜部の京葉工業地帯の展開とともに台地上の宅地造成事業が行われるようになった。現市庁舎の所在する国分寺台地区はそのような状況で区画整理が計画されたもので、これに向けて 1970 年に市原市国分寺台土地区画整理組合が設立された。そして、この事業に伴う埋蔵文化財調査に対応する組織として 1971 年に市原市国分寺台埋蔵文化財調査会がつくられ、発掘調査を実施する機関として上総国分寺台遺跡調査団が結成された。

国分寺台地区での発掘調査は、1972（昭和 47）年から 1988（昭和 63）年まで 17 年間にわたり実施されることとなった。調査遺跡は 43 地点、面積は 50 ヘクタールを超えた。当初から発掘調査を行っていた調査団は 1985 年に解散し、その後の業務は財団法人市原市文化財センターに委託され、現在も整理作業を続行している。

長平台遺跡は、1981 年に整理事業地内の道路建設地に墳丘が確認されたために、調査を実施することになった遺跡である。遺跡は立地上、御林跡遺跡（第 3・4 図）と連続するものであるが、中間区域が造成により削平されたことから、御林跡遺跡調査区域とは別に小字名をとって「長平台遺跡」と命名された。発掘調査は 1981 年 4 月 4 日から 1982 年 2 月 22 日まで行われ、その対象面積は 4820 ㎡である。



第 1 図　市原市周辺の地形

国分寺台遺跡群の整理・報告作業は、費用負担の問題から一時期停滞を余儀なくされたが、文化庁文化財部記念物課・千葉県教育庁教育振興部文化財課の配慮を得て、補助事業として発掘調査を実施した遺跡を対象に、1994 年度より補助事業として整理報告作業が行われることとなった。また、1995 年には市原市と土地区画整理組合との協議により費用負担の問題等が解決され、1997 年度から本格的に全体の整理作業が開始された。

本書刊行までの整理作業は、1997 年度以前の整理作業の成果を踏まえているが、2003 年度の再開時には、中断されていた接合作業から行った。

N
東京湾
都川
村田川
養老川
戸張作
東寺山石神
古山
城之腰
星久喜
中野台
鎌取場台
南二重堀
馬ノ口
城ノ台
村田服部
椎名神社
菊間
草刈
川焼台
大厩
潤井戸西山
天王台
国分寺台遺跡群
御蔭目
唐崎台
長平台遺跡
山田橋
下鈴野
小田部向原
妙経寺
東原
畑木小谷
椎津茶ノ木
今富新山
五霊台
六孫王原・毛尻
釜神
叶台
片又木
5km
北旭台
棒ヶ谷
国府関
上犬城
神田
蔵波
金井崎
雷塚
美生
山王台
土宇
谷ノ台
山王辺田
第六天向
根形台
高砂
10km
南岩崎
小櫃川
愛宕
文脇
寒沢
牛久
西国吉
下向山
荒久
南富士台
椿
大作
中尾
滝ノ口向台
高部
請西
矢那川
番後台
中越
蓮華寺・天神前
田川
20km
小糸川
一宮川
0
3
9
km
S＝1：180000

第２図　関連遺跡の位置

第 2 節　調査の概要

発掘調査は、造成作業によって伐木され、一部駐車場として砂利敷きに整地された状態から、調査区南東端より人力によって掘り下げて開始した。なお、概報中の、北裾を駐車場によって破壊された「新発見の低盛土古墳」は 288 号墓のことで、「その北側約 40m の地点のすでに荒造成の終わった削平面」に発見された「方墳 2 基」は 207 号墓・215 号墓を指すものと思われる（田中 1981）。

調査区は国土座標に則った 5m 区画のグリッドシステムを設定し、一部の遺構はグリッド線上をセクションベルトとして残す形で遺構断面土層の記録をとった。遺構番号は基本的に検出順に付し、竪穴住居が 001 以降、墳墓遺構が 201 以降の番号である。

遺構検出面は、立川ローム層最上層のいわゆるソフトロームである。基本的には、各遺構の平面検出後にセクションベルトを残して土層断面の記録を残したが、切り合い部の大きい遺構については、隣接遺構の調査に伴って全体が掘り下げられてしまった場合が多い。ほかに、次章に記すとおり、調査区内に 2 箇所の旧石器時代調査区を設定し、それぞれ第 2 黒色帯まで掘り下げた。

遺構平面の記録・図化作業は縮尺 40 分の 1 の平板測量によって行い、出土遺物の取り上げも同じくおこなった。ただし、平面図にラベル番号の記入されていないものが多く、遺物注記と平面図中の位置を対応させられない場合が目立つ。ドット取り上げされた土器は 1000 番台、ドット取り上げされた石製品は 2000 番台、一括取り上げ遺物は 6000 番台の遺物注記を持つ。遺構の記述の中でドット取り上げと判断したものは、この注記の存否に基づく。なお、国分寺台地区関連遺跡では遺構番号・グリッドシステムについては統一が図られていないものの、遺物注記は上記の方法で共通する（鉄製品 3000、土製品 4000、瓦 9000）（米田 1978）。

土層断面の記録は、水準を設定し縮尺 20 分の 1 で垂直に計測して行った。土層断面図は、標高への変換の基準となる水準点に関する記載と土層注記の欠けるものが多く、推定復元した部分が多い。

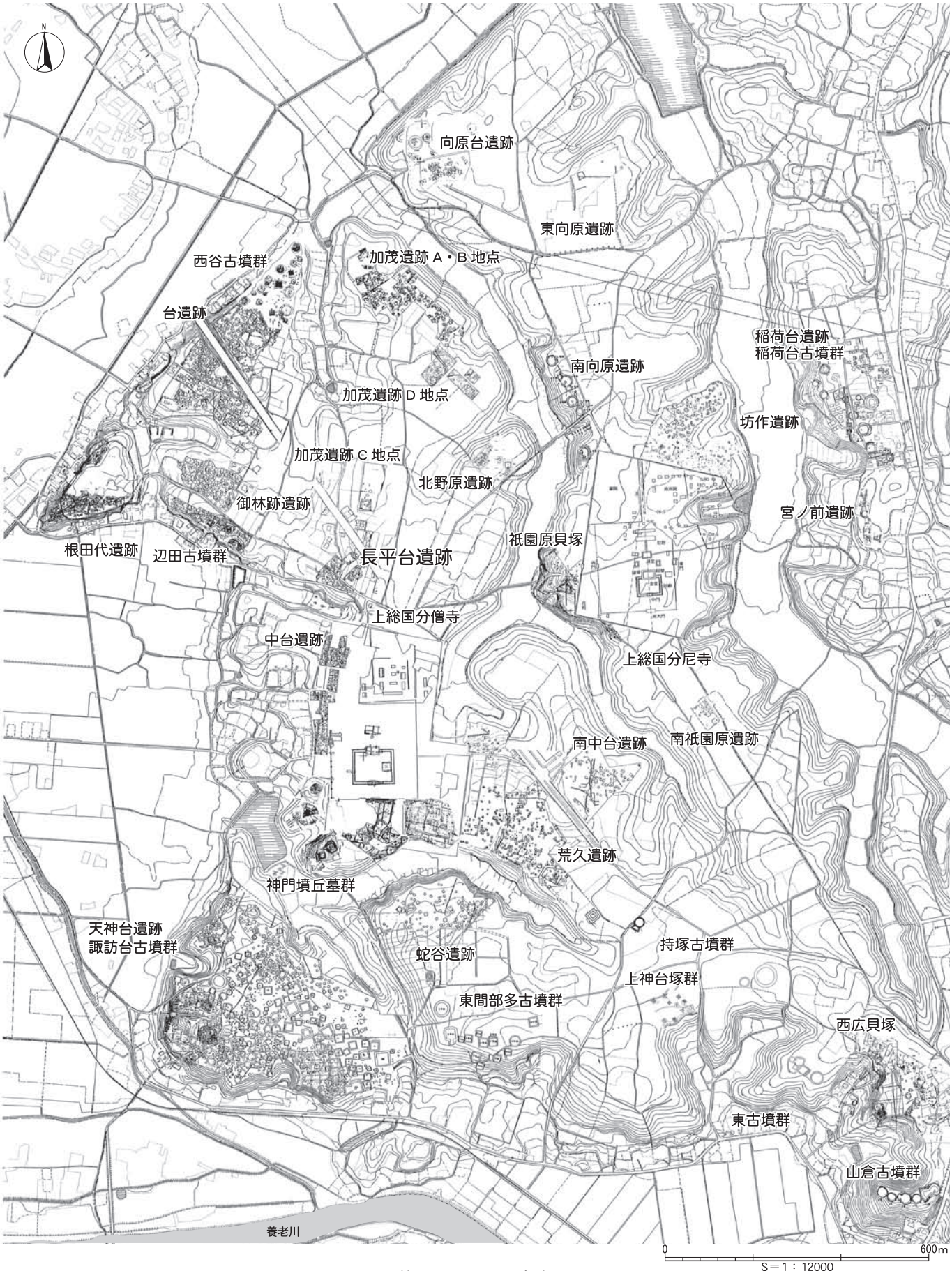
写真撮影は、遺構の掘り上がりについては行われているものの、顕著な場合を除いて遺物出土状況が記録されていない。このために平面図とラベル・遺物注記の対応を確定できない場合が増えていることは否めない。

第 3 節　遺跡の周辺環境

立地　市原市は房総半島の中央部に位置し、東京湾へと北流する養老川が市域を貫いている。長平台遺跡は、養老川下流右岸に広がる市原台地上の平坦面縁辺に立地する。この市原台地は、南北を養老川・村田川に開析され、海岸側の低地に臨む部分が北東－南西方向の海食崖で終わる地形である。樹枝状の小支谷が発達し、海食崖から 1km 以上内陸の地点でも幅 100m 近い谷底平野が認められる。調査区の南側には西に向かって抜ける小支谷が台地平坦部の奥から刻まれており、遺構はその谷頭を望む位置に展開している。近辺における沖積低地との比高差は 15m 程である。なお、周辺の地質学的な詳細については、『千葉県の自然誌』（千葉県 1997）と南向原遺跡報告書（杉原・細野・桃木 1976）に述べられているので、参照されたい。

周辺の遺跡　長平台遺跡の検出遺構のうち主体をなすのは、弥生時代後期を中心とした居住域と弥生時代後期中葉の墓域、弥生時代終末期以降の墓域である。

国分寺台遺跡群では、弥生時代後期の竪穴住居跡が検出されていない遺跡はほとんど無く、根田


N
向原台遺跡
東向原遺跡
西谷古墳群
加茂遺跡 A・B 地点
台遺跡
稲荷台遺跡
稲荷台古墳群
南向原遺跡
加茂遺跡 D 地点
坊作遺跡
加茂遺跡 C 地点
北野原遺跡
御林跡遺跡
宮ノ前遺跡
祇園原貝塚
根田代遺跡
辺田古墳群
長平台遺跡
上総国分僧寺
中台遺跡
上総国分尼寺
南中台遺跡
南祇園原遺跡
荒久遺跡
神門墳丘墓群
天神台遺跡
諏訪台古墳群
持塚古墳群
蛇谷遺跡
上神台塚群
東間部多古墳群
西広貝塚
東古墳群
山倉古墳群
養老川
0
600m
S＝1：12000

第 3 図　周辺の遺跡

第４図　調査区周辺の遺構分布状況

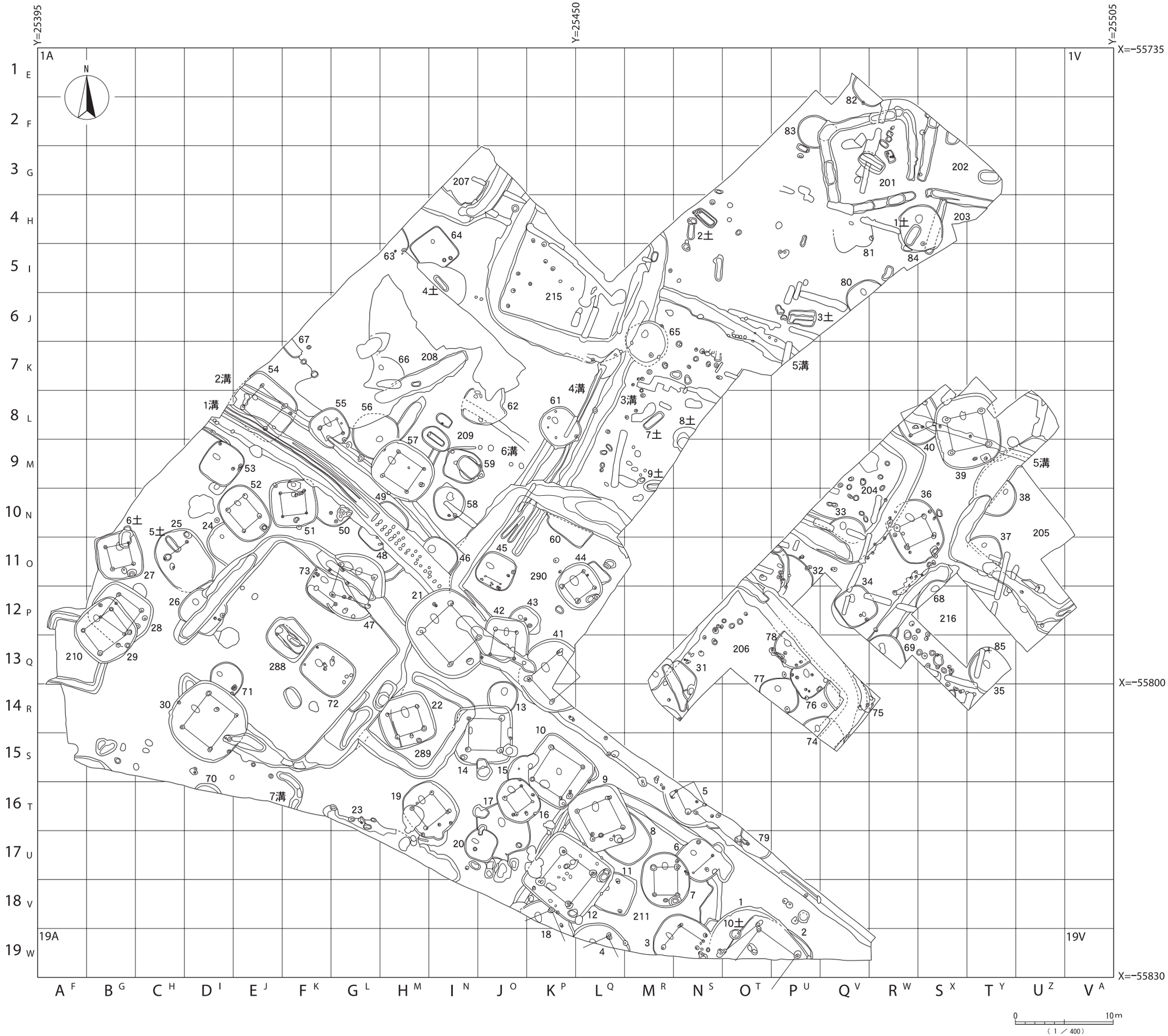
代遺跡（大村他 2005）・台遺跡 B 地点（半田 2003）・御林跡遺跡南調査区（木對他 2004）・加茂遺跡 A・B・C・D 地点（浅利他 2004、對馬他 1976b、小橋他 2002）・向原台遺跡・東向原遺跡（高橋 2002）・南向原遺跡（田中他 1976）・天神台遺跡（浅利 2002）・蛇谷遺跡（須田他 1989）・坊作遺跡（小出他 2001）・祇園原貝塚上層（忍澤他 1999）・南祇園原遺跡（高橋・櫻井 2002）・宮前遺跡（對馬他 1976a）稲荷台遺跡（鶴岡 2000、浅利 2003）・天神台遺跡（須田他 1975、平野・谷島他 1975、浅利 1989・2002）に分布が認められる。反対に、検出されていないのは、古墳群として調査された遺跡と、山倉古墳群下層（小橋・櫻井他 2004）・北野原遺跡（小川・蜂屋 2000）程度である（整理中の荒久遺跡の範囲も弥生時代後期竪穴住居は存在が希薄という）。ただし、数量・密度には変異が認められ、加茂支台・向原支台では、根田支台・惣社支台に比べて弥生時代後期における遺構密度は高くない。天神台遺跡では、時期的な配分が明らかでないものの、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて 459 棟の竪穴住居跡が検出されている。周辺遺跡の様相から類推するならば、おそらく、そのうちの 3 分の 1 以上は弥生時代後期に属するものと思われ、国分僧寺西辺の中台遺跡とともに高い遺構密度を認めることができる。

弥生時代後期の墓域で確定的なのは、御林跡遺跡南調査区で検出された方形周溝墓 10 基と、本遺跡の方形周溝墓 3 基で、整理中の天神台遺跡では未確定ながら方形周溝墓 40 数基（中期は 63 基）が認められる。西縁部に濃密な居住域と対応した様相と捉えられよう。長平台遺跡の弥生時代後期墓域は調査区北側に偏るが、これは御林跡遺跡南調査区および未調査区域に想定される墓域との連続性が存在したことの反映かもしれない。

弥生時代終末期には、引き続き各遺跡に竪穴住居跡が見られ、根田代遺跡・台遺跡 B 地点・加茂遺跡 A・B・D 地点・祇園原貝塚上層・御林跡遺跡・蛇谷遺跡・天神台遺跡・西広貝塚上層・山倉古墳群下層で確認されている。中台遺跡は密集して弥生時代終末期の竪穴住居跡が分布することが指摘されており、この区域は神門 3・4・5 号墓の造営基盤とする位置づけがなされている（田中 2000）。やはり遺構分布密度が西縁部において高い傾向が続くようである。長平台遺跡で検出された方形周溝墓群には確実に弥生時代終末期に帰属するものが存在するが、同様の遺構は、周辺においては現時点で神門墳丘墓群のほかに、加茂遺跡 C 地点方形周溝墓、御林跡遺跡 6・85 号遺構、蛇谷遺跡方形周溝墓が確認されており、可能性として南祇園原遺跡 201 号墓が想定できる。

近辺における弥生時代後期前後の展開は、他遺跡の整理の進展によって詳細が具体的になる見込みだが、大局的には以上のような経過を示すものと思われる。長平台遺跡の位置する台地西縁部の周辺は弥生時代後期から終末期にかけて活発な生活の痕跡の認められる区域であり、弥生時代終末期の墳墓が営まれる基盤になっていったという変遷が窺える。各遺構に見られる非在地系土器の増加は、このような集落動態の基調とも合わせて考える必要があるだろう。

古墳時代前期以降で注目すべきは、調査区南東に位置する上総国分僧寺である。しかし、長平台遺跡は、特に北辺部とは指呼の間と言ってよい位置関係にあるものの、この時期の遺構は加茂遺跡 C 地点と御林跡遺跡南調査区を含めても、概して希薄である。この事実は、僧寺と荒久遺跡、尼寺と坊作遺跡という、計画的に出現し継続する国分二寺の関連遺構の分布と対照的な様相として捉えられるべきであり、遺構の負の分布はこれを踏まえて解釈しなければならないことを示唆している。



第5図　長平台遺跡遺構配置図

第 2 章　検出された遺構と遺物

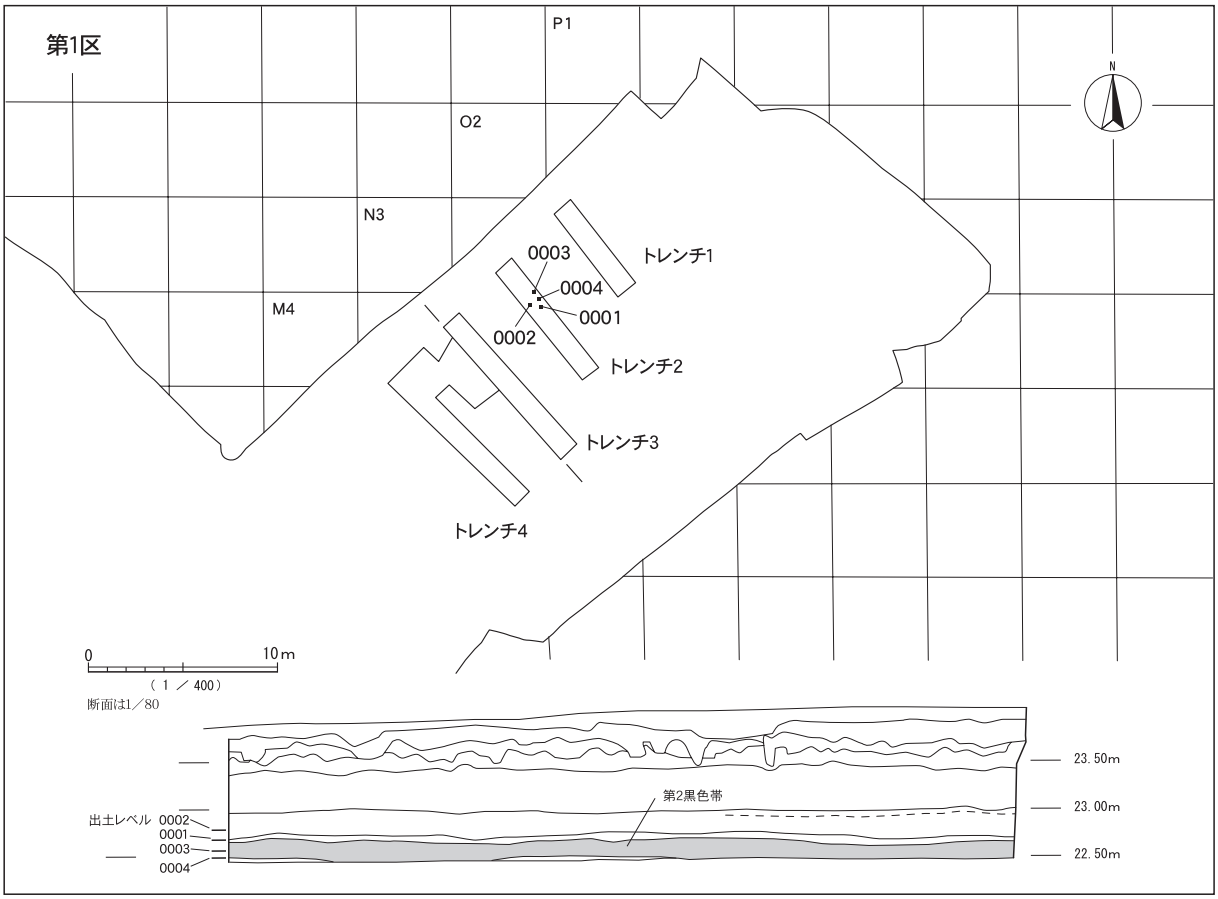
第 1 節　旧石器時代の遺物

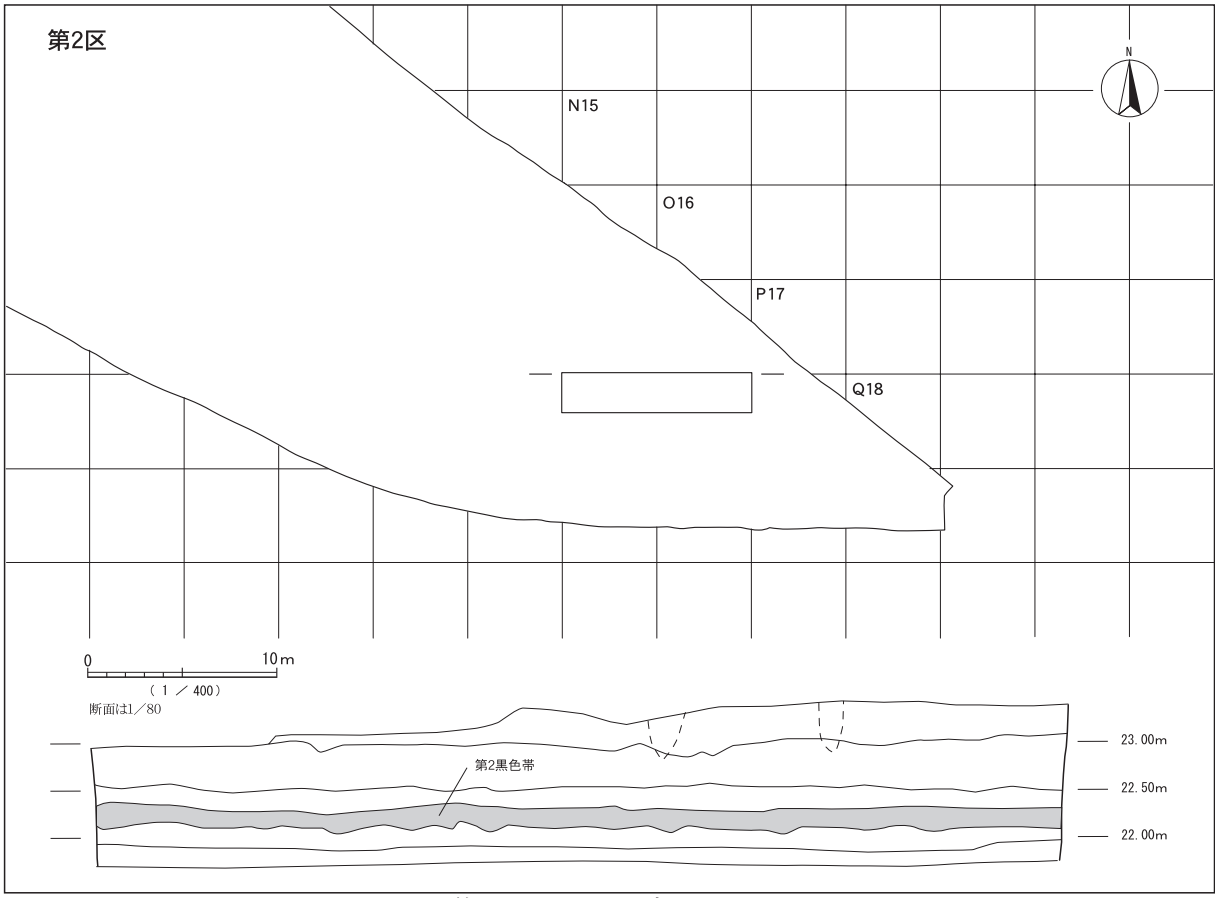
概要　調査区東部グリッド 17N・18N（旧 US・VS）（第 5 図）の表土層中から大型の剥片（第 7 図 3・第 8 図 1）が検出されたことにより、グリッド 4O（旧 HT）近辺に 4 本のトレンチ（第 1 区）、方眼杭 18N － 18O（旧 VS － VT）間に 2 × 10m のトレンチ 1 箇所（第 2 区）を設定し、それぞれ第 2 黒色帯の下層まで掘り下げた（第 6 図）。

第 2 区で石器は検出できなかったが、第 1 区（第 2 トレンチか）からは、「径 2.5 m程の範囲に集中して第 2 黒色帯上層から 2 点、下層から 4 点の石器、剥片が検出」され、「黒曜石製が大部分で、ナイフ形石器が 1 点」含まれていたという（半田・白井 1982）。

現場平面図には遺物ドットが 4 点記録され、「0001」から「0004」まで付されており、また、石器資料中で記述と注記の対応する可能性の高いものが、「0001」＝無斑晶質ガラス質安山岩製剥片（第 11 図 2）、「0002」＝黒曜石製剥片（第 8 図 2）、「0006」＝含角閃石流紋岩製剥片（第 11 図 3）である。平面図にある出土標高は「0001」＝ 22.681m、「0002」＝ 22.787 m、「0003」＝ 22.566 m、「0004」＝ 22.491m であり、断面図と照合すると、遺物と対応する「0001」・「0002」が第 2 黒色帯上層の遺物である可能性が高い。また、石器資料中にある黒曜石製ナイフ形石器（第 7 図 1）は 1 点のみであることから、これと、「0006」の注記を持つ剥片（第 11 図 3）が第 2 黒色帯以下の遺物と見込める。ナイフ形石器に加えて、注記およびラベルのない資料として、チャート製石核（第 9 図 1）と黒曜石製剥片（第 153 図 11・12）が「0003」・「0004」・「0005」の候補となるが、特定はできない。

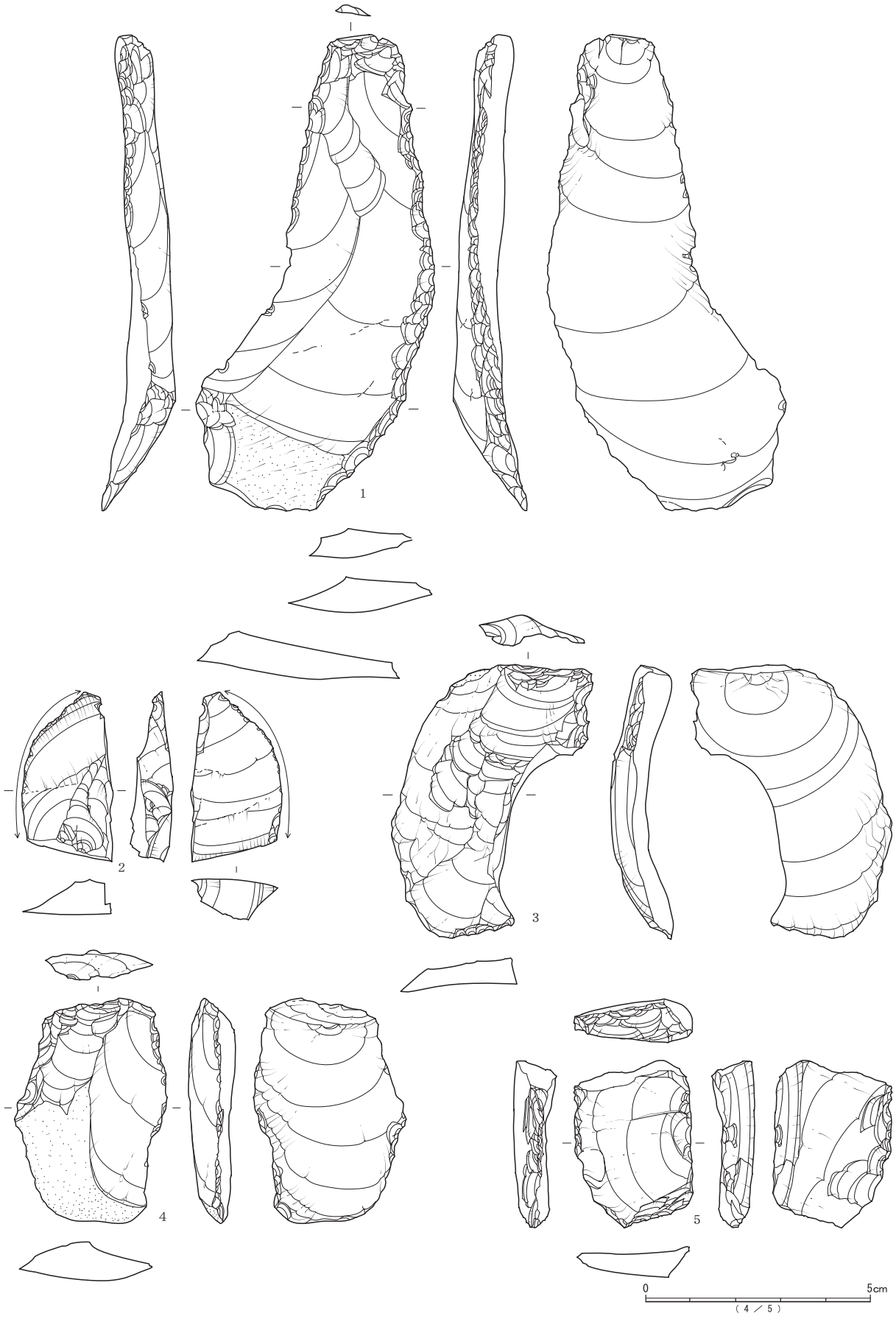
石器の様相（第 6 ～ 11 図、図版 18・75 ～ 77）　第 7 図 1 はナイフ形石器である。調査時所見から、立川ローム第 2 黒色帯下層中から検出された 4 点のうちの 1 点である可能性が強いが、注記が失われているため出土位置は確定できない。素材はやや幅広で扁平な縦長剥片で、打点側を基部とし、左右両側縁に調整加工を施す。右側縁はほぼ全面加工されており、先端のわずかな部分が刃部として残されている。刃部から折断面にかけて、微細な剥離痕が観察される。左側縁先端側は折断されているが、製作段階ではなく使用中に折断したと判断される。第 7 図 2 は RF としたが、角錐状石器の可能性が強い。断面三角形の剥片を素材とし、右側縁に連続した二次加工を施す。打点側は欠損している。第 7 図 3・第 8 図 1 はスクレイパーである。第 7 図 3 は断面台形のやや肉厚な石刃を素材とし、右側縁全体と左側縁上部に二次加工を施す。第 8 図 1 は断面三角形の平たい石刃状の剥片を素材とし、やはり右側縁全体と左側縁上部に二次加工を施す。先端部には微細な剥離痕が観察される。第 7 図 4 は RF としたが、背面左側の二次加工は頭部調整の可能性もある。第 8 図 2 は UF で、第 2 黒色帯上層から出土した 2 点のうちの 1 点である。全体に摩耗しており左側縁に多数の微細剥離痕が観察される。幅広の縦長剥片を素材とするが、特に目立った二次加工は施されない。第 8 図 3 は RF で、かなり湾曲した幅広の縦長剥片を素材とし、右側を折断して鉤手状に成形した後、右側縁残存部と先端部に二次加工を施す。左側縁上端部に顕著な摩滅が観察され、使用によるものと判断される。第 8 図 4 は RF で、断面三角形の縦長剥片を素材とし、断続的であるが右側縁に調整加工を施す。第 8 図 5 は RF で、断面台形の剥片を素材とし、両側縁および先端に二次加工を施す。図の右側縁が打面と考えられるが、表裏どちらが主要剥離面であるかは不明である。第 9 図 1 は石核で、円礫を素材として上面お





第 6 図　旧石器調査トレンチ

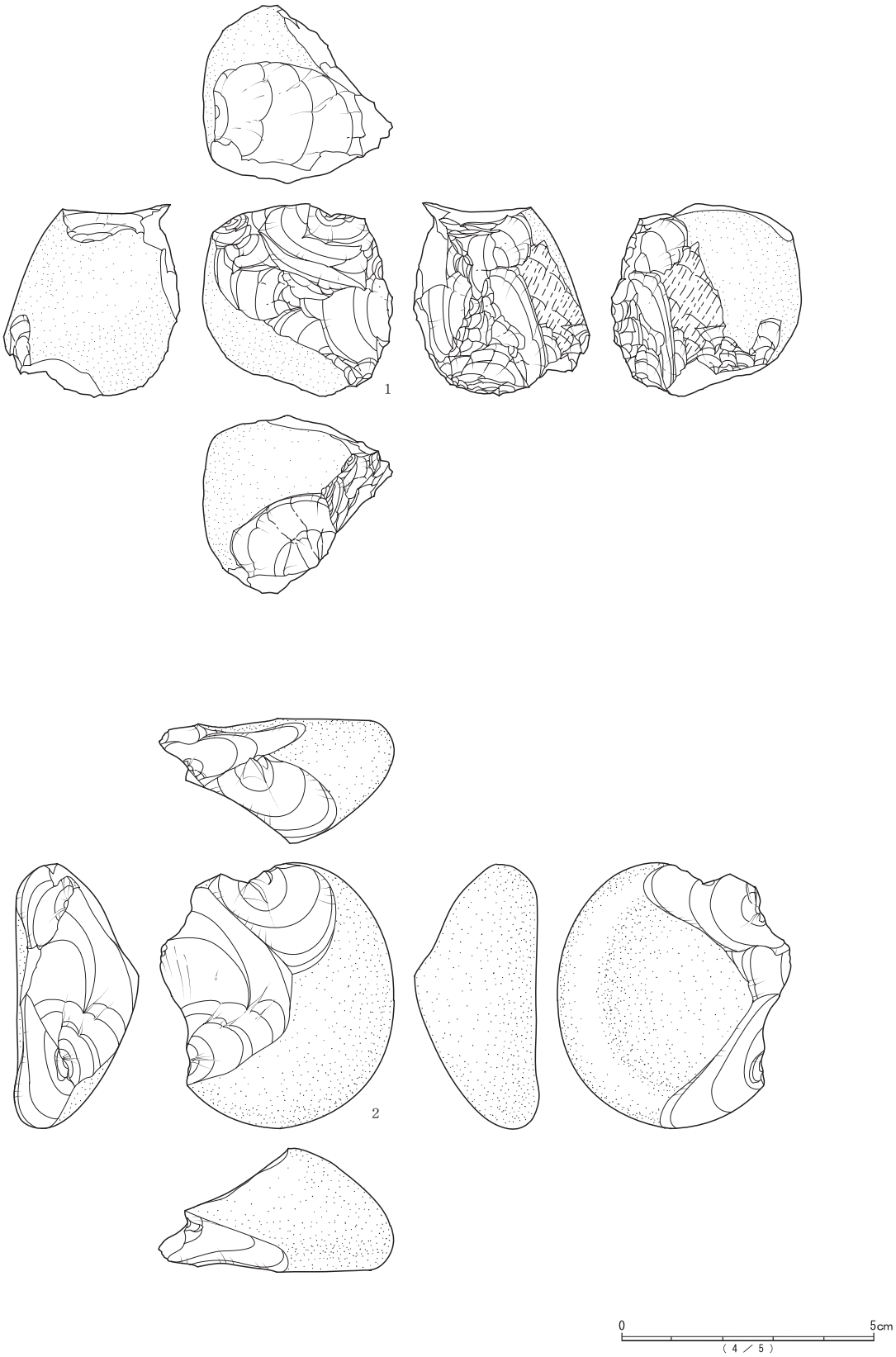
第 7 図　石器実測図 1



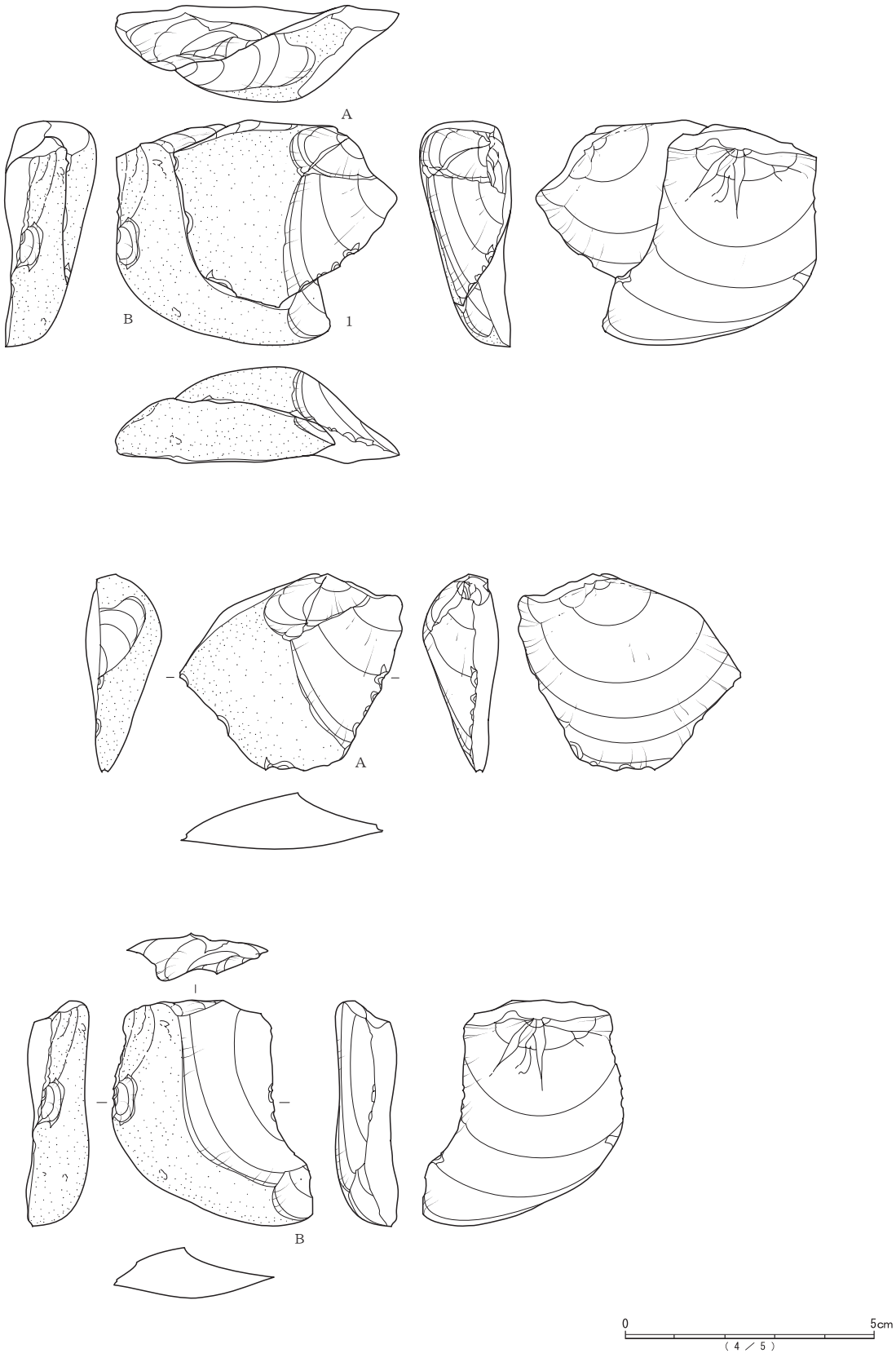
第８図　石器実測図２

よび右面から剥片剥離が行われる。剥離された剥片は、寸詰まりの縦長剥片と推測される。ただし右面は打点が線状に形成されており、刃部作出を意図したようにも見える。第9図2は一応石核としたが、剥離されたであろう剥片は規格性に乏しく、素材としての有効性が疑問視される。刃部作出が目的と考えられ、礫器とみなすのが妥当かもしれない。第10図1・第11図1は剥片の接合資料である。第10図1Aはやや横長の剥片で、背面に自然面を多く残す。打面は素材の円礫の自然面を剥離した直後のごく初期の剥離面であり、剥片剥離作業の初期段階に生成されたとみられる。微細な剥離痕がいくつか観察されるが、明確な二次加工痕はない。第10図1BはAが剥離された後、約60°打面が転移され、多少の打面作出もしくは調整を経た後剥離されたものである。これも微細な剥離痕がいくつか観察されるが、明確な二次加工痕はない。第11図1はやや扁平な自然面をもつ円礫を素材として横長の剥片を剥離し、上下から剥離を行うことによって断面紡錘形の両極剥片の製作を意図したものとみられる。両者が折断された後、第11図1Aは廃棄されたとみられるが、同Bはさらに左側縁に成形のための剥離が行われている。第11図3は剥片で、第2黒色帯下層中から検出された4点のうちの1点である。縦断面が三角形を呈する横長剥片で、ヒンジフラクチャーが顕著である。第153図11・12はいずれも剥片で、第2黒色帯下層中から検出された4点のうちの2点である可能性がある。しかし、注記が失われているため出土位置は確定できない。12は扁平で幅広の剥片の先端部で、打面側と右側縁が折断されている。背面側の剥離痕は、折断前のものである。11も扁平な剥片を素材とするが、打面および両側縁がすべて折断されており、本来の形状はうかがえない。背面側の剥離が加工であるかは不明。第11図2は剥片で、第2黒色帯上層中から検出された2点のうちの1点である。円礫の自然面を剥がして直ぐの、初期段階の打面から剥離されている。先端と左側縁が折断されており、断面長方形を呈する。腹面側の剥離痕が加工を意図していたかは不明である。

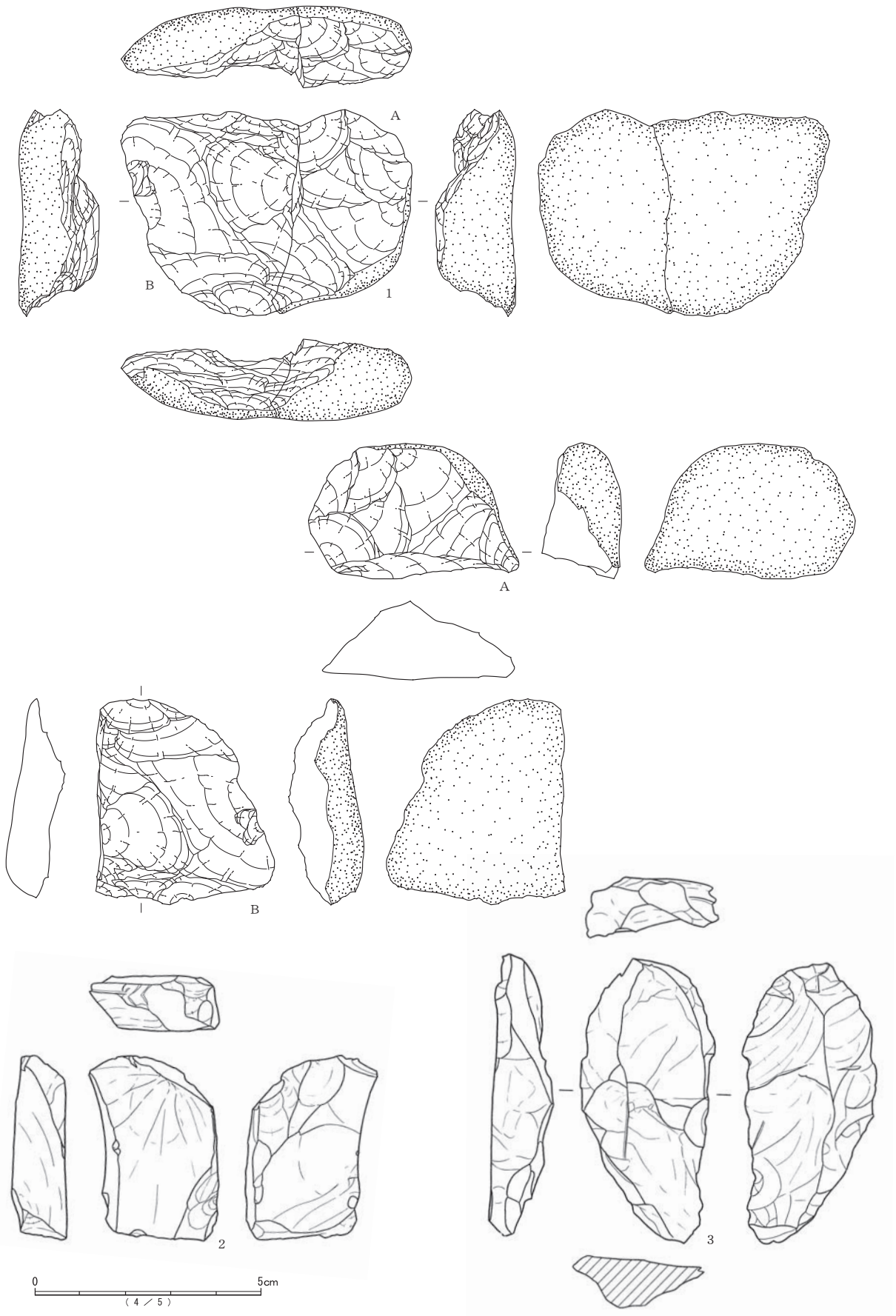
以上の各石器はほとんど上層遺構覆土中からの出土であり、ローム層中から出土したものも記録が不完全で、出土層準を判断する材料に乏しいが、特徴的な遺物からある程度推測したい。第7図1のナイフ形石器は、信州産と考えられる透明度の高い黒曜石を原石とするが、同一とみられる石材はほとんど存在しない。遺跡外で製作され、搬入されたと考えられる。先端側が折断されているが、残存している刃部を観察する限り、使用頻度が極めて高かったと推測される。これらの特徴や成形技法は、調査時の所見とはややずれがあるが、下総台地の立川ローム第Ⅸ層上部の石器群に共通する。この時期の下総台地の石器群には、円礫を素材として両極剥離を行ういわゆる遠山天ノ作技法が広く分布するが、第11図1の接合資料はこの系統上に位置付けられる可能性があるほか、第153図21のチャートのRFも両極剥片を素材としており、同時期に相当すると考えられる。近隣の類似例として、同じ国分寺台遺跡群の根田代遺跡が挙げられる。第7図3・第8図1のスクレイパーは大形の石刃を素材とするもので、硬質の頁岩を素材とするが、同一の石材は他には全くない。やはり遺跡外で製作され、搬入されたと考えられる。立川ローム第Ⅶ層からは、このような石器が多く出土しており、これらもⅦ層に属する可能性が強い。これらの石刃は、より小形の石刃を製作するための素材として利用されることが多いが、第7図3・第8図1は道具とするための加工がなされたようである。しかし、石材は全く異なるが、より小形の石刃状を呈する石器（第153図4・5・25・28）も散見される。特に第153図5は南東北産とみられる良好な珪質頁岩を素材とする。近隣の類似例としては、村田川流域に位置する草刈遺跡が挙げられるが、当遺跡の内容だけでは同時性について判断するには問題が残る。



第９図　石器実測図３



第 10 図　石器実測図 4



第 11 図　石器実測図 5

国分寺台地区の旧石器時代の様相については、十分な調査が行われなかったこともあって内容が分からない点が多かった。しかし、この長平台遺跡のように、ある程度時期を推測できる資料が出土していることも事実である。今後はこうした資料の検証を通じて、旧石器時代の様相を追求する必要があろう。

第１表　検出遺構一覧

番号	種別	時期	番号	種別	時期	番号	種別	時期
1号	竪穴住居跡	弥生後期前半	40号	竪穴住居跡	弥生後期前半	79号	竪穴住居跡	弥生後期前半
2号	竪穴住居跡	弥生終末期前半	41号	竪穴住居跡	弥生後期前半	80号	竪穴住居跡	弥生後期前半
3号	竪穴住居跡	弥生後期後半	42号	竪穴住居跡	終末期	81号	竪穴住居跡	弥生後期前半
4号	竪穴住居跡	弥生後期（前半?）	43号	竪穴住居跡	弥生後期	82号	竪穴住居跡	弥生後期（前半?）
5号	竪穴住居跡	弥生後期	44号	竪穴住居跡	弥生後期後半	83号	竪穴住居跡	弥生後期前半
6号	竪穴住居跡	弥生後期後半～終末期	45号	竪穴住居跡	弥生後期（後半?）	84号	竪穴住居跡	弥生後期前半
7号	竪穴住居跡	弥生後期前半	46号	竪穴住居跡	弥生後期末～終末期前半	85号	竪穴住居跡	弥生後期?
8号	竪穴住居跡	弥生後期前半	47号	竪穴住居跡	弥生後期前半	201号	方形周溝墓	弥生後期中葉
9号	竪穴住居跡	弥生終末期前半	48号	竪穴住居跡	不明	202号	方形周溝墓	弥生後期中葉
10号	竪穴住居跡	弥生終末期前半	49号	竪穴住居跡	不明	203号	方形周溝墓	弥生後期中葉
11号	竪穴住居跡	古墳前期前半	50号	竪穴住居跡	弥生後期前半	204号	方形周溝墓	古墳前期
12号	竪穴住居跡	終末期後半～古墳前期前半	51号	竪穴住居跡	弥生終末期?	205号	方形周溝墓	古墳前期
13号	竪穴住居跡	弥生後期前半	52号	竪穴住居跡	弥生後期前半	206号	方形周溝墓	弥生終末期?
14号	竪穴住居跡	弥生終末期	53号	竪穴住居跡	弥生後期（後半?）	207号	方形周溝墓	弥生終末期?
15号	竪穴住居跡	弥生後期前半	54号	竪穴住居跡	弥生中期末	208号	方形周溝墓	弥生後期
16号	竪穴住居跡	弥生後期前半	55号	竪穴住居跡	弥生終末期	209号	方形周溝墓	弥生後期
17号	竪穴住居跡	弥生後期後半～終末期	56号	竪穴住居跡	弥生後期（後半?）	210号	方形周溝状遺構	平安
18号	竪穴住居跡	弥生後期	57号	竪穴住居跡	弥生後期後半	211号	方形周溝墓	古墳前期
19号	竪穴住居跡	弥生後期後半～終末期	58号	竪穴住居跡	弥生後期（後半?）	215号	方形周溝墓	弥生終末期～古墳前期
20号	竪穴住居跡	弥生後期（後半?）	59号	竪穴住居跡	弥生後期後半	216号	方形周溝墓	弥生終末期後半～古墳前期
21号	竪穴住居跡	弥生後期前半	60号	竪穴住居跡	弥生後期後半～終末期	288号	方形周溝墓	弥生終末期前半
22号	竪穴住居跡	弥生終末期前半	61号	竪穴住居跡	弥生後期後半	289号	方形周溝墓	弥生終末期後半
23号	方形周溝墓?	古墳前期?	62号	竪穴住居跡	弥生後期?	290号	方形周溝墓	弥生終末期
24号	竪穴住居跡	弥生後期（前半?）	63号	竪穴住居跡	弥生後期（前半?）	1号土壙	土壙墓	弥生後期中葉
25号	竪穴住居跡	弥生後期（後半?）	64号	竪穴住居跡	弥生終末期～古墳前期	2号土壙	土壙墓	不明
26号	竪穴住居跡	弥生後期後半	65号	竪穴住居跡	弥生後期前半	3号土壙	土壙墓	弥生後期?
27号	竪穴住居跡	終末期後半～古墳前期前半	66号	竪穴住居跡	弥生後期?	4号土壙	土壙墓	不明
28号	竪穴住居跡	弥生中期末	67号	竪穴住居跡	弥生後期?	5号土壙	土壙墓	不明
29号	竪穴住居跡	弥生終末期（前半?）	68号	竪穴住居跡	弥生終末期	6号土壙	土壙墓	不明
30号	竪穴住居跡	弥生後期（後半?）	69号	竪穴住居跡	弥生後期前半	7号土壙	土壙墓	不明
31号	竪穴住居跡	弥生後期前半	70号	竪穴住居跡	弥生後期?	8号土壙	土壙墓	不明
32号	竪穴住居跡	弥生後期後半～終末期	71号	竪穴住居跡	弥生後期（前半?）	9号土壙	土壙墓	不明
33号	竪穴住居跡	弥生後期前半	72号	竪穴住居跡	弥生後期前半	10号土壙	土壙墓	近世以降
34号	竪穴住居跡	弥生後期～終末期	73号	竪穴住居跡	弥生後期末～終末期前半	1号溝	道路跡	近世以降?
35号	竪穴住居跡	弥生後期前半	74号	竪穴住居跡	弥生後期?	2号溝	道路跡?	近世以降?
36号	竪穴住居跡	弥生後期前半	75号	竪穴住居跡	弥生後期	3号溝	道路跡	近世以降?
37号	竪穴住居跡	弥生後期前半	76号	竪穴住居跡	弥生後期前半～中葉	4号溝	道路跡	近世以降?
38号	竪穴住居跡	弥生後期前半	77号	竪穴住居跡	弥生後期前半	5号溝	道路跡?	近世以降?
39号	竪穴住居跡	弥生後期後半～終末期	78号	竪穴住居跡	弥生後期前半			

第 2 節　弥生・古墳時代の遺構と遺物

はじめに　凡例と調査方法の項でも触れたが以下の記述と遺構図には注意すべき点がある。まず、①遺物出土地点を表すドットだが、一つのドットが遺物（土器片あるいは接合可能なまとまり）1 点と対応するわけではない。おそらく、遺物取り上げ作業の際、周囲の遺物をまとめてドット一つとして記録し、遺物ラベル番号が与えられている。このため、写真で認定できるまれな場合を除いて、本書中に復元した遺物位置・標高は確定的ではないことになる。また、読み値の記載があるものも遺物の最も低い位置を計測してない場合があるようである。②図面上に記録のある点が必ずしもラベル番号と対応できるわけではない。平板図上に遺物位置の記録があっても、ラベル番号が記入されていない場合が多数ある。元々遺物に付けられていたラベルに「1001　炉北」等と記載がある場合は対応が推定できたが、ラベルへの記載が番号のみの場合は、平面図に遺物出土位置記録があり（* 番号はない)、ラベルに番号が記されているにもかかわらず、遺物の出土位置が判らないという奇妙な事態が生じている。平面図中の番号のない遺物位置ドットはそのような点である。③平面図に水準原点に関する記載がないものが多い。このためレベル読み値の記載があるにもかかわらず絶対高の確定できない遺構がある。これらについては可能なものは隣接図から推定復元して記述・図化している。また、レベル読み値自体の記載がない部分に関しては「不明」としている。④土層断面図中に土層内容の注記がない箇所がある。他の図面と対照可能な部分は補ったが、それ以外は空白のままである。⑤出土遺物に注記のないものがある。接合状況から見て、接合完了後にはじめて注記をおこなったものが認められるので、ラベルの紛失等により注記できなくなった可能性が考えられる。写真・図面で確認できた例（288 号南東周溝出土壺等）を除き、一括取り上げ遺物扱いにせざるをえない。⑥出土遺物の一部が所在不明である。図化された遺物に所在不明のものがあることで判明したが、基礎整理作業において図化されていないものについては判断が難しい。今後、国分寺台地区内他遺跡の整理作業進展によって確認される見込みが高いが、その場合は補遺を図りたい。

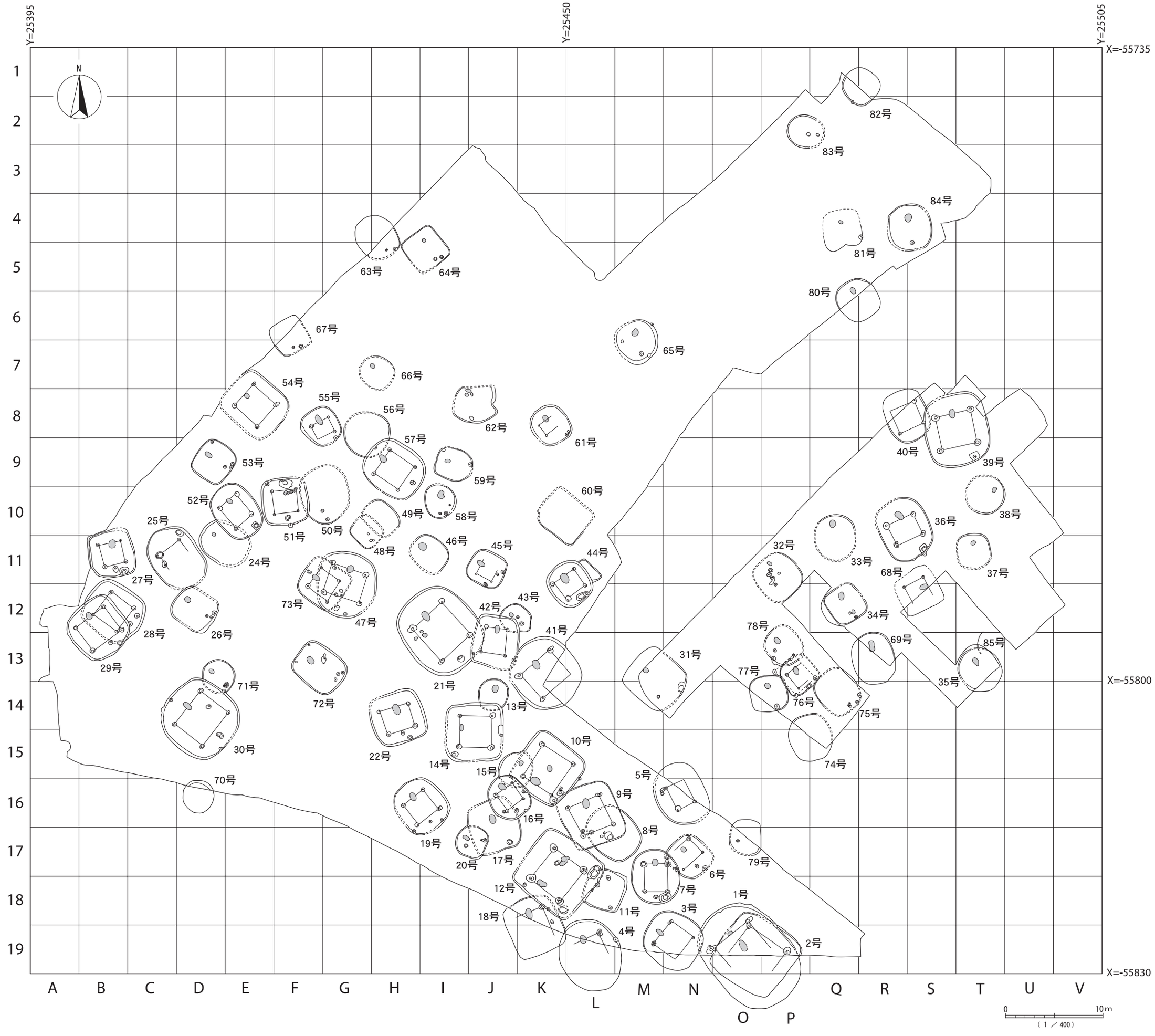
本報告内容の参照に際しては、以上のような、現場作業・基礎整理作業段階での記録不備とそれに対する復元推定による補訂の存在を念頭に置かれたい。

概要　調査された遺構の時期は、弥生時代中期後半（宮ノ台式期）・後期（久ヶ原式・山田橋式期）・終末期（鴨居上ノ台式（TB2 式）期)、古墳時代前期（五領式（TE1 式）期）（大村 1982・1994・2004c・2005）が大部分である。遺構の種別は、竪穴住居跡 84 棟・方形周溝墓（古墳前期を含む）15 基・土壙墓 7 基である。

竪穴住居跡は不確定の遺構を含めると、宮ノ台式期 2 棟、久ヶ原式期 33 棟・山田橋式期 14 棟（＋後期全般 10 棟)、鴨居上ノ台式期 21 棟、五領式期 2 棟、不明 2 棟である。

方形周溝墓は、帰属時期が確定的なのは、久ヶ原式後半期から山田橋式前半期にかけて位置づけられる弥生時代後期中葉の 201 号墓から 203 号墓の 3 基、弥生時代終末期の鴨居上ノ台式前半期 1 基・後半期 2 基、古墳時代前期の五領式期 2 基である。なお、時期不確定の方形周溝墓は配置状況から古墳前期以降に下る可能性が高い。

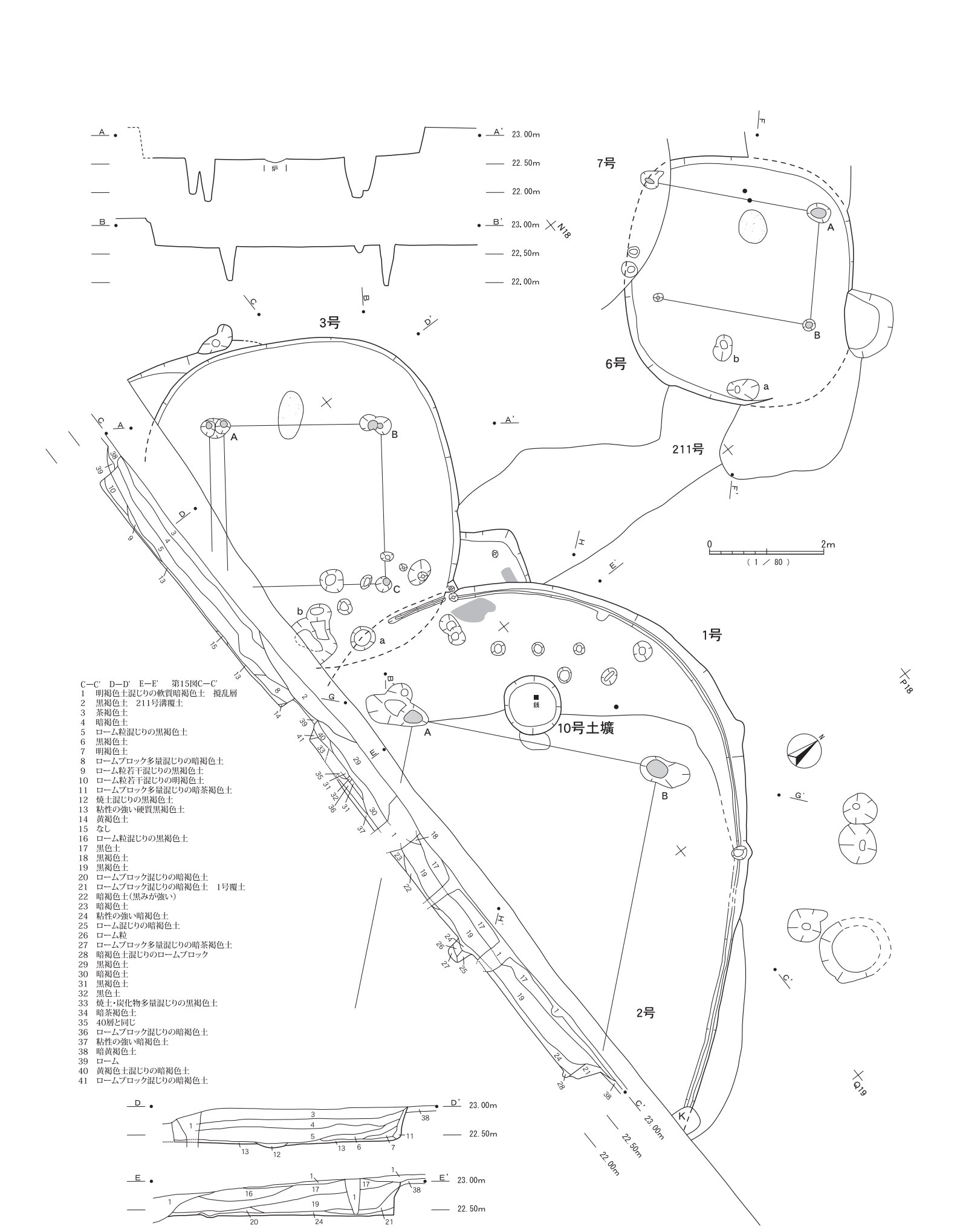
土壙墓は、伴出土器の顕著な弥生時代後期中葉の 1 号土壙墓を除いて、時期が判然としない。散在する分布状況には規則性は読み取りがたく、方形周溝墓群の展開の中で散発的に構築された可能性もあり、帰属時期の絞り込みは難しい。



第 12 図　竪穴住居跡分布図

第２表　竪穴住居跡一覧

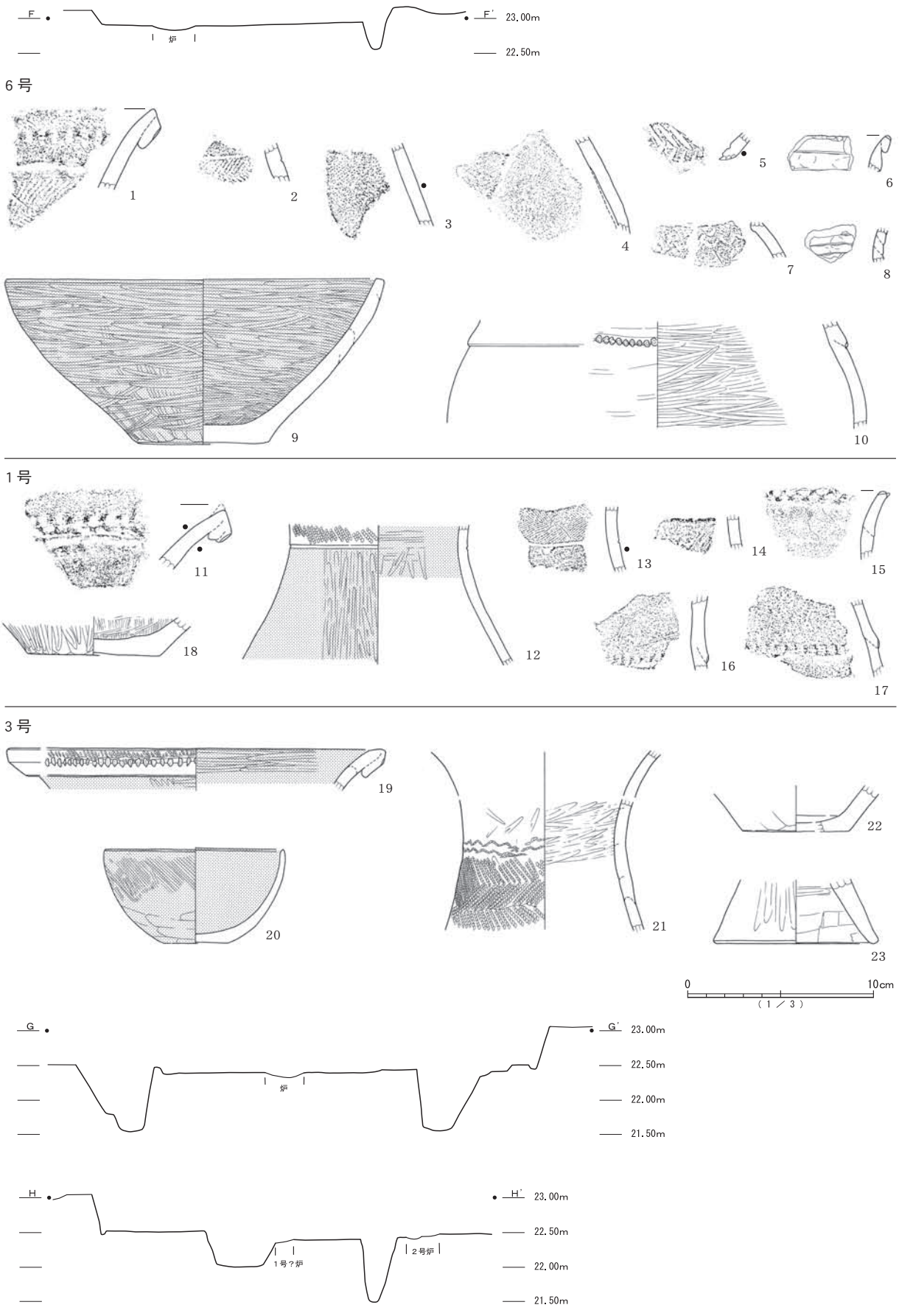
遺構番号	形状	時期	規模 長軸×短軸 m	主軸 度	面積 ㎡			竪穴深度 cm	主柱穴深度 cm				柱間 m				柱間比 AB：BC	貯蔵穴 有無	ハシゴ穴 有無
					上端	下端	柱間		A	B	C	D	A-B	B-C	C-D	D-A			
1号	トラック形	弥生後期前半	11.52?×8.16?	320	78.89	76.04	25.73	57	80.7	85.0	−	−	4.40	5.96?	4.36	6.00?	0.74	×	×
2号	方形	終末期前半	7.60×7.52?	306	52.66	49.75	18.90	47	87.9	89.3	−	−	4.12	4.64	4.12?	4.60?	0.89	×	×
3号	隅円方形	弥生後期後半	5.76?×5.56?	307	27.30	26.26	8.67	44	67.3	60.1	67.5	−	3.04	2.80	3.04?	2.80?	1.08	○	○
4号	楕円形	弥生後期（前半?）	7.64?×6.32?	335	36.75	34.70	11.05	49	72.7	−	−	−	3.32?	3.36?	3.32?	3.36?	0.99	×	×
5号	楕円形	弥生後期	6.60×5.08	334	27.52	25.58	4.99	12	81.2	61.9	85.1	−	2.04	2.60	2.00?	2.60?	0.78	○	×
6号	隅円方形	弥生後期後半～終末期	4.32×3.96?	317	15.29	13.48	5.14	24	12.1	8.0	11.9	−	2.72	1.96	2.72?	1.96?	1.39	○	○
7号	トラック形	弥生後期前半	5.52×4.92?	359	22.59	21.30	6.90	39	50.9	51.4	48.3	47.0	2.48	2.92	2.44	2.88	0.85	○	○
8号	トラック形	弥生後期前半	5.84?×4.68	315	23.09	21.17	−	28	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
9号	隅円方形	終末期前半	6.36×6.32	337	35.28	33.74	11.20	26	81.6	68.4	78.3	83.0	3.60	3.32	3.24	3.36	1.08	○	○
10号	隅円方形	終末期前半	6.24×6.24	214	37.05	35.58	13.42	32	61.5	53.8	51.1	45.5	3.56	3.84	3.56	3.84	0.92	○	×
11号	方形	古墳前期前半	4.04×4.04?	288	14.90	13.59	−	31	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
12号	方形	終末期後半～古墳前期前半	7.52×7.08	40	51.38	48.51	14.45	40	66.9	54.0	67.0	76.7	3.80	3.96	3.84	3.96	0.96	×	×
13号	楕円形	弥生後期前半	3.44?×3.08	13	8.41	7.52	−	15	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
14号	隅円方形	終末期	5.96×5.92	272	33.31	31.66	10.39	25	56.1	53.5	55.8	69.7	3.20	3.32	3.20	3.12	0.96	○	×
15号	円形	弥生後期前半	3.6?×4.0?	36	10.90	9.49	−	40	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
16号	トラック形	弥生後期前半	4.60×4.08	325	15.26	13.79	4.22	43	71.7	57.6	61.2	84.8	2.12	2.04	2.12	2.04	1.04	○	△
17号	隅円方形	弥生後期後半～終末期	5.28?×5.28	345	25.18	23.67	−	22	−	−	−	−	−	−	−	−	−	○	×
18号	方形	弥生後期	5.96?×5.36?	337	29.73	28.58	9.15	39	64.2	−	−	−	3.00?	3.12?	3.00?	3.12?	0.96	×	×
19号	トラック形～隅円方形	弥生後期後半～終末期	5.60×5.00?	323	23.78	21.49	6.56	57	65.6	72.8	85.6	68.7	2.64	2.56	2.64	2.52	1.03	○	○
20号	隅円方形～円形	弥生後期（後半?）	3.24×3.16	293	8.82	7.79	−	22	12.4	−	−	−	−	−	−	−	−	○	×
21号	トラック形	弥生後期前半	9.00×7.84	317	60.06	57.67	18.62	42	118.0	104.0	97.8	110.3	4.20	4.52	4.20	4.52	0.93	×	○
22号	隅円方形	終末期前半	5.44×5.24	343	26.01	24.50	7.18	34	53.7	58.3	61.1	68.9	2.96	2.48	2.96	2.56	1.19	○	×
24号	トラック形?	弥生後期（前半?）	5.28?×4.24?	304	19.35	16.28	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
25号	トラック形	弥生後期（後半?）	6.76?×5.04	325	28.54	26.06	7.05	8	53.8	88.0	−	−	2.84	2.68?	2.80?	2.64	1.06	×	×
26号	隅円方形	弥生後期後半	4.56×4.08?	304	16.61	14.54	−	40	−	−	−	−	−	−	−	−	−	○	○
27号	隅円方形	終末期後半～古墳前期前半	4.80×4.56	346	20.12	17.90	5.18	30	66.2	47.7	37.8	60.1	2.28	2.32	2.28	2.28	0.98	○	○
28号	トラック形～隅円方形	弥生中期末	6.20×5.40	308	30.17	28.40	8.62	45	不明	不明	不明	不明	2.96	3.0	2.96	2.96	0.99	○	○
29号	隅円方形	終末期（前半?）	5.96×5.76	323	30.28	28.93	10.83	不明	不明	不明	不明	不明	3.68	2.96	3.72	3.00	1.24	○	○
30号	トラック形～隅円方形	弥生後期（後半?）	7.68×7.36	309	47.98	44.92	15.66	42	52.3	66.6	63.3	64.1	4.32	3.64	4.32	3.68	1.19	×	○
31号	隅円方形	弥生後期前半	5.80×5.16	311	27.06	24.94	5.87	33	65.6	−	−	−	2.12?	2.84?	2.12?	2.84?	0.75	○	×
32号	隅円方形	後期後半～終末期	4.68×4.40	316	18.10	17.10	−	9	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
33号	円形～楕円形	弥生後期前半	4.76?×4.08?	332	16.36	15.00	−	39	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	○
34号	隅円方形	弥生後期～終末期	3.80×3.72	325	12.78	11.77	−	34	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	○
35号	円形～楕円形	弥生後期前半	4.64?×4.32?	316	15.91	14.46	−	41	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
36号	トラック形	弥生後期前半	6.36?×5.16	334	28.72	26.68	6.54	25	98.5	91.8	87.8	96.4	2.92	2.32	2.88	2.32	1.26	○	×
37号	隅円方形	弥生後期前半	3.68?×3.56?	354	11.06	9.92	−	38	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
38号	円形	弥生後期前半	4.08?×4.00	60	12.62	11.28	−	19	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
39号	隅円方形	弥生後期後半～終末期	7.40×6.84	348	42.35	39.35	12.52	47	56.7	70.5	59.4	59.5	3.72	3.44	3.72	3.44	1.08	○	○
40号	トラック形	弥生後期前半	5.08?×4.28	339	19.58	18.14	6.58	22	59.0	61.0	75.9	−	2.72	2.52	2.68?	2.52?	1.08	×	×
41号	トラック形	弥生後期前半	7.64?×6.86?	318	42.65	40.11	13.18	51	75.0	88.7	68.1	−	4.00	3.36	4.00?	3.36?	1.19	×	×
42号	方形～隅円方形	終末期	5.48?×4.80	11	24.82	23.30	6.22	39	68.9	53.0	67.8	63.0	2.12	2.72	2.52	2.60	0.78	×	×
43号	隅円方形～楕円形	弥生後期	3.00?×3.00	316	7.54	6.81	−	19	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
44号	隅円方形	弥生後期後半	4.56×4.32	321	16.42	15.30	5.27	35	41.6	74.5	71.0	102.2	2.44	2.12	2.40	2.20	1.15	○	○
45号	隅円方形	弥生後期（後半?）	3.88×3.68	297	12.60	11.30	4.03	27	27.4	13.6	−	−	1.72	−	−	−	−	○	○
46号	トラック形～隅円方形	弥生後期末～終末期前半	4.00×3.36?	311	11.69	10.39	−	29	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
47号	トラック形～楕円形	弥生後期前半	6.80×6.24?	17	34.90	32.07	11.31	35	94.8	74.4	88.8	72.5	3.84	3.00	3.84	3.00	1.28	○	○
48号	隅円方形	不明	3.28×2.92?	313	8.72	7.70	−	12	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
49号	トラック形	不明	3.96×2.92?	314	10.11	9.16	−	19	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
50号	楕円形	弥生後期前半	6.04?×5.08?	351	24.71	23.17	−	14	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△
51号	隅円方形	終末期?	4.96×4.84	355	21.79	20.78	5.85	36	30.0	57.8	66.7	71.1	2.48	2.36	2.48	2.36	1.05	×	○
52号	トラック形	弥生後期前半	5.92×4.40	321	22.19	20.31	5.98	56	72.0	71.8	63.5	71.4	2.28	2.72	2.28	2.76	0.84	○	×
53号	隅円方形	弥生後期（後半?）	4.20×4.00	307	14.92	13.72	−	49	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	○
54号	隅円方形	弥生中期末	6.28×5.40	312	32.05	30.08	9.14	31	76.3	73.8	70.8	80.0	2.92	3.16	2.92	3.16	0.92	○	×
55号	隅円方形	終末期	3.88?×3.76	334	12.03	11.04	3.06	22	13.8	12.2	25.2	−	2.00	1.60	1.96?	1.52?	1.25	○	×
56号	円形	弥生後期（後半?）	4.84×4.60	−	17.28	16.24	−	19	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
57号	隅円方形～トラック形	弥生後期後半	6.40×5.32	306	29.28	26.93	8.73	65	57.4	71.6	57.6	62.7	2.96	3.04	2.96	2.96	0.97	×	×
58号	円形	弥生後期（後半?）	3.48?×3.28	12	8.95	8.03	−	10	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	×
59号	隅円方形	弥生後期後半	3.76?×3.28	292	10.74	9.80	−	65	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	×
60号	方形	弥生後期後半～終末期	5.04?×4.32?	309	20.63	19.25	−	38	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
61号	トラック形～隅円方形	弥生後期後半	4.04×3.68	321	12.70	11.75	2.50	25	11.8	8.5	−	−	1.96	1.32?	1.92?	1.28?	1.49	△	×
62号	不整形	弥生後期?	4.32?×3.68?	2	14.42	12.55	−	13	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
63号	隅円方形?	弥生後期（前半?）	4.68?×4.08?	316	15.91	14.68	−	24	−	−	−	−	−	−	−	−	−	○	△
64号	方形	弥生終末期～古墳前期	3.96×3.88	322	14.78	13.97	−	13	−	−	−	−	−	−	−	−	−	○	○
65号	円形	弥生後期前半	4.44×4.44?	346	15.62	13.23	−	43	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	○
66号	楕円形?	弥生後期?	3.60?×3.28?	307	9.79	8.72	−	32	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
67号	方形	弥生後期?	3.60?×3.60?	329	11.98	10.75	−	28	−	−	−	−	−	−	−	−	−	○	○
68号	隅円方形?	終末期	4.32?×4.16?	63	17.06	−	4.33	19	44.2	33.0	−	−	2.00	2.16?	2.00?	2.20?	0.93	○	○
69号	トラック形	弥生後期前半	4.92?×4.00?	335	16.16	15.26	−	28	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
70号	円形?	弥生後期?	−	−	−	−	−	54	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
71号	円形	弥生後期（前半?）	3.48?×3.48	315	9.55	8.84	−	41	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	○
72号	隅円長方形	弥生後期前半	5.36×4.32	306	20.73	18.81	−	39	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	○
73号	隅円方形	弥生後期末～終末期前半	4.80×4.40	306	20.08	18.66	5.62	40	79.0	60.8	66.4	50.8	2.32	2.40	2.40	2.40	0.97	△	○
74号	隅円方形	弥生後期?	4.80×4.60?	346	18.07	16.62	−	39	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
75号	トラック形?	弥生後期	4.76×4.20	318	17.40	16.37	−	21	−	−	−	−	−	−	−	−	−	○	△
76号	隅円方形	弥生後期前半～中葉	3.60?×3.60?	322	11.94	10.95	−	28	17.8	15.4	−	−	1.92	1.84?	1.92?	1.84?	1.04	○	○
77号	隅円方形	弥生後期前半	3.76×3.72	351	12.34	11.42	−	13	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△
78号	円形?	弥生後期前半	4.08×3.56?	308	12.42	11.34	−	43	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
79号	隅円方形	弥生後期前半	3.72?×3.20?	356	10.24	8.92	−	16	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
80号	トラック形?	弥生後期前半	4.24×4.16	329	14.55	13.31	−	42	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
81号	不整形	弥生後期前半	4.16?×3.84?	356?	−	13.84	−	6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
82号	トラック形～隅円方形	弥生後期（前半?）	3.72?×3.72?	309	11.80	10.52	−	38	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
83号	円形	弥生後期前半	3.68?×3.24	296	9.55	8.60	−	6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	×
84号	円形～トラック形	弥生後期前半	4.64×4.56	358	17.58	15.86	−	49	−	−	−	−	−	−	−	−	−	×	○
85号	不明	弥生後期?	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−



C－C'　D－D'　E－E'　第15図C－C'

1　明褐色土混じりの軟質暗褐色土　撹乱層
2　黒褐色土　211号溝覆土
3　茶褐色土
4　暗褐色土
5　ローム粒混じりの黒褐色土
6　黒褐色土
7　明褐色土
8　ロームブロック多量混じりの暗褐色土
9　ローム粒若干混じりの黒褐色土
10　ローム粒若干混じりの明褐色土
11　ロームブロック多量混じりの暗茶褐色土
12　焼土混じりの黒褐色土
13　粘性の強い硬質黒褐色土
14　黄褐色土
15　なし
16　ローム粒混じりの黒褐色土
17　黒色土
18　黒褐色土
19　黒褐色土
20　ロームブロック混じりの暗褐色土
21　ロームブロック混じりの暗褐色土　1号覆土
22　暗褐色土(黒みが強い)
23　暗褐色土
24　粘性の強い暗褐色土
25　ローム混じりの暗褐色土
26　ローム粒
27　ロームブロック多量混じりの暗茶褐色土
28　暗褐色土混じりのロームブロック
29　黒褐色土
30　暗褐色土
31　黒褐色土
32　黒色土
33　焼土・炭化物多量混じりの黒褐色土
34　暗茶褐色土
35　40層と同じ
36　ロームブロック混じりの暗褐色土
37　粘性の強い暗褐色土
38　暗黄褐色土
39　ローム
40　黄褐色土混じりの暗褐色土
41　ロームブロック混じりの暗褐色土

第 13 図　1・3 号竪穴住居跡実測図



第 14 図　1・3・6 号竪穴住居跡出土遺物実測図

1 号竪穴住居跡（第 13・14 図、図版 3・52）

形状：トラック形　**規模**（長軸×短軸；m）：11.52? × 8.16?　**遺存**：1/2

面積（上端・下端・柱間；㎡）：78.89・76.04・25.73　**竪穴深度**（cm）：57　**主軸方位**：320°

柱間比（AB：BC）：0.74　**主柱穴深度**（cm）：A － 80.7　B － 85.0

柱間（m）：AB － 4.40　BC － 5.96?　CD － 4.36　DA － 6.00?

調査区東南隅に位置する大型の竪穴住居で、2 号・3 号竪穴住居跡と 211 号方形周溝墓、近世の 10 号土壙墓に切られている。炉の北西にピットの規則的な配置が認められるが、機能は不明である。

遺物はすべて小片で、一括取り上げ遺物しかない。第 14 図 12・13 および 2 号混入品第 16 図 1・6･7 の壺片のように久ヶ原式に特徴的な沈線区画を含む文様帯が存在することを積極的に評価すれば、本遺構は弥生時代後期前半に属すると考えられる。

なお、分析の結果、在地系の甕（第 14 図 15）の胎土は、在地的（ランク B）と判定されている。

3 号竪穴住居跡（第 13・14 図、図版 3・20・52）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：5.76? × 5.56?　**遺存**：3/4

面積（上端・下端・柱間；㎡）：27.30・26.26・8.67　**竪穴深度**（cm）：44　**主軸方位**：307°

柱間比（AB：BC）：1.08　**主柱穴深度**（cm）：A － 67.3　B － 60.1　C － 67.5

柱間（m）：AB － 3.04　BC － 2.80　CD － 3.04?　DA － 2.80?

本遺構は 211 号方形周溝墓に切られ、1 号竪穴住居跡の一部を切って構築されている。主柱穴は一角が調査区外にあたるが、貯蔵穴・ハシゴ穴と見られる穴が検出されている。床面は 1 号竪穴住居跡とほぼ同レベルである。

出土遺物は僅少である。椀（第 14 図 20）は 211 号墓に関連する可能性があり、本遺構の帰属する時期は、山田橋式の壺（19・21）の示す弥生時代後期後半と考えられる。

2 号竪穴住居跡（第 15・16・17 図、図版 3・19・20・52・82）

形状：方形　**規模**（長軸×短軸；m）：7.60 × 7.52?　**遺存**：1/2

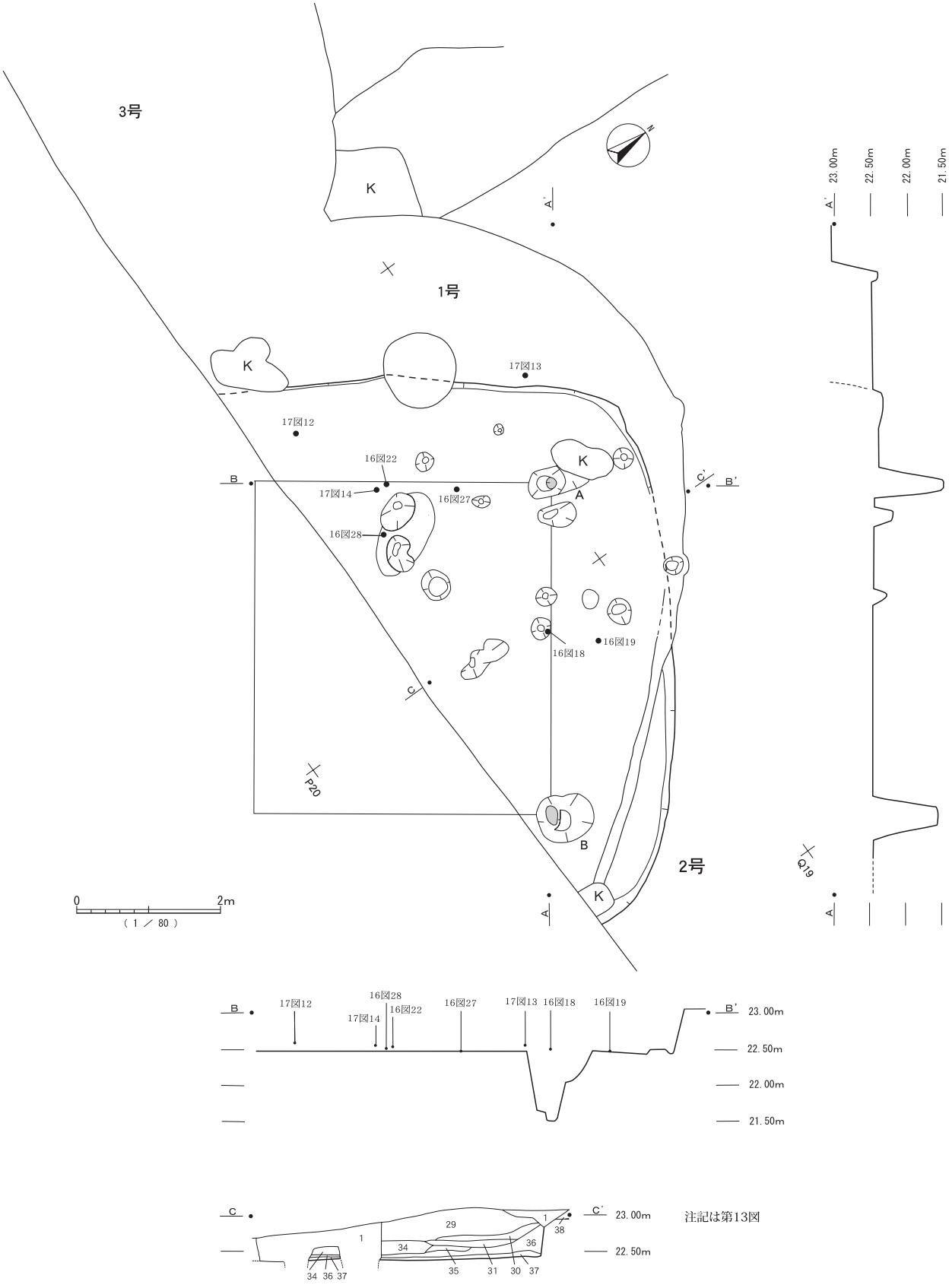
面積（上端・下端・柱間；㎡）：52.66・49.75・18.90　**竪穴深度**（cm）：47　**主軸方位**：306°

柱間比（AB：BC）：0.89　**主柱穴深度**（cm）：A － 87.9　B － 89.3

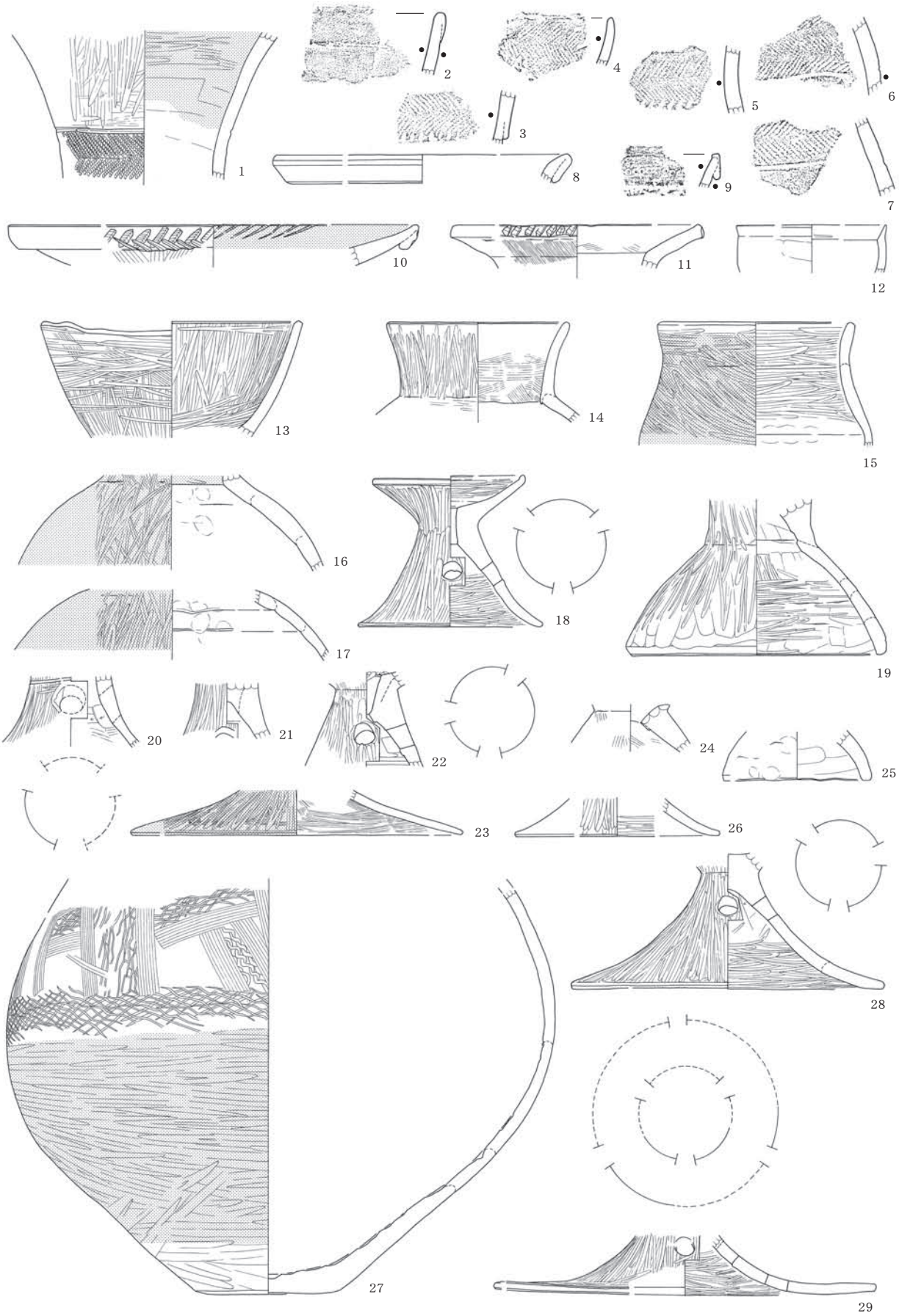
柱間（m）：AB － 4.12　BC － 4.64　CD － 4.12?　DA － 4.60?

本遺構は 1 号と重なるかたちに構築された方形の竪穴住居跡である。床面レベルは 1 号竪穴住居跡より若干低い程度である。

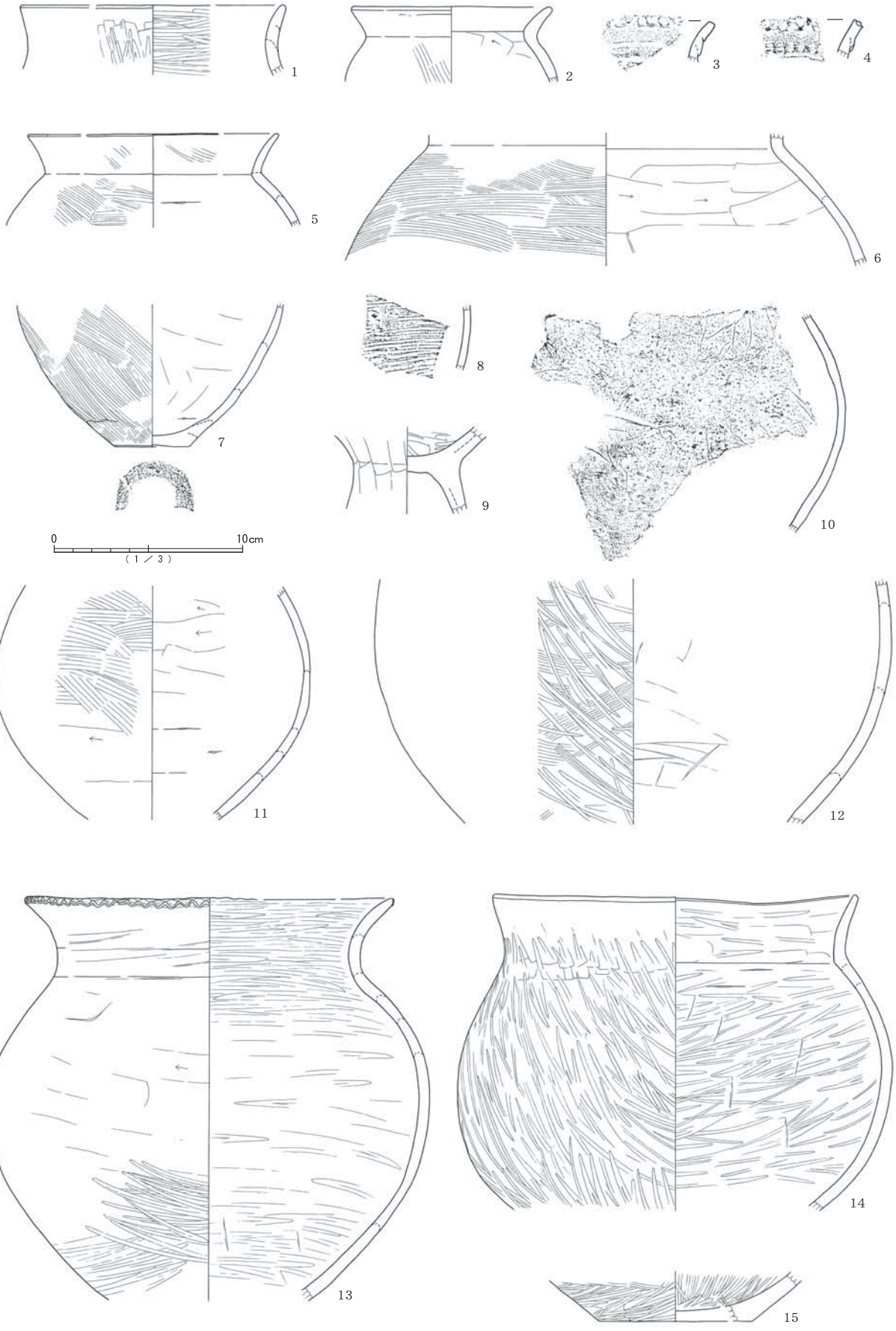
遺物は弥生時代終末期の特徴を持つものが多い。床面直上付近のレベルからは、小型器台・内弯する脚部・高杯脚部・網目状文壺・高杯脚部（第 16 図 18・19・22・27・28）・甕 3 個体（第 17 図 12・13・14）が出土している。一括取り上げ遺物を含めると、櫛状工具による文様を口縁内外面に施す壺（第 16 図 10）・内弯する口縁部を持つ壺（13）、高杯脚部（19・23・28・29）など東海地方西部に由来する特徴を持つものが目立つ。また、在地系と言える安房形系譜の壺（第 16 図 27）に櫛状工具によって文様が施されることと、在地系の甕がくの字状口縁に接近している点は過渡的な様相を示しており興味深い。



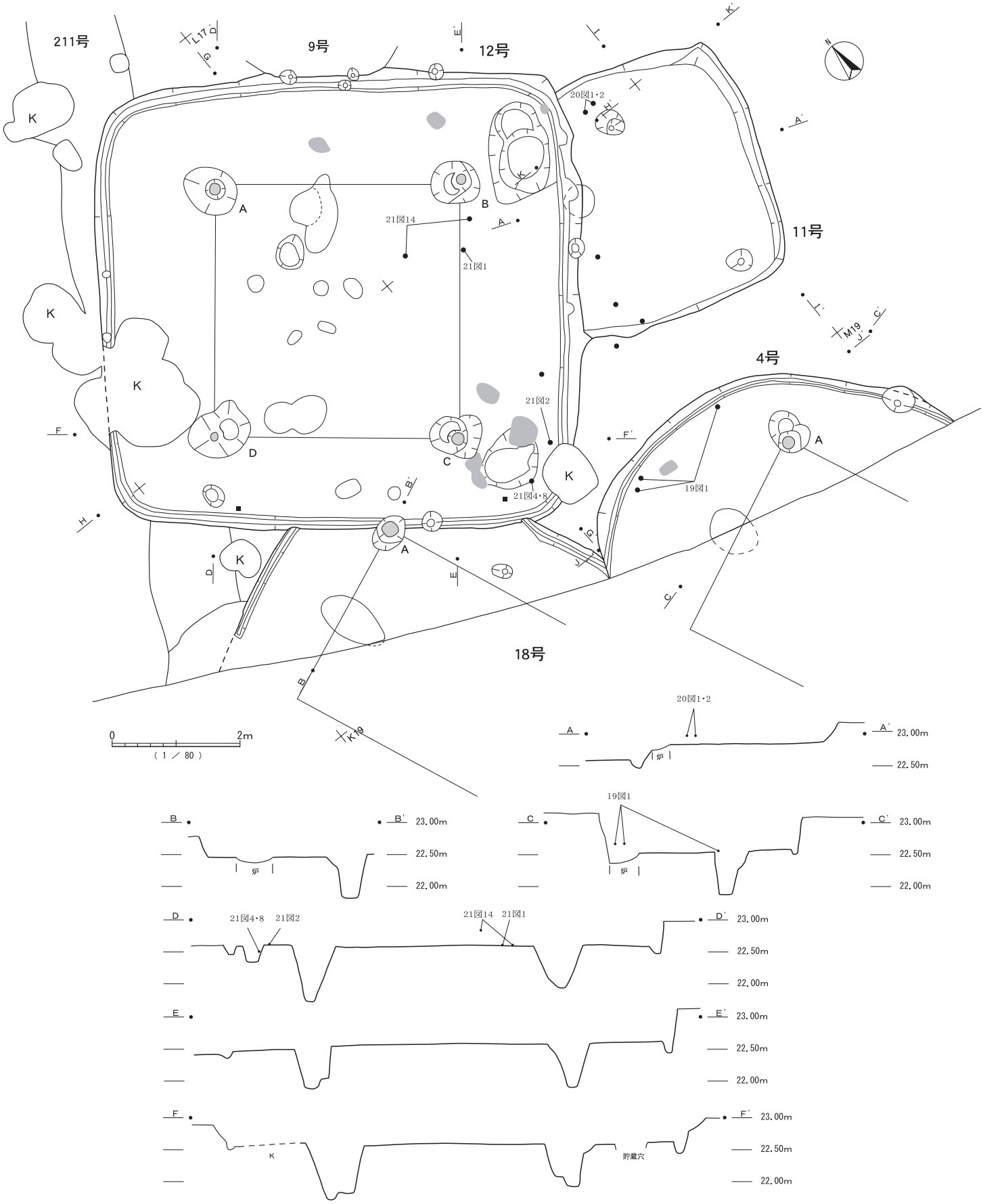
第 15 図　2 号竪穴住居跡実測図



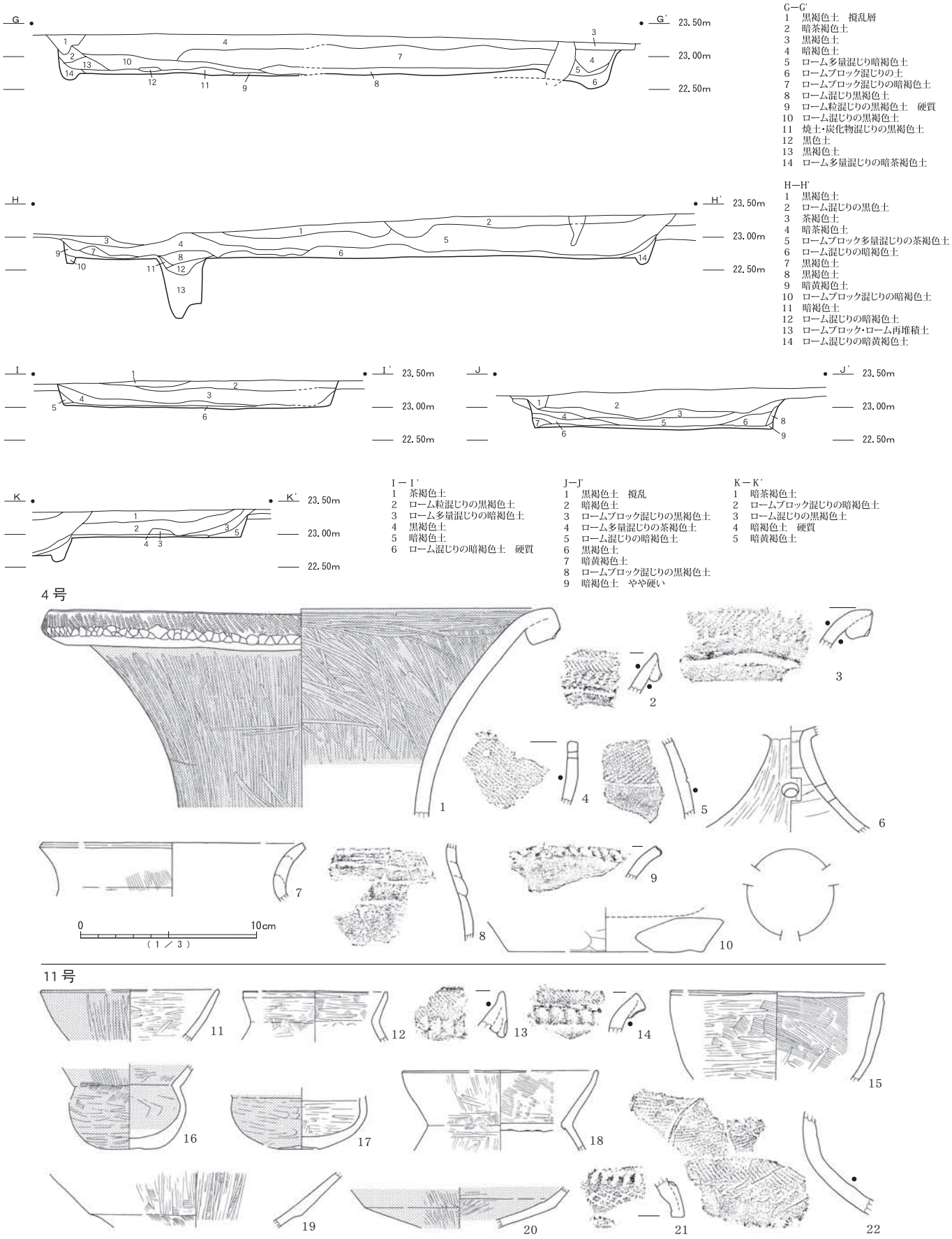
第 16 図　2 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 17 図　2 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 18 図　4・11・12・18 号竪穴住居跡実測図



G—G'
1　黒褐色土　撹乱層
2　暗茶褐色土
3　黒褐色土
4　暗褐色土
5　ローム多量混じり暗褐色土
6　ロームブロック混じりの土
7　ロームブロック混じりの暗褐色土
8　ローム混じり黒褐色土
9　ローム粒混じりの黒褐色土　硬質
10　ローム混じりの黒褐色土
11　焼土・炭化物混じりの黒褐色土
12　黒色土
13　黒褐色土
14　ローム多量混じりの暗茶褐色土

H—H'
1　黒褐色土
2　ローム混じりの黒色土
3　茶褐色土
4　暗茶褐色土
5　ロームブロック多量混じりの茶褐色土
6　ローム混じりの暗褐色土
7　黒褐色土
8　黒褐色土
9　暗黄褐色土
10　ロームブロック混じりの暗褐色土
11　暗褐色土
12　ローム混じりの暗褐色土
13　ロームブロック・ローム再堆積土
14　ローム混じりの暗黄褐色土

I—I'
1　茶褐色土
2　ローム粒混じりの黒褐色土
3　ローム多量混じりの暗褐色土
4　黒褐色土
5　暗褐色土
6　ローム混じりの暗褐色土　硬質

J—J'
1　黒褐色土　撹乱
2　暗褐色土
3　ロームブロック混じりの黒褐色土
4　ローム多量混じりの茶褐色土
5　ローム混じりの暗褐色土
6　黒褐色土
7　暗黄褐色土
8　ロームブロック混じりの黒褐色土
9　暗褐色土　やや硬い

K—K'
1　暗茶褐色土
2　ロームブロック混じりの暗褐色土
3　ローム混じりの黒褐色土
4　暗褐色土　硬質
5　暗黄褐色土

第 19 図　4・11 号竪穴住居跡出土遺物実測図

壺の文様と小型器台の形状、古墳時代前期以降に通有の内外が明瞭な屈曲を呈するくの字状口縁ハケメ調整甕とは異なる甕の様相から、本遺構は弥生時代終末期に位置づけられる。

6 号竪穴住居跡（第 13・14 図、図版 3・21・52）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.32 × 3.96?　**遺存**：2/3

面積（上端・下端・柱間；㎡）：15.29・13.48・5.14　**竪穴深度**（cm）：24　**主軸方位**：317°

柱間比（AB：BC）：1.39　**主柱穴深度**（cm）：A － 12.1　B － 8.0　C － 11.9

柱間（m）：AB － 2.72　BC － 1.96　CD － 2.72?　DA － 1.96?

本遺構は、7 号竪穴住居跡を切り、211 号方形周溝墓に切られる。主柱穴は掘り込みが浅く不明瞭であり、炉の反対側にあるハシゴ穴・貯蔵穴上の穴から主軸を想定した。

211 号墓に大きく破壊されていることもあり、遺物は少ないが、無文で開放口縁の鉢（第 14 図 9）と段部に竹管状工具による刺突の行われる甕（10）が得られている。両者の製作技法と、本遺構の平面形が方形に近いことからすれば、本遺構は弥生後期末から終末期に属する可能性が高い。

4 号竪穴住居跡（第 18・19 図、図版 20・52）

形状：楕円形　**規模**（長軸×短軸；m）：7.64? × 6.32?　**遺存**：1/4

面積（上端・下端・柱間；㎡）：36.75・34.70・11.05　**竪穴深度**（cm）：49　**主軸方位**：335°

柱間比（AB：BC）：0.99　**主柱穴深度**（cm）：A － 72.7

柱間（m）：AB － 3.32?　BC － 3.36?　CD － 3.32?　DA － 3.36?

本遺構の大半は調査区外に出ている。調査部分からすると楕円形の竪穴住居跡である可能性が高い。18 号竪穴住居跡と切り合うが、平面形の比較から本遺構の構築が先んずると判断できる。炉の一部が検出されているが、おそらく通例のごとく柱間に位置していたと想定でき、本遺構の規模・主軸もこれに基づいて推定復元している。

遺物は、確実に伴うものとしては、床面から若干浮いた状態で、大型壺の口縁部 1 が検出されている。この口縁端部の肥厚部分の厚みと口唇部の角度が直角に近い点は、久ヶ原式前半の特徴に当たる。よって、本遺構は弥生時代後期前半の所産と考えられる。

18 号竪穴住居跡（第 18 図）

形状：方形？　**規模**（長軸×短軸；m）：5.96? × 6.32?　**遺存**：1/4

面積（上端・下端・柱間；㎡）：29.73・28.58・9.15　**竪穴深度**（cm）：39　**主軸方位**：337°

柱間比（AB：BC）：0.96　**主柱穴深度**（cm）：A － 64.2

柱間（m）：AB － 3.00?　BC － 3.12?　CD － 3.00?　DA － 3.12?

本遺構は 4 号・12 号竪穴住居跡、211 号方形周溝墓と切り合う竪穴住居跡である。大半が調査区外に出ているものの、主柱穴 1 箇所と炉を検出した。

出土遺物はまったく無く、帰属時期は確定できない。ただし、周辺遺構の分布傾向からすると、12 号竪穴住居跡と 211 号墓には先行するものと思われる。平面形が角張っていることを勘案すると、4 号竪穴住居跡の後に構築された可能性が考えられる。

11 号竪穴住居跡（第 18・19・20 図、図版 4・23・54）

形状：方形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.04 × 4.04?　**遺存**：4/5

面積（上端・下端・柱間；㎡）：14.90・13.59・－　**竪穴深度**（cm）：31　**主軸方位**：288°

12 号竪穴住居跡に切られる、小型の方形竪穴住居跡である。付近の切り合い関係を見ると、4 号→ 18 号・11 号→ 12 号となり、本遺構は 18 号と前後する時期に構築されたと見られる。竪穴の掘り込みは明確だが、主柱穴は検出されていない。

遺物は、覆土中より出土した小型の壺 2 個体（第 20 図 1・2）が確実に伴う。その他の一括取り上げ遺物は、多くが 12 号竪穴住居跡と 211 号方形周溝墓からの混入と見なせるため、これらを除いて考えると、本遺構は弥生時代終末期から古墳時代前期初頭の所産である可能性が高い。

12 号竪穴住居跡（第 18・20・21 図、図版 4・23・54・55・87・88）

形状：方形　**規模**（長軸×短軸；m）：7.52 × 7.08　**遺存**：略完

面積（上端・下端・柱間；㎡）：51.38・48.51・14.45　**竪穴深度**（cm）：40　**主軸方位**：40°

柱間比（AB：BC）：0.96　**主柱穴深度**（cm）：A － 66.9　B － 54.0　C － 67.0　D － 76.7

柱間（m）：AB － 3.80　BC － 3.96　CD － 3.84　DA － 3.96

本遺構は方形竪穴住居跡で、9 号・11 号・18 号竪穴住居跡を切って構築されており、北西辺を 211 号方形周溝墓に切られている。竪穴平面形と主柱穴配置はともにほぼ正方形で、貯蔵穴は東と南の隅に位置する。被熱した箇所がいくつか検出されているが、位置を見ると柱穴 A・B 間と、C・D 間の大ぶりなものが炉に該当するものと思われる。貯蔵穴と炉が 2 箇所認められることからすれば、同一の竪穴を利用して、上屋構造の更新とともに床面施設を再整備した可能性も考えられる。

遺物は、甕 2 個体・高杯杯部・高杯脚部・壺底部（第 21 図 1・2・4・8・14）と、軽石（第 20 図 33；平面図四角ドットのいずれかに該当）が床面近くで出土している。高杯杯部 4 は緻密なヘラミガキで光沢を放つほどに仕上げられた精製品である。甕 1 と甕 2 は在来系の段部を持つ形状であり、本遺構の帰属時期が古墳前期までは下らないことを示唆している。一括取り上げ遺物には、非在地的な技法である櫛描文の施された壺の破片が認められる（第 20 図 20・21・24・25・26）。

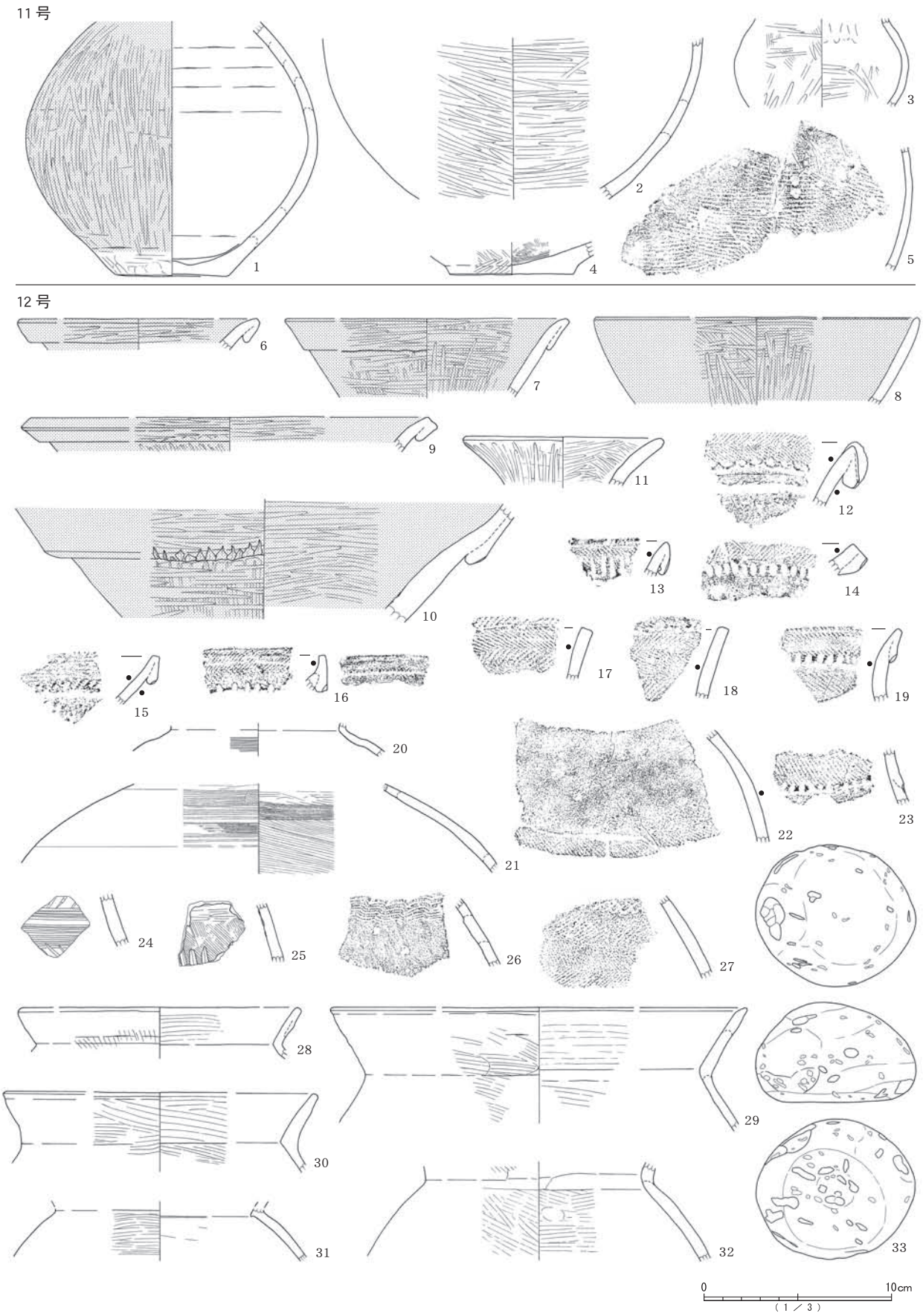
同一個体と見られる断片から推定される大型壺（第 21 図 15）はここに示したが、すべて近辺の一括取り上げ遺物であり、211 号等の方形周溝墓に関係する遺物の可能性がある。また、遺存良好の中実部の目立つ脚柱を持つ高杯（第 21 図 3）は注記が無く、本遺構から出土したとは確定できないが、遺物の収納状況から判断しここに含めている。

床面上出土の土器と周囲との切り合い関係を勘案すると、本遺構は弥生時代終末期のうちに構築され、建て替えが一度行われたと考えられる。建て替え後には 211 号墓の築造以前に廃絶したはずであり、存続時間幅は古墳時代前期に若干かかるものと思われる。

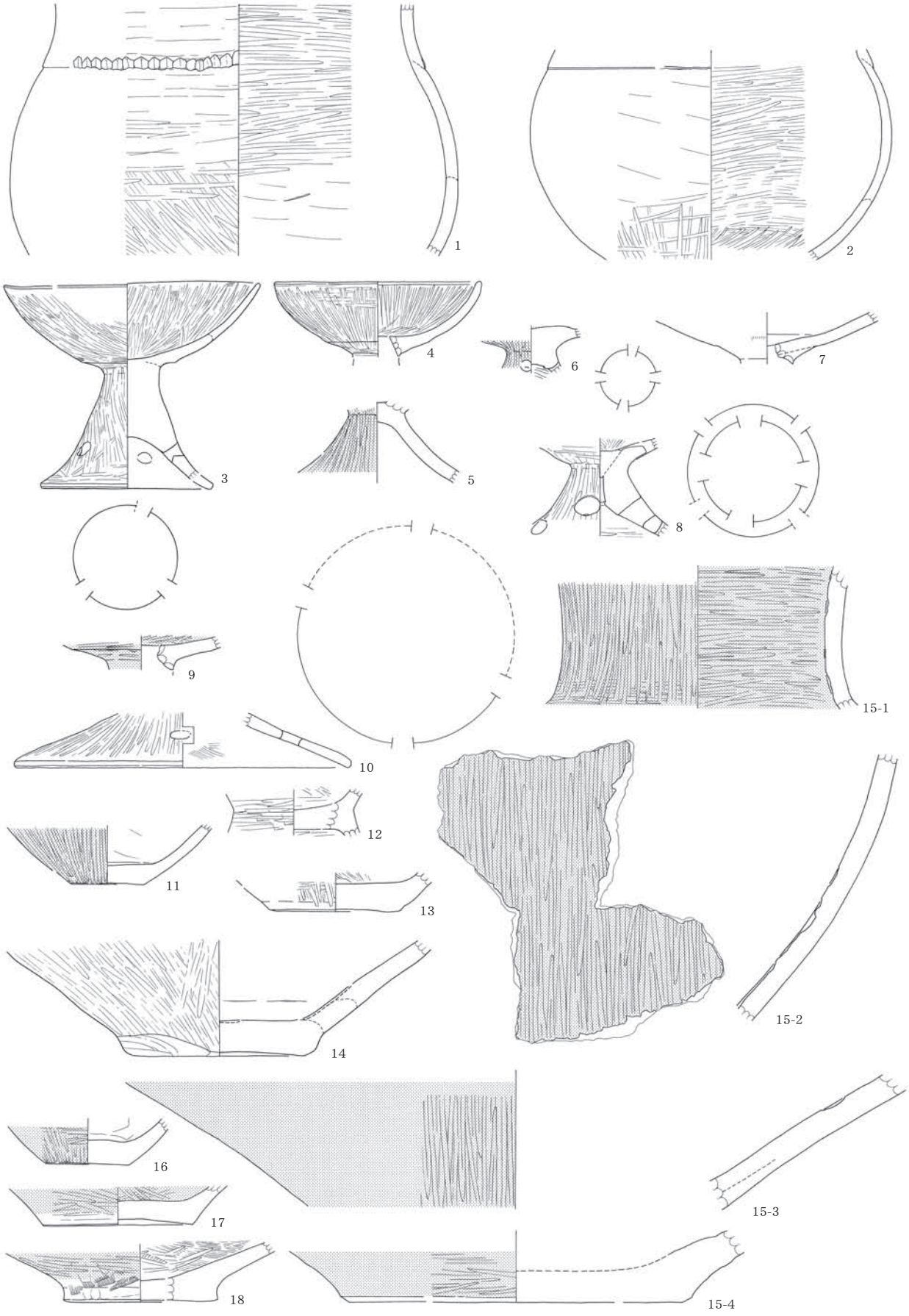
胎土分析の結果、第 20 図 14 の在地系壺と同 26 の櫛描波状文壺が在地系の胎土の可能性（ランク B）が指摘され、同 29 のくの字状口縁甕が非在地産胎土の可能性が高い（ランク E）と判定されている。

5 号竪穴住居跡（第 22 図、図版 52）

形状：楕円形　**規模**（長軸×短軸；m）：6.60 × 5.08　**遺存**：1/4



第 20 図　11・12 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 21 図　12 号竪穴住居跡出土遺物実測図

面積（上端・下端・柱間；㎡）：27.52・25.58・4.99　竪穴深度（cm）：12　主軸方位：334°
柱間比（AB：BC）：0.78　主柱穴深度（cm）：A － 81.2　B － 61.9　C － 85.1
柱間（m）：AB － 2.04　BC － 2.60　CD － 2.00?　DA － 2.60?

本遺構は北東半分が調査区外にあるうえに、1 号溝（道路跡）に破壊されており、遺存状態が不良である。主柱穴は掘り込みが深く、3 箇所を確認できたが、遺物は僅少ですべて一括取り上げ遺物である。竪穴の平面形から、本遺構は弥生時代後期の所産と考えられる。

79 号竪穴住居跡（第 22 図、図版 67・87）
形状：隅円方形　規模（長軸×短軸；m）：3.72? × 3.20?　遺存：1/4
面積（上端・下端・柱間；㎡）：10.24・8.92・－　竪穴深度（cm）：16　主軸方位：356°

5 号竪穴住居跡と同じく、竪穴の半分以上が調査区外にあり、1 号溝による破壊を受けている。主柱穴は検出されず、炉も認められない。

遺物は小片ばかりで、すべて一括取り上げ遺物である。沈線文区画の壺片（5・6・10）を積極的に評価すれば、本遺構は弥生時代後期前半の所産と判断できる。

7 号竪穴住居跡（第 23・24・25 図、図版 4・21・52・53）
形状：トラック形　規模（長軸×短軸；m）：5.52 × 4.92?　遺存：完存
面積（上端・下端・柱間；㎡）：22.59・21.30・6.90　竪穴深度（cm）：39　主軸方位：359°
柱間比（AB：BC）：0.85　主柱穴深度（cm）：A － 50.9　B － 51.4　C － 48.3　D － 47.0
柱間（m）：AB － 2.48　BC － 2.92　CD － 2.44　DA － 2.88

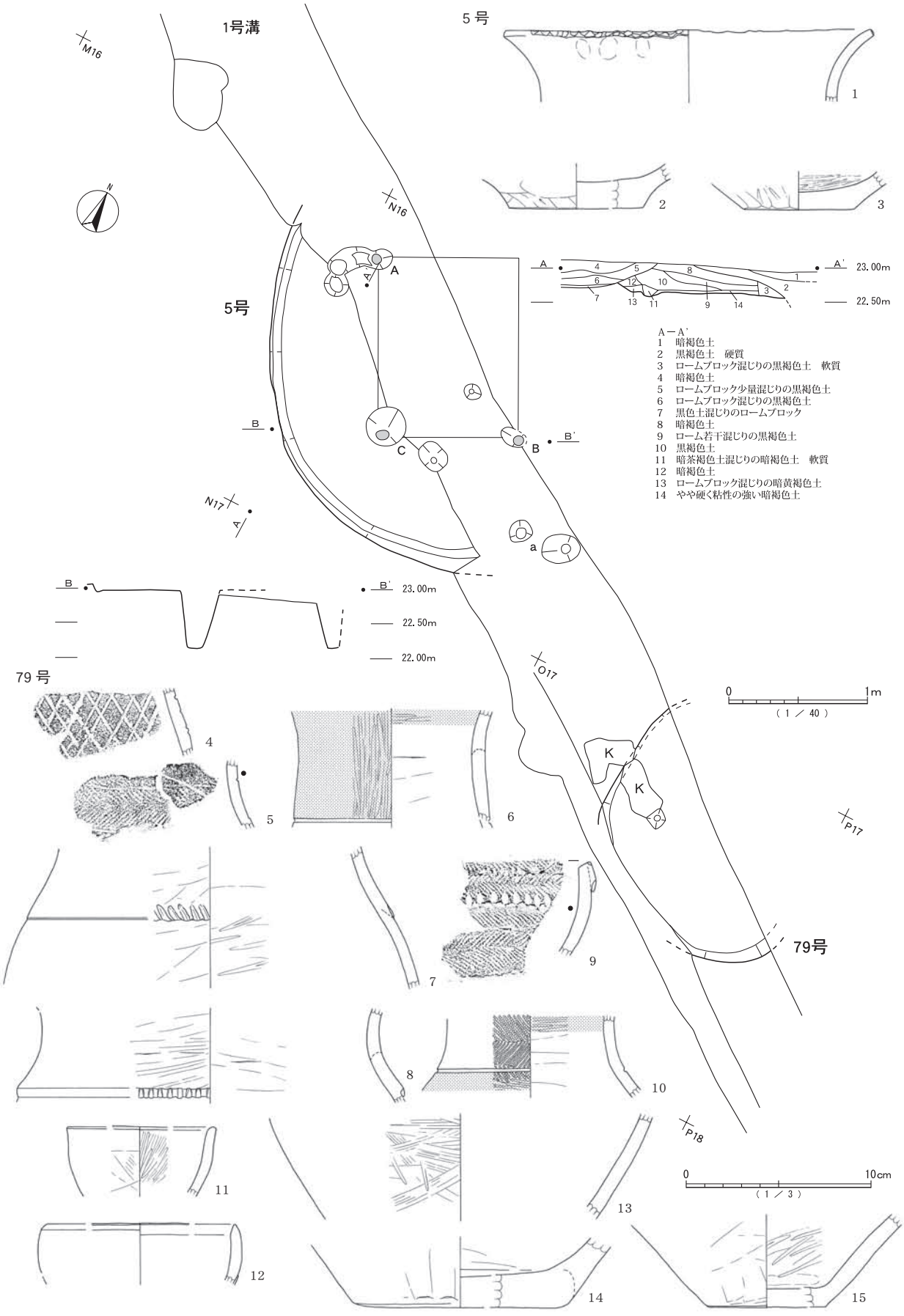
本遺構は 6 号竪穴住居跡に切られるが、平面的にはほぼ完存している。主柱穴 4 箇所および貯蔵穴、短軸柱穴間中央の炉とその反対側のハシゴ穴と床面施設が一通り検出されている。一辺 50cm 前後の貯蔵穴は周囲に土手を持っている。

遺物はすべて一括取り上げ遺物である。壺体部（第 25 図 3）内面には製作時に亀裂を修復したようなシボリ痕が認められる。遺存の良い個体には、輪積痕甕（同 11）、沈線文区画の鉢（同 12・13）等がある。これらの特徴に加えて、壺口縁肥厚部の断面形が厚いもの（第 24 図 2・3・5・6）、沈線区画の文様（11・12）が久ヶ原式の特徴と一致するため、本遺構は弥生時代後期前半に帰属すると考えられる。

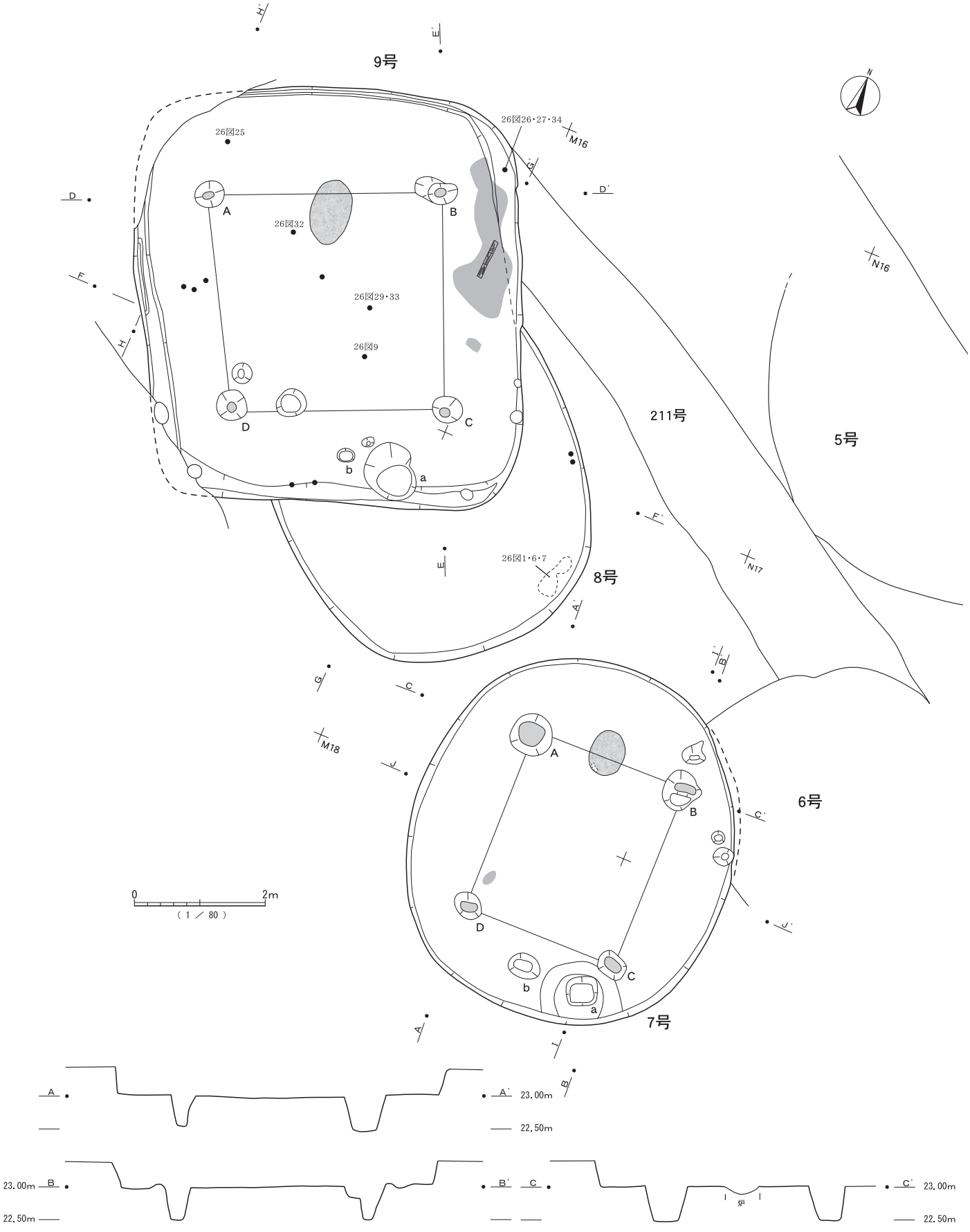
8 号竪穴住居跡（第 23・24・26 図、図版 4・21・53）
形状：トラック形　規模（長軸×短軸；m）：5.84? × 4.68　遺存：1/2
面積（上端・下端・柱間；㎡）：23.09・21.17・－　竪穴深度（cm）：28　主軸方位：315°

本遺構は 9 号竪穴住居跡に切られ、半分程度が遺存する竪穴住居跡である。床面施設は何も検出されなかった。

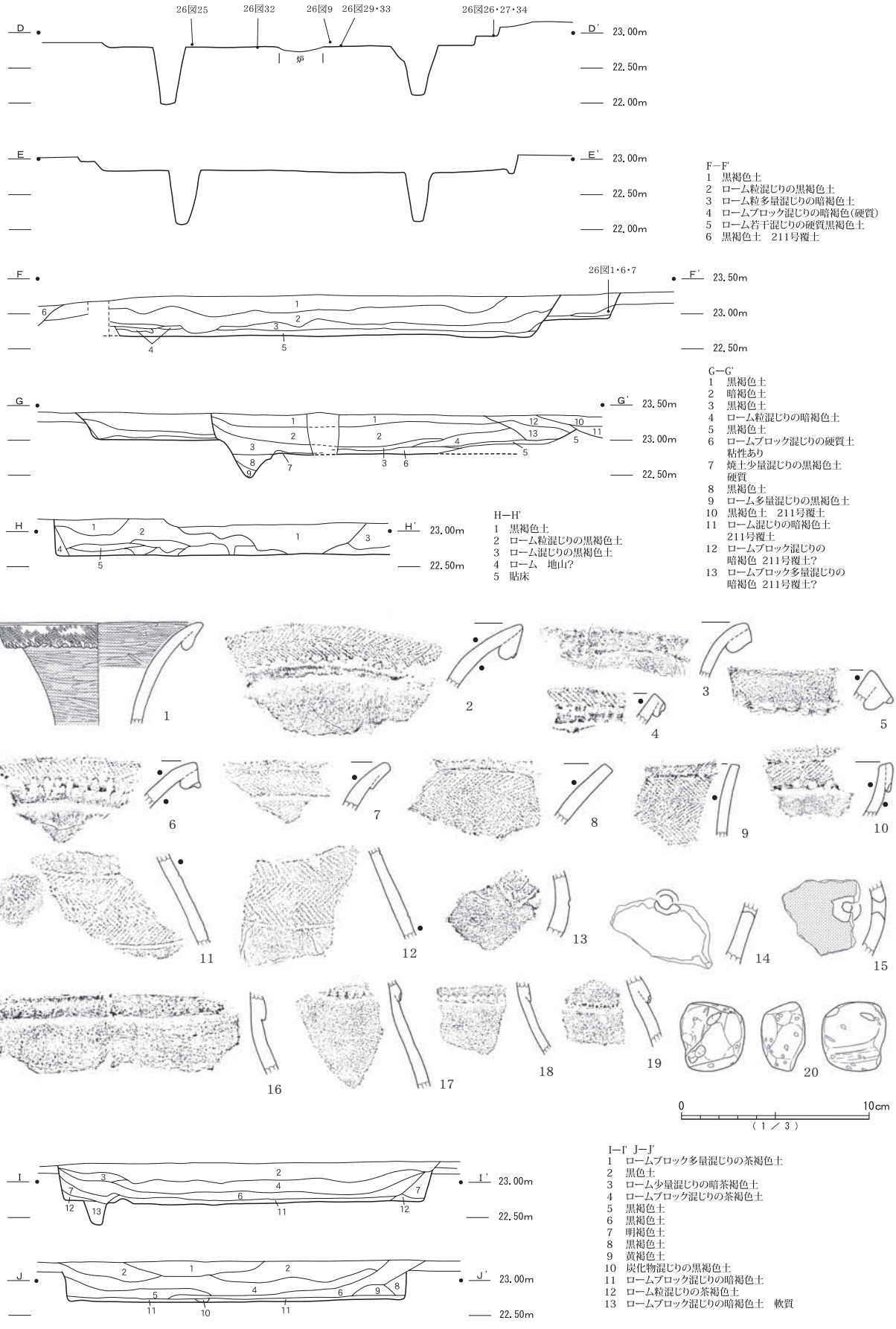
遺物は覆土下層から、壺（第 26 図 1・6）・甕（7）が出土している。前者は、沈線文区画と山形文（単節 RL1 帯）を描くもので、久ヶ原式の特徴を持つ。遺存部の多い個体として唯一、無文赤彩壺（4）が出土しているが、あくまで一括取り上げ遺物であり、これは切られる 9 号竪穴住居跡に帰属する可



第 22 図　5・79 号竪穴住居跡および出土遺物実測図



第 23 図　7・8・9 号竪穴住居跡実測図



第 24 図　7 号竪穴住居跡出土遺物実測図

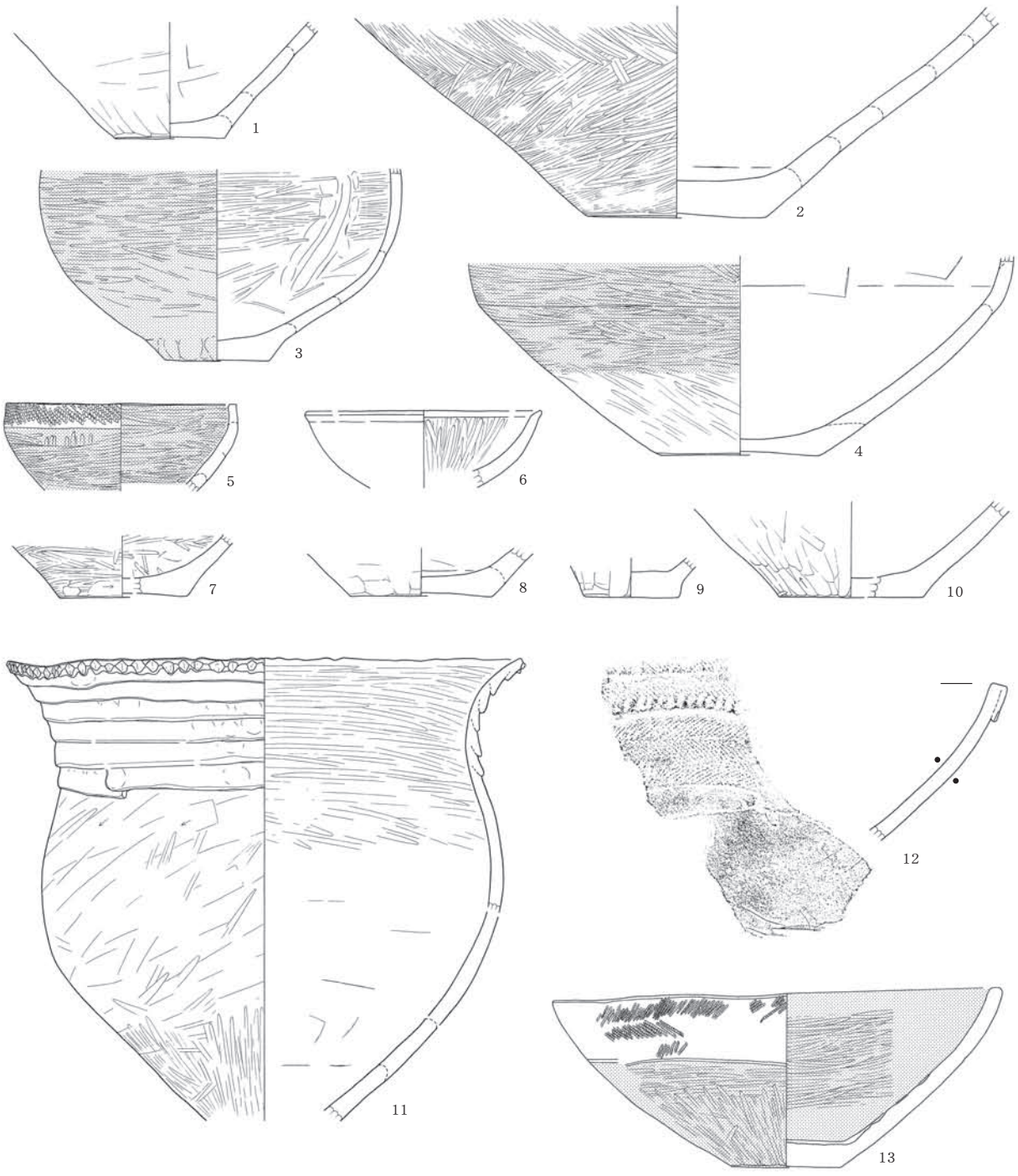
能性が高い。よって、本遺構は弥生時代後期前半の所産と捉えられる。

なお、無文赤彩壺と同じく 9 号竪穴住居跡からの混入品と見られる複合口縁壺（3）は分析の結果、非在地産胎土の可能性が高い（ランク E）と判定されている。

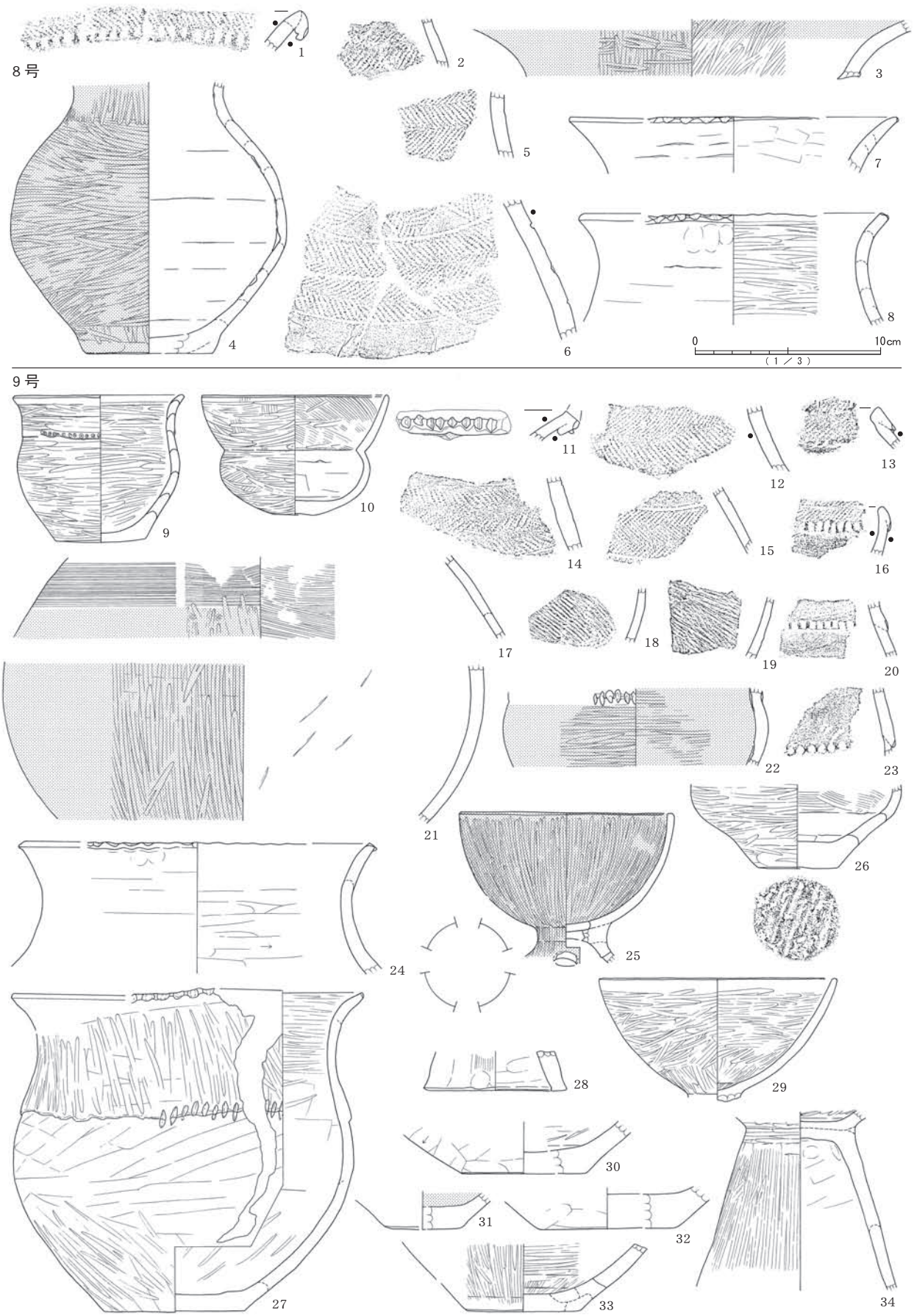
9 号竪穴住居跡（第 23・24・26 図、図版 4・22・53）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：6.36 × 6.32　**遺存**：略完

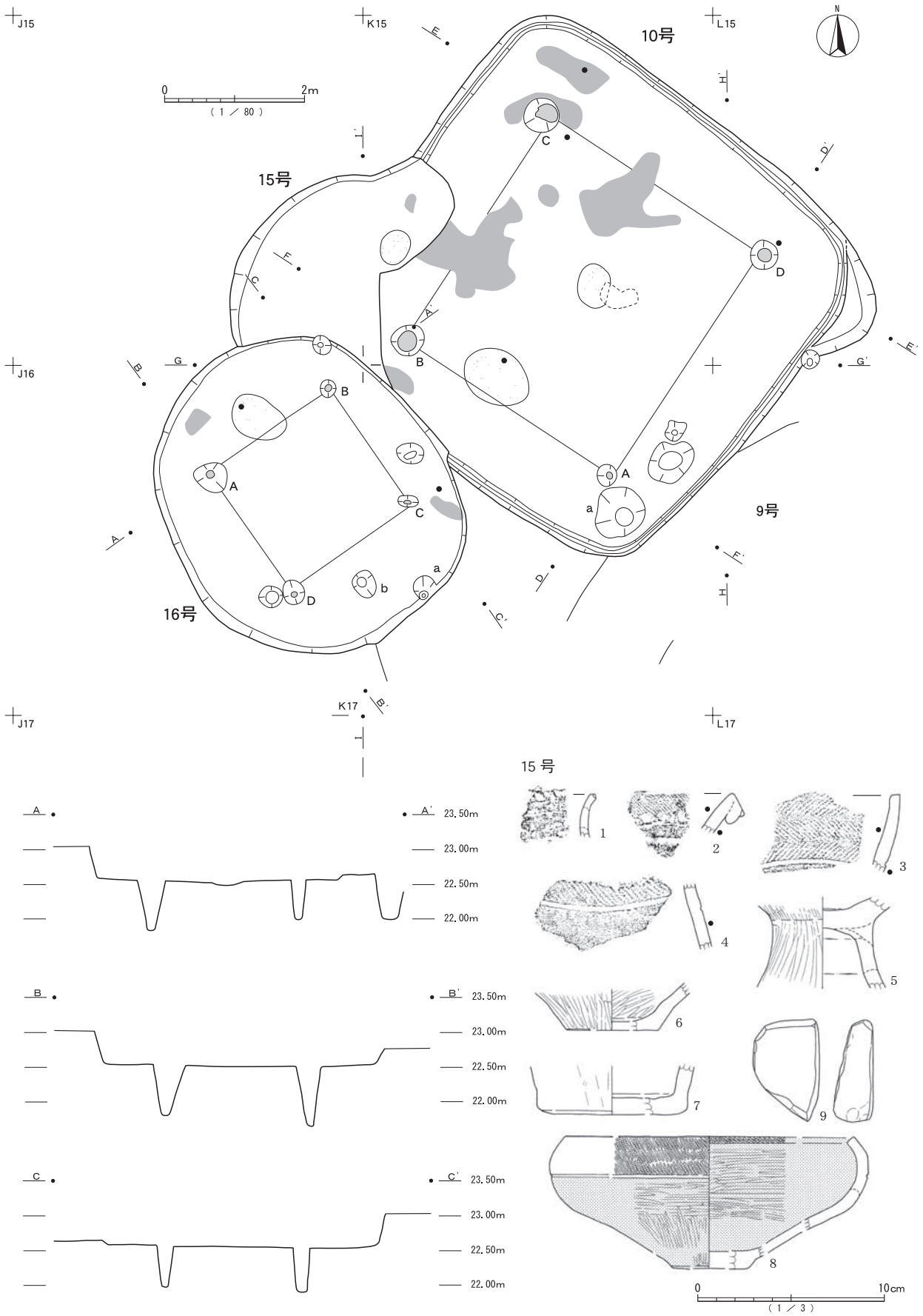
面積（上端・下端・柱間；㎡）：35.28・33.74・11.20　**竪穴深度**（cm）：26　**主軸方位**：337°



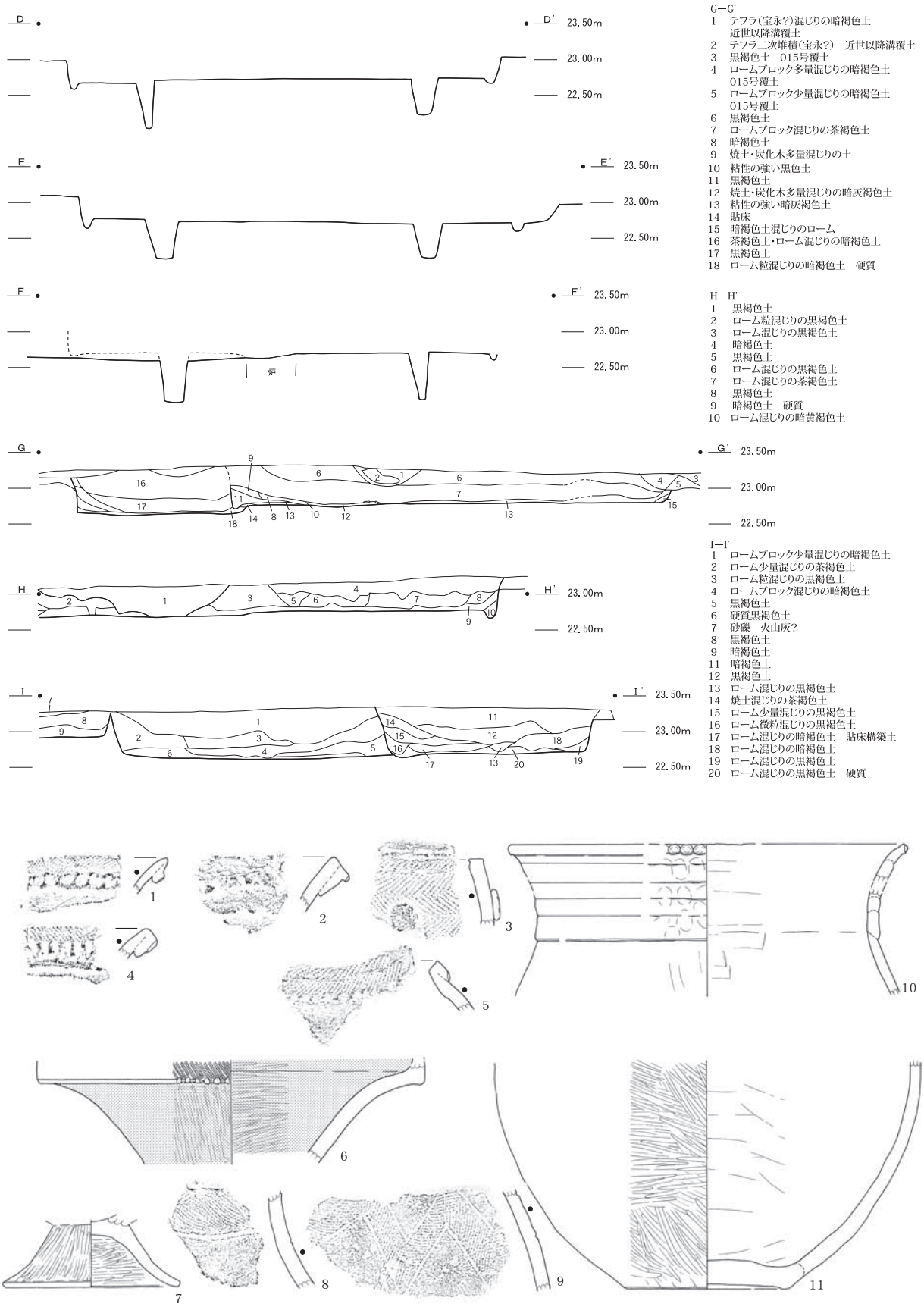
第 25 図　7 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 26 図　8・9 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 27 図　10・15・16 号竪穴住居跡および出土遺物実測図

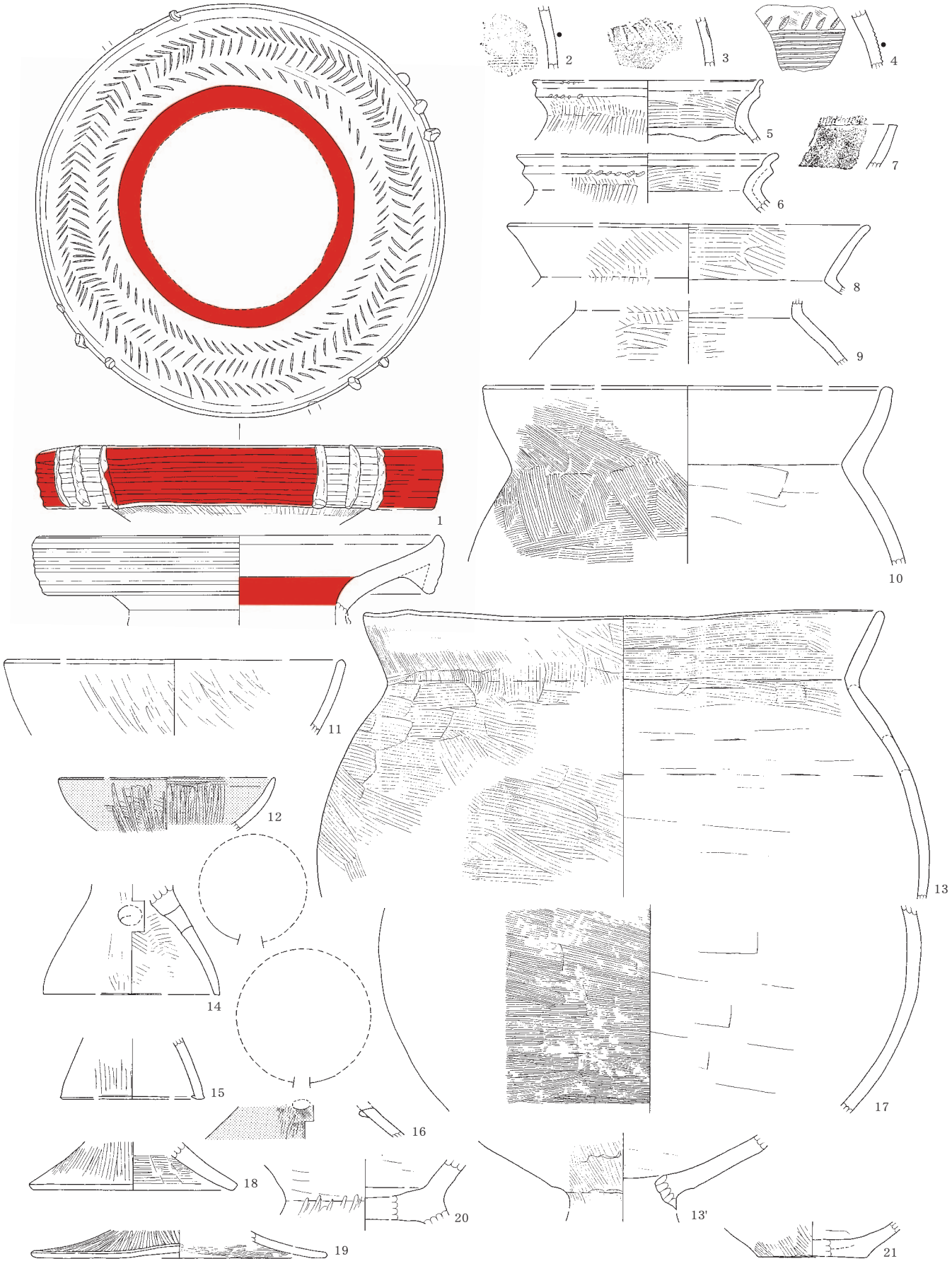


G—G'
1 テフラ(宝永?)混じりの暗褐色土
近世以降溝覆土
2 テフラ二次堆積(宝永?) 近世以降溝覆土
3 黒褐色土 015号覆土
4 ロームブロック多量混じりの暗褐色土
015号覆土
5 ロームブロック少量混じりの暗褐色土
015号覆土
6 黒褐色土
7 ロームブロック混じりの茶褐色土
8 暗褐色土
9 焼土・炭化木多量混じりの土
10 粘性の強い黒色土
11 黒褐色土
12 焼土・炭化木多量混じりの暗灰褐色土
13 粘性の強い暗灰褐色土
14 貼床
15 暗褐色土混じりのローム
16 茶褐色土・ローム混じりの暗褐色土
17 黒褐色土
18 ローム粒混じりの暗褐色土 硬質

H—H'
1 黒褐色土
2 ローム粒混じりの黒褐色土
3 ローム混じりの黒褐色土
4 暗褐色土
5 黒褐色土
6 ローム混じりの黒褐色土
7 ローム混じりの茶褐色土
8 黒褐色土
9 暗褐色土 硬質
10 ローム混じりの暗黄褐色土

I—I'
1 ロームブロック少量混じりの暗褐色土
2 ローム少量混じりの茶褐色土
3 ローム粒混じりの黒褐色土
4 ロームブロック混じりの暗褐色土
5 黒褐色土
6 硬質黒褐色土
7 砂礫 火山灰?
8 黒褐色土
9 暗褐色土
11 暗褐色土
12 黒褐色土
13 ローム混じりの黒褐色土
14 焼土混じりの茶褐色土
15 ローム少量混じりの黒褐色土
16 ローム微粒混じりの黒褐色土
17 ローム混じりの暗褐色土 貼床構築土
18 ローム混じりの暗褐色土
19 ローム混じりの黒褐色土
20 ローム混じりの黒褐色土 硬質

第 28 図　16 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 29 図　10 号竪穴住居跡出土遺物実測図

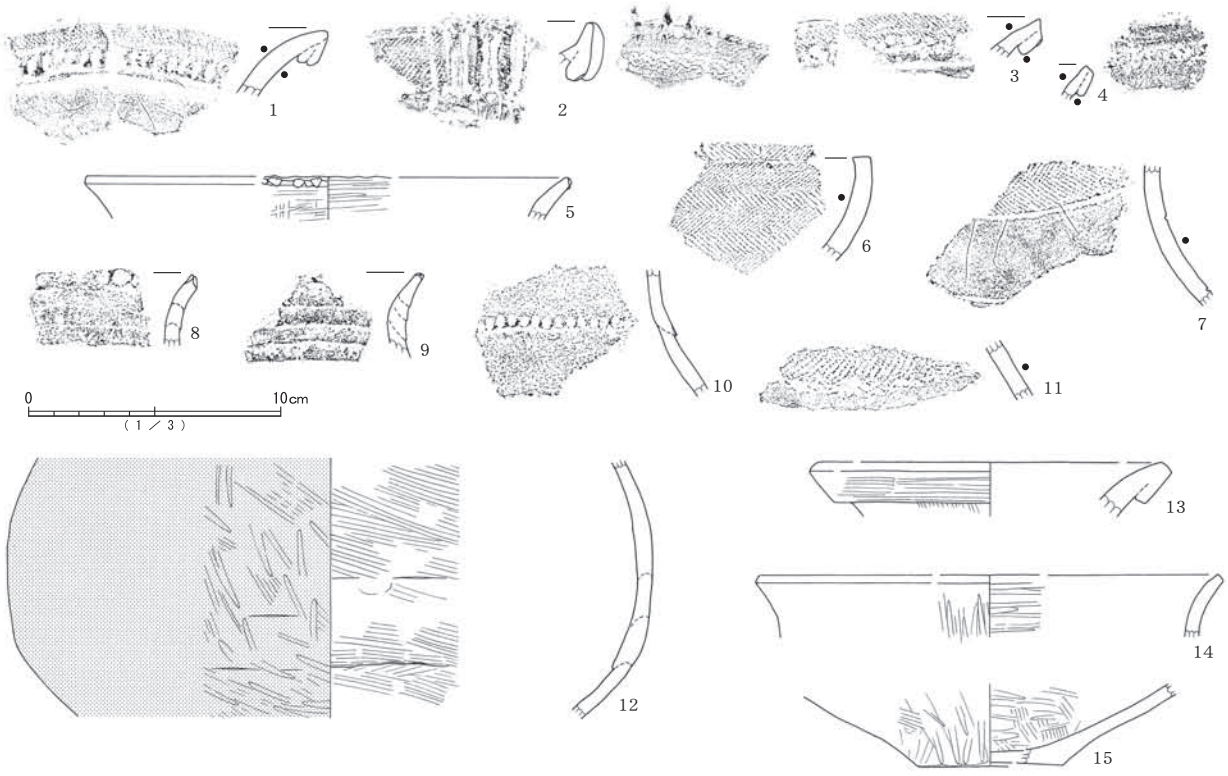
柱間比（AB：BC）：1.08　**主柱穴深度**（cm）：A － 81.6　B － 68.4　C － 78.3　D － 83.0
柱間（m）：AB － 3.60　BC － 3.32　CD － 3.24　DA － 3.36

本遺構は 10 号・12 号竪穴住居跡と一角を接するように切り合い、211 号方形周溝墓に北西辺を切られる隅円方形の竪穴住居跡である。床面には焼土・炭化木材が検出されており、その廃絶時に火を受けていたことが明らかである。主柱穴の他に、炉とハシゴ穴・貯蔵穴と見られる穴が検出されている。貯蔵穴は南東辺の中央寄りに位置し、五領式期に多い竪穴の隅ではない点に帰属時期が示唆される。

遺物はほぼ床面上から、段部刺突を部分的に持つ在地系の甕（第 26 図 27）・台付甕の脚台部（同 34）・椀形の高杯杯部（25・29）・壺下半（26・33）が出土している。在地的な系譜にある甕（27）において段部の刺突が全周しない点や小型甕（9）に竹管状工具による段部刺突が認められる点などに変容が窺え、また、外来的な形状の櫛描直線文壺（17）・椀形杯部の高杯（25・29）の存在が、本遺構が弥生時代終末期の所産であることを示している。高杯（25）を畿内系と判断し、杯部断面形が横長でないことと、杯部側近くに透孔のある点を積極的に評価すれば、庄内式古相と類似すると言えるので、当地域の弥生時代終末期でも前半に位置づけられよう。

なお、櫛描直線文壺（17）は胎土分析の結果、在地産胎土の可能性が指摘されている（ランク B）。また、ハケメ後にヘラミガキで仕上げられる小型土器（10）は一括取り上げ遺物であり、211 号方形周溝墓に伴う可能性が高い。

15 号竪穴住居跡（第 27・28 図、図版 5・55・56）
形状：円形　**規模**（長軸×短軸；m）：3.6? × 4.0?　**遺存**：1/4
面積（上端・下端・柱間；㎡）：10.90・9.49・－　**竪穴深度**（cm）：40　**主軸方位**：36°



第 30 図　10 号竪穴住居跡出土遺物実測図

本遺構は、16 号竪穴住居跡を切り、10 号竪穴住居跡に切られる円形の竪穴住居跡である。竪穴床面北東部に炉を検出したのみで、主柱穴ほかの施設は見出せない。

遺物は少なく、すべて一括取り上げ遺物である。口縁肥厚部に厚みのある壺（第 27 図 2）や、沈線文区画の壺（3・4）、上位で内向きに屈曲する椀（8）は久ヶ原式の特徴を示す。これらからすると、本遺構は弥生時代後期前半に属する可能性がある。ただし、土層断面観察によって先行することが確実な 16 号竪穴住居跡より時期が下降することは間違いない。

16 号竪穴住居跡（第 27・28 図、図版 5・56）

形状：トラック形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.60 × 4.08　**遺存**：完存

面積（上端・下端・柱間；㎡）：15.26・13.79・4.22　**竪穴深度**（cm）：43　**主軸方位**：325°

柱間比（AB：BC）：1.04　**主柱穴深度**（cm）：A － 71.7　B － 57.6　C － 61.2　D － 84.8

柱間（m）：AB － 2.12　BC － 2.04　CD － 2.12　DA － 2.04

本遺構は 15 号・17 号・10 号竪穴住居跡に切られる竪穴住居跡である。切り合う 4 棟の中では最も床面レベルが低く、主柱穴も深い。短軸柱穴間に炉、反対側にハシゴ穴を検出している。貯蔵穴は確定できない。覆土中には焼土が散っており、廃絶過程で火を受けた可能性が高い。

遺物は少なく、みな一括取り上げ遺物である。壺口縁肥厚部の形状（第 28 図 1・2・4）、椀の内弯するプロポーション（5）、沈線文区画・山形文という文様（8・9）を勘案すると、本遺構は弥生時代後期前半に属すると考えられる。

10 号竪穴住居跡（第 27・28・29・30 図、図版 4・22・23・53・54・82・83・87）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：6.24 × 6.24　**遺存**：略完

面積（上端・下端・柱間；㎡）：37.05・35.58・13.42　**竪穴深度**（cm）：32　**主軸方位**：214°

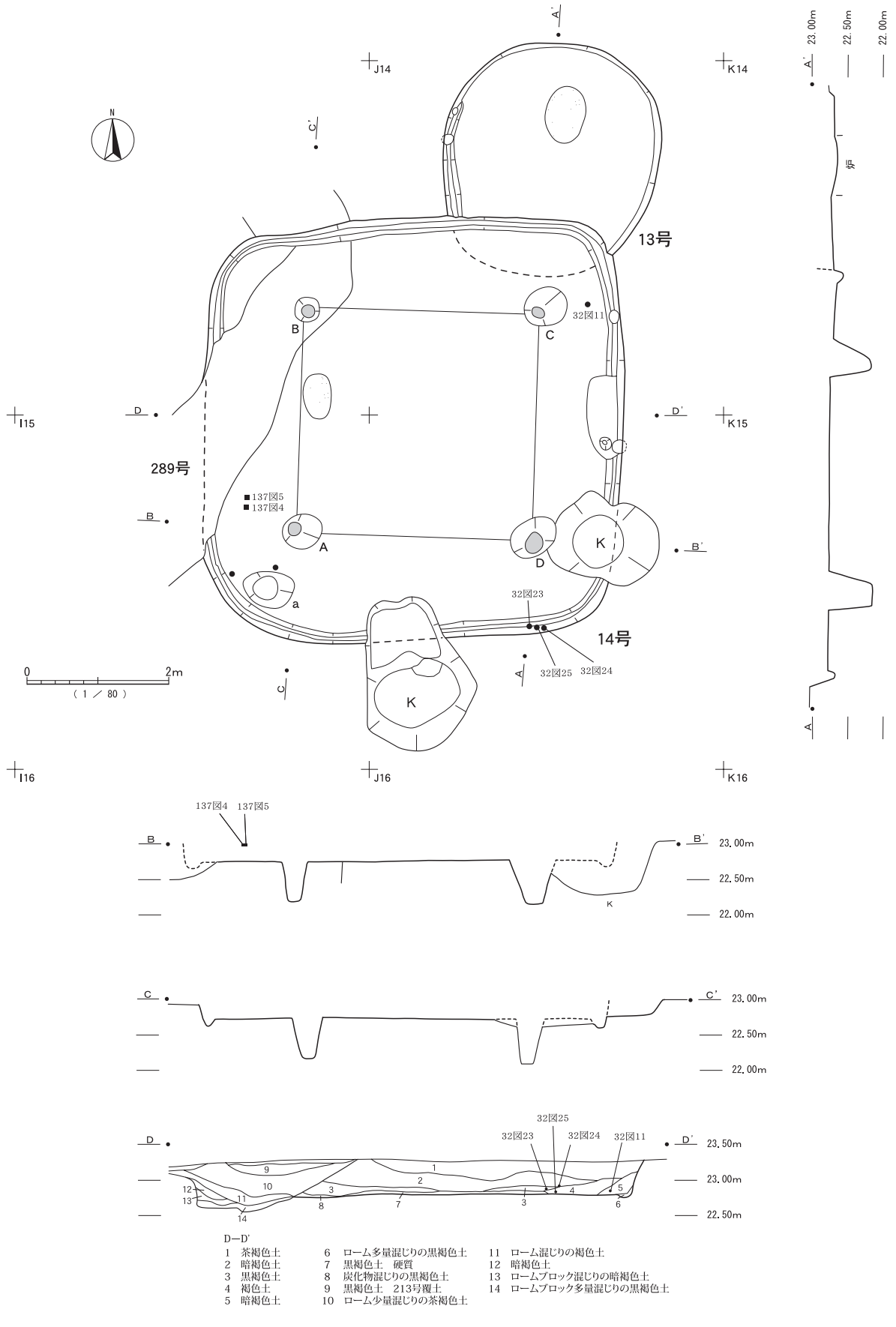
柱間比（AB：BC）：0.92　**主柱穴深度**（cm）：A － 61.5　B － 53.8　C － 51.1　D － 45.5

柱間（m）：AB － 3.56　BC － 3.84　CD － 3.56　DA － 3.84

本遺構は、15 号・16 号・17 号・9 号竪穴住居跡と 211 号方形周溝墓と切り合う。15 号・16 号・17 号を切り、211 号墓に切られる関係にある。接するように位置する 9 号は本遺構が切る可能性がある。覆土中には焼土が広く確認でき、廃絶時に火を受けたものと見られる。炉は柱穴間に 1 箇所認められるが、ほぼ中央にも焼けた部分が記録されており、前者が全期間、単独で存在していたかは確定できない。ほかに貯蔵穴らしき径 80cm 程度の穴が南隅に認められる。

遺物は、遺存良好なパレススタイル壺口縁部（第 29 図 1）のほか、櫛描文壺（2・3・4）・S 字状口縁甕(5･6)･内弯するくの字状口縁ハケメ調整甕(10)･大型のくの字状口縁ハケメ調整台付甕(13)等、東海地方西部に系譜のある土器が多く出土している。とくにパレススタイル壺口縁部は胎土が非在地起源である可能性が高く（ランク D)、生産地は限定できないものの搬入品であることはまず疑えない。弥生時代終末期における土器型式の大まかな並行関係によれば、S 字甕（A 類）・くの字甕・パレススタイル壺の各型式が示す廻間 I 式末期（赤塚他 1997）が当地域の弥生時代終末期前半の間に当たることになる。在地系の土器が希薄だが、本遺構は弥生時代終末期前半のうちに位置づけられよう。

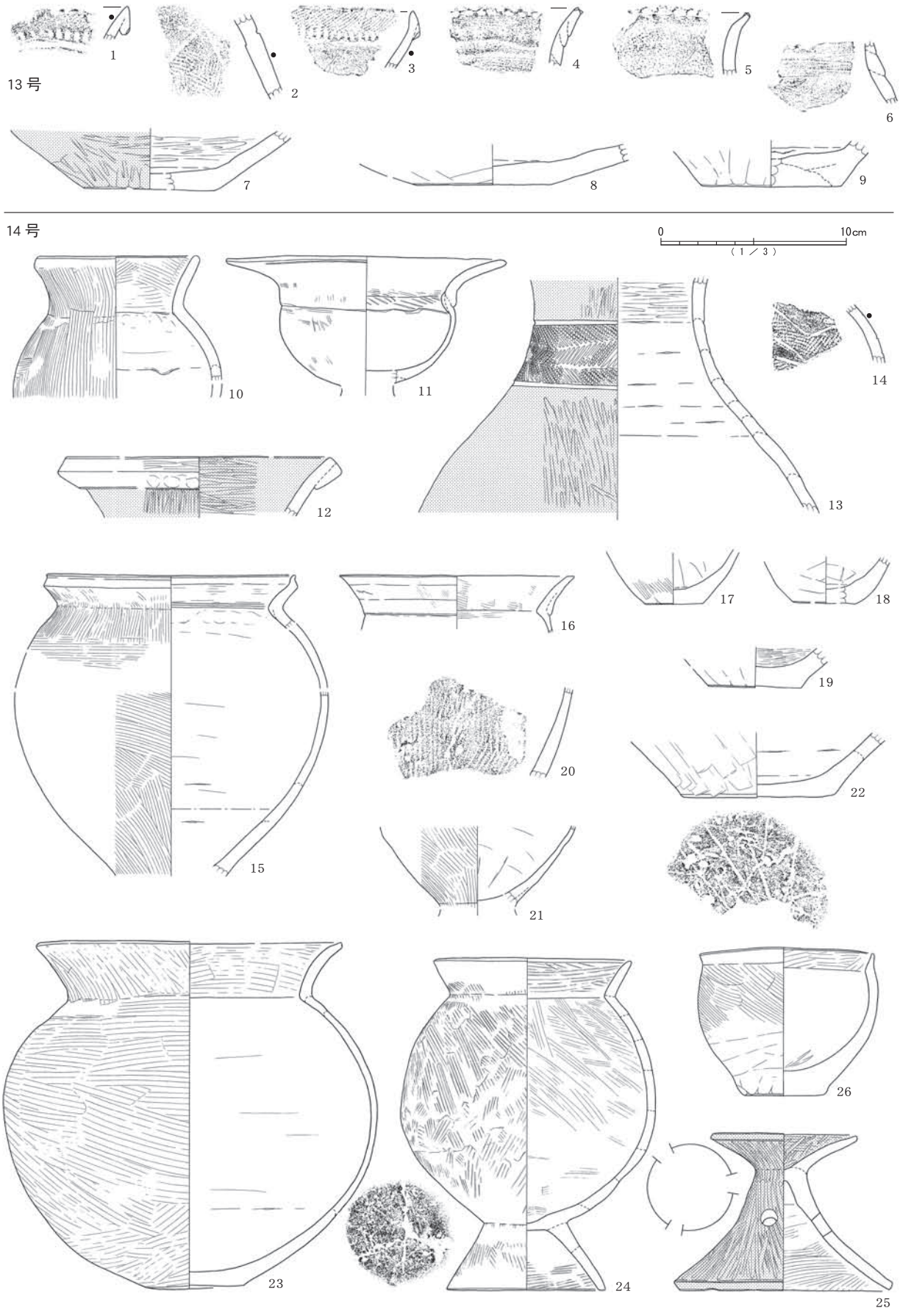
なお、胎土分析の結果、第 29 図 1 のパレススタイル壺と同 4 の櫛描文壺が非在地産胎土の可能性



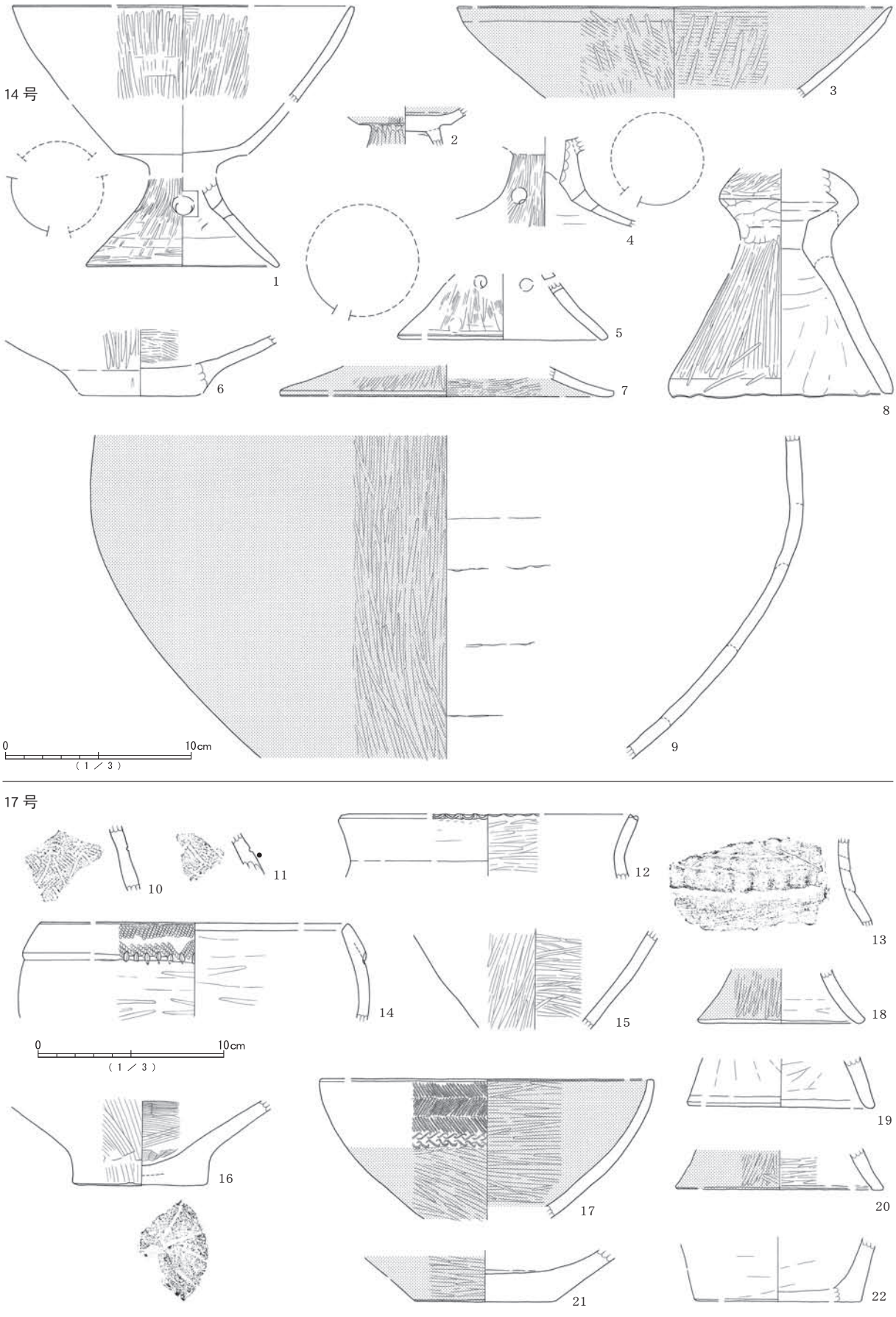
D—D'

1	茶褐色土	6	ローム多量混じりの黒褐色土	11	ローム混じりの褐色土
2	暗褐色土	7	黒褐色土　硬質	12	暗褐色土
3	黒褐色土	8	炭化物混じりの黒褐色土	13	ロームブロック混じりの暗褐色土
4	褐色土	9	黒褐色土　213号覆土	14	ロームブロック多量混じりの黒褐色土
5	暗褐色土	10	ローム少量混じりの茶褐色土		

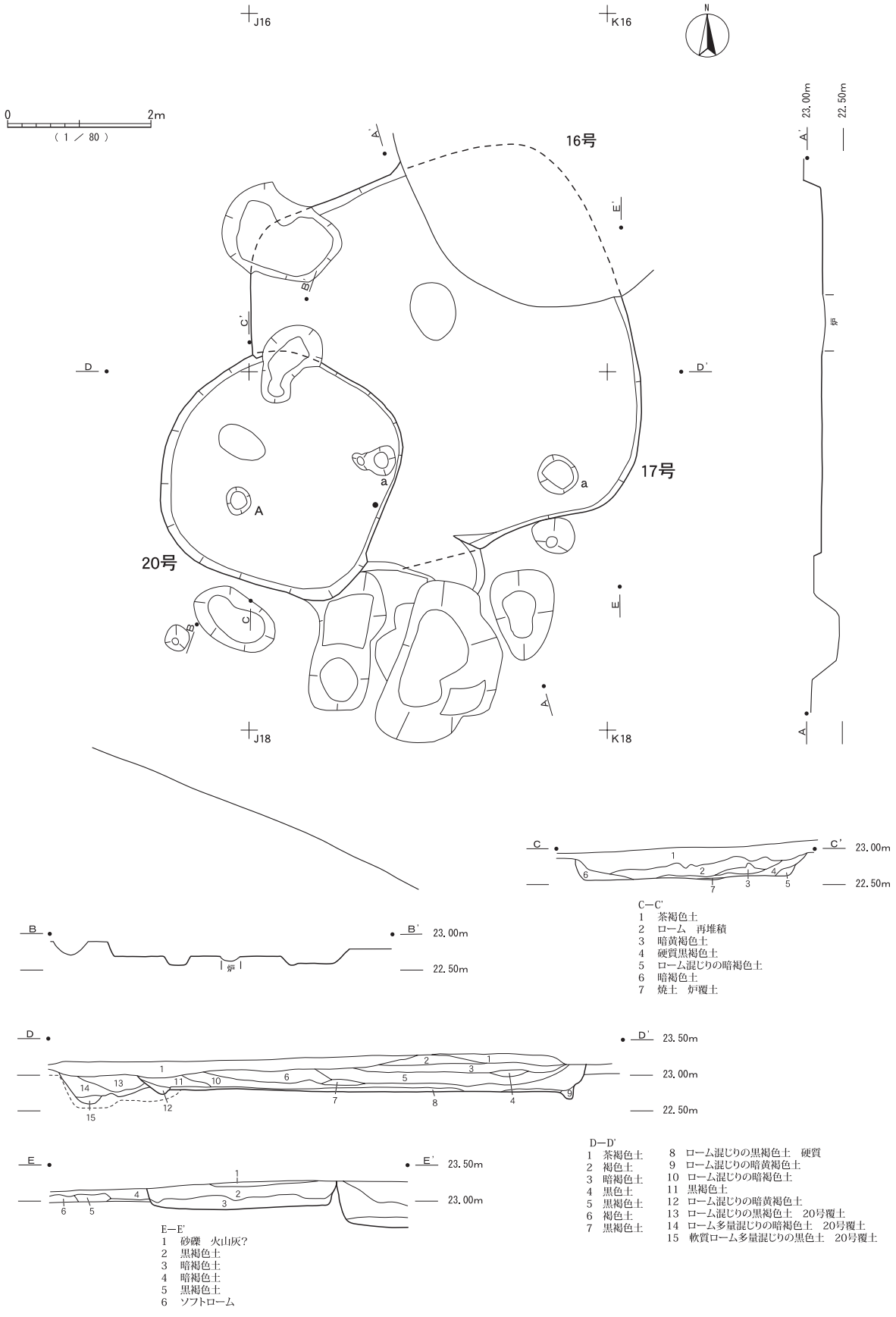
第 31 図　13・14 号竪穴住居跡実測図



第 32 図　13・14 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 33 図　14・17 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 34 図　17・20 号竪穴住居跡実測図

があり（ランク D)、第 30 図 12 内面ハケメの壺が非在地産胎土の可能性が高い（ランク E）と判定されている。甕は対象外であるが、形状からすると、同様に非在地産である可能性が推察される。

13 号竪穴住居跡（第 31・32 図、図版 55）

形状：楕円形　**規模**（長軸×短軸；m）：3.44? × 3.08　**遺存**：3/4

面積（上端・下端・柱間；㎡）：8.41・7.52・－　**竪穴深度**（cm）：15　**主軸方位**：13°

本遺構は 14 号竪穴住居跡に切られる小型の竪穴住居跡である。掘り込みも浅く、主柱穴は見出せない。床面には片寄った位置に炉が検出されている。

遺物は少量の破片で、すべて一括取り上げ遺物である。山形文が 2 帯の単節縄文で構成される壺片（第 32 図 2）を積極的に評価すれば、本遺構は弥生時代後期前半の所産と考えられる。

14 号竪穴住居跡（第 31・32・33 図、図版 5・23・24・55・56・87）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：5.96 × 5.92　**遺存**：4/5

面積（上端・下端・柱間；㎡）：33.31・31.66・10.39　**竪穴深度**（cm）：25　**主軸方位**：272°

柱間比（AB：BC）：0.96　**主柱穴深度**（cm）：A － 56.1　B － 53.5　C － 55.8　D － 69.7

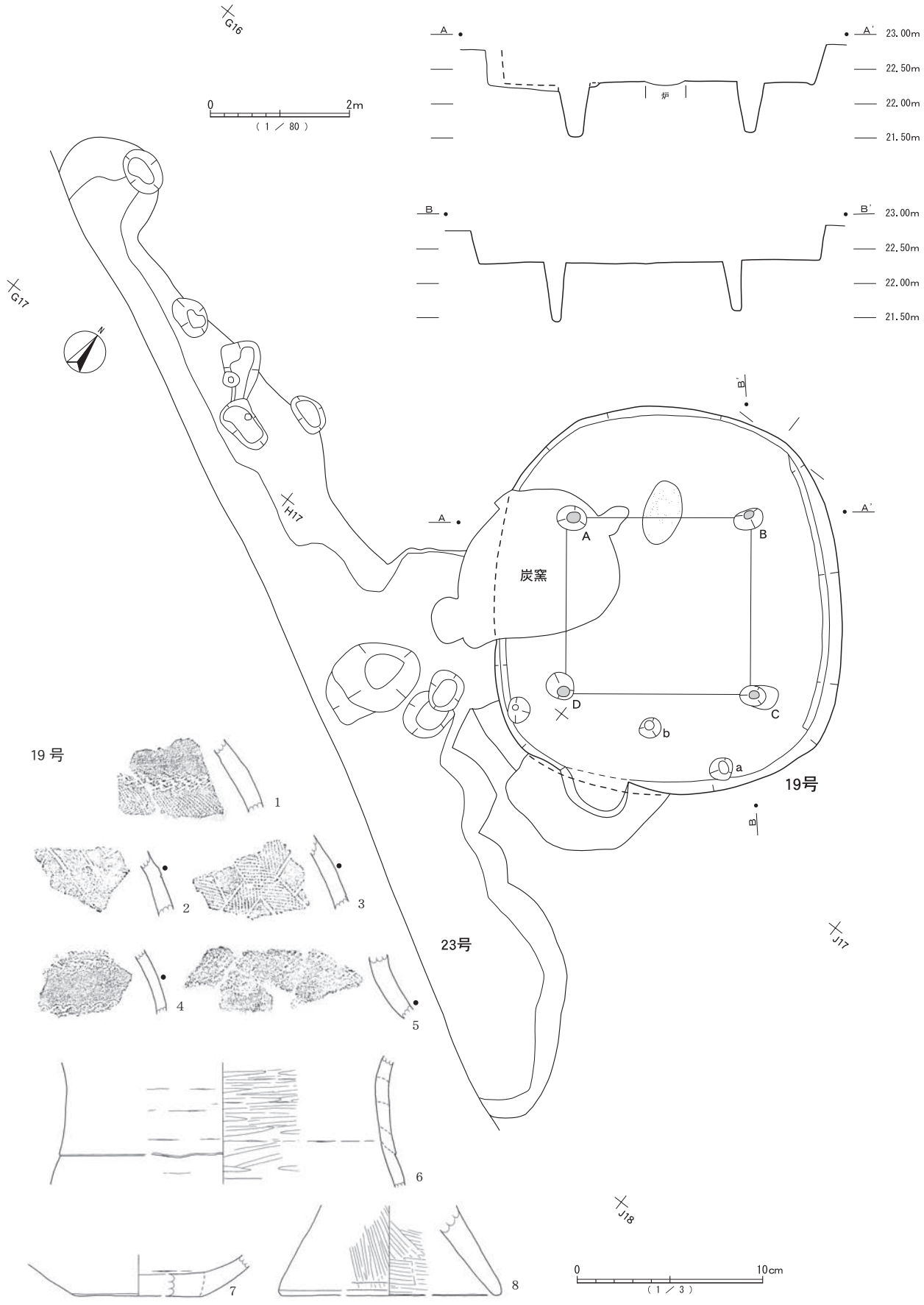
柱間（m）：AB － 3.20　BC － 3.32　CD － 3.20　DA － 3.12

本遺構は、13 号竪穴住居跡を切り、西辺部を 289 号方形周溝墓に切られる竪穴住居跡である。柱穴間の一方に偏した位置に炉を持ち、炉と同じ辺である南西隅に長軸約 70cm の貯蔵穴が認められる。

遺物は、ほぼ床面直上でそれぞれ完形のハケメ調整甕（第 32 図 23）・くの字状口縁ハケメ調整台付甕（24）・小型器台（25）が出土し、若干浮いたレベルからは、椀形杯部から大きく広がる口縁部を持つ高杯（11）が出土した。また、289 号墓東溝が切る位置の近くで、大ぶりの砥石と板状製品が若干高いレベルに並んで検出されている（第 137 図 4・5)。砂岩製の砥石（4）は各長辺が弧状にすり減っており明瞭に砥石としての使用が推定できる。他方、輝石安山岩製の板状石製品（5）は、両広面が平滑に磨られたうえに、一方の広面の中央に小判形の凹みを呈する敲打痕があり、出現期墳丘墓以後の古墳で散見される石臼に類似した外観である。本遺構に伴う可能性も充分あるが、ひとまず微妙な出土位置から 289 号墓関連遺物としておく。

出土土器はいずれも弥生時代終末期に属するものだが、ハケメ調整のくの字状口縁平底甕（第 32 図 23）や小ぶりの素口縁台付甕（24）は通有の在地･周辺地域の土器としてみるとやや違和感が伴う。両者とも明確な頸部屈曲を示し、台付甕は口唇部に刺突を持たないという新出の特徴を示すものの、外来系の高杯（11）や S 字状口縁台付甕 B 類古相以前に類似する甕（15）の存在を考え合わせると、おそらく古墳時代前期までは下らない非在地系譜の形状として考えるべきなのであろう。土層断面が明白に示す切り合い関係を考慮し、289 号墓の帰属時期によって下限を考えるとするならば、やはり本遺構は弥生時代終末期の所産と考えるのが妥当である。

なお、胎土分析の結果、第 32 図 15 の S 字状口縁台付甕および同 23 のくの字状口縁甕と同 26 の鉢が非在地産胎土の可能性があり（ランク D)、同 21 の S 字状口縁台付甕が非在地産胎土の可能性が高い（ランク E）と判定されている。



第 35 図　19 号竪穴住居跡・23 号遺構および出土遺物実測図

17 号竪穴住居跡（第 33・34 図、図版 5・56）

形状：隅円方形　規模（長軸×短軸；m）：5.28? × 5.28　遺存：3/5

面積（上端・下端・柱間；㎡）：25.18・23.67・－　竪穴深度（cm）：22　主軸方位：345°

本遺構は 16 号・20 号竪穴住居跡を切る竪穴住居跡である。規模は一辺 5m を超えるが、主柱穴は検出されていない。炉は若干北寄りに位置し、南東隅寄りには貯蔵穴と思われる穴が認められる。

遺物は少量で、すべて一括取り上げ遺物である。結節文区画の鉢（第 33 図 17）は、山田橋式の特徴を示し、本遺構が弥生時代後期後半に帰属することを示唆するが、他の高杯脚部（18・19・20）や、単節縄文に乗る山形沈線文の壺（10）の存在と竪穴の形状を勘案すると、弥生時代終末期まで幅をとって捉えるのが妥当と思われる。

20 号竪穴住居跡（第 34 図、図版 5）

形状：隅円方形～円形　規模（長軸×短軸；m）：3.24 × 3.16　遺存：略完

面積（上端・下端・柱間；㎡）：8.82・7.79・－　竪穴深度（cm）：12.4　主軸方位：293°

本遺構は 17 号竪穴住居跡に切られる小ぶりの竪穴住居跡である。炉は北西側に寄って検出されているが、主柱穴は認められない。遺物は一括取り上げ遺物もまったく検出されておらず、帰属時期は確定できないが、切り合い関係からすれば本遺構は、弥生時代後期後半以前と考えられる。

19 号竪穴住居跡（第 35 図、図版 5・56）

形状：トラック形～隅円方形　規模（長軸×短軸；m）：5.60 × 5.00?　遺存：4/5

面積（上端・下端・柱間；㎡）：23.78・21.49・6.56　竪穴深度（cm）：57　主軸方位：323°

柱間比（AB：BC）：1.03　主柱穴深度（cm）：A － 65.6　B － 72.8　C － 85.6　D － 68.7

柱間（m）：AB － 2.64　BC － 2.56　CD － 2.64　DA － 2.52

本遺構は 23 号遺構（方形周溝墓か）と接し、現代の炭窯に破壊される竪穴住居跡である。竪穴と主柱穴の掘り込みは深くしっかりしており、床面施設の炉・ハシゴ穴が検出されている。

遺物は少量で、すべて一括取り上げ遺物である。結節文区画の壺（第 35 図 1・4）の存在と、隅円方形に近い竪穴形状からすると、本遺構は弥生後期後半に帰属すると考えられる。

22 号竪穴住居跡（第 36・37 図、図版 6・25・57）

形状：隅円方形　規模（長軸×短軸；m）：5.44 × 5.24　遺存：略完

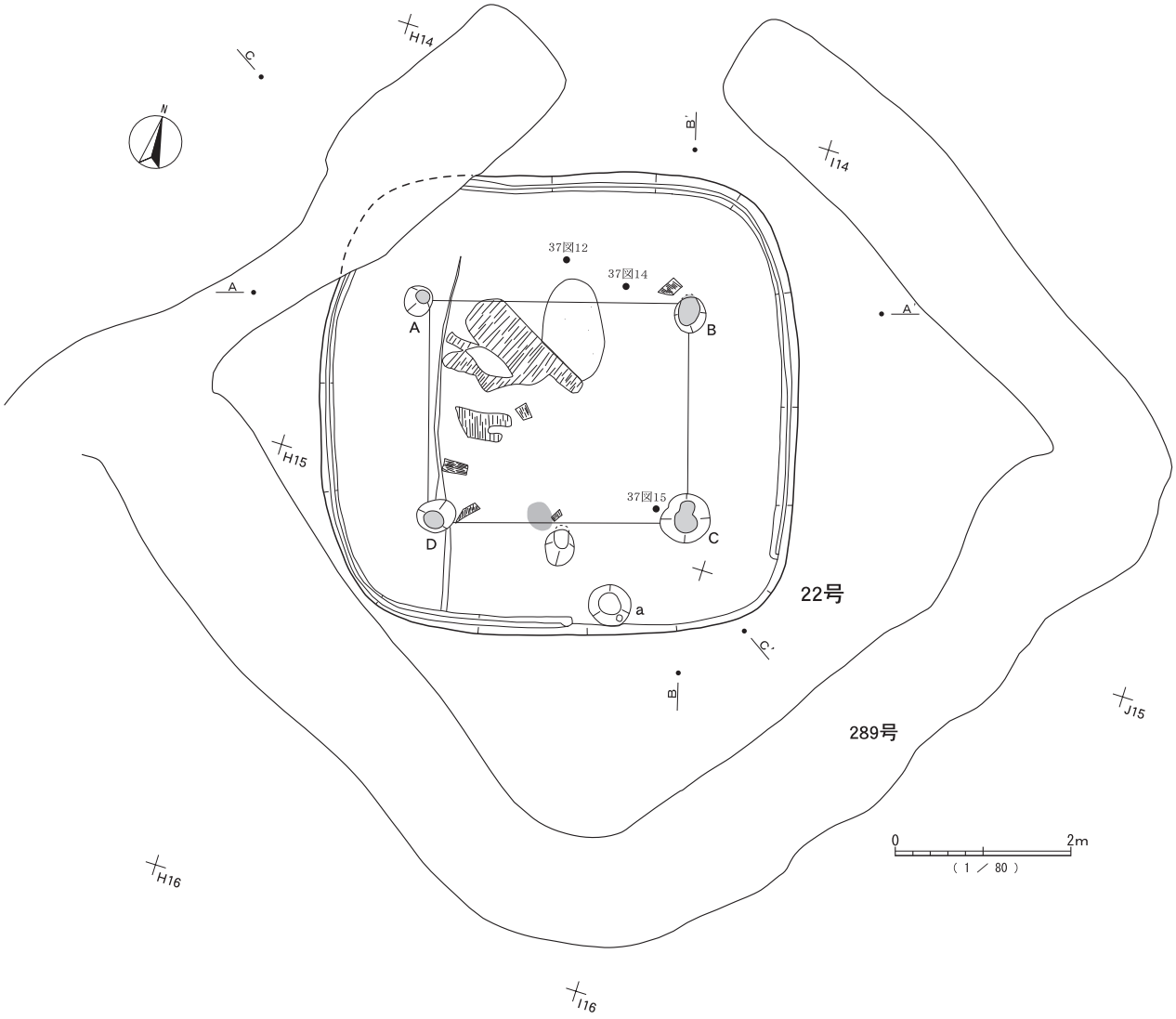
面積（上端・下端・柱間；㎡）：26.01・24.50・7.18　竪穴深度（cm）：34　主軸方位：343°

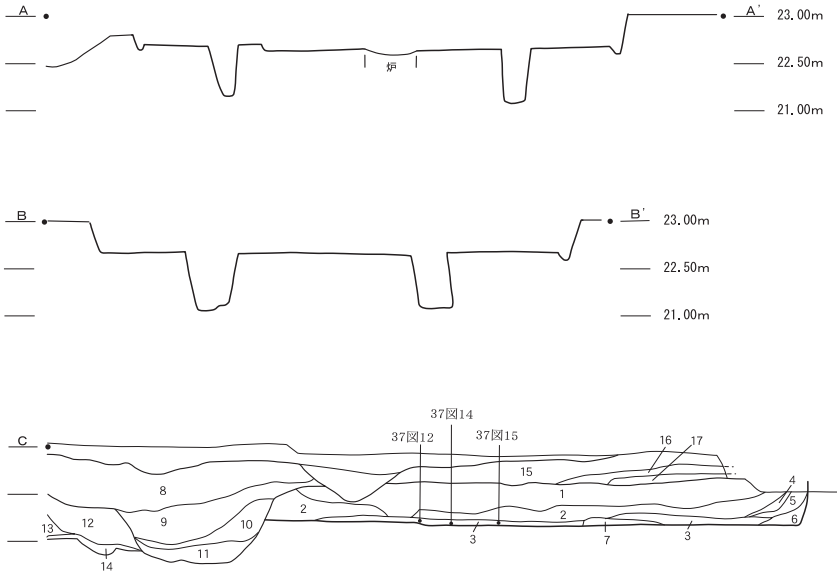
柱間比（AB：BC）：1.19　主柱穴深度（cm）：A － 53.7　B － 58.3　C － 61.1　D － 68.9

柱間（m）：AB － 2.96　BC － 2.48　CD － 2.96　DA － 2.56

本遺構は 289 号方形周溝墓方台部内に位置する竪穴住居跡である。主軸に対して横長の主柱穴配置を持ち、北側柱穴間に炉、反対側にハシゴ穴・貯蔵穴がある。ハシゴ穴は底面が竪穴中央に向かって潜っており斜めに建材が設置されたことを示している。

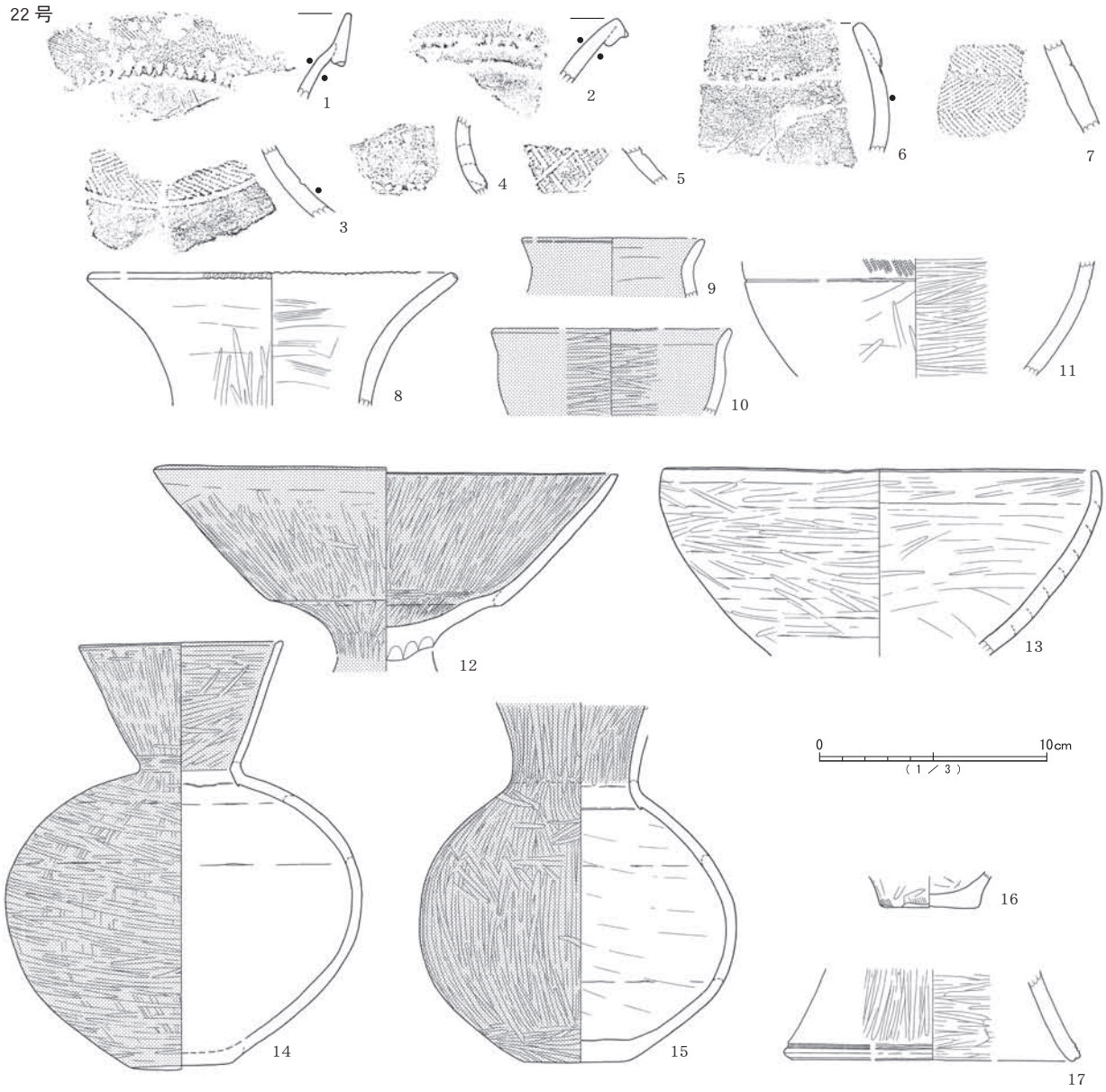
覆土中には炭化物が広がり、一部に焼土が認められることから、本遺構は廃絶時に火を受けた可能性が高い。なお、竪穴形状と床面施設の設定位置・主軸方位が 9 号竪穴住居と類似しているため、連





C—C'
1　黄褐色土粒少量混じりの黒褐色土
2　ロームブロック混じりの暗褐色土
3　ローム粒混じりの黒褐色土
4　黒褐色土
5　暗褐色土
6　明褐色土
7　炭化物混じりの土　土器を上面で検出
8　黒色土　289号西周溝覆土
9　細かいローム粒多量混じりの黒褐色土　289号西周溝覆土か
10　ローム粒少量混じりの黒褐色土　289号西周溝覆土か
11　ロームブロック多量混じりの黒褐色土　289号西周溝覆土か
12　ロームブロック少量混じりの暗褐色土　288号南東周溝覆土か
13　暗褐色土　288号南東周溝覆土
14　ロームブロック混じりの黒褐色土　288号南東周溝覆土
15　茶褐色土　289号墳丘盛土
16　暗茶褐色土　289号墳丘盛土
17　暗黄褐色土　289号墳丘盛土

第 36 図　22 号竪穴住居跡実測図



第 37 図　22 号竪穴住居跡・23 号遺構出土遺物実測図

続的に構築された可能性も考えられる。

主柱穴配置の比率については、弥生時代後期の竪穴住居跡の中に類似例があり、在地的な建築技法・企画の系統が存在したとも考えられる。

遺物は、289 号墓の墳丘盛土に保護されたためか、遺存状態の良い土器が 3 点得られている。杯部内底面がくぼみ、外面に稜を持つ非在地的な高杯（第 37 図 12）と直口壺 2 点（14・15）である。いずれも床面直上で検出されており、本遺構の帰属時期を示すものである。高杯（12）は非在地系譜の形状で、弥生時代終末期中葉以降に盛行する東海西部系の高杯と比較して、杯部底面が一度外反してから口縁部が広がる特徴において古相が看取できる。壺（14）についても屈曲の明確な頸部は一見新しい特徴であるが、ゆるい頸部の別個体（15）の伴うことからすれば、口頸部と体部のバランスが古墳時代前期の直口壺と異なる点を重視すべきである。これら土器に見える特徴に加え、竪穴住居跡の形状と貯蔵穴の位置、288 号墓との位置関係、289 号墓との切り合い関係を勘案すると本遺構は弥生時代終末期前半に位置づけられよう。

なお、胎土分析の結果、13 の高杯は在地産胎土の可能性がある（ランク B）と判定されている。

41 号竪穴住居跡（第 38・39・40 図、図版 62・86）

形状：トラック形　**規模**（長軸×短軸；m）：7.64? × 6.86?　**遺存**：2/3

面積（上端・下端・柱間；㎡）：42.65・40.11・13.18　**竪穴深度**（cm）：51　**主軸方位**：318°

柱間比（AB：BC）：1.19　**主柱穴深度**（cm）：A － 75.0　B － 88.7　C － 68.1

柱間（m）：AB － 4.00　BC － 3.36　CD － 4.00?　DA － 3.36?

本遺構は 42 号竪穴住居跡と切り合い、290 号方形周溝墓に切られる竪穴住居跡である。平面形にして三分の一程が調査区外に出ている。掘り込みは竪穴・柱穴ともに深く、主柱穴 3 箇所と柱間に炉を検出している。

遺物は炉内から､沈線文区画と山形文のある大型壺（第 40 図 6）と工具ナデで仕上げられる甕（10）が出土している。これらと、一括取り上げ遺物に見える、口縁外面肥厚部の厚い壺（1・3）や口縁内面を 1 段だけ肥厚する甕（2）の存在を考え合わせると、本遺構は弥生時代後期前半に属すると考えられる。

42 号竪穴住居跡（第 38・39・41 図、図版 7・62・78）

形状：方形～隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：5.48? × 4.80　**遺存**：1/2

面積（上端・下端・柱間；㎡）：24.82・23.30・6.22　**竪穴深度**（cm）：39　**主軸方位**：11°

柱間比（AB：BC）：0.78　**主柱穴深度**（cm）：A － 68.9　B － 53.0　C － 67.8　D － 63.0

柱間（m）：AB － 2.12　BC － 2.72　CD － 2.52　DA － 2.60

本遺構は、21 号・41 号・43 号竪穴住居跡を切り、290 号方形周溝墓に切られる竪穴住居跡である。主柱穴は 4 箇所検出されているが、南側は 290 号周溝により破壊されている。覆土中には焼土ブロックが認められ、本遺構の廃絶時に火の伴ったことがわかる。炉は北側柱穴間に位置する。

遺物は少量である。高杯杯部（第 41 図 2）と段を持つ甕（3・5）が平面図中ドットのいずれかと対応する。これらと一括取り上げ遺物の高杯（6）の様相からすると、本遺構は弥生時代終末期に帰

属する可能性が高い。

43 号竪穴住居跡（第 38・39・41 図、図版 7・62）

形状：隅円方形～楕円形　**規模**（長軸×短軸；m）：3.00? × 3.00　**遺存**：1/2

面積（上端・下端・柱間；㎡）：7.54・6.81・－　**竪穴深度**（cm）：19　**主軸方位**：316°

本遺構は 290 号方形周溝墓方台部内にあり、42 号竪穴住居跡に切られる小型の竪穴住居跡である。主柱穴は認められず、炉が床面北西に偏った位置で検出されている。

遺物は僅少で、一括取り上げ遺物の鉢と甕の小片（第 41 図 8･9）のみである。本遺構の帰属時期は、切り合い関係と竪穴の形状から弥生時代後期と捉えられる。

45 号竪穴住居跡（第 38・39・41 図、図版 8・62）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：3.88 × 3.68　**遺存**：完存

面積（上端・下端・柱間；㎡）：12.60・11.30・4.03　**竪穴深度**（cm）：27　**主軸方位**：297°

柱間比（AB：BC）：－　**主柱穴深度**（cm）：A － 27.4　B － 13.6

柱間（m）：AB － 1.72

本遺構は 290 号方形周溝墓方台部内に位置する竪穴住居跡である。明確な主柱穴は認められなかったが、南西辺に並行した穴を柱穴として捉えた。床面には北西寄りに炉、その反対側にハシゴ穴・貯蔵穴と見られる穴が検出されている。

遺物は僅少で、一括取り上げ遺物の段部を有する甕（第 41 図 10）が本遺構の帰属時期を示唆するのみである。竪穴の形状を勘案すると、本遺構は弥生時代後期後半から終末期の所産である可能性が高い。

21 号竪穴住居跡（第 38・39・41 図、図版 5・25・56・78）

形状：トラック形　**規模**（長軸×短軸；m）：9.00 × 7.84　**遺存**：4/5

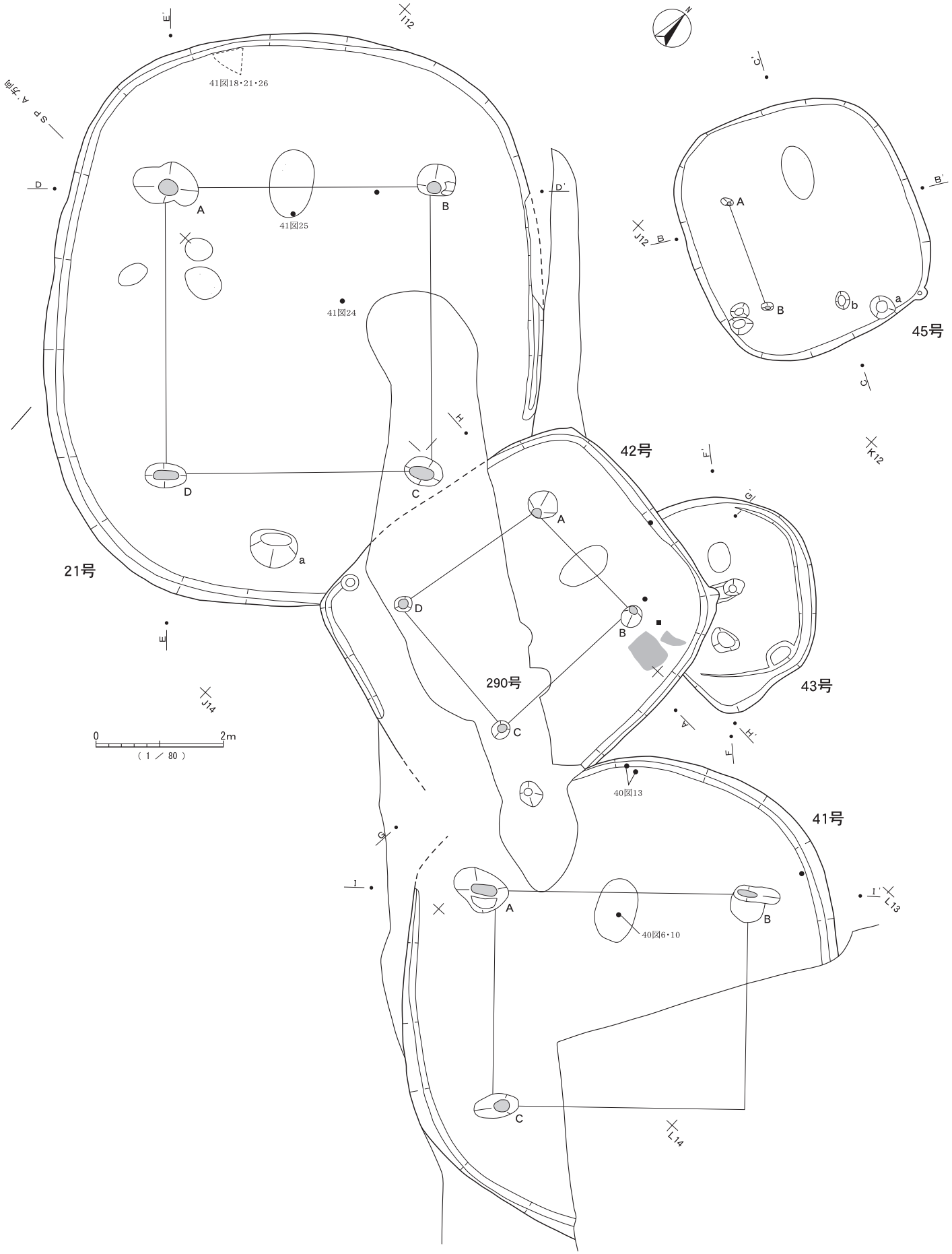
面積（上端・下端・柱間；㎡）：60.06・57.67・18.62　**竪穴深度**（cm）：42　**主軸方位**：317°

柱間比（AB：BC）：0.93　**主柱穴深度**（cm）：A － 118.0　B － 104.0　C － 97.8　D － 110.3

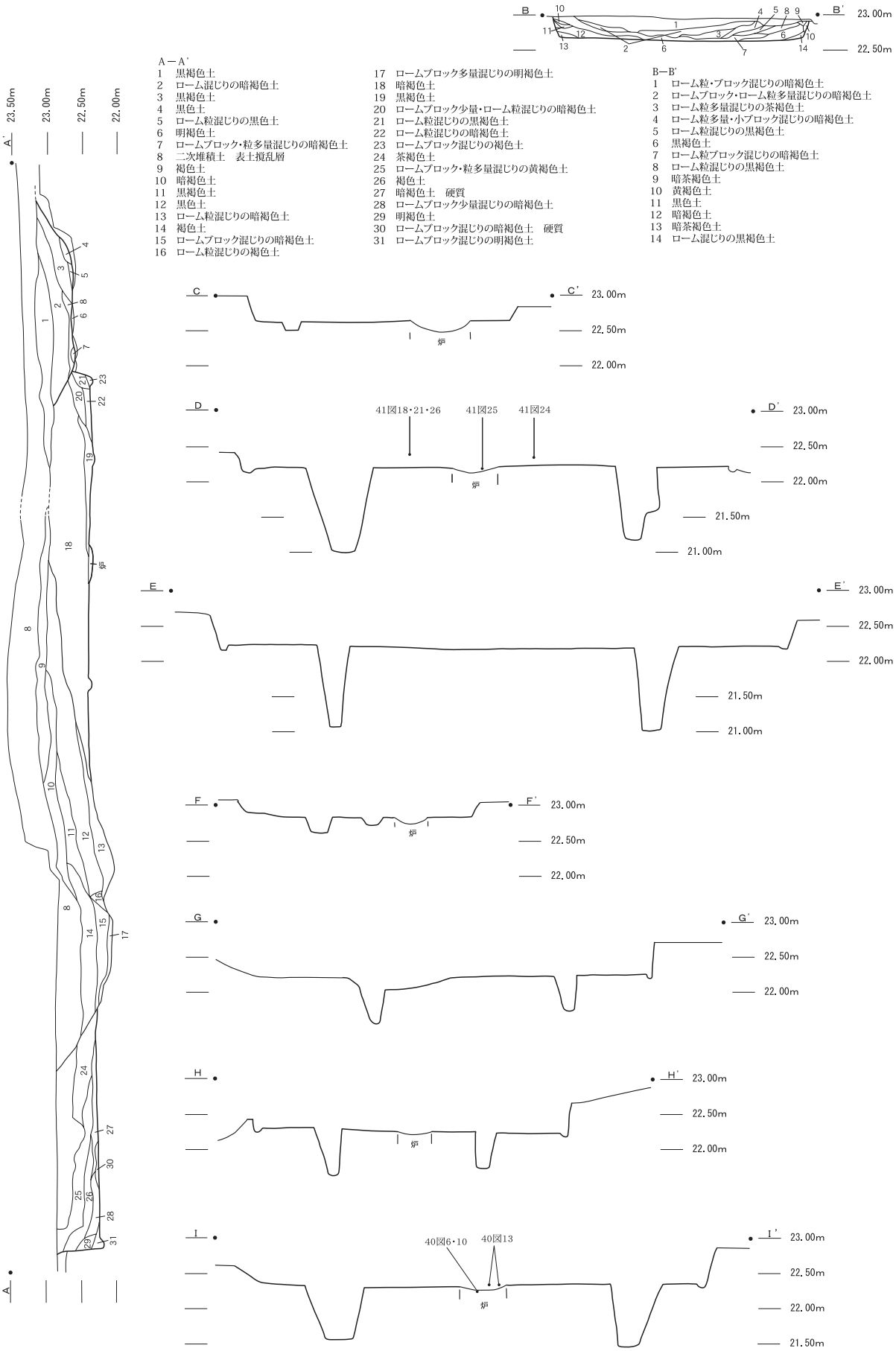
柱間（m）：AB － 4.20　BC － 4.52　CD － 4.20　DA － 4.52

本遺構は 42 号竪穴住居跡と切り合い、288 号・290 号方形周溝墓に切られる竪穴住居跡である。主柱穴の掘り込みは 1m 前後としっかりしており、竪穴自体も 40cm 以上が遺存している。調査区内では 1 号竪穴住居跡に次ぐ規模である。短軸柱穴間に炉があり、反対側に主軸に対して横長のハシゴ穴がある。出入り口施設に板状の建材が用いられたことを示唆する。

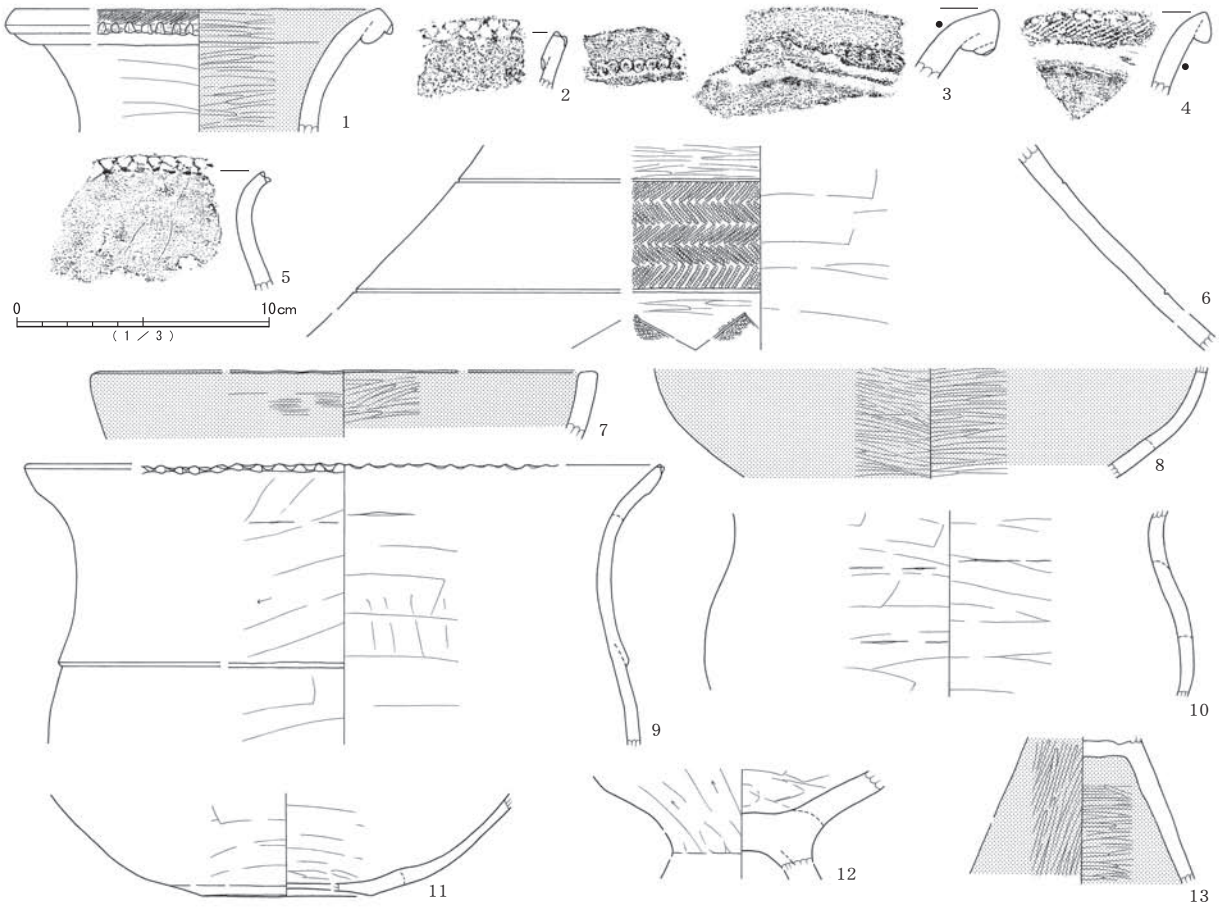
遺物は 3 箇所でドット取り上げされているが、このうち、頸部がくの字に屈曲する壺（第 41 図 24）とハケメ後にヘラミガキで仕上げる壺（25）は、290 号方形周溝墓からの混入品と思われる。また、一括取り上げの無文壺（17）とくの字状口縁の甕（29）等も同様である。残る、赤彩された壺（21･26）と厚みのある口縁肥厚部を持つ鉢（16）が本遺構の帰属時期を示す可能性が高い。竪穴住居跡のつくりと、一括取り上げ遺物中の沈線文区画の壺（18・19）を勘案すると、本遺構は弥生時代後期前半の所産と考えられる。



第 38 図　21・41・42・43・45 号竪穴住居跡実測図



第 39 図　21・41・42・43・45 号竪穴住居跡実測図



第 40 図　41 号竪穴住居跡出土遺物実測図

26 号竪穴住居跡（第 42・43 図、図版 57・81）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.56 × 4.08?　**遺存**：1/2

面積（上端・下端・柱間；㎡）：16.61・14.54・－　**竪穴深度**（cm）：40　**主軸方位**：304°

本遺構は 25 号竪穴住居跡を切り、288 号方形周溝墓に切られる竪穴住居跡である。主柱穴は認められず、床面北西側に炉、反対側にハシゴ穴・貯蔵穴と見られる穴が検出されている。

遺物はすべて一括取り上げ遺物である。弥生時代終末期の土器は 288 号墓に関連するものであろう。結節文区画を持つ壺・鉢（第 43 図 4・9）の存在を積極的に評価すれば、288 号墓との切り合い関係を合わせて、本遺構は弥生時代後期後半に帰属すると考えられる。

25 号竪穴住居跡（第 42・43・44 図、図版 6・57）

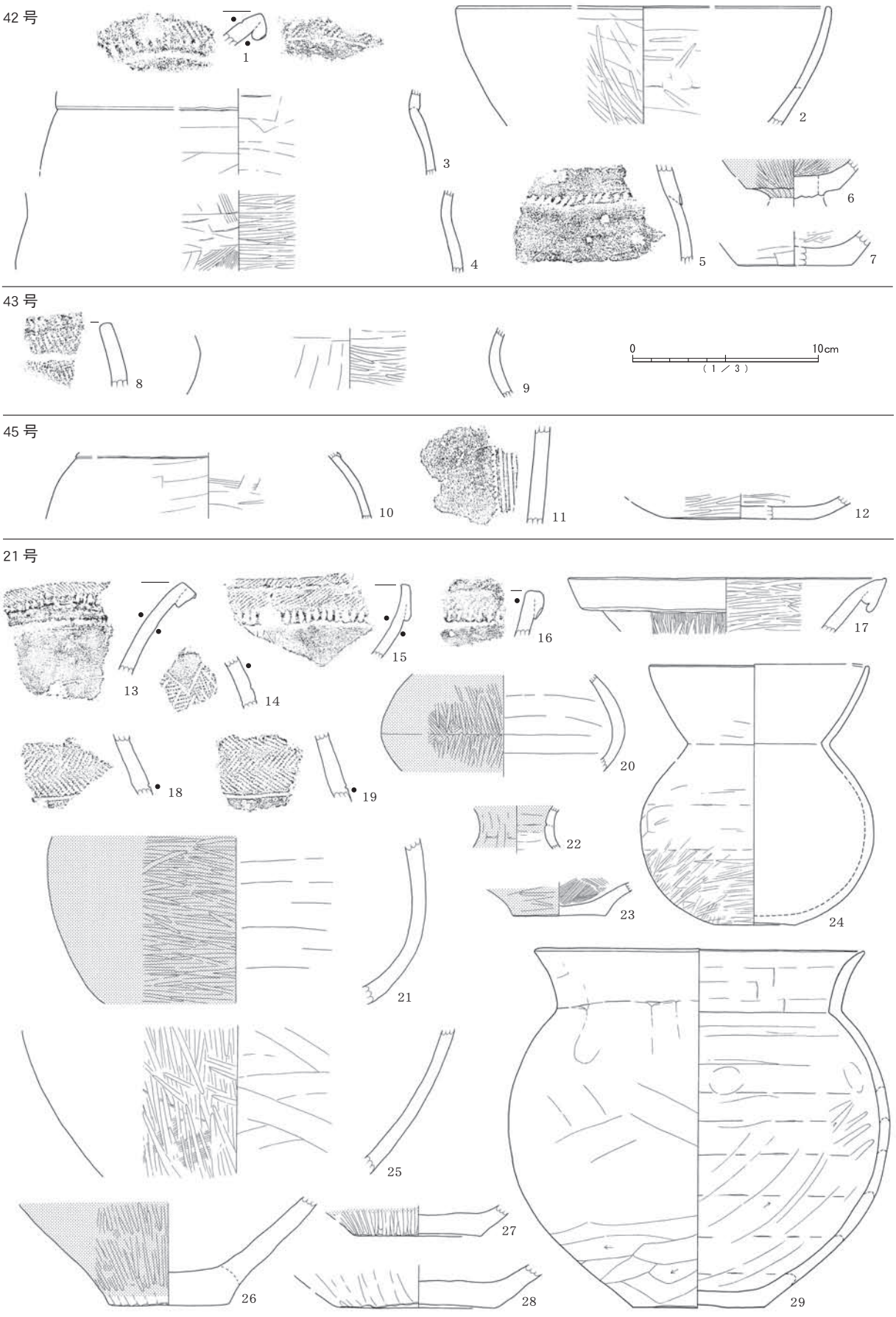
形状：トラック形　**規模**（長軸×短軸；m）：6.76? × 5.04　**遺存**：4/5

面積（上端・下端・柱間；㎡）：28.54・26.06・7.05　**竪穴深度**（cm）：8　**主軸方位**：325°

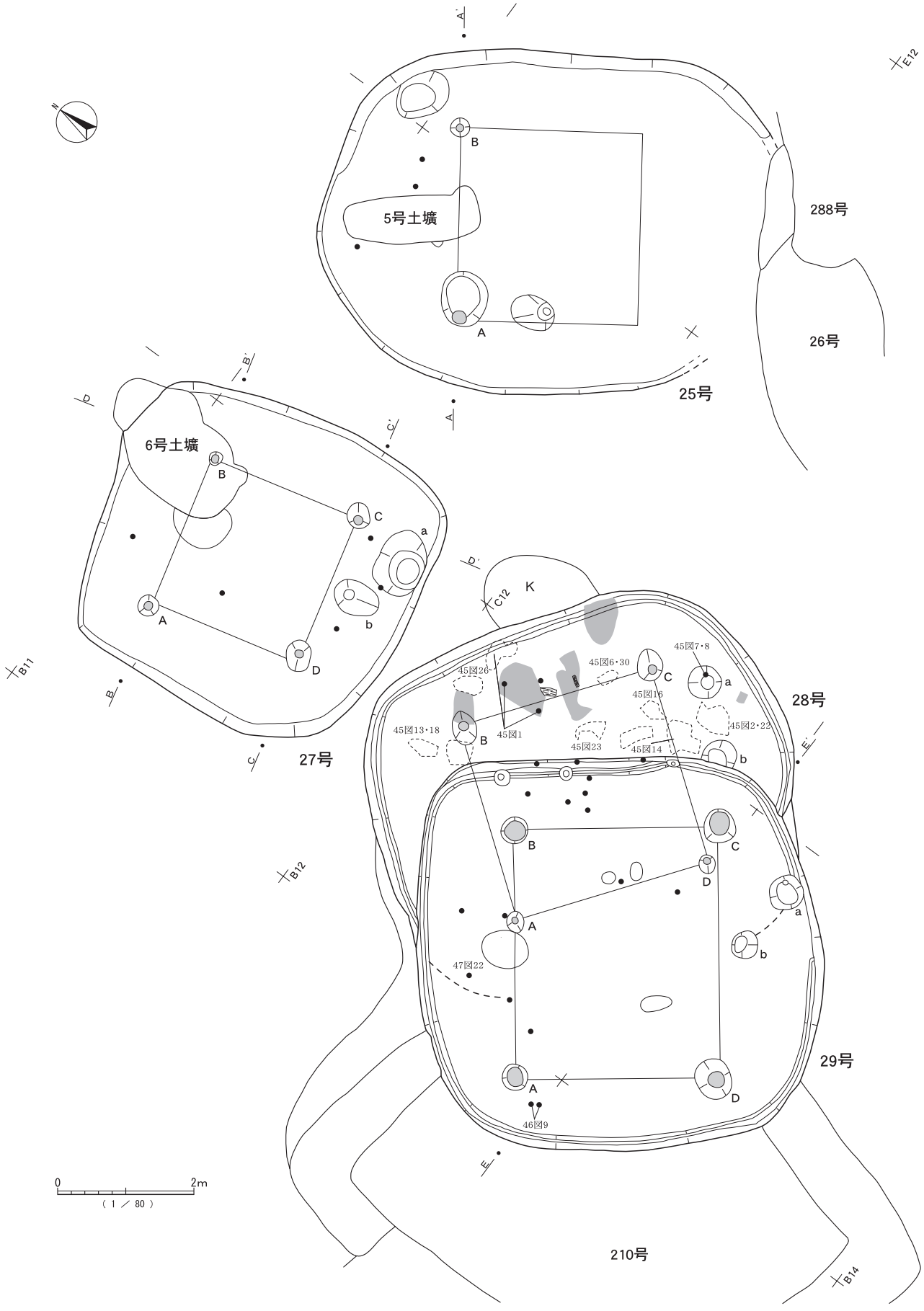
柱間比（AB：BC）：1.06　**主柱穴深度**（cm）：A － 53.8　B － 88.0

柱間（m）：AB － 2.84　BC － 2.68?　CD － 2.80?　DA － 2.64

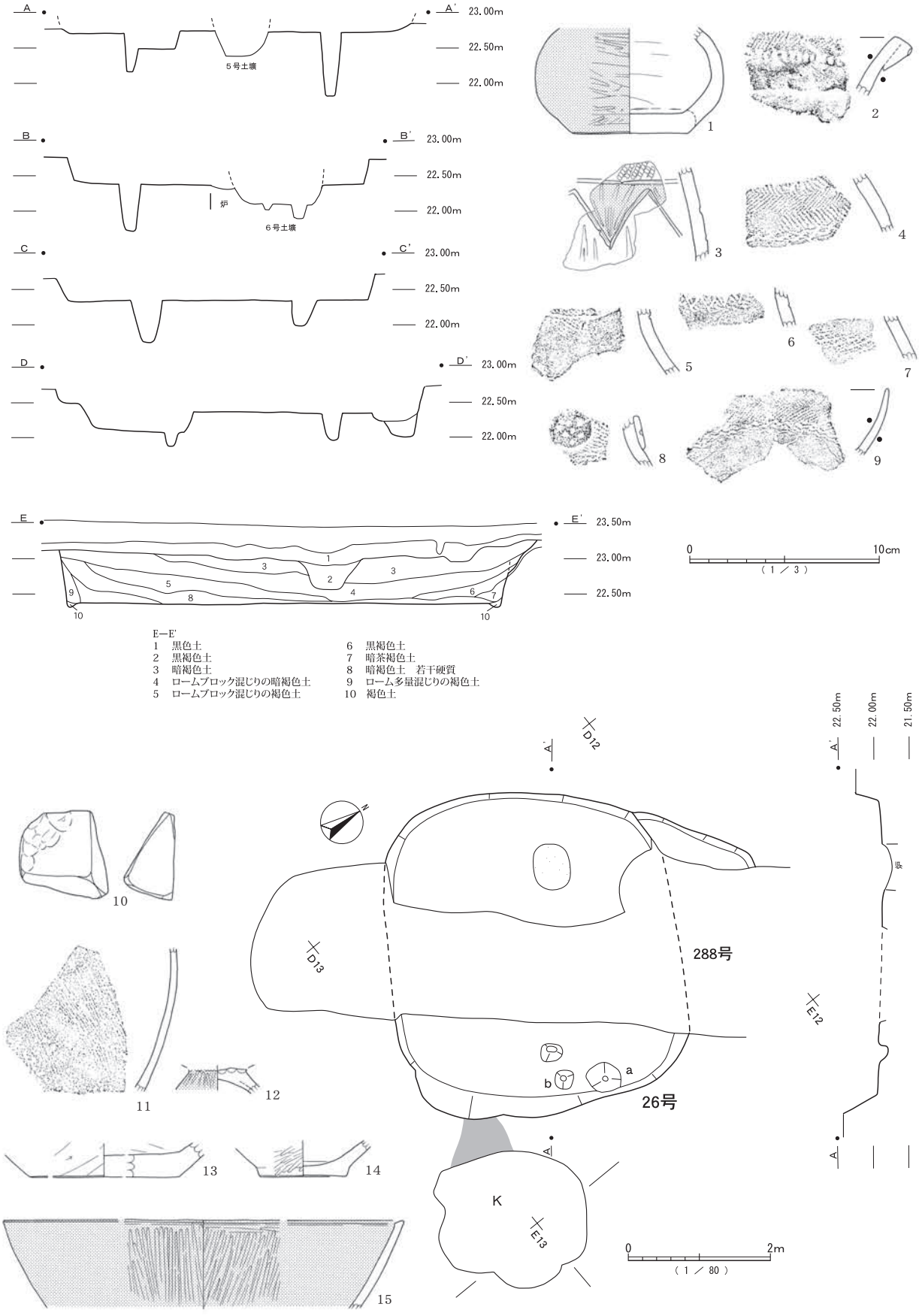
本遺構は、26 号竪穴住居跡・5 号土壙・288 号方形周溝墓と切り合う竪穴住居跡である。竪穴の掘り込みは 10cm にも満たず、遺存状態は良くない。主柱穴は北側に 2 箇所検出されており、炉は 5 号土壙に破壊された残欠が認められる。



第 41 図　21・42・43・45 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 42 図　25・27・28・29 号竪穴住居跡実測図



第 43 図　26 号竪穴住居跡および出土遺物実測図

遺物はすべて一括取り上げ遺物で、各時期の混在が認められる。弥生時代終末期の鴨居上ノ台式が多いのは 288 号墓からの混入と見るのが自然である。沈線文区画の壺（5）もあるが、結節文区画の鉢・壺（第 44 図 3・6）を重視して、本遺構は弥生時代後期に帰属し、その後半にあたる可能性があると捉えておきたい。

27 号竪穴住居跡（第 42 ～ 44 図、図版 26・57・58・78）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.80 × 4.56　**遺存**：略完

面積（上端・下端・柱間；㎡）：20.12・17.90・5.18　**竪穴深度**（cm）：30　**主軸方位**：346°

柱間比（AB：BC）：0.98　**主柱穴深度**（cm）：A － 66.2　B － 47.7　C － 37.8　D － 60.1

柱間（m）：AB － 2.28　BC － 2.32　CD － 2.28　DA － 2.28

本遺構は調査区西端に位置する竪穴住居跡である。一角を 6 号土壙に切られるが、主柱穴・炉・ハシゴ穴・貯蔵穴が揃って検出されている。

遺物は、平面図にドットが記録されているものの、遺物との対応が不明である。ただし、遺物注記から判断すると、小型土器と中実部の多い脚柱の高杯（第 44 図 33・36）はいずれかのドットと対応する可能性が高い。土器の他には、本来は別の弥生時代遺構に由来すると思われる、砂岩製太型蛤刃石斧の先端部破片（第 154 図 11）が 1 点出土している。なお、第 44 図 34 は全体形不明の個体で、手焙の覆部片である可能性がある。

小型土器および高杯に加えて、一括取り上げ遺物の台付甕やハケメの甕、棒状工具による段部刺突の甕（同 42・31・32、29・30）の存在、そして竪穴形状を考慮すると、本遺構は弥生時代終末期から古墳時代前期の所産と考えられる。

28 号竪穴住居跡（第 42・43・45 図、図版 6・26・27・58・81・86・88）

形状：トラック形～隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：6.20 × 5.40　**遺存**：2/5

面積（上端・下端・柱間；㎡）：30.17・28.40・8.62　**竪穴深度**（cm）：不明　**主軸方位**：308°

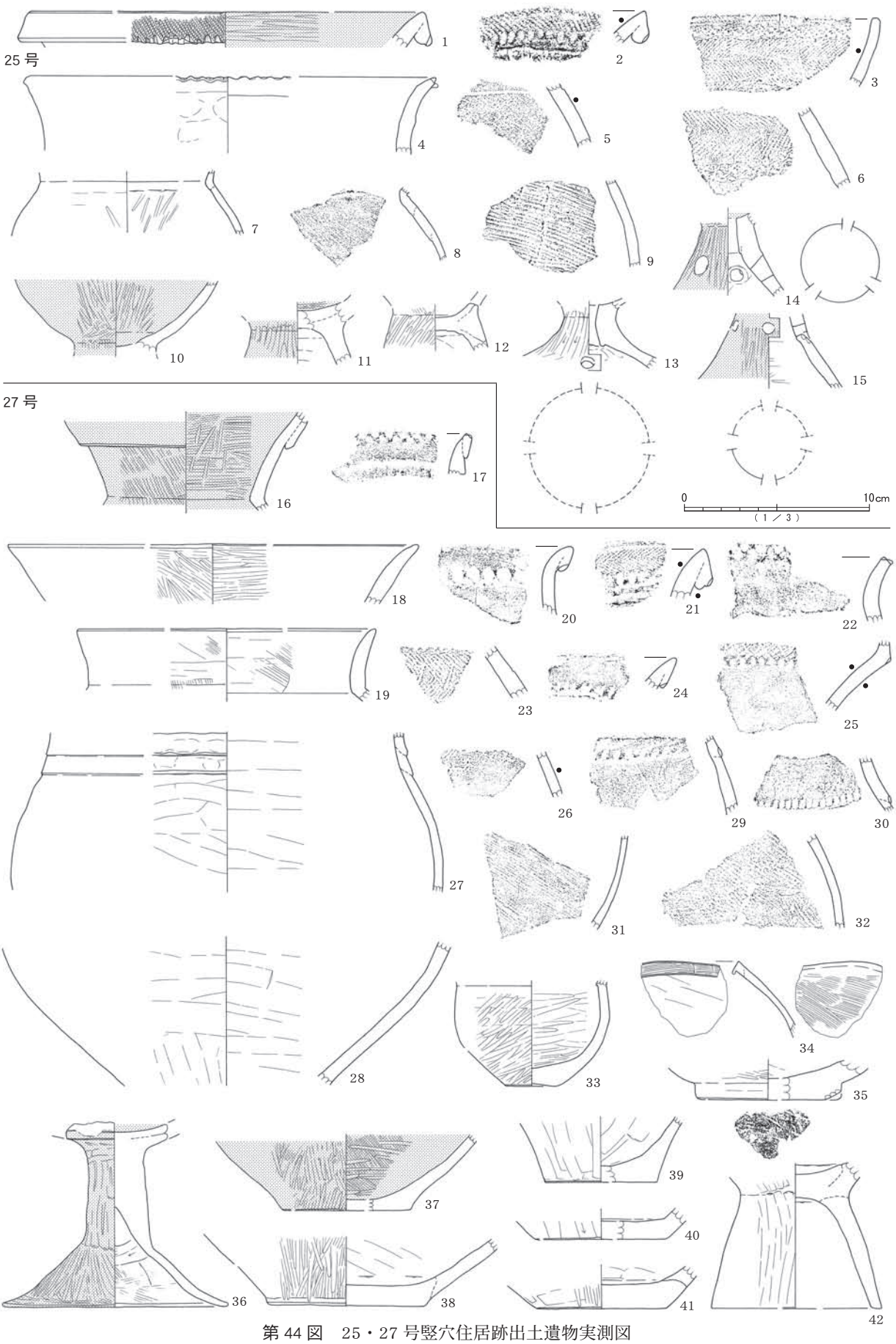
柱間比（AB：BC）：0.99　**主柱穴深度**（cm）：不明

柱間（m）：AB － 2.96　BC － 3.00　CD － 2.96　DA － 2.96

本遺構は半分以上を 29 号竪穴住居跡に破壊される竪穴住居跡である。主柱穴位置は明確だが、炉は遺存していない。覆土中には焼土・炭化材が多く認められ、本遺構が廃絶時に火を受けたことを示している。

遺物は少なからず出土しているものの、標高の記録が無く、検出レベルが不明である。しかし、平面的な出土状況を見るかぎり、いずれも床面近くに伴った同時期の遺物と考えて支障ないと思われる。大型の壺は、多段の結節文横帯を持ち、その下に下側を 2 本描き沈線で横帯と続けて画する山形の結節文が描かれ、頂点に円形浮文が施される（第 45 図 1）。この久ヶ原式に特徴的な山形文への傾斜を示す壺の他にも、宮ノ台式の最新相を示す、口縁部内外面を 1 段肥厚する甕（18・19・21）や、刳り込みのある底部を持つ木器を模したような鉢（13）等が見られ、本遺構が弥生時代中期末に属することを示している。

胎土分析の結果、第 45 図 26 の甑の胎土が非在地的（ランク D）と判定されている。久ヶ原式以降



第 44 図　25・27 号竪穴住居跡出土遺物実測図

とは異なる砂っぽい胎土で、宮ノ台式には一般的な胎土に見受けられるが、その点で判定に偏りがあらわれたものだろうか。

29 号竪穴住居跡（第 42・43・46・47 図、図版 6・27・28・58・59・78・79・86）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：5.96 × 5.76　**遺存**：完存

面積（上端・下端・柱間；㎡）：30.28・28.93・10.83　**竪穴深度**（cm）：88　**主軸方位**：323°

柱間比（AB：BC）：1.24　**主柱穴深度**（cm）：不明

柱間（m）：AB － 3.68　BC － 2.96　CD － 3.72　DA － 3.00

本遺構は 28 号竪穴住居跡を切り、210 号方形周溝状遺構に切られる竪穴住居跡である。床面には主柱穴 4 箇所があり、西側柱間に炉、反対側にハシゴ穴・貯蔵穴が認められる。床面には火を受けたような痕跡が散在するが、炉としての機能を果たすものではなかったようである。

遺物は、一部が平面図ドットと対応するが、28 号と同じく出土標高が不明である。宮ノ台式から鴨居上ノ台式までの破片を含むが、山田橋式の結節文区画の壺（第 46 図 9）と輪積痕と段部を持つ甕（22）に加えて、底部輪台技法によると見られる小型土器（14）・縄文のない広口壺（20）の存在から判断すると、本遺構は弥生時代後期後半から終末期にかけての時期を与えるのが妥当である。なお、須恵器壺（第 47 図 27）は切り合う 210 号方形周溝状遺構に伴う遺物の可能性が高い。

胎土分析の結果、第 47 図 11 の鉢は在地産胎土の可能性がある（ランク B）と判定されている。

30 号竪穴住居跡（第 48・49 図、図版 6・59・78・80・86）

形状：トラック形～隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：7.68 × 7.36　**遺存**：完存

面積（上端・下端・柱間；㎡）：47.98・44.92・15.66　**竪穴深度**（cm）：42　**主軸方位**：309°

柱間比（AB：BC）：1.19　**主柱穴深度**（cm）：A － 52.3　B － 66.6　C － 63.3　D － 64.1

柱間（m）：AB － 4.32　BC － 3.64　CD － 4.32　DA － 3.68

本遺構は 71 号竪穴住居跡を切り、288 号方形周溝墓に切られる竪穴住居跡である。主柱穴は 4 箇所あり、竪穴の長軸に対して横長に配置される点が特徴的である。床面北西部柱穴間に炉があり、反対側にハシゴ穴が検出されている。なお、288 号墓南西溝による切り込みはほぼ床面レベルに達しており、そこから土器多数が出土している。

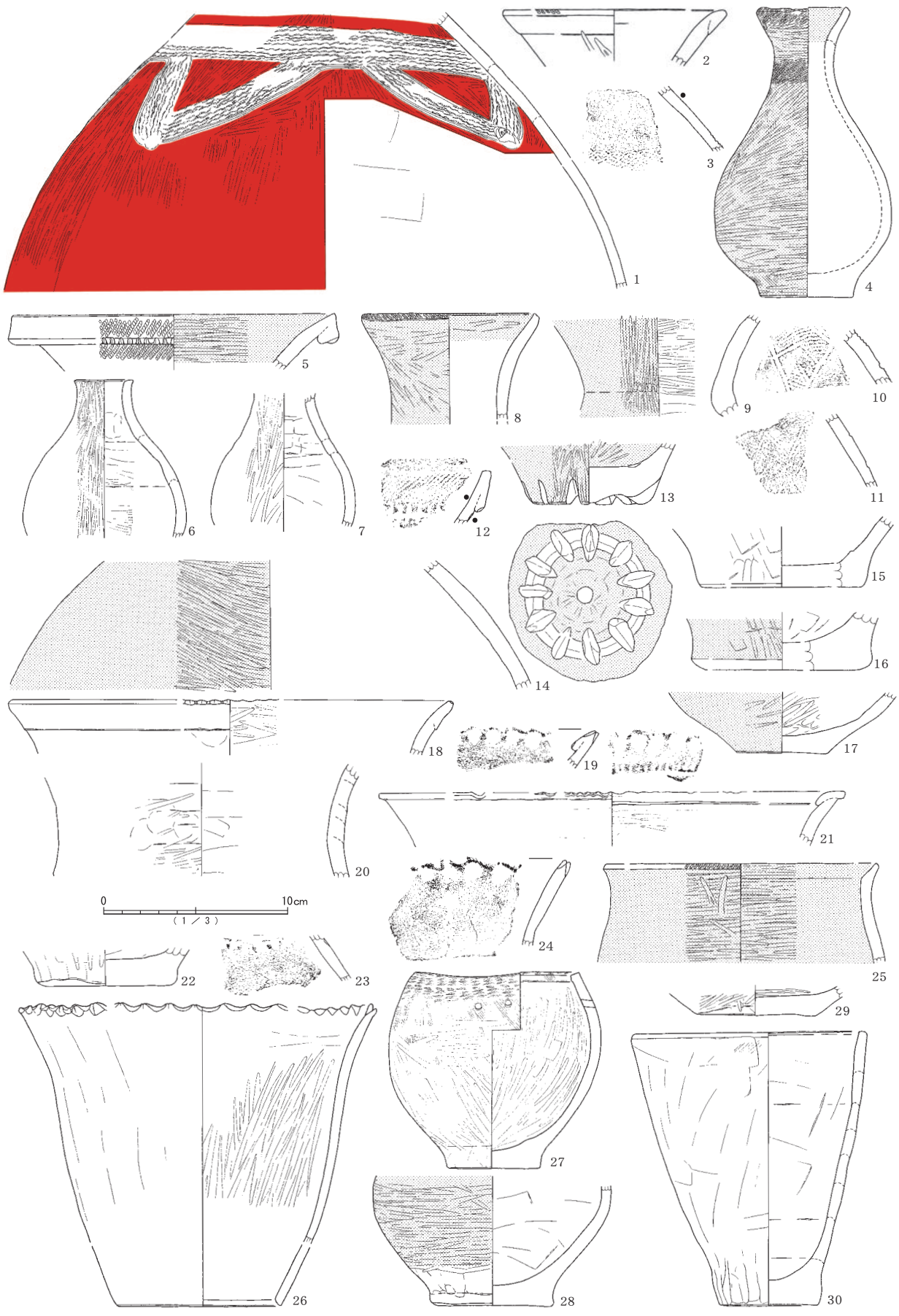
遺物はすべて一括取り上げ遺物である。弥生時代終末期以降の特徴を示す資料が多いが、これらは 288 号墓に由来する可能性が高い。小片ながらも、結節文区画の壺（第 49 図 1・2）が存在する点を評価し、また弥生時代終末期前半の 288 号墓が重複して構築されている事実を勘案すると、本遺構は弥生時代後期後半の所産と考えられる。

70 号竪穴住居跡（第 48 図、図版 10）

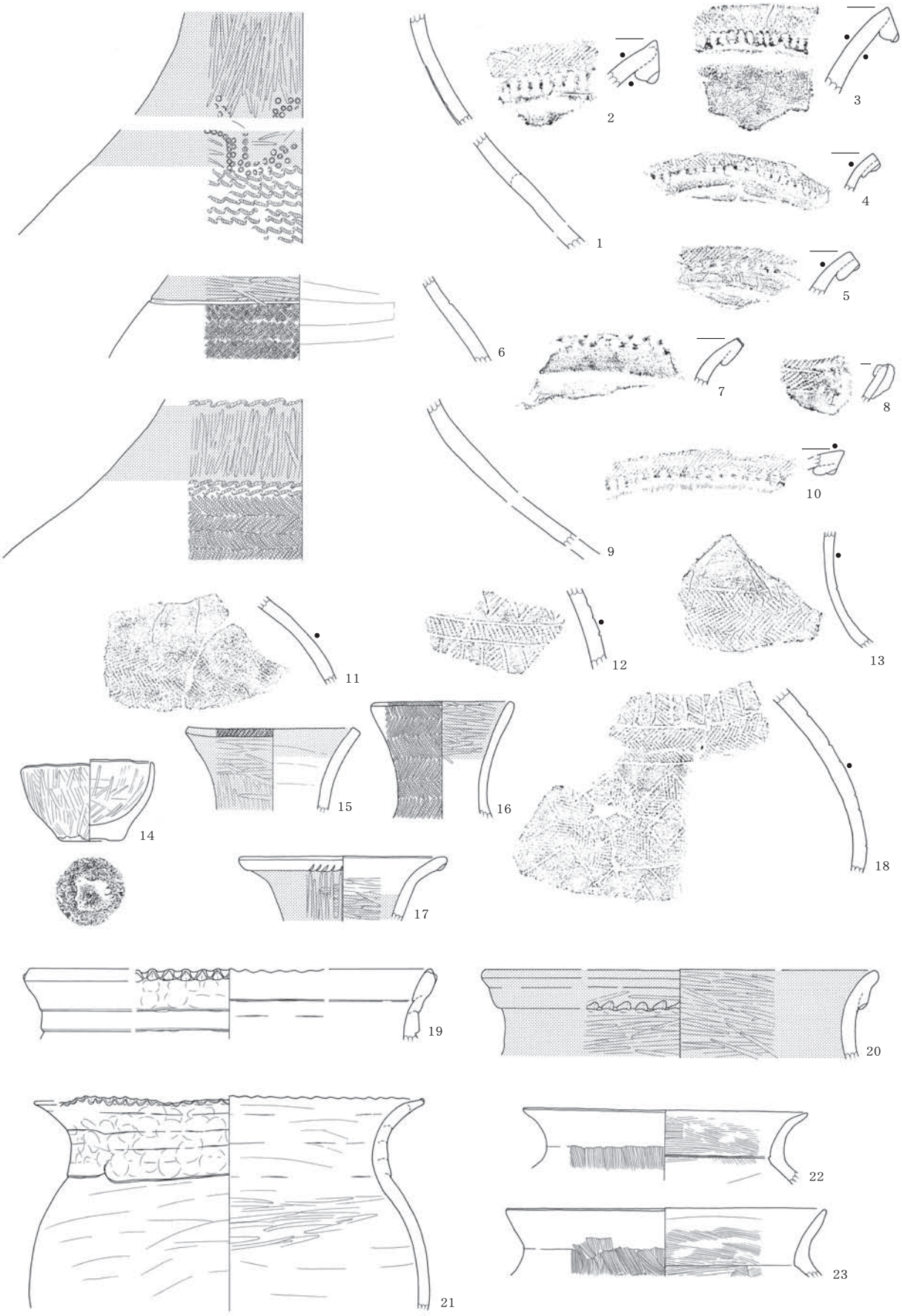
形状：円形？　**規模**（長軸×短軸；m）：不明　**遺存**：不明

面積（上端・下端・柱間；㎡）：不明　**竪穴深度**（cm）：54　**主軸方位**：不明

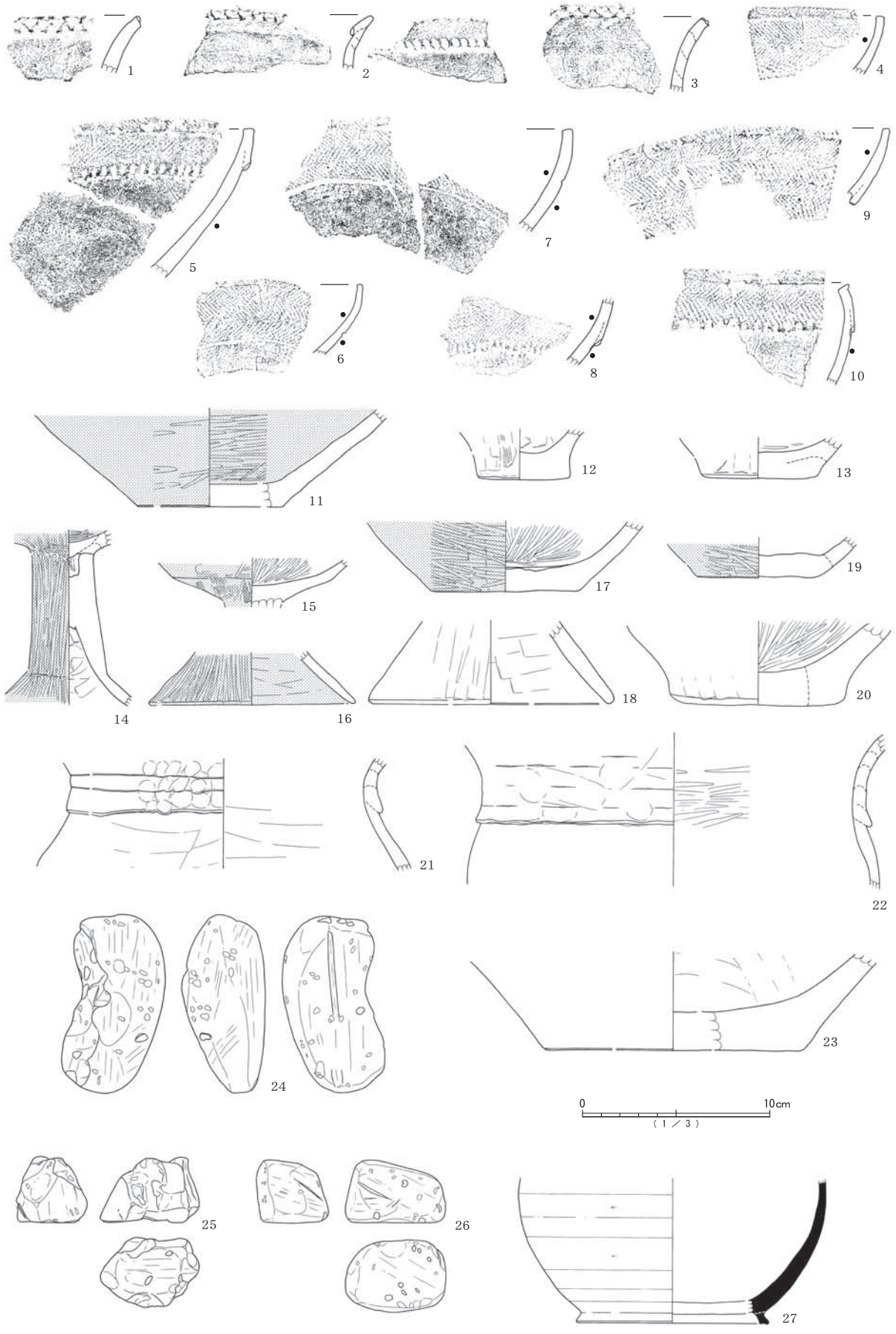
本遺構は調査区南端に一角のみが検出された円形かと思われる竪穴住居跡である。柱穴等は検出されていない。



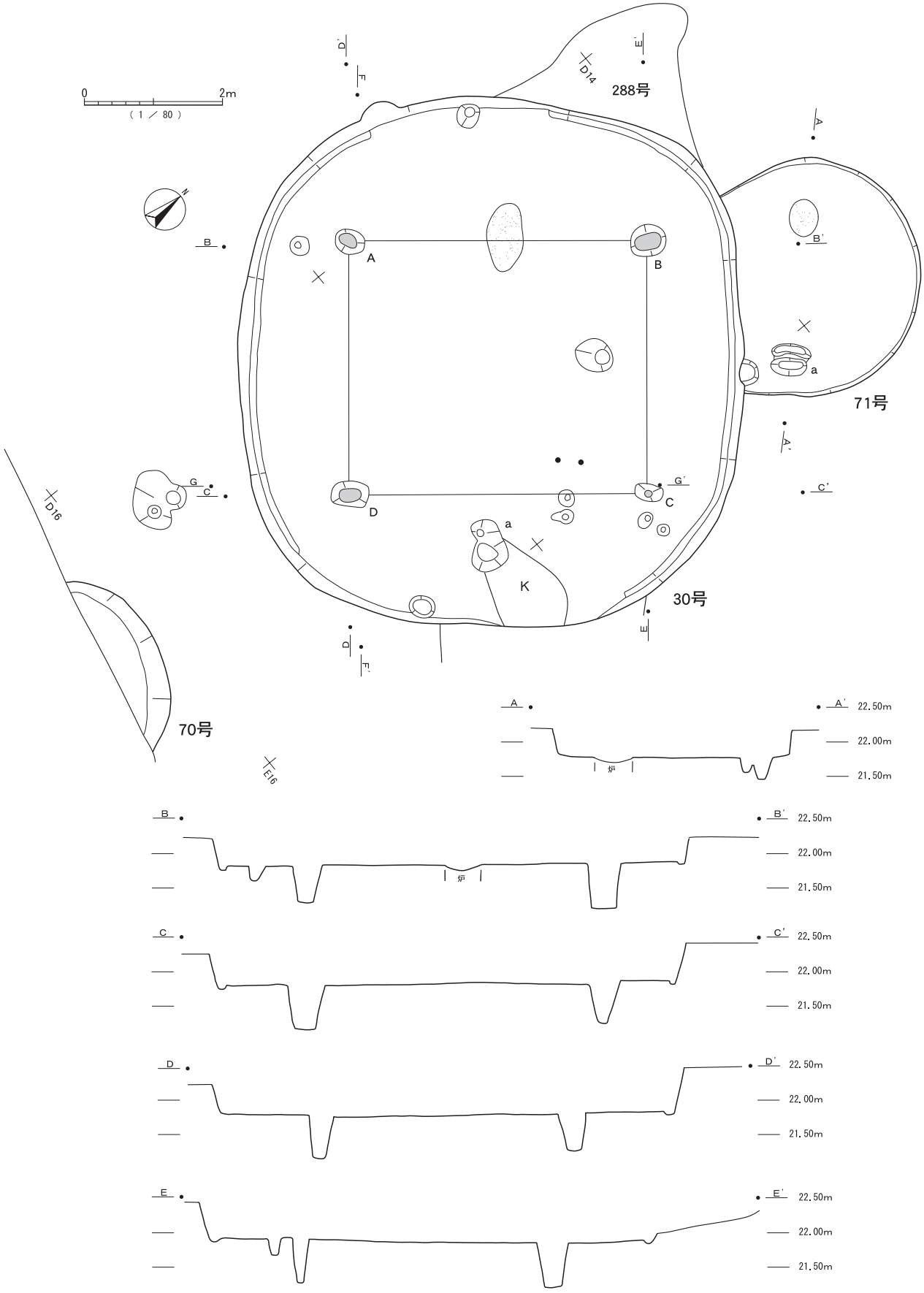
第 45 図　28 号竪穴住居跡出土遺物実測図



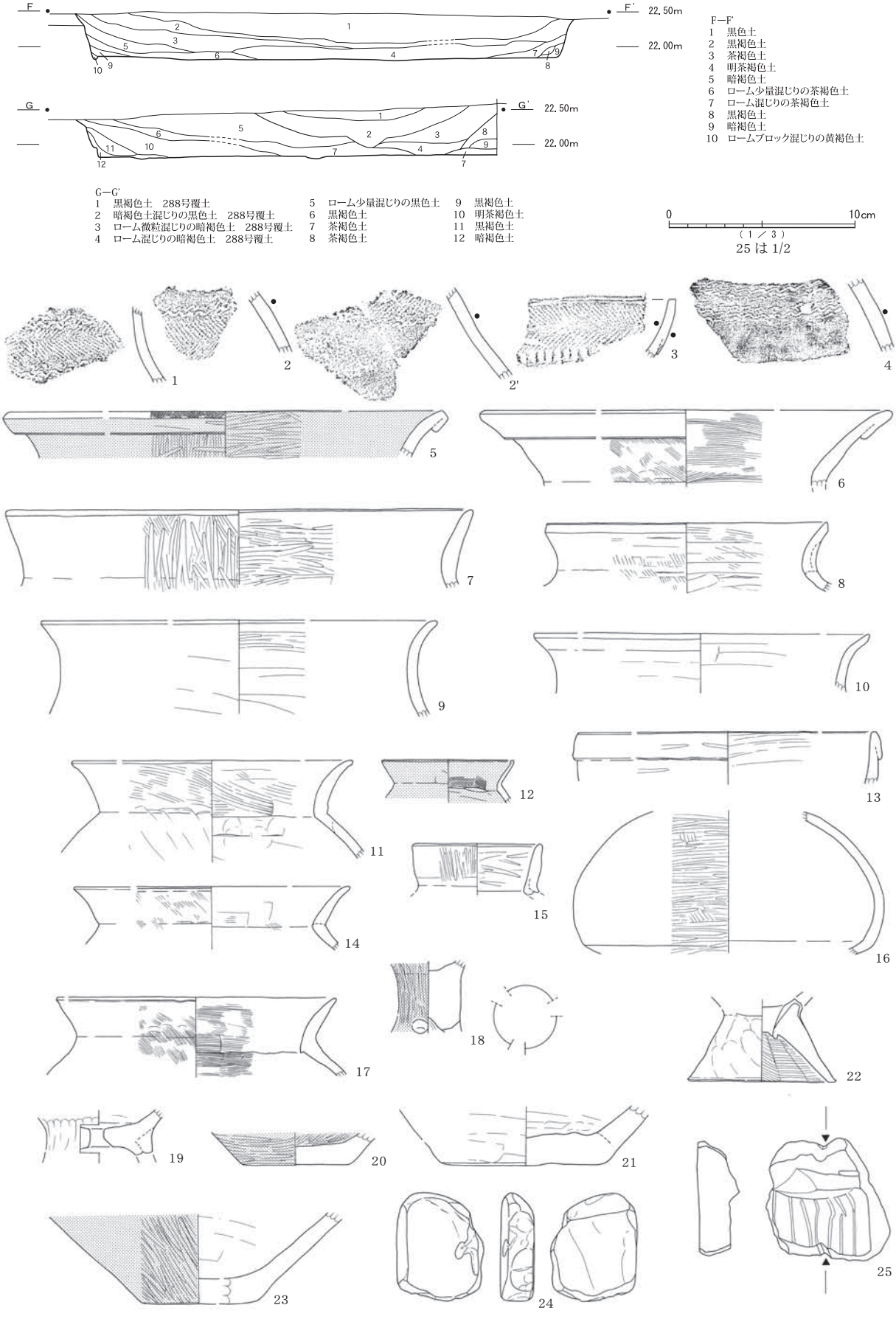
第 46 図　29 号竪穴住居跡出土遺物実測図



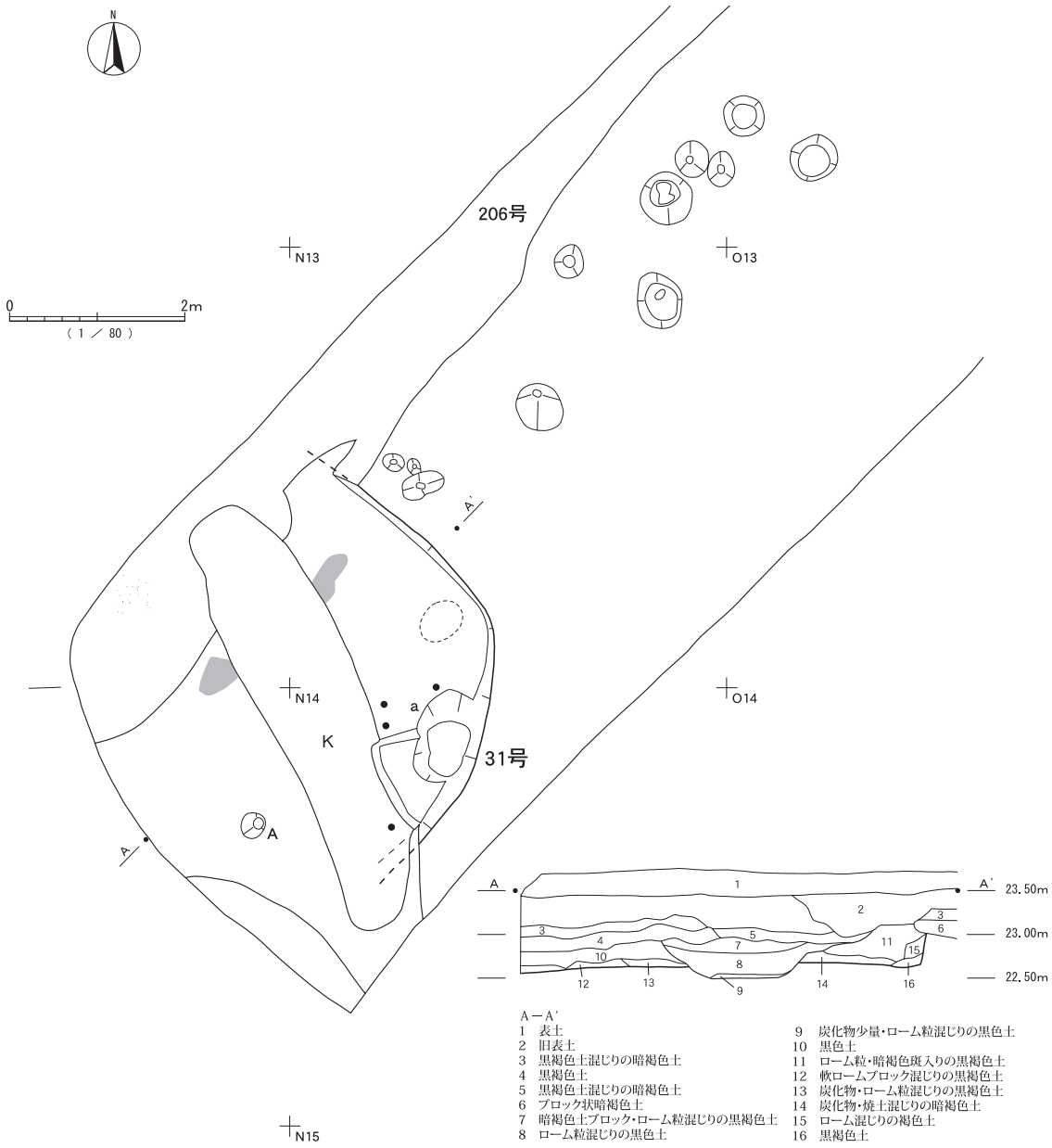
第 47 図　29 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 48 図　30・70・71 号竪穴住居跡実測図



第 49 図　30 号竪穴住居跡および出土遺物実測図



第 50 図　31 号竪穴住居跡実測図

遺物がなく確定できないが、竪穴が円形であれば弥生時代後期のものである可能性が考えられる。

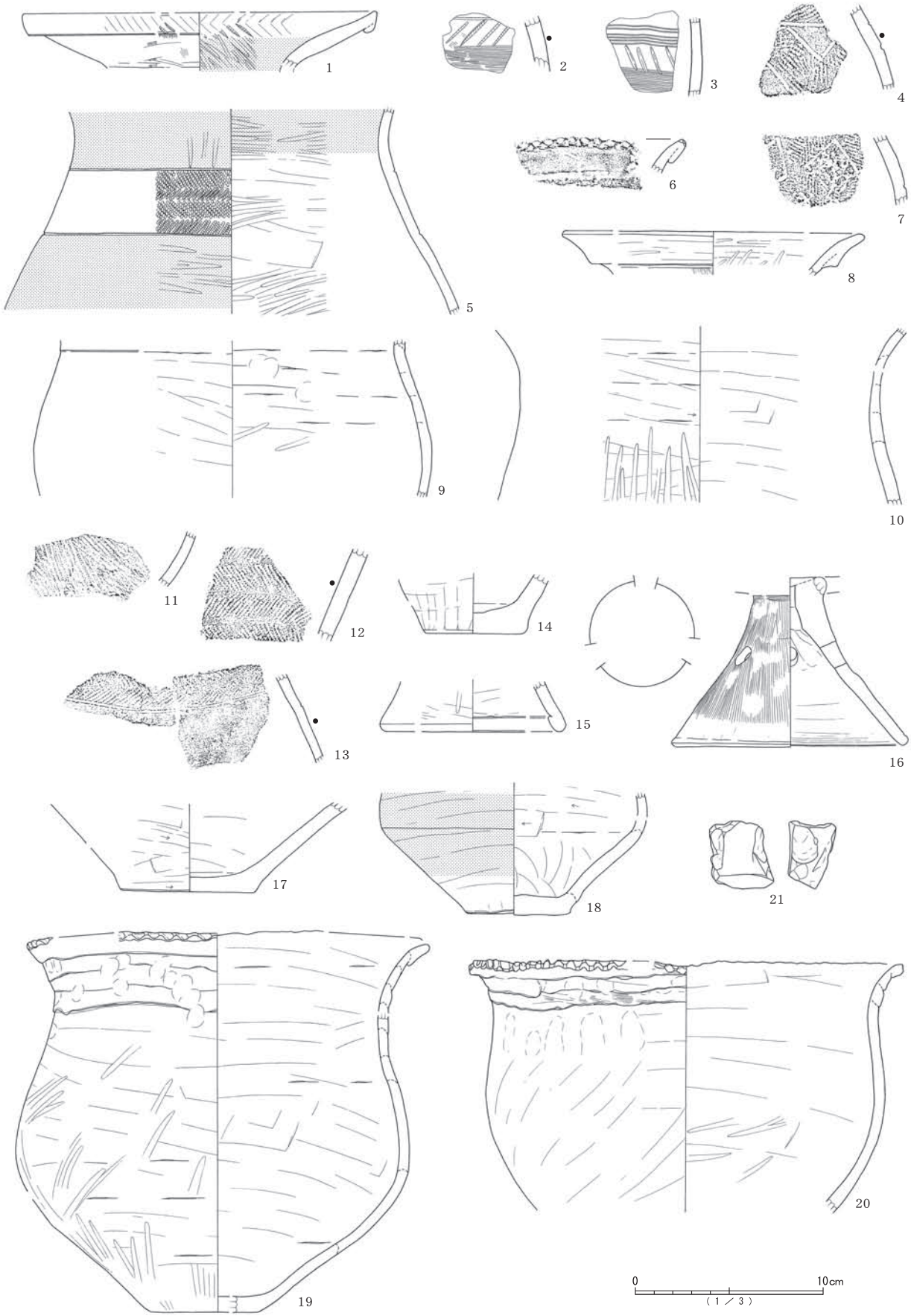
71 号竪穴住居跡（第 48 図）

形状：円形　**規模**（長軸×短軸；m）：3.48 × 3.48?　**遺存**：4/5

面積（上端・下端・柱間；㎡）：9.55・8.84・－　**竪穴深度**（cm）：41　**主軸方位**：315°

本遺構は 288 号墓方台部内に位置し、30 号竪穴住居跡に切られる竪穴住居跡である。竪穴の掘り込みはしっかりしているが、主柱穴は見当たらない。床面北西側に寄って炉があり、反対側に主軸に対して横長形のハシゴ穴が認められる。

本遺構の遺物はまったくないが、30 号竪穴住居跡との切り合い関係から、弥生時代後期前半に位置づけられる。



第 51 図　31 号竪穴住居跡出土遺物実測図

31 号竪穴住居跡（第 50・51 図、図版 6・28・59・60・83・86）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：5.80 × 5.16　**遺存**：1/5

面積（上端・下端・柱間；㎡）：27.06・24.94・5.87　**竪穴深度**（cm）：33　**主軸方位**：311°

柱間比（AB：BC）：0.75　**主柱穴深度**（cm）：A － 65.6

柱間（m）：AB － 2.12?　BC － 2.84?　CD － 2.12?　DA － 2.84?

本遺構は、大半を 206 号方形周溝墓に破壊される竪穴住居跡である。覆土中に焼土が散在し、廃絶時に火を受けたことを示している。床面には、炉の痕跡と柱穴・貯蔵穴状の穴が検出されている。

貯蔵穴状の穴の近辺で遺物の出土が記録されているが、位置と土器の対応ができない。しかし、遺物注記からすると、遺存良好な輪積痕甕（第 51 図 19・20）と、沈線文区画の壺（5）がいずれかと対応する可能性が高い。よって、本遺構は、久ヶ原式の特徴を持つ土器の出土から、弥生時代後期前半の時期が与えられる。

なお、一括取り上げ遺物に見られる櫛描文の破片（1・2・3）等の弥生時代終末期に属する土器は、206 号墓に伴う可能性がある。もしこれらを積極的に評価すれば、206 号墓は 288 号墓等と同じ弥生時代終末期の方形周溝墓と位置づけられよう。

32 号竪穴住居跡（第 52・53 図、図版 6・60・78・86・87・88）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.68 × 4.40　**遺存**：1/3

面積（上端・下端・柱間；㎡）：18.10・17.10・－　**竪穴深度**（cm）：9　**主軸方位**：316°

本遺構は、206 号方形周溝墓の北東溝によって大きく破壊される竪穴住居跡である。掘り込みはごく浅く、主柱穴も判然としない。炉のような被熱部が認められるが、他の床面施設は認められない。

遺物はすべて一括取り上げ遺物である。杯部底面に稜が伴う高杯（第 53 図 9）・口縁端部内面を面取りする高杯（12）・丸底を志向したようなハケメ調整甕（13）等、弥生時代終末期の土器が多いが、いずれも 206 号墓に伴うと考えられる。本遺構はおそらく、山田橋式に主体的な結節文区画山形文壺（4）が示す、弥生時代後期後半から終末期前半に属するものと思われる。

33 号竪穴住居跡（第 52・53 図、図版 7・14・28・60・88）

形状：円形～楕円形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.76? × 4.08?　**遺存**：1/3

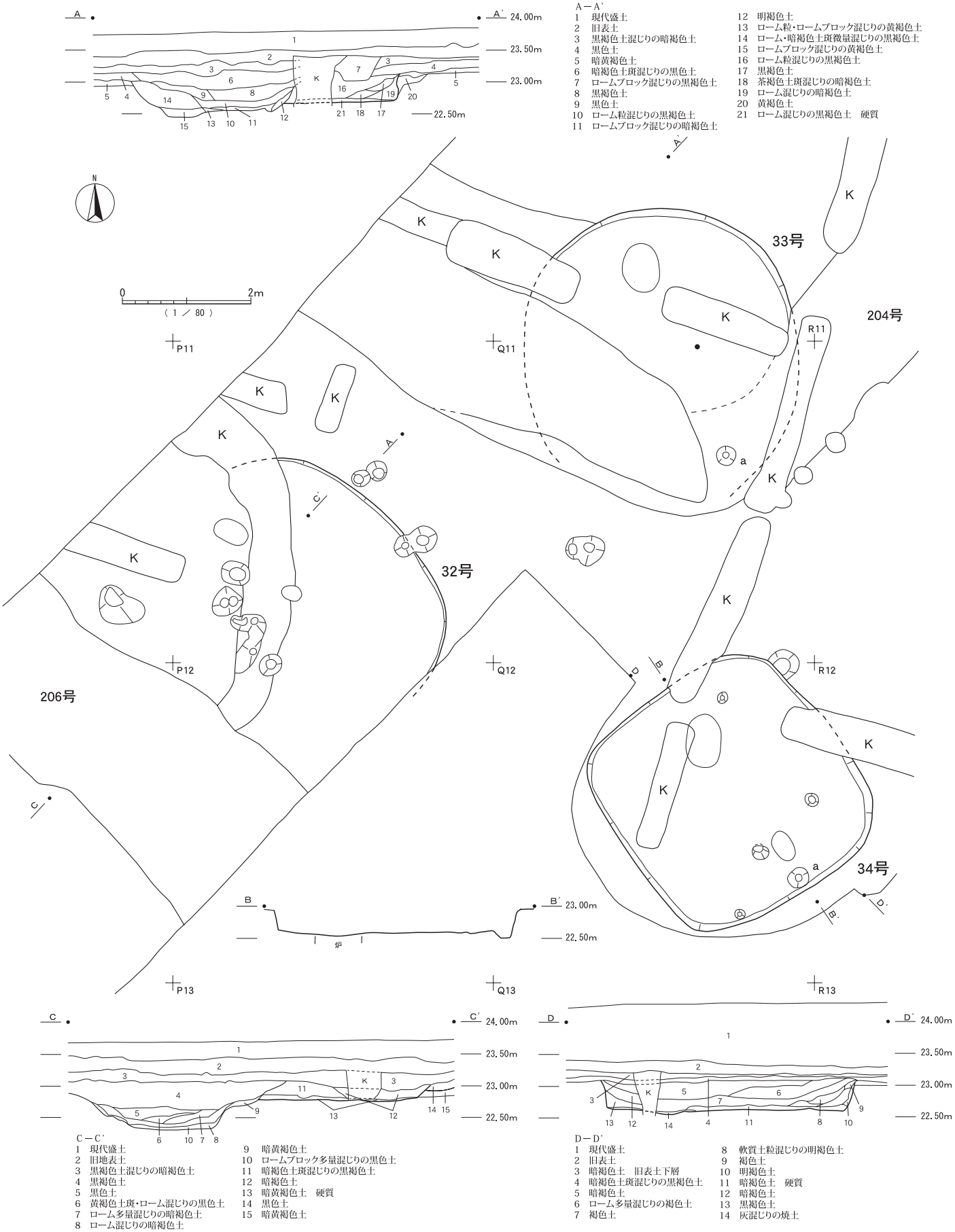
面積（上端・下端・柱間；㎡）：16.36・15.00・－　**竪穴深度**（cm）：39　**主軸方位**：332°

本遺構は、204 号方形周溝墓の南コーナーに切られる竪穴住居跡である。北側に寄って炉が検出されているが、主柱穴他の床面施設は見つかっていない。

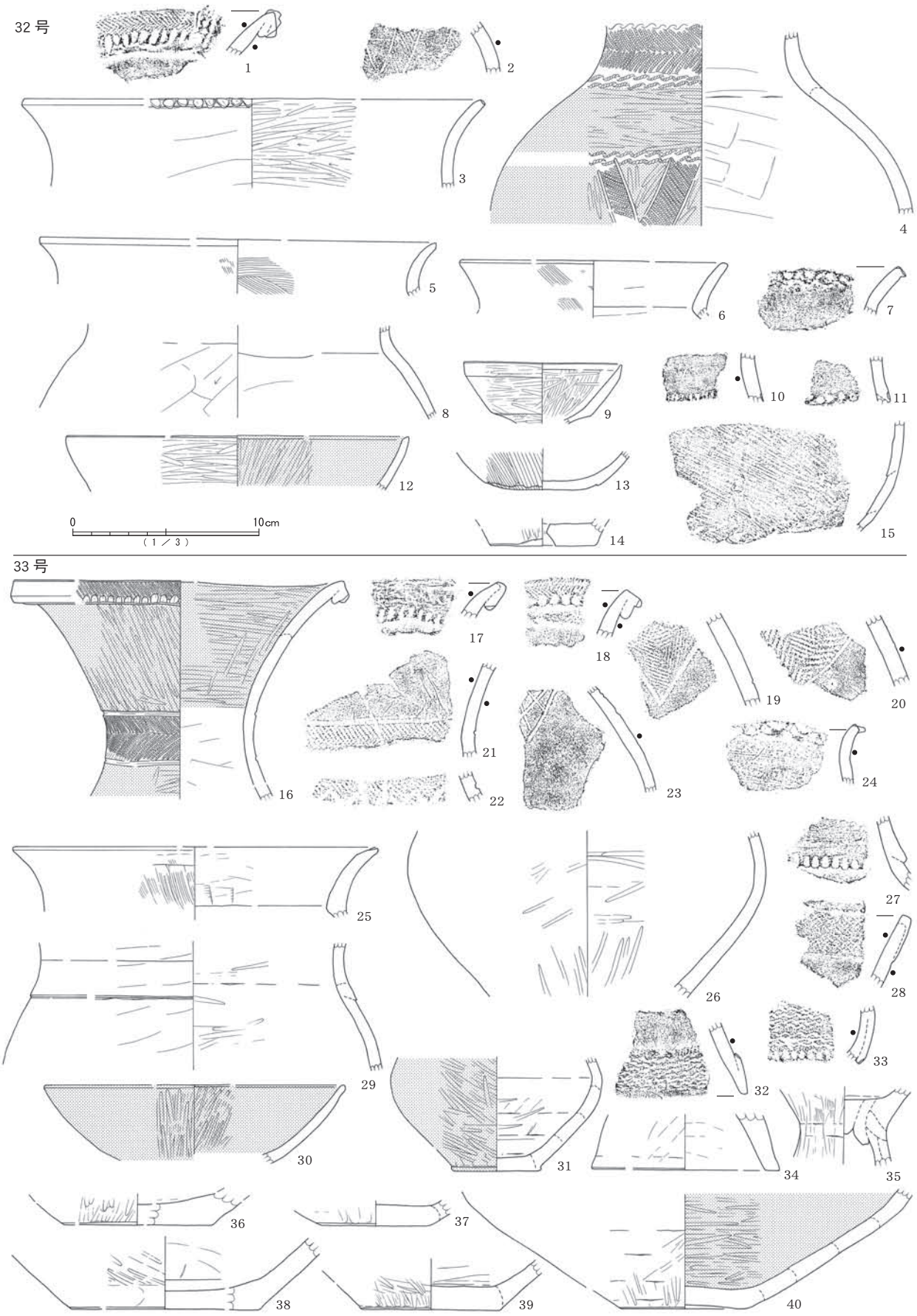
遺物は 204 号方形周溝墓からの混入物と見込まれるものが多い。しかし、平面図ドットと対応できないものの、底面近くが大きく広がる壺（第 53 図 40）が遺物注記によってドット取り上げ遺物の一つであることが確実である。他の一括取り上げ遺物に多く見られる久ヶ原式の特徴を考え合わせると、本遺構は弥生時代後期前半に帰属すると考えられる。

34 号竪穴住居跡（第 52・54 図、図版 7・60・87 ）

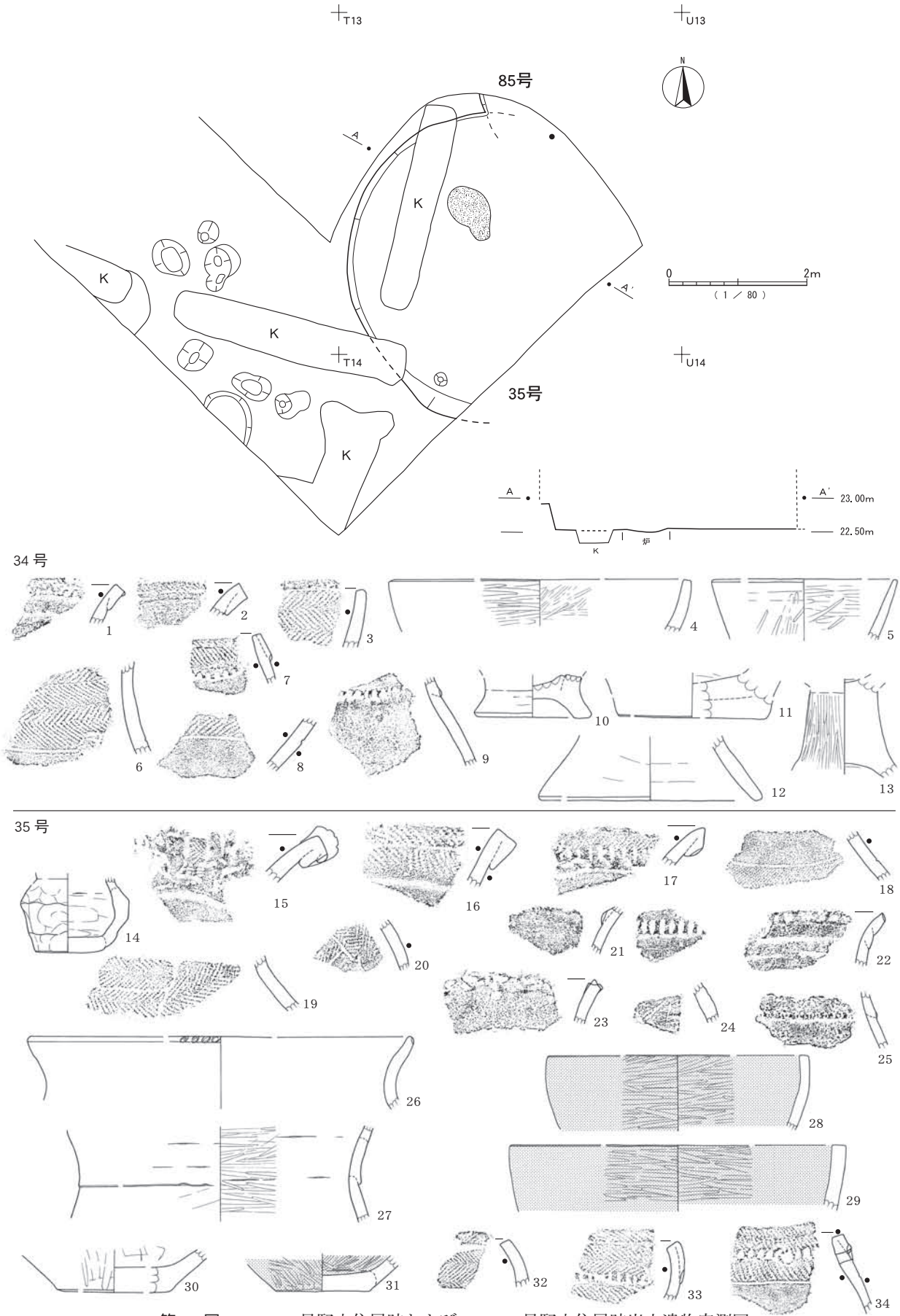
形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：3.80 × 3.72　**遺存**：略完



第 52 図　32・33・34 号竪穴住居跡実測図



第 53 図　32・33 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 54 図　35・85 号竪穴住居跡および 34・35 号竪穴住居跡出土遺物実測図

面積（上端・下端・柱間；㎡）：12.78・11.77・－　**竪穴深度**（cm）：34　**主軸方位**：325°

本遺構は、東調査区壁面にかかって検出された竪穴住居跡である。床面には、北西に寄った位置に炉、反対側にハシゴ穴を認められるが、主柱穴は検出できていない。ハシゴ穴近辺に貯蔵穴状の穴と火を受けた範囲が見られるが、性格は不明である。

遺物はすべて一括取り上げ遺物で、遺構の時期を確実に示すものはない。しかし、竪穴平面形と中実部の多い脚柱の高杯（第 54 図 13）や無文椀形高杯（4）等を勘案すると、本遺構は、弥生時代後期後半から終末期の所産とすることができよう。

35 号竪穴住居跡（第 54 図、図版 7・28・60・78・87）

形状：円形～楕円形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.64? × 4.32?　**遺存**：1/2

面積（上端・下端・柱間；㎡）：15.91・14.46・－　**竪穴深度**（cm）：41　**主軸方位**：316°

本遺構は東調査区の東端に位置する竪穴住居跡で、規模・時期不明の 85 号竪穴住居跡と切り合う。床面の北西寄りの位置に炉を持つほかに施設は検出されていない。

遺物は手捏ねの小型土器が確実に伴うが、他はすべて一括取り上げ遺物である。口縁端部内面を肥厚する甕（第 54 図 21）、沈線文区画の壺と鉢（18・34）の存在を積極的に捉えれば、竪穴平面形も勘案し、本遺構は弥生時代後期前半に帰属すると考えられる。

85 号竪穴住居跡（第 54 図）

規模・形状：不明　**遺存**：ごく一部

本遺構は、先後関係が不明ながら、35 号竪穴住居跡と切り合う遺構である。床面と遺構壁面の存在から竪穴住居跡と推定されるが、詳細は不明である。遺物もまったく検出されていない。

36 号竪穴住居跡（第 55・56 図、図版 7・16・61・79・88）

形状：トラック形　**規模**（長軸×短軸；m）：6.36? × 5.16　**遺存**：5/6

面積（上端・下端・柱間；㎡）：28.72・26.68・6.54　**竪穴深度**（cm）：25　**主軸方位**：334°

柱間比（AB：BC）：1.26　**主柱穴深度**（cm）：A － 98.5　B － 91.8　C － 87.8　D － 96.4

柱間（m）：AB － 2.92　BC － 2.32　CD － 2.88　DA － 2.32

本遺構は、一部を 204 号方形周溝墓に破壊される竪穴住居跡である。床面に、炉と主柱穴 4 箇所と貯蔵穴が検出されている。主柱穴は竪穴長軸に対して横長の配置で検出されている点が特徴的である。覆土中には少量の焼土が確認されており、廃絶過程で火を受けたことがわかる。

遺物は、竪穴南側にドットが 5 点記録されているが、対応が不明で、輪積痕甕（第 56 図 10）・砥石状石製品（27）・不明土製品（8）がいずれかと対応する可能性が考えられる程度である。

沈線文区画の壺・鉢（5・6、19）の存在を積極的に捉えると、本遺構は弥生時代後期前半に帰属すると考えられる。

37 号竪穴住居跡（第 55・57 図、図版 7・61・78・80）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：3.68? × 3.56?　**遺存**：1/3

面積（上端・下端・柱間；㎡）：11.06・9.92・－　竪穴深度（cm）：38　主軸方位：354°

本遺構は、205 号方形周溝墓に大半を切られる竪穴住居跡である。床面北側によって炉が検出された他に、施設は認められない。

遺物は段を持たないナデ調整甕と底部（第 57 図 18・25）を除いて、一括取り上げ遺物である。土製勾玉（1）と砥石かと思われる砂岩製品（2）が出土している。壺の文様は沈線文区画と単節 2 帯充填の山形文が認められ（7・8・9・15・16・20）、本遺構は弥生時代後期前半に帰属する可能性が考えられる。

38 号竪穴住居跡（第 55・57 図、図版 61・81）

形状：円形　規模（長軸×短軸；m）：4.08? × 4.00　遺存：1/2

面積（上端・下端・柱間；㎡）：12.62・11.28・－　竪穴深度（cm）：19　主軸方位：60°

本遺構は 205 号方形周溝墓に半分ほどが破壊される竪穴住居跡である。床面北東寄りに炉がある他に施設は認められない。

遺物はドット取り上げされたものが存在するが、対応関係は不明である。高杯脚部と壺肩部（第 57 図 31・32）については、遺物注記からすると、これらのドットのいずれかと対応する可能性が高い。沈線区画の壺（32）の存在から、本遺構の時期を弥生時代後期前半に位置づけることは妥当と思われるが、この壺に見られる多段の結節文による充填や、多段の結節文と山形沈線文の組み合わせの鉢（29）の特徴からすると、弥生時代後期中葉に近い時期なのかもしれない。

68 号竪穴住居跡（第 55・58 図、図版 32・65・78・80・81・82）

形状：隅円方形？　規模（長軸×短軸；m）：4.32? × 4.16?　遺存：一部

面積（上端・下端・柱間；㎡）：17.06・－・4.33　竪穴深度（cm）：19　主軸方位：63°

柱間比（AB：BC）：0.93　主柱穴深度（cm）：A － 44.2　B － 33.0

柱間（m）：AB － 2.00　BC － 2.16?　CD － 2.00?　DA － 2.20?

本遺構は南半が調査区外にあり、大半を 216 号方形周溝墓に破壊される竪穴住居跡である。216 号墓周溝内にかろうじて遺存する柱穴と、床面と見られる平坦部に炉が検出されている。

遺物は、椀形の口縁を持ち頸部屈曲に竹管状工具による刺突文の施される特徴的な壺（第 58 図 1）と壺底部（16）などが覆土中より出土している。両者は 216 号墓切り合い部での帰属が問題となるが、刺突文の壺（1）が伴うとするならば、本遺構は弥生時代終末期の所産とするのが妥当と思われる。

なお、他にも少なからず土器片が出土しているが、それらの帰属の可否は須恵器（19）を除いて判然としない。

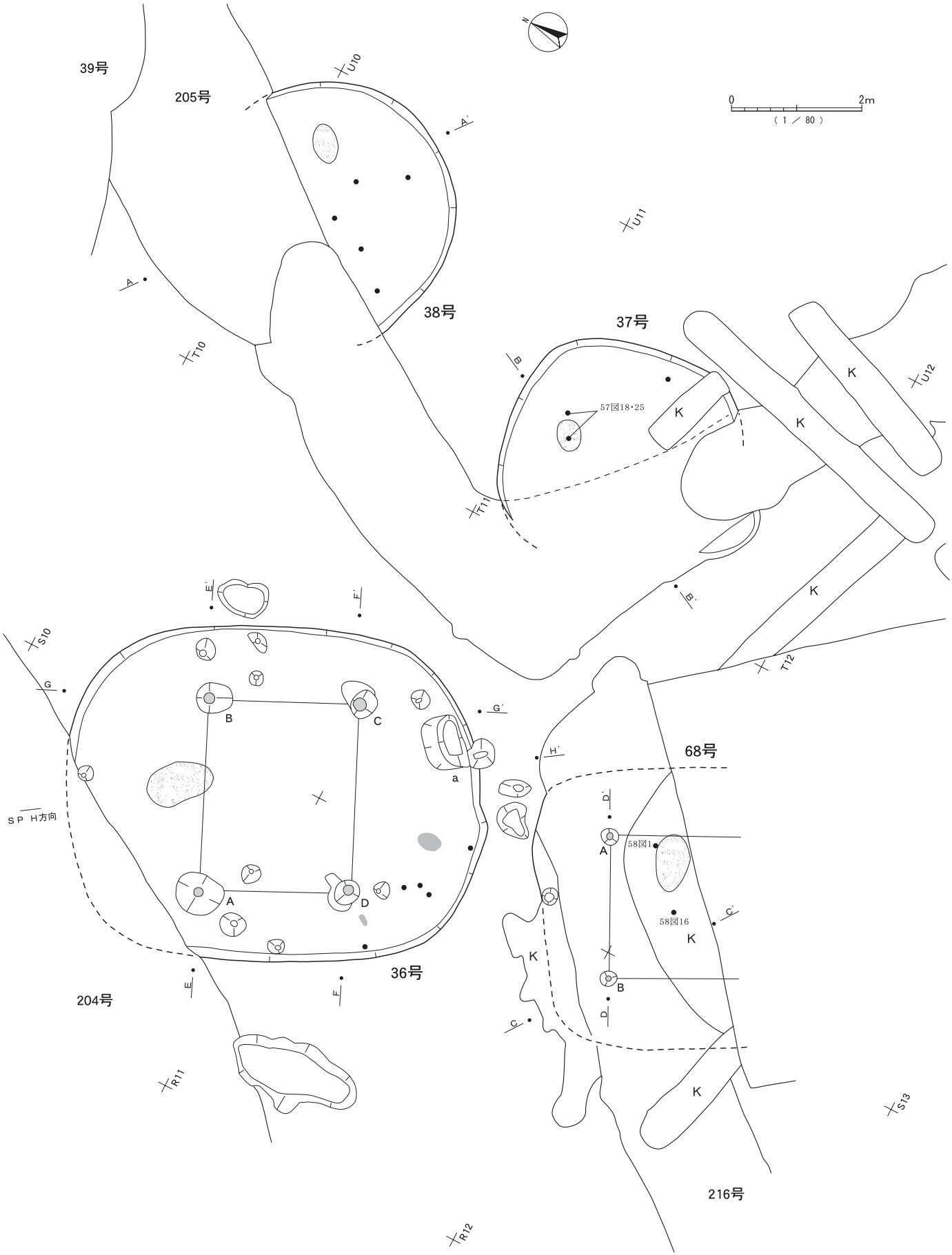
39 号竪穴住居跡（第 59・60 図、図版 7・61）

形状：隅円方形　規模（長軸×短軸；m）：7.40 × 6.84　遺存：略完

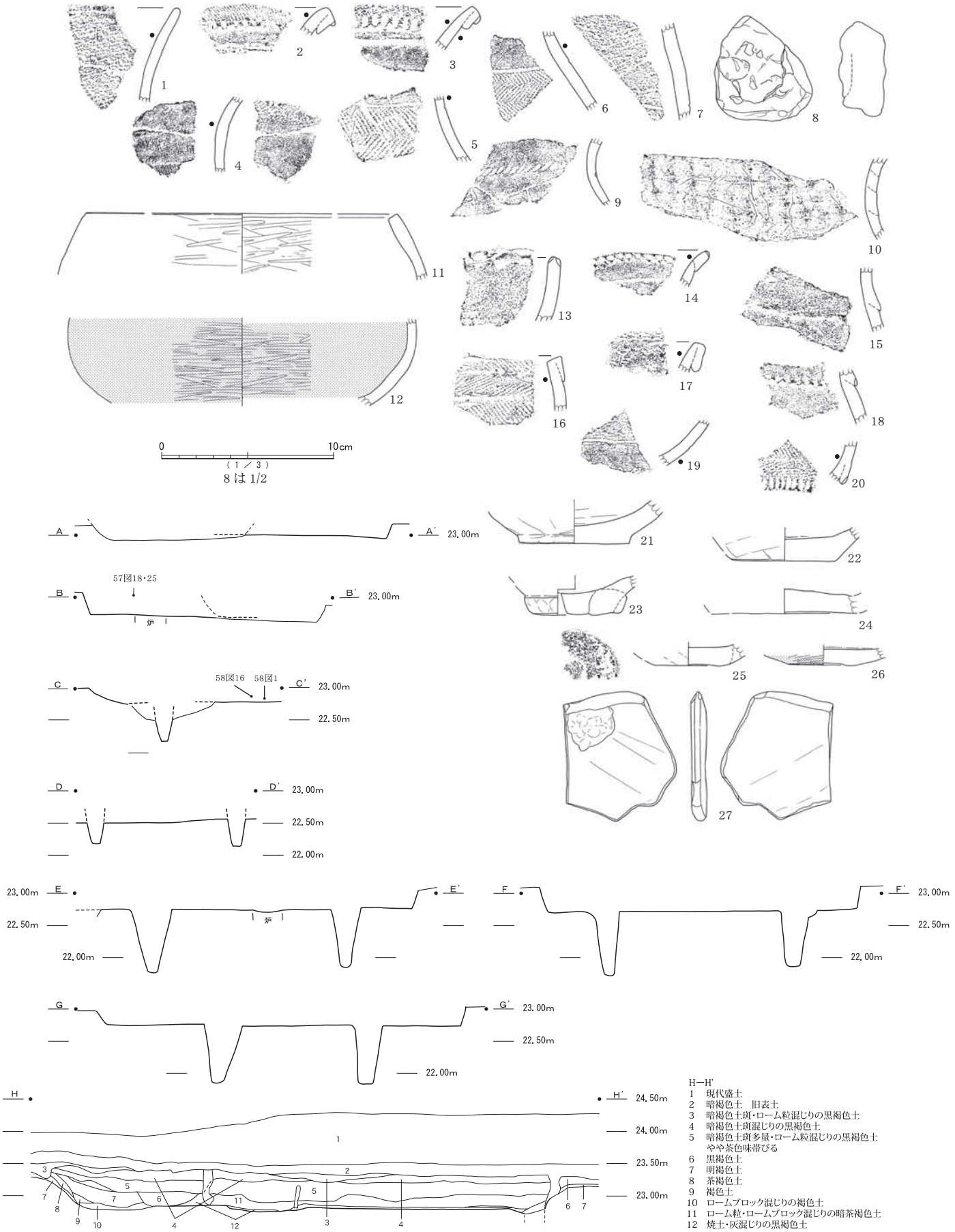
面積（上端・下端・柱間；㎡）：42.35・39.35・12.52　竪穴深度（cm）：47　主軸方位：348°

柱間比（AB：BC）：1.08　主柱穴深度（cm）：A － 56.7　B － 70.5　C － 59.4　D － 59.5

柱間（m）：AB － 3.72　BC － 3.44　CD － 3.72　DA － 3.44

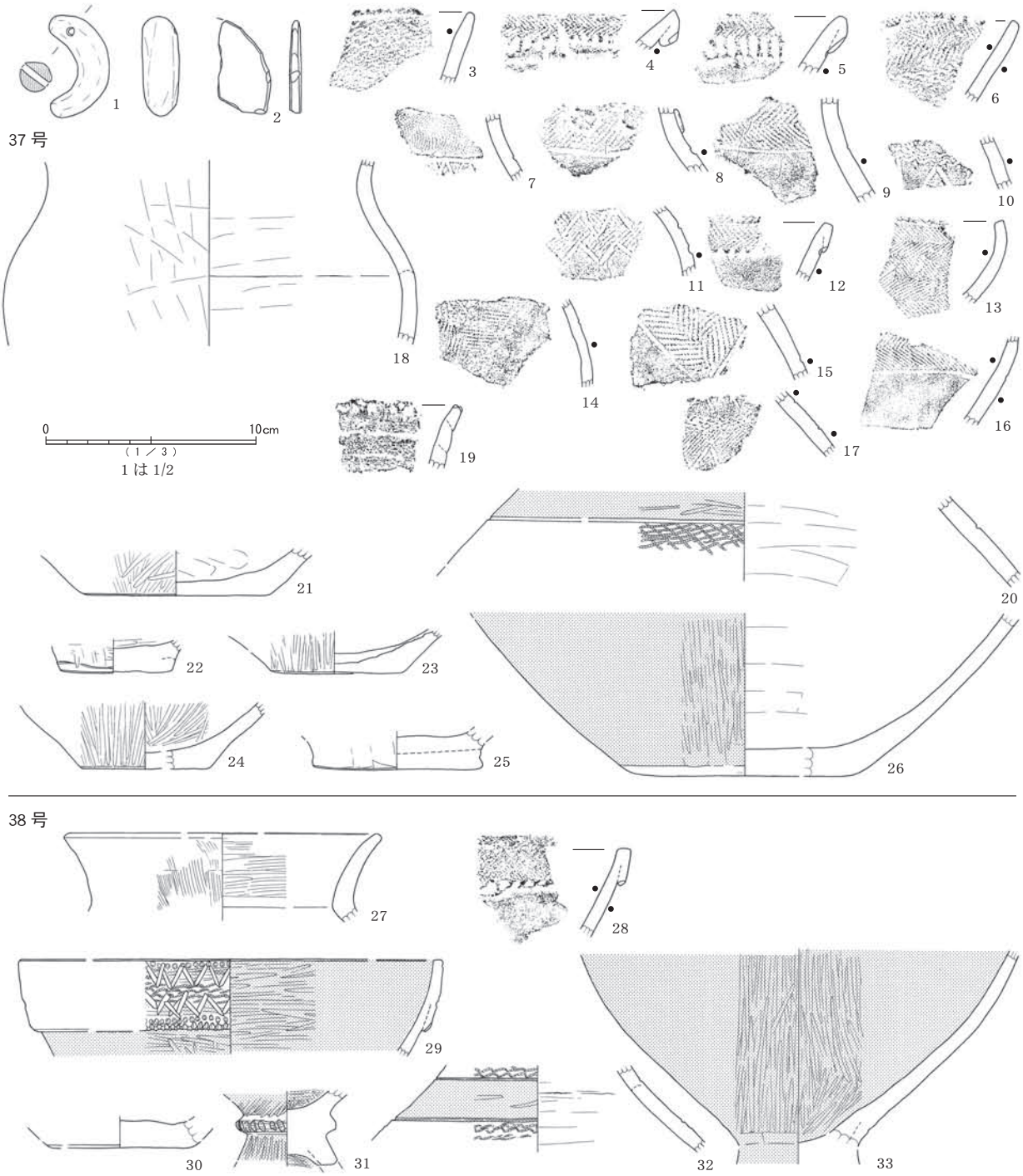


第 55 図　36・37・38・68 号竪穴住居跡実測図



H－H'
1　現代盛土
2　暗褐色土　旧表土
3　暗褐色土斑・ローム粒混じりの黒褐色土
4　暗褐色土斑混じりの黒褐色土
5　暗褐色土斑多量・ローム粒混じりの黒褐色土
やや茶色味帯びる
6　黒褐色土
7　明褐色土
8　茶褐色土
9　褐色土
10　ロームブロック混じりの褐色土
11　ローム粒・ロームブロック混じりの暗茶褐色土
12　焼土・灰混じりの黒褐色土

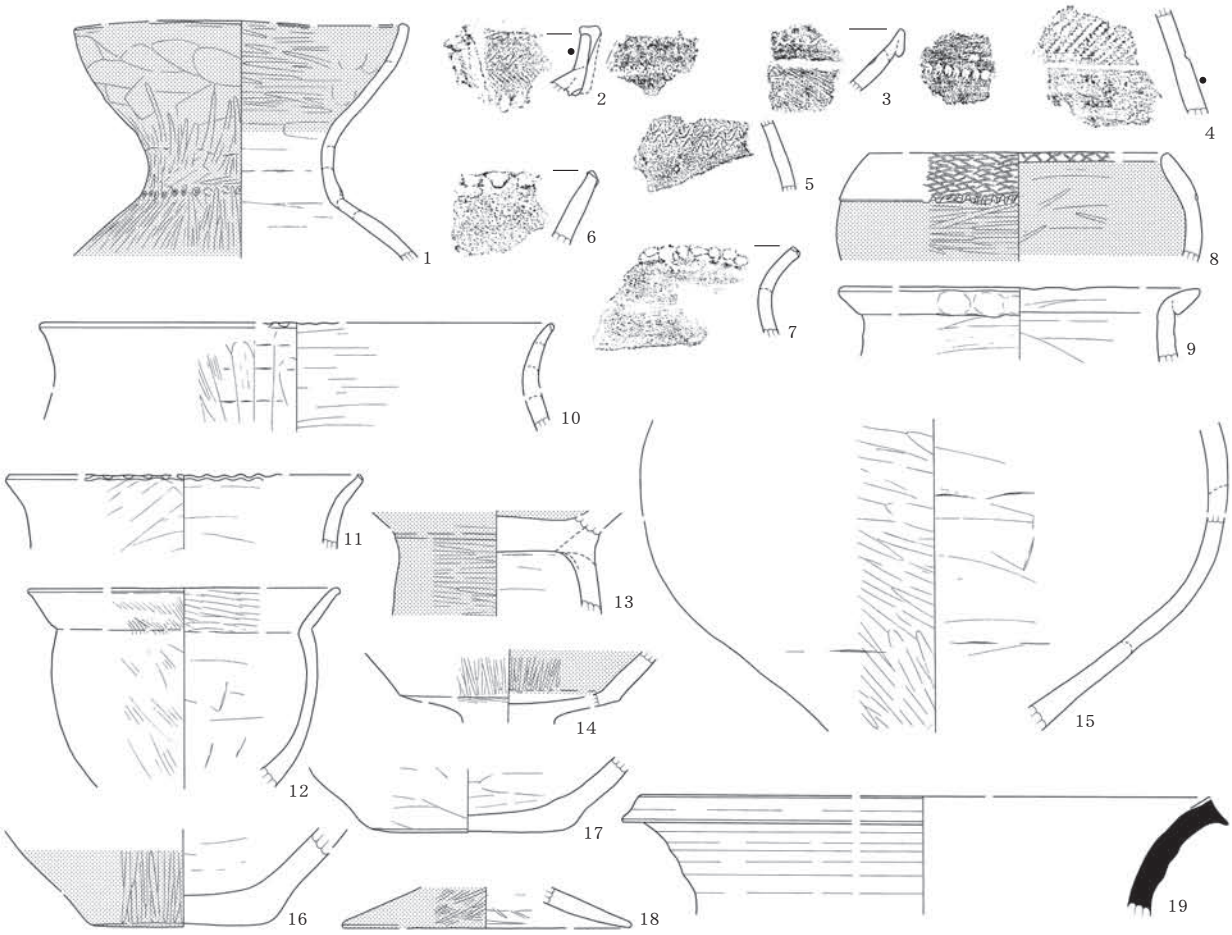
第 56 図　36・37・38・68 号竪穴住居跡および 36 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 57 図　37・38 号竪穴住居跡出土遺物実測図

本遺構は、40 号竪穴住居跡を切り、5 号溝に切られる竪穴住居跡である。竪穴の掘り込みはしっかりしており、主柱穴 4 箇所・炉・ハシゴ穴・貯蔵穴の各施設も検出されている。覆土中には焼土が散っており、本遺構が廃絶時に火を受けたことを示している。

遺物は、第 60 図 2・3・8 を除いて出土位置が判明している。断面図によると 5 号溝覆土中に当たるのは 4・10・11 である。これらを除いたうち、無文部の多い壺（1・5）と、口縁端部外面に 1 方向のみの刺突文が施される甕（12）の存在から判断すると、本遺構は弥生時代後期後半以降、終末期に構築されたものと思われる。



第 58 図　68 号竪穴住居跡出土遺物実測図

40 号竪穴住居跡（第 59・60 図、図版 29・62）

形状：トラック形　**規模**（長軸×短軸；m）：5.08? × 4.28　**遺存**：3/4

面積（上端・下端・柱間；㎡）：19.58・18.14・6.58　**竪穴深度**（cm）：22　**主軸方位**：339°

柱間比（AB：BC）：1.08　**主柱穴深度**（cm）：A － 59.0　B － 61.0　C － 75.9

柱間（m）：AB － 2.72　BC － 2.52　CD － 2.68?　DA － 2.52?

本遺構は、39 号竪穴住居跡と 5 号溝に切られる竪穴住居跡である。床面には主柱穴 3 箇所が検出されている。

遺物は、それぞれ出土位置が記録されている。もっとも遺存状態の良い沈線文区画の鉢（第 60 図 17）は、出土位置が高く、5 号溝に撹乱された範囲に入ってしまうが、この土器を重視すれば、本遺構は弥生時代後期前半に位置づけられる可能性が高い。

44 号竪穴住居跡（第 61・62 図、図版 8・29・51・62・81）

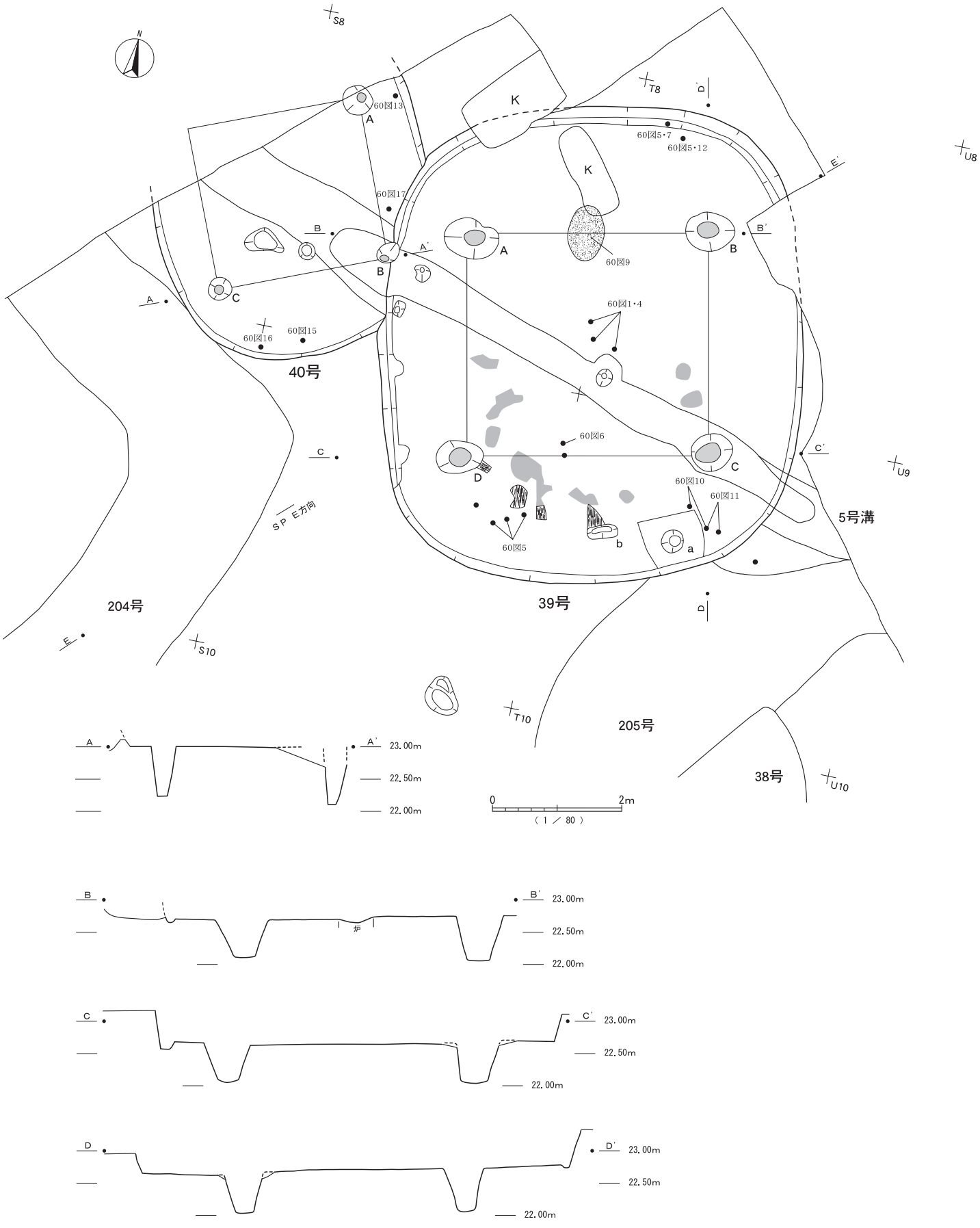
形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.56 × 4.32　**遺存**：完存

面積（上端・下端・柱間；㎡）：16.42・15.30・5.27　**竪穴深度**（cm）：35　**主軸方位**：321°

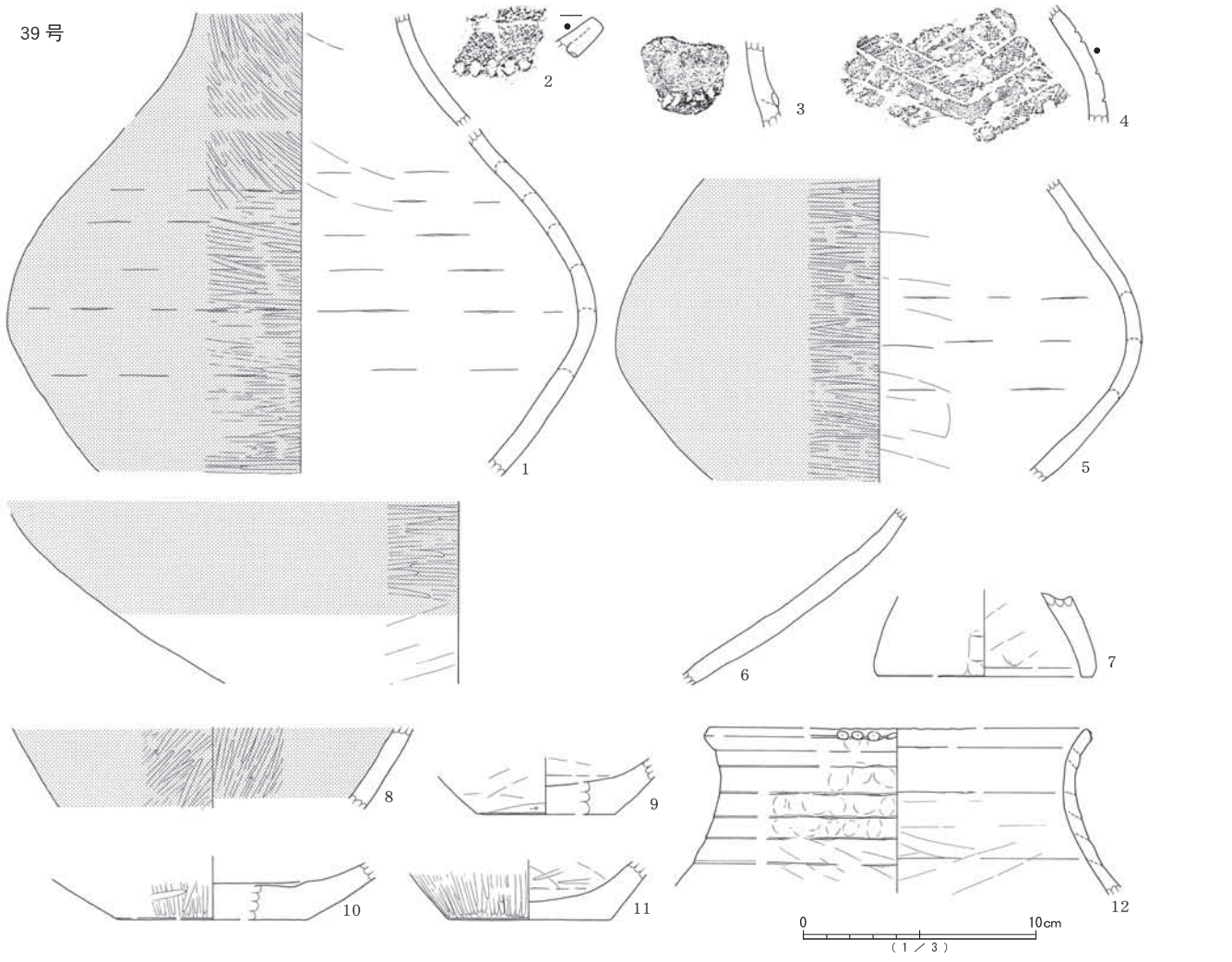
柱間比（AB：BC）：1.15　**主柱穴深度**（cm）：A － 41.6　B － 74.5　C － 71.0　D － 102.2

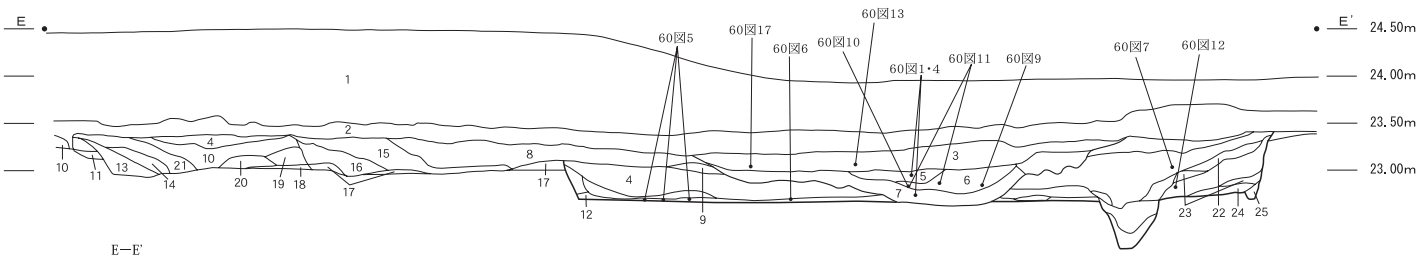
柱間（m）：AB － 2.44　BC － 2.12　CD － 2.40　DA － 2.20

本遺構は 290 号方台部内に位置する竪穴住居跡である。周囲に性格不明の土坑があり、1 基と切り



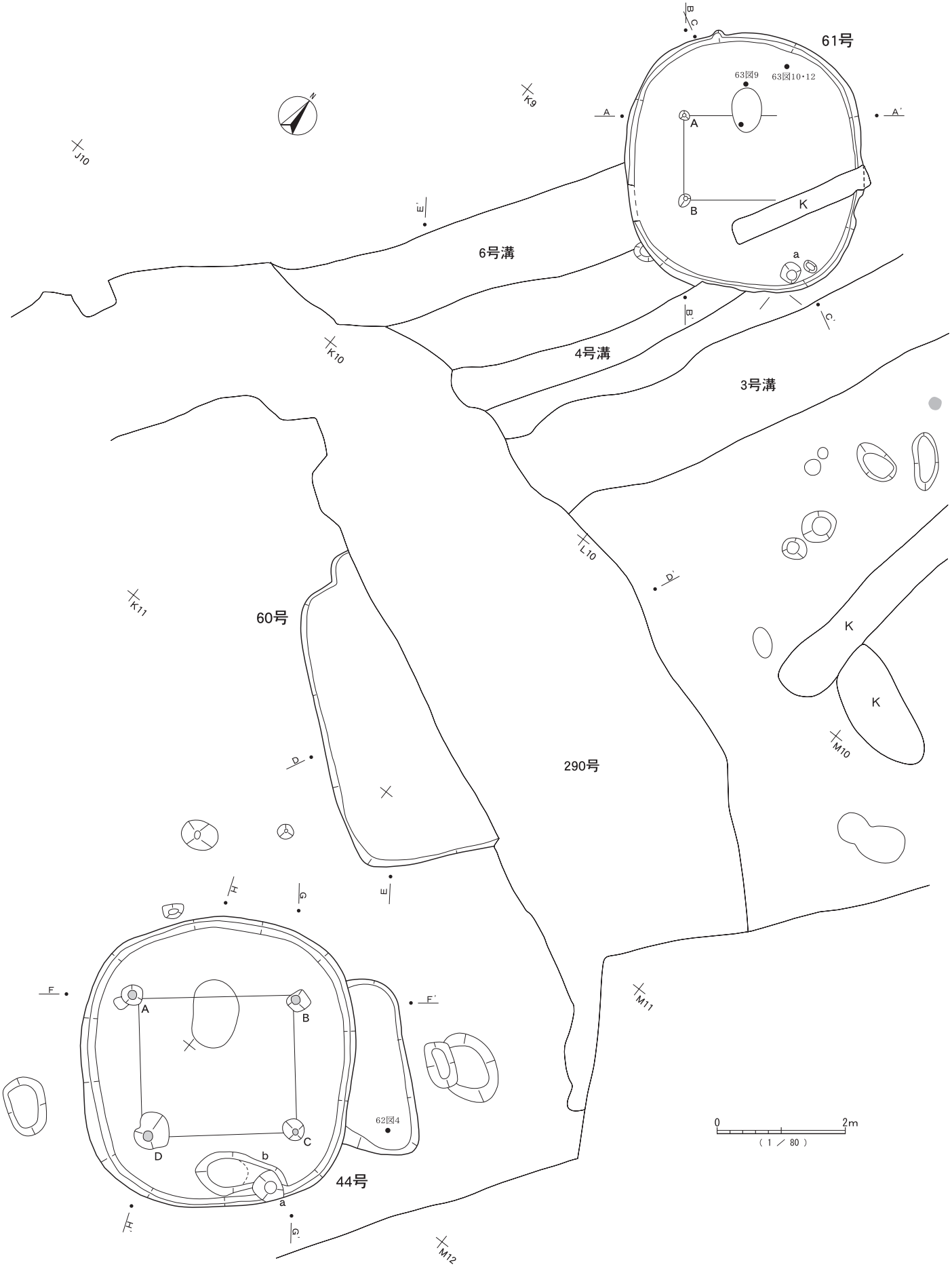
第 59 図　39・40 号竪穴住居跡出土遺物実測図



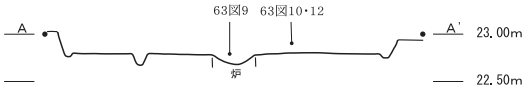


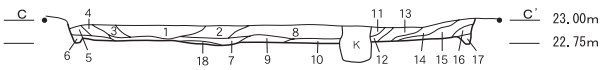
E—E'
1 現代盛土
2 暗褐色土　旧表土
3 ローム粒多量・黒色土斑混じりの暗茶褐色土
4 暗茶褐色土
5 ローム粒若干混じりの暗褐色土
6 暗褐色土斑混じりの黒褐色土
7 暗褐色土多量・ローム粒少量混じりの黒褐色土
8 暗褐色土斑混じりの黒色土
9 暗褐色土粒・ローム微粒混じりの黒色土
10 黒褐色土
11 ソフトローム
12 ローム粒混じりの黒褐色土　硬質
13 ローム粒混じりの黒褐色土
14 ロームブロック多量混じりの黒色土
15 ローム粒・暗褐色土斑混じりの黒褐色土
16 ローム粒混じりの黄褐色土　ボロボロ
17 ロームブロック・黄褐色土斑混じりの暗褐色土
18 暗褐色土　硬質
19 暗褐色土斑混じりの黒褐色土
20 黄褐色土混じりの暗褐色土
21 ローム粒・ロームブロック混じりの黒褐色土
22 ロームブロック混じりの黒褐色土
23 ロームブロック少量混じりの黒色土
24 ロームブロック多量混じりの暗褐色土　硬質
25 ロームブロック多量混じりの黄褐色土

第 60 図　39・40 号竪穴住居跡および出土遺物実測図



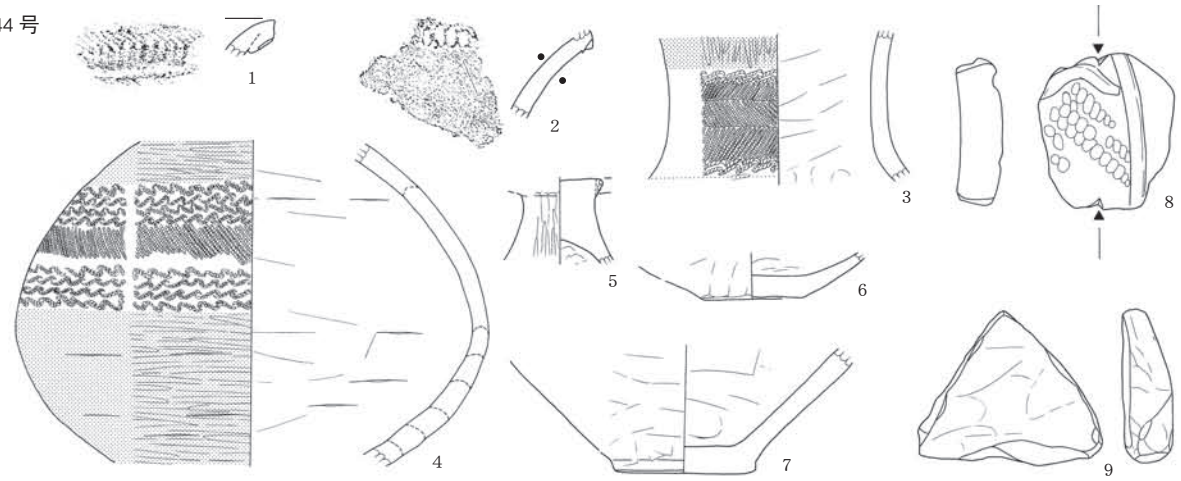
第 61 図　44・60・61 号竪穴住居跡実測図



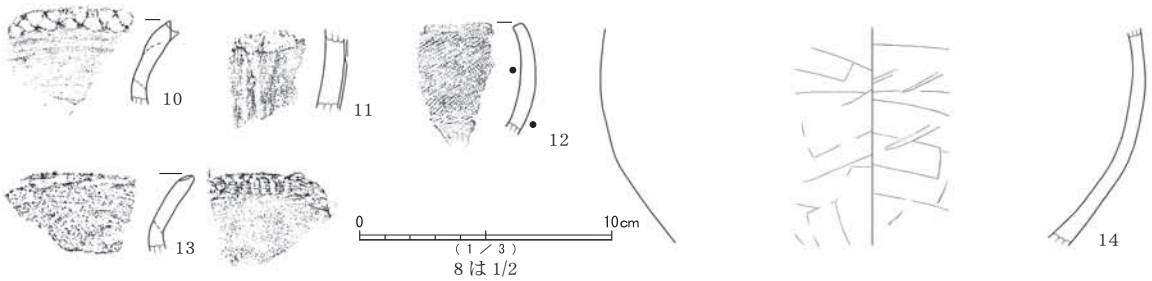


C－C'
1 ロームブロック多量混じりの暗褐色土
2 ローム粒混じりの黒褐色土
3 ロームブロック混じりの暗褐色土
4 ローム粒混じりの黒褐色土
5 ローム粒混じりの暗褐色土
6 ロームブロック混じりの暗黄褐色土
7 ローム混じりの黒色土
8 ローム粒多量混じりの暗褐色土
9 ロームブロック・粒混じりの黒褐色土
10 黒色土
11 黄褐色土
12 黒褐色土
13 茶褐色土
14 明褐色土
15 ローム粒混じりの黒褐色土
16 褐色土
17 黄褐色土
18 焼土粒・ローム混じりの黒色土

44 号

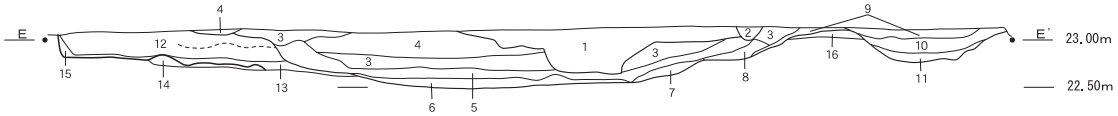


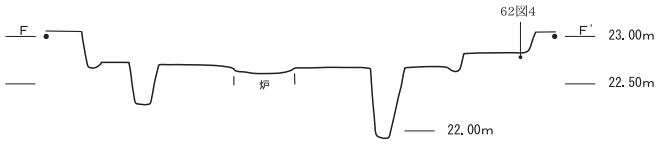
60 号

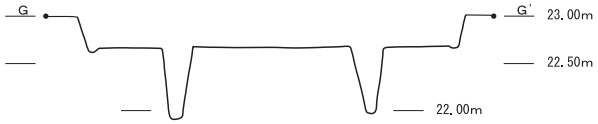


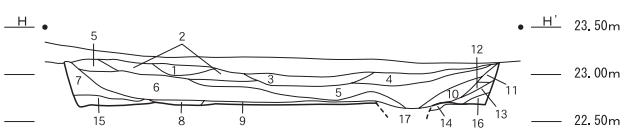
8 は 1/2

E—E'
1 暗褐色土
2 砂礫層
3 黒色土
4 黒褐色土
5 ローム粒少量混じりの暗褐色土
6 ロームブロック混じりの暗褐色土
7 ロームブロック多量混じりの暗黄褐色土
8 ロームブロック混じりの黒色土
9 暗褐色土
10 黒色土
11 ロームブロック混じりの黒褐色土
12 暗褐色土混じりの黒褐色土
13 ローム混じりの暗茶褐色土
14 ロームブロック混じりの暗褐色土　貼床層
15 暗黄褐色土
16 ローム粒混じりの暗黄褐色土



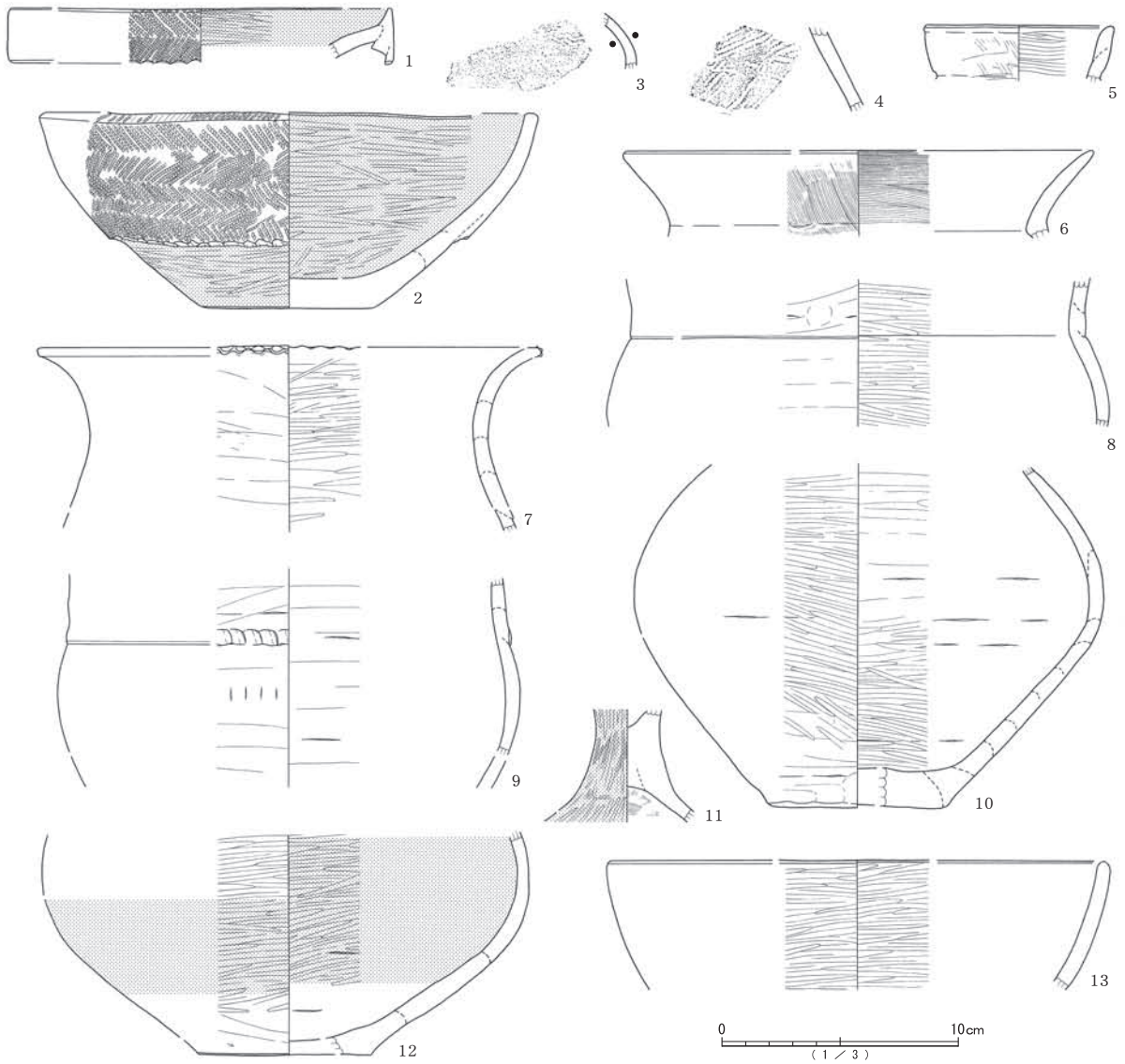






H—H'
1 ローム粒混じりの暗褐色土
2 暗茶褐色土
3 暗褐色土
4 ロームブロック混じりの暗茶褐色土
5 暗茶褐色粒混じりの暗褐色土
6 ロームブロック・茶褐色斑多量混じりの茶褐色土
7 ロームブロック・粒多量混じりの暗褐色土
8 灰茶褐色混じりの黒褐色土　下面が火を受けている
9 ロームブロック混じりの暗褐色土　硬質
10 ローム粒混じりの茶褐色土
11 黄褐色土
12 暗褐色土混じりの黄褐色土
13 ロームブロック混じりの暗褐色土
14 ロームブロック混じり土　貼床層
15 ローム粒混じりの黒褐色土
16 黄褐色土
17 黒褐色土　柱穴覆土上層

第 62 図　44・60・61 号竪穴住居跡および出土遺物実測図



第 63 図　61 号竪穴住居跡出土遺物実測図

合うが、先後関係は不明である。床面からは 4 箇所の主柱穴と、北西側柱穴間に炉、反対側壁面近くにハシゴ穴と貯蔵穴状の穴が検出されている。

遺物は、西側で切り合う土坑内の土器（第 62 図 4）を除いて、一括取り上げ遺物である。土器の他に、土器片錘（8）と凝灰岩製の砥石（9）が出土している。結節文区画の壺（3）の出土を積極的に評価し、土坑内の壺（4）が本来、本遺構の遺物であるとするならば、本遺構は弥生時代後期後半に帰属すると考えられる。

60 号竪穴住居跡（第 61・62 図、図版 9・65・80）

形状：方形　**規模**（長軸×短軸；m）：5.04? × 4.32?　**遺存**：1/4

面積（上端・下端・柱間；㎡）：20.63・19.25・－　**竪穴深度**（cm）：38　**主軸方位**：309°

本遺構は、290 号方形周溝墓北東周溝に大半を破壊される竪穴住居跡である。主柱穴・炉等の施設は検出されていない。

遺物はすべて一括取り上げ遺物である。工具ナデの甕（第 62 図 14）は遺物注記に「1001」とあり、ドッ

ト取り上げが示唆されるが、対応するラベルの記載は「溝中央」とあり、290 号方形周溝墓に伴う可能性が高い。切り合い関係と、小片ながら結節文区画の鉢（12）が認められることからすると、本遺構は、弥生時代後期後半から終末期の所産と推察できる。

61 号竪穴住居跡（第 61・62・63 図、図版 9・31・32・65）

形状：トラック形～隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.04 × 3.68　**遺存**：略完

面積（上端・下端・柱間；㎡）：12.70・11.75・2.50　**竪穴深度**（cm）：25　**主軸方位**：321°

柱間比（AB：BC）：1.49　**主柱穴深度**（cm）：A － 11.8　B － 8.5

柱間（m）：AB － 1.96　BC － 1.32?　CD － 1.92?　DA － 1.28?

本遺構は、4 号・6 号溝に切られる竪穴住居跡である。床面から主柱穴と見られる穴 2 箇所と炉、貯蔵穴を検出している。遺構の掘り込みは深くなく、覆土は大きく撹乱されたものと見られる。

遺物は、第 63 図 9・10・12 がドット取り上げで、2 の鉢も炉内のドットと対応する可能性が考えられる。段部を有する甕（9）と幅の広い肥厚装飾部を持つ鉢（2）の存在から、本遺構は弥生時代後期後半に位置づけられる。ハケメ調整の甕（6）等の新相を示す土器は、290 号方形周溝墓などと関連する混入遺物と見られる。

46 号竪穴住居跡（第 64・65 図、図版 8・29・62）

形状：トラック形～隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.00 × 3.36?　**遺存**：1/2

面積（上端・下端・柱間；㎡）：11.69・10.39・－　**竪穴深度**（cm）：29　**主軸方位**：311°

本遺構は、半分近くを 1 号溝に破壊される竪穴住居跡である。床面には西寄りの位置に炉が検出されたのみである。覆土中には焼土が広がっており、廃絶時に火を受けたことは明らかである。

遺物は、第 65 図 1・2・3・5・6・8・10・11・12 がドット取り上げ遺物の可能性が高いが、平面図との対応は不明である。このうち、同じ遺物注記を持つのは、2 と 3 と 14、6・8・10・12 である。ヘラミガキで光沢を持つほどに仕上げられる鉢（6）と小型器台（8）、緩やかに湾曲する底面の中央が明瞭にくぼむ白っぽい胎土が特徴的な壺（10）という非在地的な土器の存在に加えて、口縁端面の角度が鋭角になった壺（2）や結節文区画の壺（3）が見られることと竪穴平面形を考え合わせると、本遺構は弥生時代後期末から終末期前半に位置づけるのが妥当と思われる。

なお、胎土分析の結果、第 65 図 6 の精製鉢が在地産胎土の可能性（ランク B）、同 10 の底面中央がくぼむ壺が非在地産胎土の可能性が高い（ランク E）と判定されている。

47 号竪穴住居跡（第 64・65 図、図版 62）

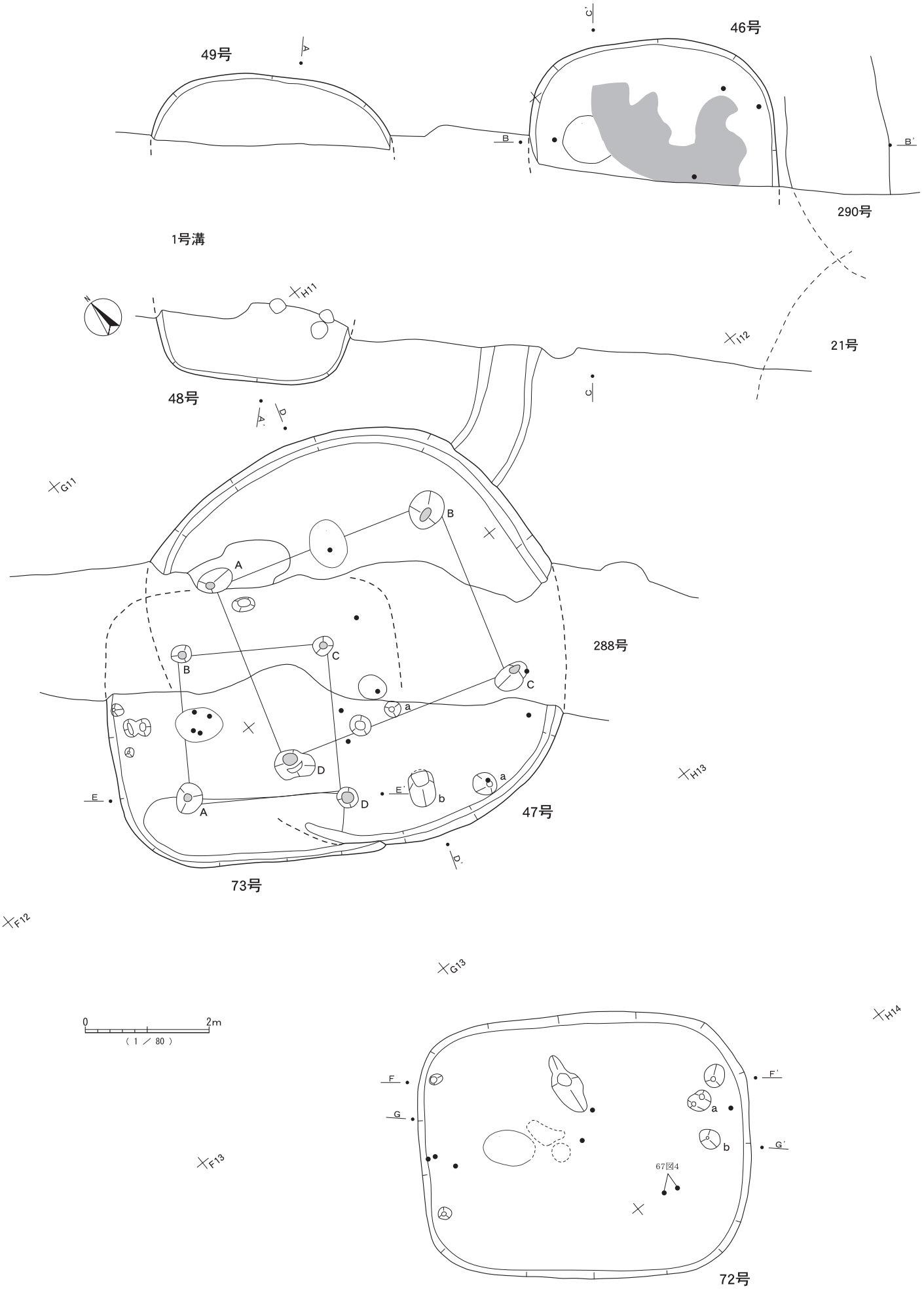
形状：トラック形～楕円形　**規模**（長軸×短軸；m）：6.80 × 6.24?　**遺存**：1/2

面積（上端・下端・柱間；㎡）：34.90・32.07・11.31　**竪穴深度**（cm）：35　**主軸方位**：17°

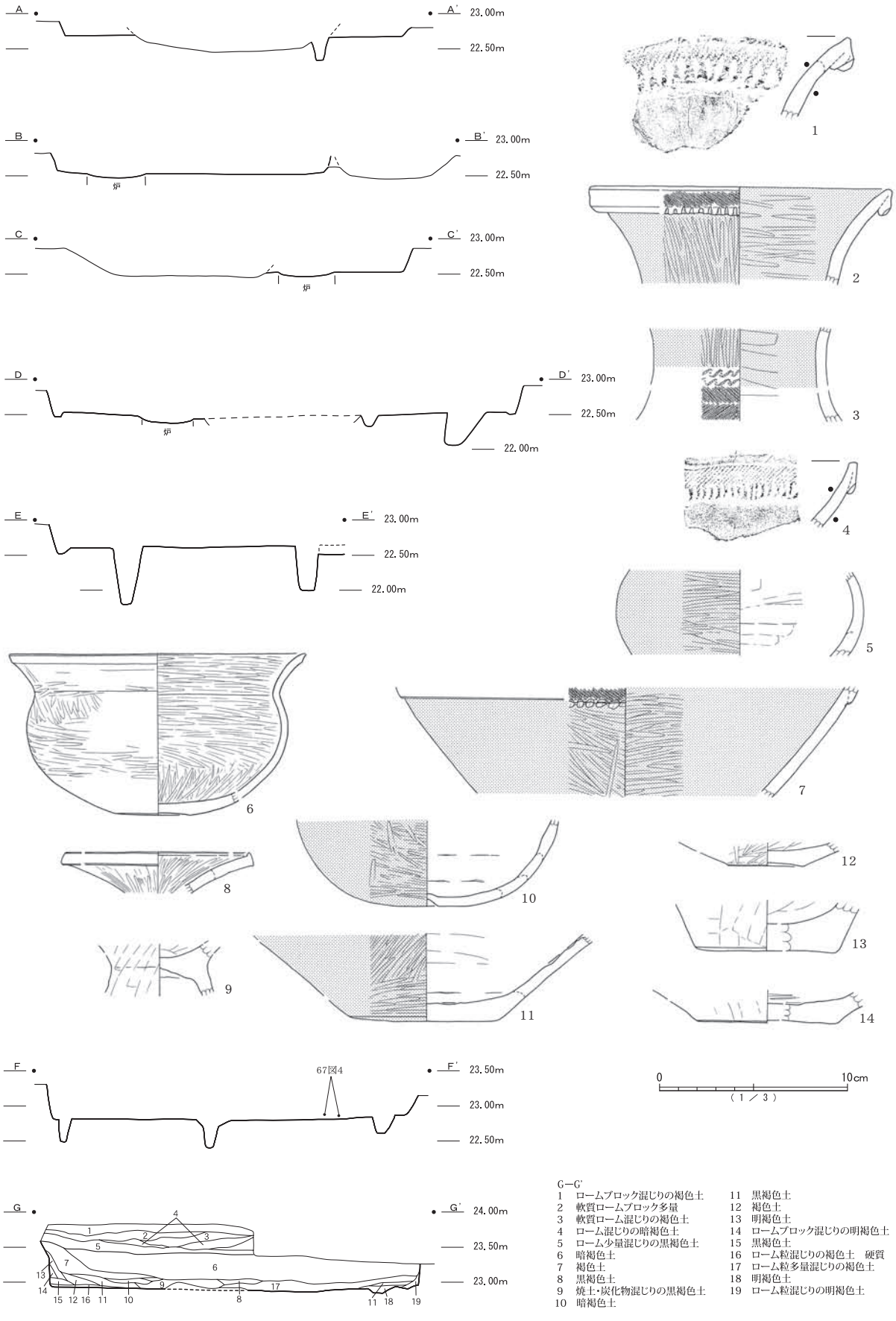
柱間比（AB：BC）：1.28　**主柱穴深度**（cm）：A － 94.8　B － 74.4　C － 88.8　D － 72.5

柱間（m）：AB － 3.84　BC － 3.00　CD － 3.84　DA － 3.00

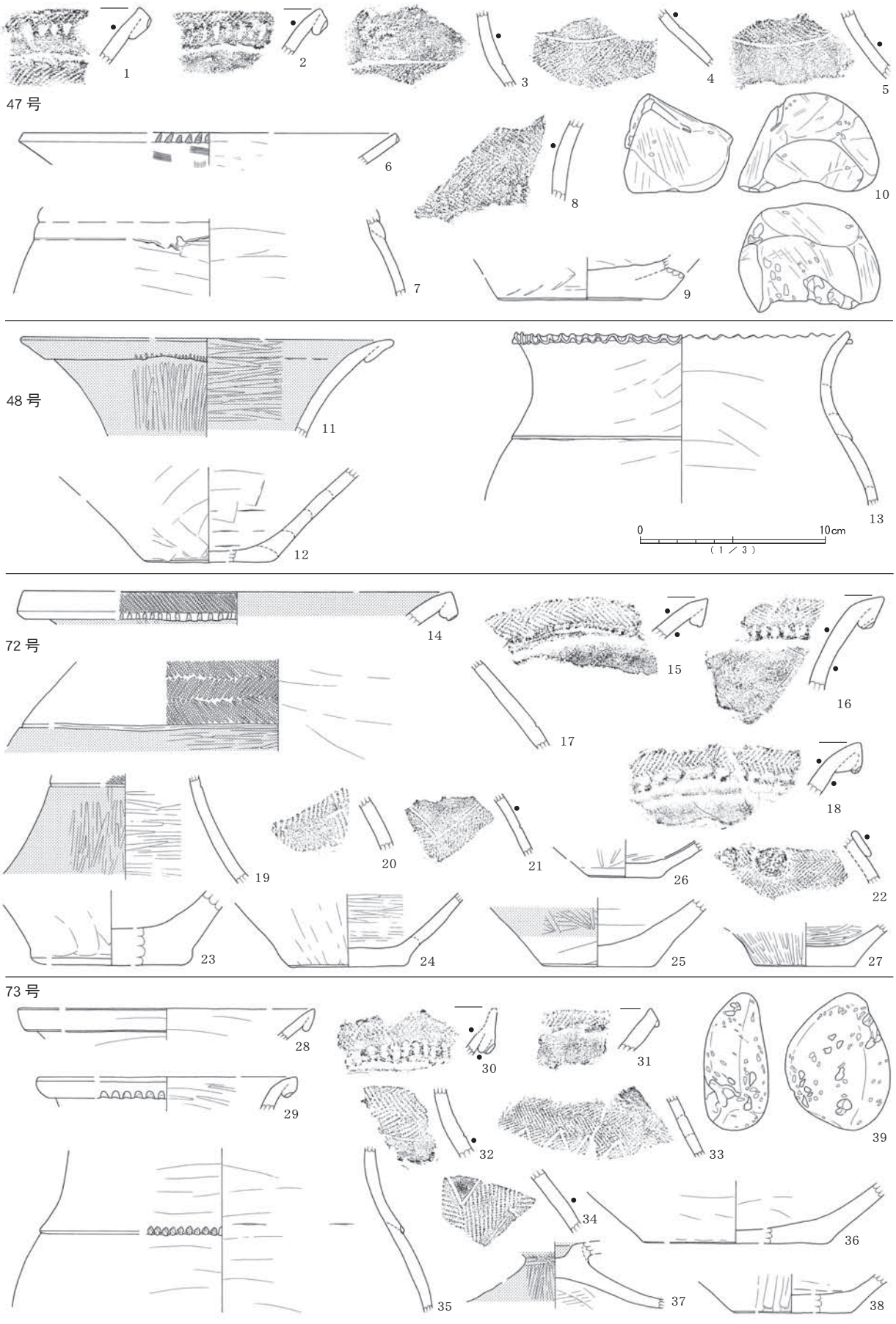
本遺構は、73 号竪穴住居跡と 288 号方形周溝墓に切られる竪穴住居跡である。主柱穴 4 箇所と北側柱穴間に炉、反対側にハシゴ穴が検出され、ハシゴ穴付近に貯蔵穴かと思われる穴が認められる。



第 64 図　46・47・48・49・72・73 号竪穴住居跡実測図



第 65 図　46・47・48・49・72・73 号竪穴住居跡および 46 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 66 図　48・72・73 号竪穴住居跡出土遺物実測図

遺物はすべて一括取り上げ遺物で、少量である。土器の他に砥石状の軽石製品（第 66 図 10）が出土している。沈線文区画の壺（3・4・5）は久ヶ原式であり、これらを積極的に評価すれば、本遺構は弥生時代後期前半に位置づけられよう。なお、面取りされた口縁端部にハケメ状工具による刺突文の加えられる土器（6）は非在地的な形状であり、288 号墓または 73 号竪穴住居跡に伴うものと思われる。

48 号竪穴住居跡（第 64・65・66 図、図版 8・24・62）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：3.28 × 2.92?　**遺存**：1/4

面積（上端・下端・柱間；㎡）：8.72・7.70・－　**竪穴深度**（cm）：12　**主軸方位**：313°

本遺構は、1 号溝に大半を破壊される竪穴住居跡である。49 号竪穴住居と対向する位置にあり、双方で 1 棟の竪穴住居を構成するように見えるが、平面形の不一致から別遺構としておく。床面施設は何も検出されていない。

遺物はすべて一括取り上げ遺物である。無文傾向の現れた壺（第 66 図 11）の存在と、竪穴平面形からすると、本遺構は弥生時代終末期に属する可能性が考えられる。

49 号竪穴住居跡（第 64・65 図、図版 8）

形状：トラック形　**規模**（長軸×短軸；m）：3.96 × 2.92?　**遺存**：1/4

面積（上端・下端・柱間；㎡）：10.11・9.16・－　**竪穴深度**（cm）：19　**主軸方位**：314°

本遺構は、1 号溝に大半を破壊される竪穴住居跡である。主柱穴と床面施設は検出されておらず、遺物もまったく出土していない。角張らない平面形から弥生時代に属する可能性も考えられるが、確定はできない。

72 号竪穴住居跡（第 64・66・67 図、図版 10・32・33・66・78）

形状：隅円長方形　**規模**（長軸×短軸；m）：5.36 × 4.32　**遺存**：完存

面積（上端・下端・柱間；㎡）：20.73・18.81・－　**竪穴深度**（cm）：39　**主軸方位**：306°

本遺構は、288 号墓墳丘内に位置する竪穴住居跡である。結果的に盛土に保護されたために、遺存状態は良好である。床面に明確な主柱穴は認められないが、西寄りに炉、反対側壁寄りにハシゴ穴・貯蔵穴と思われる穴が検出されている。

遺物は比較的豊富だが、段部を有する甕（第 67 図 4）のみが出土位置を確定できる。他のドットと対応する可能性のある遺物は、第 66 図 17・24・26、第 67 図 2・5・10・13・14 である。壺に見られるなだらかなプロポーションや沈線文区画、甕に見られる屈曲の弱い体部等、いずれも久ヶ原式の特徴が認められることから、本遺構は弥生時代後期前半の所産と位置づけられる。

なお、第 67 図 3・5 の甕は、胎土分析の結果、在地産胎土の可能性が高い（ランク A）と判定されている。

73 号竪穴住居跡（第 64・65・66 図、図版 66）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.80 × 4.40　**遺存**：1/3

面積（上端・下端・柱間；㎡）：20.08・18.66・5.62　**竪穴深度**（cm）：40　**主軸方位**：306°
柱間比（AB：BC）：0.97　**主柱穴深度**（cm）：A － 79.0　B － 60.8　C － 66.4　D － 50.8
柱間（m）：AB － 2.32　BC － 2.40　CD － 2.40　DA － 2.40

本遺構は、47 号竪穴住居跡を切り 288 号方形周溝墓に切られる竪穴住居跡である。大きく破壊されているが、主柱穴 4 箇所と炉の他に、ハシゴ穴・貯蔵穴と見られる穴を検出している。

遺物はすべて一括取り上げ遺物である。これらには久ヶ原式に特徴的な沈線文区画と単節 2 帯充填の山形文の壺（第 66 図 32・34）が見られるものの、多くは無文化傾向にある土器であり、竪穴平面形を勘案すると、本遺構は弥生時代後期末から終末期に位置づけるのが妥当である。288 号墓が本遺構を覆っている事実は、本遺構が弥生時代終末期でも初頭に近いことを示している。

24 号竪穴住居跡（第 68・69 図、図版 6・57）
形状：トラック形？　**規模**（長軸×短軸；m）：5.28? × 4.24?　**遺存**：1/2
面積（上端・下端・柱間；㎡）：19.35・16.28・－　**竪穴深度**（cm）：1　**主軸方位**：304°

本遺構は、52 号竪穴住居跡と 288 号方形周溝墓に切られる竪穴住居跡である。竪穴の深度はほとんどなく、痕跡的な検出状況である。床面施設は北西寄りに炉が検出されたのみである。

遺物は、小ぶりの壺下半（第 69 図 14）がいずれかのドットと対応するのを除いて、一括取り上げ遺物である。幅のある時期の遺物が混在しており、判然としないが、切り合い関係にある 52 号竪穴住居跡が弥生時代後期前半に帰属することをほぼ間違いないとすれば、それをさかのぼる時期にあることが考えられる。よって、不確定だが、本遺構は弥生時代後期前半に位置づけられる。

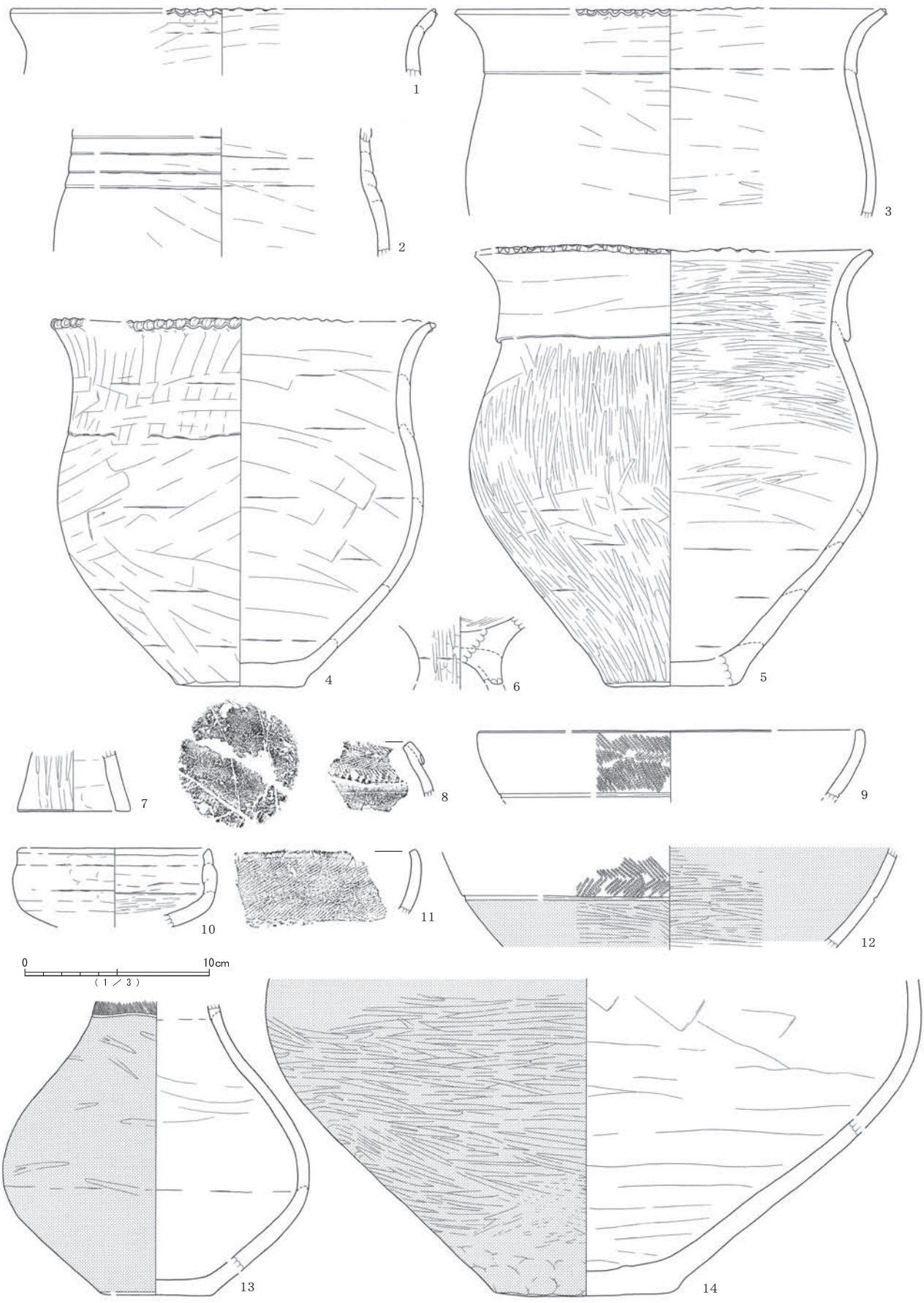
50 号竪穴住居跡（第 68・69 図、図版 62・63）
形状：楕円形　**規模**（長軸×短軸；m）：6.04? × 5.08?　**遺存**：1/3
面積（上端・下端・柱間；㎡）：24.71・23.17・－　**竪穴深度**（cm）：14　**主軸方位**：351°

本遺構は 51 号竪穴住居跡に切られ、1 号溝に大半を破壊される竪穴住居跡である。床面施設は貯蔵穴かと思われる穴が検出されただけである。

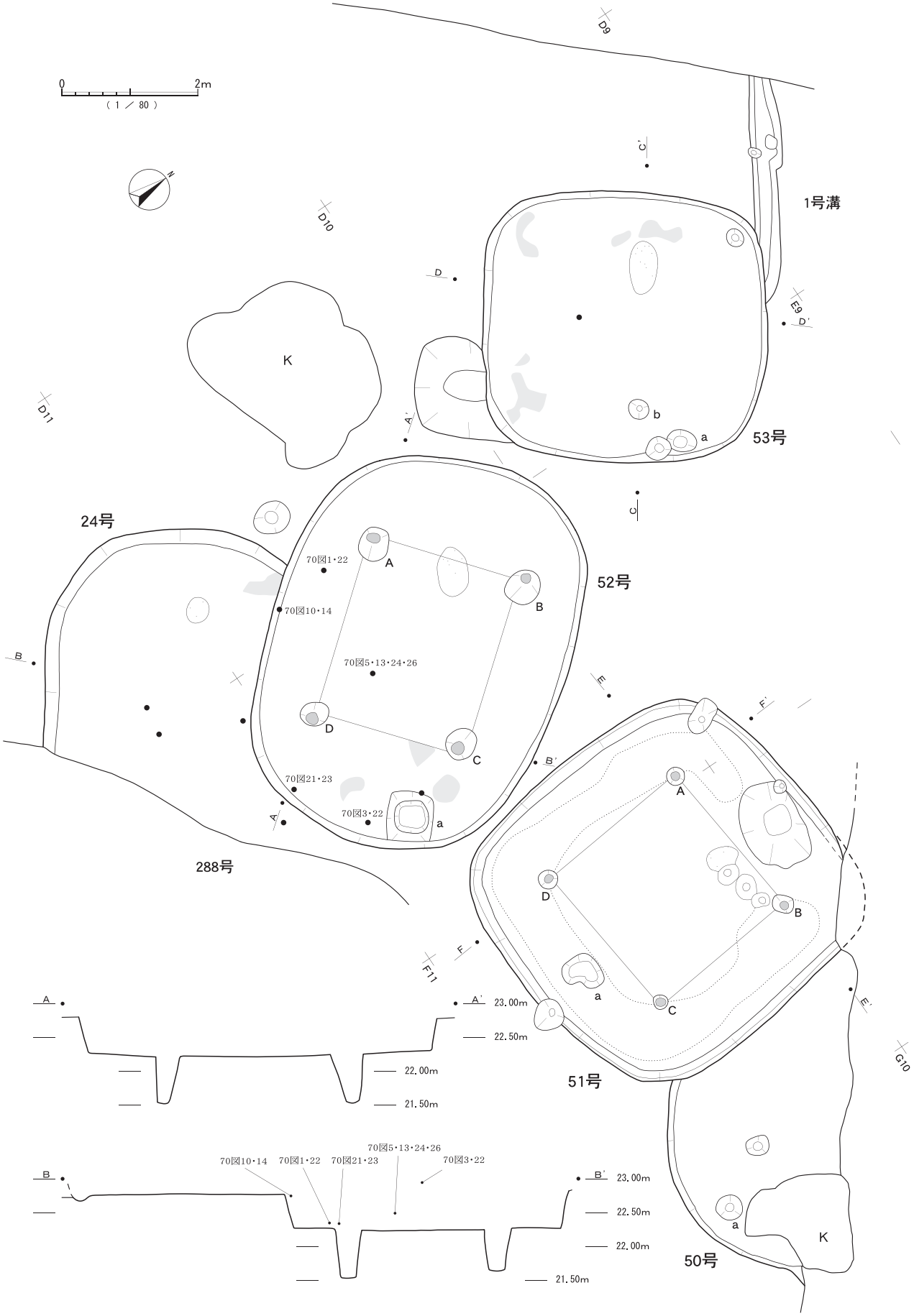
遺物は僅少で、すべて一括取り上げ遺物である。沈線文区画の壺（第 69 図 21）を積極的に評価すれば、本遺構は弥生時代後期前半に位置づけられよう。口縁端面が面取りされるハケメの甕（10）等は 288 号墓からの混入品である可能性が高い。

51 号竪穴住居跡（第 68・69 図、図版 8・63）
形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.96 × 4.84　**遺存**：略完
面積（上端・下端・柱間；㎡）：21.79・20.78・5.85　**竪穴深度**（cm）：36　**主軸方位**：355°
柱間比（AB：BC）：1.05　**主柱穴深度**（cm）：A － 30.0　B － 57.8　C － 66.7　D － 71.1
柱間（m）：AB － 2.48　BC － 2.36　CD － 2.48　DA － 2.36

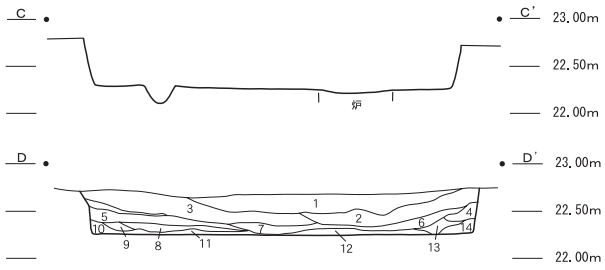
本遺構は、1 号溝に一角を切られ、50 号竪穴住居跡を切る竪穴住居跡である。主柱穴 4 箇所と、北側柱穴間に炉、反対側にハシゴ穴が検出されている。炉の北側にある土坑は後代の切り込みと見られる。床面柱穴間の空間外周に、床面構築土の変異が記録されているが、竪穴粗掘りに伴うものと判断



第 67 図　72 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 68 図　24・50・51・52・53 号竪穴住居跡実測図

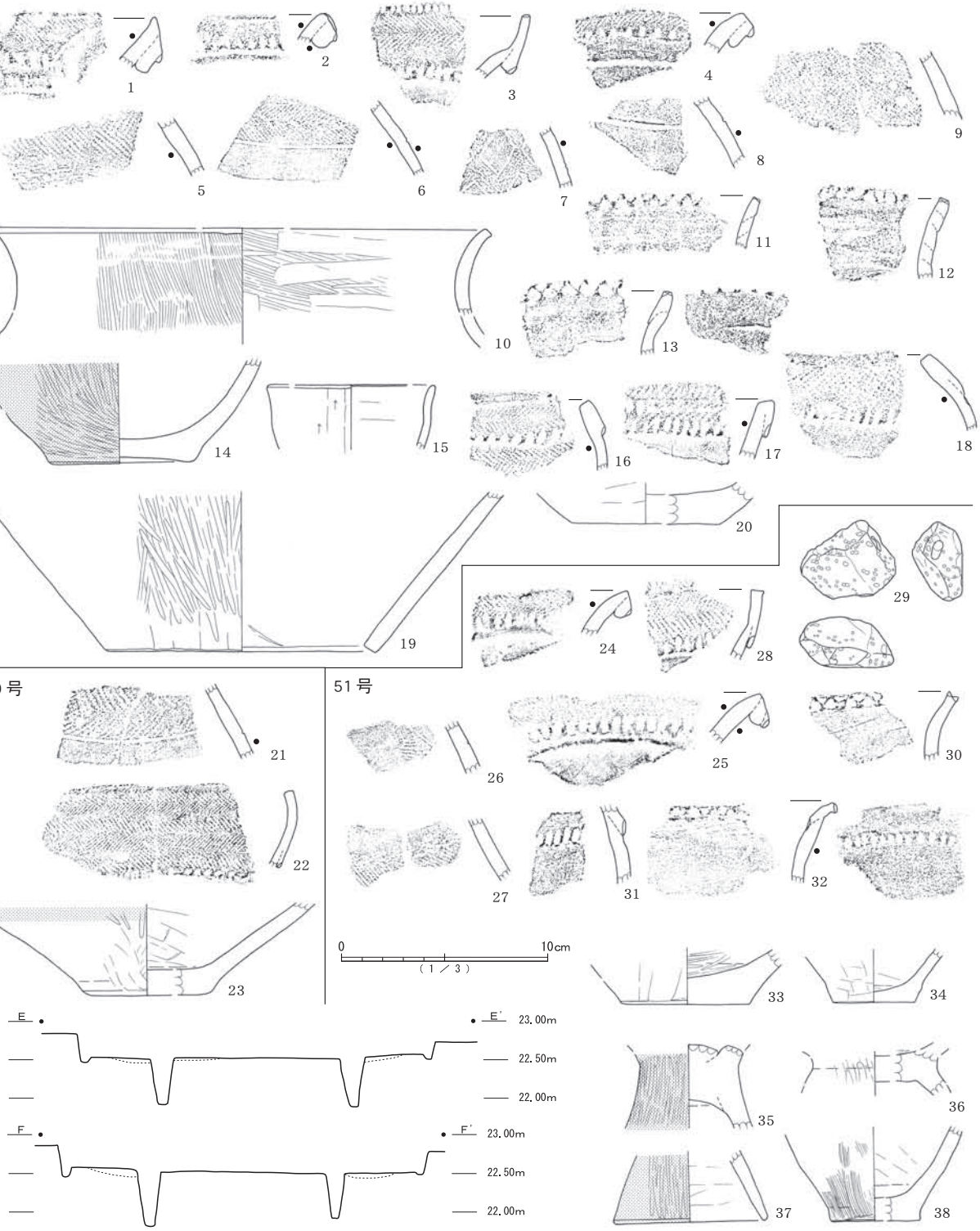


D－D'
1　ローム粒混じりの褐色土
2　ローム粒・小ブロック混じりの黄褐色土
3　ローム粒混じりの暗黄褐色土
4　黒褐色土
5　明褐色土
6　暗褐色土
7　黒褐色土
8　暗褐色土
9　暗黄褐色土
10　黒褐色土
11　焼土混じりの暗褐色土　硬質
12　ローム粒混じりの黒褐色土
13　ロームブロック混じりの暗褐色土
14　ローム粒混じりの暗褐色土

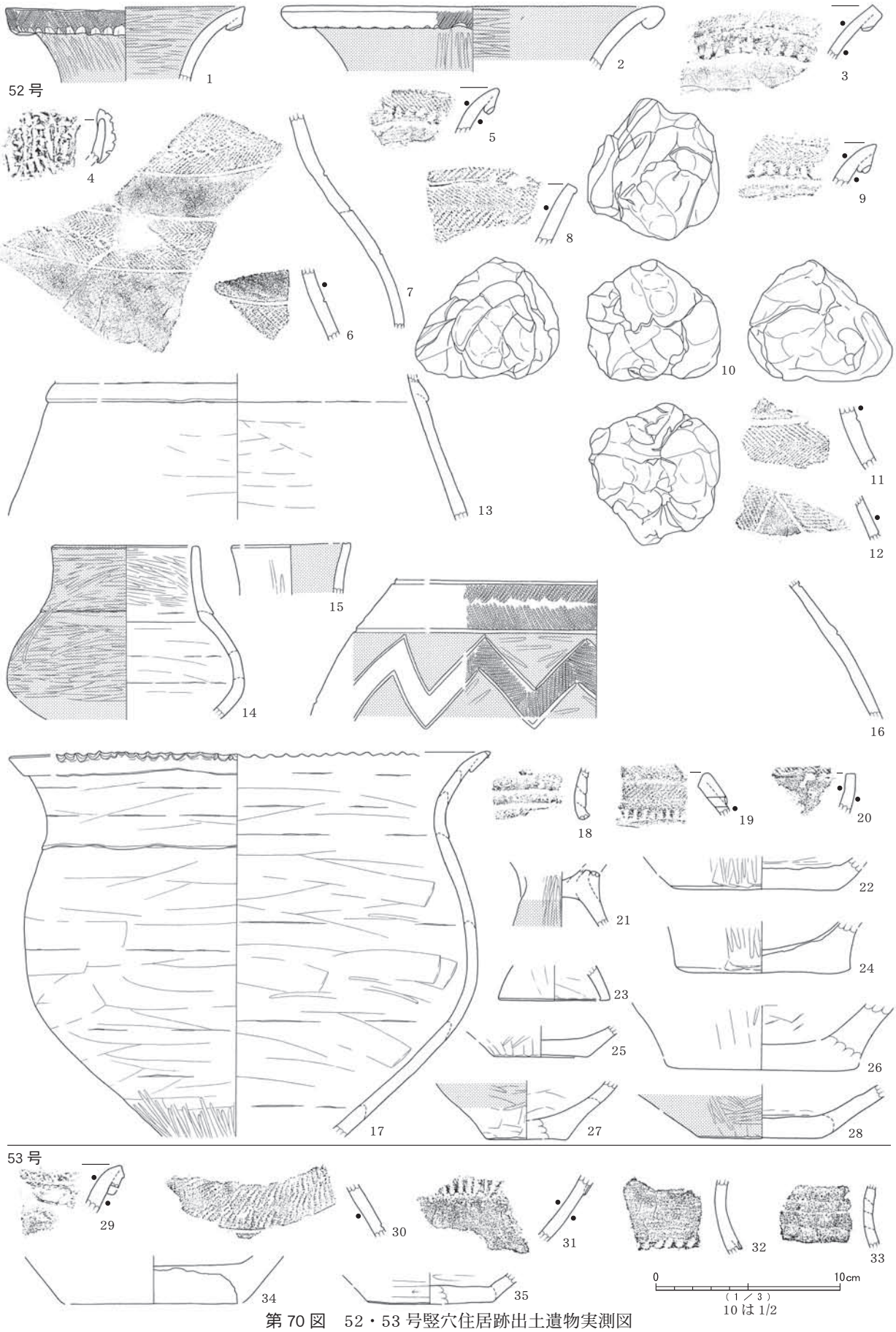
24 号

50 号

51 号



第 69 図　24・50・51・52・53 号竪穴住居跡および 24・50・51 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 70 図　52・53 号竪穴住居跡出土遺物実測図

できる。

遺物は少量の土器の他に、軽石（第69図29）が出土している。遺物はすべて一括取り上げ遺物であり、判然としないが、竪穴平面形と高杯・台付甕の脚台部（35・36）から、本遺構が弥生時代終末期に属する可能性を考えたい。

52号竪穴住居跡（第68・69・70図、図版8・29・63・80）

形状：トラック形　**規模**（長軸×短軸；m）：5.92 × 4.40　**遺存**：完存

面積（上端・下端・柱間；㎡）：22.19・20.31・5.98　**竪穴深度**（cm）：56　**主軸方位**：321°

柱間比（AB：BC）：0.84　**主柱穴深度**（cm）：A － 72.0　B － 71.8　C － 63.5　D － 71.4

柱間（m）：AB － 2.28　BC － 2.72　CD － 2.28　DA － 2.76

本遺構は24号竪穴住居跡を切る竪穴住居跡である。竪穴の掘り込みは深く、主柱穴4箇所もしっかりと掘り込まれている。北西側柱穴間に炉、反対側壁際に貯蔵穴が検出されている。貯蔵穴は掘り込みが2段あり、蓋受けのような形状を呈している。覆土中には焼土が散っており、廃絶時に火を受けたと見られる。

遺物は、第70図3・5・10・13・14・21・22・23・24・26・28がドット取り上げされており、このうち、[3・22]、[5・13・24・26]、[10・14、21・23・28]のそれぞれが同じ遺物注記を持つ。これらの他の一括取り上げ遺物に見られる沈線文区画と山形文の存在を勘案すると、本遺構は弥生時代後期前半に位置づけることが可能である。

53号竪穴住居跡（第68・69・70図、図版8・63）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.20 × 4.00　**遺存**：完存

面積（上端・下端・柱間；㎡）：14.92・13.72・－　**竪穴深度**（cm）：49　**主軸方位**：307°

本遺構は、調査区西端近くに位置し1号溝に接する竪穴住居跡である。主柱穴は認められないが、床面北西寄りに炉、反対側に貯蔵穴・ハシゴ穴と見られる穴を検出している。覆土中に焼土が認められることからすると、廃絶時に火を受けた可能性が高い。

遺物は僅少で、すべて一括取り上げ遺物である。本遺構は竪穴平面形を積極的に評価すると、弥生時代後期に属する可能性が高い。だが、近傍に弥生時代後期前半の52号が位置することから、弥生時代後期後半に重心がある時期を与えておきたい。

55号竪穴住居跡（第71・72図、図版9・64）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：3.88? × 3.76　**遺存**：略完

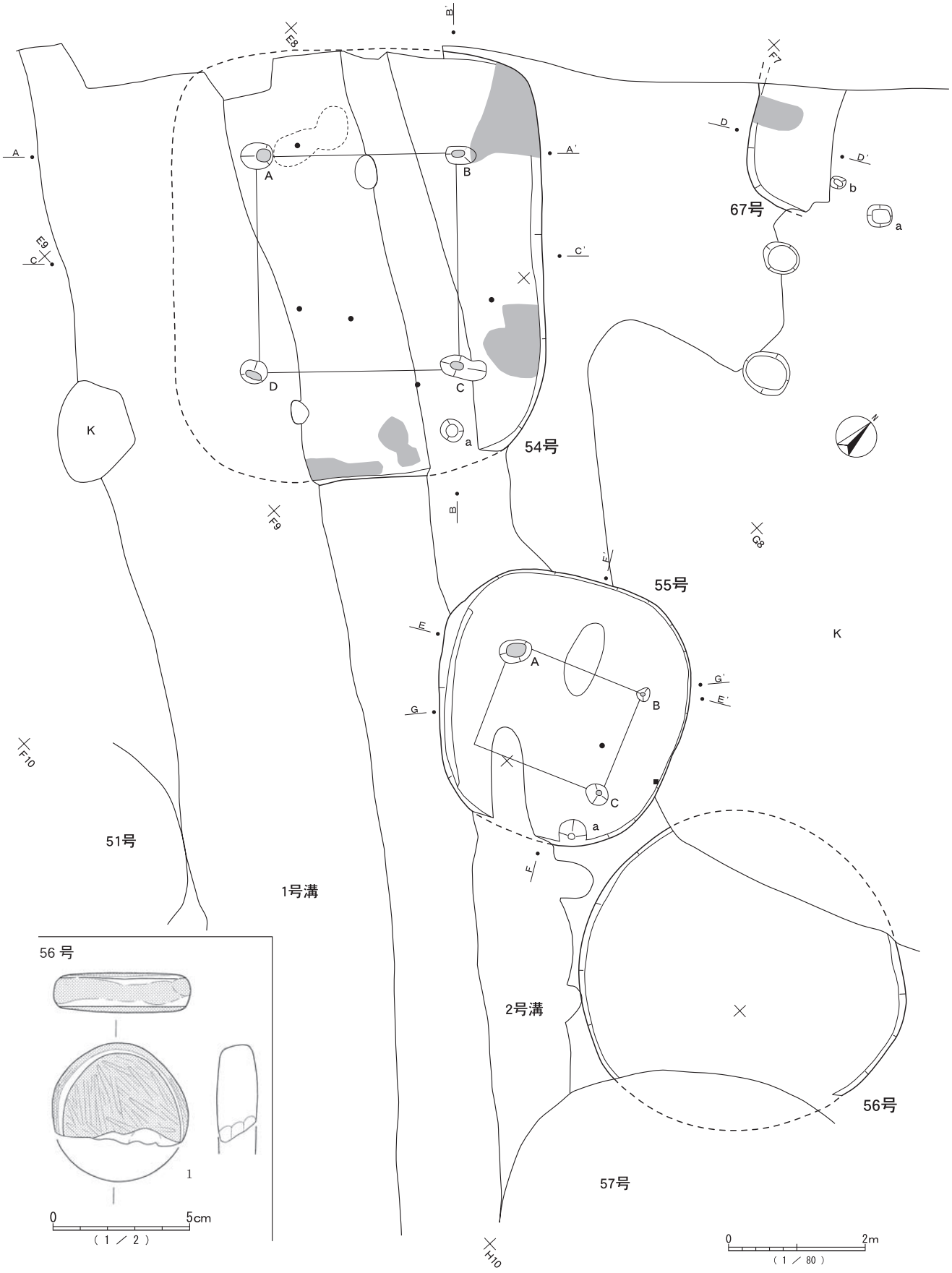
面積（上端・下端・柱間；㎡）：12.03・11.04・3.06　**竪穴深度**（cm）：22　**主軸方位**：334°

柱間比（AB：BC）：1.25　**主柱穴深度**（cm）：A － 13.8　B － 12.2　C － 25.2

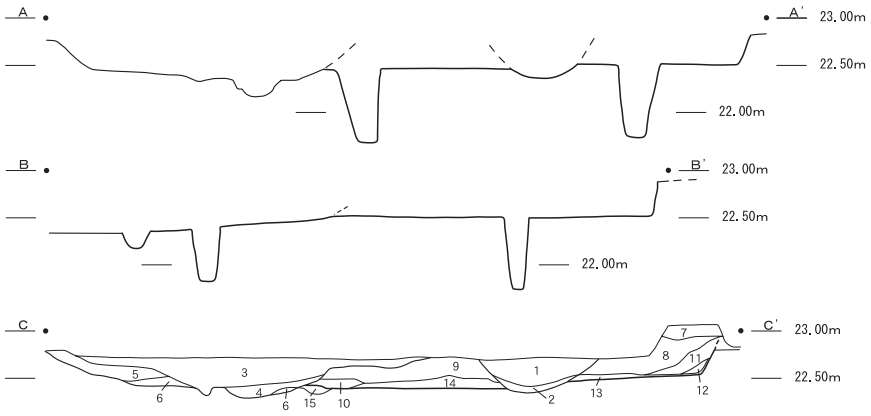
柱間（m）：AB － 2.00　BC － 1.60　CD － 1.96?　DA － 1.52

本遺構は2号溝に上面の大半を破壊される竪穴住居跡である。主柱穴と見られる穴が3箇所検出され、北西柱穴間には炉が認められる。炉の反対側壁際には貯蔵穴と見られる穴も見られる。

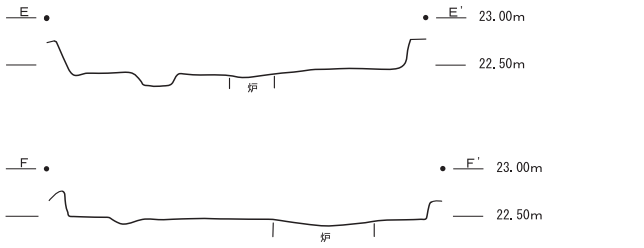
遺物は、第72図1・4・5・6・7が同一注記を持ち、平面図黒丸ドットと対応する可能性が高い。



第 71 図　54・55・56・67 号竪穴住居跡実測図および 56 号竪穴住居跡出土遺物実測図

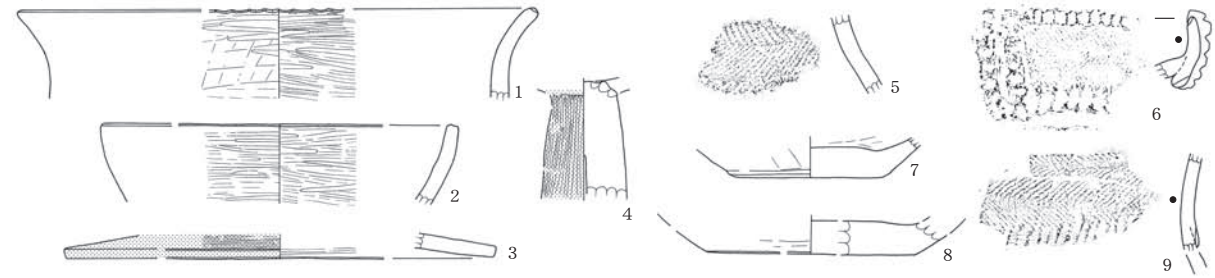


C—C'
1　黒色土斑少量混じりの暗褐色土
2　ローム粒少量混じりの黒色土
3　黒褐色土　硬質　道路覆土
4　黒褐色土　硬質　道路覆土
5　暗褐色土　若干硬質
6　ロームブロック混じりの黄褐色土
7　暗褐色土
8　黒褐色土
9　ローム粒多量混じりの黒褐色土
10　ローム微粒少量混じりの暗茶褐色土
11　茶褐色土
12　ロームブロック少量・炭化物少量混じりの暗黄褐色土
13　ロームブロック多量混じりの黒褐色土
14　ロームブロック多量・暗褐色土混じりの黒褐色土
15　ロームブロック混じりの暗褐色土

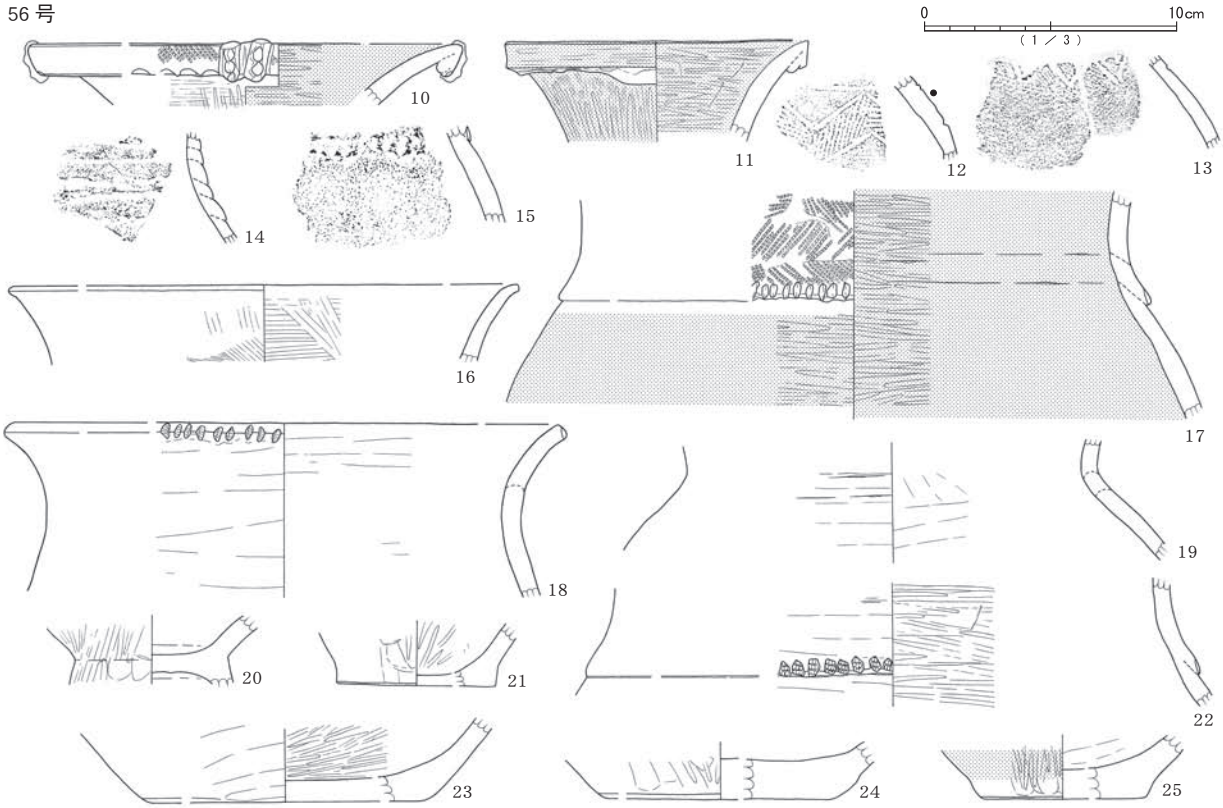


G—G'
1　黒色斑少量混じりの暗褐色土
2　ローム微粒混じりの暗褐色土
3　ローム微粒混じりの暗褐色土
4　ローム粒少量混じりの暗黄褐色土
5　ローム粒少量混じりの黒褐色土
6　ローム粒多量・ロームブロック混じりの暗褐色土
7　ローム粒混じりの暗褐色土
8　黒褐色土
9　暗褐色土斑混じりの黒褐色土
10　黒褐色土
11　暗褐色土
12　黒色土
13　暗褐色土　硬質
14　ロームブロック混じりの黒褐色土

55 号



56 号



第 72 図　54・55・56・67 号竪穴住居跡および 55・56 号竪穴住居跡出土遺物実測図

一方向だけの口縁端部刺突（1）や、中実部の多い脚柱の高杯（4）の存在を積極的に評価すれば、本遺構の帰属時期は弥生時代終末期にあると思われる。

56 号竪穴住居跡（第 71・72 図、図版 64）

形状：円形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.84 × 4.60　**遺存**：1/2

面積（上端・下端・柱間；㎡）：17.28・16.24・－　**竪穴深度**（cm）：19　**主軸方位**：－

本遺構は 57 号竪穴住居跡と現代の撹乱坑に切られる竪穴住居跡である。床面には柱穴・炉等の施設は何も検出されていない。

遺物はすべて一括取り上げ遺物である。土器の他に土製円盤（第 71 図 1）が出土している。57 号竪穴住居跡に切られる可能性があることからすれば、本遺構はそれ以前の所産と見られるが、土器の中には、結節文区画の壺（第 72 図 13）や無文化傾向にある壺（11）が認められるため、帰属時期は弥生時代後期の中でも後半にある可能性を考えたい。

54 号竪穴住居跡（第 71・73 図、図版 8・30・31・63・64・80）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：6.28 × 5.40　**遺存**：1/2

面積（上端・下端・柱間；㎡）：32.05・30.08・9.14　**竪穴深度**（cm）：31　**主軸方位**：312°

柱間比（AB：BC）：0.92　**主柱穴深度**（cm）：A － 76.3　B － 73.8　C － 70.8　D － 80.0

柱間（m）：AB － 2.92　BC － 3.16　CD － 2.92　DA － 3.16

本遺構は調査区西端にあり、1 号溝・2 号溝に大きく破壊される竪穴住居跡である。覆土中には壁際を中心にして焼土が検出されており、廃絶時に火を受けた可能性が考えられる。床面には主柱穴 4 箇所と柱穴間に炉があり、東側柱穴列の延長上に貯蔵穴と見られる穴が検出されている。

遺物はドット取り上げされたものとして、第 73 図 1・5・7・9・11・12・17・18・19・22・23・24・25 が挙げられ、このうち、[1・9・19]、[1・5・24]、[5・11・25] のそれぞれが同一注記を持つ。結節多段の文様帯を持つ撫で肩の壺（1）、大きく開く口縁部を持つハケメ仕上げの甕（9）、底面外周に刳り込み装飾を持つ鉢（18）は宮ノ台式でも後葉の特徴を示す。これらの特徴から、本遺構は弥生時代中期末に位置づけられる。

67 号竪穴住居跡（第 71 図）

形状：方形　**規模**（長軸×短軸；m）：3.60? × 3.60?　**遺存**：一部

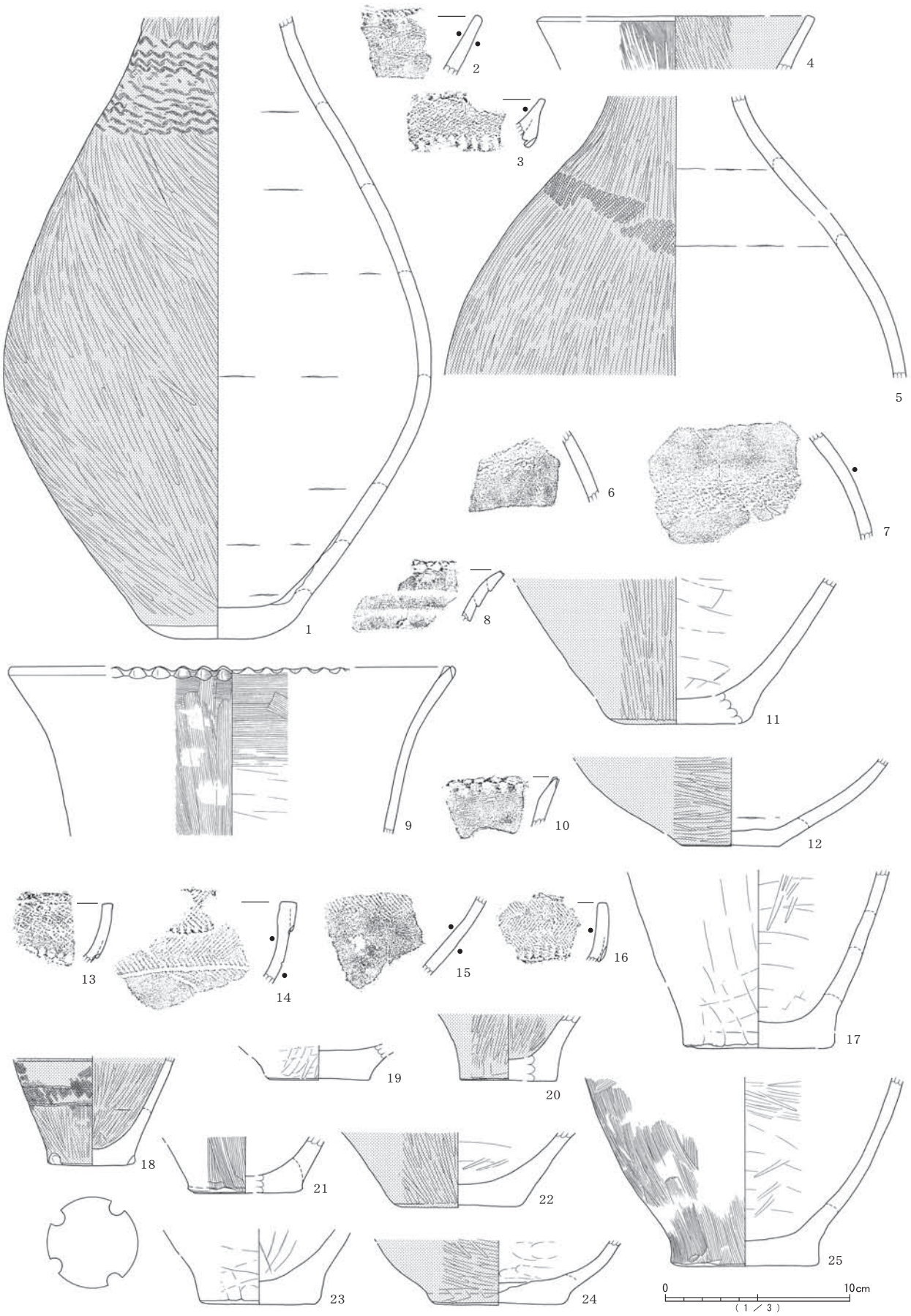
面積（上端・下端・柱間；㎡）：11.98・10.75・－　**竪穴深度**（cm）：28　**主軸方位**：329°

本遺構は、調査区西端で検出された竪穴住居跡である。検出された一角は方形もしくは隅円方形を呈するが、ごく一部の検出であり、全体像は不明である。覆土中に焼土が検出されており、廃絶時に火を受けたものと見られる。遺物はまったく出土しておらず、帰属時期も不明である。

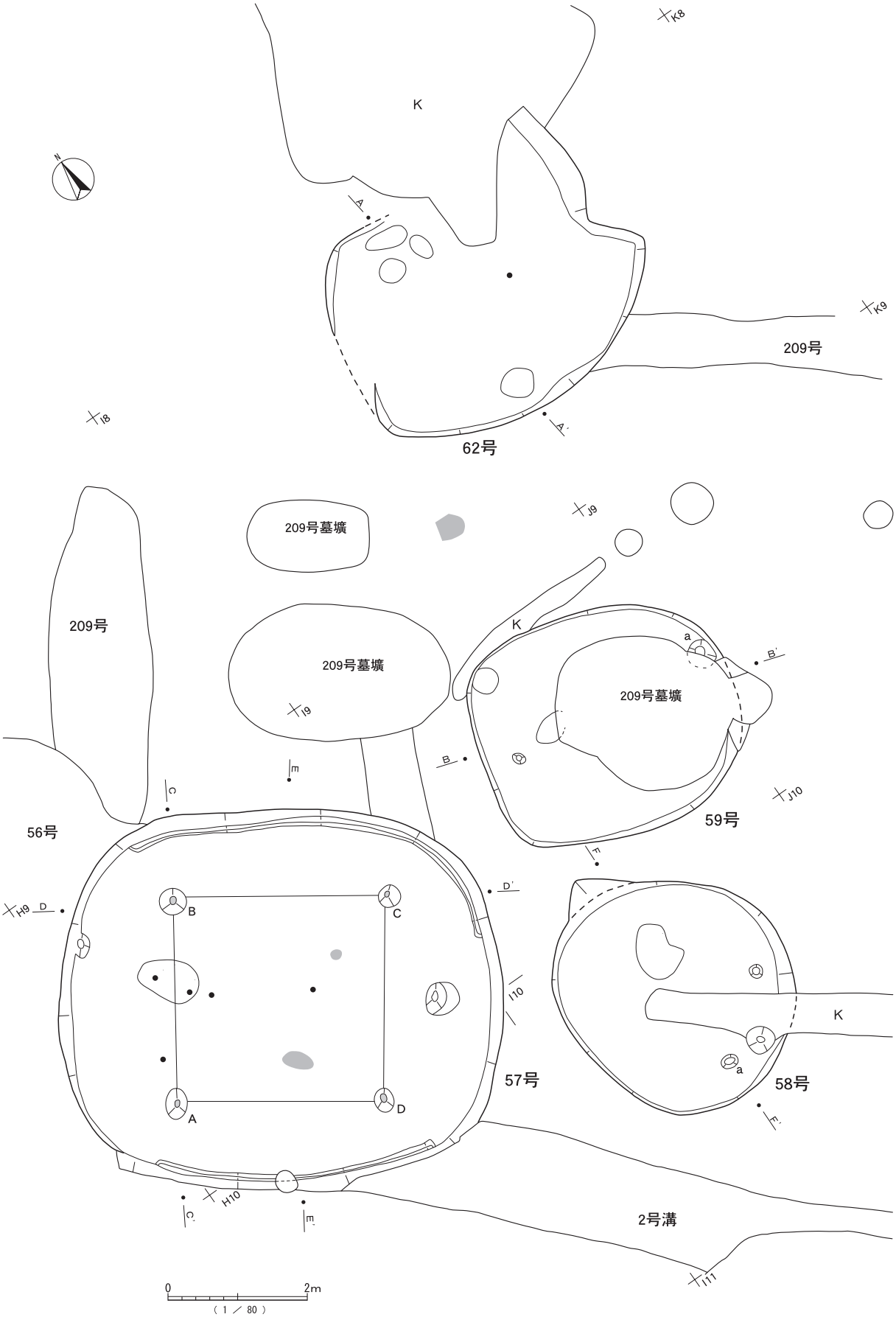
58 号竪穴住居跡（第 74・75 図、図版 9・64）

形状：円形　**規模**（長軸×短軸；m）：3.48? × 3.28　**遺存**：略完

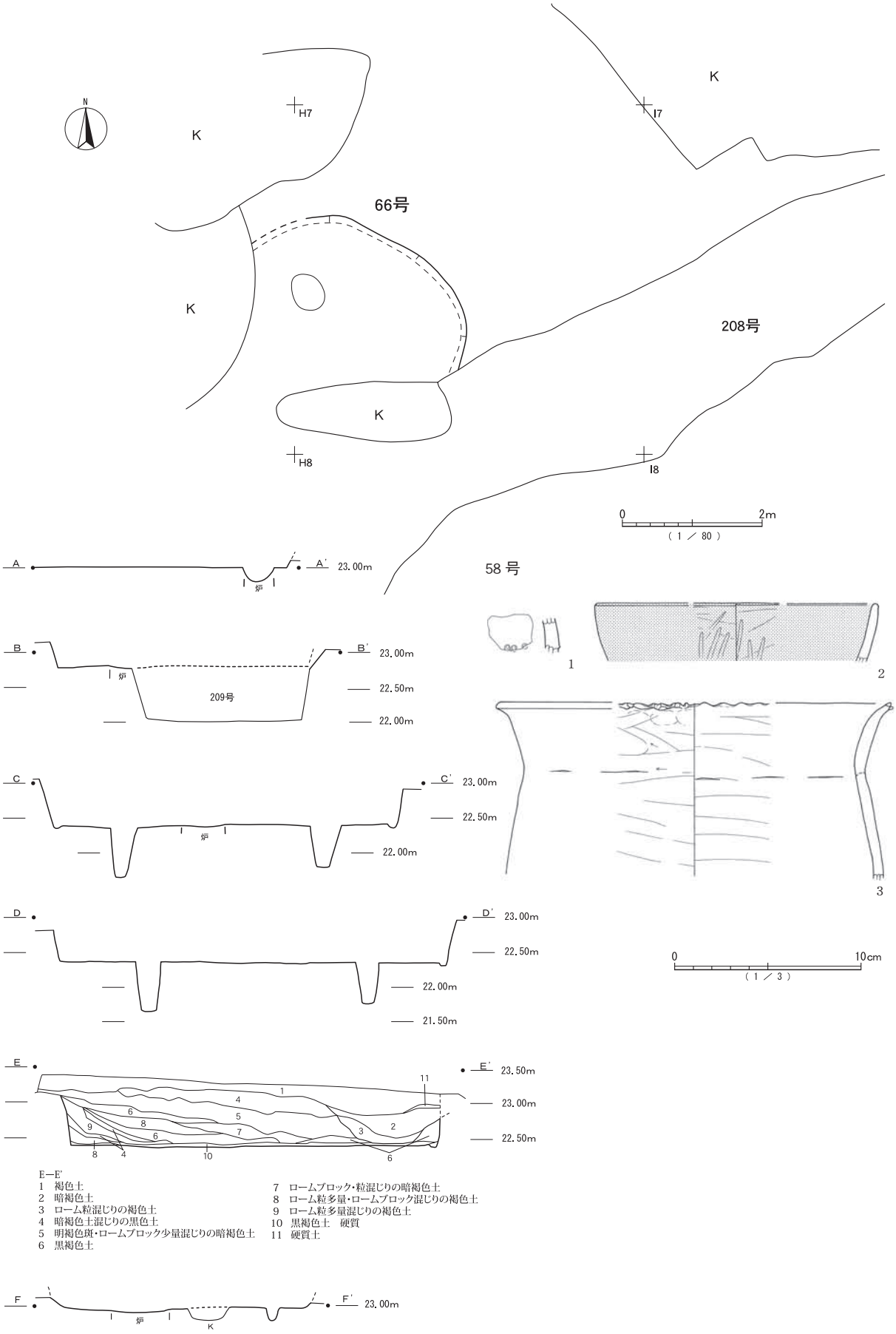
面積（上端・下端・柱間；㎡）：8.95・8.03・－　**竪穴深度**（cm）：10　**主軸方位**：12°



第 73 図　54 号竪穴住居跡出土遺物実測図

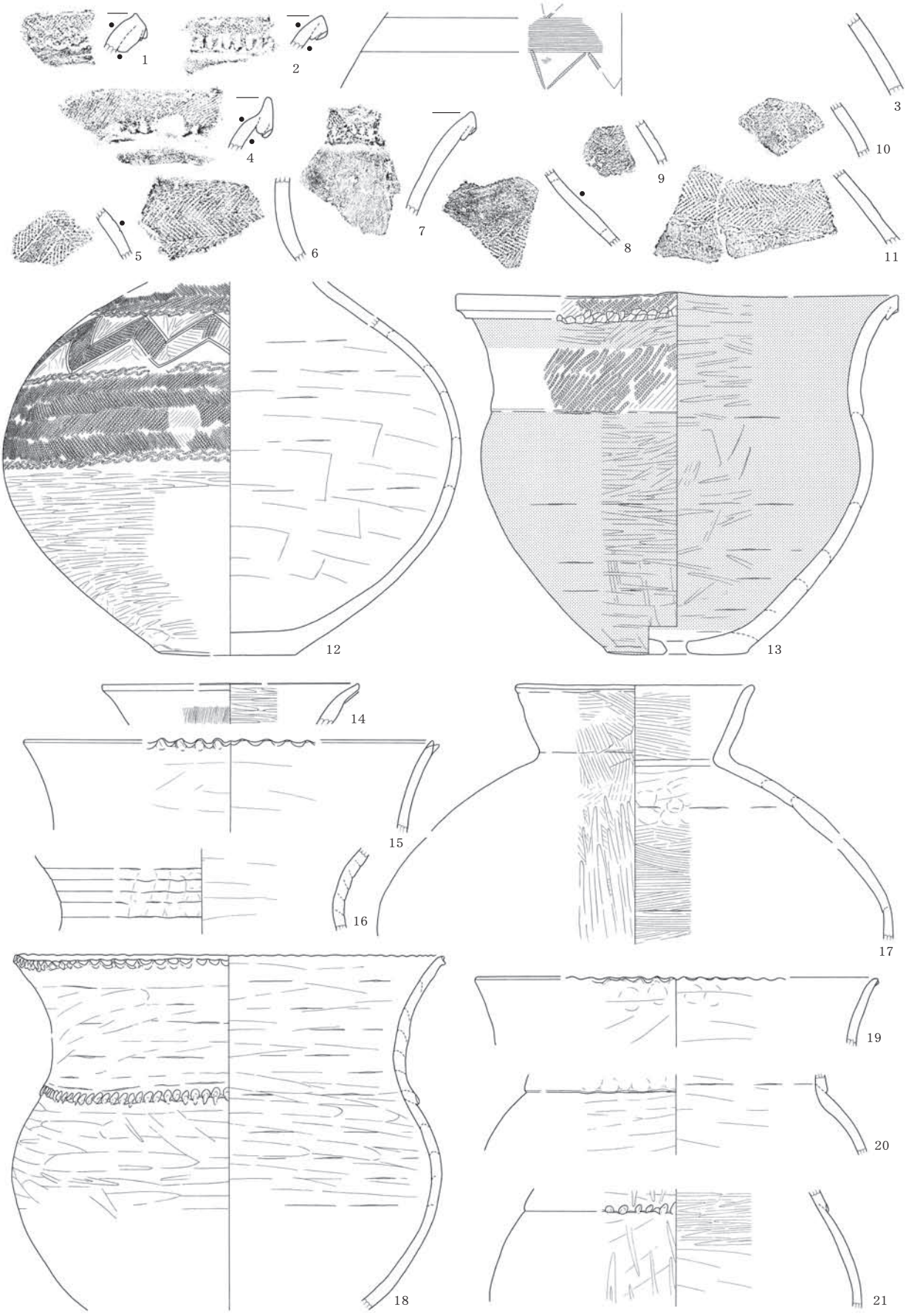


第 74 図　57・58・59 号竪穴住居跡実測図



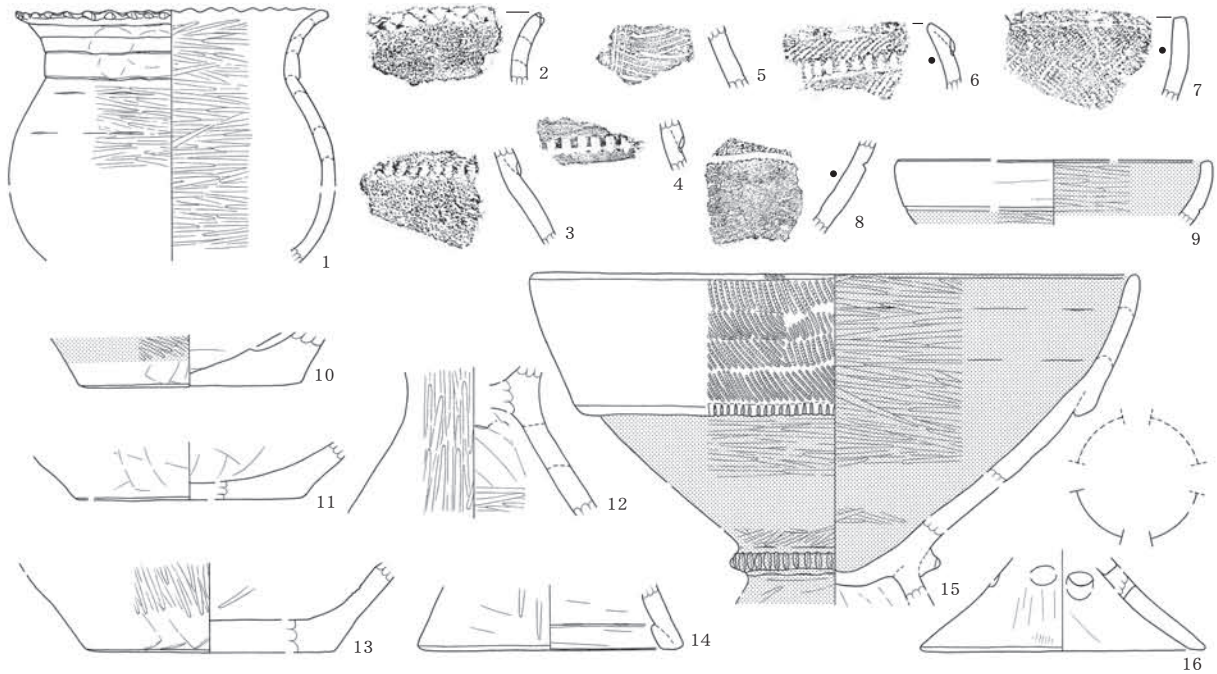
E—E'
1　褐色土
2　暗褐色土
3　ローム粒混じりの褐色土
4　暗褐色土混じりの黒色土
5　明褐色斑・ロームブロック少量混じりの暗褐色土
6　黒褐色土
7　ロームブロック・粒混じりの暗褐色土
8　ローム粒多量・ロームブロック混じりの褐色土
9　ローム粒多量混じりの褐色土
10　黒褐色土　硬質
11　硬質土

第 75 図　57・58・59・66 号竪穴住居跡および 58 号竪穴住居跡出土遺物実測図

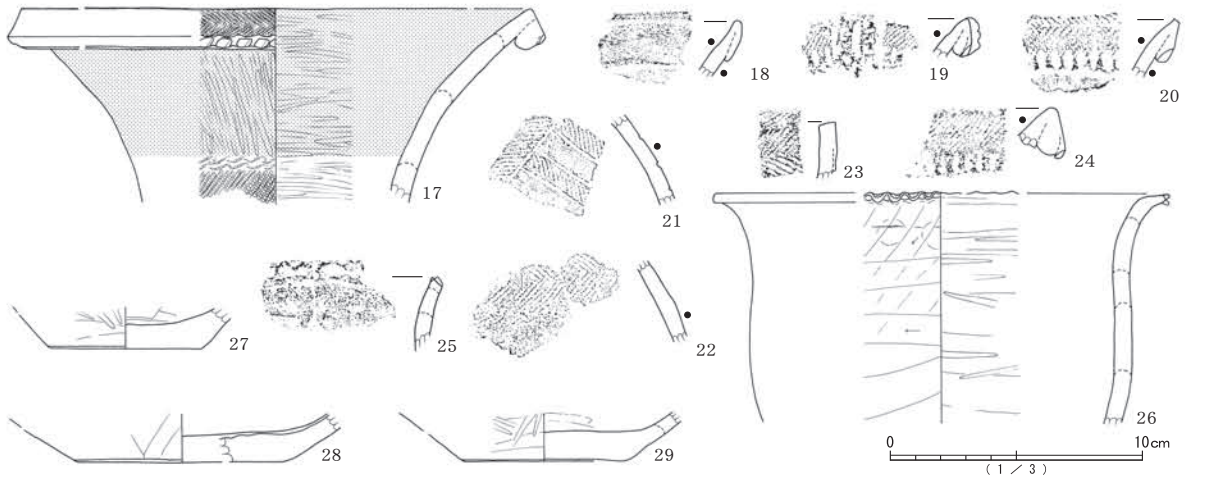


第 76 図　57 号竪穴住居跡出土遺物実測図

57 号



59 号



第 77 図　57・59 号竪穴住居跡出土遺物実測図

本遺構は、2 号溝と並行する撹乱に一部を破壊される竪穴住居跡である。床面には北寄りの位置に炉、反対側にハシゴ穴が検出されているが、柱穴は不明である。

遺物は僅少で、すべて一括取り上げ遺物である。時期を決定するのは難しいが、口縁端部に両側から刺突を施されるナデ仕上げの甕（第 75 図 3）の存在と、竪穴の形状から、本遺構は弥生時代後期に属するものと思われる。

57 号竪穴住居跡（第 74・75・76 図、図版 9・30・31・64・79・81）

形状：隅円方形～トラック形　**規模**（長軸×短軸；m）：6.40 × 5.32　**遺存**：完存

面積（上端・下端・柱間；㎡）：29.28・26.93・8.73　**竪穴深度**（cm）：65　**主軸方位**：306°

柱間比（AB：BC）：0.97　**主柱穴深度**（cm）：A － 57.4　B － 71.6　C － 57.6　D － 62.7

柱間（m）：AB － 2.96　BC － 3.04　CD － 2.96　DA － 2.96

本遺構は、56 号竪穴住居跡を切り、2 号溝に切られる竪穴住居跡である。208 号・209 号方形周溝墓の周溝跡が想定される位置であるが、その痕跡は確認できない。竪穴の掘り込みは深く、4 箇所の主柱穴も明瞭である。床面には他に、西側柱穴間に炉、反対側壁際にハシゴ穴が検出されている。覆土中にはまばらに焼土が認められ、廃絶時に火を受けた可能性が考えられる。

遺物はドット取り上げされた遺物として、第 76 図 2･6･7･8･12･18、第 77 図 1･15 があるものの、平面図との対応は確定できない。このうち同じ遺物注記を持つものは、[第 76 図 7･12]、[第 76 図 2･12・18・第 77 図 1]、[第 76 図 6・8・18] である。遺存状態の良い結節文区画の山形文壺（第 76 図 12)、段部に刺突文の施される甕（第 76 図 18)、一括取り上げ遺物ながら幅広の文様帯肥厚部を持つ高杯（第 77 図 15）の様相は山田橋式の特徴を示している。よって、本遺構は弥生時代後期後半に属すると考えられる。

本遺構周辺の竪穴住居跡の構築時期と、208 号・209 号方形周溝墓の関係が問題となるが、切り合い部の覆土の状態が不明であり、時期判定に適した遺物の出土がないことから、確実な構築順序の復元は困難である。ただし、弥生時代後期後半と見られる 59 号竪穴住居跡を墓壙状の土坑が切ることを勘案すると、両遺構が弥生時代後期後半以降の築造である可能性も考えられる。201 号・202 号・203 号方形周溝墓・1 号土壙が弥生時代後期中葉に前後して構築されていることを考えると、系統は不明ながら後続する墓群が地点を移すことに不思議はないと言える。

なお、胎土分析によると、第 76 図 3 のパレススタイル壺が非在地産胎土の可能性が高い（ランク E) と判定されている。

59 号竪穴住居跡（第 74・75・77 図、図版 9・64・65）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m)：3.76? × 3.28　**遺存**：1/2

面積（上端・下端・柱間；㎡)：10.74・9.80・－　**竪穴深度**（cm)：65　**主軸方位**：292°

本遺構は、中央を 209 号墓壙の可能性がある土坑に破壊される竪穴住居跡である。床面施設は西寄りに炉、反対側に貯蔵穴と見られる穴がかろうじて検出されている。

遺物はすべて一括取り上げ遺物である。結節文区画の壺(第 77 図 17･22)の存在を積極的に捉えれば、本遺構は弥生時代後期後半の所産と考えられる。

62 号竪穴住居跡（第 74・75 図、図版 9）

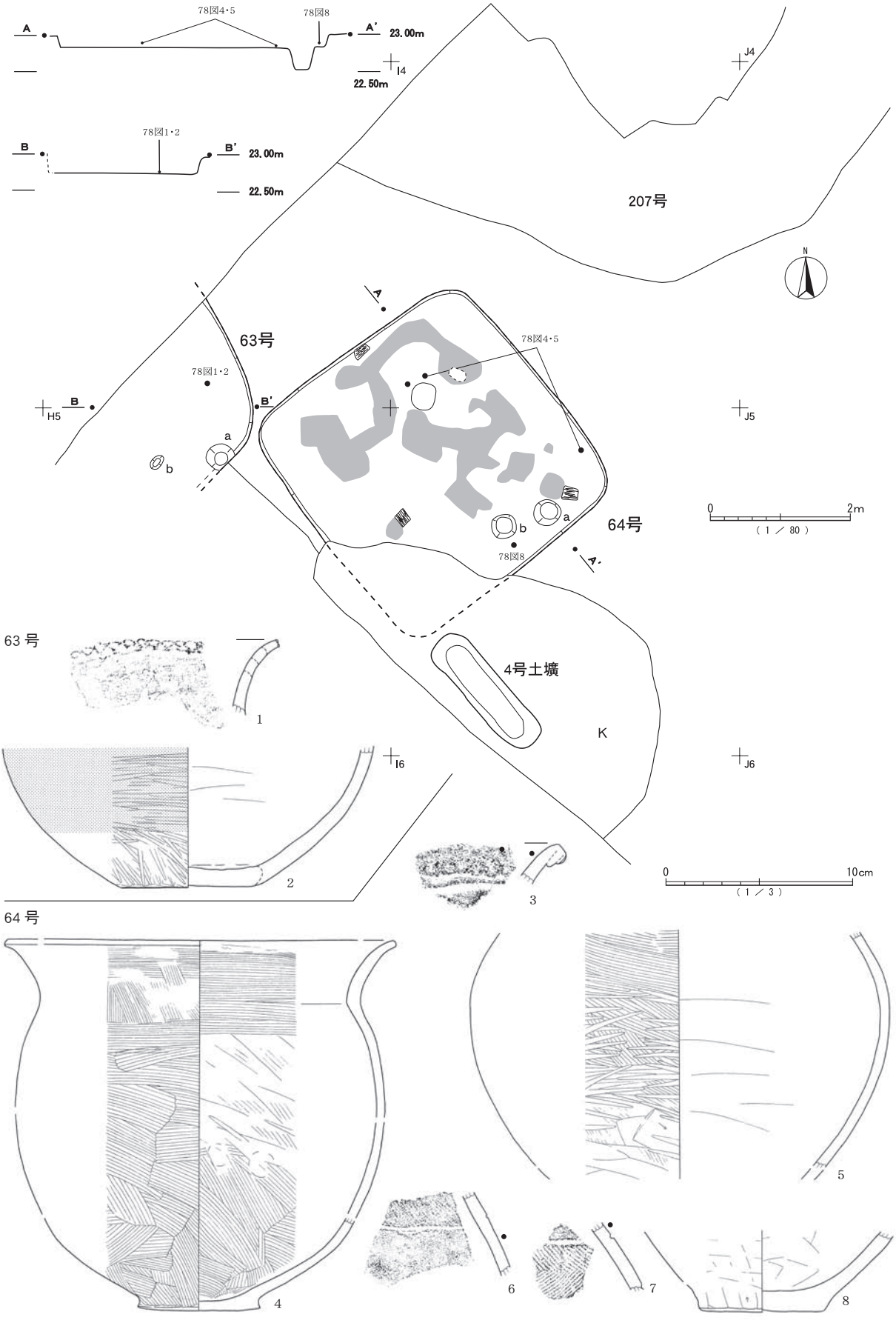
形状：不整形　**規模**（長軸×短軸；m)：4.32? × 3.68?　**遺存**：2/3

面積（上端・下端・柱間；㎡)：14.42・12.55・－　**竪穴深度**（cm)：13　**主軸方位**：2°

本遺構は、209 号方形周溝墓と現代の撹乱坑に破壊される竪穴住居跡である。本遺構周辺以西は発掘調査前に広範囲に撹乱を受けていたようであり、遺存状態・検出遺構数もその影響を受けている可能性が高い。床面には炉状の痕跡が確認されるが、出土遺物はまったくない。調査区内の竪穴住居跡群に見られる帰属時期の傾向からすると、本遺構は弥生時代後期に属する可能性が高い。

66 号竪穴住居跡（第 75 図）

形状：楕円形？　**規模**（長軸×短軸；m)：3.60? × 3.28?　**遺存**：1/3



第 78 図　63・64 号竪穴住居跡および出土遺物実測図

面積（上端・下端・柱間；㎡）：9.79・8.72・－　竪穴深度（cm）：32　主軸方位：307°

本遺構は、208 号方形周溝墓と撹乱坑に破壊を受ける竪穴住居跡である。床面の北西寄りに炉が検出されているが、柱穴などは見当たらず全容は不明である。出土遺物はまったくない。竪穴平面形を考え合わせると、調査区内で主体を占める弥生時代後期に帰属する可能性が高いと思われる。

63 号竪穴住居跡（第 78 図、図版 9・65）

形状：隅円方形？　規模（長軸×短軸；m）：4.68? × 4.08?　遺存：一部

面積（上端・下端・柱間；㎡）：15.91・14.68・－　竪穴深度（cm）：24　主軸方位：316°

本遺構は、大部分が調査区外にあり、大半を現代撹乱坑に破壊される竪穴住居跡である。床面には貯蔵穴・ハシゴ穴と見られる穴が検出されている。

遺物は僅少であるが、第 78 図 1・2 はドット取り上げされており、床面直上からの出土である。内外両側からの押捺が伴う屈曲の弱い甕（1）を積極的に評価するならば、本遺構は弥生時代後期に位置づけられよう。なお、隣接する 64 号竪穴住居跡に沈線文区画の壺（第 78 図 6･7）が混在するので、弥生時代後期でも前半に帰属する可能性も考えられる。

64 号竪穴住居跡（第 78 図、図版 10・32・65・86）

形状：方形　規模（長軸×短軸；m）：3.96 × 3.88　遺存：略完

面積（上端・下端・柱間；㎡）：14.78・13.97・－　竪穴深度（cm）：13　主軸方位：322°

本遺構は一部を現代撹乱坑に破壊されるものの、ほぼ全体の残る竪穴住居跡である。覆土中には焼土が面的に検出されており、建材に由来すると見られる炭化物も散在する。床面施設は若干北東寄りに炉、反対側に貯蔵穴・ハシゴ穴が検出されている。

遺物は、第 78 図 4･5･8 が覆土下層から床面直上で出土した土器である。ハケメ仕上げの甕（4）は、破片化後に強い 2 次焼成を受けており、破片が歪み、接合しても元来の形に戻らないほどである。頸部屈曲は緩いが、かろうじて稜を示している。本遺構は、五領式に近いハケメ仕上げのくの字状口縁甕の存在と、竪穴平面形から、弥生時代終末期から古墳時代前期に位置づけられる。近接する 207 号・215 号方形周溝墓の構築時期と存続期間の重複が問題となるところである。

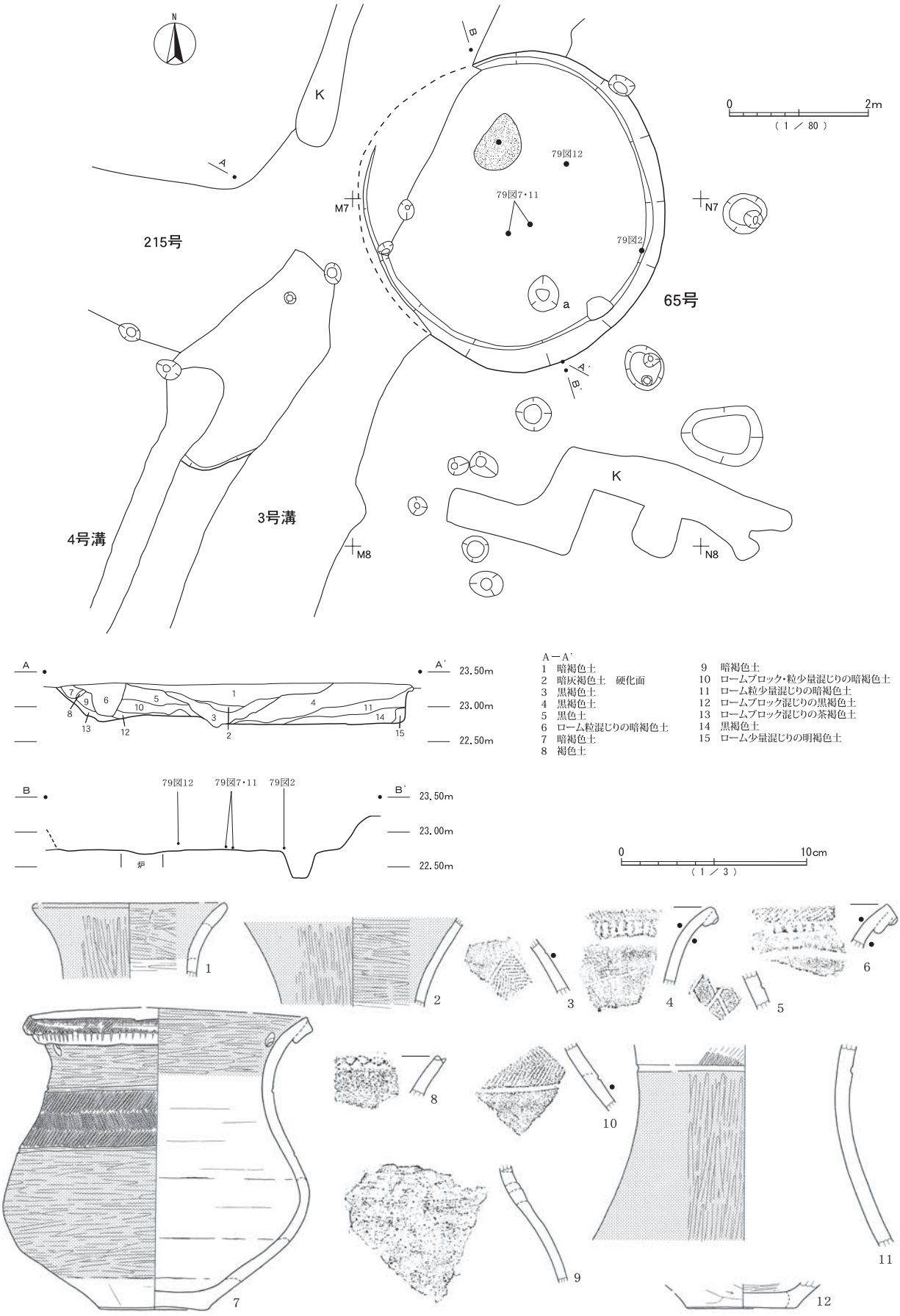
65 号竪穴住居跡（第 79 図、図版 10・32・65・88）

形状：円形　規模（長軸×短軸；m）：4.44 × 4.44?　遺存：4/5

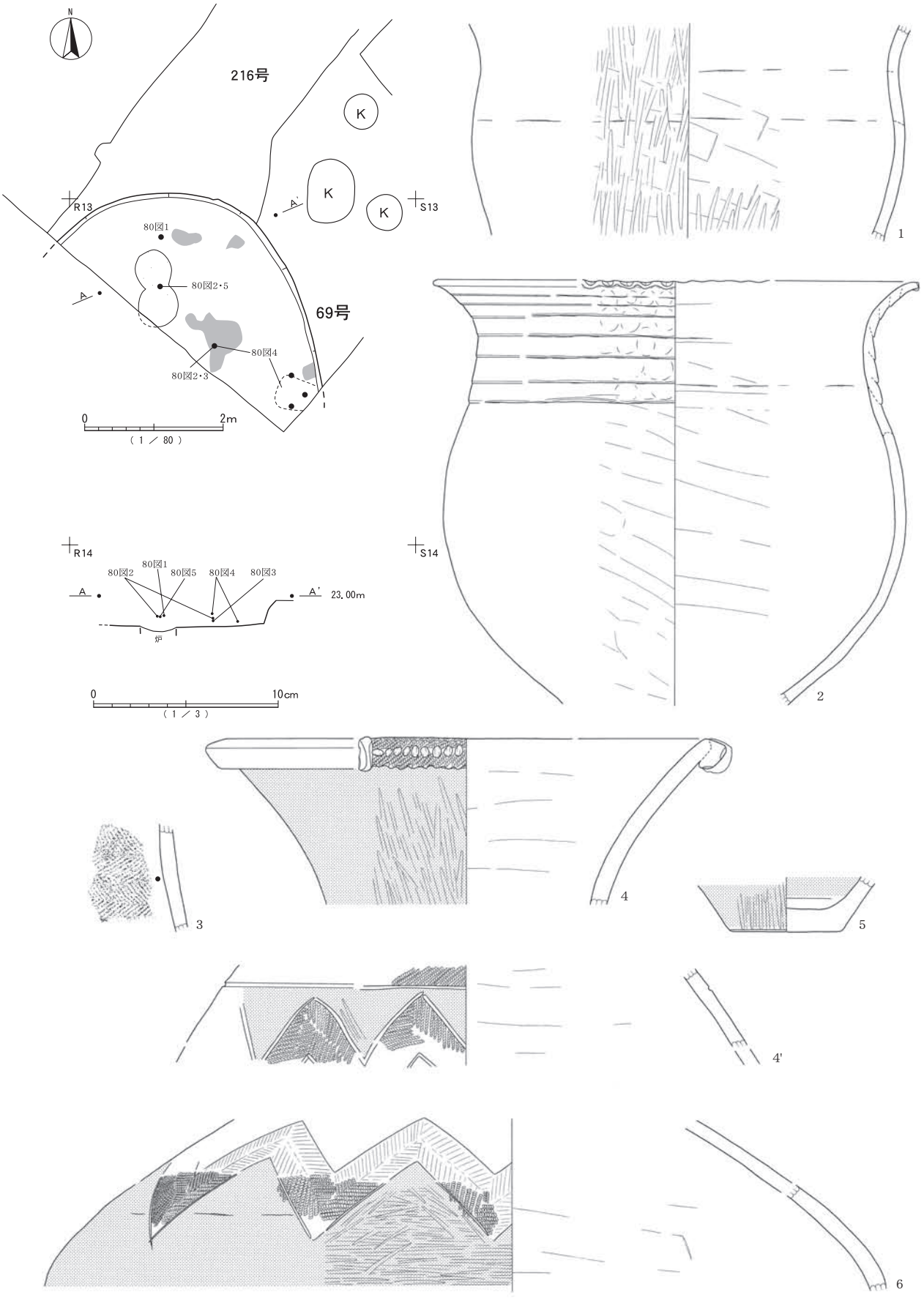
面積（上端・下端・柱間；㎡）：15.62・13.23・－　竪穴深度（cm）：43　主軸方位：346°

本遺構は 215 号方形周溝墓・3 号溝に北西部を破壊される竪穴住居跡である。竪穴の掘り込みは深いが、北西半は溝によって斜めに削平されている。床面には北寄りの位置に炉があり、反対側にハシゴ穴が認められる。

遺物は、第 79 図 2・7・11・12 がドット取り上げされた遺物で、床面直上から覆土下層より出土している。7 は口縁端部外面を肥厚する広口壺で頸部に沈線文区画の羽状縄文帯を持つ。壺形土器はいずれも久ヶ原式の特徴が顕著であり、本遺構が弥生時代後期前半に位置づけられるのは確実である。



第 79 図　65 号竪穴住居跡および出土遺物実測図



第 80 図　69 号竪穴住居跡および出土遺物実測図

69 号竪穴住居跡（第 80 図、図版 32・65・66・81）

形状：トラック形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.92? × 4.00?　**遺存**：1/3

面積（上端・下端・柱間；㎡）：16.16・15.26・－　**竪穴深度**（cm）：28　**主軸方位**：335°

本遺構は調査区外に大半のある竪穴住居跡で、216 号方形周溝墓に切られる。覆土中には焼土が多く認められ、廃絶時に火が伴ったらしい。

遺物は、第 80 図 1・2・4・5・6 が覆土中から出土しており、このうち、[2・5]、[4・6]、[2・4] が同じ遺物注記を持つ。沈線文区画と単節縄文 2 帯充填山形文の大型壺（4）は他の個体より若干低い位置で検出されている。4 の壺と類似する山形文の壺（6）は、単節縄文の原体が異なっており、両者は別個体である。いずれの壺も久ヶ原式の特徴を示すが、山形文の単節縄文が 2 帯である点と、口縁端部肥厚部の端面になす角度が直角を超えて鈍角になっている点からすると、本遺構は弥生時代後期前半でも古相に属すると考えられる。

74 号竪穴住居跡（第 81 図）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.80 × 4.60?　**遺存**：1/4

面積（上端・下端・柱間；㎡）：18.07・16.62・－　**竪穴深度**（cm）：39　**主軸方位**：346°

本遺構は東部調査区南東隅で部分的に調査された竪穴住居跡で、大半を 206 号方形周溝墓に破壊されている。床面には北寄りに炉が検出されているが、柱穴などは見当たらない。遺物はまったく出土していないため、帰属する時期の想定は難しい。しかし、竪穴形状がやや丸みを帯びている点と、206 号方形周溝墓に切られることからすれば、近接する竪穴住居跡と同じく、弥生時代後期に属する可能性が高いと言えよう。

75 号竪穴住居跡（第 81・82 図、図版 66）

形状：トラック形？　**規模**（長軸×短軸；m）：4.76 × 4.20　**遺存**：1/4

面積（上端・下端・柱間；㎡）：17.40・16.37・－　**竪穴深度**（cm）：21　**主軸方位**：318°

本遺構は 206 号方形周溝墓に中央部分を大きく破壊される竪穴住居跡である。遺存部に柱穴と炉は見られないが、貯蔵穴・ハシゴ穴状の穴が検出されている。

遺物は僅少で、すべて一括取り上げ遺物である。口縁端部内面を面取りナデする高杯もしくは椀（第 82 図 3･4）は、206 号方形周溝墓からの混入品である可能性が高い。竪穴平面形が曲線を持つことと、調査区内において弥生時代後期の竪穴住居跡の割合が高いことからすれば、本遺構は弥生時代後期の所産と捉えるのが妥当と思われる。

76 号竪穴住居跡（第 81・82 図、図版 10・33・66・67・79・86）

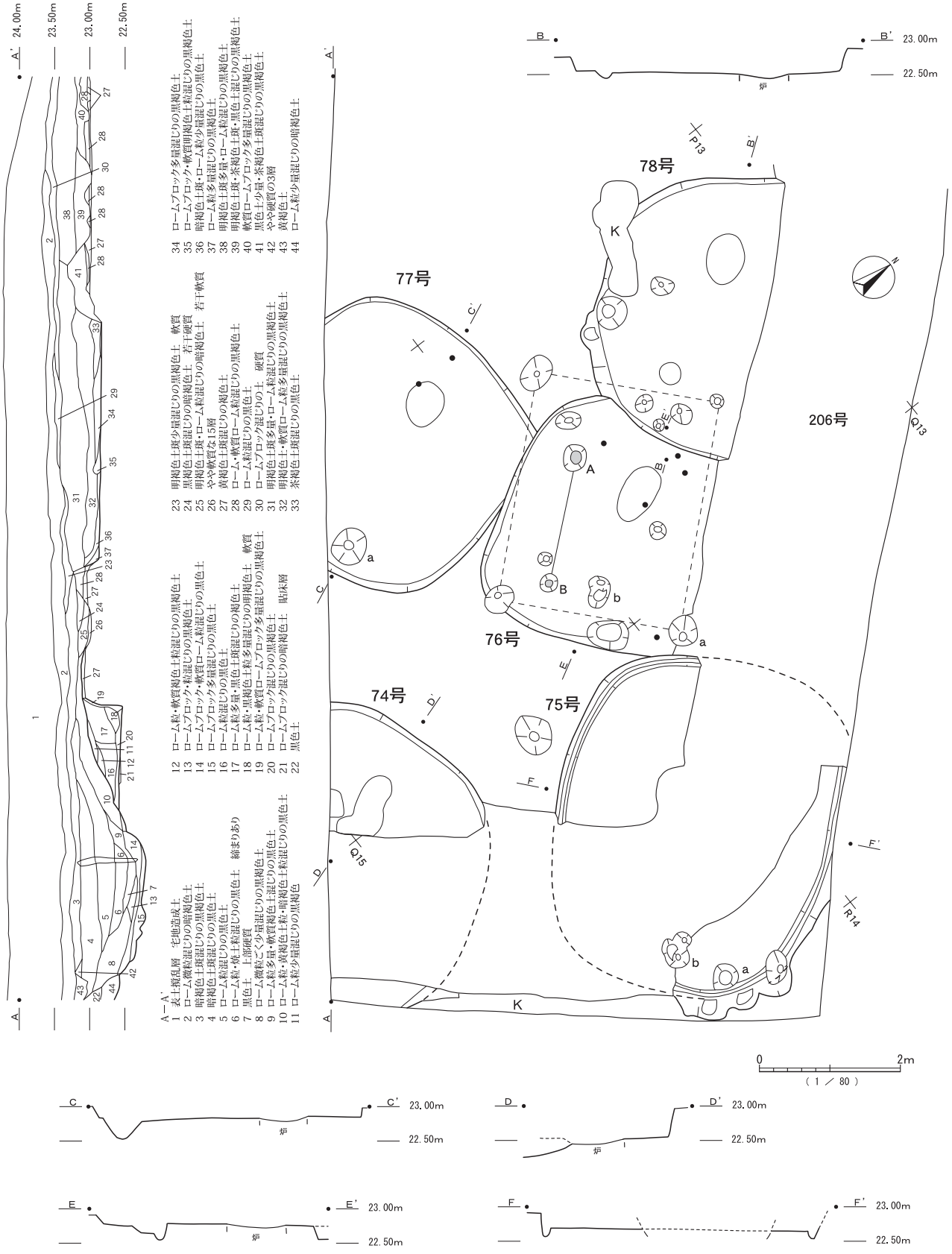
形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：3.60? × 3.60?　**遺存**：3/4

面積（上端・下端・柱間；㎡）：11.94・10.95・－　**竪穴深度**（cm）：28　**主軸方位**：322°

柱間比（AB：BC）：1.04　**主柱穴深度**（cm）：A － 17.8　B － 15.4

柱間（m）：AB － 1.92　BC － 1.84?　CD － 1.92?　DA － 1.84?

本遺構は、75 号・77 号・78 号竪穴住居跡と密集して切り合う位置に検出された竪穴住居跡である。



第81図　74・75・76・77・78号竪穴住居跡実測図

主柱穴 2 箇所と炉、貯蔵穴･ハシゴ穴と見られる穴が検出されている。竪穴を切るような柱穴配置（波線）が調査時に推定されているが、詳細は不明である。

遺物は土器の他に土器片錘・軽石（第 82 図 10・14）が出土している。5 箇所でドット取り上げされているが、遺物注記に反映されておらず、すべて、注記不明か一括取り上げ遺物である。このうち無文赤彩の鉢（25）は出土状況の写真から、炉の北側の左側ドットの位置より覆土上層から出土したことが判る。また、不確定ながら、遺存部分の多い輪積痕甕（16）が炉内ドットに対応する可能性が考えられる。無文赤彩の鉢（25）は口縁外面に肥厚装飾部を持たないものの、器形が内弯気味の椀形であり、弥生時代後期末に向かって直線的に開放していく時期的傾向を考慮すると、古手の特徴を示すと言える。また、輪積痕甕には口縁端部内面を肥厚するもの（15）があることも加えると、本遺構は弥生時代後期前半から中葉の所産と考えられる。混在する弥生時代終末期の土器片は、206 号方形周溝墓築造に由来するものと思われる。なお、ナデ調整の甕（11）は、縄文原体による刺突文と、棒状工具による刺突文が同一個体の口縁端部で混在している興味深い資料である。

77 号竪穴住居跡（第 81・82 図、図版 10・11・34・66）

形状：隅円方形　**規模**（長軸×短軸；m）：3.76 × 3.72　**遺存**：2/3

面積（上端・下端・柱間；㎡）：12.34・11.42・－　**竪穴深度**（cm）：13　**主軸方位**：351°

本遺構は一角が調査区外にあり、76 号竪穴住居跡と接するように切り合う竪穴住居跡である。主柱穴は確認できないが、北寄りの位置に炉があり、反対側に貯蔵穴もしくはハシゴ穴と見られる穴を検出している。

遺物は一部の出土位置が記録されているものの、対応する遺物注記がない。しかし、出土状況の写真には、壁際のドットの位置に鉢形の土器が見られ、炉内のドットに破片が認められるため、第 82 図 28 の遺存良好な鉢と、27 の壺底部が両者にあたると考えてよいと思われる。竪穴の遺存部が浅いことからすれば、これらの土器が本遺構の帰属時期を示すと言える。

鉢（28）に見られる内弯するやや深い器体は、久ヶ原式後半の特徴であるので、本遺構は弥生時代後期前半の新相に位置づけられる。

78 号竪穴住居跡（第 81・83 図、図版 11・67）

形状：円形？　**規模**（長軸×短軸；m）：4.08 × 3.56?　**遺存**：1/2

面積（上端・下端・柱間；㎡）：12.42・11.34・－　**竪穴深度**（cm）：43　**主軸方位**：308°

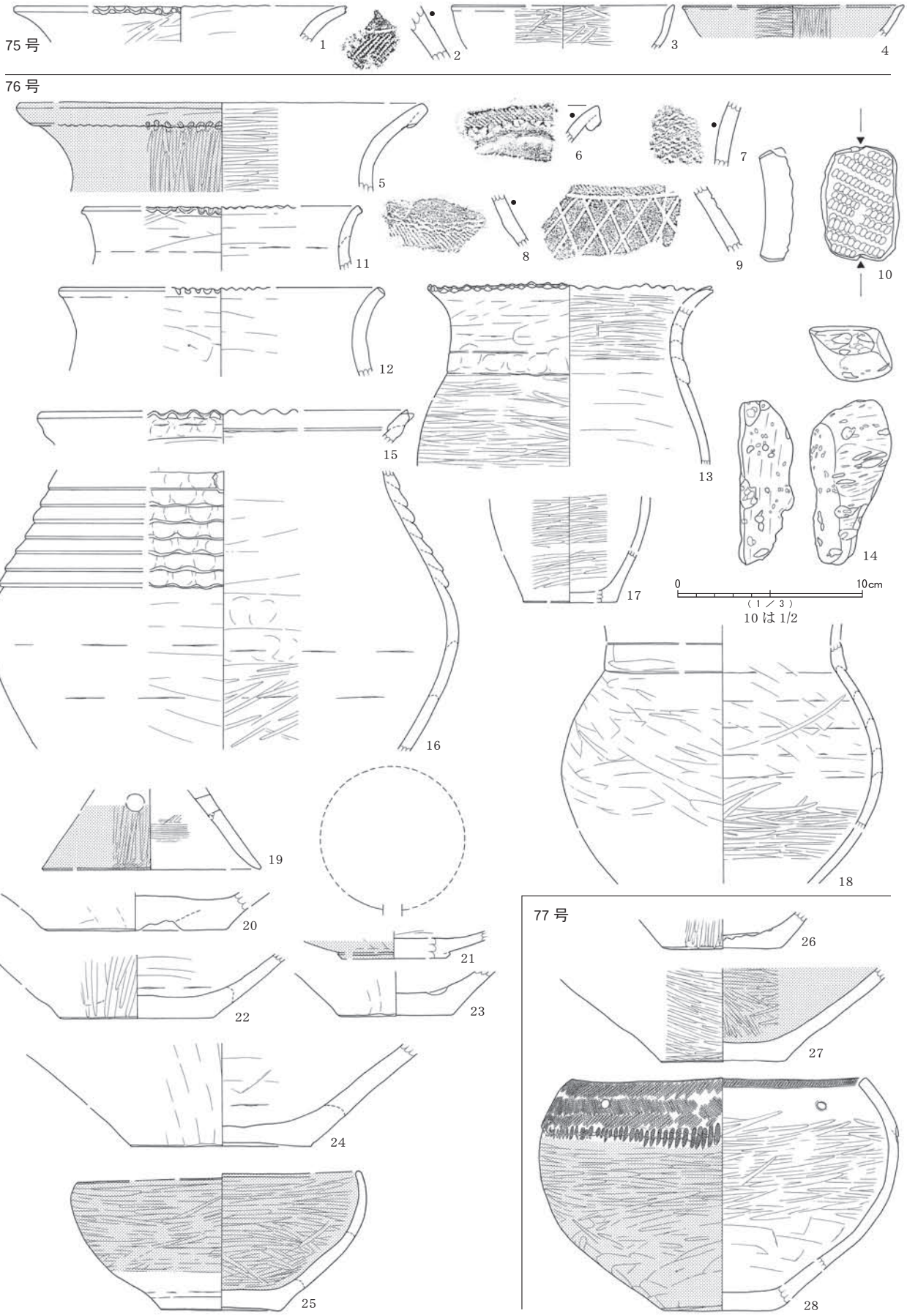
本遺構は、206 号方形周溝墓に大半を破壊される竪穴住居跡で 76 号竪穴住居跡と切り合う。床面には北西寄りに炉が検出されるのみで、柱穴他は判然としない。

遺物は少量で、すべて一括取り上げ遺物である。沈線文区画の壺（第 83 図 1）は久ヶ原式の特徴を持つが、これを重視するならば、本遺構は弥生時代後期前半の所産と考えられる。

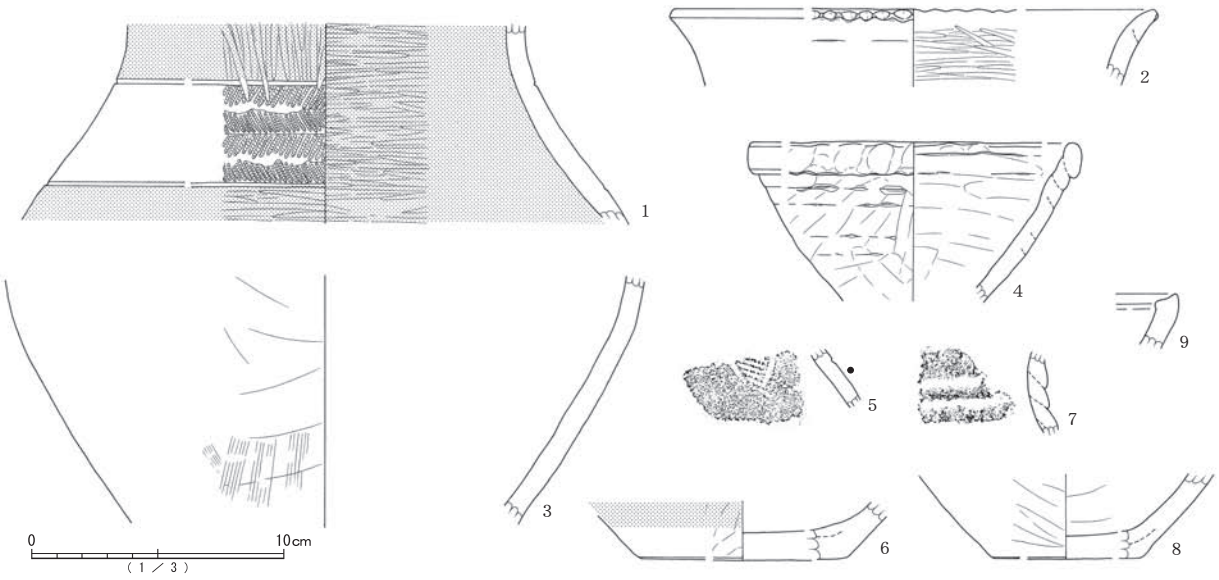
81 号竪穴住居跡（第 84 図、図版 67）

形状：不整形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.16? × 3.84?　**遺存**：一部

面積（上端・下端・柱間；㎡）：13.84・－・－　**竪穴深度**（cm）：6　**主軸方位**：356°？



第 82 図　75・76・77 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 83 図　78 号竪穴住居跡出土遺物実測図

本遺構は西側調査区北端近くに位置する不整形の竪穴住居状遺構で、201 号方形周溝墓に切られている。柱穴などは認められないが、炉が検出されている。

遺物は、4 箇所でドット取り上げされている。しかし、遺物注記に対応するものはなく、図示した土器はすべて一括取り上げ遺物である。201 号方形周溝墓との位置・切り合い関係を勘案し、沈線文区画の壺（第 84 図 3）を積極的に評価すれば、本遺構は弥生時代後期前半に位置づけられる。なお、本遺構の遺存状態の悪さは、近隣の方形周溝墓群構築に伴う現象であるとも考えられる。

80 号竪穴住居跡（第 84・85 図、図版 67・81・87）

形状：トラック形？　**規模**（長軸×短軸；m）：4.24 × 4.16　**遺存**：1/3

面積（上端・下端・柱間；㎡）：14.55・13.31・－　**竪穴深度**（cm）：42　**主軸方位**：329°

本遺構は、大半が調査区外にある竪穴住居跡である。床面には北寄りに炉が検出されたのみである。遺物はすべて一括取り上げ遺物である。土器の他に、よく研ぎ減った凝灰岩製の砥石 3 点（第 85 図 17･18･19）が出土している。結節文区画の壺（7）等も存在するが、遺存状態の良い沈線文区画の壺（1）を重視すると、本遺構は弥生時代後期前半の所産と捉えられる。

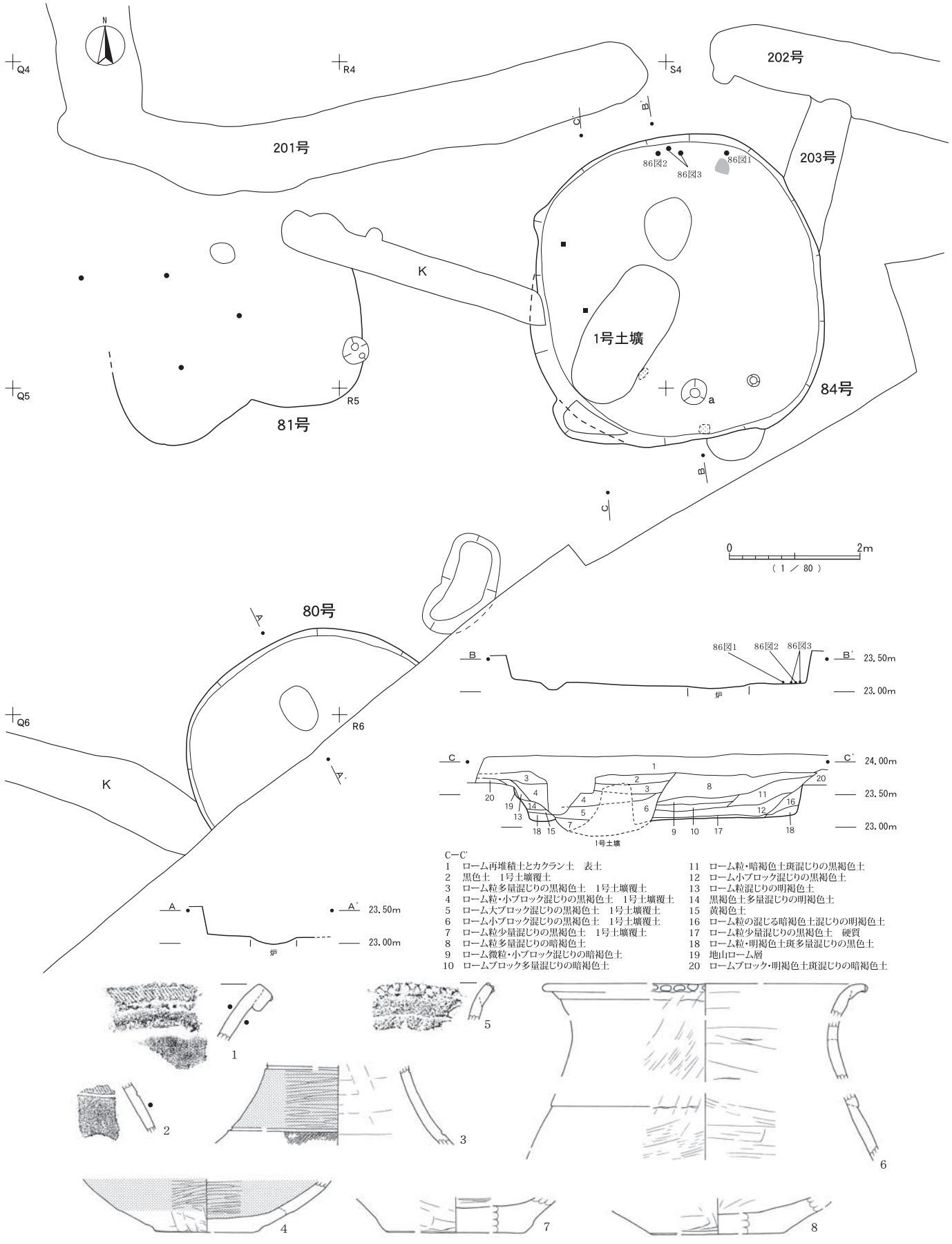
84 号竪穴住居跡（第 84・86 図、図版 11・13・38・68）

形状：円形～トラック形　**規模**（長軸×短軸；m）：4.64 × 4.56　**遺存**：略完

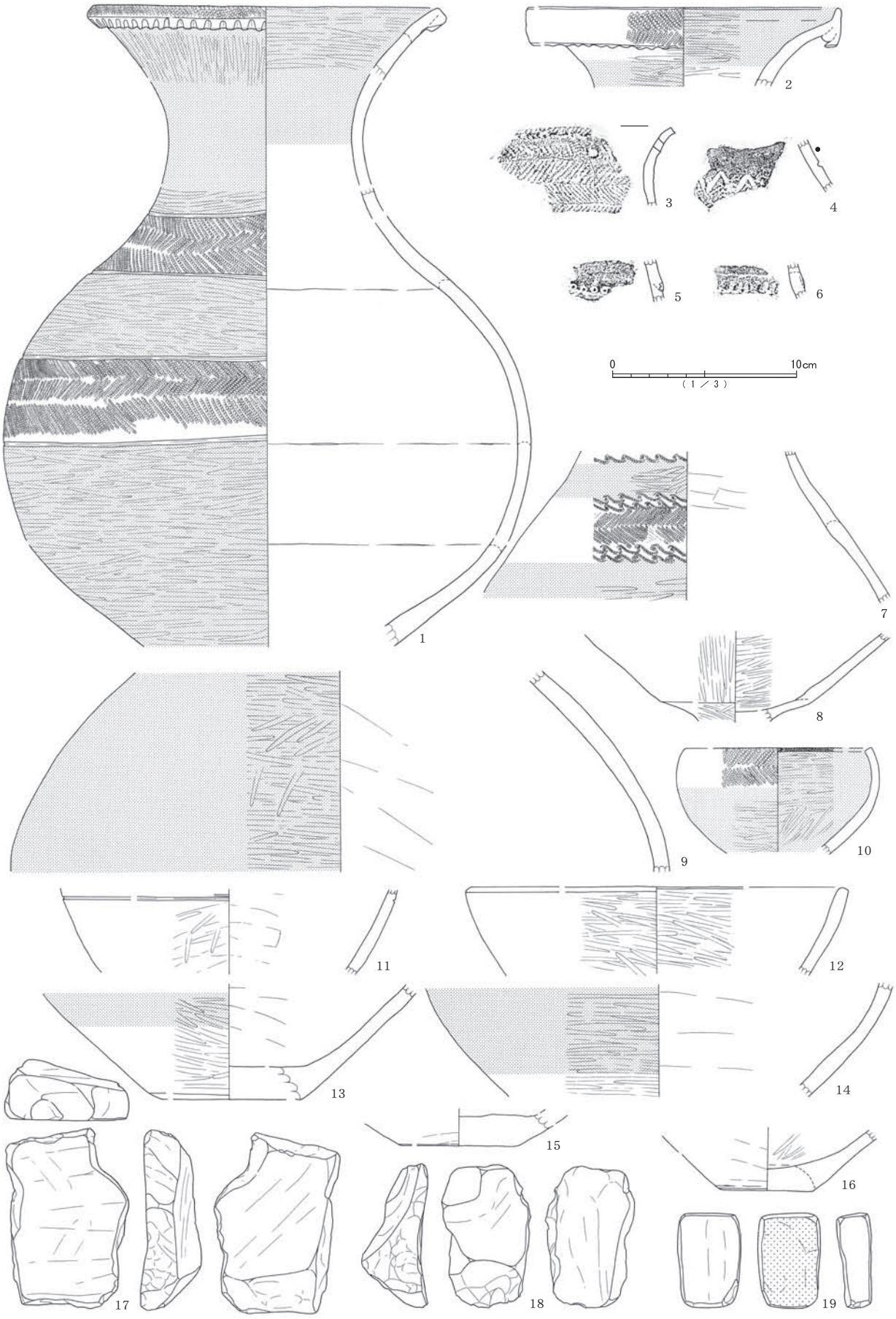
面積（上端・下端・柱間；㎡）：17.58・15.86・－　**竪穴深度**（cm）：49　**主軸方位**：358°

本遺構は、203 号方形周溝墓および 1 号土壙に切られる竪穴住居跡である。床面に炉、反対側にハシゴ穴が検出されており、覆土中には焼土が散在している。

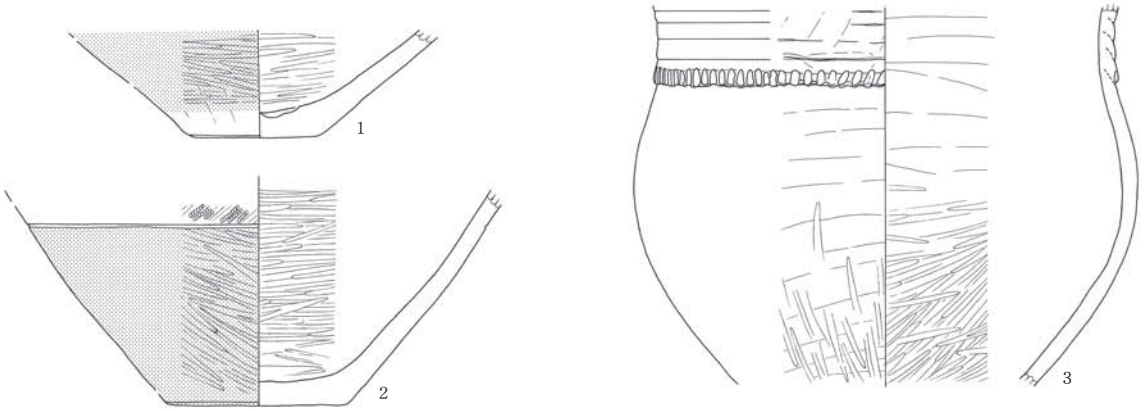
遺物はすべてドット取り上げされており、炉の北側ドットと対応する。他ドットの対応関係は不明である。沈線文区画の鉢（第 86 図 2）と段部に刺突文の施される屈曲の弱い輪積痕甕（3）の存在と、201・202・203 号方形周溝墓および 1 号土壙墓との位置および切り合い関係を考慮すると、本遺構は弥生時代後期前半に位置づけられる。



第 84 図　80・81・84 号竪穴住居跡および 81 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 85 図　80 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 86 図　84 号竪穴住居跡出土遺物実測図

82 号竪穴住居跡（第 87 図、図版 11）

形状：トラック形～隅円方形　規模（長軸×短軸；m）：3.72? × 3.72?　遺存：1/3

面積（上端・下端・柱間；㎡）：11.80・10.52・－　竪穴深度（cm）：38　主軸方位：309°

本遺構は調査区北端に位置し、大半が調査区外にある竪穴住居跡である。床面施設は何も検出されていない。また、遺物も全く出土しておらず、帰属時期は確定できない。しかし、近接する 201 号方形周溝墓と同時期存在とは考えにくい。また、竪穴形状が丸みを帯びている事実から、それほど後代のものとも思えない。とすれば、消極的な理由ながら、本遺構は弥生時代後期前半に位置づけられる可能性が高い。

83 号竪穴住居跡（第 87 図、図版 13・34・67）

形状：円形　規模（長軸×短軸；m）：3.68? × 3.24　遺存：2/3

面積（上端・下端・柱間；㎡）：9.55・8.60・－　竪穴深度（cm）：6　主軸方位：296°

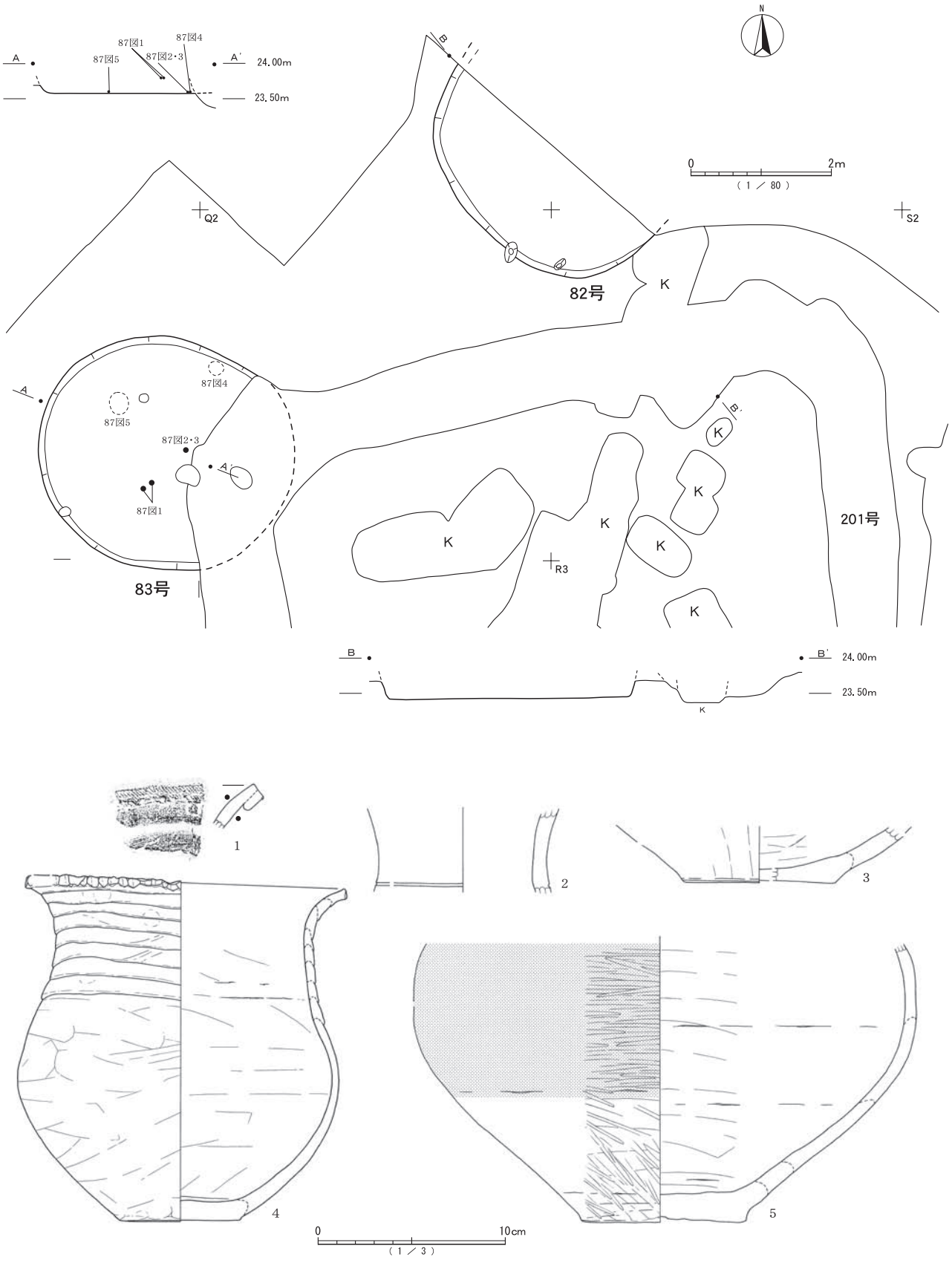
本遺構は 201 号方形周溝墓の周溝北西コーナーに破壊される竪穴住居跡である。床面施設は確たるものは何もない。

遺物はドット取り上げされているが、このうち第 87 図 2・3 が同じ遺物注記を持つ。完形の輪積痕甕（4）の弱い屈曲と口径－胴部比率と、切り合い関係を勘案すると、本遺構は弥生時代後期前半の所産と捉えられる。

方形周溝墓・土壙墓（第 88 図）　調査区のほぼ全域に広がって、弥生時代後期中葉から古墳時代前期にかけて構築された 16 基の方形周溝墓が検出されている（別に平安期方形周溝状遺構 1 基あり）。

時期の明確なものは、弥生時代後期中葉の 201 号・202 号・203 号墓、弥生時代終末期の 288 号・289 号墓、古墳時代前期の 205 号・211 号墓の 7 基である。明確な方台部埋葬施設の検出された例は 201 号と 288 号墓だけで、全体形も判明したものの方が少ない。墳丘盛土が遺存していたのは 288 号墓のみである。

方形周溝墓の近辺には、土壙墓と見られる長方形土坑が散在するが、遺物の伴う 1 号土壙墓や、木棺痕跡のある 3 号土壙墓以外は、規模・形状によってその性格が推定されたものである。



第 87 図　82・83 号竪穴住居跡および 83 号竪穴住居跡出土遺物実測図

201 号方形周溝墓（第 89 ～ 97 図、図版 12・13・34 ～ 37・47 ～ 50・68・78 ～ 80・87・88）

形状：2 角が切れる方形　**規模**（長軸×短軸；m）：10.2 × 9.8

外周面積（㎡）：92.4　**方台部面積**（㎡）：56.8　**周溝面積**（㎡）：34.9

本遺構は西側調査区北端部で検出された方形周溝墓である。202 号方形周溝墓に接し、83 号竪穴住居跡を切る配置にある。202 号墓と接する東辺は切り合うことなく並行しており、方形プランを歪ませて築造した本遺構が 202 号墓より新しく位置づけられる可能性が高い。方台部を斜めに横切るかたちで、撹乱坑が連なっており、その時点には盛土が削平されていたことを示唆する。周溝の遺存深度は 10 ～ 20cm で、これも築造時点の規模とは考えにくい。

全形は、方位とおおむね一致する方形プランを持ち、南東コーナーが東向きのブリッジ状に掘り残されている。南西コーナーは現代撹乱坑が重なっており確実とは言えないが、平面形から推察して、南東コーナー同様にブリッジ状を呈していた可能性が考えられる。

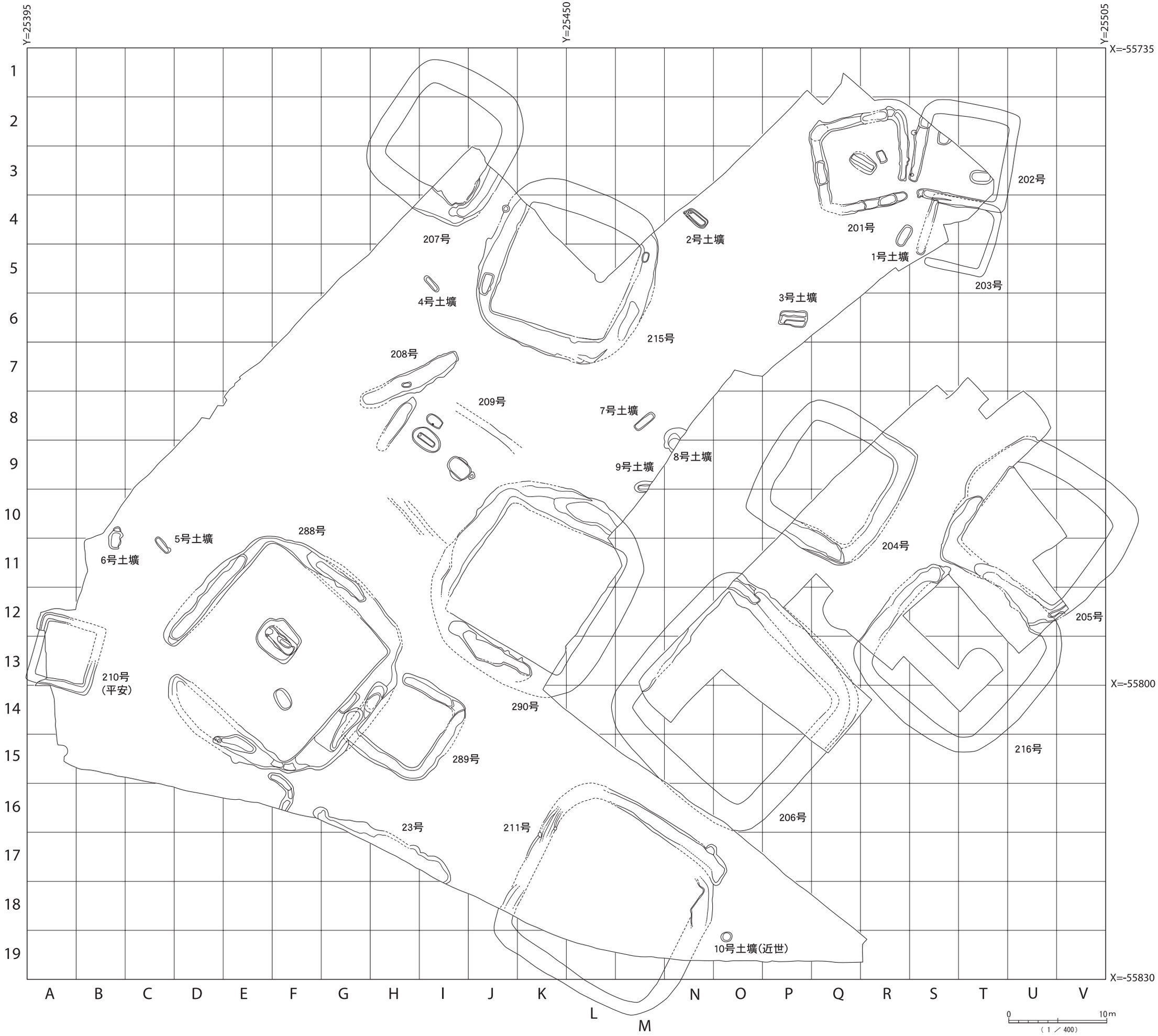
墳丘はまったく遺存していないが、方台部中央のほぼ北西－南東対角線上に埋葬施設が検出されている。また、周溝内にも、南溝に 2 基（A・B）、西溝に 1 基（C）、北西コーナーに 1 基（D）、北溝に 1 基（E）の計 5 基の埋葬施設が土器群とともに検出されている。東側周溝ブリッジ付近の 202 号墓寄りの位置には結節文区画の壺（第 95 図 1）が周溝内埋葬施設には伴わずに出土しているが、各周溝内埋葬施設伴出土器との先後関係が問題になり、これを方台部埋葬施設に伴う土器とするのは困難である。なお、この壺は周溝内埋葬施設 D の沈線文区画の壺（第 94 図 9）を小ぶりにし、沈線文を結節文に置換したような形状をしており、本遺構に伴うものとすれば、後述の埋葬施設構築順における最終段階に近い時期が想定できるだろう。

第 3 表　方形周溝墓一覧

遺構番号	時期	検出状況	外周規模 長軸×短軸 ㎡	方位 度	面積 ㎡		
					外周	方台部	周溝
201号	弥生後期中葉	全体	10.2×9.8	350	92.4	56.8	34.9
202号	弥生後期中葉	2辺部分	10.0?×10.0?	11	103.8	64.0	36.8
203号	弥生後期中葉	1辺	7.3?×7.3?	15	53.9	34.4	19.1
204号	古墳前期	3辺部分	14.5×14.5?	301	192.0	99.7	91.7
205号	古墳前期	2辺	17.2?×16.0?	306	246.3	131.5	115.0
206号	弥生終末期～古墳前期	3辺部分	21.2?×20.8?	313	413.9	233.6	180.6
207号	弥生終末期～古墳前期	2辺部分	15.0?×13.6?	302	197.2	96.4	101.6
208号	弥生後期?	1辺	－	335	－	－	1辺：19.9 4倍：79.7
209号	弥生後期?	1辺	－	304	－	－	1辺：7.3 4倍：29.1
210号	平安	3辺部分	7.30×6.65	15	49.0	30.6	19.7
211号	古墳前期	3辺部分	20.0×19.6?	300	357.7	256.3	100.9
215号	弥生終末期～古墳前期	3辺	17.6×17.6?	292	270.7	153.2	118.3
216号	弥生終末期後半～古墳前期	2辺	18.4?×18.0	310	288.7	185.5	97.5
288号	弥生終末期前半	全体	22.8×22.4	312	437.9	271.0	161.8
289号	弥生終末期後半	全体	10.0×10.0	305	92.0	49.7	34.2
290号	弥生終末期	3辺部分	21.2?×19.2?	300	344.3	186.4	158.5
23号	古墳前期	1辺	15.5×？	295	－	－	1辺：39.6 4倍：158.3

方台部中心埋葬施設（第 91・92 図）　長軸 2.78m、短軸 1.72m の胴張り長方形の墓壙内に、2.5m × 0.5m の掘り込みが主軸を同じくして認められる。上段墓壙の掘り込みレベルは 22.7 ～ 22.8m で、深さは 50 ～ 60cm である。木質の遺存は見られないが、土層断面からは箱形の横断面形が推定できるため、この壙内の掘り込みは木棺痕と考えられる。

木棺痕跡覆土中からは、14 点のガラス玉（うち 2 点は砕片で図化不能）と、帯状円環形銅釧片が出土している（第 92 図）。ガラス玉は南東側に偏して出土しており、被葬者の頭位が南東



第 88 図　墳墓遺構分布図

であったことを示唆する。

また、そう仮定すると、銅釧片は右腕の位置にあったと考えられる（第 91 図中の人形は、身長 155cm 肩幅 35cm とした場合のイメージ復元である。痕跡に基づくものではない）。

ガラス玉の色調はほぼすべてコバルトブルーである。いずれも孔軸方向に気泡列が確認でき、管切り再加熱法で製作されたものと見受けられる（小瀬 1987）。銅釧片は、幅 8mm で磨滅の進んだ脆弱な破片（第 92 図 A）と、幅 8.5mm で内面に粗い布痕跡が伴う、両端面の面取りの明瞭な破片（B）に分けられる。だが、両者を合わせると、ちょうど直径 6cm 程度になるので、被葬者に 1 個体が着装されていたと考えるのが自然である。なお、墓壙内から土器はまったく出土していない。

方台部には他にも撹乱ではない土坑が検出されているが、積極的に墓壙と認定できるものは、この 1 基のみである。

周溝内埋葬施設 A（第 89・90・97 図） 南側周溝の東寄りに位置する埋葬施設である。長軸 2.0m、短軸 1.04m の隅円長方形の平面プランを持つ。墓壙底面は周溝底面からさらに 20cm 以上低い。周溝調査の結果として存在が確認できたことからすると、堆積状況は不明ながら、墓壙覆土と周溝覆土にはほとんど違いがなかったものと思われる。

覆土上面には、ほぼ完形の壺（第 97 図 4）が出土しており、この周溝内埋葬に伴うものと考えられる。壺は沈線文区画を持ち、頸部と肩部に単節羽状縄文帯、肩部文様帯下段に鋸歯状沈線文とそれを埋めるかたちの縦回転の単節 LR が施されている。器面の状態は不良で、赤彩はほとんど遺存していない。文様構成が在地系譜の山形文からはずれているように見受けられるが、プロポーションや口縁部のつくりに大きな逸脱は認められない。

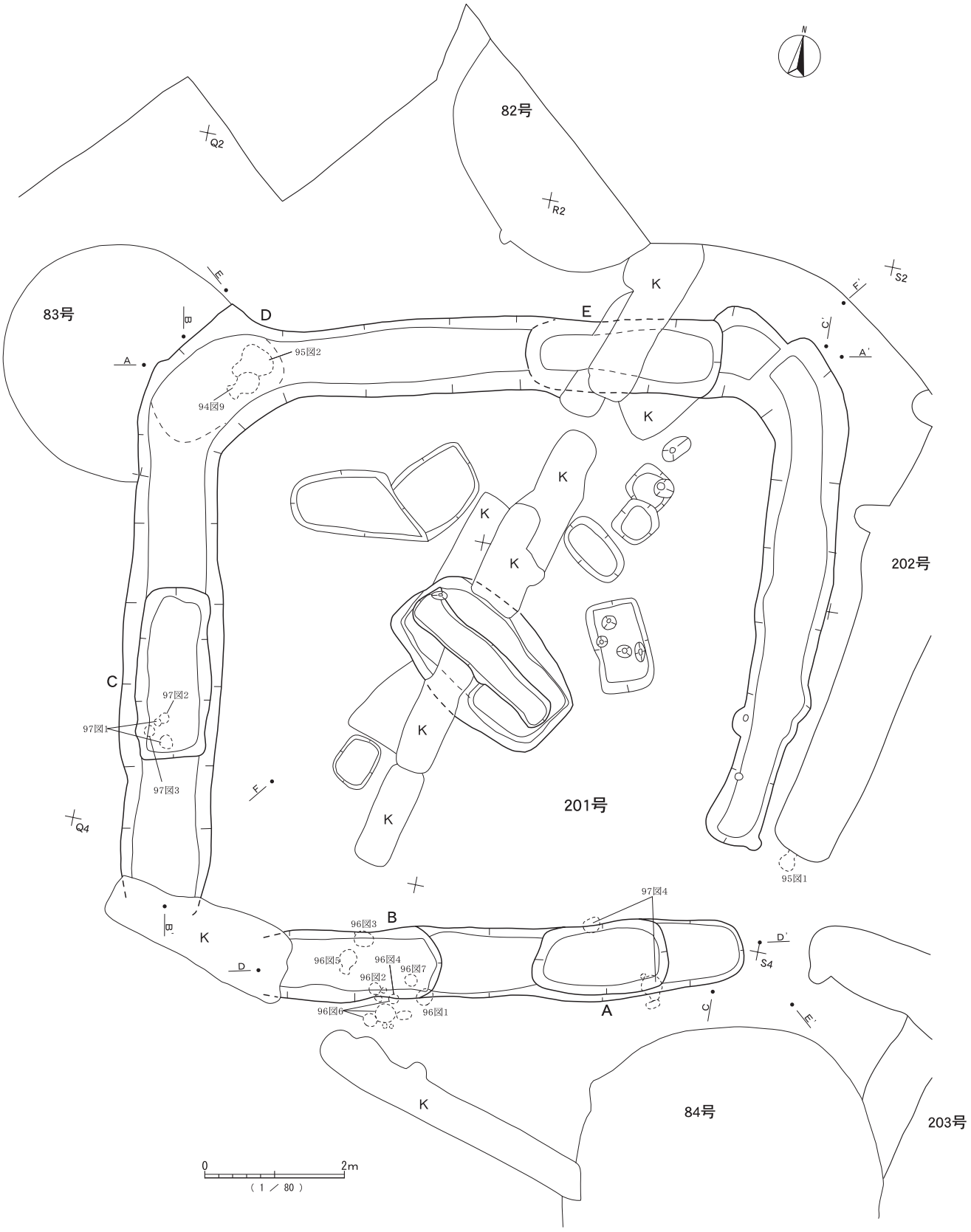
周溝内埋葬施設 B（第 89･90･93･96 図） 南側周溝西寄りに位置する埋葬施設である。長軸 2.4m?（西端不明）、短軸 1.0m の曲線的な短辺を持つ長方形の土坑である。方台部中心埋葬施設と同様に木棺痕跡が認められ、その範囲内からガラス玉 16 点が出土している。これらが被葬者上半身を飾るもので、埋没後の移動がほとんどなかったとすれば、被葬者の頭位は東にあった可能性が高い。

また、墓壙上面には周溝の外側に若干広がりをもって土器群が検出されている（第 96 図 1 ～ 7）。土器は壺・甕・鉢の 3 種類で、壺と甕が 3 個体ずつ、鉢が 1 個体あり、1・2 の甕を除いておおよそ完形である。壺は沈線文区画で共通するが、大ぶりの 2 個体は、肩部文様帯下段に鋸歯状沈線文とそれを埋める縦回転単節縄文の文様構成を持ち（5・6）、小型壺は沈線区画内の多段結節文を切る山形沈線文という文様構成を示し（4）、それぞれ相違が認められる。この小型壺の文様は、201 号方形周溝墓が隣接する 202 号方形周溝墓の大型壺と類似しており、型式的な親近が明瞭である。甕の頸部屈曲は強くなく、鉢の器形も開放する口縁ながらも上位は内弯気味に立ち上がっている。いずれの器種も久ヶ原式後半の特徴を示しており、型式上の齟齬は感じられない。

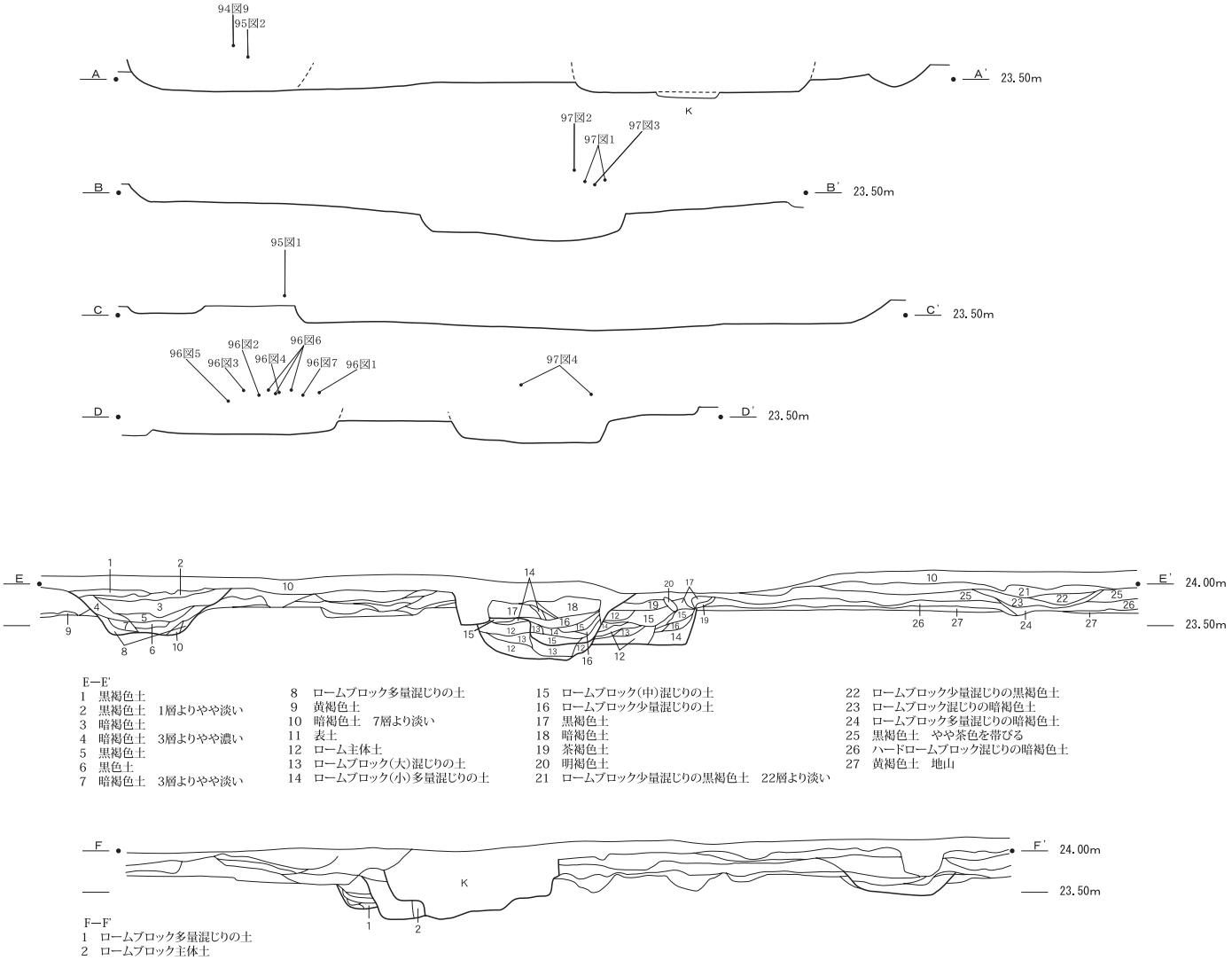
なお、土器群も東側に偏って検出されていることからすると、埋葬後の儀礼も頭位・上半身を意識して連続的に行われた可能性が考えられる。そして、土器の出土位置が周溝外側に広がりを持つことからすると、儀礼の場は周溝の外側から方台部に向かう方向性を伴ったことが推察できる。

周溝内埋葬施設 C（第 89・90・97 図） 西側周溝中程に掘り込まれた埋葬施設である。長軸 2.48m、短軸 1.08m を測る、ほぼ長方形の土坑で、底面は周溝底面からさらに 30cm 近く深い。

覆土上面には 3 個体の土器が出土している（第 97 図 1 ～ 3）。甕 1 個体と壺 2 個体で、1 の壺には



第 89 図　201 号方形周溝墓実測図

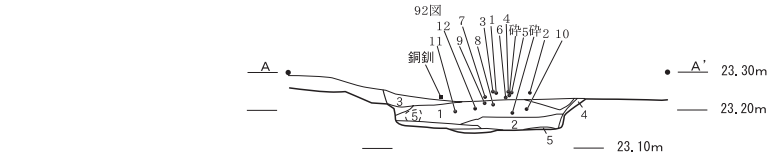


第 90 図　201 号方形周溝墓実測図

沈線文区画の単節羽状縄文が施されており、これらの土器が弥生時代後期前半のうちに位置づけられることを示している。土器の出土位置と周溝内埋葬施設 B のあり方からすると、本例も、土器の多い「周溝外から向かって右側」に頭位があった可能性を推定できよう。このほか、一括取り上げ遺物としてガラス玉 1 点が出土している（第 97 図枠内）。

周溝内埋葬施設 D（第 89・90・95 図）　北西コーナーの平面形の乱れと、出土した 2 点の壺（第 94 図 9・第 95 図 2）から、墓壙の存在を推定したものである。83 号竪穴住居跡と切り合う位置であり、紛らわしいが、土器が本遺構に伴うことは間違いない。掘り込みは不明確で、墓壙規模は不明である。沈線文区画の壺（第 94 図 9）と結節文区画の壺（第 95 図 2）はプロポーションがほぼ一致する一方で文様が異なる点に特徴がある。後者の肩部文様は山形文ではなく、斜行沈線を組み合わせた「安房形」壺の文様であり、軽石状黄灰色粒が大量に混じる非在地的な胎土（局地的な意味で）も特徴的と言える。結節文区画は当地域では山田橋式の有効な指標であるが、本例では沈線文区画との共伴が認められ、その型式変化（分化）の過程を示唆している興味深い資料である。

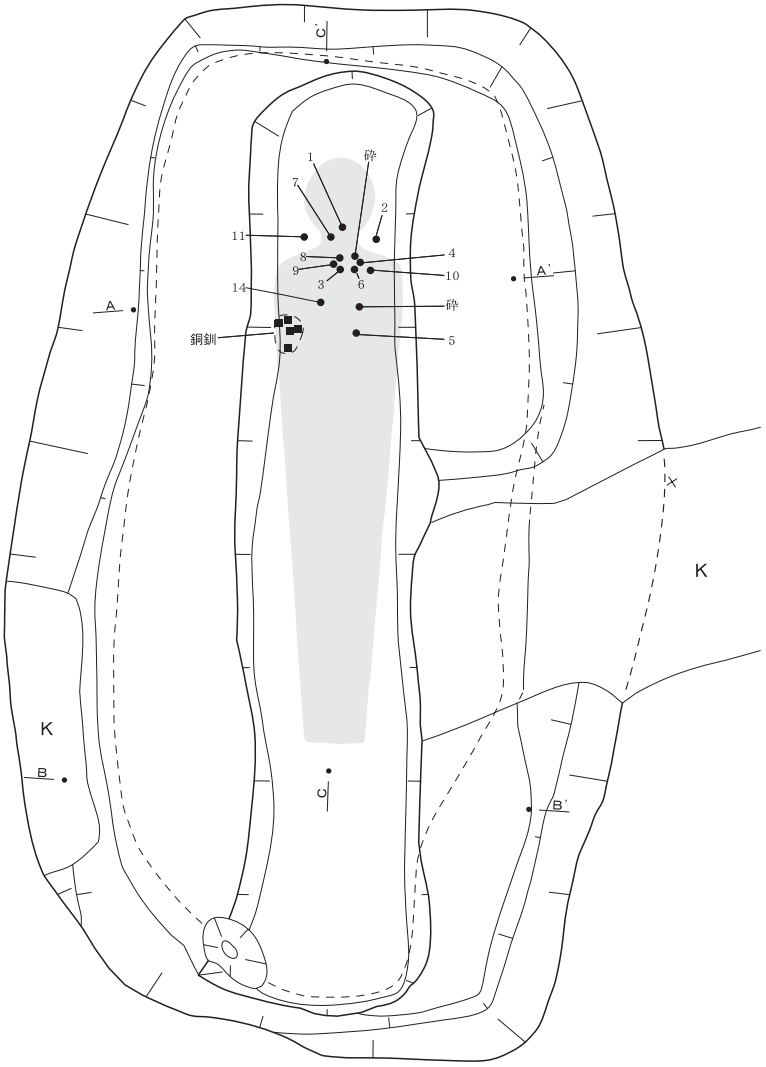
両者の文様構成とプロポーションを考え合わせると、その製作時期に新古の相を見出すよりは、弥生時代後期中葉、久ヶ原式と山田橋式の接点前後に位置づけるべきと思われる。

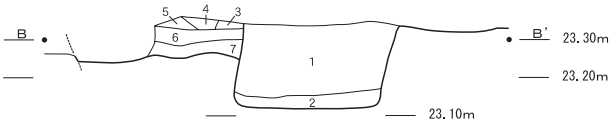


A－A'
1　ロームブロック(小)少量混じりの褐色土　硬質
2　ロームブロック多量・ローム粒混じりの明褐色土
3　ローム粒少量混じりの黒褐色土
4　暗黄褐色土
5　ロームブロック

C－C'
1　ロームブロック(小)少量混じりの褐色土　硬質
2　ロームブロック多量・ローム粒混じりの明褐色土
3　暗褐色土
4　ローム微粒混じりの褐色土
5　ロームブロック混じりの黒褐色斑入り褐色土
6　ローム微粒混じりの黒褐色斑入り明褐色土
7　ローム粒少量・ロームブロック混じりの黒褐色土
8　ローム微粒混じりの黒褐色土
9　ローム粒・小ブロック混じりの暗褐色土
10　黒褐色土混じりのロームブロック

201号中心埋葬施設

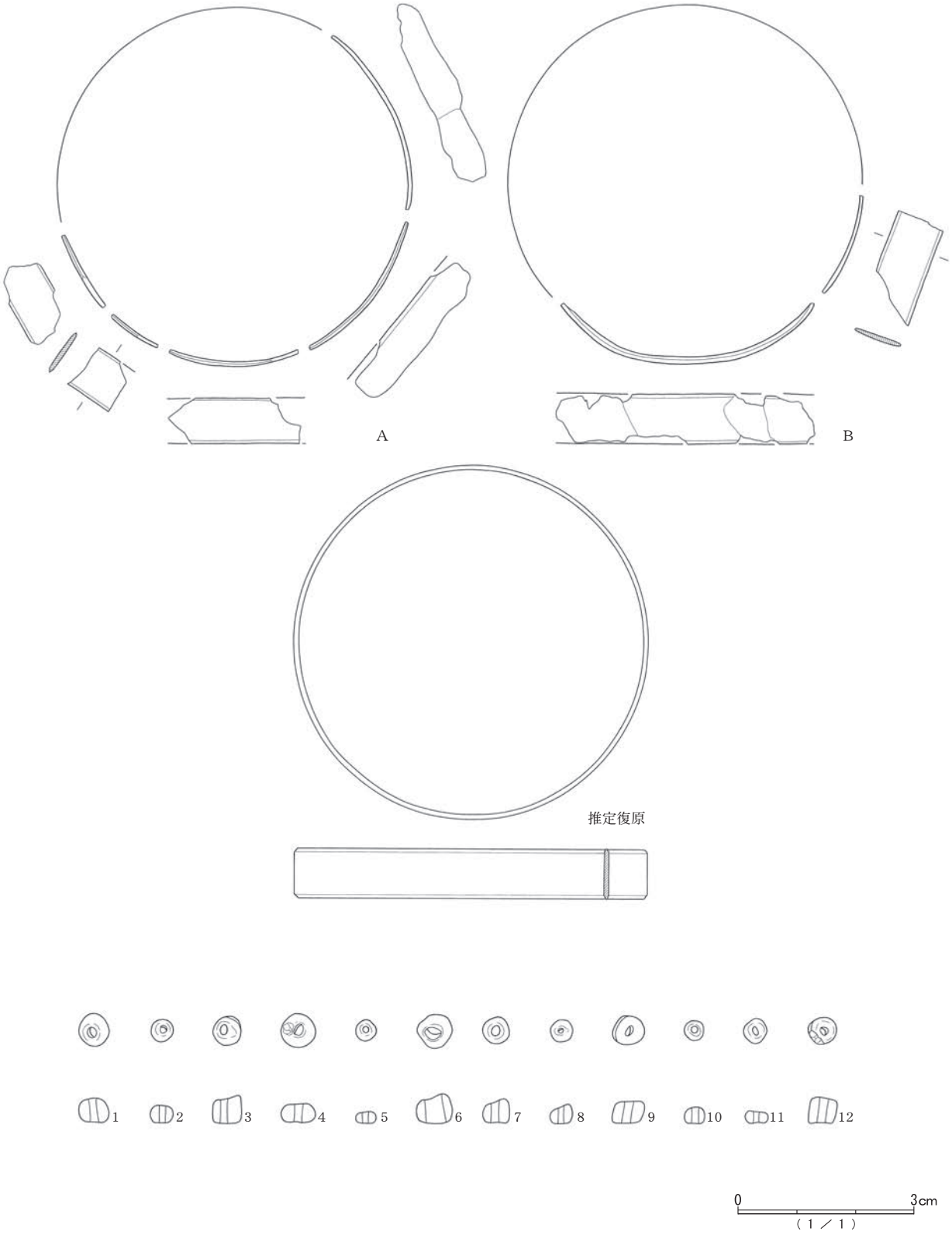




B－B'
1　ローム粒・小ブロックがまばらに混じる黒褐色土
2　ロームブロック混じりの暗褐色土
3　軟質ロームブロック
4　ローム粒混じりの暗褐色土
5　明褐色土
6　ローム粒混じりの褐色土
7　ロームブロック・ローム粒混じりの暗褐色土

0　1m
（1／20）

第91図　201号方形周溝墓中心埋葬施設実測図



第 92 図　201 号方形周溝墓中心埋葬施設出土遺物実測図

周溝内埋葬施設 E（第 89・90 図）　北側周溝の東寄りに検出した掘り込みから推定したものである。規模は長軸 2.8m、短軸 1.0m で、底面は周溝底面より 10cm 強、低い位置にある。確実に伴う遺物は特定できない。方台部中央埋葬施設に次いで大きいが、土器・副葬品が検出されておらず、被葬者の身長以外にどのような属性が反映されたかについては推測が難しい。

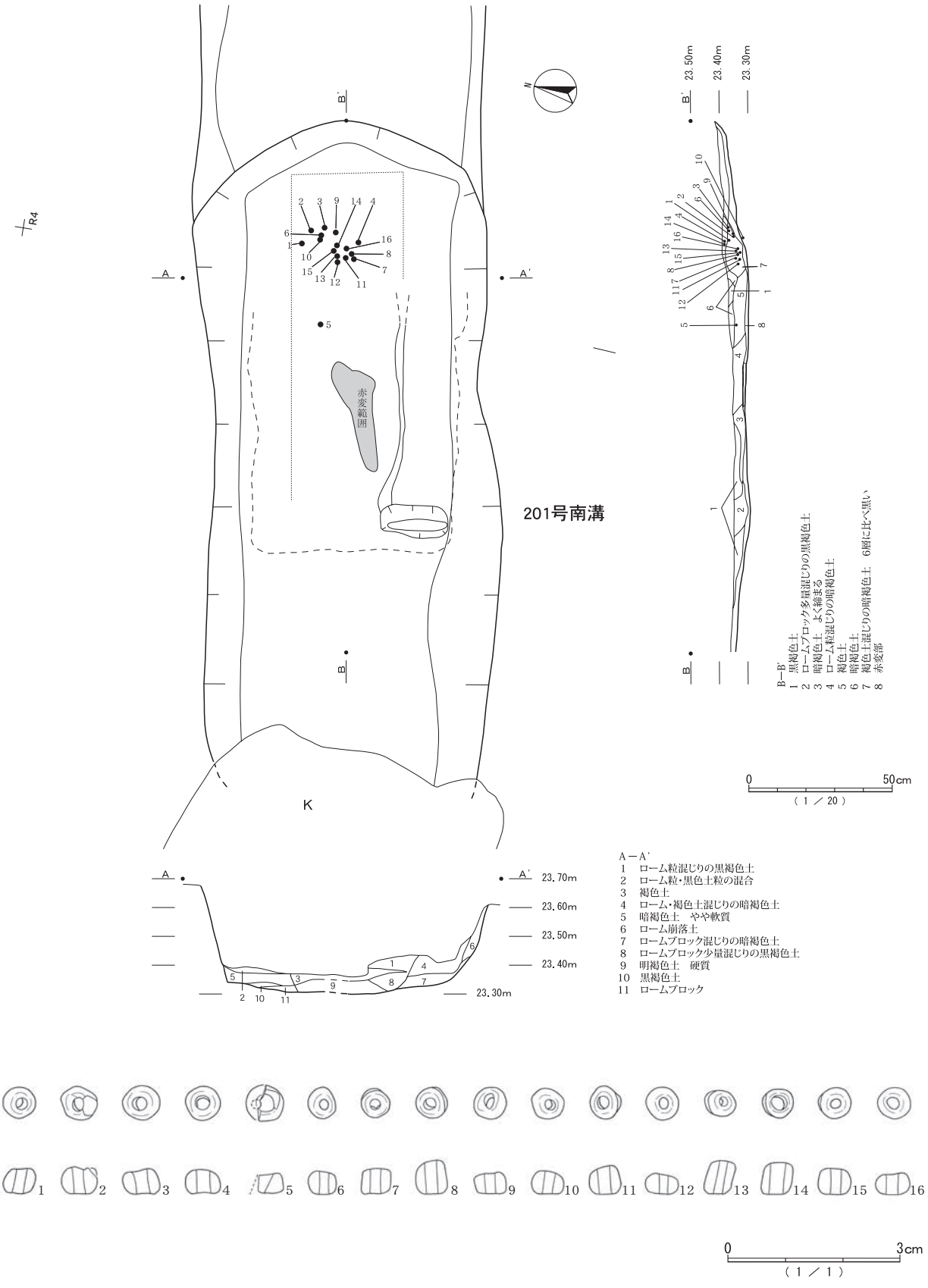
以上の埋葬施設の構築順序を推定すると次の通りである。まず、201 号墓築造契機かと思われる方台部中央が最初で、最後が結節文区画の見られる周溝内埋葬施設 D、202 号墓周溝出土土器と共通する特徴を持つ小型壺の混じる周溝内埋葬施設 B が方台部と D の間に位置づけられ、鋸歯状沈線文の壺が伴う A が B と近い時期にあると思われる。周溝内埋葬施設 C の頸部に沈線文区画のある小ぶりの壺は頸部屈曲が弱く、A・B より先行すると考えると、方台部→周溝 C →周溝 B →周溝 A →周溝 D の埋葬順が想定できる。確認できる埋葬施設に伴う土器には沈線文区画が伴うことからすれば、時間

第 4 表　201 号方形周溝墓出土銅釧観察表

円環型銅釧	図番号	直径	幅	厚さ	重量	色調	特徴
201号中央	第92図A	6cm前後?	8.0mm	1.3～1.5mm	1.6g以上	青緑～緑灰	両端面側が1mm程度面取りされている
	第92図B	6cm前後?	8.5mm	1.2mm	1.2g以上	青緑	両端面側が1mm程度面取りされている　内面に粗い布目痕跡がある

第 5 表　201 号方形周溝墓出土ガラス玉観察表

ガラス玉	報告番号	注記	長軸mm	短軸mm	高さmm	孔径mm	重量g	色	特徴
201号墓	第92図1	1	5.9	5.4	4.3	1.5	0.160	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり（小口は可能性）　孔軸気泡列非常に明瞭
中央主体	第92図2	2	4.0	3.9	3.2	1.0	0.062	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列あり
	第92図3	3	5.3	5.2	4.9	1.5～2.0	0.172	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列あり　孔軸方向に変色した筋が入る
	第92図4	4	6.2	5.8	3.5	1.5	(0.146)	コバルトブルー	一部欠損　側面押圧あり（目立たない）　孔軸気泡列あり
	第92図5	5	3.7	3.7	2.1	1.0	0.030	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり（目立たない）　孔軸気泡列あり
		6	-	-	-	-	-	コバルトブルー？	砕片
	第92図6	7	6.2	5.7	5.2	2.5～4.0	0.172	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列あり まばらに風化部があり側面の一部がクレーター状になる
	第92図7	8	4.9	4.8	4.3	2.0	0.110	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列明瞭
		9	-	-	-	-	-	スカイブルー？	砕片
	第92図8	10	4.0	3.8	3.4	1.0	0.054	スカイブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列あり
	第92図9	11	5.3	5.2	3.9	1.5	0.142	コバルトブルー	完存　側面押圧あり　孔軸気泡列あり　孔が側面押圧により大きく歪む
	第92図10	12	3.7	3.4	2.9	1.2	0.044	淡いコバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列あり
	第92図11	13	4.4	4.2	2.4	1.0～1.5	0.044	淡いコバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり（側面押圧によるものか小口面の片方が屈曲気味） 孔軸気泡列あり
	第92図12	14	4.7	4.7	4.7	1.5	0.140	コバルトブルー	一部欠損　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列あり
周溝内B	第93図1	1	5.7	5.7	4.7	2.0	0.176	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列あり
	第93図2	2	6.5	5.6	4.8	2.0	(0.182)	コバルトブルー	一部欠損　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列あり
	第93図3	3	6.5	6.0	4.5	2.5	0.202	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列あり　孔内隆起少しあり 横断面多角形の芯材痕跡が明瞭
	第93図4	4	6.3	6.1	4.3	2.5	0.188	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列あり　孔内隆起あり 横断面多角形の芯材痕跡
	第93図5	5	6.2	6.5?	3.6	2.0～3.0	(0.110)	コバルトブルー	半分程度遺存　押圧痕あり　孔軸が斜めに通っており小玉ではない可能性がある
	第93図6	6	5.6	5.0	4.2	1.5	0.132	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり（小口は可能性）　孔軸気泡列あり
	第93図7	7	5.1	4.8	4.6	2.0	0.156	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列あり　孔内隆起あり
	第93図8	8	5.6	5.2	6.1	2.0	0.158	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり（小口は可能性）　孔軸気泡列あり 横断面多角形の芯材痕跡明瞭
	第93図9	9	5.6	5.3	3.9	1.5～2.5	0.228	淡いコバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列あり　孔が側面押圧でひしゃげる
	第93図10	10	5.9	5.4	4.1	2.0	0.156	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列あり　孔内隆起あり
	第93図11	11	5.9	5.6	5.0	2.0	0.188	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり（小口は可能性）　孔軸気泡列あり
	第93図12	12	6.2	5.9	3.9	1.5～2.0	0.158	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列あり
	第93図13	13	4.9	4.9	6.2	1.5	0.196	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり（小口は可能性）　孔軸気泡列あり
	第93図14	14	5.2	5.1	5.6	2.5～3.0	0.170	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり（小口は可能性）　孔軸気泡列あり
	第93図15	15	5.8	5.6	4.6	2.0	0.192	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列明瞭
	第93図16	16	6.0	5.6	3.9	2.0	0.154	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列あり
周溝内C	第97図1	1	5.5	5.4	5.6	2.0～2.5	0.200	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列あり　斑に風化部あり　孔内隆起が目立つ



第 93 図　201 号方形周溝墓周溝内埋葬施設 B および出土遺物実測図

幅は弥生時代後期後半全体にわたるものではなく、後期中葉に近い比較的短い期間が想定できるのではないだろうか。ただ、副葬品の有無や土器の量、土器型式の系統など一律に変異を解釈しがたい側面があるのは事実であり、202 号墓のすべての埋葬施設が 201 号墓のすべての埋葬施設より先行するとも言い切れない。ここでの復元像は暫定的なものであることを強調しておきたい。

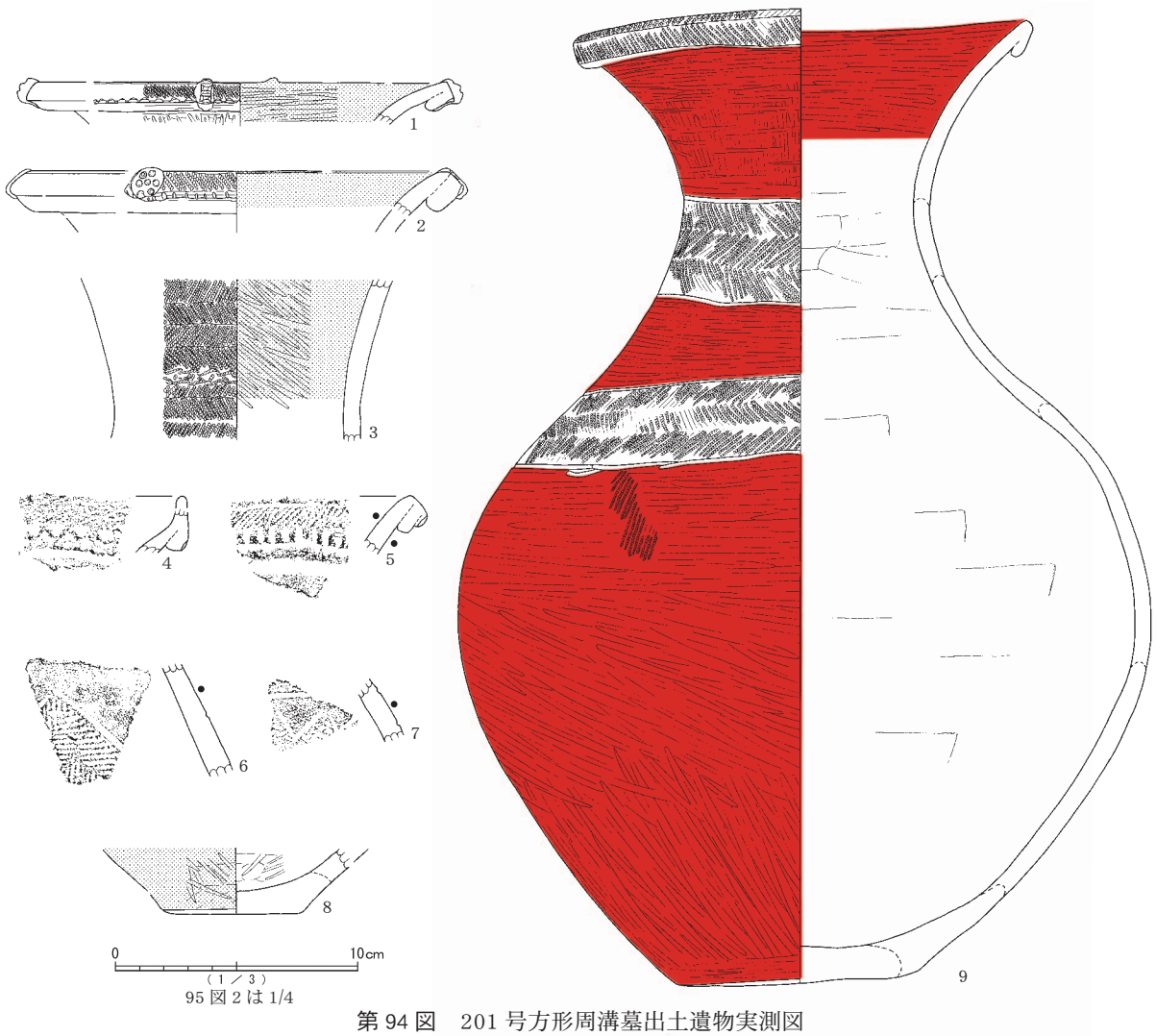
なお、胎土分析の結果、第 94 図 2 の壺が在地産胎土の可能性があり（ランク B）、第 95 図 2 の大型壺が在地産胎土の可能性が高い（ランク A）と判定されている。

202 号方形周溝墓（第 98 ～ 100 図、図版 13・14・37・68・78・80）

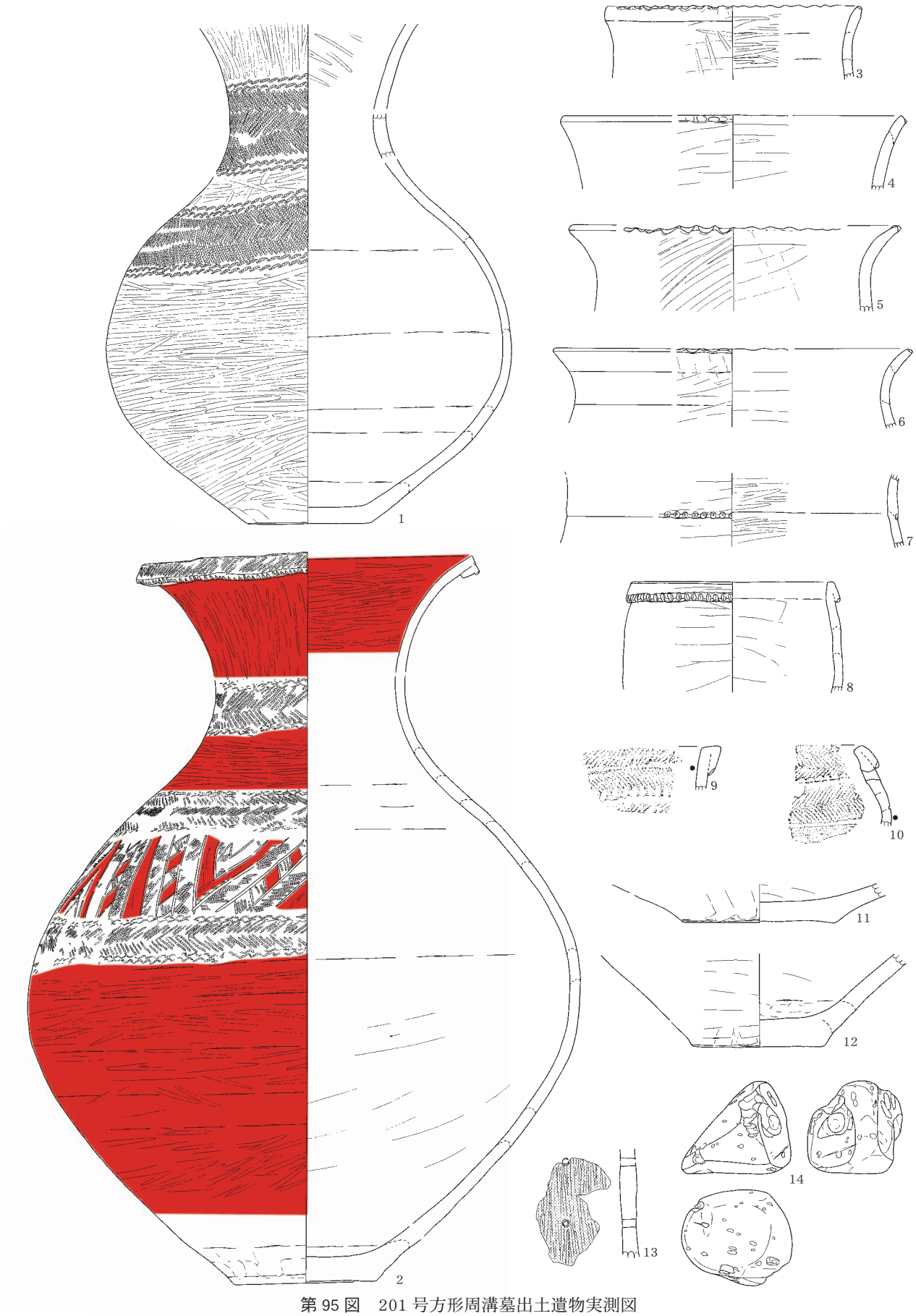
形状：周溝 1 角？が切れる方形（2 辺検出）　**規模**（長軸×短軸；m）：10.0? × 10.0?

外周面積（㎡）：103.8　**方台部面積**（㎡）：64.0　**周溝面積**（㎡）：36.8

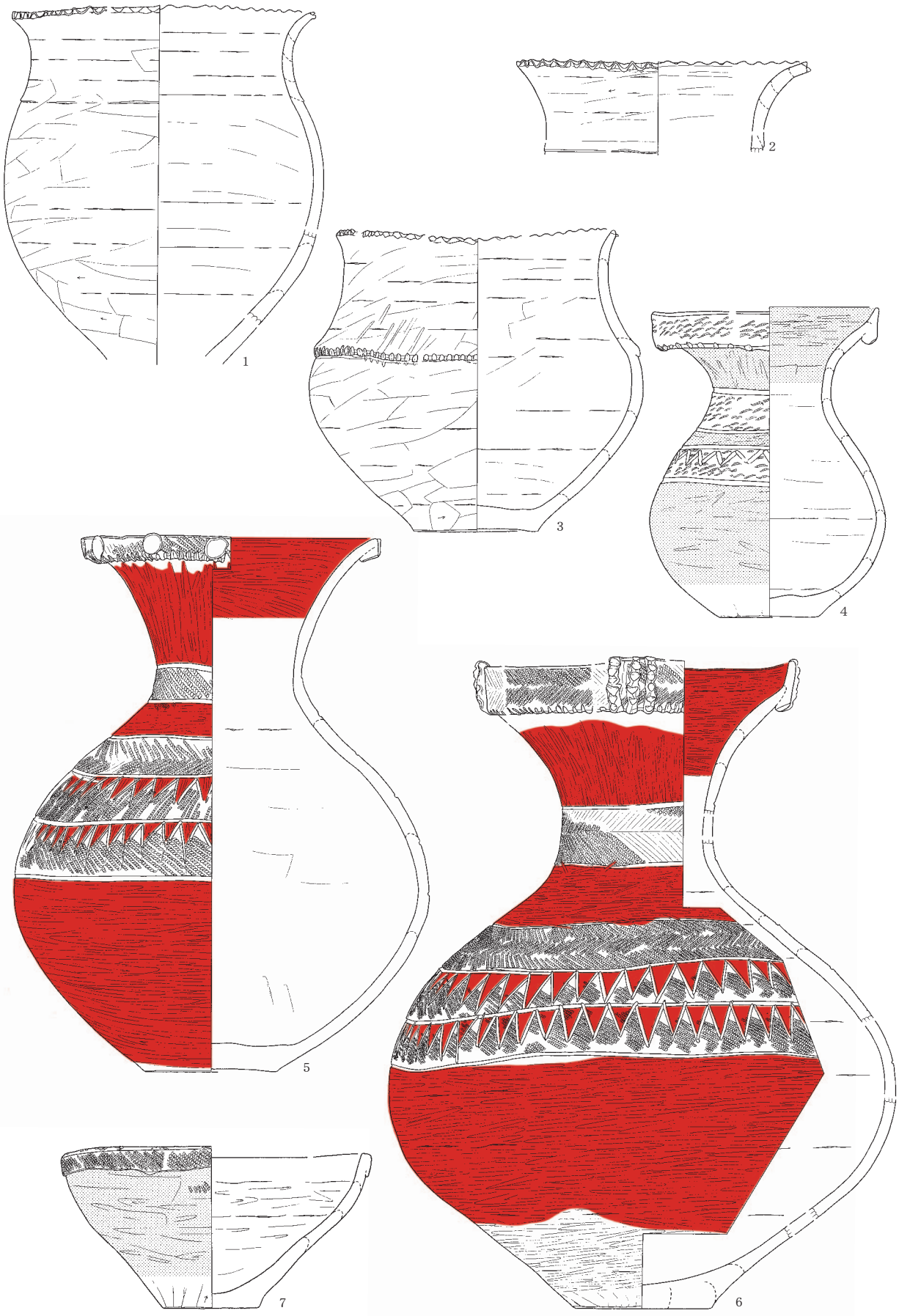
本遺構は調査区最北端に位置し、半分程度が調査区外にある方形周溝墓である。少なくとも南東溝の 1 箇所で周溝が掘り残される。このブリッジの位置は 201 号墓東側周溝の開口部と対面しており、後出する 201 号墓における築造計画の連動性が示されている。方台部には埋葬施設の可能性が考えられる長方形土坑を 2 箇所検出しているものの、いずれも遺物が出土しておらず、断定はできない。全



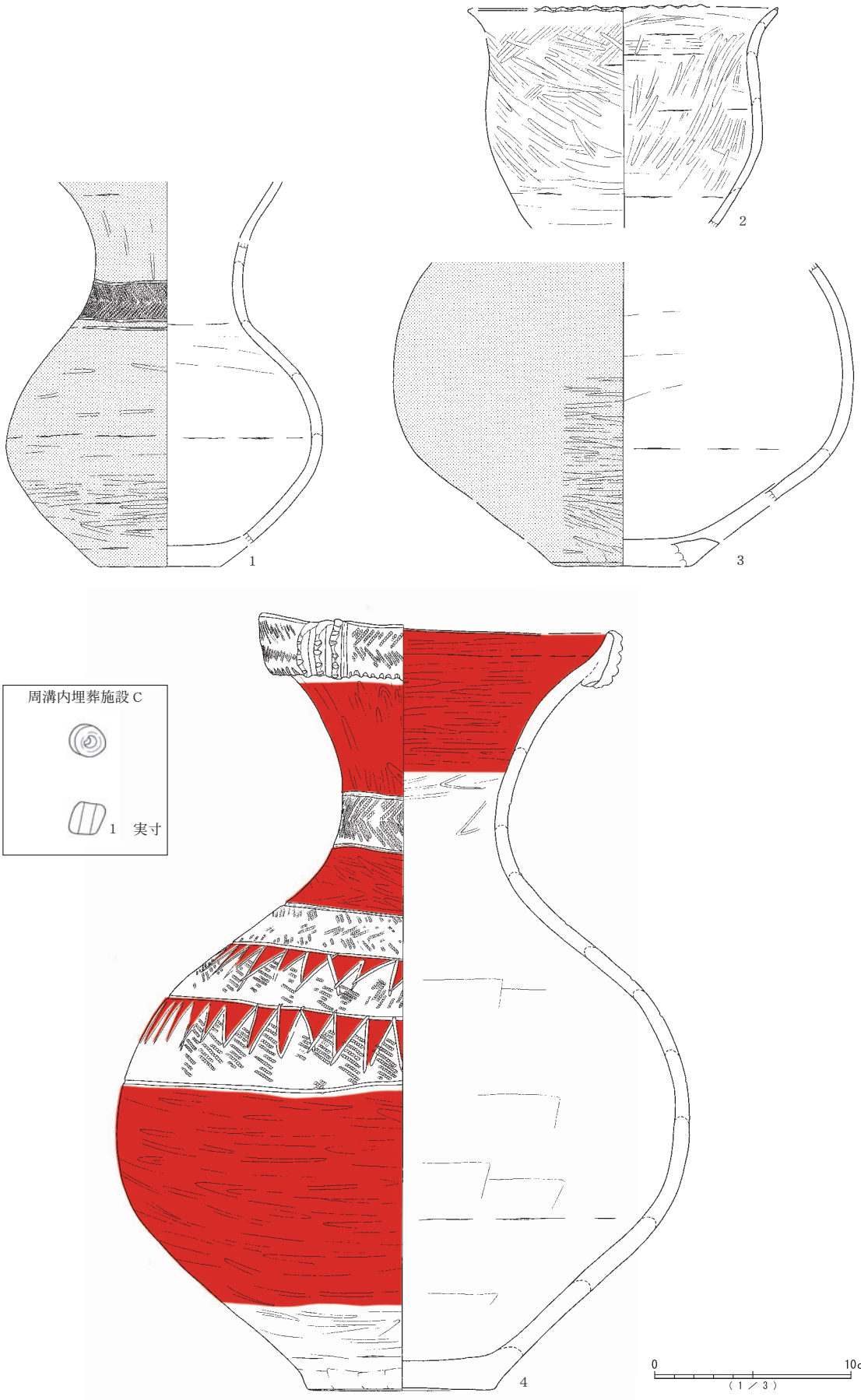
第 94 図　201 号方形周溝墓出土遺物実測図



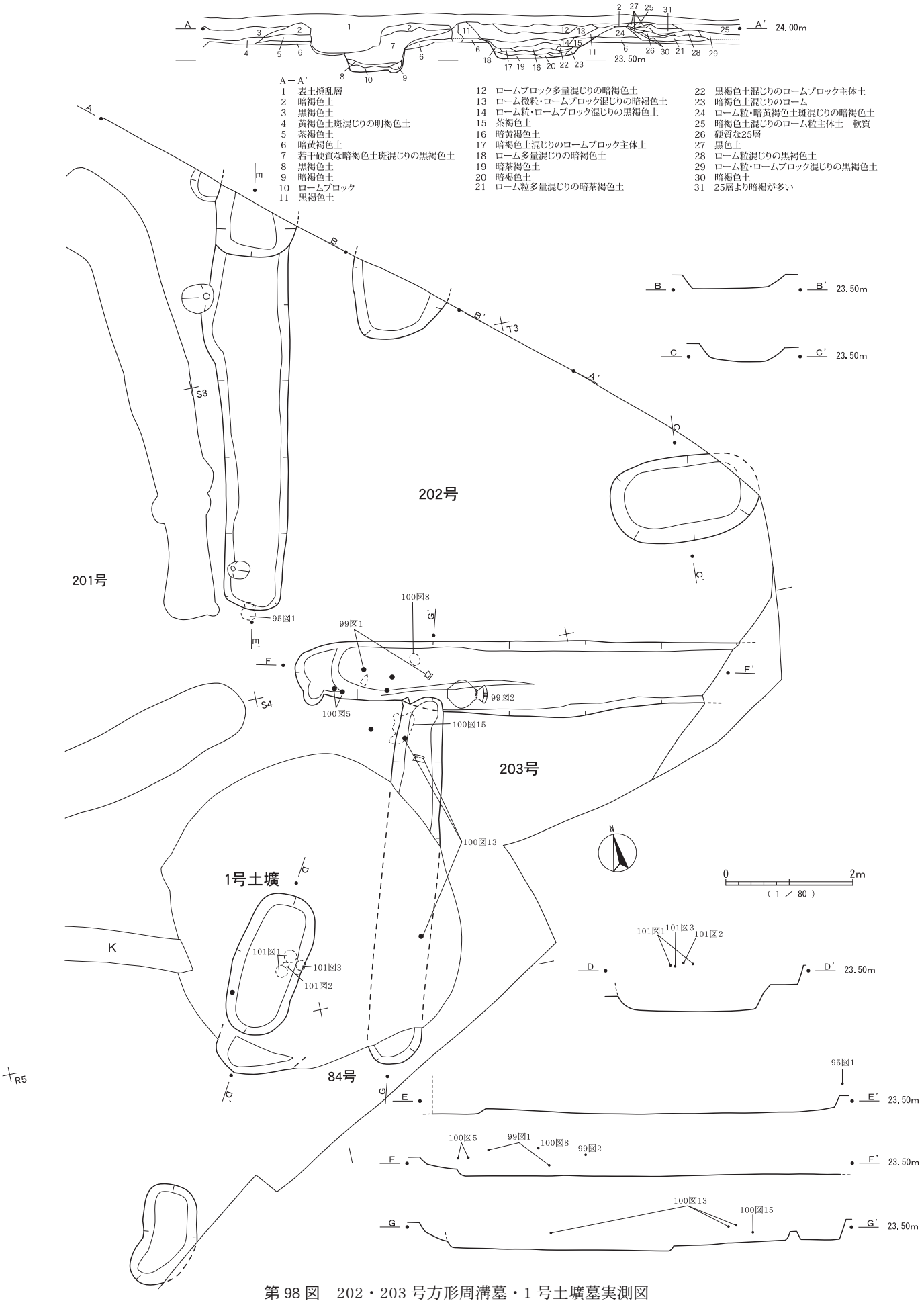
第 95 図　201 号方形周溝墓出土遺物実測図



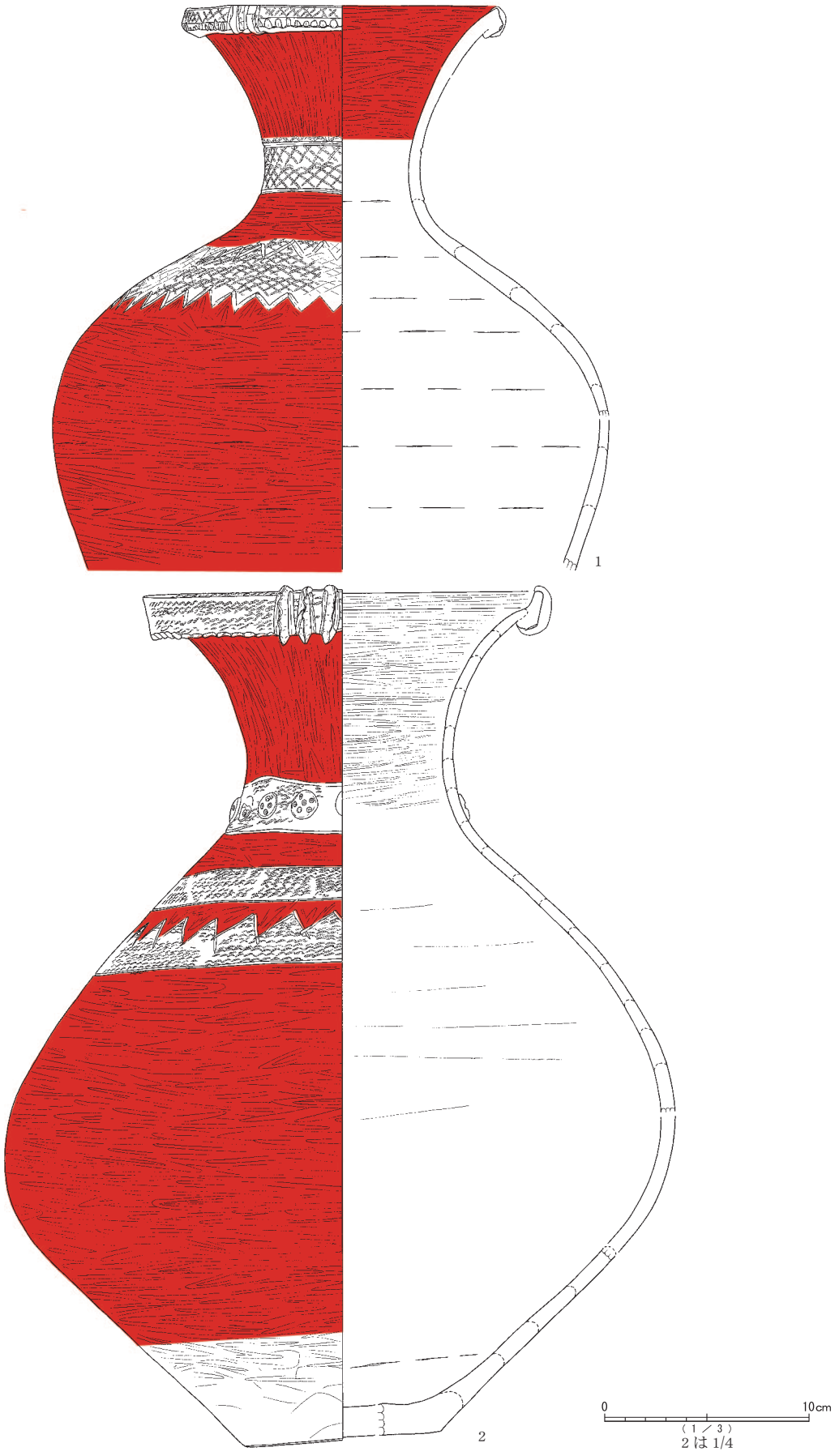
第 96 図　201 号方形周溝墓出土遺物実測図



第 97 図　201 号方形周溝墓出土遺物実測図

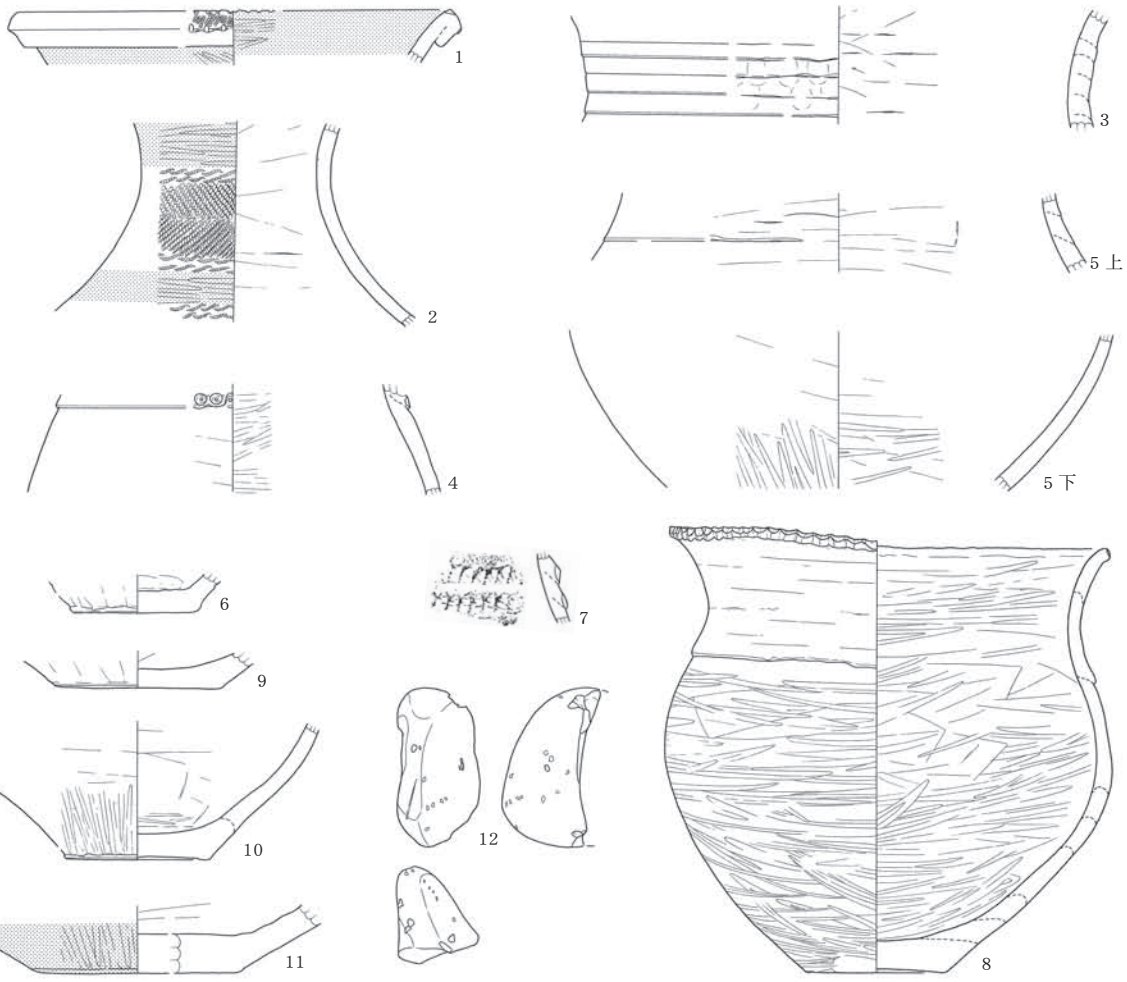


第 98 図　202・203 号方形周溝墓・1 号土壙墓実測図

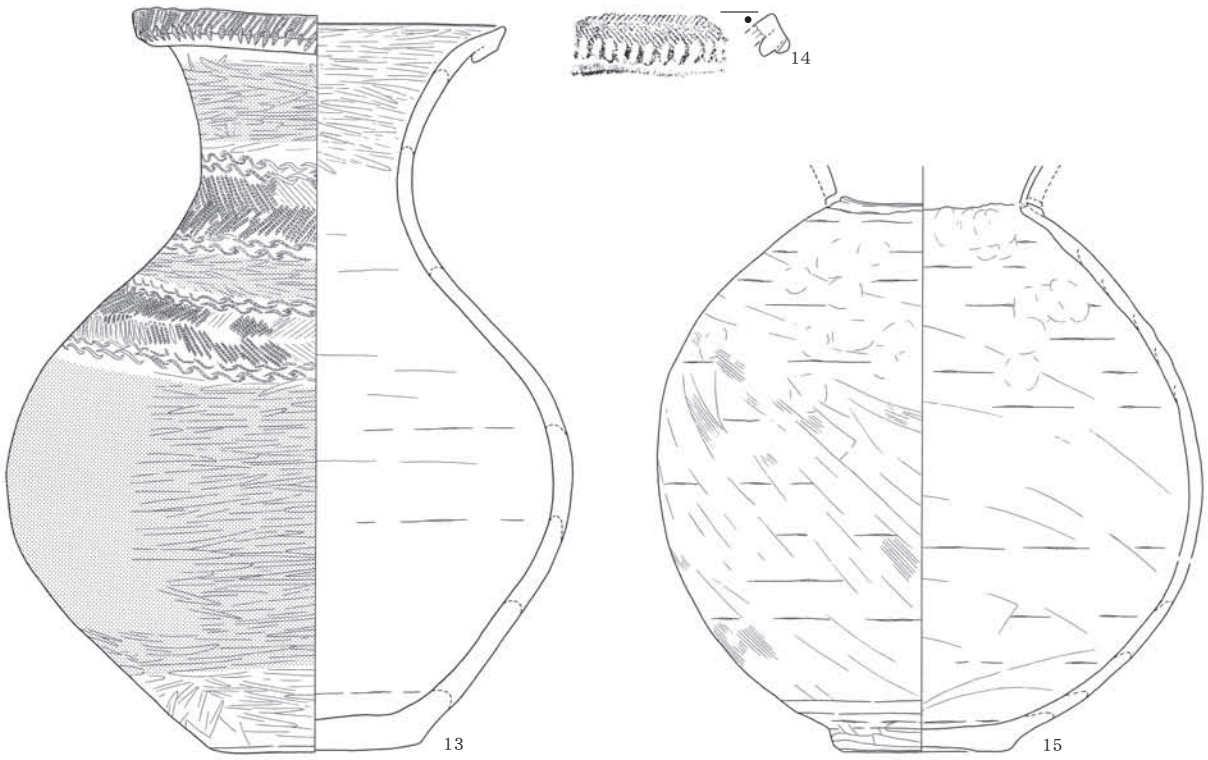


第 99 図　202 号方形周溝墓出土遺物実測図

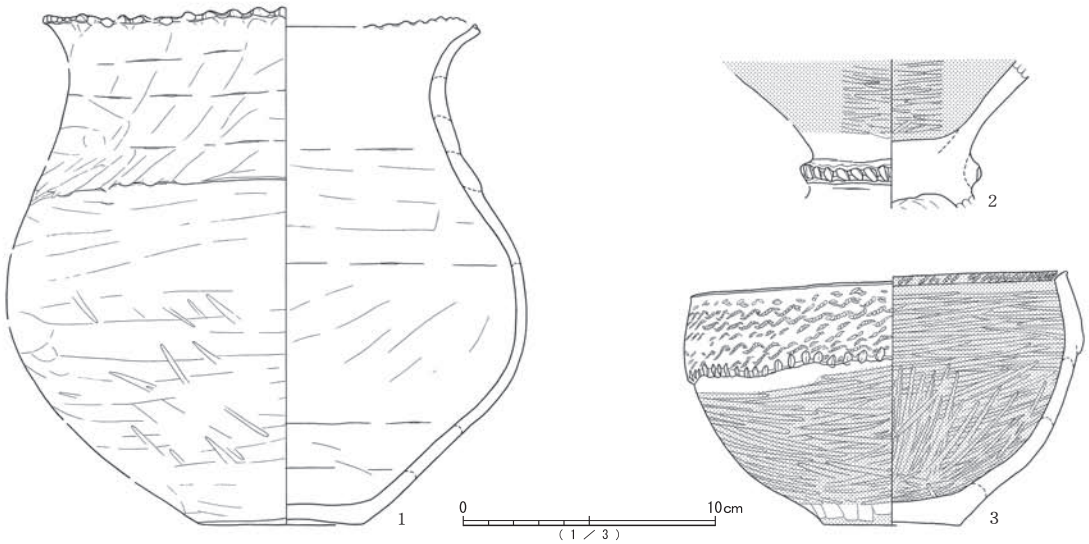
202 号



203 号



第 100 図　202・203 号方形周溝墓出土遺物実測図



第 101 図　1 号土壙墓出土遺物実測図

体規模が 201 号墓より遙かに大きく、方台部中心埋葬施設が検出できていないという可能性も考えられるが、いずれにしろ確定しがたい事象である。周溝内埋葬は、西側周溝北端に周溝底面からのさらなる落ち込みのある箇所に推定できるのみであるが、南溝西端部付近には、掘り込みが不明確ながらも、上層に土器の集中する部分があり、この 2 箇所が周溝内埋葬施設であるかもしれない。なお、本遺構は 203 号方形周溝墓とも切り合うが、203 号墓は本遺構の南側周溝を利用して拡張的に築造されたように見受けられる。本遺構の土器集中部が仮に 203 号墓に伴うものだとすると、202 号墓方台部から遺棄（葬送儀礼）が行われたことになり、やや不自然であるので、やはり南側周溝の土器群は 203 号墓構築前の所産と考えるのが妥当と思われる。

南側周溝の土器群の中には、遺存状態の良い壺（第 99 図 1・2）と甕（第 100 図 8）がある。肩部文様帯を山形沈線文で区画する壺（第 99 図 1）は、充填される縄文が網目状撚糸文であるものの、頸部文様帯は沈線文区画であり、久ヶ原式の特徴を示している。沈線文区画の大型壺は、口縁部・頸部・肩部とも多段結節文の充填であるうえに、胎土に大量の軽石状黄灰色粒が混ざっており、特徴的な形状を示している。上述の通り、多段結節文の壺と共通する小型壺が 201 号墓周溝内埋葬施設 B で出土していることからすると、同じく 201 号墓 A・B に認められる、鋸歯状沈線文を描き縦方向の単節縄文を重ねる独特な壺も、本遺構における山形沈線文区画のような文様要素との融合がその発現の契機になったとも考えられる。

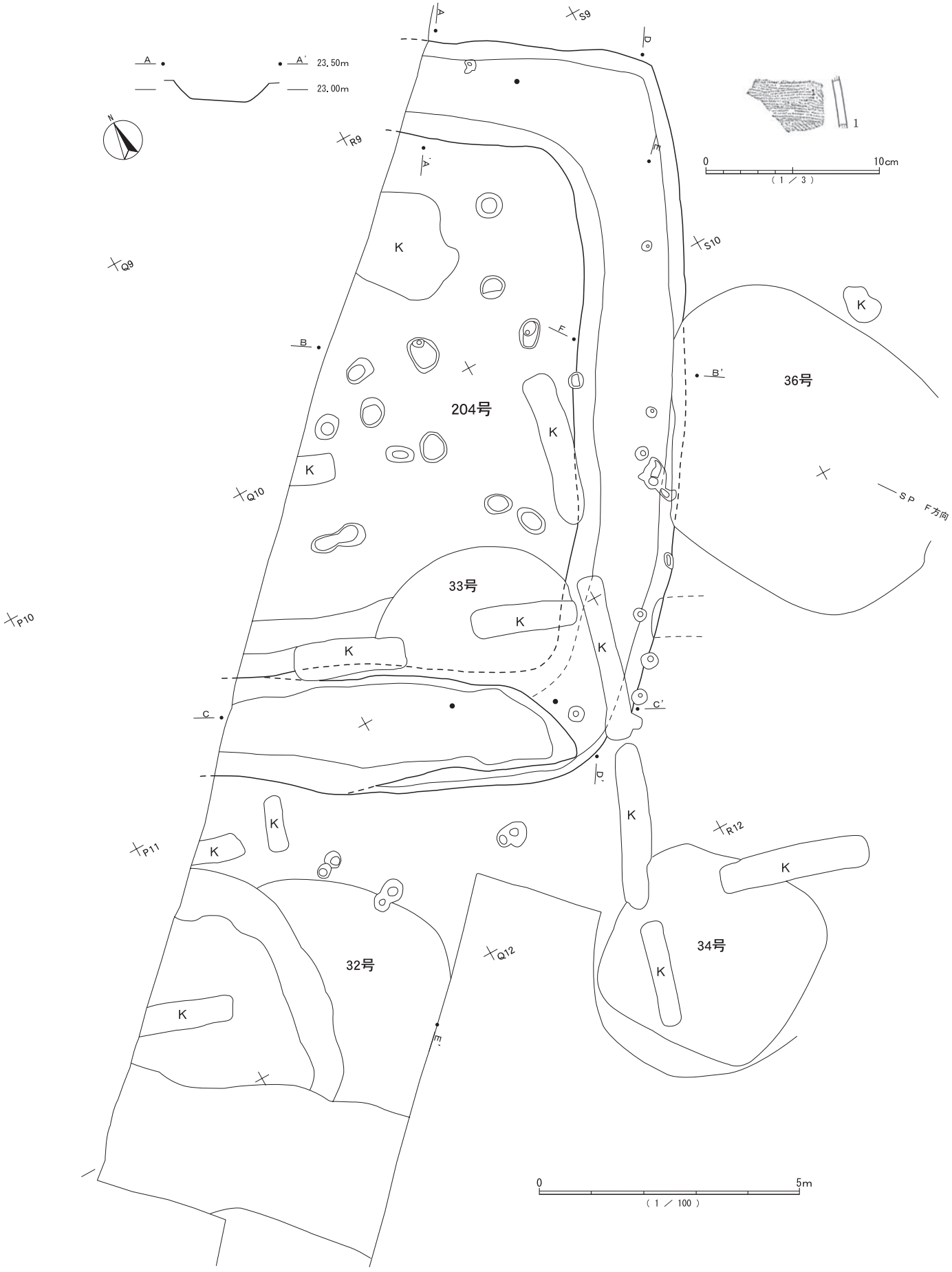
なお、胎土分析の結果、第 99 図 2 の大型壺が在地産胎土の可能性が高い（ランク A）と判定されている。ただし、軽石粒の多い胎土は一定程度目にするものだが、主流とは言えないので、局地的な意味では非在地的なのかもしれない。今後、細かい地域性を注視する必要があると言えよう。

203 号方形周溝墓（第 98・100 図、図版 38・68・80）

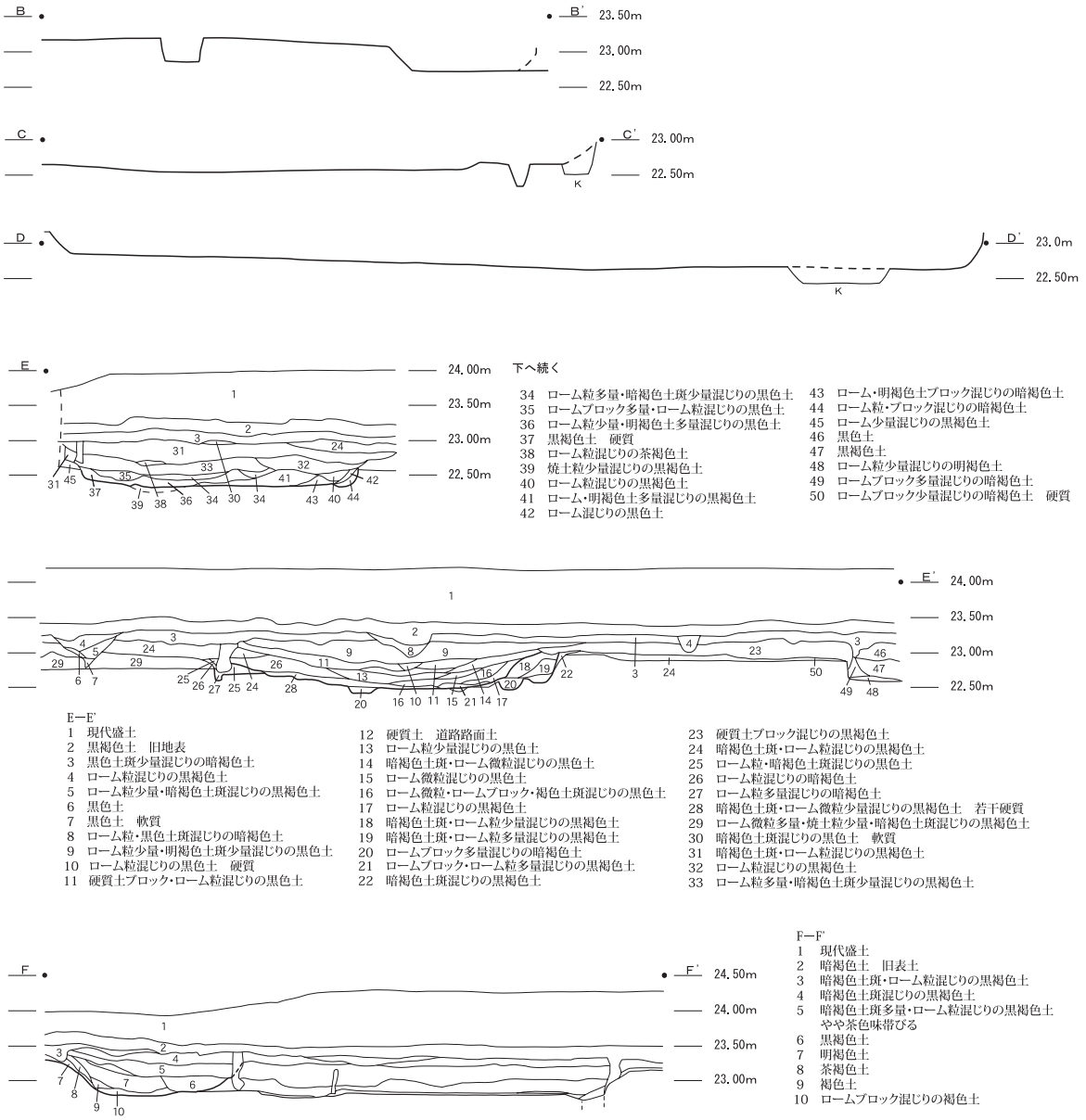
形状：周溝 1 角？が切れる方形（1 辺検出）　**規模**（長軸×短軸；m）：7.3? × 7.3?

外周面積（㎡）：53.9　**方台部面積**（㎡）：34.4　**周溝面積**（㎡）：19.1（1 辺 4.6）

本遺構は 202 号方形周溝墓の南側周溝に 1 辺を借りるかたちで構築された方形周溝墓である。202 号墓との切り合い部は不明確だが、84 号竪穴住居跡を切るのはほぼ確実である。方台部は部分的に調



第 102 図　204 号方形周溝墓および出土遺物実測図

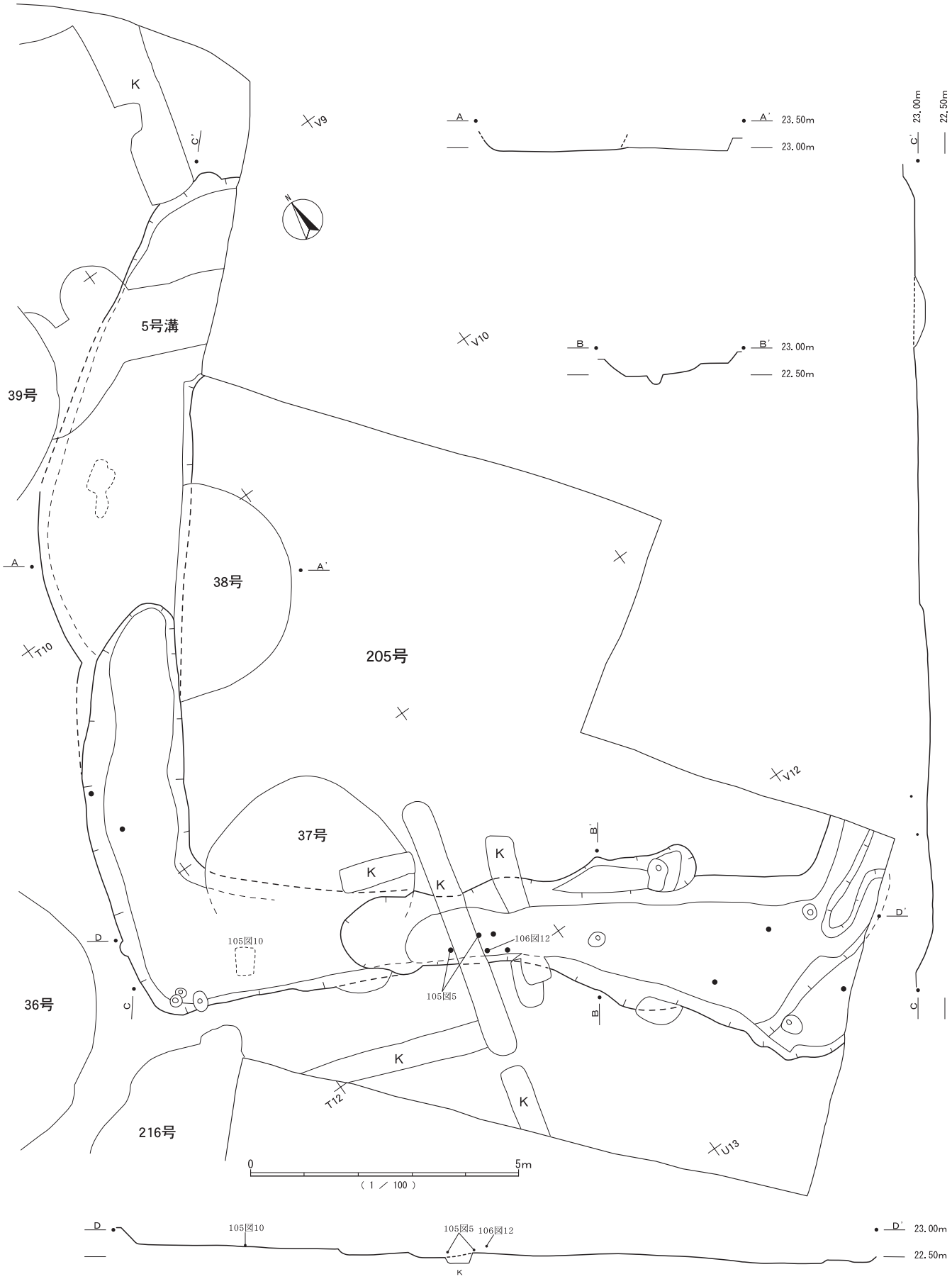


第 103 図　204 号方形周溝墓実測図

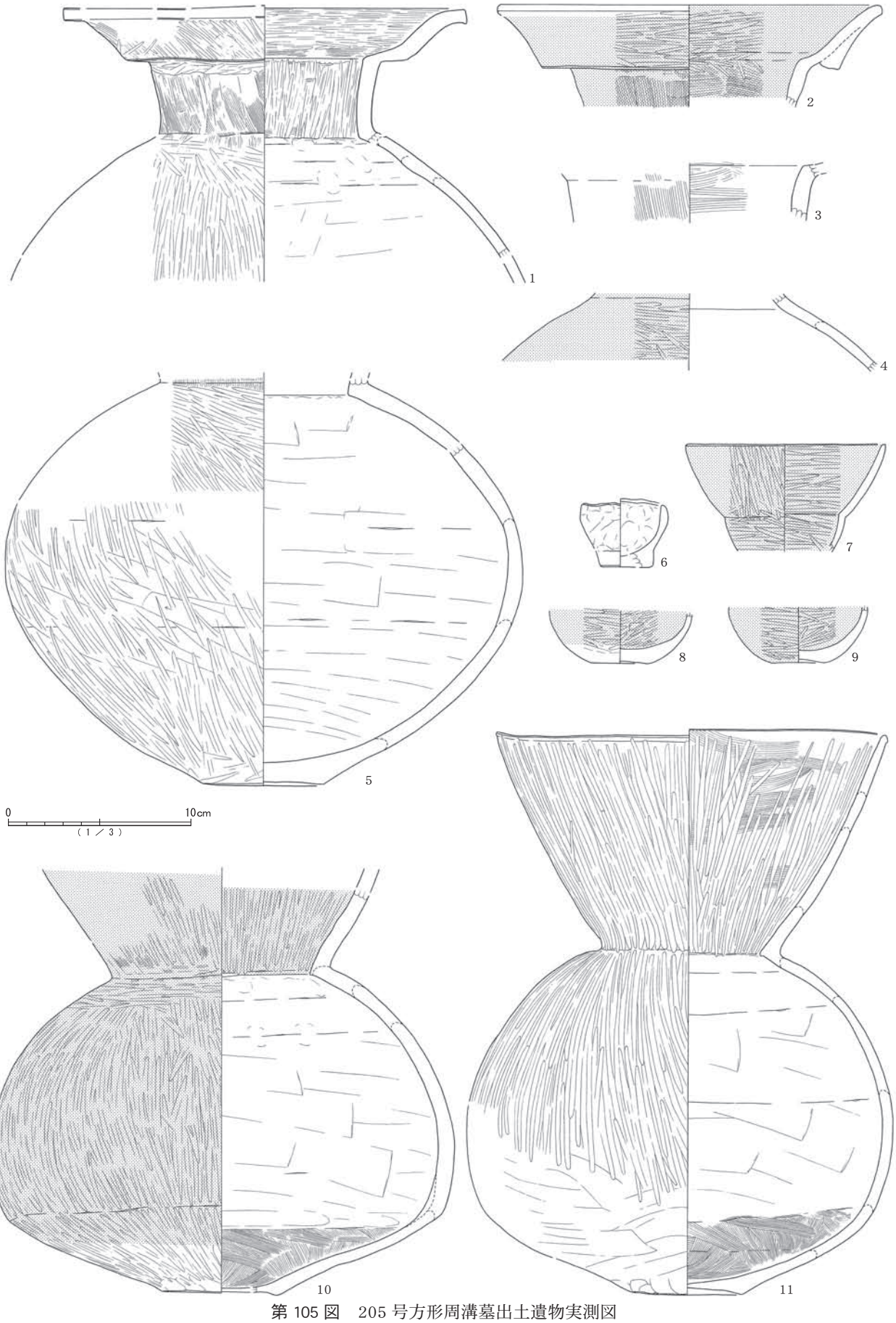
査したに過ぎず、埋葬施設は検出されていないが、西側周溝北端付近には土器集中地点があり、周溝内埋葬のあったことが示唆される。土器は、在地的な結節文区画の壺（第 100 図 13）と白っぽい胎土で異質な無文壺（15）が出土している。前者は、結節文区画の存在と、頸部文様帯と頸部屈曲の位置関係から、山田橋 2 式古段階に属すると思われるが、後者は胎土・技法とも系譜が不明であり非在地的な産物と考えられる。

本遺構の帰属時期は、202 号墓より新しいのはほぼ間違いなく、また、201 号墓とは周溝内の土器を比較するかぎり、こちらにも後出する可能性が高いと思われる。改めてこれら 3 基の築造順を記すと、202 号墓→ 201 号墓→ 203 号墓という展開が推測できる。それぞれの周溝内埋葬に若干の時期的な重複が含まれる可能性はあるにしろ、大勢はこれに従うと考えておきたい。

なお、第 100 図 15 の異質な壺は、胎土分析の結果、非在地産胎土の可能性がある（ランク D）と判定された。



第 104 図　205 号方形周溝墓実測図



第 105 図　205 号方形周溝墓出土遺物実測図

1 号土壙墓（第 98・101 図、図版 11・38・68）

形状：長方形　**規模**（長軸×短軸；m）：2.32 × 1.12

本遺構は 84 号竪穴住居跡覆土上に構築される土壙墓である。副葬品は何も検出されていないが、覆土上層に土器の集中が認められ、埋葬時に伴うものと考えられる。土器には、遺存良好な段部を持つ輪積痕甕と幅広の装飾肥厚部を持つ内弯気味でやや深めの鉢（第 101 図 1・3）がある。後者の文様は、多段の結節文を施すものであり、通有の単節縄文とは異なる点が特徴的である。これは 202 号墓と 201 号墓周溝内埋葬施設 B の壺に認められる文様と共通しており、これらと型式的・時間的に近接するものと捉えられよう。本遺構も隣接する方形周溝墓の埋葬施設群と同じく、弥生時代後期中葉に位置づけられるものであり、同じ墓域を構成する遺構のひとつであると考えられる。

204 号方形周溝墓（第 102・103 図、図版 14・68）

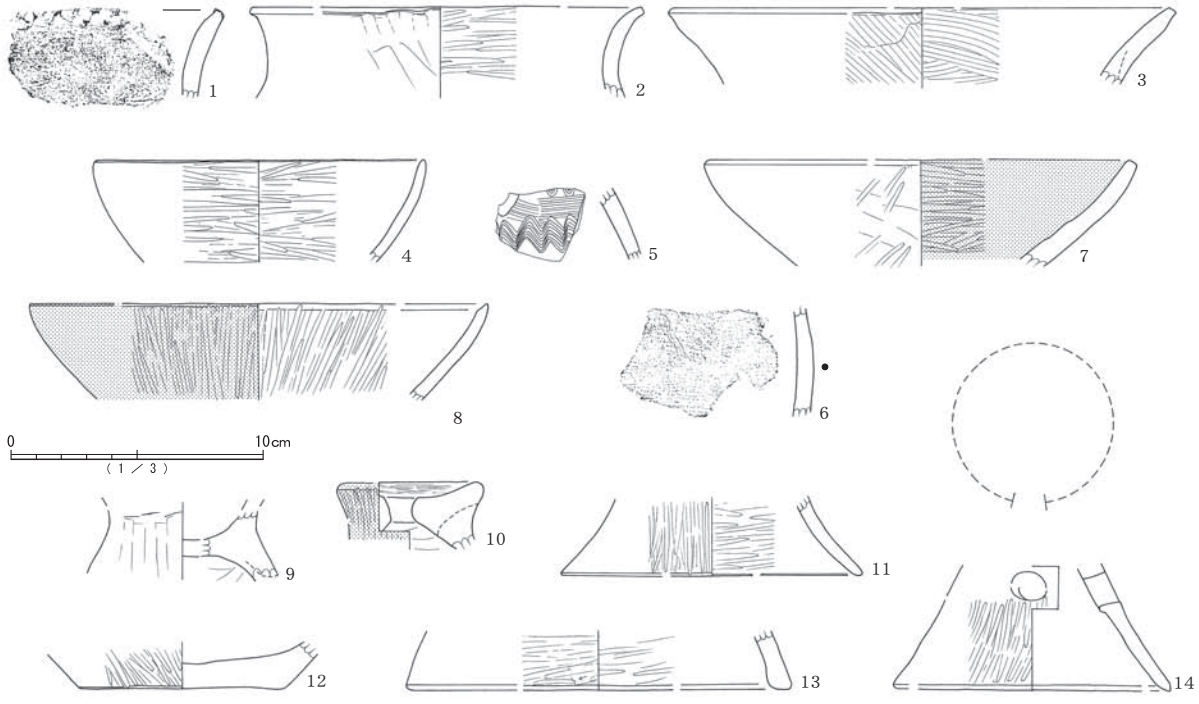
形状：全周する？方形（2 角検出）　**規模**（長軸×短軸；m）：14.5 × 14.5?

外周面積（㎡）：192.0　**方台部面積**（㎡）：99.7　**周溝面積**（㎡）：91.7

本遺構は東側の半分程度が調査できた方形周溝墓である。弥生時代後期前半の 33 号・36 号竪穴住居跡を切り、205 号・216 号・206 号方形周溝墓と 5 ～ 6m の間隔をおいて避けるような配置で構築されている。検出部分からは、直角に近いコーナーを持つほぼ正方形の全形が推定できる。

周溝の断面形は傾斜ゆるめの逆台形で、検出面から約 40cm の深さである。平面形の特徴は、288 号墓・290 号墓・215 号墓とは異なり、周溝各辺中央が外側に膨らまず等幅に近いという点である。周溝内埋葬施設は検出されていないが、南側周溝は一段掘り下げられたような形をしている。

方台部には撹乱坑と多数の性格不明の穴が検出されているが、埋葬施設に関連するとは思われない。



第 106 図　205 号方形周溝墓出土遺物実測図

中心埋葬施設があるとすれば、調査区外か、あるいは、すでに削平された墳丘盛土上にあったものと考えられる。

本遺構に帰属するとして取り上げられた遺物は皆無で、ハケメ調整の甕片（第 102 図 1）だけである。33 号・36 号竪穴住居跡出土土器（第 53・56 図）に見られる混入品には、底部輪台技法や無文椀形の高杯と見られる破片があり、明確に古墳時代前期に下る要素は少なく見受けられる。しかし、本遺構の時期を判断するには材料不足である。205 号・216 号・206 号方形周溝墓を避けた配置と、中心埋葬施設が墳丘盛土上にある可能性、さらに周溝平面形が等幅に近い点を勘案すると、本遺構は古墳時代前期の所産と位置づけられよう。

205 号方形周溝墓（第 104 ～ 106 図、図版 14・45・68・82・83・85・87）

形状：全周する？方形（3 角検出）　**規模**（長軸×短軸；m）：17.2? × 16.0?

外周面積（㎡）：246.3　**方台部面積**（㎡）：131.5　**周溝面積**（㎡）：115.0

本遺構は東側調査区北東端で 3 角を検出した方形周溝墓である。37 号・38 号・39 号竪穴住居跡を切り、5 号溝に切られている。216 号方形周溝墓は南側 1 辺を共有する形で隣接するが、本遺構の方が新しいと考えられる。埋葬施設はまったく検出されていないが、調査範囲内に方台部中心があるにもかかわらず、検出されていないことからすれば、本来、存在したはずの墳丘盛土とともに失われたものと推察できる。

遺物は比較的豊富である。竪穴住居跡の範囲と重複しており、それらの帰属遺物とされているものが多かったが、そこから抽出して図示した（第 105・106 図）。おそらく周溝内から出土し、葬送儀礼に関係した土器群の一部と思われるのが第 105 図の資料で、無文二重口縁壺（1 ～ 5）・小型土器（6 ～ 9）・大ぶりの直口壺（10・11）という組み合わせである。無文二重口縁壺と直口壺の頸部屈曲の鋭さと、小型土器において五領式に特徴的な小型丸底土器に近似する形状が認められることからすると、本遺構は古墳時代前期に位置づけるのが妥当と思われる。

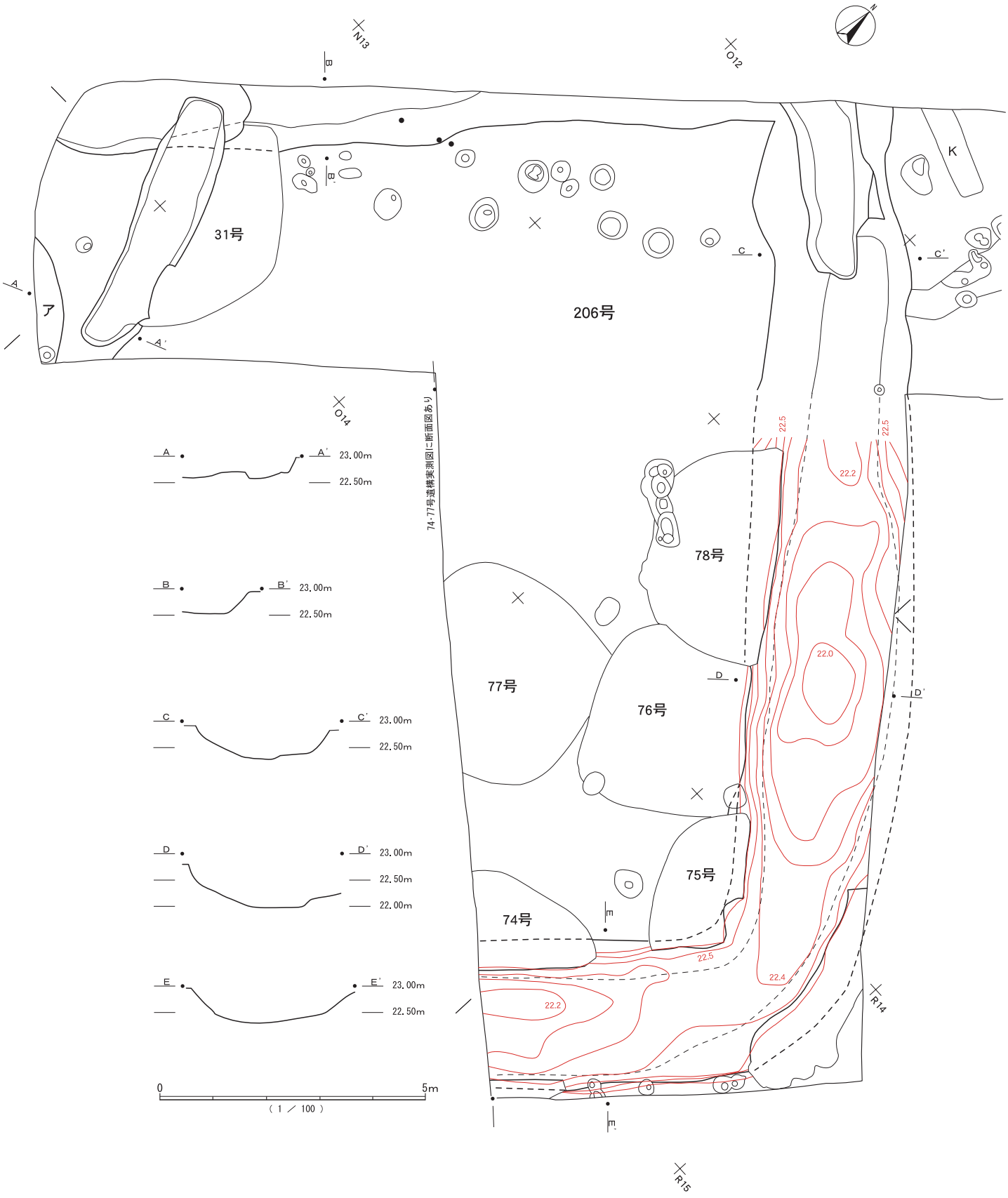
なお、胎土分析の結果、第 105 図 4 の壺が在地産胎土の可能性があり（ランク B）、第 106 図 6 のパレススタイル壺は非在地産胎土の可能性が高い（ランク E）と判定されている。

206 号方形周溝墓（第 107 図、図版 15）

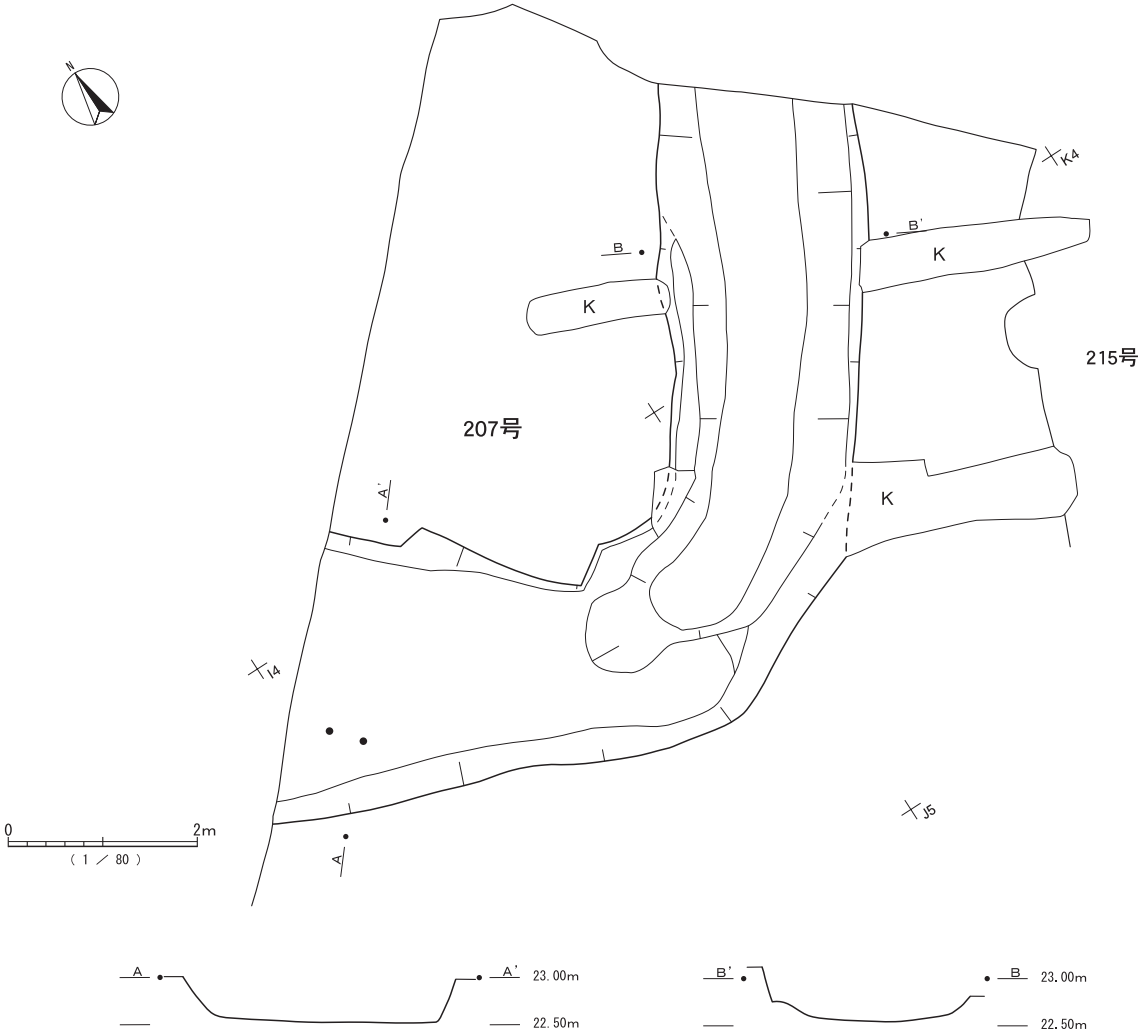
形状：1 角の切れる？方形（1 角検出）　**規模**（長軸×短軸；m）：21.2? × 20.8?

外周面積（㎡）：413.9　**方台部面積**（㎡）：233.6　**周溝面積**（㎡）：180.6

本遺構は東側調査区南端に検出された方形周溝墓で、31 号・32 号・74 号・75 号・76 号・78 号竪穴住居跡のいずれも切って構築されている。平面形は、各コーナーが判然とせず不明確だが、コンター図からは若干外側に膨らむ周溝形状が推定できる。また同じく、周溝断面形は台形と言うより半円形に近い箇所が多いようである。周溝全形は不明だが、第 107 図アの掘り込みが南西側周溝の端とするならば、西コーナーが掘り残されていた可能性も考えられる。その場合は全体の平面形が長方形となり、288 号墓と同様の位置にブリッジを持つことになるが、確定するのは難しい。埋葬施設はまったく検出されなかったが、方台部中心埋葬施設が墳丘盛土上にあったことの反映かもしれない。また、全体規模を大きく見積もれば、調査区外に位置する可能性も否定できない。なお、東側の遺構下端は



第 107 図　206 号方形周溝墓実測図



第 108 図　207 号方形周溝墓実測図

平面図に記録がないため、コンター図から推定復元して破線で描いている。

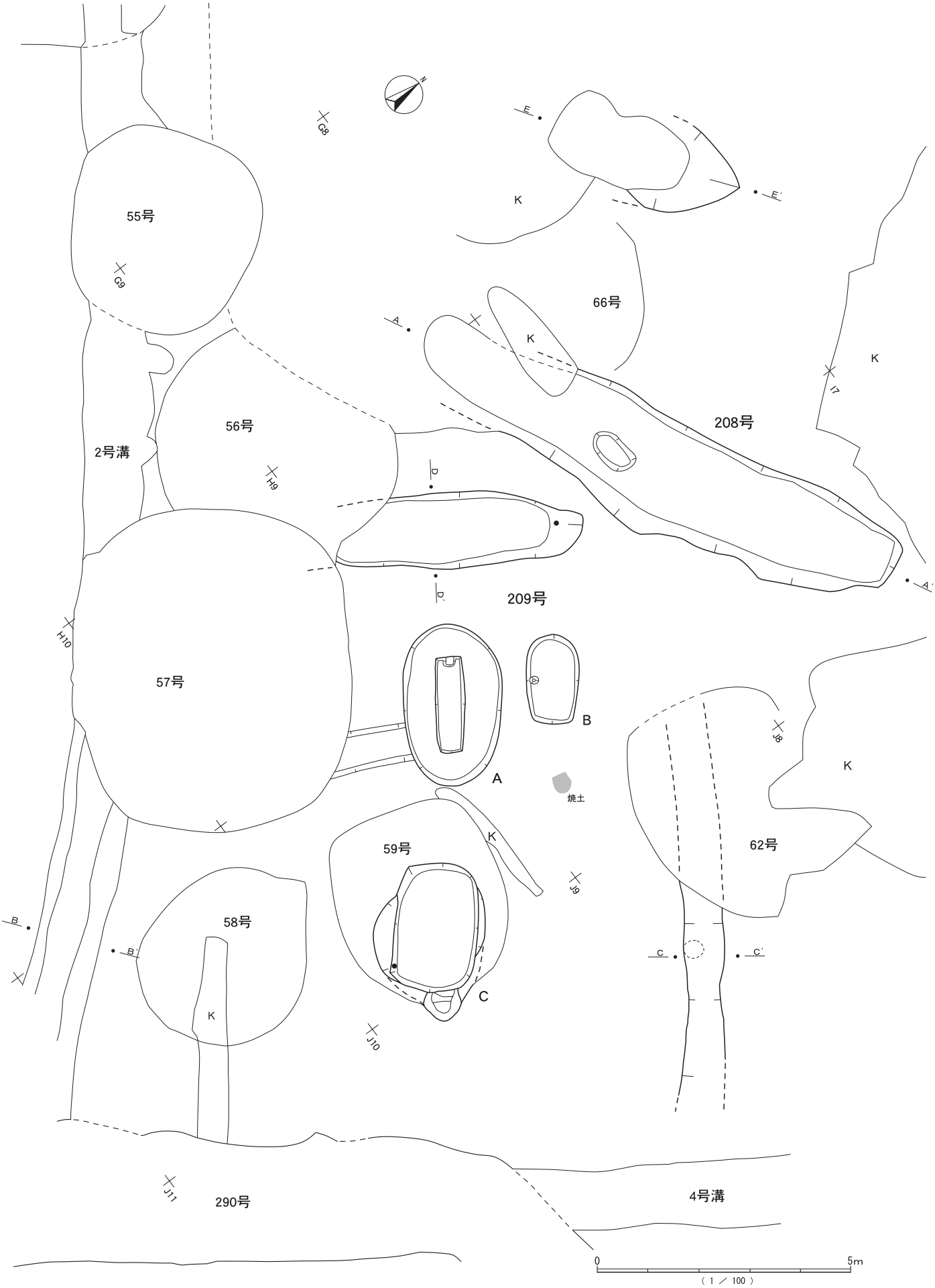
本遺構に伴うとして取り上げられた遺物はまったくない（北辺に 3 点ドットが記録されているが対応する遺物が不明）。切り合う各竪穴住居跡の出土遺物（第 82・83 図）に弥生時代終末期以降の土器が散見されるが、これらから本遺構の帰属時期を判断するのは難しい。構築位置について見ると、本遺構は 216 号・290 号・211 号墓と接しながらも切り合わないと推定できるが、このことからすると、近隣の各墳墓はそれぞれ、以前の遺構に規定された形での選地を継起的に行ったというプロセスが推察できる。そのように仮定すると、本遺構は時期の明確な古墳時代前期の 211 号方形周溝墓に先行し、216 号墓あるいは 290 号墓に後続するという関係が想定できる。

207 号方形周溝墓（第 108 図、図版 15）

形状：方形（1 角検出）　**規模**（長軸×短軸；m）：15.0? × 13.6?

外周面積（㎡）：197.2　**方台部面積**（㎡）：96.4　**周溝面積**（㎡）：101.6

本遺構は 215 号方形周溝墓の西側に近接して築かれる方形周溝墓である。調査区内には南東の 1 角しか検出されておらず、全容は不明である。周溝断面形は低い逆台形で、20cm ～ 50cm 前後の深さである。遺物は平面図中に 2 点取り上げた記録があるが、対応する遺物は見当たらない。本遺構の帰



第 109 図　208・209 号方形周溝墓実測図

属時期は、遺物では確定できないものの、215 号方形周溝墓と近い時期であると考えられる。

208 号方形周溝墓（第 109・110 図）

形状：方形？（1 辺検出）　周溝面積（㎡）：1 辺 19.9　4 倍 79.7

本遺構は西側調査区の北西部に位置する方形周溝墓の一部と考えられる遺構である。付近の墳墓遺構の配置状況は錯綜しており、対応する他の辺や方台部と埋葬施設の組み合わせは不明である。209 号墓とした方形周溝墓と見られる遺構の南東には、3 箇所の埋葬施設状の土坑があり、これらが本遺構に伴うようにも思われるが、対応する周溝が認定できないので、やはりいずれも隣接する 209 号墓に関係すると見るのが妥当である。遺構周辺は調査前に撹乱を広く受けていたらしく、北西に方台部があった可能性も否定できず、その場合、64 号竪穴住居跡に近い 4 号土壙墓が関連遺構とも考えられる。

遺物はまったく出土しておらず、土器による時期の判定はできない。ただし、本遺構が 1 辺だけ単独で検出されたことを重視するならば、4 隅開放型という一般的に古相と見られる方形周溝墓の一部である可能性も考えられなくはない。いずれにしろ、調査区内の竪穴住居跡が弥生時代中期末以降、墳墓が弥生時代後期中葉以降に展開する事実を重視すれば、弥生時代後期のいずれかの段階に位置づけられるものと思われる。

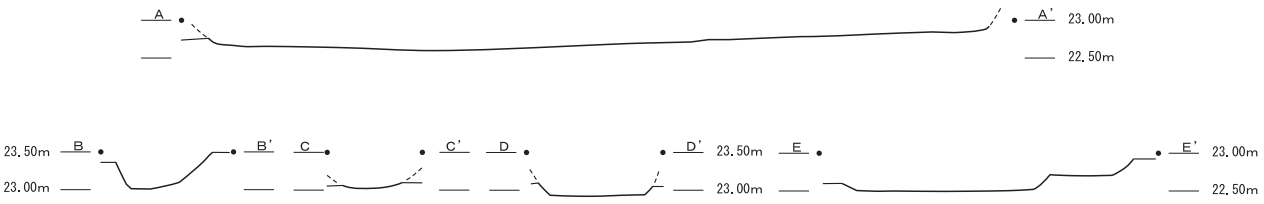
209 号方形周溝墓（第 109・110 図、図版 9・15）

形状：方形？　周溝面積（㎡）：1 辺 7.3　4 倍 29.1

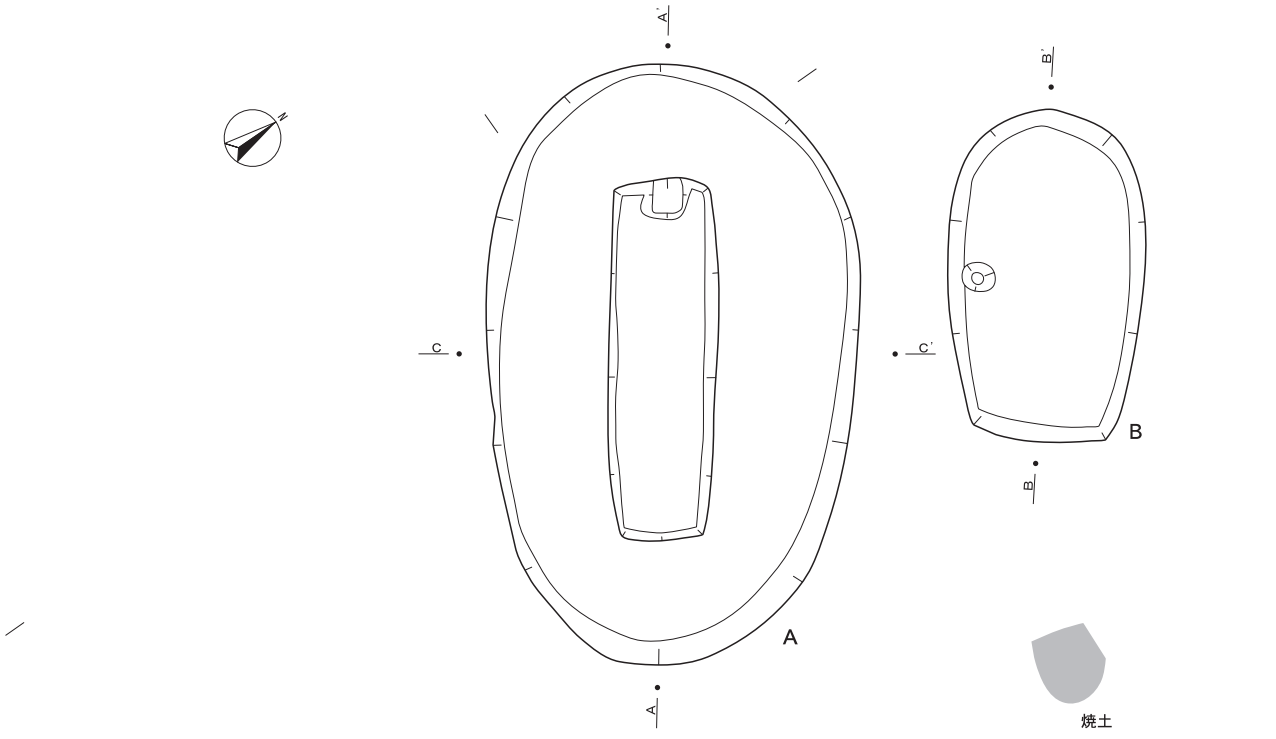
本遺構は、1 号溝・2 号溝・4 号溝によって南東と南西を破壊される方形周溝墓である。56 号・57 号・58 号・59 号竪穴住居跡とも切り合うが、いずれも本遺構が切るようである。遺物は北西溝にドット 1 点、北東溝に範囲 1 箇所（破線）の出土位置が記録されているが、対応する遺物注記は確認できない。遺構全形は、北西辺と見られる箇所のみが明確で、他の 3 辺は存在が不確実である。北東辺は上位が削平されたものか、ごく浅い痕跡的な遺存状態であり、南東辺・南西辺はそれぞれ 4 号溝、1・2 号溝と重複している可能性が考えられる。

本遺構に伴う埋葬施設は、第 109 図 A・B・C の 3 箇所が想定できる。

A は、長軸 3.2m 短軸 1.98m のトラック形の墓壙内に木棺を埋置したと見られる埋葬遺構で、長軸 1.92m 短軸 0.56m の木棺痕跡が捉えられた。上段までの深さが 30cm 強、下段はさらに 20cm 弱掘り込まれている。木棺痕跡には北西端短辺中央にステップ状の土が検出されているが、木棺の形状を反映したものであるかは不明である。仮に木棺の形に起因するものとすれば、側板に小口板を挟む形式を示唆するが、あくまで推測に過ぎない。



第 110 図　208・209 号方形周溝墓実測図

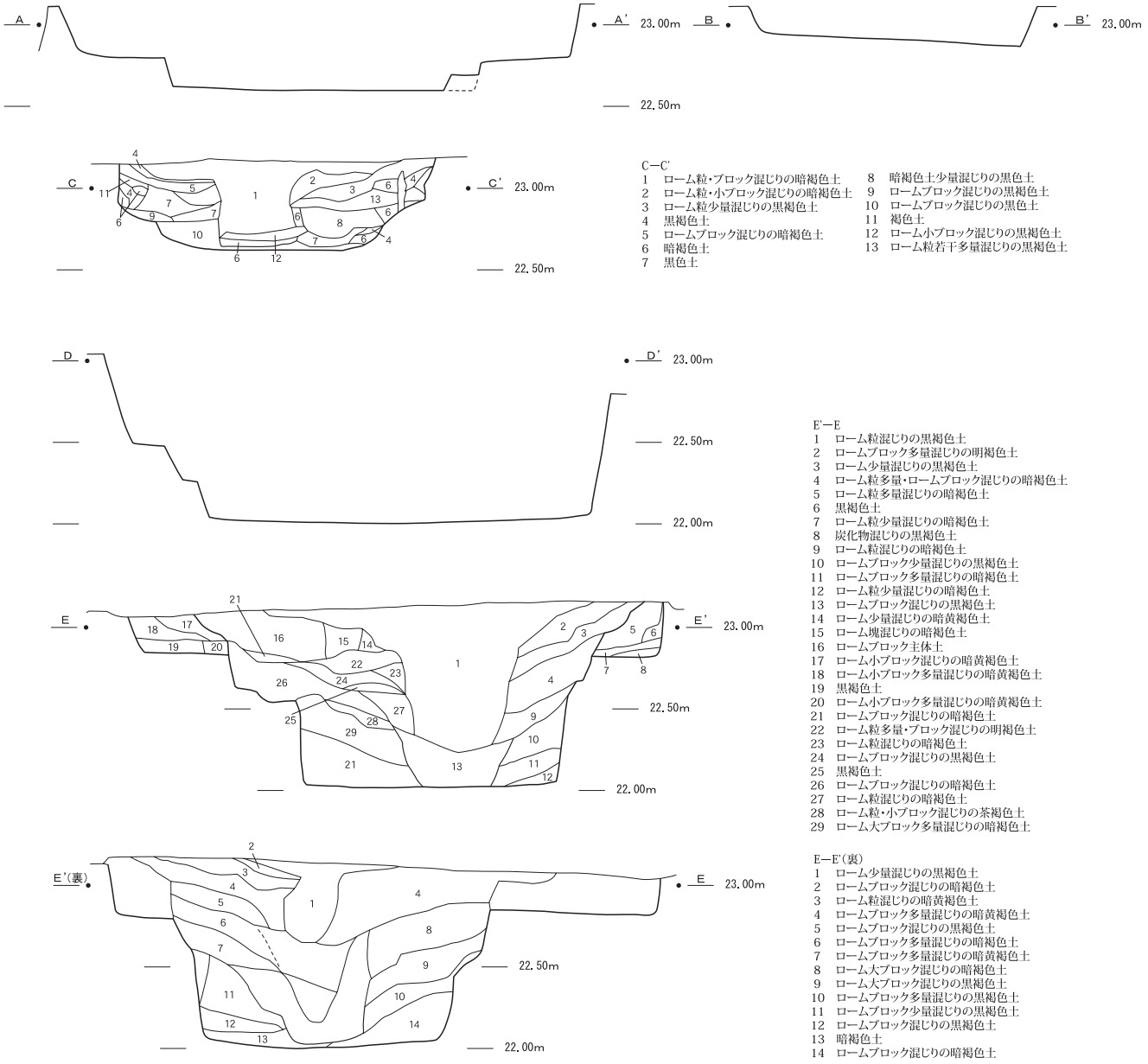


第 111 図　209 号方形周溝墓埋葬施設実測図

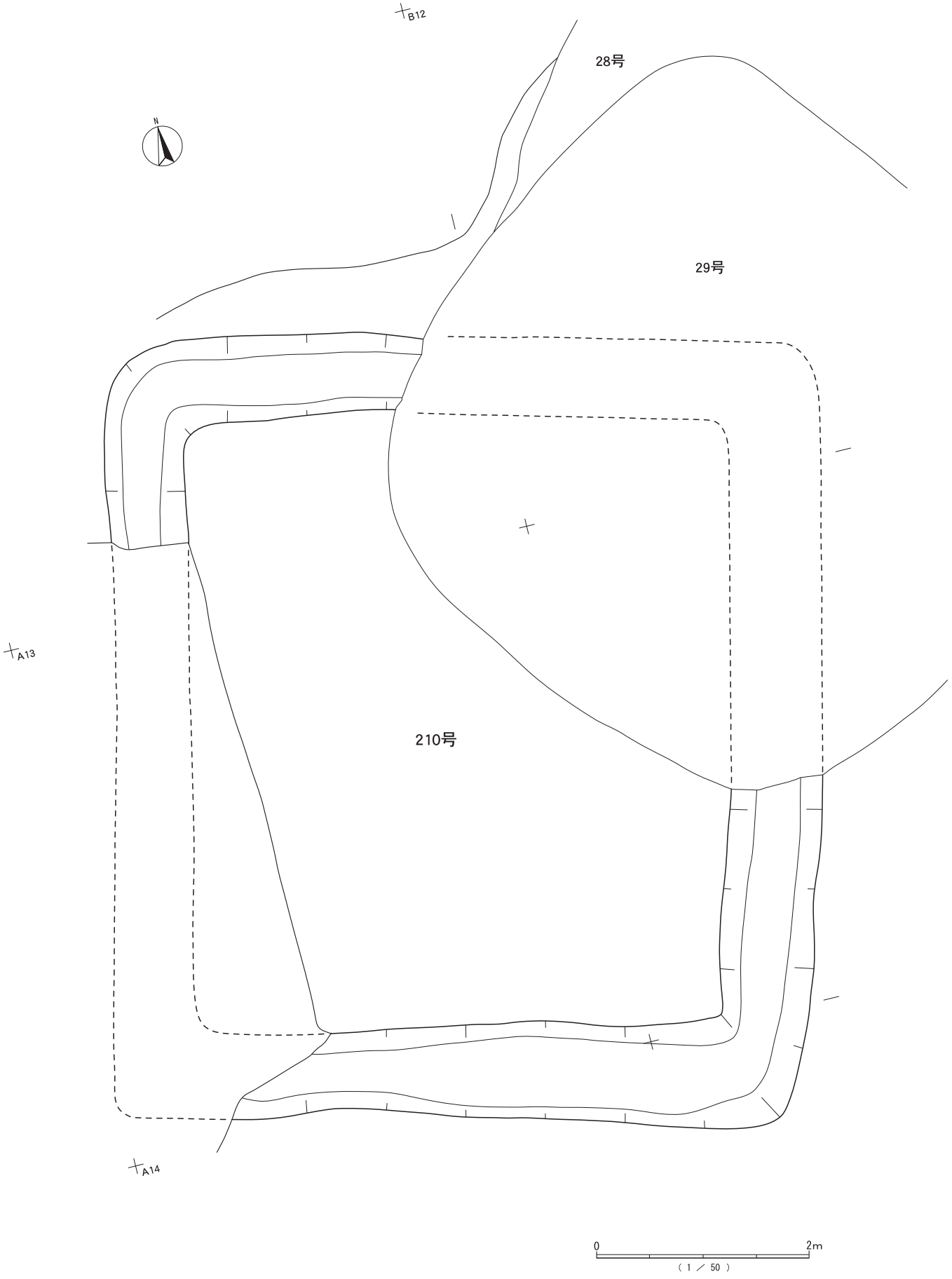
Bは、長軸1.76m短軸1.04mの一方の短辺が曲線的な長方形を呈する土坑で、Aの北東側に並ぶ位置にある。深さは20cm程度で、水平に近い底面を持つ。なお、Bの長軸延長上南東には直径40cmの範囲に焼土が認められる。AとBに関連する遺構であろうか。

Cは、長軸2.56m短軸1.64mの長方形土坑の上位が若干広がる形状を持ち、南東短辺に幅0.7m程度の階段状の掘り込みが検出されている。位置は、Aの長軸に揃うかたちで、59号竪穴住居跡の中央に構築されている。Aに比べ50cm以上深く、階段状の部分が伴うことから中世地下式壙（坑）かとも思われるが、土層断面に見られる堆積状況は、天井部の崩落というよりは、木棺などの腐朽に伴う陥没と見受けられ、やはり209号墓に伴う埋葬施設であると捉えておきたい。副葬品等の遺物はまったく検出されていない（ドットが1点あるものの対応する遺物がない）。

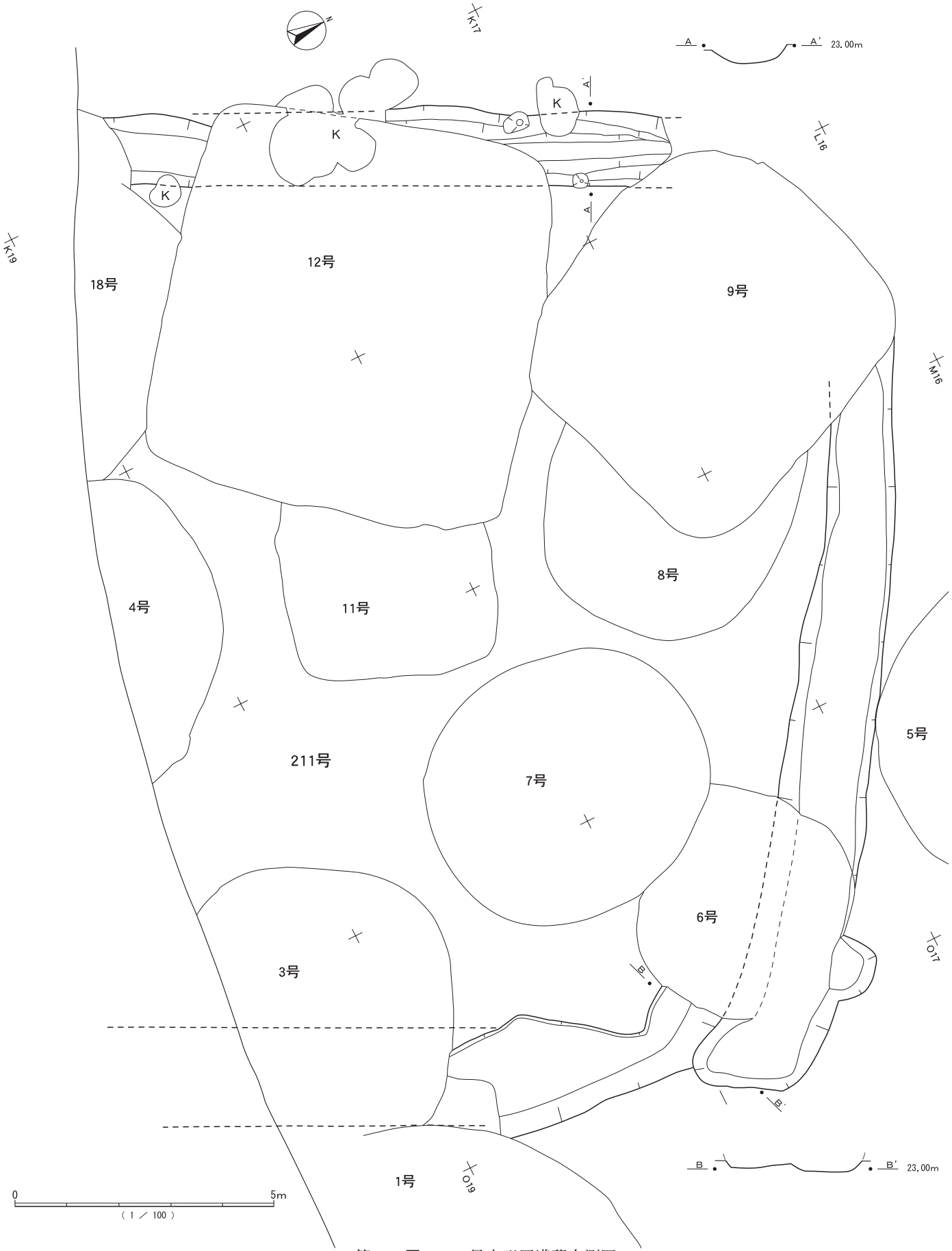
遺物が伴わないため不確定だが、本遺構の帰属時期は弥生時代後期の範囲にあるものと思われる。



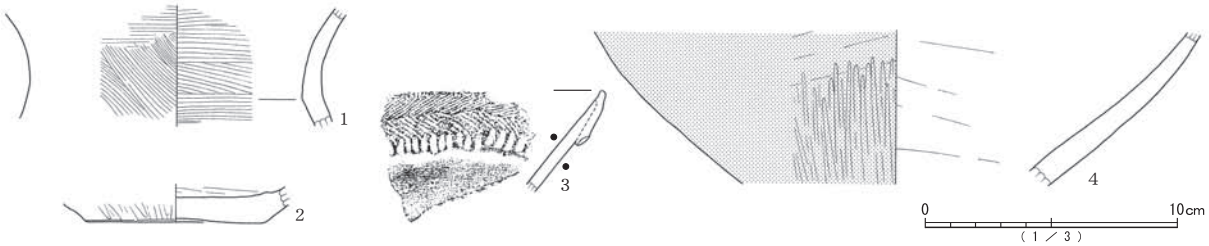
第112図　209号方形周溝墓埋葬施設実測図



第 113 図　210 号方形周溝状遺構実測図



第 114 図　211 号方形周溝墓実測図



第 115 図　211 号方形周溝墓出土遺物実測図

210 号方形周溝状遺構（第 113 図、図版 17）

形状：方形　**規模**（長軸×短軸；m）：7.30 × 6.65

外周面積（㎡）：49.0　**方台部面積**（㎡）：30.6　**周溝面積**（㎡）：19.7

本遺構は、西部調査区南西端で検出された方形周溝状遺構で、28 号・29 号竪穴住居跡を切って構築されている。周溝平面形は、ほぼ等幅で各コーナーが直角を示し、断面は垂直的に掘り込まれた逆台形である。標高に関する記録がないためエレベーションは提示できないが、写真から判断すると周溝は 40cm ～ 50cm の深さのようである。遺物は本遺構に帰属するとして取り上げられたものはないが、29 号竪穴住居跡出土の須恵器壺（第 47 図 27）が、本遺構に伴う遺物である可能性が高い。遺構形状と平安時代須恵器の出土から、本遺構は平安時代の方形周溝状遺構と判断できる。

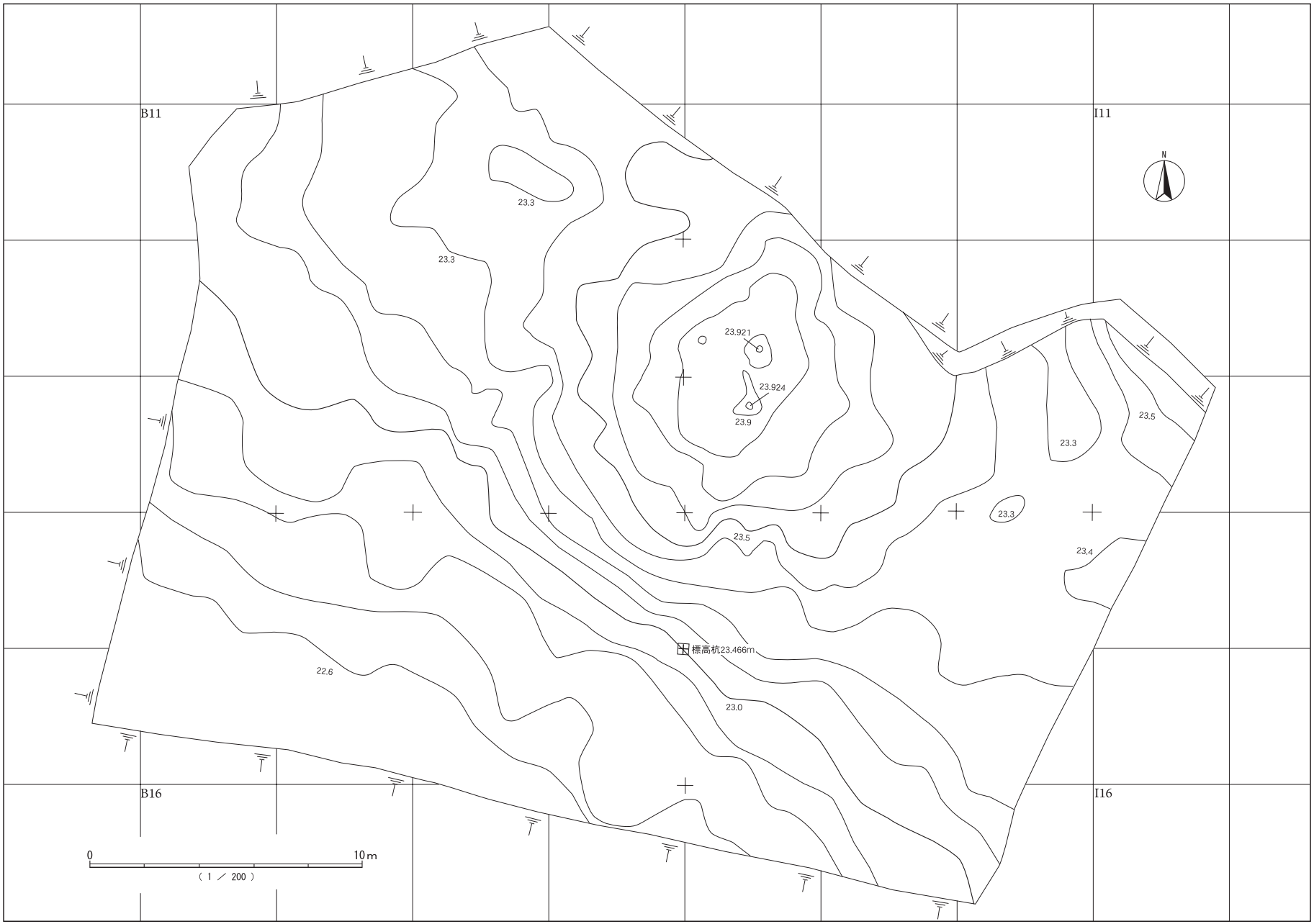
211 号方形周溝墓（第 114・115 図、図版 68）

形状：方形（2 角検出）　**規模**（長軸×短軸；m）：20.0 × 19.6?

外周面積（㎡）：357.7　**方台部面積**（㎡）：256.3　**周溝面積**（㎡）：100.9

本遺構は、西側調査区東南部に北側四分の三ほどを検出した方形周溝墓である。周溝は、1 号･3 号･5 号・6 号・9 号・10 号・12 号・18 号竪穴住居跡と多数を切り、方台部にも 4 号・7 号・8 号・11 号竪穴住居跡が存在するが、いずれの遺構よりも新しいことは間違いない。断片的な遺存部から判断すると、コーナーの鈍い方形の平面プランを持ち、等幅に近い周溝が全周する形状が推定できる。埋葬施設は不明で、方台部・周溝内とも検出されていない。方台部中央埋葬施設は墳丘盛土内に位置したと考えられよう。

本遺構に帰属するとして取り上げられた遺物は、第 115 図の通り少量である。1 はハケメの施される口縁部破片だが、屈曲は弱く、五領式だとしても弥生時代終末期に近いものであろう。なお、切り合う竪穴住居跡の出土土器の中には、本遺構より混入しているものが少なくないように思われる。3 号出土小型土器（第 14 図 20）、4 号出土小型土器類（第 19 図 11･16･17･18）、9 号出土小型土器（第 26 図 10）、12 号出土大型壺（第 21 図 15）は、本遺構の遺物と考えた方が理解しやすい。このうち、12 号竪穴住居跡は、遺構自体の帰属時期が弥生時代終末期後半から古墳時代前期にあると考えられるため、本遺構の構築時期の上限を推察するにあたって問題となる。しかし、9 号出土の五領式に特徴的な、小型丸底土器がやや扁平になったような小型土器の存在を重視すると、本遺構は弥生時代終末期にかかる 12 号竪穴住居跡より新相を示すと言え、12 号竪穴住居跡の帰属時期からやや期間をおいて古墳時代前期中葉に位置づけられる可能性が高い。



第 116 図　288 号方形周溝墓等高線図（調査前）

288 号方形周溝墓（第 117 ～ 133 図、図版 2・16・17・38 ～ 43・47・50・51・68 ～ 72・75・78 ～ 88）
形状：1 角の切れる胴張り方形　**規模**（長軸×短軸；m）：22.8 × 22.4
外周面積（㎡）：437.9　**方台部面積**（㎡）：271.0　**周溝面積**（㎡）：161.8

本遺構は西側調査区南西部に検出された方形周溝墓で、調査範囲内最大の規模を持つ。西コーナーが掘り残されており、ブリッジ状を呈している。周溝の平面形は、各辺中央が外側に膨らんでおり、コーナーに向かって幅を減じる特徴がある。周溝の最大幅は 3.8m である。

本遺構は、21 号・22 号・24 号・26 号・30 号・47 号・71 号・72 号・73 号竪穴住居跡と多数の遺構と切り合うが、南東辺を共有する 289 号方形周溝墓を除いて、本遺構が後に構築されている。

注目すべき点は発掘調査前に墳丘が確認されていたことである（図版 16）。北東辺が直線的に削平され砂利敷きに改変されていたが、高さを若干減じながらも盛土はほぼそのまま、最大 1m 程度が遺存している。中央埋葬施設はこの墳丘上面のレベルにおいて検出されている。

埋葬施設は墳丘上で 2 箇所認められる。中央の大きい墓壙を A、南側墓壙を B とする。

埋葬施設 A（第 118・119 図）

長軸 4.4m 短軸 3.8m の隅円方形の平面プランを持ち、50cm 程度の深さの平らな断面形を呈する。長軸の主軸は 310° で、墓壙底面中央にほぼ同じ向きで木棺埋納坑が認められる。木棺埋納坑は長軸 3.6m 幅 1.64m、墓壙底面より 20cm ほど掘りくぼめられている。

覆土は上位に黄褐色土ブロックが目立ち、木棺腐朽による陥没状態が推察される状況である。副葬品は、木棺埋納坑の範囲の北西寄りの覆土下層を中心に、ガラス玉 17 点と鉄剣 1 振が出土している（平面図鉄剣シンボルの向きは推定である）。これらを着装品と見なすと上半身が北西寄りにあったと推定できるので、埋葬頭位も同じく北西にあった可能性が高い。この場合、墓壙主軸は墳形に従っているので、ブリッジに近い側に頭位を意識して埋葬姿勢が選択されたと考えられる。

ガラス玉は、5 ～ 9mm 大のコバルトブルー 9 点、4 ～ 5mm 大のスカイブルー 8 点の 2 群に分けられる。いずれも管切り再加熱法によって製作されている。あくまで一般的な傾向だが、前者の大ぶりのコバルトブルーのガラス玉は弥生時代後期に主流で、スカイブルーの玉は終末期に向けて増える傾向が窺えるようである。本例はちょうど過渡的な様相を示していると評価できるだろう。また、方形周溝墓中心埋葬施設における鉄剣の副葬は、弥生時代後期後半以後に中部高地・北関東・西関東・南関東に目立つものであり、その脈絡に本例は位置づけられる。

埋葬施設 B（第 120 図）

長軸 2.24m 短軸 1.48m 最深部 0.4m の規模を持つ小判形の土坑である。遺物はまったく出土していないが、墳丘盛土上に掘り込まれた遺構であることからすれば、時期は不明ながらも、288 号墓に伴う埋葬施設の一つであると考えられる。埋葬施設 A との位置関係や規模の相違からすると、従属的な立場の被葬者像が推察される。

周溝出土遺物

周溝各部からは非在地的な系譜のものを含む土器が大量に出土している。特にブリッジ部付近には濃密な分布が認められる。切り合う竪穴住居跡から遺物の混入した場合もあるが、多くは弥生時代終末期の特徴を持つ土器であり、本遺構に伴うと考えられるものである。

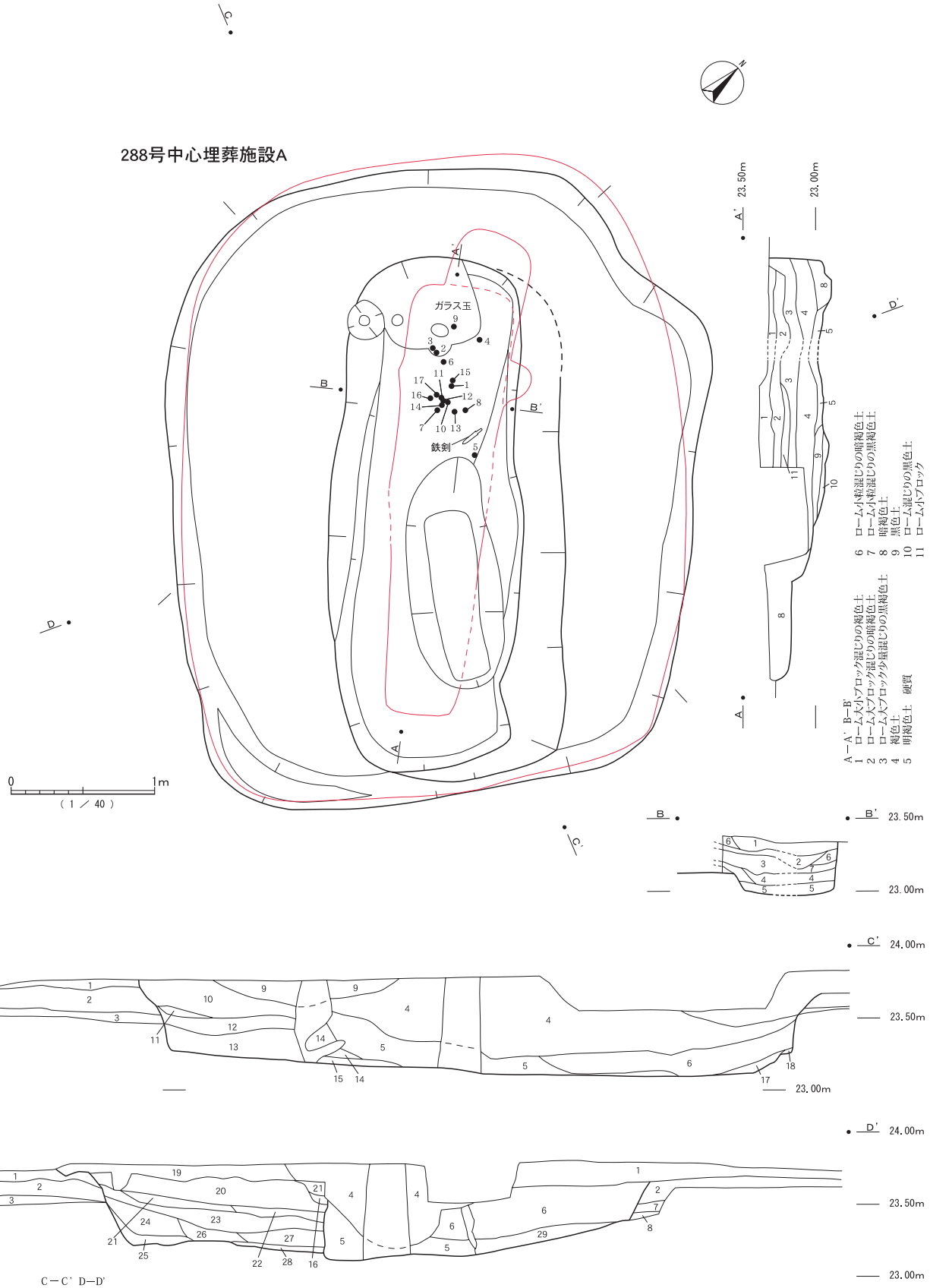
288 号墓の遺物注記には、地点を表す「SW」・「NW」・「E 溝」・「SE」・「NE」・「SC」という記号が

A—A'
1 黄褐色軟質土粒多量混じりの黒褐色土
2 黒色土　盛土下層
3 暗褐色土
4 ソフトローム
5 ロームブロック
6 ローム粒混じりの暗褐色土
7 黒褐色土
8 軟質ローム粒混じりの暗茶褐色土
10 ローム微粒多量混じりの黒色土
13 ソフトローム少量混じりの暗褐色土
14 ロームブロック少量混じりの暗褐色土
15 暗褐色土　硬質
16 ローム多量混じりの土　やや軟質
17 ロームブロック多量混じりの土　硬質
21 暗黄褐色土
22 ローム混じりの黒褐色土
23 黒褐色土　288号覆土
24 黒色土　288号覆土
25 暗褐色土　288号覆土
26 ローム粒少量混じりの褐色土　288号覆土
27 黒褐色土　288号覆土
28 岩干茶色味を帯びる褐色土　288号覆土
29 暗褐色土　288号覆土
30 ロームブロック混じりの明茶褐色土　288号覆土
31 暗褐色土　288号覆土
32 黒色土
33 ロームブロック混じりの茶褐色土
34 ローム粒混じりの暗褐色土
35 黒褐色土

B—B'
1 黄褐色軟質土粒多量混じりの黒褐色土
2 黒色土　墳丘盛土下層
3 暗褐色土
4 ソフトローム
5 ロームブロック
6 ローム粒混じりの暗褐色土
7 黒褐色土
9 黄褐土が斑に混じる暗褐色土
11 暗黄褐色土
18 黒色土　軟質
19 ロームブロック混じりの土
20 黒褐色土　ロームブロックが少量混じる
21 暗黄褐色土

47号 73号 72号 288号 26号 71号 30号 21号 289号 22号 14号 7号溝
125図25・126図6 125図25・126図6 122図7 126図12 125図18 125図5 125図27 125図30 125図16 126図9 126図19 126図22 122図5・123図10 122図6 123図3 123図2・8 123図4 121図7 121図6 128図2 推定出土位置
F10 I13 J15 H16 F16
埋葬施設A エレベーション
北西側溝エレベーション（見通し）
23.50m 23.00m 22.50m
0 5m （1／100）

第 117 図　288 号方形周溝墓実測図および等高線図



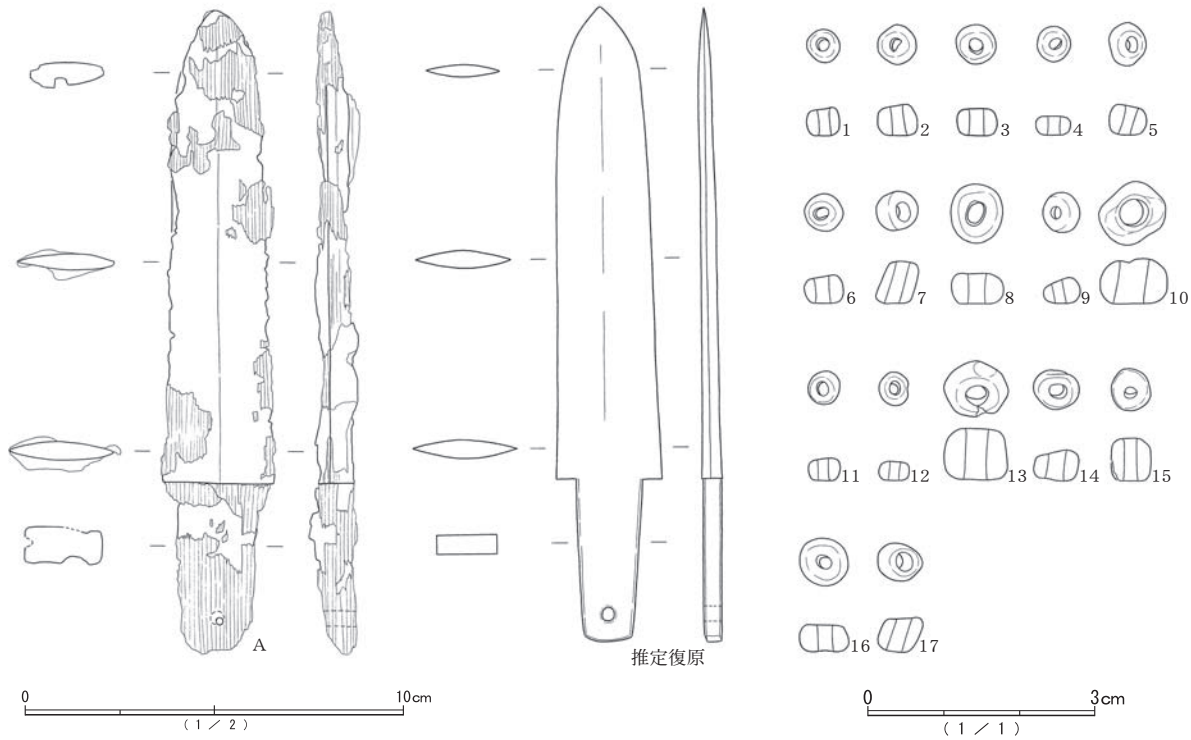
第 118 図　288 号方形周溝墓中心埋葬施設実測図

書かれている。以下では各地点ごとに出土土器の様相を見ていく。

南西側周溝出土土器（第 121 ～ 124 図） 注記は「SW」である。ブリッジとして掘り残される西コーナー側に偏って遺物が集中している。この地点は 30 号竪穴住居跡と大きく切り合い、床面レベルがちょうど周溝底面にもあたるため、竪穴住居跡出土の遺物のようにも見えるが、土層断面図には竪穴住居跡覆土に周溝覆土の大きく切り込む状況が記録されており、本遺構に伴う遺物と考えてほぼ間違いない。平面図にドットが記録された土器は、第 121 図 6・7、第 122 図 6、第 123 図 2・3・4・5・8・10 である。第 121 図 7 の手焙は覆部と鉢部が遊離して、周溝底面近くより出土した。鉢部が周溝内側、覆部が外側のドットと対応する。覆部の向かって右側が大きく欠損する以外はほぼ完形に復元されている。覆部と鉢部上位は櫛描波状文で装飾されており、肥厚拡張された覆部端部にも波状文が施される。器体内に目立った炭化物の遺存や被熱痕は見当たらない。覆部端部の拡張は、面の貼り付けではなく、肥厚によって行われている。鉢部凸帯は貼り付けられておらず、屈曲の接合部が擬口縁状に利用され刺突が加えられている。鉢部底面は小さい上げ底状で、屈曲部まで緻密な放射状のヘラミガキで仕上げられる。底部穿孔は行われておらず、破砕供献といった行為の痕跡も不明瞭である。第 122 図 6 の大ぶりの壺も手焙と同じく周溝最下層で検出されている。文様の有無・構成が不明ながら目立って大型なのが特徴的で、手焙と結節文区画壺（第 121 図 6・7）の近くから出土している。第 123 図 2・3・4 は無文の可能性が高い壺であり、同 5・8・10 は非在地的な要素が加味された高杯である。5 の高杯は杯部の中位に段を持ち、内弯気味に広がってから、口縁端部外面が面取り気味にヨコナデされる独特な形状である。8 の高杯は内弯気味の杯部下半を持ち口縁部に向けて一度屈曲するという、弥生時代後期後半以降に北陸地方で見られる高杯に類似する。10 の高杯は無文かつ、口縁および脚端部に外面肥厚部を持たない点で非在地的であるが、脚部に透孔が伴わず、弥生時代終末期後半以降に盛行する東海地方西部由来の高杯とは直接対比できるものではない。むしろ、杯部・脚部とも屈曲せずに連続する点を重視するならば、中部高地・北関東地方の高杯に近似すると言える。

この他、一括取り上げ遺物にも特徴的な土器が多く見られる。まず、壺には非在地的な形状を示すものが少なくない。第 121 図 1 は濃尾平野に特徴的なパレススタイル壺を模倣した壺である。棒状浮文の頂部に竹管状工具による刺突が加えられる点と、本来ならば多段の羽状刺突文で埋められる口縁内面がヘラミガキで仕上げられている点が非常に特徴的である。パレススタイル壺および模倣品は、櫛状工具による斜列点文が多く（第 122 図 3・4）、文様構成上、古相を呈する（浅井 1987）。在地系譜に非在地的要素の混じる例としては、区画が櫛描直線文で行われるもの（第 122 図 1）が折衷的で興味深い。また、在地系の文様壺も結節文区画内の羽状縄文帯に重ねて山形沈線文を描く例があり（第 122 図 19）、施文法の変容が見て取れる。甕には、くの字状口縁、あるいは、くの字状口縁に近い甕が多く見られ（第 124 図）、なかには、台付甕の脚台部（第 124 図 12・13）や輪台技法による底部（同 27・28・34）という非在地的な要素が認められる。小型土器類には、在地ではきわめてまれな丸底の小型鉢（第 122 図 12）の出土も見られる。

北西側周溝出土土器 注記は「NW」である。この地点の出土土器は南西側周溝とともにブリッジ近辺の集中部を構成する。出土位置の判明するものには、第 122 図 7、第 125 図 5・16・25・27・30、第 126 図 6・9・12・18・19・22 がある。2 本描き沈線で縦区画の施される壺（第 122 図 7）は非在地系譜の要素を在地的なデザインの中に示すものであり、上半の文様構成は不明ながら、近在の神



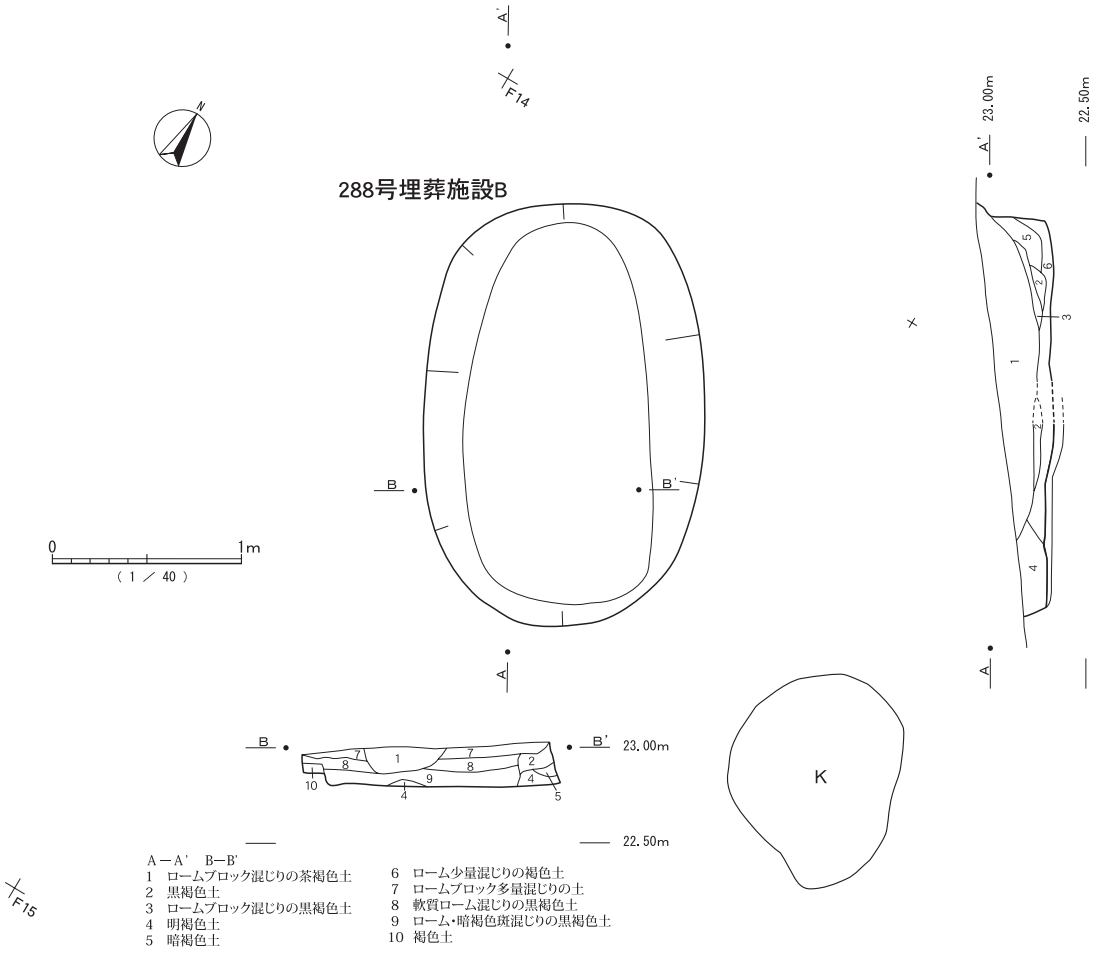
第 119 図　288 号方形周溝墓中心埋葬施設出土遺物実測図

第 6 表　288 号方形周溝墓出土鉄剣観察表

鉄剣	図番号	全長	刃部長	関幅	茎部長	茎部幅	全体厚	重量	特徴
288号墓	第119図A	17.0cm	12.5cm	3.0cm	4.5cm	2.1cm	0.3～1.3cm	64.0g	鞘・柄の木質が錆着・遺存する 木質の木目は剣身と平行し、関で断絶する 刃部遺存部の横断形は厚みのない杏仁形で鎬は明瞭でない 関は両側に5mm程度あり、茎は尻に向かって若干幅を減じる 茎の横断面は長方形と見られる 茎には端部から5～6mmの位置に径3～4mmの目釘孔が穿たれる

第 7 表　288 号方形周溝墓出土ガラス玉観察表

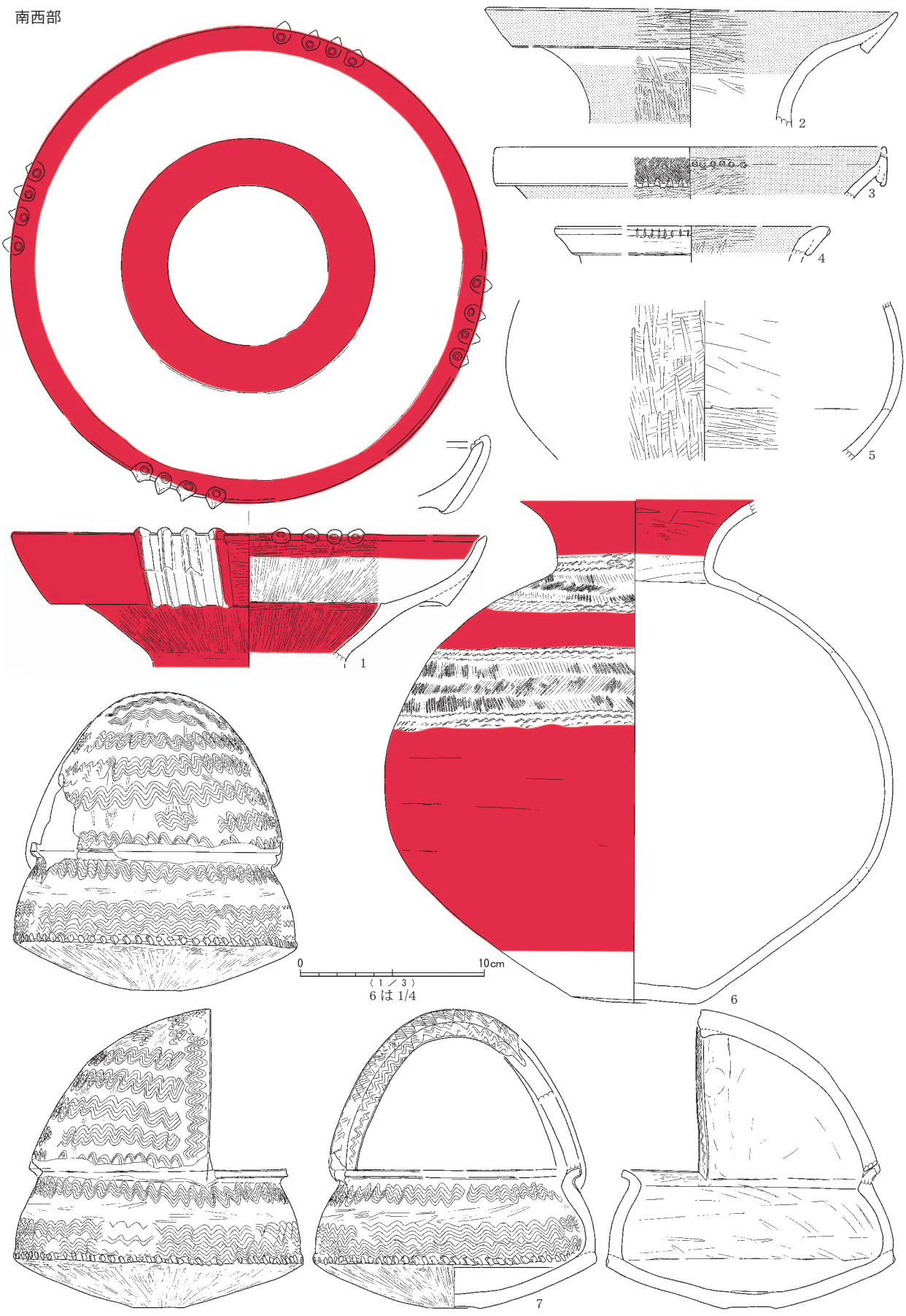
ガラス玉	報告番号	注記	長軸mm	短軸mm	高さmm	孔径mm	重量g	色	特徴
288号墓	第119図1	1	4.5	4.5	3.8	1.8	0.102	スカイブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔形が若干歪む　気泡は多いが孔軸気泡列は不明
	第119図2	2	5.3	5.1	4.3	1.5	0.146	スカイブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔形が歪む　孔軸気泡列あり
	第119図3	3	5.5	5.4	3.7	2.0	0.134	スカイブルー	完存　小口面・側面押圧あり　気泡は多いが孔軸気泡列は不明
	第119図4	4	4.9	4.8	2.6	1.5	0.078	スカイブルー	完存　小口面押圧あり　孔が歪んでいるので側面押圧も可能性あり　孔軸気泡列あり
	第119図5	5	5.8	5.0	4.3	1.5～2.0	0.156	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列あり　側面の押圧面が明瞭
	第119図6	6	5.4	5.0	3.8	1.5～2.0	0.112	スカイブルー	完存　小口面・側面押圧あり　気泡が多く不明瞭だが孔軸気泡列あり
	第119図7	7	5.3	4.9	5.8	2.0～2.5	0.194	コバルトブルー	ほぼ完形　側面押圧明瞭・小口押圧は不明　孔軸気泡列あり
	第119図8	8	8.0	6.9	4.2	2.5～3.5	0.294	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列明瞭　孔径が大きい
	第119図9	9	5.2	5.2	3.7	1.5	0.114	スカイブルー	完存　小口面押圧あり　気泡は多いが孔軸気泡列は不明
	第119図10	10	9.0	8.4	6.1	4.0	0.456	鈍いコバルトブルー	完存　小口面・側面押圧が強く、多面体的になっている　孔軸気泡列あり ところどころにクレーター状のくぼみがある　孔内に隆起がある
	第119図11	11	4.5	4.3	3.2	1.5	0.068	スカイブルー	完存　小口面・側面押圧あり　気泡は多いが孔軸気泡列は不明
	第119図12	12	4.6	4.2	2.6	1.5	0.056	スカイブルー	完存　小口面・側面押圧あり　気泡が多い　孔軸気泡列あり 側面に大きくクレーター状のくぼみあり
	第119図13	13	8.7	7.5	7.0	2.5～3.0	0.534	鈍いコバルトブルー（透過性低い）	完存　小口面・側面押圧あり　側面押圧が強く孔がひしゃげ気味である 孔軸気泡列あり　孔軸方向に風化？筋が多数認められる
	第119図14	14	6.2	5.4	4.2	2.0～2.5	0.156	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列明瞭　孔軸方向の風化？筋が目立つ 側面押圧ではっきり孔が歪む
	第119図15	15	5.5	5.5	6.0	1.5	(0.220)	コバルトブルー	ほぼ完形（出土後欠損）　側面押圧あり　孔軸気泡列明瞭 孔が押圧でひしゃげている
	第119図16	16	6.7	6.5	3.8	2.5	0.220	コバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり　孔軸気泡列あり
	第119図17	17	5.3	5.1	4.7	2.5	0.158	淡いコバルトブルー	完存　小口面・側面押圧あり（小口は可能性）　孔内隆起あり　孔軸気泡列あり



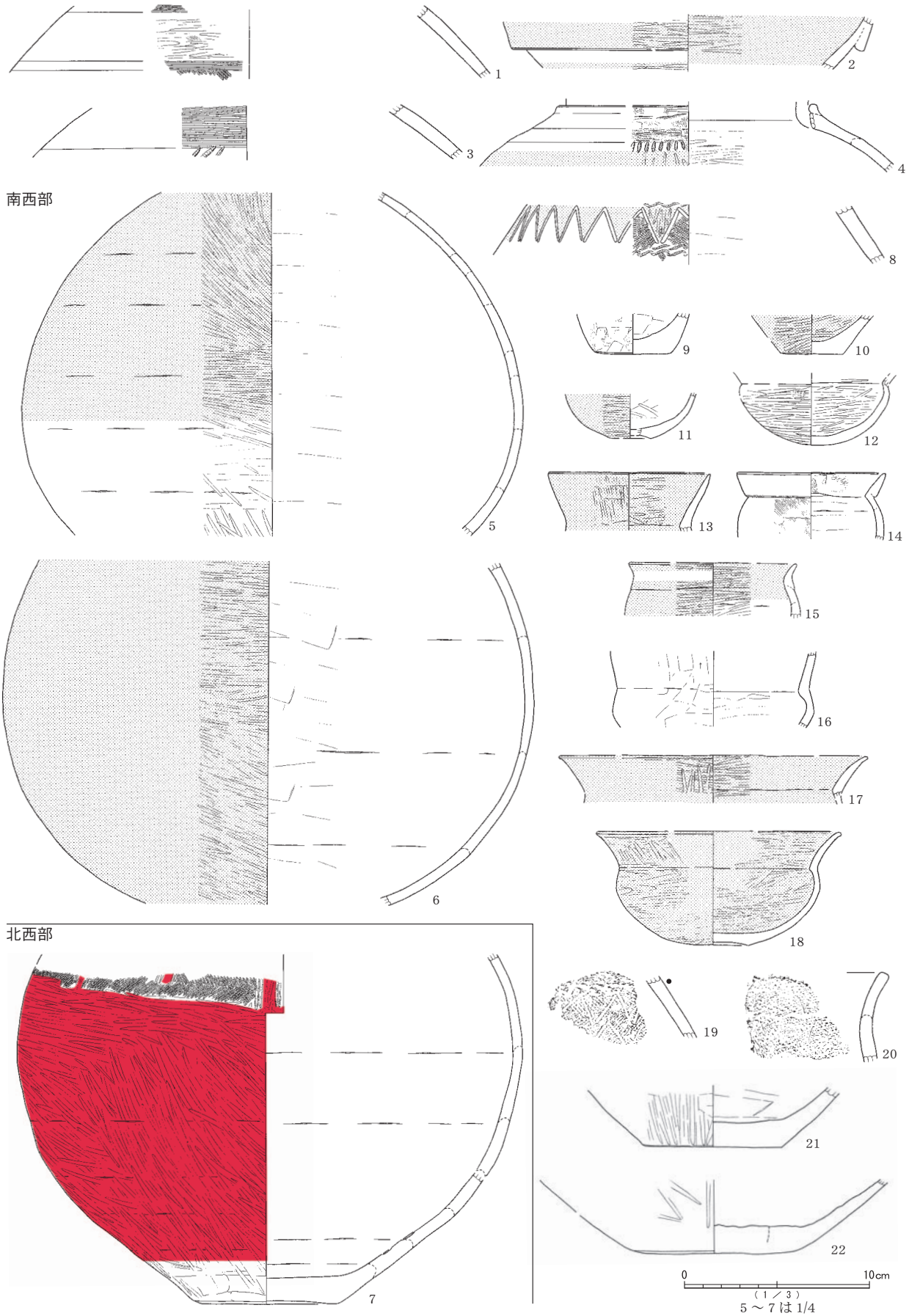
第 120 図　288 号方形周溝墓方台部埋葬施設 B 実測図

門 5 号墓出土の縦区画のある結節文区画壺（田中 2000）等と近似する形状と推察される。第 125 図 5 は壺の一部で、頸部屈曲に竹管状工具による刺突文が施されるが、これも神門 4 号墓・番後台遺跡 054 号住居跡等に類例が認められ（田中 2000、藤崎 1982）、弥生時代終末期に特徴的な型式と見られる。同 16 は大型赤彩壺の一部である。南西地点よりは少ないものの、北西側周溝にも大型の壺が伴ったことを反映している。同 25 は杯部口縁に肥厚部を残し、その下稜に円形刺突文を巡らせる高杯である。完形で出土しているが、遺物の所在が不明である。脚部は外面肥厚部を伴わず、国分寺台地区内の南祇園原遺跡 201 号竪穴住居跡（102 号方形周溝墓？）出土品（高橋・櫻井 2002）と 288 号墓南西側周溝出土高杯（第 123 図 10）の中間的な形状を示している。やはり円形透孔が加えられない点は古相を反映しているのだろう。ただし、同 20 のように脚部に肥厚部と刺突文のある個体も、円形透孔を施す個体も存在することから、本遺構の時期においては、異なる系統が併存し、各種要素が組み合わさって「亜流」の各系統土器が形作られている場合が多いのかもしれない。甕には段部を持ちながら口縁端部の刺突文を失った過渡的な形状のもの（第 126 図 9）や、ハケメの施されるもの（同 12）が見られる。その他に、一括取り上げ遺物には、櫛描文による縦横区画の壺（第 125 図 8・10・12）・S 字状口縁の小型甕（第 126 図 1）・大ぶりの器台脚部（同 10）という弥生時代終末期に特徴的な土器が認められる。なお、土器の他に管状土錘（土製品）1 点が出土している（同 25）。

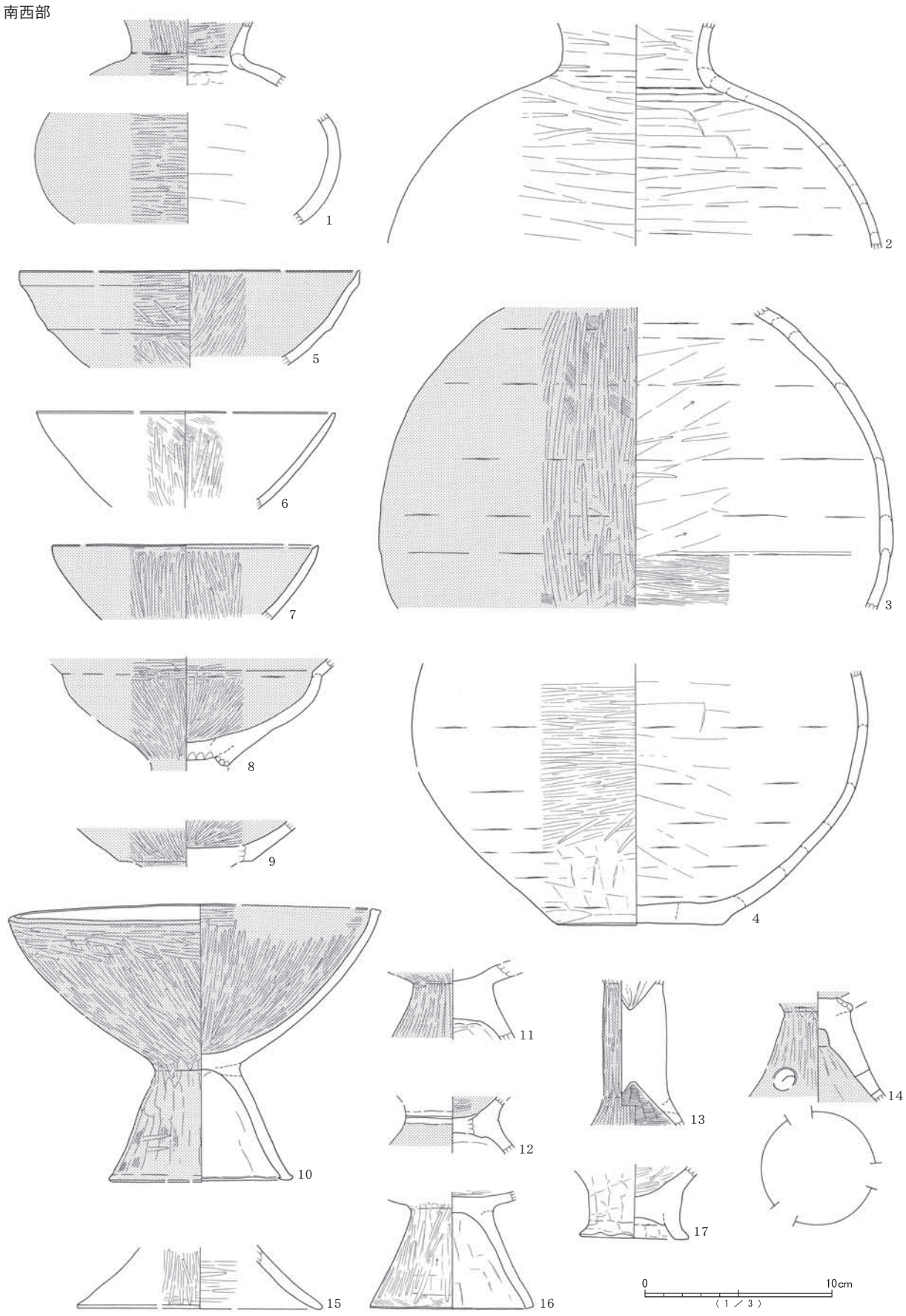
北東・南東側周溝出土土器（第 127・128 図）「E 溝」・「SE」・「NE」の注記を持つ、墳墓東側出土



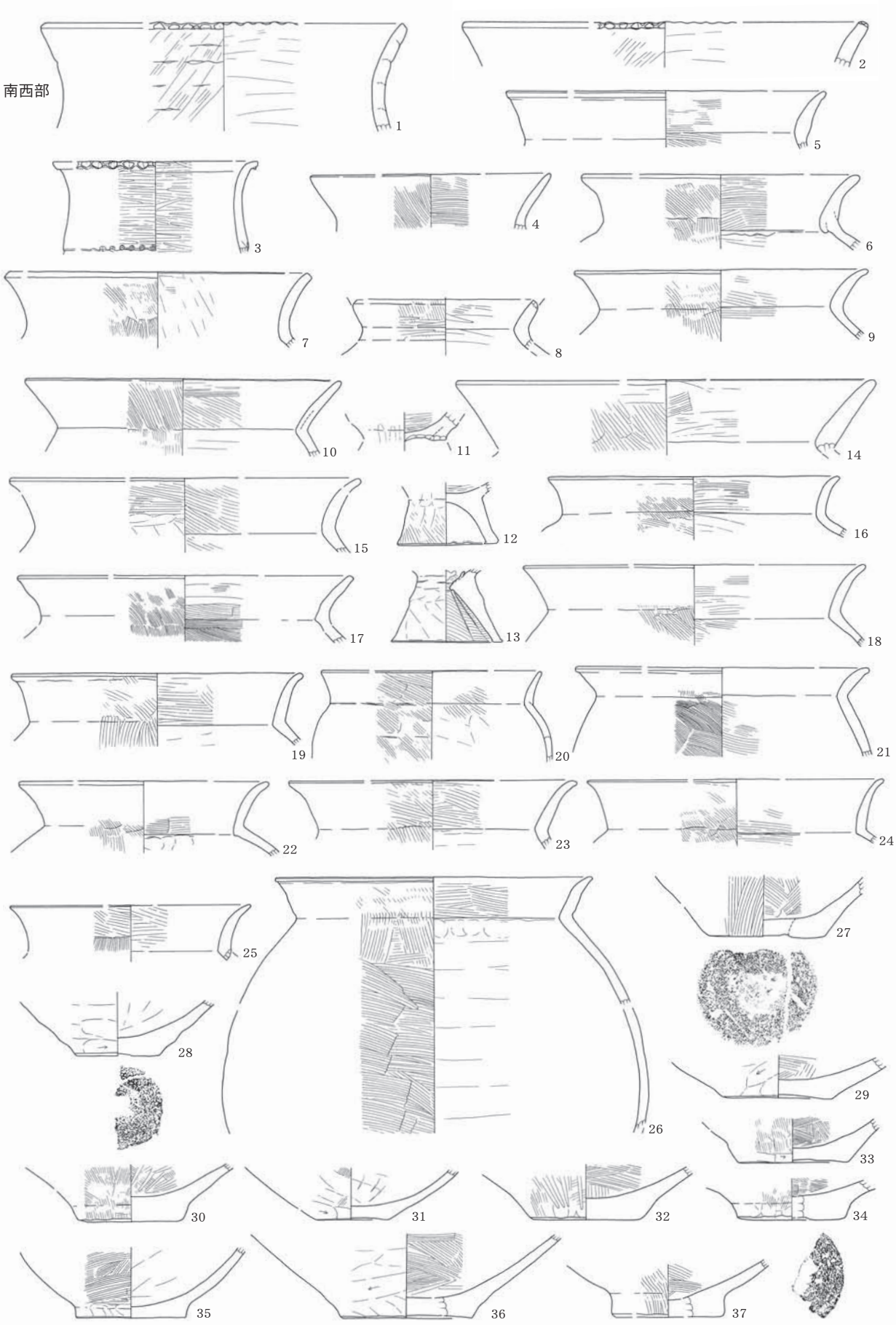
第 121 図　288 号方形周溝墓出土遺物（周溝南西部）実測図



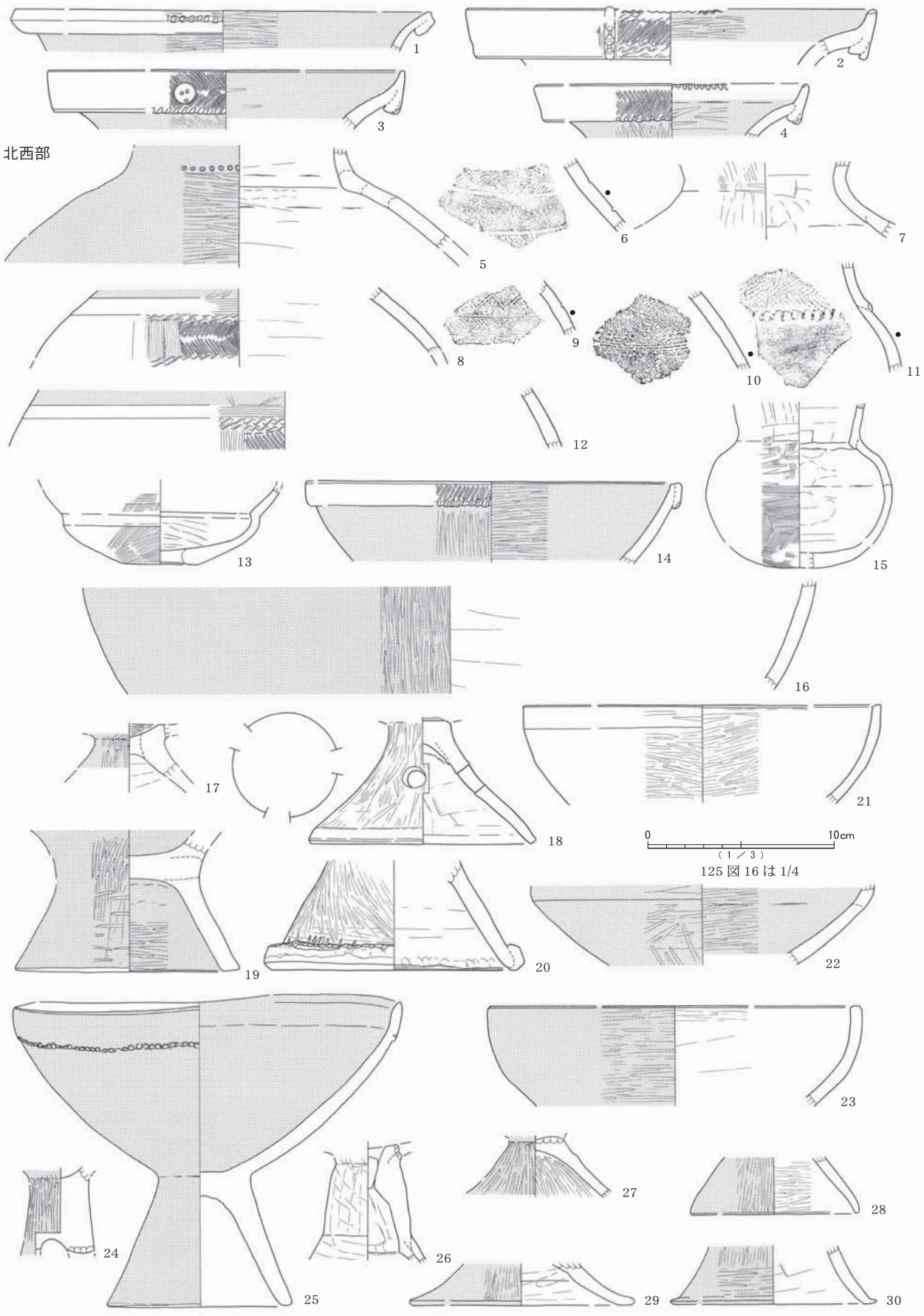
第 122 図　288 号方形周溝墓出土遺物（周溝南西部・北西部）実測図



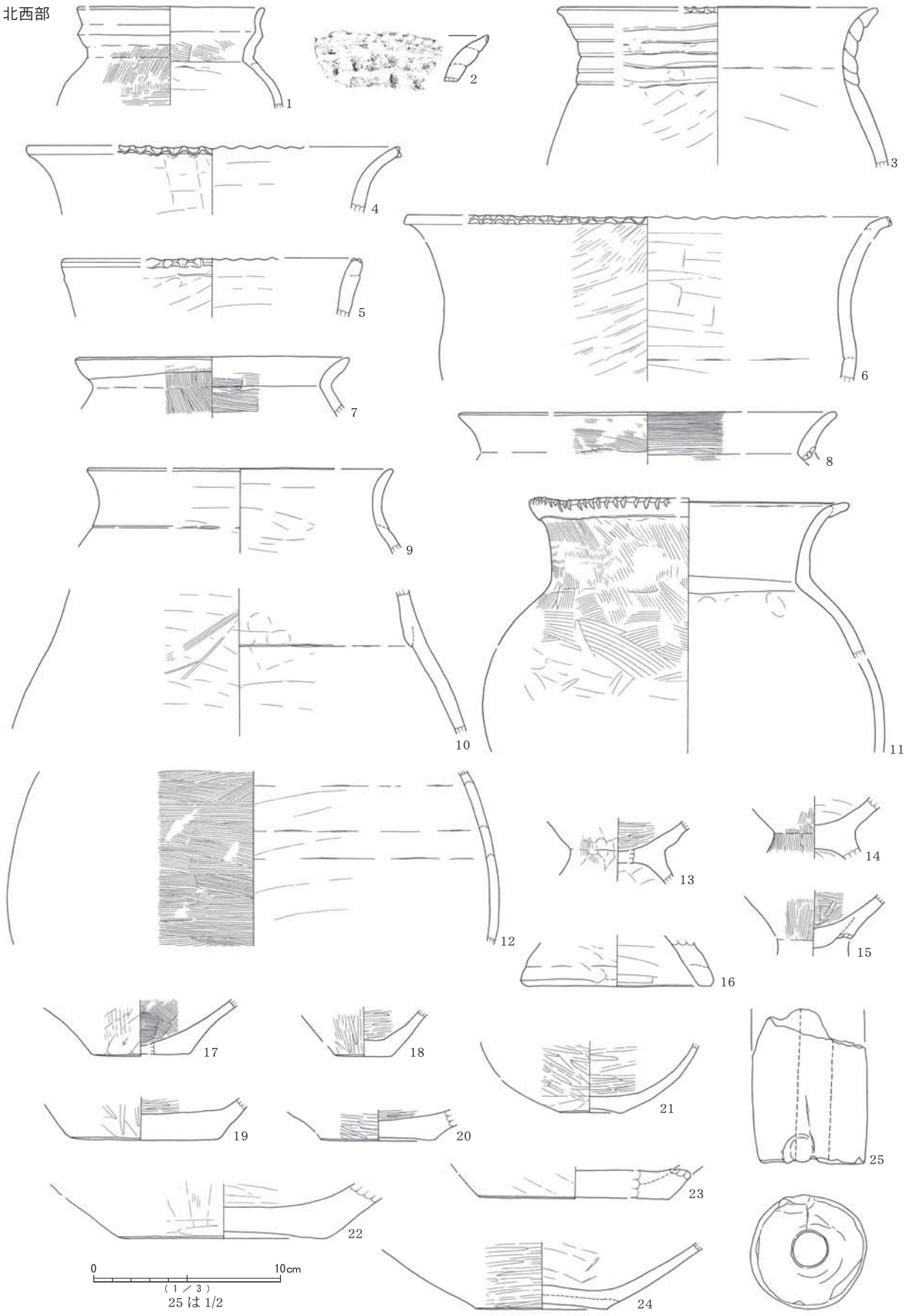
第 123 図　288 号方形周溝墓出土遺物（周溝南西部）実測図



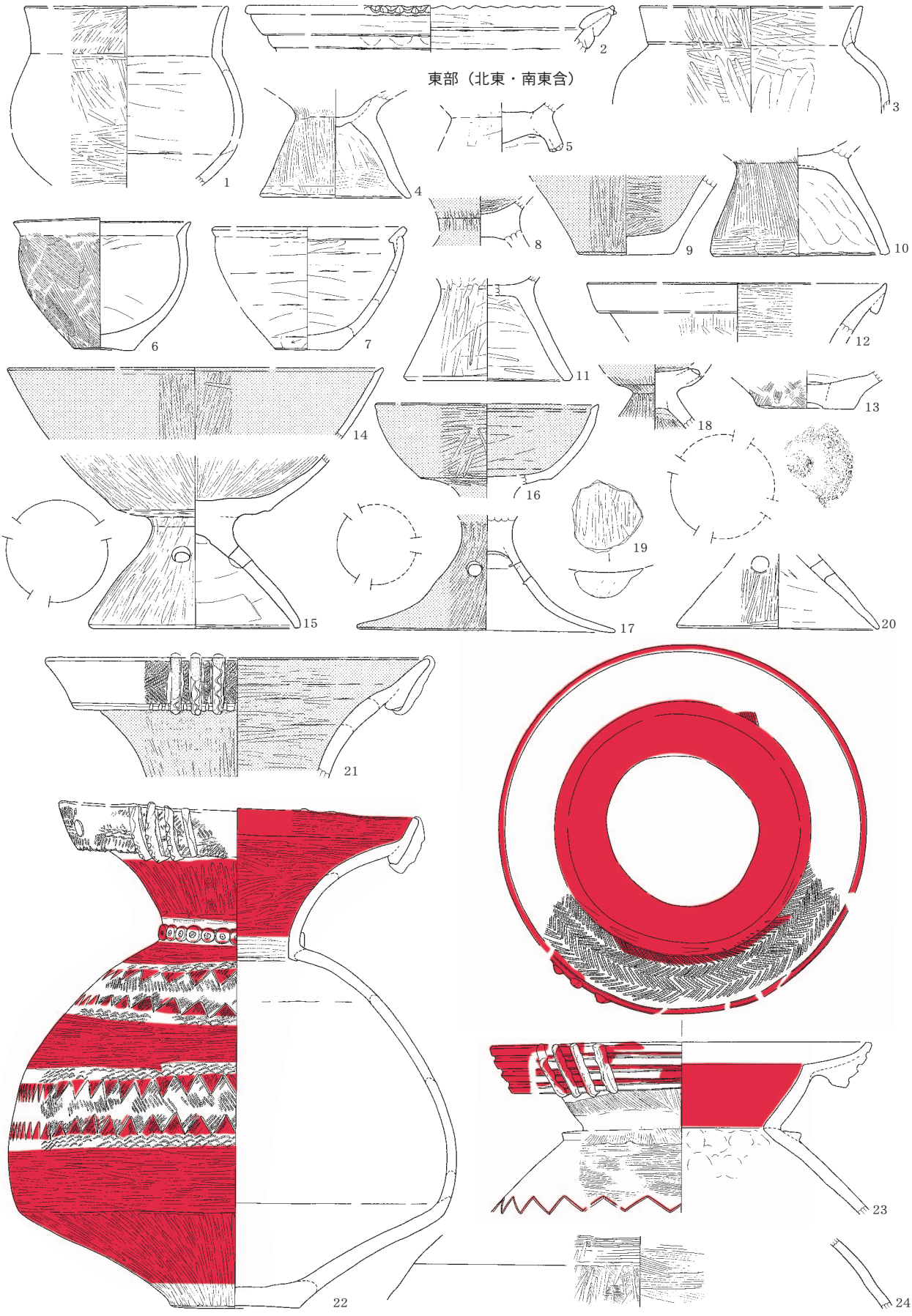
第 124 図　288 号方形周溝墓出土遺物（周溝南西部）実測図



第 125 図　288 号方形周溝墓出土遺物（周溝北西部）実測図

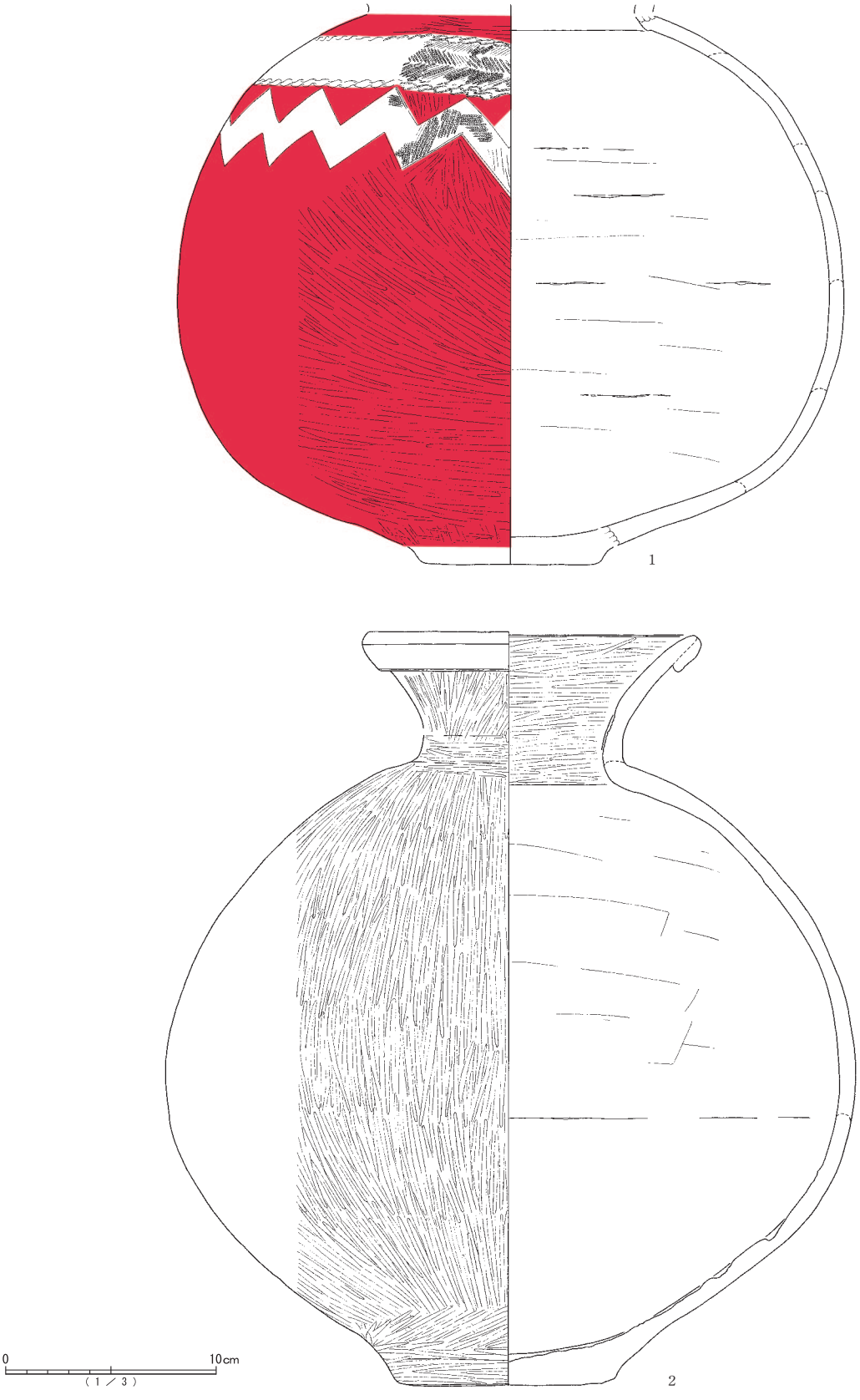


第 126 図　288 号方形周溝墓出土遺物（周溝北西部）実測図



第 127 図　288 号方形周溝墓出土遺物（周溝東部）実測図

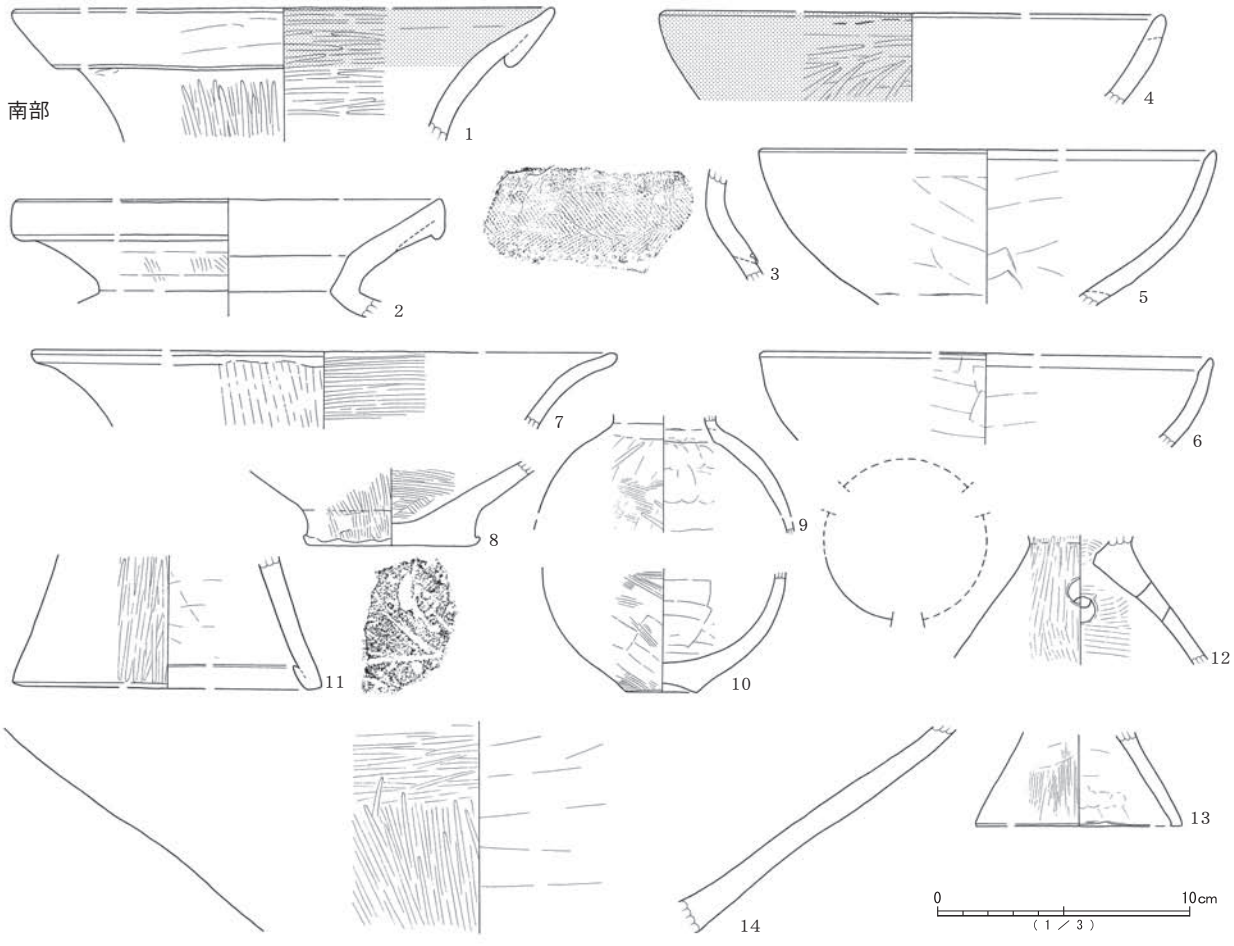
東部



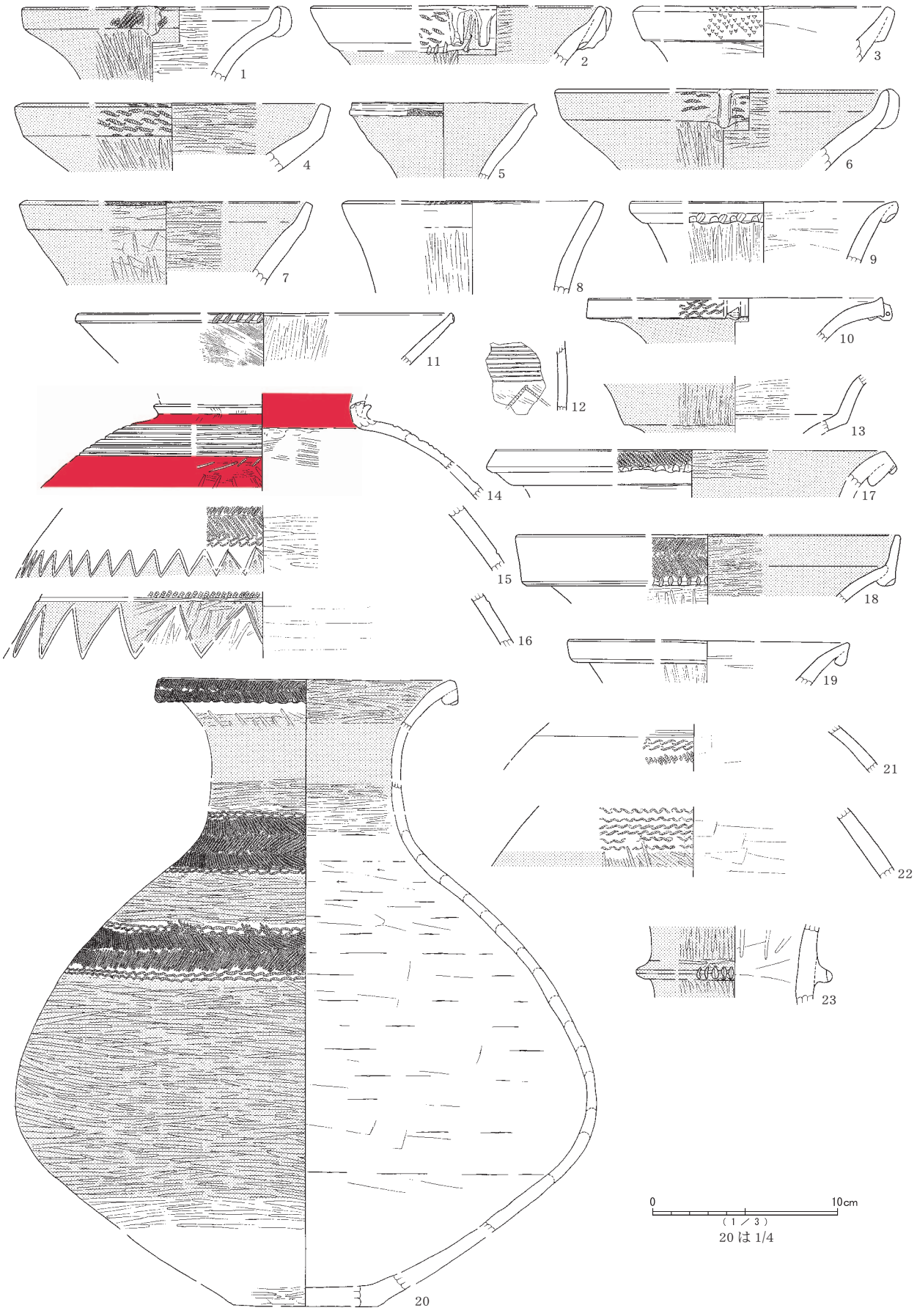
第 128 図　288 号方形周溝墓出土遺物（周溝東部）実測図

土器について述べる。なお、以下の土器はすべて一括取り上げ遺物である。

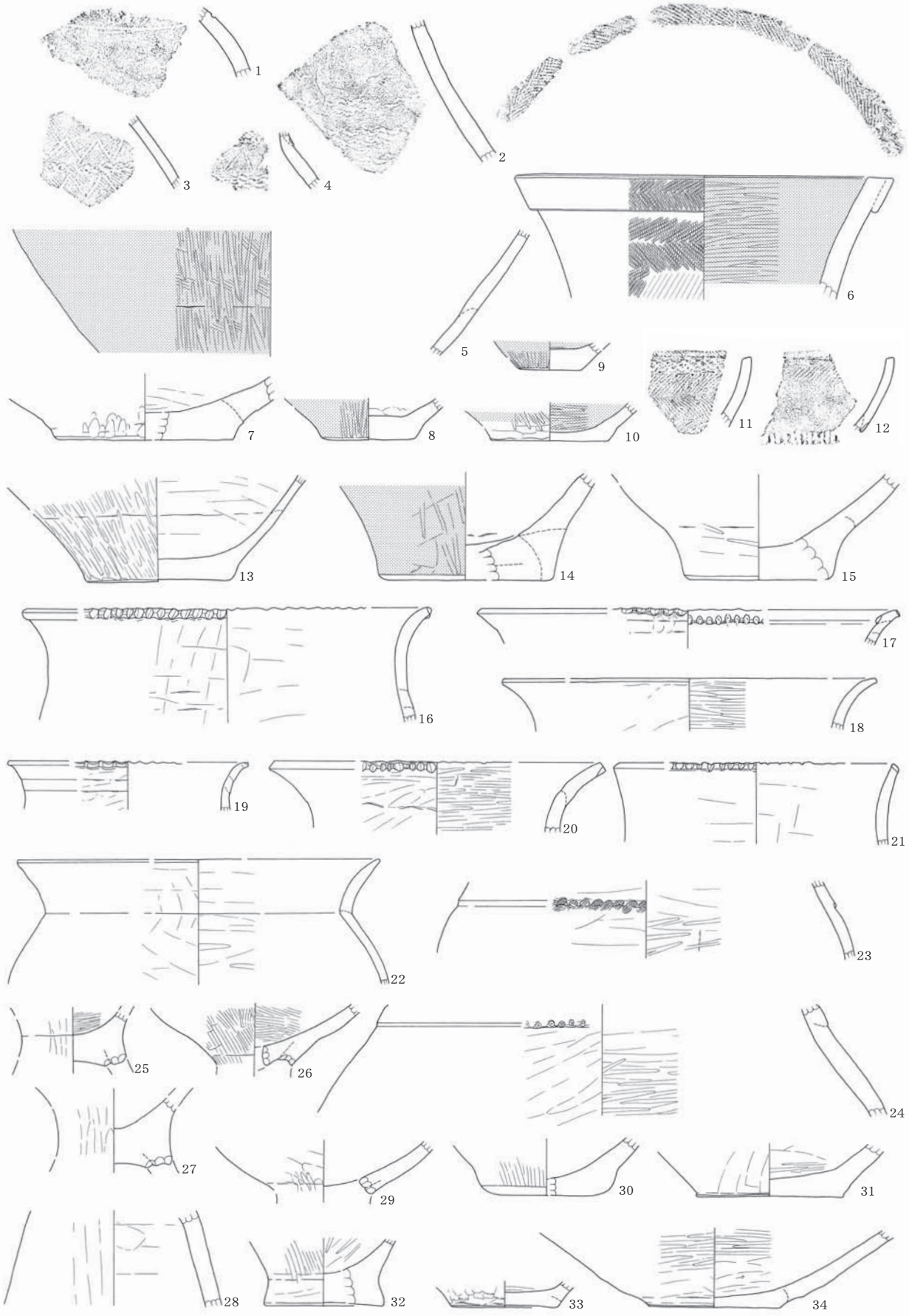
遺存の良好な装飾壺(第 127 図 22)は「E 溝」の注記を持つ土器で、装飾の多い在地系の精製品である。プロポーション・頸部屈曲の鋭さ・円形浮文・単節縄文上に山形沈線文を描いて磨り消す文様構成、いずれも特徴的で、弥生時代後期的な要素を残しながらも、結節文区画を上書きして刺突円形浮文を配置するなど、弥生時代終末期の折衷的な様相を示している。非在地的な白い胎土のパレススタイル壺(同 23)は「SE 周溝上層」の注記を持つ。内弯しながら屈曲する口縁部を作り、口縁端部に擬凹線・棒状浮文を施し、体部にはハケメの後に櫛描直線文・櫛描山形刺突文(波線文)を施すなど、まったく非在地的な技法で製作されており、濃尾地域からの搬入品である可能性が高い。ただし、体部上位の櫛描直線文はハケメに近い様子であり、一定に周回しておらず、若干違和感がある。第 128 図 1 の大ぶりの壺は「E 溝」出土で、結節文区画の下に単節 1 帯充填の山形沈線文が描かれる在地系の土器である。同 2 の無文の大型壺は注記を持たないが、調査風景の写真から南東側周溝出土と判断した(図版 16)。ただし、出土位置は 289 号墓と切り合う箇所と推定でき、しかも比較的上層からの出土と見受けられるため、288 号墓への帰属を確定するのは難しい。頸部屈曲は鋭いとは言えないので、無文である点は新相を示唆するものの、どちらの遺構に伴っても不思議ではないだろう。第 127 図 21 の在地系の壺口縁は「E 溝」出土である。棒状浮文が横向きの刺突ではなく、波状に交互押捺されている点が特徴的である。



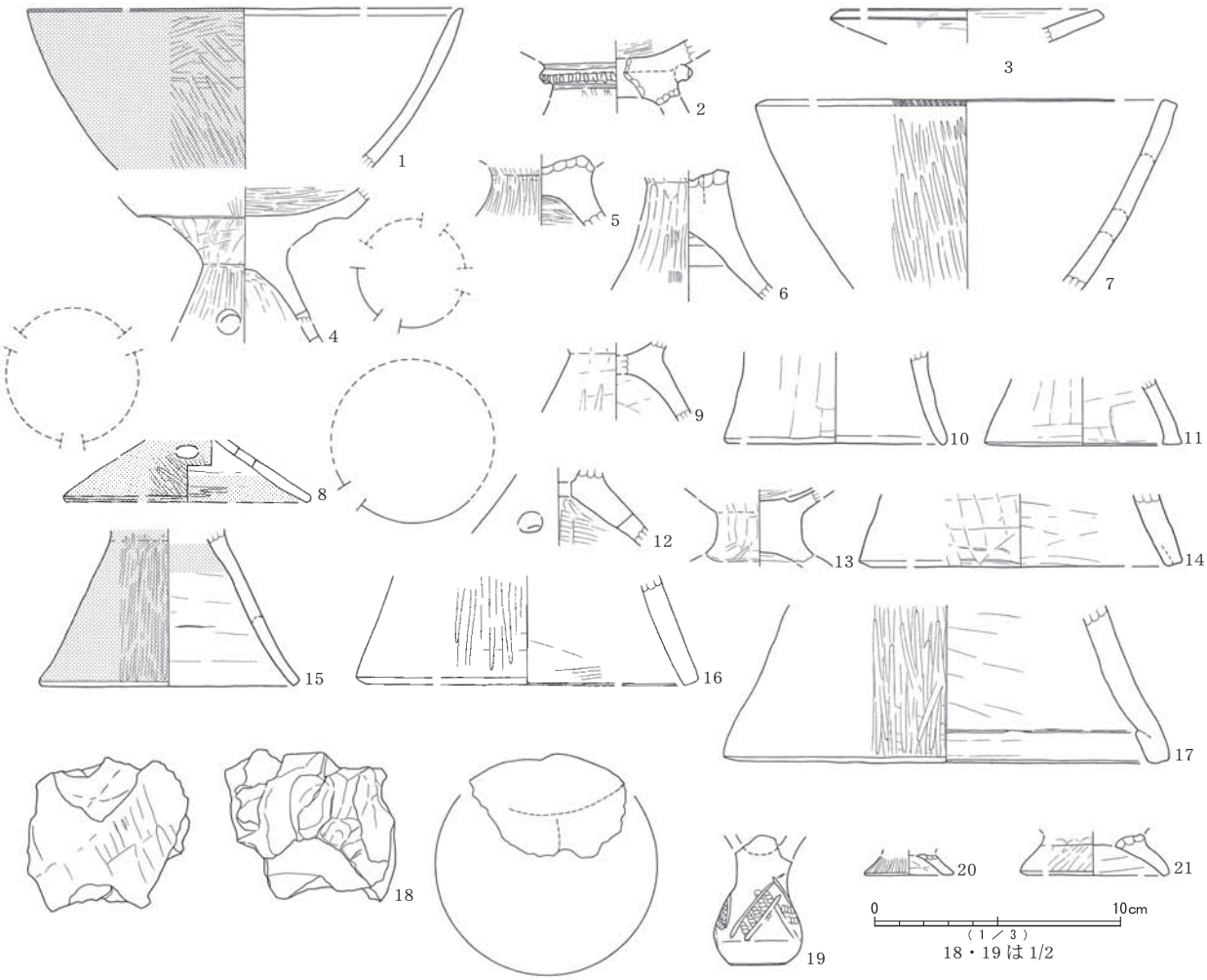
第 129 図　288 号方形周溝墓出土遺物(周溝南部)実測図



第 130 図　288 号方形周溝墓出土遺物（位置不明）実測図



第 131 図　288 号方形周溝墓出土遺物（位置不明）実測図



第 132 図　288 号方形周溝墓出土遺物（位置不明）実測図

内弯気味の脚部と杯部底面周囲に稜の巡る高杯（第 127 図 15）は「SE 周溝上層」の注記で、パレススタイル壺の近辺から出土した可能性が考えられる。形状も同時期の濃尾地域のものに近似している。この高杯の他にも、椀形杯部の高杯（同 16「E 溝」・17「SE 周溝上層」）や S 字状口縁台付甕の特徴とは異なるハケメ調整の台付甕脚台部（同 4「SE 周溝上層」・10「NE 溝」）が見られる。偶然かもしれないが「SE 周溝上層」に濃尾地域に系譜の連なる土器が比較的多く認められるようである。

南側周溝出土土器（第 129 図）「SC」の注記を持つ土器である。「SE」の誤記とも考えられるが、南側周溝の中央部として分離した。他の注記の区分より数が少なく、すべて一括取り上げ遺物である。在地系の文様壺はなく、無文化した在地系の壺（第 129 図 1）と東海地方西部に類品のある拡張口縁の無文壺(2)がある。後者は白っぽい胎土を持ち、胎土分析では非在地的な胎土として指摘されている。

特徴的な土器としては、第 129 図 11 の、端部を内面に折り返し状に肥厚した、高杯もしくは器台の脚部が挙げられる。弥生時代終末期に特徴的な形状である。他には、濃尾地域的な特徴を示す、口縁端部内面を面取りナデする高杯（4・6）、円形透孔を持ち内弯する高杯脚部（12）がある。

出土位置不明の土器（第 130 ～ 132 図）　無注記もしくは方向に関する記載がないものをここに一括した。ただし、墳丘盛土内出土を表現する注記が認められないため、ここに挙げるものにそれが含まれる可能性もある。なお、壺には、在地的な弥生時代中期末の受口状口縁・多段結節文の個体を含め

第 133 図　288 号方形周溝墓出土遺物（石製品）実測図

て示している（第 130 図 1・2・4 ～ 7・22・23、第 131 図 2）。

出土位置不明の土器も、他の地点と同様に非在地的な形状を示す個体が目立つ。面取り口縁に櫛もしくはハケメ原体状工具による斜列点文の加えられるハケメ調整の土器（第 130 図 11）、櫛描直線文・赤彩山形刺突文の施される白い胎土のパレススタイル壺（同 12）、二重口縁壺（同 13）、櫛描直線文・赤彩斜列点文のパレススタイル壺（同 14）、杯部底面外周に稜の巡る高杯（第 132 図 4）等は、濃尾・近畿地域に特徴的な技法・形状を示している。この他、在地系譜でありながら変容を示すものとして、充填縄文を欠く沈線山形文の壺（第 130 図 15・16）、口縁端部に交互刺突文ではなく側面 1 方向からの刻み状刺突文の施される甕（第 131 図 16・20・21）、外面ナデかつ内面ヘラミガキ調整ながら素口縁の甕（同 18）、が挙げられる。また、外面ナデ仕上げの台付甕（第 131 図 25・27 ～ 29）も折衷的な形式なのかもしれない。内面折り返し状肥厚の器台脚部（第 132 図 17）はいわゆる炉器台とは弁別される形式で、御林跡遺跡 115 号遺構（木對 2004）・袖ケ浦市滝ノ口向台遺跡 001（9 号墳）（小高 1993）等で類例が認められる。この種の器台は弥生時代終末期前半に多いようである。

土器の他には、支脚状の土製品の一部（第 132 図 18）と小型の壺形土製品（同 19）が出土している。後者は中実の体部に単節縄文 1 帯を充填した山形文が描かれており、壺を意識して製作されたことが明瞭である。口縁部は内面が椀状にくぼんでおり、垂飾状であったかは不明である。弥生時代後期の竪穴住居跡からの混入品であろう。

以上、周溝各部出土の土器を概観した。分布の特徴としては、まず、西コーナーブリッジ部付近の周溝内に集中の認められることが挙げられる。これらは、壺・高杯・手焙を中心とした土器群が、本遺構の葬送儀礼に用いられたことを示唆する。また、南東側周溝上層には濃尾地域の特徴を持つ土器が集中している。墳墓の構成要素として土器配置が行われた、あるいは葬送儀礼の結果としてその場に遺存したとするなら、異なる系統差を示す土器群は、被葬者・葬送司祭者・参列者等、葬送儀礼関係者の出自を含む社会的属性を反映している可能性が考えられよう。

「E 溝」・「NE」の注記を持つ東側周溝からの出土土器は、他の各部より少ないものの、遺存状態の良い在地系の壺が最少 2 個体認められる。土器配置という面に注目するとブリッジ周辺を含めて周溝各部に壺が埋置された可能性が示唆されるが、出土位置の判らないものが多く、墳丘上からの転落か、

元々の配置か、あるいは、段階的な供献か、といった想定の吟味は難しい。仮にブリッジ部を墳丘と周溝外との境界的な位置にあることを重視して、その周辺の土器群を葬送儀礼に伴う痕跡と見るならば、その一群については一時的な儀礼の過程で遺棄されたものと位置づけられるが、そうすると周溝の他の部分で検出された在地系の壺類、濃尾地域系の土器の性格がそれらとは異なると想定しなくてはならなくなる。

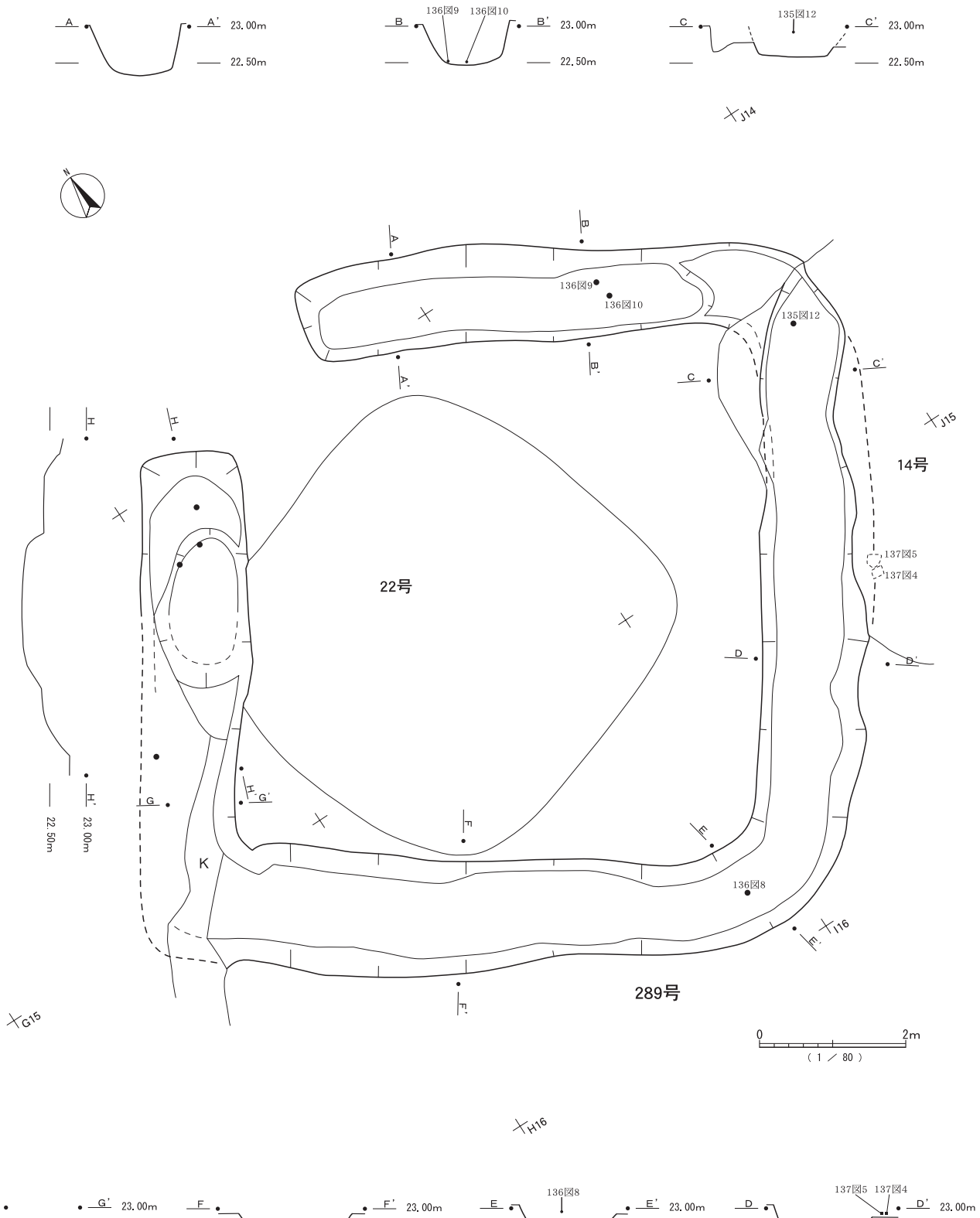
いずれにせよ、出土記録から推理できる範囲を超えた解釈については、類例との比較検討によって、その蓋然性を高めなければならないと思われる。現時点では仮に、ブリッジ周辺出土土器が葬送儀礼に伴う道具立ての一部であり、墳墓東側に見られる土器群はそれに伴う一回性の供献土器、そして結果としての土器配置として捉えておきたい。

次に、土器全般の特徴としては、非在地系土器の存在とともに、それらの形態要素を取り入れながら変容を示す在地系の土器が多い点が注目される。区画文に櫛描直線文を施し、縦横区画を行う壺（第122図1・7、第125図8・10・12、第130図21）は、結節文区画に重ねる事例が千葉市星久喜遺跡第1号方形周溝墓（田川他1984）等に見られ、新来の区画文の一種として櫛描文が採り入れられた過程を示唆している。なお、この櫛描文区画の壺は文様構成に、本遺跡2号竪穴住居跡出土例（第16図27）・蛇谷遺跡出土例（須田他1989；第123図）・番後台遺跡出土例（藤崎1982；第304図42）のように、変形山形文から導出されたような斜位施文・弧状施文が見られる。この現象を、基盤となった形式の特徴に規定されていると捉えるならば、これらは弥生時代後期の「安房形」の壺（大村2004a）が先行型式である可能性が考えられる。

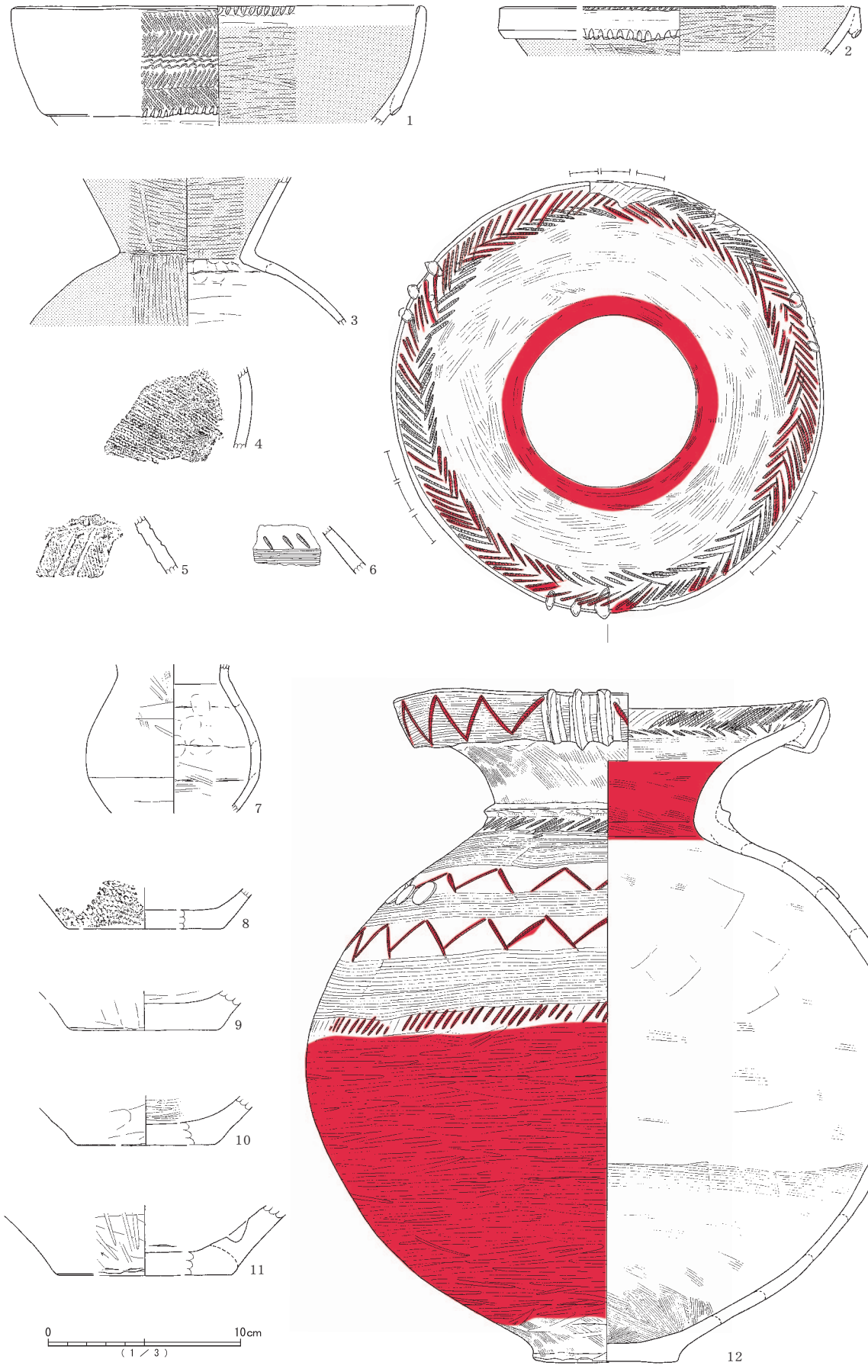
また、濃尾地域起源のパレススタイル壺を模倣した壺がいくつか出土しているが、模倣の内容にはバリエーションが認められる。南西側周溝出土のパレススタイル模倣壺（第121図1）は、器形を近似するものに仕上げているが、口縁端部外面の擬凹線と口縁内面の羽状刺突文帯は省略されている。これに対し、第122図4はハケメ調整の後に櫛描直線文・列点文・頸部凸帯を作っており、文様の転写に注意を払っているように見受けられる。

周溝内の土器群は、弥生時代終末期前半に属するものが主体であり、遺存良好な個体の大半は中心埋葬に関係する土器と考えるのが妥当である。竪穴住居跡および、後続する289号墓との切り合い関係を勘案すると、本遺構は弥生時代終末期前半に属すると考えられる。そして、22号竪穴住居跡は弥生時代終末期前半に属するが、南東側周溝がこれを切るため、上限はこの遺構の廃絶後にあると限定することが可能である。

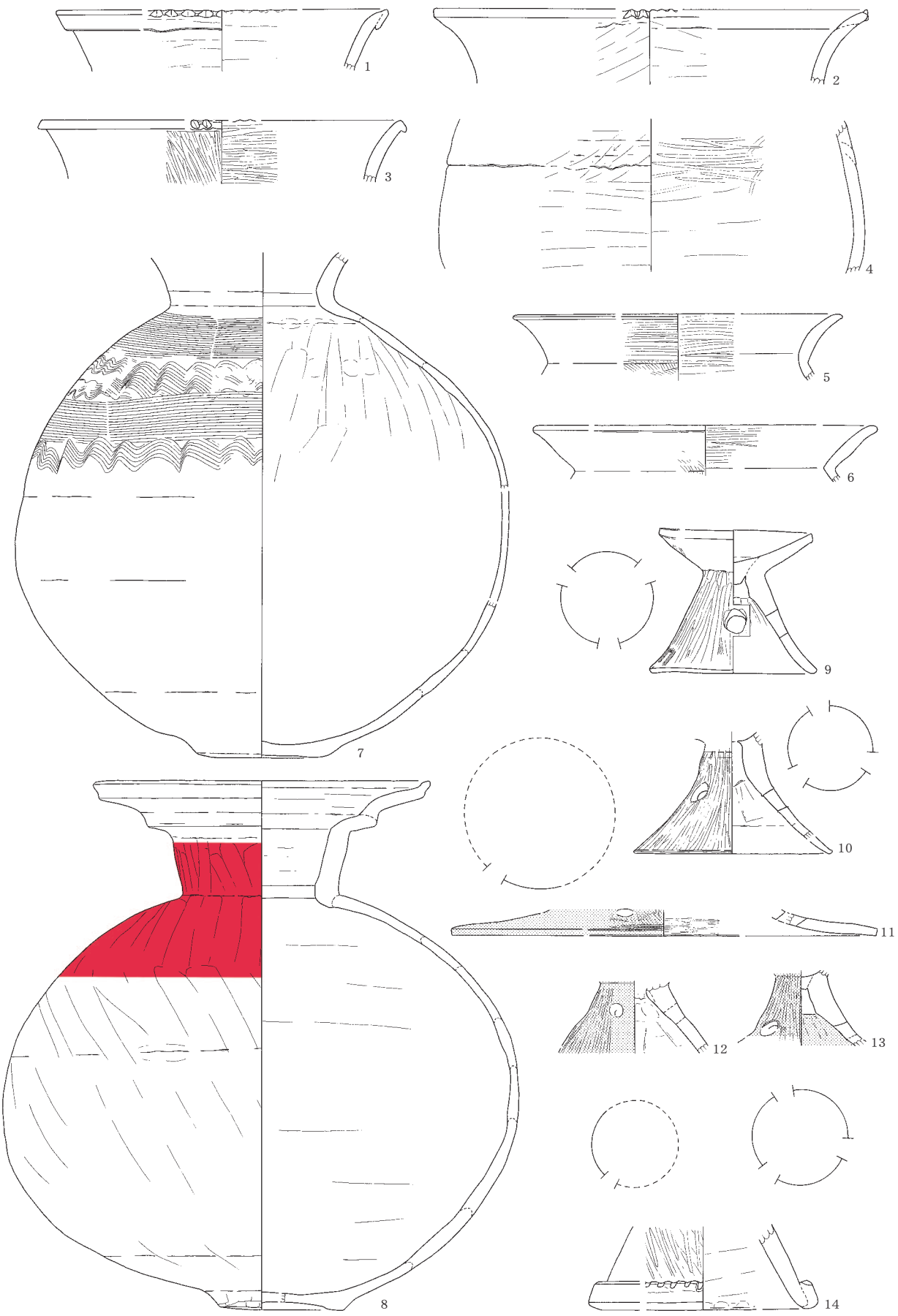
なお、胎土分析の結果によると、第121図7の手焙は在地産胎土の可能性がある（ランクB）、第122図1の櫛描文区画壺は在地産胎土の可能性が高い（ランクA）、第127図23のパレススタイル壺は非在地産胎土の可能性が高い（ランクE）、第129図2の広口壺は非在地産胎土の可能性がある（ランクD）、第130図14パレススタイル壺は非在地産胎土の可能性が高い（ランクE）、第131図5の壺は非在地産胎土の可能性が高い（ランクE）、第132図6の高杯は非在地産胎土の可能性が高い（ランクE）、と判定されている。本遺構出土土器は形状だけではなく、胎土自体も非在地系譜にあるものが多いようである。



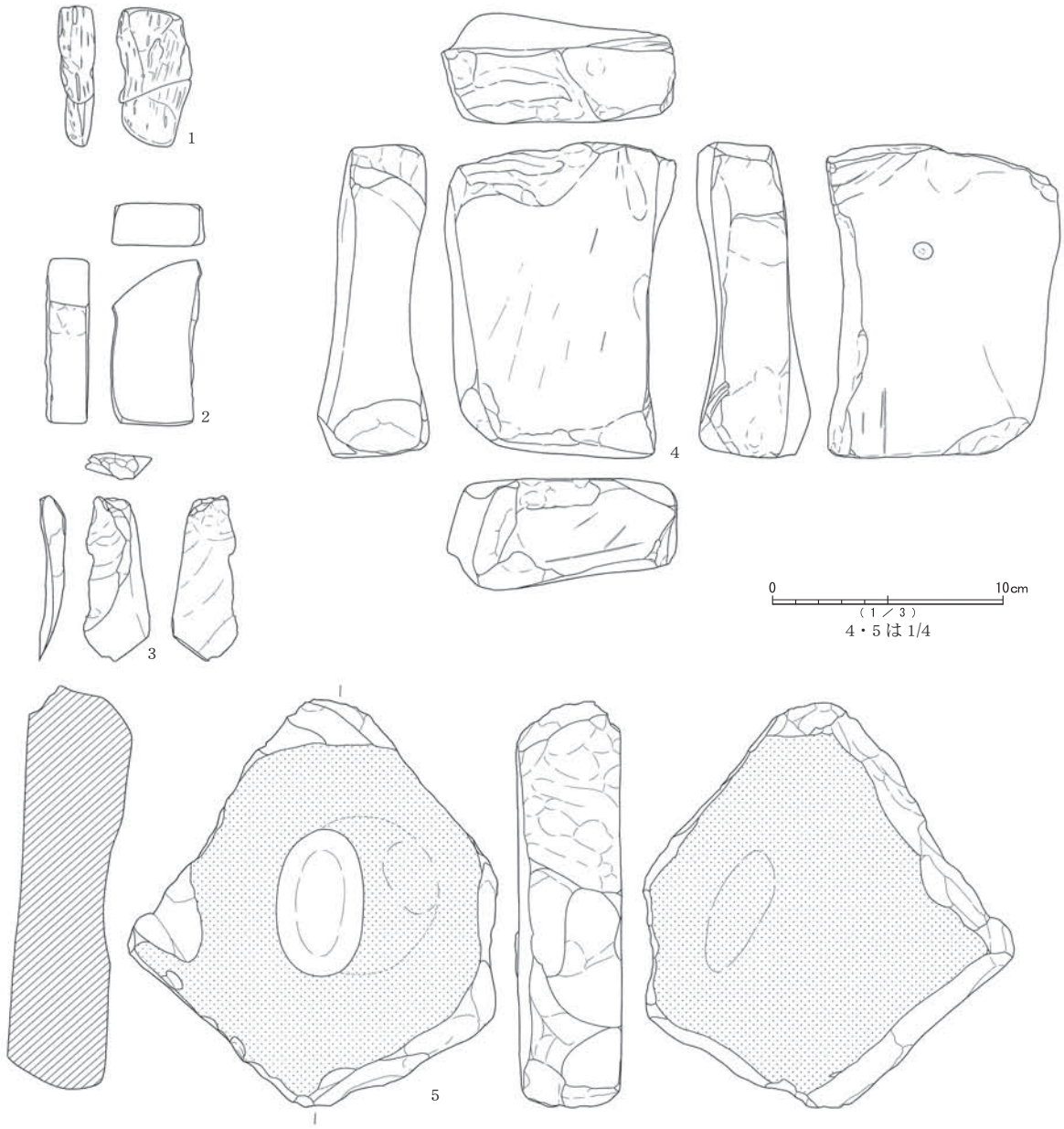
第 134 図　289 号方形周溝墓実測図



第 135 図　289 号方形周溝墓出土遺物実測図



第 136 図　289 号方形周溝墓出土遺物実測図



第 137 図　289 号方形周溝墓出土遺物（石製品）実測図

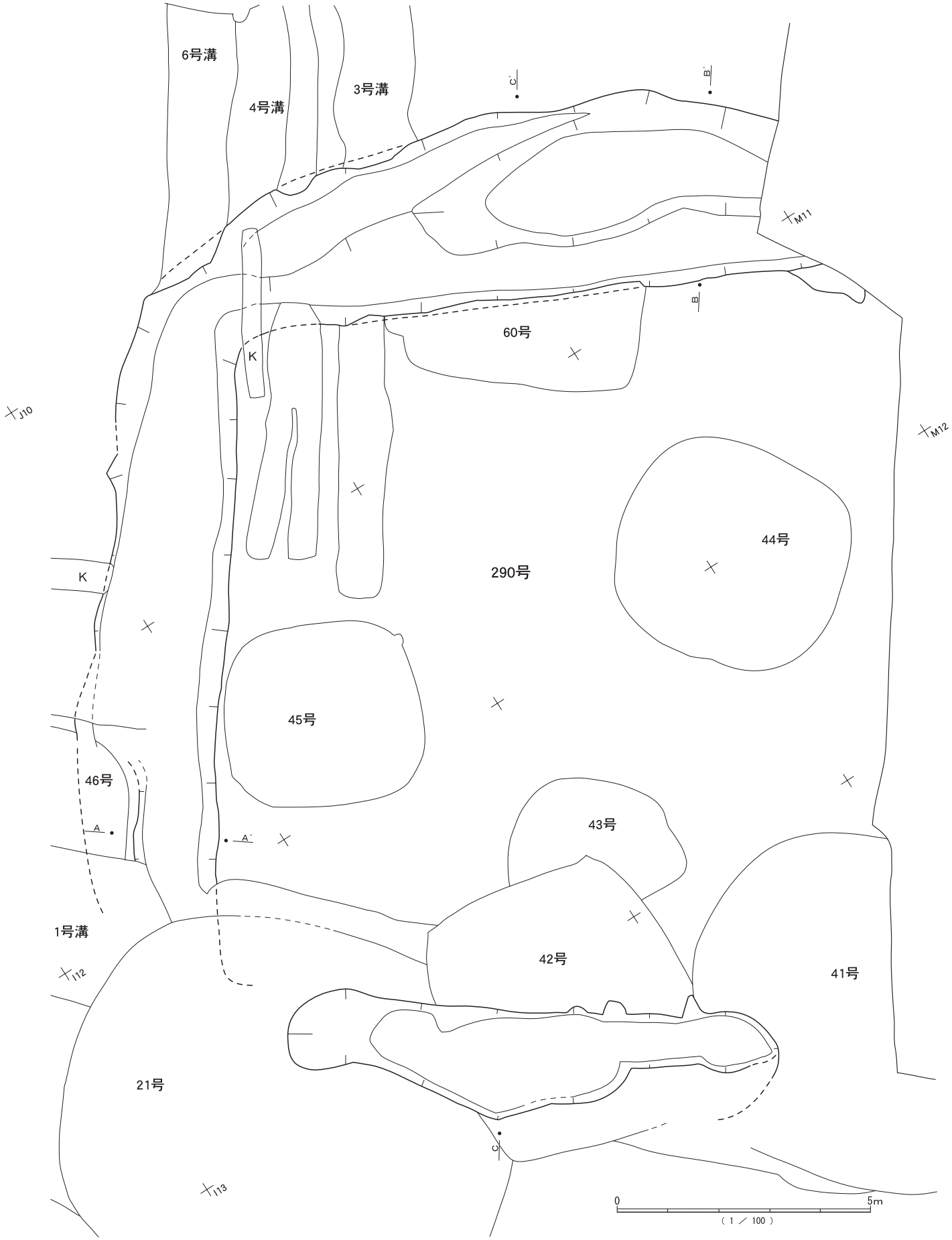
289 号方形周溝墓（第 134 ～ 137 図、図版 2・6・16・17・43・44・72・75・81・84・88）
形状：1 角の切れる方形　**規模**（長軸×短軸；m）：10.0 × 10.0
外周面積（㎡）：92.0　**方台部面積**（㎡）：49.7　**周溝面積**（㎡）：34.2

本遺構は、288 号墓の南東側周溝を共有するかたちで築かれた方形周溝墓である。弥生時代終末期前半の 22 号竪穴住居跡を覆う形で構築されており、その先後関係は確実である。14 号竪穴住居跡とは東コーナー付近で切り合うが、遺物出土状況と周溝覆土堆積状況から、こちらも本遺構の方が新しい。全体形はほぼ正方形で、北コーナーの周溝が掘り残されており、ブリッジ状を呈する。周溝平面形はほぼ等幅で巡るタイプで、断面は逆台形を呈する。墳丘は 40cm 程度の高さで一部遺存していたようだが（第 36 図）、特に形状や出土遺物についての記録はない。埋葬施設は、墳丘上を含む方台部内、周溝内ともに検出されなかった。

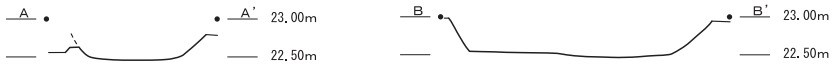
遺物はすべて周溝内から出土したもので、北東側周溝にほぼ完形の小型器台と高杯脚部（第 136 図 9・10）、東コーナーに完形のパレススタイル壺模倣の壺（第 135 図 12）、南コーナーに体部を一部欠損するだけの無文二重口縁壺（第 136 図 8）が出土している。この他、前述の通り、288 号墓南東側周溝出土の完形に近い無文大型壺（第 128 図 2）が本遺構に伴う可能性も考えられる。また、口縁部を除いて大部分が遺存する櫛描文の壺（第 136 図 7）は、遺物注記が無く確定できないが、特徴的な同一個体片に添付されていたラベルに「070-289-1002　NE 溝中央南」と記されていることから、本遺構に伴うと判断した。ただし、北東側周溝でドット取り上げされた遺物には、すでに小型器台・高杯脚部の 2 点があり、対応するドットが認められない点は不自然である（289 号平面図に遺物注記と対応できるドットは一切ないが、この 2 点と東・南コーナーの壺は写真で確定できる）。遺物とラベルの対応が確実とする仮定の上だが、この壺は小型器台・高杯脚部とセットになっていた可能性も考えられる。そして、14 号竪穴住居跡との切り合い部の微妙な位置には、第 137 図 4・5 の砂岩製砥石と輝石安山岩製板状品が隣接して出土している。後者は、伊勢湾・濃尾地域で認められる赤色顔料粉砕用の石臼と形状・寸法が類似しており（三重県位田遺跡 SX6：米山 1999 等）、仮に、機能が同じであり、かつ本遺構に伴うとすれば、周溝出土土器の系譜にも関連する可能性が考えられる。なお、肉眼観察では赤色顔料の付着は確認できない。

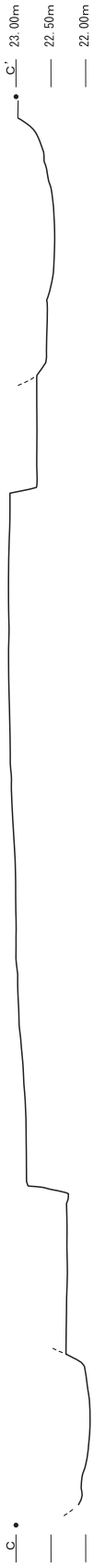
東コーナーの遺存覆土上層で出土したパレススタイル模倣の壺（第 135 図 12）は、櫛状工具で口縁内面および肩部に羽状刺突文・山形刺突文・直線文・斜列点文を施す、非在地的な形状・技法の土器である。口縁端部外面に棒状浮文を 3 個 1 組で 3 方に均等配置し、それと半単位ずらした配置で肩部文様帯上に円板状浮文を貼り付けている。一見、濃尾地域のパレススタイル壺を厳密に写し取っているようだが、口縁端部外面は擬凹線文ではなく、赤彩山形刺突文が加えられ、また、元のデザインにはない円板状浮文が施される点で、変容を示している。胎土分析の所見は、在地の土である可能性が高い（ランク B）というものである。本例は在来の土器型式から大きく離れるために、濃尾地域における祖型となりうる資料の編年上の位置づけが、帰属時期の印象を左右すると思われる。詳細は後述するが、弥生時代終末期後半の古相に位置づけたい。

南コーナーの遺存覆土上位で検出された二重口縁壺（第 136 図 8）は、無文で白い胎土を持つ非在地的な土器である。口縁部は、わずかに広がりながら立ち上がる頸部から、短く一度外反して 1 次口縁をつくり、そこからさらに大きく水平的に拡げ 2 次口縁を追加している。口縁端部は明瞭につまみ上げられるかたちでヨコナデされており、屈曲して立ち上がりを見せる特徴的な断面形を示している。体部内外面にハケメは認められず、工具ナデで仕上げられたように見受けられる。肩部には赤色顔料が遺存しており、本来は外面全体に赤彩が施されていたらしい。赤彩は施されていたものの、ヘラミガキで研磨・定着させなかったために、剥落が進んだのかもしれない。底面は外周が高くなる上げ底状の形をしており、これも非在地的な要素と言える。胎土は、肉眼観察では非在地産にしか見えないが、胎土分析では、在地の要素もなくはないと判定されている（ランク C）。なお、本例に類似するものとして、山梨県長坂町北村遺跡 2 号方形周溝墓出土例（小宮山 1996）が挙げられる。この資料は伊勢湾系と評価されており、彼地でも非在地系として位置づけられている（小林 2000）。本例は 289 号墓例とともに、愛知県尾西市・一宮市西上免遺跡出土二重口縁加飾壺（赤塚 1997）のような型式から文様要素の脱落した事例なのかもしれない。



第 138 図　290 号方形周溝墓実測図





第 139 図　290 号方形周溝墓実測図

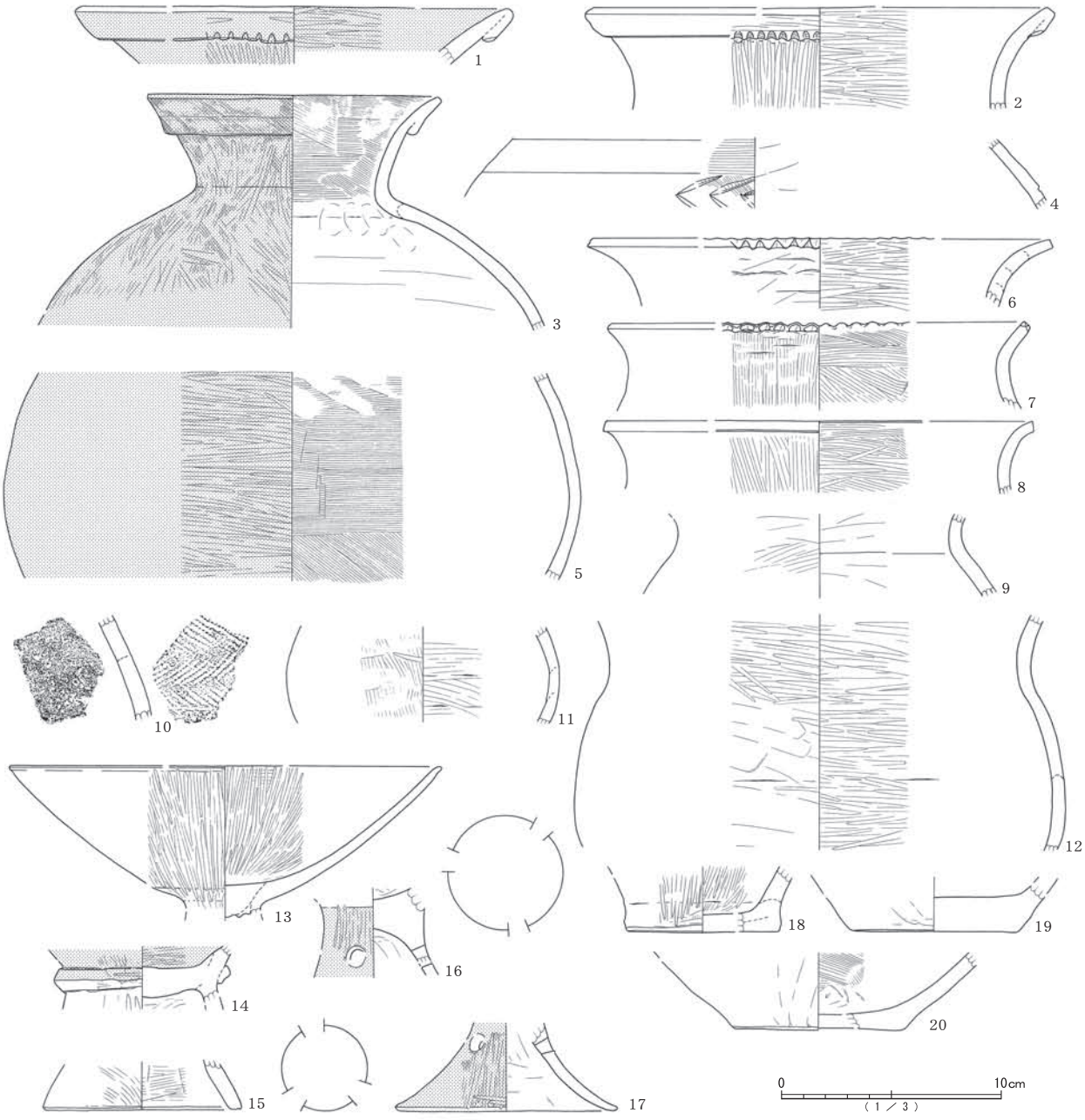
北東側中央南で出土した可能性のある壺（第 136 図 7）には、同じ櫛状工具による直線文・波状文が 2 帯ずつ交互に施されている。頸部屈曲には、凸帯の貼り付けは行われていない。底面は外周が若干高まる形状を呈している。明確な稜を持たない頸部屈曲と球形に近いプロポーションは 135 図 12 の壺と雰囲気が似ている。器壁の厚さが 3mm 程度と当地域では希な薄さで、技法・形状も非在地的である。しかし、胎土分析の結果は、胎土が在地産であることを示唆している（ランク B）。文様構成は近江地域を加えた伊勢湾地域にルーツがありそうだが、他の 2 例が濃尾地域に由来するらしいことを考慮すると、同様に捉えて良いのかもしれない。

北東周溝・東コーナー・南コーナーの土器群は、本遺構で行われた埋葬に関わる遺物と考えられる。壺（第 128 図 2 含む）の位置は、原位置が墳丘上にあるとしても各コーナーを選ぶ点で計画性を示しており、また、北東の器台・高杯・壺も葬送儀礼に伴った器物の可能性がある。先行して構築された 288 号墓では、在地的・折衷的な壺が主体を占めているが、本遺構では、壺はいずれも非在地的な形状を示しており、対照的な様相である。ここでも被葬者を含む葬送関係者の社会的属性が反映されていると仮定するならば、パレススタイル模倣壺と二重口縁壺は濃尾地域、櫛描文の壺は近江地域を含む伊勢湾地域にルーツがあると考えられるので、葬送儀礼および墳墓構築の一環としての土器配置に、その関係者中の個人もしくは帰属集団のアイデンティティーが表出された事例と捉えることができる。ただし、胎土分析の結果は、いずれも在地産胎土の可能性が考えられるというものであり、配置に対する意識の推定される状態で非日常的な構築物である墳墓遺構から出土したという脈絡を抜きにして、形状に表れた外来性のみを強調するわけにはいかないだろう。

本遺構の構築時期は、葬送に伴った可能性の高い周溝内出土土器が示す、弥生時代終末期後半にあると考えられる。また、22 号竪穴住居跡と 14 号竪穴住居跡との切り合い関係からは、22 号→ 288 号墓→ 14 号→ 289 号墓の構築順が推定できる。

290 号方形周溝墓（第 138・139・140 図、図版 15・44・72・73・83・86）
形状：胴張り方形（3 辺検出）　**規模**（長軸×短軸；m）：21.2? × 19.2?
外周面積（㎡）：344.3　**方台部面積**（㎡）：186.4　**周溝面積**（㎡）：158.5

本遺構は、西側調査区の屈曲部に位置する方形周溝墓で、3 辺が検出されているが、多くの遺構と切り合い、全形は捉えにくい。41 号・42 号・43 号・44 号・45 号・46 号・21 号竪穴住居跡を切り、1 号・2 号・3 号・4 号溝に切られている。周溝は、外側に膨らむ形状でコーナーに向かって狭くなり、底面幅が広く傾斜の緩い逆台形の断面形を持つ。埋葬施設は、方台部・周溝内とも検出されておらず、方台部中心埋葬施設は盛土内に構築されていたものと思われる。周溝は南西辺の最深部が、北東辺のそれより 50cm 近く深くなっており、南西側周溝に周溝内埋葬が存在した可



第 140 図　290 号方形周溝墓出土遺物実測図

能性も考えられる。

遺物はすべて一括取り上げの土器である（第 140 図）。無文化と頸部屈曲の鋭角化が当地域の古墳時代前期土器、五領式の特徴であるが、本遺構の出土土器は過渡的な要素を併せ持っている。例えば口縁端部外面を肥厚する赤彩壺（3）は、ハケメ調整があり無文である点に五領式への傾斜を認められるが、肥厚部下端は断面垂滴状に仕上げられるうえに、頸部屈曲も湾曲を残しており、弥生時代後期の壺形土器に近い要素も看取できる。このような土器の特徴と、周溝が外に膨らむ平面形であることを勘案すると、本遺構は弥生時代終末期に比定できるものと思われる。近在の 288 号墓・289 号墓との先後関係については、288 号墓より後出することはほぼ確かとしても、289 号墓との関係は、遺物の出土状態の相違もあり確定しがたい。

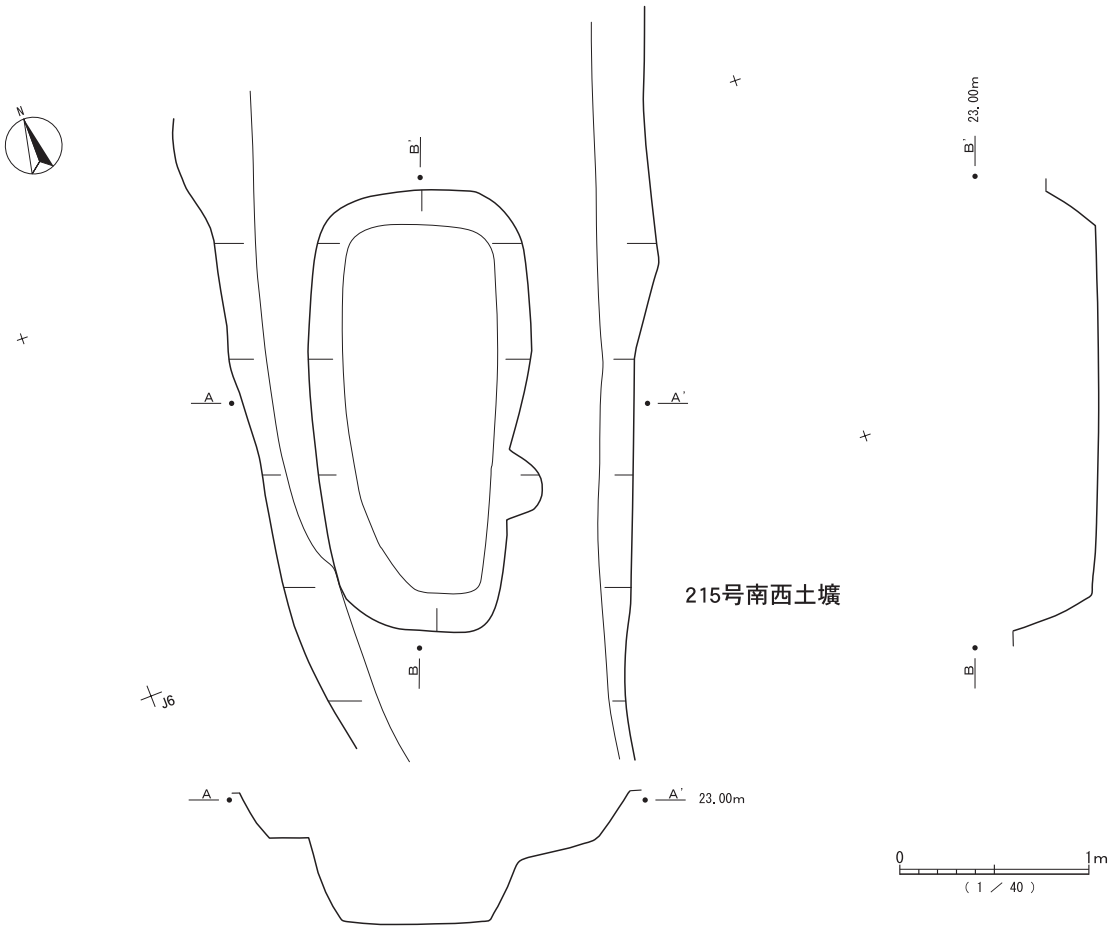
C—C'
1　黒色土
2　暗茶褐色土
3　暗褐色土
4　暗黄褐色土
5　ロームブロック多量混じりの黒褐色土
6　ロームブロック多量混じりの暗褐色土
7　ロームブロック多量混じりの明褐色土
8　ロームブロック混じりの暗褐色土
9　明褐色土

D—D'
1　再堆積土
2　旧耕作土
3　暗黄褐色土
4　暗黄褐色土
5　茶褐色土
6　黒色土の斑が入る暗褐色土
7　ローム微粒少量混じりの黒色土
8　ローム微粒少量混じりの黒褐色土
9　ローム混じりの暗褐色土
10　ロームブロック混じりの黒色土
11　ロームブロック

E—E'
1　暗褐色土
2　暗灰褐色土　硬化面
3　黒褐色土
4　黒褐色土
5　黒色土
6　ローム粒混じりの暗褐色土
7　暗褐色土
8　褐色土
9　暗褐色土
10　ロームブロック・粒少量混じりの暗褐色土
11　ローム粒少量混じりの暗褐色土
12　ロームブロック混じりの黒褐色土
13　ロームブロック混じりの茶褐色土
14　黒褐色土
15　ローム少量混じりの明褐色土

2号土壙
215号
65号
5号溝
4号溝
3号溝
A　23.00m
A'　23.00m
B　23.00m
B'　23.00m
C　23.00m
C'　23.00m
D　24.00m
D'　23.50m
E　23.50m
E'　23.00m
F　23.00m
F'　23.00m
G　23.50m
G'　23.50m
0　5m
（1／100）

第 141 図　215 号方形周溝墓実測図および等高線図



第 142 図　215 号方形周溝墓周溝内埋葬施設実測図

215 号方形周溝墓（第 141・142 図、図版 15）

形状：方形（3 辺検出）　**規模**（長軸×短軸；m）：17.6 × 17.6?

外周面積（㎡）：270.7　**方台部面積**（㎡）：153.2　**周溝面積**（㎡）：118.3

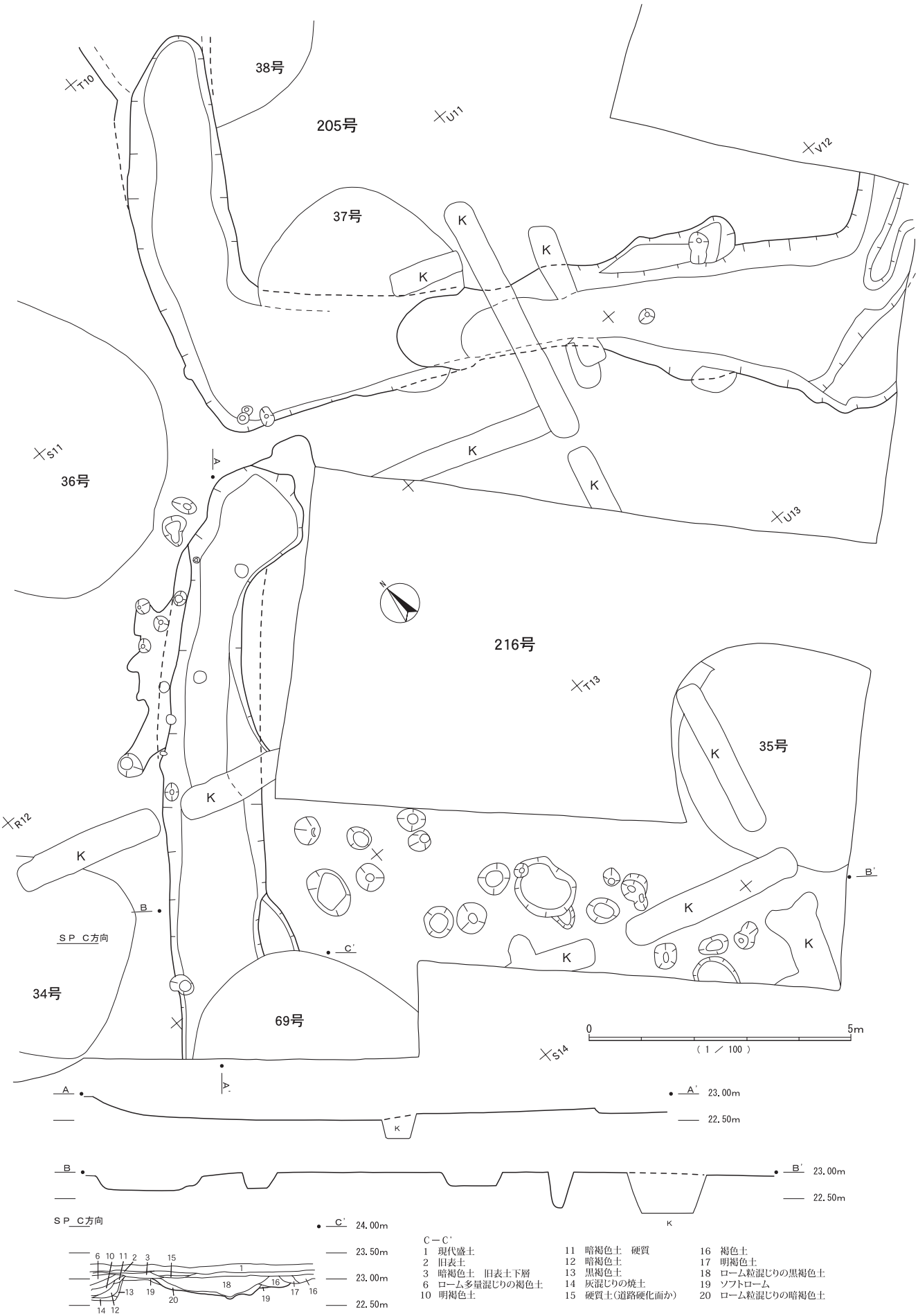
本遺構は西側調査区北西屈曲部に位置する方形周溝墓である。周溝は、北側を除いた 3 辺が検出されており、30cm 程度の深さが遺存している。埋葬施設は西溝の南寄りに 1 箇所が検出できただけで、方台部に想定される中心埋葬施設は墳丘盛土とともに失われたらしい。また、本遺構北東には 2 号土壙墓があり、西側には、2m 程度の間隔を置いて同じような方位で 207 号が検出されている。調査区南東部の一群とは若干離れた位置にあることを考えると、これらは墓域内で小グループを構成するのかもしれない。

周溝内埋葬施設は、長軸 2.32m 短軸 1.18m の長方形土坑で、底面は周溝底面からさらに 40cm 深い。遺物はまったく出土していないが、規模と検出位置から埋葬施設と考えて問題ないだろう。

遺物は数点検出されていたようだが、対応する注記の遺物は確認できない。このため、土器による時期の判定はできないが、周溝が外側に膨らみ気味である点を重視すると、弥生時代終末期に属する可能性も考えられる。本遺構は弥生時代終末期から古墳時代前期に幅を持たせて位置づけておきたい。

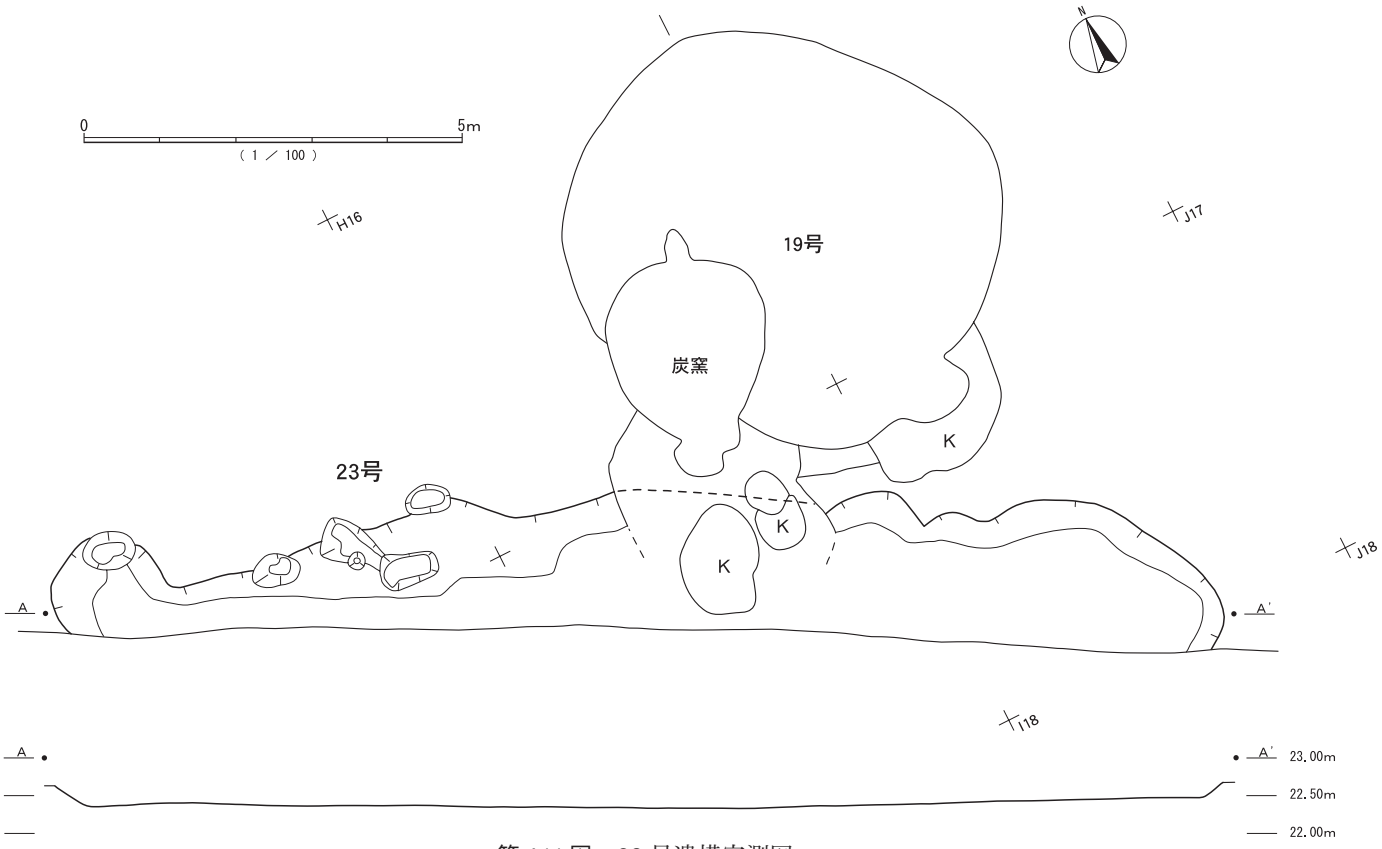
2 号土壙墓（第 141 図）

本遺構は 215 号方形周溝墓の北東に位置する長方形の土壙墓である。長軸 2.60m 短軸 1.22m 深さ



C－C'
1 現代盛土
2 旧表土
3 暗褐色土 旧表土下層
6 ローム多量混じりの褐色土
10 明褐色土
11 暗褐色土 硬質
12 暗褐色土
13 黒褐色土
14 灰混じりの焼土
15 硬質土(道路硬化面か)
16 褐色土
17 明褐色土
18 ローム粒混じりの黒褐色土
19 ソフトローム
20 ローム粒混じりの暗褐色土

第 143 図　216 号方形周溝墓実測図



第 144 図　23 号遺構実測図

0.3m の規模で、底面には、一回り小さい範囲に木棺痕跡と考えられる 5cm ほどの浅い掘り込みが認められる。遺物はまったく出土していない。周辺には A・B のような似た規模の土坑が認められるが、これらも土壙墓なのかもしれない。

216 号方形周溝墓（第 143 図、図版 14・16）

形状：1 角の切れる方形？（2 辺検出）　**規模**（長軸×短軸；m）：18.4? × 18.0?

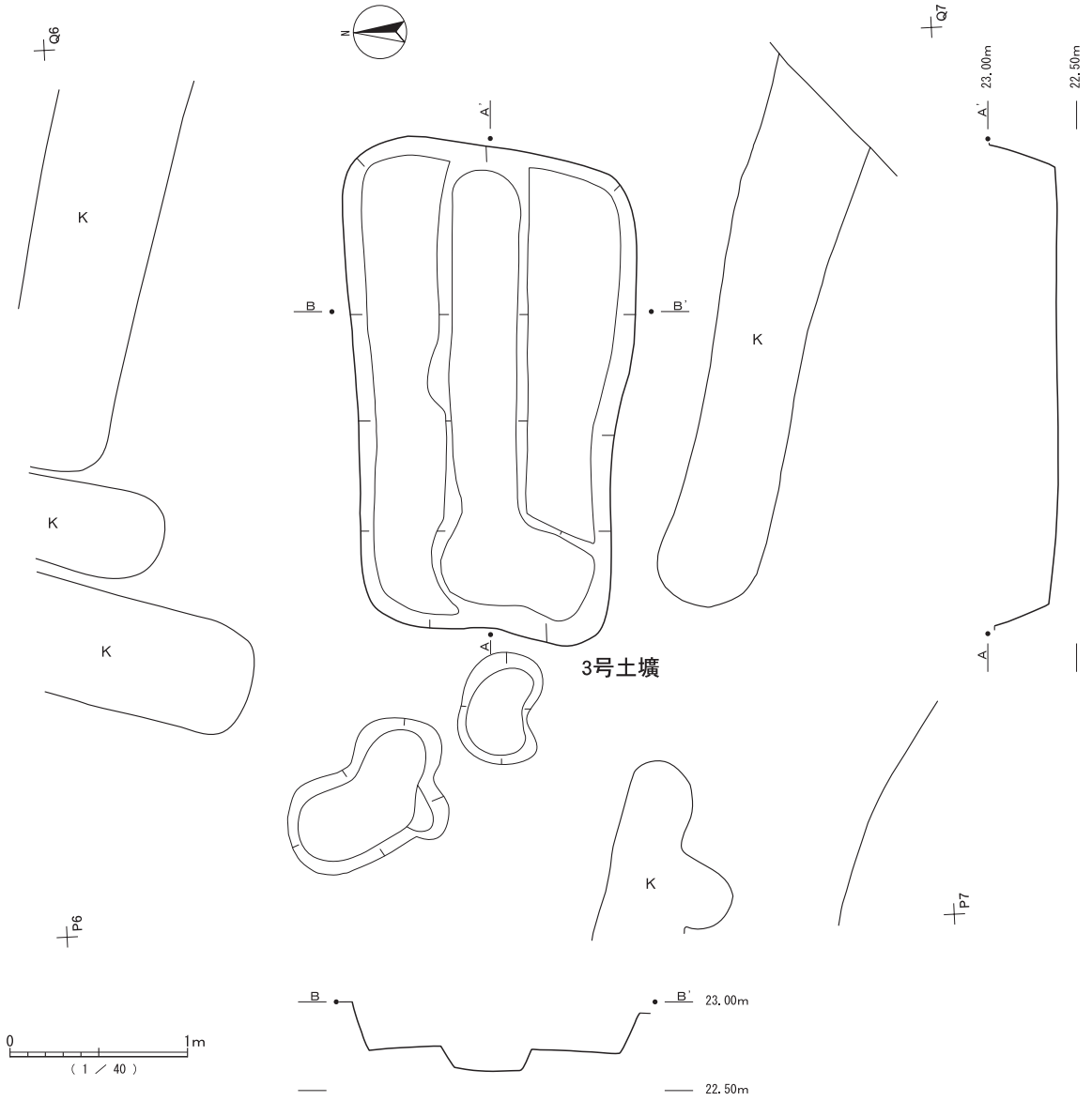
外周面積（㎡）：288.7　　**方台部面積**（㎡）：185.5　**周溝面積**（㎡）：97.5

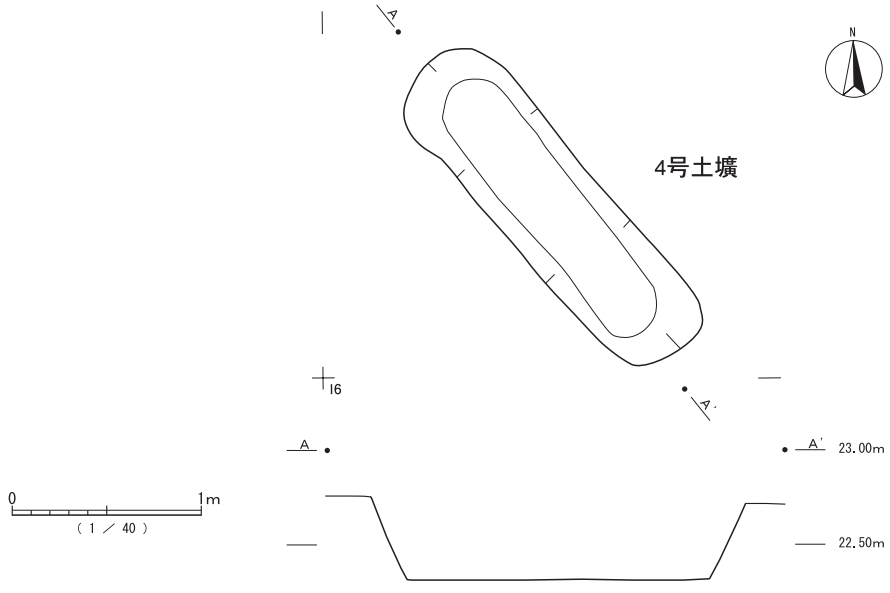
本遺構は、東部調査区に部分的に検出された方形周溝墓である。北西・北東 2 辺が検出されている。北東辺の方台部側に焼土が検出されているが、本遺構に伴うものかは不明である。北コーナーは周溝がブリッジ状に途切れている可能性が高い。北東側周溝は 205 号方形周溝墓と共有するが、本遺構が先行するようである。全体形は方形と推定するが、北東側周溝と北西側周溝北端部は湾曲を見せており、ブリッジのある円形になる可能性も否定できない。

遺物はまったく出土していない。ただし、北西側周溝で切り合う 68 号竪穴住居跡が、出土土器（第 56 図）から弥生時代終末期に位置づけられることからすれば、それより下る時期であるのはほぼ確実である。そして、北に隣接する 205 号が古墳時代前期に位置づけられることを勘案すると、本遺構はその間、すなわち弥生時代終末期から古墳時代前期に帰属すると考えられよう。

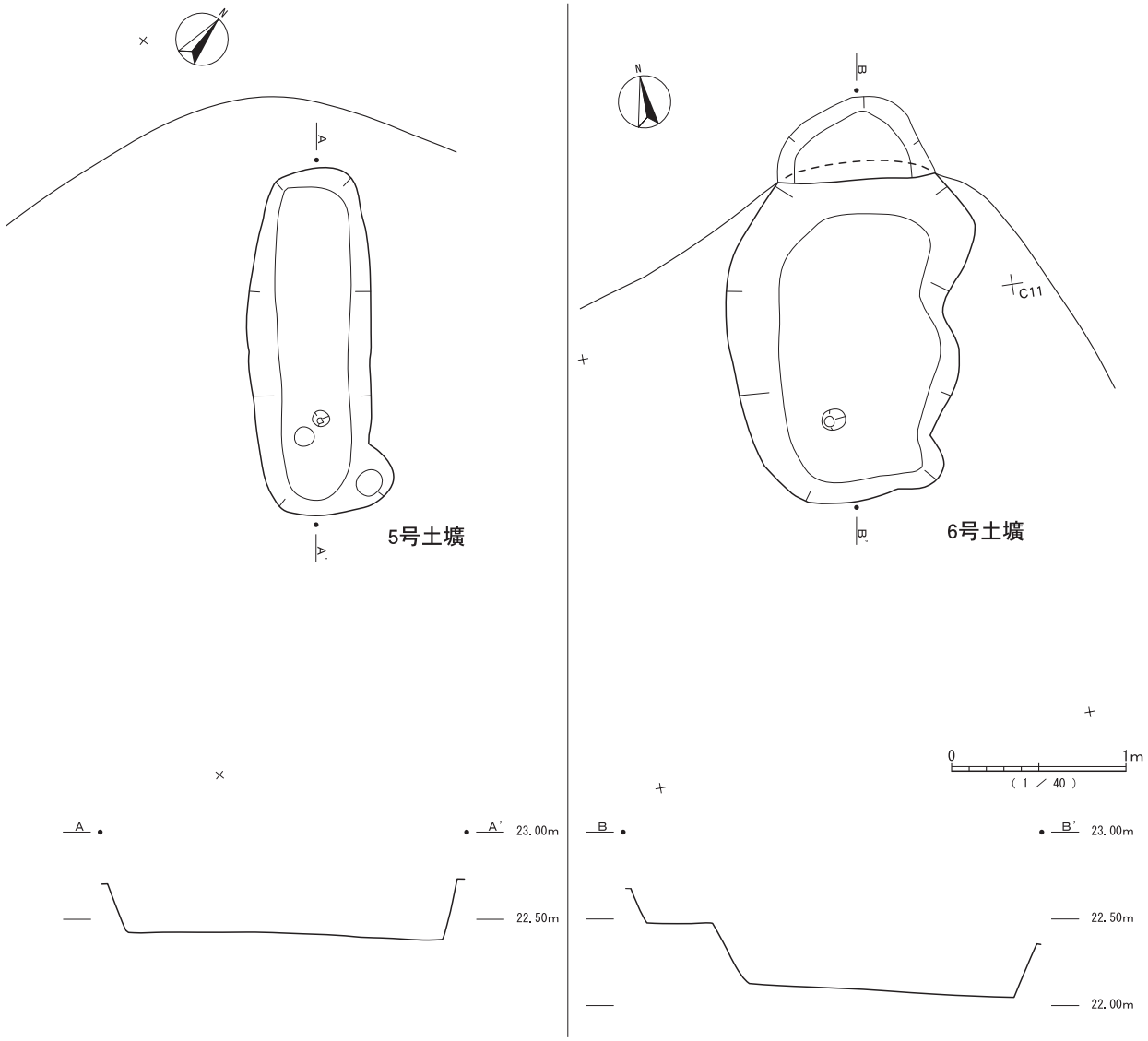
23 号遺構（第 37・144 図、図版 57）

長軸 15.5m 短軸 2.0m 以上の溝状遺構である。中ほどを現代の炭窯によって破壊されている。遺物





第 145 図　3・4 号土壙墓実測図



第 146 図　5・6 号土壙墓実測図

はすべて一括取り上げ遺物であり（第 37 図）、壺口縁（19）を除いて混入品の可能性が高い。

19 号竪穴住居跡との位置関係からすると、両者の同時存在は成り立ちがたいと見られるので、本遺構が後出すると考えられる。19 号竪穴住居跡は弥生時代後期後半から終末期に位置づけているので、本遺構は古墳時代前期の所産と考えておきたい。

遺構の性格は、形状と位置関係から、方形周溝墓と推察される。211 号方形周溝墓と前後する時期に構築されたのかもしれない。

3 号土壙墓（第 145 図）

本遺構は西側調査区北部に位置する、長軸 2.88m 短軸 1.66m 深さ 30cm の方形土坑である。底面中央は長軸に沿って幅 50cm 深さ 12cm がさらに掘りくぼめられており、木棺痕跡である可能性が考えられる。遺物は全く検出されておらず、構築時期は不明だが、北部に分布する弥生時代後期中葉の墳墓群に関連すると捉えるのが妥当と思われる。

第 147 図　7・8・9 号土壙墓実測図

4 号土壙墓（第 145 図下）

本遺構は西側調査区北部、64 号竪穴住居跡の南に近接する長方形の土坑である。長軸 2.02m 短軸 0.56m 深さ 0.45m の規模である。遺物はまったく検出されておらず、時期の判別はできない。検出位置は、207 号・215 号方形周溝墓に近接するので、これらに関連する遺構であるとも考えられる。

5 号土壙墓（第 146 図左、図版 11）

本遺構は 25 号竪穴住居跡覆土を切って構築された長方形土坑である。長軸 2.0m 短軸 0.72m 深さ 0.35cm の規模である。遺物はまったく出土しておらず、構築時期は不明だが、弥生時代後期後半と推定される 25 号竪穴住居跡より新出することからすると、弥生時代終末期前半の 288 号墓に関連する遺構であるとも考えられる。

6 号土壙墓（第 146 図右）

本遺構は 27 号竪穴住居跡覆土を切り込んで、構築される長方形の土坑である。長軸 2.32m 短軸 1.48m 深さ 0.58m の規模で、北側短辺が階段状になっている。伴う遺物は無いが、切り合い関係からすると、古墳時代前期にかかる可能性がある 27 号竪穴住居跡よりは新しい可能性が高い。

7 号土壙墓・8 号土壙墓・9 号土壙墓（第 147 図）

7 号・8 号・9 号土壙墓の 3 遺構は、西側調査区の中ほどに集中して構築されている。7 号は長軸 2.45m 短軸 0.8m 深さ 0.36m、8 号は遺存最大径 2.8m、9 号は長軸 2m 以上短軸 1.15m の規模である。いずれからも遺物は検出されていない。周囲には撹乱坑が方形周溝墓状に並んでいるが、個別の平面形と写真を見る限り、積極的に方形周溝墓の一部と捉えるのは難しい。3 遺構とも単独の土壙墓であると考えておく。

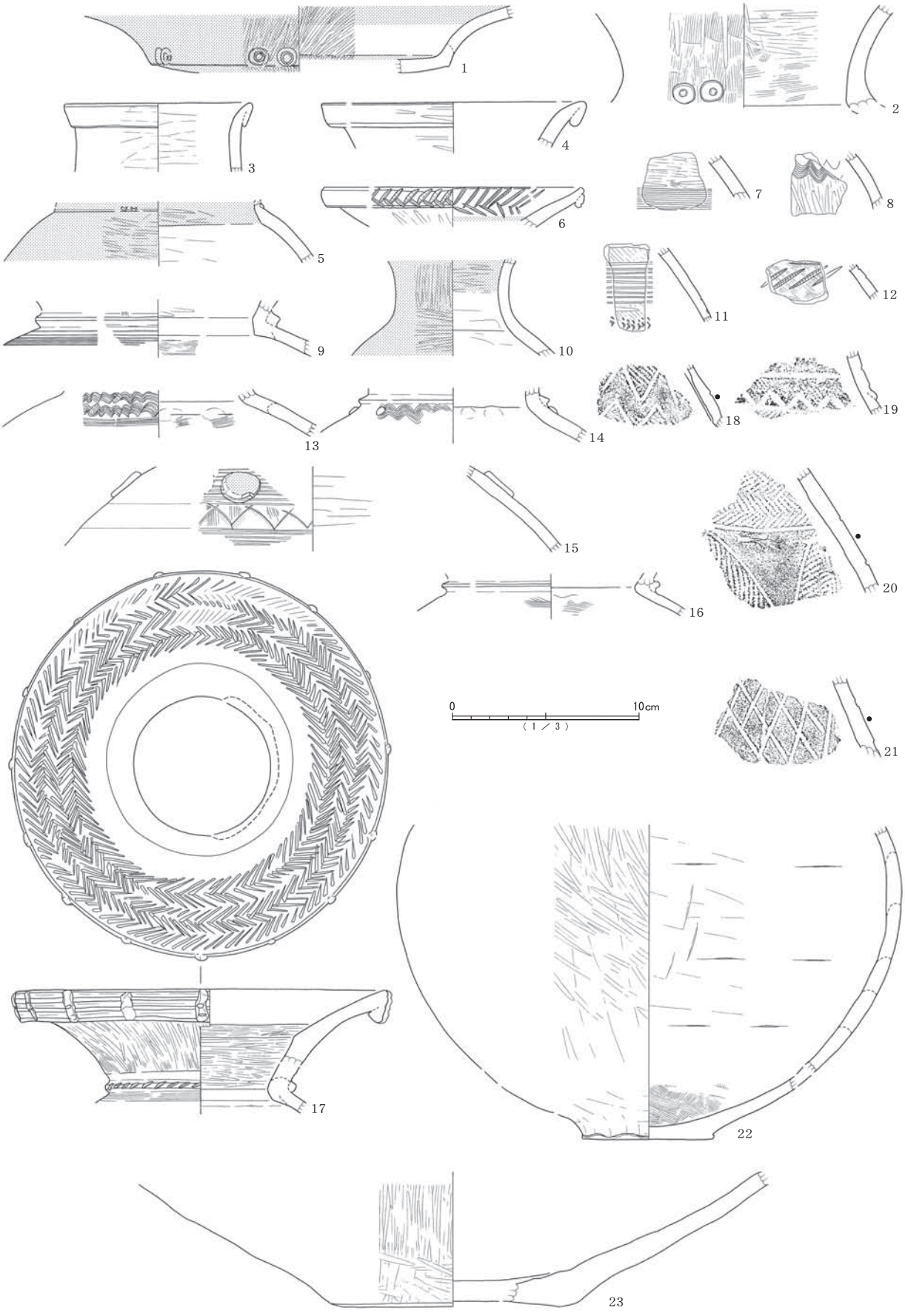
第 3 節　古代以降の遺構と遺物

古代　遺構は平安期の方形周溝状遺構 210 号の 1 基が検出されたのみである（第 113 図）。

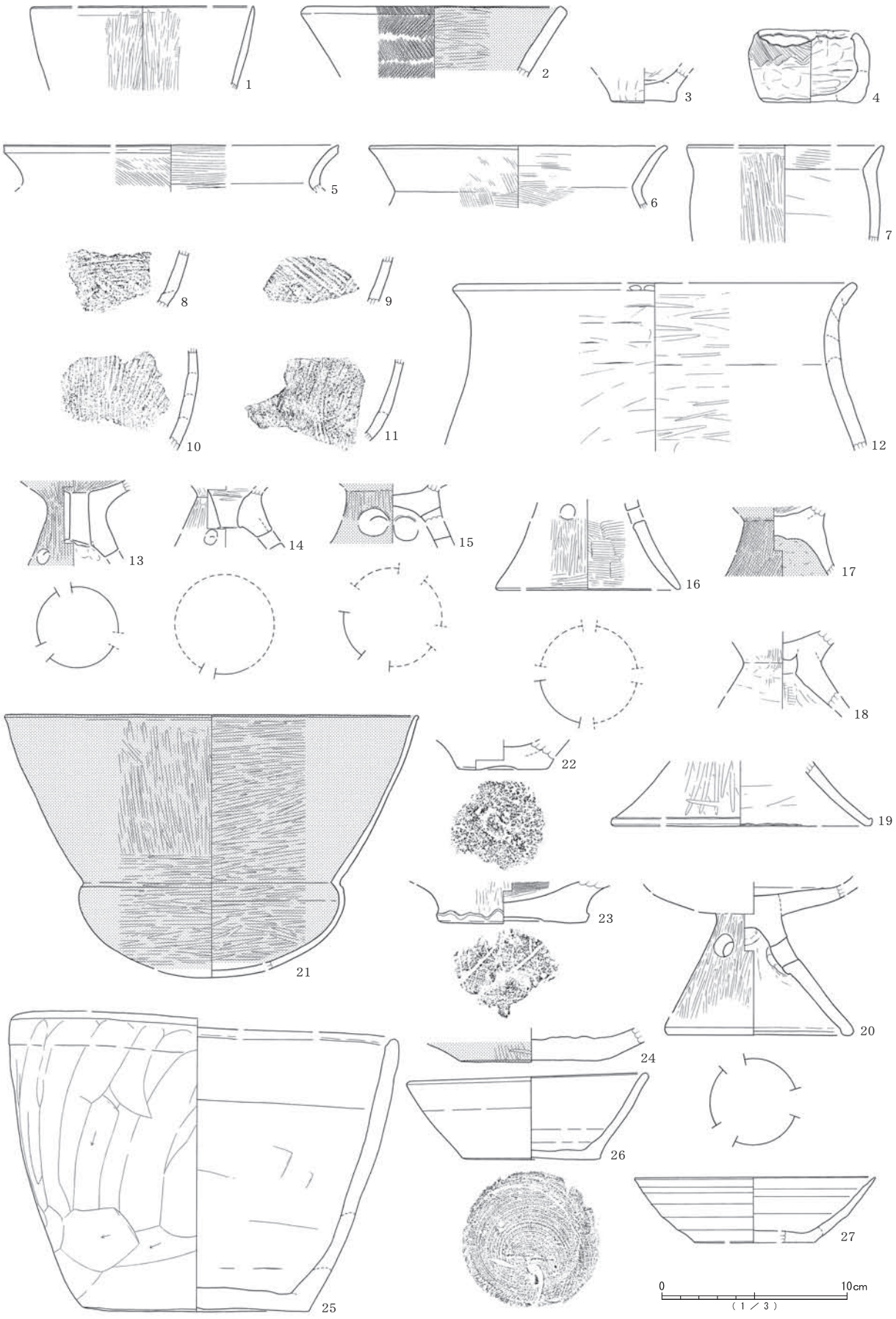
混入遺物と調査区内一括取り上げ遺物には、ロクロ土師器杯（第 149 図 26・27）や古代瓦片（第 151 図）も見られるが、その出土量は、南に位置する上総国分寺に直接関係する遺構の存在を示唆するほどのものではない。

中世　遺構は検出されていないが、鉢形の土師質土器（第 149 図 25）が 1 点出土している。埼玉県東松山市弁天山遺跡に同様の土器を蔵骨器に利用した例があるので、本例も 14 世紀ごろの蔵骨器と考えられる（野部 1974）。この他、図示していないが、調査区内の一括取り上げ遺物中には中近世の陶磁器類の小片が少数見られ、常滑甕片 5 点が含まれる。

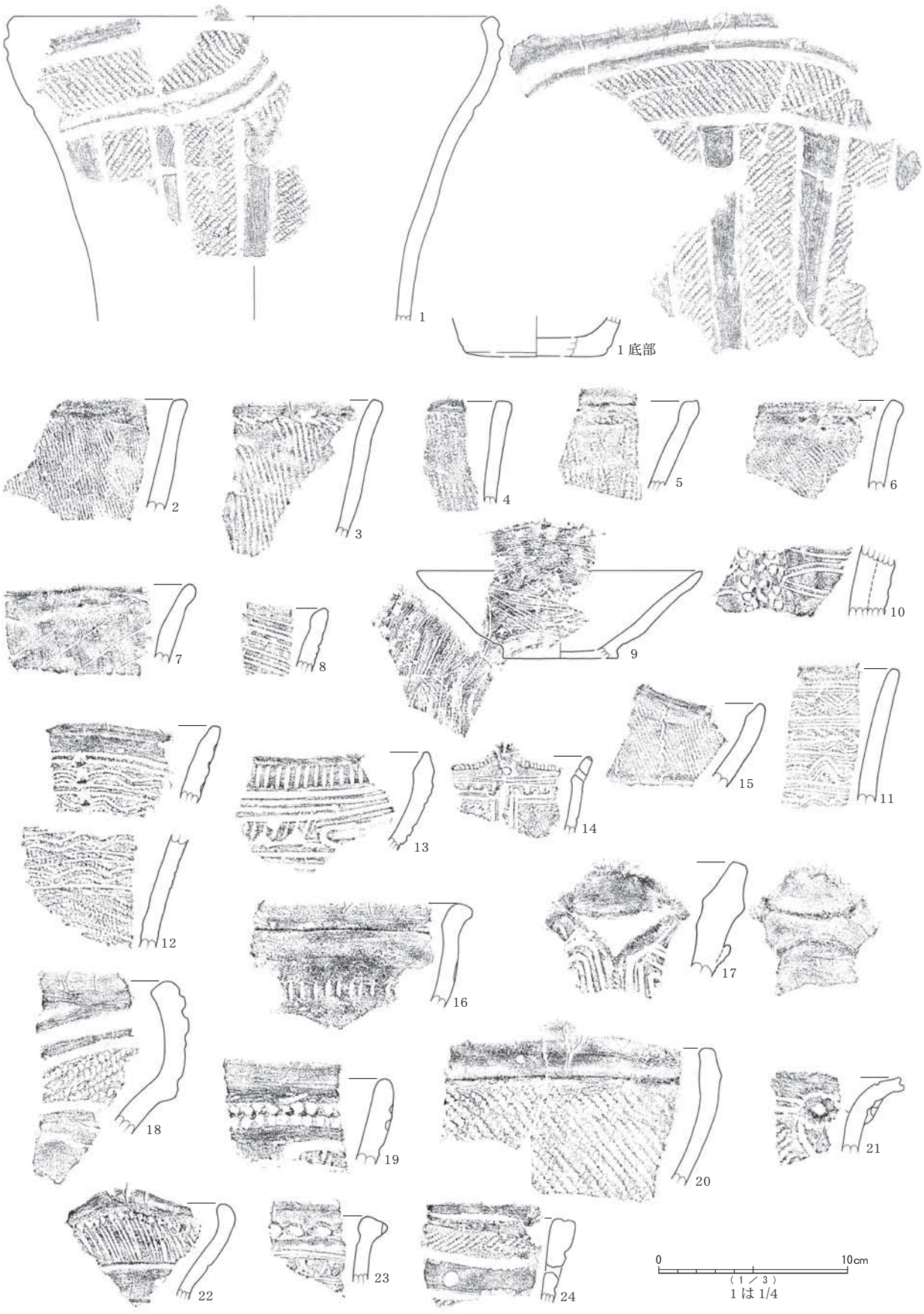
近世　ほぼ円形の土壙墓が 1 基検出された（第 13 図 10 号土壙墓）。上端径は約 1m で、周辺の遺構検出面からの深さは 1.1 mである。火葬歯骨片と、銹着した寛永通寶 6 点が出土しているが（半田・



第 148 図　遺構外出土遺物（土器）実測図



第 149 図　遺構外出土遺物（土器）実測図



第 150 図　遺構外出土遺物（縄文土器）実測図

白井 1982)、いずれも所在不明である。調査区を逆 T 字状に走る 1 号から 4 号の各溝（図版 8･18）は、現代まで利用された路面とそれに伴う溝であるが、遺構とは認識せずに調査が進み、帰属すると判断された遺物はまったくない。御林跡遺跡の調査区間を西の台地下へ抜けていくルートに連なると見られる幅 3m 強の 1 号溝（道路跡）には、いわゆる波板状の硬化土が確認されている（第 3 図）。

第 4 節　遺構外出土遺物

弥生時代以降の土器（第 148・149 図、写真図版 73・82・83）　遺構外あるいは帰属不明の土器が多数出土しているが、主に非在地的な形状のものを選別して図示した。刺突の伴う円形浮文（第 148 図 1･2）や櫛描文（同 6 ～ 9・11 ～ 15）、輪台技法に似た底部（第 149 図 22・23）等、遺構出土土器と共通する形状のものが多い。第 149 図 21 は大型の鉢であり、本来は古墳時代前期に下る方形周溝墓のいずれかに伴うものと思われる。パレススタイル壺を模倣した壺（同 17）は寄託された表採品で、参考資料として図示した。神門 3 号墓出土土器に類品が見られる。

縄文土器・礫群（第 150 図、写真図版 74）　調査区内で各時期の縄文土器片が散発的に出土している。掘り込みの明確な遺構は検出されていないが、288 号方形周溝墓北側 F10 グリッド内のソフトローム上層にかけて 5m 四方程度に広がって、礫群と早期土器片が出土している。図上、礫は「78」までナンバリングされているが、記載されたドットと一致しないので、総数は 70 点強程度と見られる。礫はいわゆる焼割礫が主体である。礫の分布は竪穴住居跡と 288 号墓を避けた形状になるので、本来の分布範囲が後代の遺構によって削平されたことは明らかである。

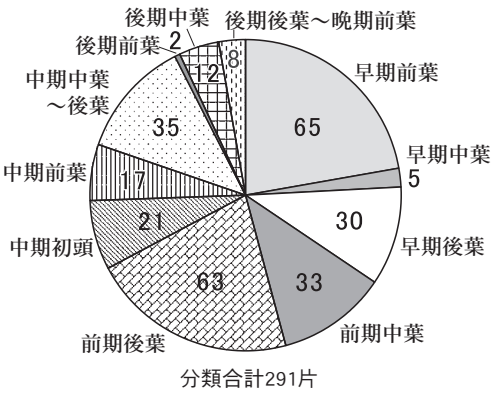
縄文土器の様相　縄文時代の生活痕跡は全体に希薄である。ここに記載するのは、弥生時代以降の遺構中や遺構外で取り上げられたものである。全部で 553 点あり、このうち分類可能な破片 291 点の内訳を右図に示した。全体として調査面積に比して少量であり、とくにまとまって出土した例もない。そのなかで、早期前葉、前期後葉、中期中葉～後葉の土器が比較的多い。

早期前・中葉（2 ～ 8）撚糸文土器は、2 ～ 6 を含めて、口縁部破片が 31 点ある。そのうち、撚糸文施文は 19 点、縄文施文は 12 点で、口唇に施文をもつのは 3 のみである。夏島式が中心であろう。7･8 は沈線文土器である。このほか、概ねこの時期のものと思われる無文口縁部 2 点がある。

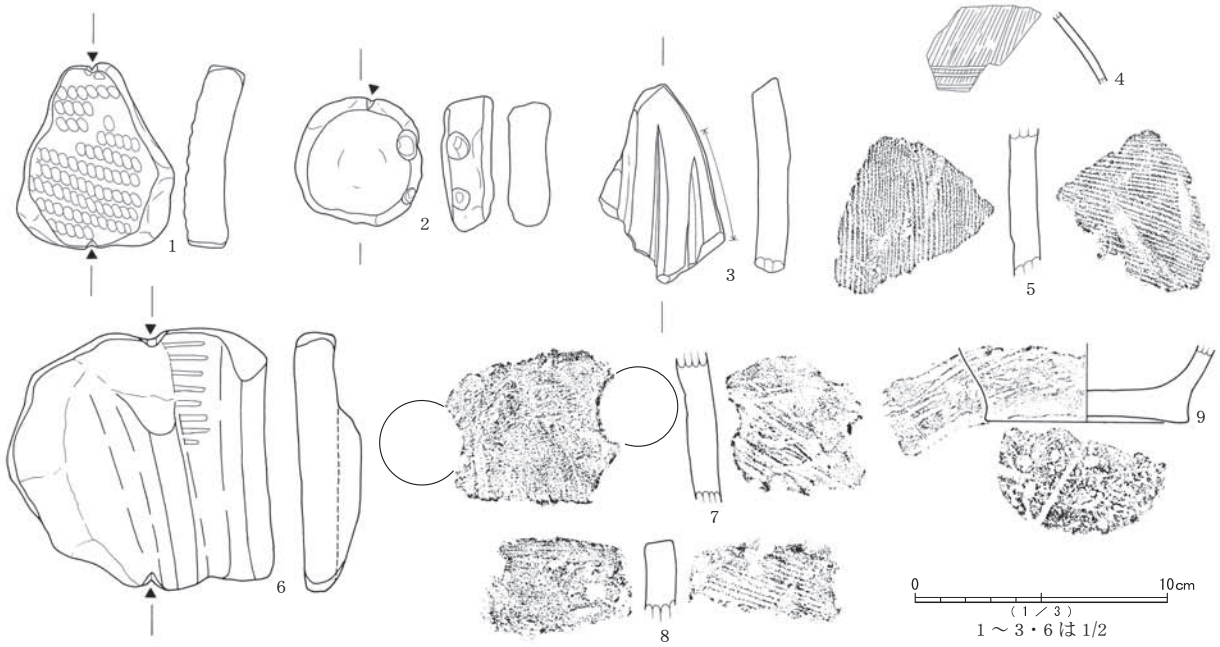
早期後葉　掲載資料はないが、口縁部 4 点、胴部 26 点がある。口唇上に刻みをもつもの 2 点、押引文区画内に刺突をもつもの 1 点、沈線意匠をもつもの 1 点から、鵜ヶ島台式が中心であろう。無文部の条痕は弱いものが多く、内面はナデや擦痕のものの方がやや多い。

前期中葉　掲載資料はないが、縄文を施文した繊維土器が 33 点ある。円形刺突をもつ口縁をはじめ黒浜式が中心であろう。

前期後葉（9 ～ 12）　縄文をもたない浮島・興津式系の土器は 49 点ある。三角文の胴部 12 点、貝殻腹縁文 8 点、波状沈線 7 点、爪形文・変形爪形文 6 点などがある。 9 は沈線意匠文をもつ小型の浅鉢である。縄文をもつ諸磯式は 14 点あり、爪形文をもつもの 7 点が目立つ。



第 151 図　遺構外出土遺物（瓦）実測図



第 152 図　遺構外出土遺物（土器・土製品）実測図

第 8 表　瓦観察表

図	番号	種別	遺存	色調 凸面／凹面	胎土	焼成	寸法 cm	凹面	凸面	端面・側面	瓦当部
151	1	軒丸瓦	小片	7/4にぶ黄橙～ 7.5YR6/4にぶ橙／ 2.5Y5/2暗灰黄	精緻	良好	長軸(6.8)・短軸(6.4)・厚さ3.5	ナデ	瓦当部への充填部接合面に布目が残る	－	蓮華文が1/4ほど残る
151	2	丸瓦（有段）	1/3	5/3にぶ黄褐～6/3にぶ黄橙／ 5/3にぶ黄褐～6/3にぶ黄橙	精緻 砂粒は目立たない	良好	長軸（19.6）・短軸(12.4)・厚さ1.8～2.1	布目圧痕（精粗2種類の目が認められる） 段部：ヘラケズリ時に支持した痕と見られる指紋が残る	ナデ 段部：ヨコナデ 顎部稜が損壊しており使用状況を示すと思われる	切断面および各稜がヘラケズリ・面取りされる	－
151	3	丸瓦	1/4	2.5Y5/2暗灰黄～ 2.5Y5/3黄褐／ 2.5Y5/3黄褐～ 2.5Y5/2暗灰黄	密	良好	長軸（11.1）・短軸(7.8)・厚さ1.4	布目圧痕	ナデ	小口面・内面稜がヘラケズリ・面取りされる	－
151	4	丸瓦	小片	2.5Y5/2暗灰黄～ 2.5Y5/1黄灰／ 2.5Y5/2暗灰黄～ 2.5Y5/1黄灰	密	良好 （硬質）	長軸(8.7)・短軸(5.8)・厚さ1.6	布目圧痕 端部付近に指紋が残る	ナデ	ヘラケズリ・凹面側稜は面取りされる	－
151	5	丸瓦（有段）	小片	6/3にぶ黄橙～6/4にぶ黄橙／2.5Y6/3にぶ黄	精緻	良好	長軸(6.9)・短軸(5.8)・厚さ2.0	布目圧痕（縦位のしわが目立つ）	ナデ	小口面と側縁内面稜がヘラケズリ・面取りされる	－
151	6	平瓦	小片	2.5Y6/2灰黄／ 2.5Y7/2灰黄～ 2.5Y6/2灰黄	密	良好	長軸（8.8）・短軸(8.4)・厚さ2.3	布目圧痕	格子圧痕（長方形に近い）	側縁を3単位ヘラケズリする	－
151	7	平瓦	小片	7.6YR6/4にぶ橙～ 7.5YR6/6橙／ 7.5YR5/4にぶ褐～ 7.5YR6/6橙	密 ～4mmの砂粒が混じる	良好	長軸(6.6)・短軸(5.2)・厚さ(2.0)	剥落	格子圧痕（大ぶりな平行四辺形）	側縁がヘラケズリされる	－
151	8	平瓦	小片	2.5Y4/1黄灰～ 5Y3/1オリーブ黒（光沢）／5Y3/1オリーブ黒（光沢）	密	良好 （硬質）	長軸（5.8）・短軸4.7)・厚さ1.7	布目圧痕（布の縁が認められる）	縄目圧痕	ヘラケズリ	－
151	9	平瓦	小片	5YR6/6橙～5YR5/6明赤褐／ 5/4にぶ黄褐～ 7.5YR5/4にぶ褐	密	良好	長軸(5.9)・短軸(5.7)・厚さ2.4	布目圧痕	縄目圧痕	－	－
151	10	平瓦	小片	2.5Y4/1黄灰～ 2.5Y5/1黄灰／ 2.5Y4/1黄灰～ 2.5Y5/1黄灰	密	良好 （硬質）	長軸(7.2)・短軸(6.5)・厚さ1.8～2.4	布目圧痕（布の縁が認められる）	縄目圧痕（端部付近はヘラケズリで消えかけている）	端面と内外面の少しの範囲がヘラケズリされる	－
151	11	平瓦	小片	5/3にぶ黄褐～6/3にぶ黄橙／5/3にぶ黄褐	密	良好	長軸(6.7)・短軸(5.9)・厚さ2.6	布目圧痕（精粗2種類の目が認められる）	縄目圧痕	側縁を3単位ヘラケズリする（凸面側ほど幅がある）	－
151	12	平瓦	小片	7.5YR5/4にぶ褐～ 7.5YR6/6橙／ 7.5YR5/4にぶ褐	密	良好	長軸(8.1)・短軸(8.0)・厚さ2.4	剥落が進む 布目圧痕?	縄目圧痕	－	－

中期初頭（13 ～ 15） 五領ヶ台式の有文口縁４点、結節回転文をもつ縄文施文の胴部などがある。
中期前葉（16・17） 阿玉台Ⅱ式・Ⅲ式が中心である。17 はこの時期の異系統の土器であろうか。
中期中･後葉（1･18 ～ 20） キャリパー型深鉢口縁７点、胴部 19 点を中心として、連弧文系、曽利系、微隆帯区画の土器などが少し混じる。加曽利Ｅ式前半（Ⅱ式）と後半（Ⅲ式）に明らかに跨っている。１は加曽利ＥⅡ式ないしⅢ式のキャリパー型深鉢で、全体の一部が出土している。
後期・晩期（21 ～ 24） 堀之内式２点、加曽利Ｂ式 12 点、後期安行～晩期安行式８点がある。

瓦（第 151 図､第８表） 整理用コンテナ１箱程度の瓦片が検出されている。１が軒丸瓦､２～５が丸瓦、６～ 12 が平瓦である。いずれも小片であり、本遺跡と上総国分僧寺の距離を考えると意外な感もあるが、この出土規模は、古代において調査区付近が周辺的な様相にあったことを反映しているものと思われる。墳墓と見られる 210 号方形周溝状遺構の存在も、そのような脈絡にあるのかもしれない。

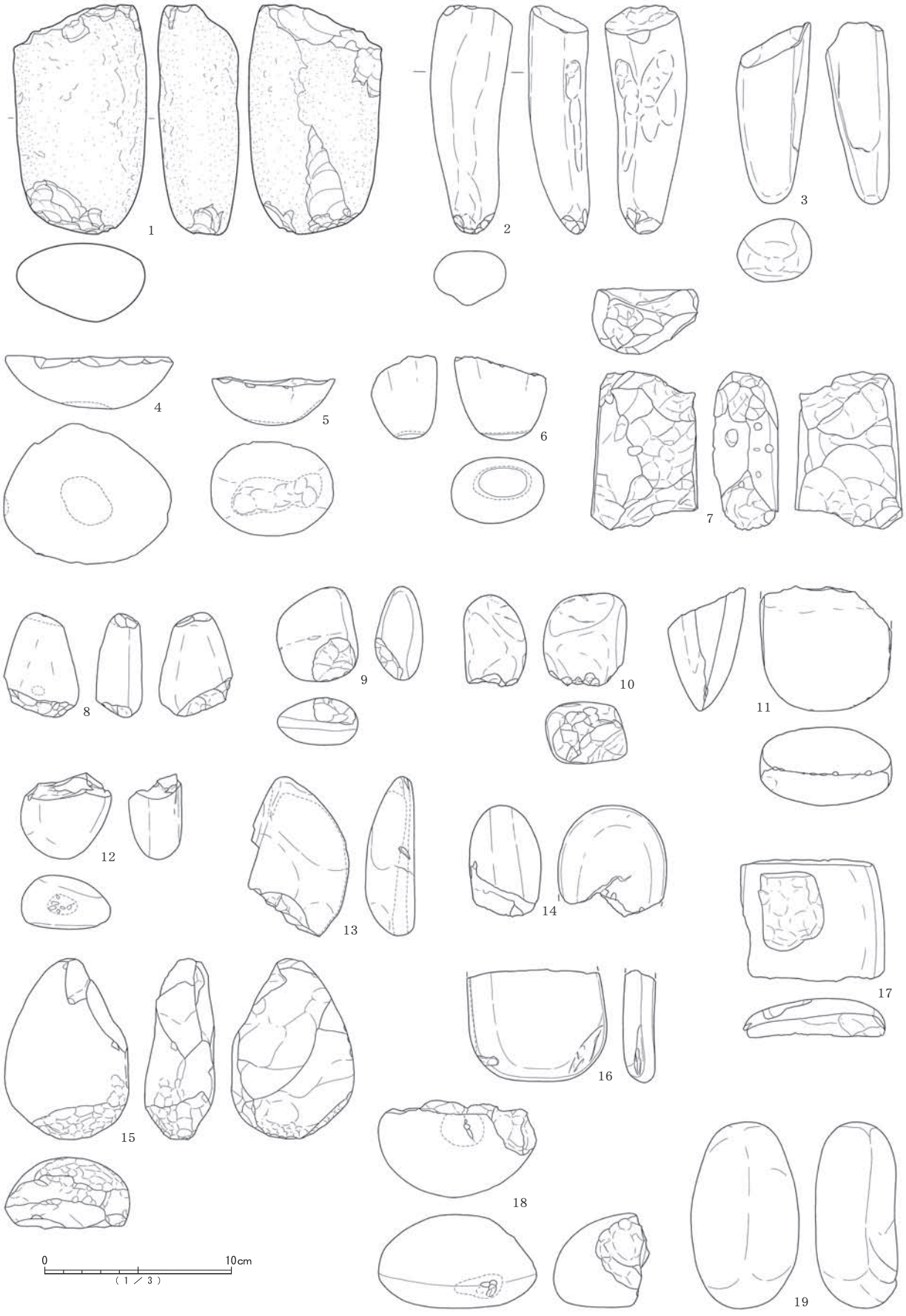
土製品（第 152 図） 1･2･6 は土器片を転用した土器片錘、３は土器片の周囲を利用した砥石である。６は阿玉台式土器の口縁部片を転用している。５は縦ハケの埴輪片、７は径約 3cm の円形透孔２箇所の穿たれる埴輪片、８はおそらく形象埴輪の板状部片である。９は無節Ｌによる撚糸文が底部付近に施された土器で、黒変と炭化物の付着から深鉢と見られる。弥生時代後期臼井南式に似る。４は根田代遺跡５号墳に混入していたＳ字状口縁台付甕の破片で、胎土分析を行ったために図を掲載した。非在地産胎土の可能性が高い（ランク D）という結果である。

石製品（第 153 ～ 156 図） 第 153 図１～３は縄文時代の打製石鏃である。１が玉髄、２が頁岩、３が黒曜石製である。いずれもいわゆる凹基無茎鏃で、断面紡錘形の均整のとれた形状を呈する。３は返しを欠損する。13 は不明であるが、石鏃の破片の可能性が強い。４～ 28 は加撃痕のある剥片類で、材質は、珪質頁岩（5・19）・砂岩（6）・ホルンフェルス（7）・チャート（8・9・21・22・24）・玉髄（10・15・18）・黒曜石（11・12・14・16・17・20）・無斑晶質ガラス質安山岩（13）・デイサイト（25・27）・瑪瑙（23・26）・流紋岩（28）である。このうち７は RF である。背面に自然面を残す長さ８㎝近くの剥片を素材とし、両側縁に不連続で粗雑な加工痕が観察される。スクレイパーへの加工を意図したものか。８は縄文時代の礫器である。円礫の一端に集中的に加撃し、刃部を作出する。８の自然面には敲打痕が３カ所存在するが、いずれも弱く不明瞭である。６は弥生時代竪穴住居跡に由来すると見られる打製刃器である。断面楔形を呈する扁平縦長の礫を素材とし、一端を打ち欠いて平坦面を作出し、薄くなった縁辺へ両側から調整を加える。石材はややもろく、新しい欠損もみられる。10 は火打ち石の可能性が高い。

第 154 図１～ 19 は、長軸端や側縁に敲打痕・磨滅痕のある礫および石製品である。１は磨石類で、主として敲打痕が観察される。平面長楕円形の礫の一端に、集中的に敲打を行う。敲打面はかなり顕著で剥離痕が集中する。２は断面楕円形の細長い礫の一端が著しく摩耗しており、押圧剥離を行ったものと考えられる。11 は太型蛤刃石斧の刃部片である。小さな刃こぼれが観察されるが、研磨は丁寧である。弥生時代中期に由来する可能性のある 11 を除き､縄文時代に属するものと思われる。材質は、ホルンフェルス（1）・火山礫凝灰岩（2・7）・砂岩（3・4・5・11・15・17）・輝緑岩（6）・石英斑岩

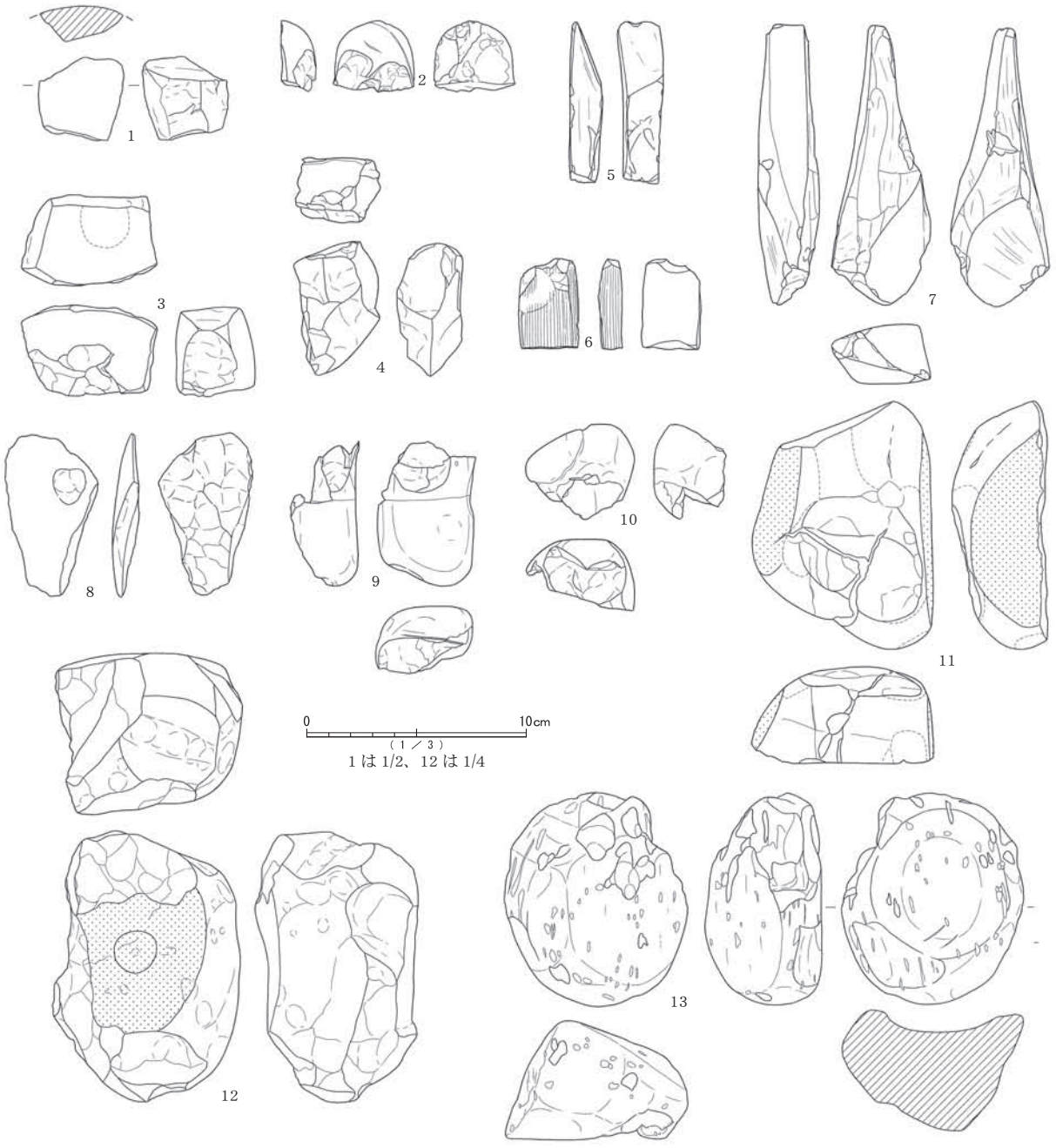
1 ～ 3・28'・28" は等倍
4・5・9 ～ 20・22・26 ～ 28 は 1/2

第 153 図　遺構外出土遺物（石器）実測図



第 154 図　遺構外出土遺物（石器）実測図

第 155 図　遺構外出土遺物（石器）実測図



第 156 図　遺構外出土遺物（石器）実測図

(8・18)・チャート（9・10・12)・ひん岩（13)・輝石安山岩（14)・砂岩ホルンフェルス（16)・菫青石ホルンフェルス（19）である。

第 155 図 1 ～ 16 も敲打痕・磨滅痕の見られる礫および石製品である。材質は、変質安山岩（1)・ホルンフェルス（2)・砂岩（3・4・6・8・9・11・13)・石英斑岩（5)・輝石安山岩（7・16)・安山岩（10)・輝緑岩（12)・チャート（14)・含玉髄流紋岩（15）である。15 は縄文時代の礫器である。

第 156 図 1 ～ 13 には、敲打痕・加撃痕・磨滅痕のあるものに加え、砥石状の研磨痕を示すものがある。13 は大ぶりの軽石で一面が丸く凹んでいる。7 の輝石安山岩製砥石は金属製利器を研いだように見受けられるので、弥生時代以降の所産と見られる。その他の材質は、凝灰岩（1)・瑪瑙（2)・砂岩（3・8・11)・玄武岩（4)・流紋岩（5・6・9・10)・輝石安山岩（7・12）である。

第 3 章　土器胎土の材料分析

藤根 久・長友純子（パレオ・ラボ）

第 1 節　はじめに

土器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の特徴から、これら砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定することは容易でない。

土器胎土は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料は比較的良質とも思える粘土層から採取されたことが、粘土採掘坑の調査から推察される（藤根・今村、2001）。

一方、混和材としての砂粒物は、これら粘土採取の際に粘土層の上下層に分布する砂層などを採取したことが予想される。東海地域には、弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器が知られているが、これら 3 分の 1 程度の土器では、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれるが（藤根、1998；車崎ほか、1996）、これら火山ガラスは、粘土採取の際に上下層に分布したと思われるテフラ層と予想される。このように、胎土中の混和材は、地層の特徴である可能性が高く、現河川砂とは大きく異なることから、現在の河川砂との比較では問題が大きい。こうしたことから、以前に堆積した段丘堆積物の砂層などとの比較検討が必要と思われる。

土器胎土については、第一に土器に使用した粘土や混和材がどのような特徴を持つかを十分理解することが重要であり、こうした特徴を持つと思われる粘土層や砂層などと比較検討すべきと考える。

ここでは、長平台遺跡から出土した弥生時代の土器を対象に、これら胎土の粘土および砂粒物の特徴について薄片の偏光顕微鏡観察を行って調べた。

第 2 節　試料と方法

試料は、長平台遺跡から出土した土器 43 試料、比較試料として加茂遺跡 C 地点から出土した土器 3 試料、大山台遺跡から出土した土器 8 試料の合計 54 試料である（第 10 表）。

これら土器は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片を作成した。

(1) 試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。

(2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着した。

(3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ 0.02mm 前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

試料は、薄片全面について微化石類（珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子などの特徴について観察・記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。

［放散虫化石］

放散虫は，放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で，その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は，海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中によく見られる。

［骨針化石］

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において 23 種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

［珪藻化石］

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは 10 ～数百μ m 程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉（1988）や安藤（1990）によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（淡水種）と分類し、同定できないものは珪藻化石（不明種）とした。なお、各胎土中の珪藻化石は、その詳細を記載した。

［植物珪酸体化石］

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約 10 ～ 50 μ m 前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

［胞子化石］

胞子化石は、珪酸質と思われる直径 10 ～ 30 μ m 程度の小型無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

［石英・長石類］

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類（雲母）は、黄色などの細粒雲母類が包含される石英または長石類である。

［長石類］

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などの SiO_2% の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

［雲母類］

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などの SiO_2% の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

［輝石類］

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO_2% が少ない深成岩、SiO_2% が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主として SiO_2% が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO_2% の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。なお、粒子の周囲にガラスが付着し、胎土中にガラス質を伴う場合にはテフラ起源と考える。

［角閃石類］

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような SiO_2% が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。なお、粒子の周囲にガラスが付着し、胎土中にガラス質を伴う場合にはテフラ起源と考える。

［ガラス質］

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。なお、濁ガラスは、非晶質でやや濁りのあるガラスで、火山岩類などにも見られる。

［斑晶質・完晶質］

斑晶質は斑晶（鉱物の結晶）状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるもの、完晶質は、ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごく僅かのものをいう。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い。

［凝灰岩質］

凝灰岩質は、ガラスや鉱物、火山岩片などの火山砕屑物などから構成され、非晶質でモザイックな文様構造を示す。起源となる火山により鉱物組成は変わる。

［複合鉱物類］

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類（含雲母類）、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類（含輝石類）、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類（角閃石類）とした。

［複合石英類］

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約 0.01mm 未満のものを微細、0.01 ～ 0.05mm のものを小型、0.05 ～ 0.1mm のものを中型、0.1mm 以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類（等粒）は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。なお、粒子が片理状に配置した岩石群は、片理複合石英類とした。これらは、片岩類起源の岩石群と思われる。

［砂岩質・泥岩質］

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約 0.06mm 以上のものを砂岩質とし、約 0.06mm 未満のものを泥岩質とする。

［不透明・不明］

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

第3節　結果

土器胎土中の微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物･岩石片の砂粒組成あるいは微化石類の記載を示す。なお、不等号は､概略の量比を示し､二重不等号は極端に多い場合を示す。また､[ ]内は極少ない場合である。

№1:150 μm～1.4mmが多い（最大粒径2.0mm)。石英･長石類〉複合石英類〉凝灰岩質､斜長石（双晶)、片理複合石英類、単斜輝石、角閃石類多い、ジルコン、雲母類、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属)、植物珪酸体化石

№2:100～400 μmが多い（最大粒径800 μm)。石英･長石類》複合石英類（微細)､斜長石（双晶)、斜方輝石、凝灰岩質、単斜輝石、ジルコン、角閃石類、ガラス質、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、*Actinocyclus* 属、淡水種 *Synedra ulna*、*Cymbella* 属)、骨針化石多産、植物珪酸体化石（ヨシ属含む)

№3：50～220 μmが多い、淡赤褐色粒子200～700 μmが多い（最大粒径1.0mm、淡赤褐色粒子1.5mm)。石英・長石類》斜長石（双晶)、斜方輝石、凝灰岩質、放散虫化石、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属多い)、骨針化石多産、植物珪酸体化石

№4:130 μm～1.25mmが多い（最大粒径2.2mm)。軽石型ガラス質》斜長石（双晶)〉石英･長石類、複合石英類（微細)、角閃石類多産、雲母類、ガラス質、放散虫化石、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属多い、*Actinocyclus* 属、不明種)、骨針化石多産、植物珪酸体化石

№5：100～600 μmが多い（最大粒径1.3mm)。石英・長石類〉斜長石（双晶)〉斜長石（双晶)〉軽石型ガラス質〉複合石英類（微細)、斜長石（累帯)、凝灰岩質、角閃石類多産、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、*Actinocyclus* 属)、骨針化石多産、植物珪酸体化石

№6：90～800 μmが多い（最大粒径1.3mm)。複合石英類》石英・長石類〉雲母類、角閃石類、複合石英類（微細)、ジルコン、［凝灰岩質、ガラス質］、骨針化石、植物珪酸体化石

№7：60～700 μmが多い（最大粒径1.2mm)。石英・長石類〉複合石英類〉斜長石（双晶)、複合石英類（微細)、角閃石類、ジルコン、斜方輝石、放散虫化石、骨針化石多い、植物珪酸体化石

№8：50～500 μmが多い（最大粒径800 μm)。石英・長石類〉複合石英類〉斜長石（双晶)、複合石英類（微細)、角閃石類、斜方輝石、ガラス質、カリ長石（パーサイト)、凝灰岩質、雲母類、［斑晶質］、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、粘土塊中にも見られる)、骨針化石多産、胞子化石多産、植物珪酸体化石

№9：60～400 μmが多い（最大粒径2.2mm)。細粒砂質胎土。石英・長石類》複合石英類（微細)〉複合石英類、片理複合石英類、雲母類多産、砂岩質、角閃石類、ジルコン、単斜輝石、斜方輝石、植物珪酸体化石

№10:70～400 μmが多い（最大粒径700 μm)。やや砂質胎土。石英･長石類》複合石英類（微細)〉

複合石英類、凝灰岩質、雲母類、角閃石類、単斜輝石、斜方輝石、骨針化石、植物珪酸体化石

№11：130 ～ 700 μ m が多い（最大粒径 1.3mm）。軽石型ガラス質》斜長石（双晶）〉石英・長石類、角閃石類、複合石英類（微細）、雲母類、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属 /*Thalassiosira* 属、不明種多い）、骨針化石多い、植物珪酸体化石（ヨシ属含む）

№12：70 ～ 300 μ m が多い（最大粒径 500 μ m）。細粒砂質胎土。石英・長石類》複合石英類（微細）〉雲母類、斜長石（双晶）、ガラス質、角閃石類多い、凝灰岩質、骨針化石多い、植物珪酸体化石

№13：100 ～ 750 μ m が多い（最大粒径 1.8mm）。複合石英類》石英・長石類〉斜長石（双晶）、ガラス質、雲母類、珪藻化石（淡水種 *Cymbella* 属）、骨針化石、植物珪酸体化石

№14：90 ～ 630 μ m が多い（最大粒径 750 μ m）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉斜長石（双晶）、複合石英類、雲母類、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属 /*Thalassiosira* 属、不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石

№15：80 ～ 500 μ m が多い（最大粒径 1.1mm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉斜長石（双晶）、凝灰岩質、角閃石類、斜方輝石、［斑晶質］、単斜輝石、ガラス質、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属 /*Thalassiosira* 属多い、不明種）、骨針化石多い、胞子化石、植物珪酸体化石

№16：60 ～ 350 μ m が多い（最大粒径 1.3mm）。石英・長石類〉複合石英類〉複合石英類（微細）、雲母類多産、角閃石類多い、単斜輝石、ジルコン多い、植物珪酸体化石

№17：120 ～ 400 μ m が多い（最大粒径 1.2mm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉複合石英類、斜長石（双晶）、角閃石類、ジルコン多い、［ガラス質］、植物珪酸体化石（ヨシ属含む）

№18：120 ～ 700 μ m が多い（最大粒径 1.3mm）。石英・長石類〉複合石英類〉斜長石（双晶）、角閃石類、カリ長石（パーサイト）、凝灰岩質、植物珪酸体化石多産

№19：80 ～ 500 μ m が多い（最大粒径 750 μ m）。細粒砂質胎土。石英・長石類〉雲母類》複合石英類、斜長石（双晶）、複合石英類（微細）、角閃石類、単斜輝石、斜方輝石、ジルコン多い

№20：100 ～ 800 μ m が多い（最大粒径 1.3mm）。石英・長石類〉雲母類》複合石英類、複合石英類（微細）、角閃石類、ジルコン、［凝灰岩質］、植物珪酸体化石

№21：80 μ m 以下が主体（最大粒径 1.2mm）。石英・長石類、角閃石類、（淡水種 *Synedra ulna*、*Pinnularia* 属）、植物珪酸体化石多い

№22：100 ～ 750 μ m が多い（最大粒径 800 μ m）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉複合石英類、斜長石（累帯）、凝灰岩質、ガラス質、単斜輝石、斜方輝石、ジルコン、角閃石類、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属 /*Thalassiosira* 属、*Actinocyclus* 属、淡水種 *Pinnularia* 属、不明種多い）、骨針化石多産、植物珪酸体化石多い

№23：60 ～ 300 μ m が多い（最大粒径 600 μ m）。石英・長石類〉複合石英類〉複合石英類（微細）、斜長石（累帯）、角閃石類、単斜輝石、ジルコン、骨針化石、植物珪酸体化石

№24：70 ～ 350 μ m が多い（最大粒径 750 μ m）。細粒砂質胎土。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉複合石英類、斜長石（双晶）、凝灰岩質（斑晶質）、ガラス質、単斜輝石、斜方輝石、ジルコン、角閃石類、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属 /*Thalassiosira* 属）、骨針化石多産、植物珪酸体化石

№25：50 ～ 200 μ m が多い（最大粒径 500 μ m）。石英・長石類〉雲母類〉複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、ガラス質、単斜輝石、ジルコン、角閃石類、放散虫化石、珪藻化石（海水種

Coscinodiscus 属 /*Thalassiosira* 属）、骨針化石多産、植物珪酸体化石

№.26：70 ～ 350 μ m が多い（最大粒径 400 μ m）。石英・長石類〉 複合石英類、斜長石（双晶）、角閃石類、［複合石英類（微細）］、骨針化石、植物珪酸体化石

№.27：120 ～ 450 μ m が多い（最大粒径 700 μ m）。石英・長石類》複合石英類（微細）〉複合石英類、雲母類、角閃石類、ガラス質、［斑晶質］、放散虫化石、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属 /*Thalassiosira* 属、*Actinocyclus* 属、淡水種 *Pinnularia* 属、不明種）、骨針化石多産、植物珪酸体化石

№.28：80 ～ 600 μ m が多い（最大粒径 2.0mm）。石英・長石類〉 複合石英類、複合石英類、雲母類、角閃石類、［ガラス質］、単斜輝石、ジルコン多い、植物珪酸体化石

№.29：70 ～ 400 μ m が多い（最大粒径 800 μ m）。細粒砂質胎土。石英・長石類〉 雲母類》複合石英類（微細）、複合石英類、角閃石類、ジルコン多い、単斜輝石

№.30：60 ～ 500 μ m が多い（最大粒径 3.7mm）。細粒砂質胎土。石英・長石類〉 雲母類》複合石英類（微細）、複合石英類、角閃石類、ジルコン多い、単斜輝石

№.31：220 μ m ～ 1.0mm が多い（最大粒径 2.0mm）。斜長石（双晶）〉軽石型ガラス質〉石英・長石類、斜方輝石、雲母類、放散虫化石多い、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属 /*Thalassiosira* 属多い、*Actinocyclus* 属、不明種）、骨針化石多産、植物珪酸体化石

№.32：80 ～ 500 μ m が多い（最大粒径 1.0mm）。石英・長石類〉 複合石英類〉 複合石英類（微細）〉角閃石類、単斜輝石、雲母類、ジルコン、植物珪酸体化石

№.33：300 ～ 800 μ m が多い（最大粒径 1.8mm）。軽石型ガラス質〉 斜長石（双晶）〉 石英・長石類、角閃石類、放散虫化石多い、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属 /*Thalassiosira* 属多い、*Actinocyclus* 属、不明種）、骨針化石多産、植物珪酸体化石

№.34：120 ～ 750 μ m が多い（最大粒径 1.3mm）。石英・長石類》複合石英類（微細）〉 ガラス質、斜長石（双晶）、単斜輝石、角閃石類、［凝灰岩質］、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属 /*Thalassiosira* 属多い、淡水種 *Pinnularia* 属、不明種）、骨針化石多産、胞子化石多い、植物珪酸体化石（ヨシ属）

№.35：100 ～ 700 μ m が多い（最大粒径 2.1mm）。石英・長石類〉 複合石英類〉 複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、［片理複合石英類］、単斜輝石、角閃石類、ジルコン多い、雲母類、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属、*Eunotia* 属）、植物珪酸体化石（ヨシ属含む）

№.36：80 ～ 300 μ m が多い（最大粒径 750 μ m）。石英・長石類〉 複合石英類、複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、角閃石類、斜方輝石、単斜輝石、雲母類、骨針化石、植物珪酸体化石

№.37：50 ～ 350 μ m が多い（最大粒径 700 μ m）。石英・長石類》複合石英類（微細）、複合石英類、雲母類、角閃石類、ジルコン多い、雲母類、凝灰岩質、珪藻化石（淡水種 *Cymbella* 属、不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石（イネ頴珪酸体含む）

№.38：80 ～ 750 μ m が多い（最大粒径 1.3mm）。石英・長石類〉 複合石英類（微細）〉 複合石英類、斜長石（双晶）、ガラス質、軽石型ガラス質、単斜輝石、角閃石類、凝灰岩質、斜長石（累帯）、放散虫化石、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属 /*Thalassiosira* 属多い、*Stephanopxis* 属、不明種）、骨針化石多産、胞子化石、植物珪酸体化石

№.39：60 ～ 250 μ m が多い（最大粒径 750 μ m）。石英・長石類〉 複合石英類（微細）〉（複合石英類）、斜長石（双晶）、斜方輝石、単斜輝石、角閃石類、凝灰岩質、骨針化石多い、胞子化石、植物珪

酸体化石

№40：120 ～ 800 μ m が多い（最大粒径 1.8mm）。石英・長石類〉複合石英類〉複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、軽石型ガラス質、ガラス質、凝灰岩質、斑晶質、角閃石類、放散虫化石、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属 /*Thalassiosira* 属、不明種）、骨針化石多い、植物珪酸体化石（ヨシ属含む）

№41：90 ～ 400 μ m が多い（最大粒径 700 μ m）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉斜長石（双晶）、斜長石（累帯）、ガラス質、雲母類多い、角閃石類、ジルコン多い、放散虫化石、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属 /*Thalassiosira* 属）、骨針化石多い、植物珪酸体化石

№42：70 ～ 750 μ m が多い（最大粒径 1.2mm）。斜長石（双晶）〉石英・長石類〉斜長石（累帯）、角閃石類多産、ガラス質多産、軽石型ガラス質多産、複合石英類（微細）、単斜輝石、[片理複合石英類]、凝灰岩質、骨針化石、植物珪酸体化石

№43：60 ～ 400 μ m が多い（最大粒径 750 μ m）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉複合石英類、泥岩質、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、単斜輝石、ガラス質、雲母類、角閃石類多産、凝灰岩質、骨針化石、植物珪酸体化石（イネ頴珪酸体含む）

№44：70 ～ 200 μ m が多い（最大粒径 750 μ m）。細粒質胎土。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉複合石英類、角閃石類多産、放散虫化石、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属 /*Thalassiosira* 属）、骨針化石多産、植物珪酸体化石

№45：50 ～ 250 μ m が多い（最大粒径 800 μ m）。粘土粒子（400 μ m ～ 1.2mm が多い）。石英・長石類〉斑晶質、[複合石英類]、珪藻化石（外洋指標種群 *Thalassionema nitzschiodes*、海水種 *Coscinodiscus* 属 /*Thalassiosira* 属）、骨針化石多い、植物珪酸体化石

№46：60 ～ 350 μ m が多い（最大粒径 750 μ m）。石英・長石類〉複合石英類、複合石英類（微細）、角閃石類、カリ長石（パーサイト）、骨針化石、植物珪酸体化石

№47：100 ～ 600 μ m が多い（最大粒子 700 μ m）。石英・長石類〉複合石英類（微細）―泥岩質〉雲母類、斜長石（双晶）、軽石型ガラス質、角閃石類、骨針化石、植物珪酸体化石

№48：60 ～ 600 μ m が多い（最大粒子 1.4mm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉砂岩質、複合石英類、斜長石（双晶）、角閃石類、単斜輝石、放散虫化石、珪藻化石（陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys*）、骨針化石多い、植物珪酸体化石

№49：110 ～ 800 μ m が多い（最大粒径 1.3mm）。軽石型ガラス質〉斜長石（双晶）〉雲母類、石英・長石類、角閃石類、放散虫化石多い、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属 /*Thalassiosira* 属多い、*Actinocyclus* 属、不明種）、骨針化石多い

№50：80 ～ 500 μ m が多い（最大粒径 1.5mm）。軽石型ガラス質〉斜長石（双晶）〉複合石英類（微細）、斑晶質、角閃石類、単斜輝石、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属 /*Thalassiosira* 属）、骨針化石多い、植物珪酸体化石

№51：150 μ m ～ 1.0mm が多い（最大粒径 1.7mm）。軽石型ガラス質〉斜長石（双晶）〉複合石英類（微細）、斑晶質、角閃石類、凝灰岩質、骨針化石

№52：100 ～ 800 μ m が多い（最大粒径 1.2mm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉斜長石（双晶）、複合石英類、斑晶質、角閃石類、単斜輝石、砂岩質、ガラス質、軽石型ガラス質、雲母類、骨針化石多産

№53：70 ～ 750 μ m が多い（最大粒径 1.3mm)。石英・長石類〉複合石英類（微細)〉斜長石（双晶)〉褐色粒子〉凝灰岩質、軽石型ガラス質、角閃石類、単斜輝石、骨針化石多い、植物珪酸体化石
№54：90 ～ 300 μ m が多い（最大粒径 800 μ m)。石英・長石類〉複合石英類（微細)〉斜長石（双晶)、ガラス質、角閃石類、単斜輝石、凝灰岩質、雲母類、骨針化石、植物珪酸体化石

第４節　考察

ｉ）微化石類による材料粘土の分類

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、放散虫化石や珪藻化石または骨針化石などが検出された胎土がある。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が 10 ～数 100 μ m（実際観察される珪藻化石は大きいもので 150 μ m 程度)、骨針化石が 10 ～ 100 μ m 前後である（植物珪酸体化石が 10 ～ 50 μ m 前後)。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約 3.9 μ m 以下、シルトが約 3.9 ～ 62.5 μ m、砂が 62.5 μ m ～ 2mm である（地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981)。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。

なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれているものの、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した胎土は、微化石類により、a) 海成粘土を用いた胎土、b) 海－淡水成粘土を用いた胎土、c) 淡水成粘土を用いた胎土、d) 水成粘土を用いた胎土、e) その他粘土を用いた胎土、に分類した。以下では、分類された粘土の特徴について述べる。なお、海水種珪藻化石と淡水種珪藻化石が同時に含まれている場合には海－淡水成粘土とした。

a) 海成粘土を用いた胎土（19 胎土）

これら胎土中には、放散虫化石や海水種珪藻化石の破片が含まれていた。なお、骨針化石を多く含む胎土が多い。

この遺跡周辺は、市原台地と呼ばれ下総層群の木下層や姉崎層、常総粘土層、関東ローム層などが堆積するが、基盤層の海成層を反映して海成珪藻化石や骨針化石が含まれる場合が多い（藤根・今村、2002)。

土器材料として、いずれの地層粘土を利用したかは定かでないが、放散虫化石や海水種珪藻化石の出現や骨針化石の多産は在地材料の要素が高いと予想される。

b) 海－淡水成粘土を用いた胎土（5 胎土）

これら胎土中には、放散虫化石や海水種珪藻化石とともに明らかな淡水種珪藻化石の破片が含まれていた。なお、骨針化石を多く含む胎土が見られた。

c) 淡水成粘土を用いた胎土（5 胎土）

これら胎土中には、淡水種珪藻化石の破片が含まれていた。なお、骨針化石を含む胎土もある。

d) 水成粘土を用いた胎土（18 胎土）

これらの胎土中には、骨針化石や不明種珪藻化石が含まれていた。

e) その他粘土を用いた胎土（7 胎土）

これら胎土中には、水成起源を指標する珪藻化石や骨針化石は含まれていなかった。

ii）胎土中の砂粒組成による分類

ここで設定した複合鉱物類は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（第 11 表）。岩石の推定は、泥岩質や砂岩質あるいは複合石英類（微細）が堆積岩類、複合石英類が深成岩類、凝灰岩質が凝灰岩類、片理複合石英類が片岩類、斑晶質が火山岩類、軽石型ガラス質やガラス質がテフラ (火山噴出物) である。さらに、推定した起源岩石は、第 9 表の組み合わせに従って分類した。

最も多く見られた組成は、堆積岩類を主体とし深成岩類などを伴うＣｂ群である（20 胎土）。その他、

第 9 表　胎土中の岩石片の分類と組み合わせ

			第1出現群						
			A	B	C	D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	

深成岩類を主体として堆積岩類などを伴うＢｃ群（9 胎土）、堆積岩類を主体として凝灰岩類などを伴うＣｅ群（７胎土）、テフラを主体として堆積岩類などを伴うＧｃ群（６胎土）、深成岩類を主体として凝灰岩類などを伴うＢｅ群（３胎土）、テフラを主体としたＧ群（３胎土）、深成岩類を主体としたＢ群（２胎土）、深成岩類を主体としてテフラなどを伴うＢｇ群（２胎土）、凝灰岩類を主体としたＥ群（１胎土）である。なお、起源を推定する粒子を含まない胎土（１胎土）があった。

このうち、Ｇ群とＧｃ群は、角閃石類を伴う軽石を特徴的に多く含む。角閃石類を伴う軽石からなるテフラは、下総層群あるいは上総層群においては複数枚知られているが（町田・新井、2003）、現段階では同定は困難である。ただし、遺跡が立地する台地では、後期更新世の新期段丘堆積層や常総粘土層、姉崎層などが分布することから、箱根小原台テフラ（Hk-OP）や御岳第１テフラ（On-Pm1）など（町田・新井、前出）を検討してみる価値がある。

この地域では、土器の混和材料として、粘土材料となった地層中にテフラが複数枚含まれているこ

とから、在地材料の要素が高いと予想される。なお、テフラを主体とした砂粒組成では堆積岩類や凝灰岩類を伴うことから、これら堆積岩類や凝灰岩類も在地材料の要素を示すと思われる。

ⅲ）胎土材料の分類

粘土材料は、その種類が海成、海－淡水成、淡水成、水成、その他の５種類に分類された。また、砂粒は、Ｃｂ群、Ｂｃ群、Ｃｅ群、Ｇｃ群、Ｂｅ群、Ｇ群、Ｂ群、Ｂｇ群、Ｅ群の９群に分類された。

これらを総合的に分類するために、砂粒組成の分類に基づいて大きくⅠ～Ⅷ群に分類し、さらに材料粘土が海成粘土の場合には細分ａ、海－淡水成粘土の場合には細分ｂ、淡水成粘土の場合には細分ｃ、水成粘土の場合には細分ｄ、その他粘土が細分ｅとした。なお、Ｃｂ群とＢｃ群は同一群とした。

その結果、Ⅰｂ群が１胎土、Ⅱａ群が１胎土、Ⅱｃ群が１胎土、Ⅲａ群が３胎土、Ⅳａ群が１胎土、Ⅳｃ群が１胎土、Ⅳｄが１胎土、Ⅴａ群が１胎土、Ⅴｂ群が２胎土、Ⅴｄ群が４胎土、Ⅵａ群が４胎土、Ⅵｄ群が２胎土、Ⅶａ群が８胎土、Ⅶｂ群が２胎土、Ⅶｃ群が２胎土、Ⅶｄ群が 11 胎土、Ⅶｅ群が６胎土、Ⅷａ群が１胎土、Ⅷｅ群が１胎土であった。

これらのうち、Ⅲ群とⅥ群の軽石を特徴的に多く含む胎土は、同時に放散虫化石や外洋性珪藻化石を特徴的に含む。こうした胎土が海成粘土からなり、軽石を特徴的に含む土器群は、釜神遺跡の弥生時代後期の壺や鉢などにも見られたことから（藤根・今村、2002）、状況として在地材料を使用した可能性が高いと思われる。なお、大山台遺跡では、このⅢ群またはⅣ群の土器の出現頻度が高いことから、隣接地にこうした材料が調達できる場所があることも予想される。

Ⅰｂ群、Ⅱａ群、ⅤａおよびⅤｂ群、Ⅶａ群およびⅦｂ群、Ⅷａ群の土器群では、粘土部分に放散虫化石や海水種珪藻化石が含まれ、骨針化石が特徴的に多く含まれている胎土は、海成層が分布する地域の土器の粘土組成であると言える。先の軽石を含むⅢ群とⅥ群では、同様に海成粘土からなることから、在地材料としても問題ないと思われる。

ⅳ）その他の特徴

Ⅲ群とⅥ群の軽石を特徴的に多く含む胎土は、明らかにテフラ層中の軽石を混和材として用いていることを示している。これは、先に述べた東海地域に特徴的なパレススタイル土器は、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれる土器が知られているが（藤根、1998；車崎ほか、1996）、パレススタイル土器が祭祀に関係した土器群であることから意図的に利用したことが予想される。

長平台遺跡出土土器№.37 の甕、№.43 の壺の各胎土中には、イネの籾殻の表面に形成される珪酸質の突起物であるイネ頴珪酸体が確認された。これは、土器製作場においては灰質物を伴うことから、偶発的に混入したものと考えられる。なお、このことは、稲作の存在を裏付ける証拠でもある。

ここで示した胎土の粘土や砂粒の特徴から分類した一群は、製作地がいずれであるかは別として、類似した材料であることが分かる。このことは、ある工人が土器作りを行う場合、決まった場所の地層を採掘坑などにより採取したことが予想される。少なくとも、同一の材料である場合には、同一工人によって製作された土器である可能性も否定できない。

№.３や№.45 の土器では、肉眼的に褐色粒子が特徴的に多く見られた。これらは、顕微鏡で観察すると、やや褐色味が強いものの周辺の粘土部分と大きな違いがない。なお、№.８の胎土では、粘土粒

子内部に海水種珪藻化石が多く含まれていたことから、材料とした粘土材料中に十分溶けなかった粘土塊と考えられる。

ｖ）材料からみた在地要素

土器製作地の推定の第一は、胎土材料である粘土および砂粒組成の特徴から在地要素を抽出することである。ただし、前述したように例えば混和材として含まれるテフラが同定できた場合には、そのテフラの分布域が製作地の候補になるが、現時点ではその段階に至っていない。

ここでは、在地要素の高い微化石類または砂粒を抽出し、胎土材料に関するランク分けを行った。

微化石類は、粘土材料の分類で述べたように、海水種珪藻化石や放散虫化石の出現あるいは骨針化石の多産は、在地要素が高いと言える（ランクａ）。なお、これらの出現は同時的である場合が多いようであるが、同時的でない場合には在地要素がやや低いと考える（ランクｂ）。

一方、砂粒は、砂粒組成の分類で述べたように、軽石は在地要素の高い粒子と考える（ランクａ）。また、これに付随して出現した堆積岩類と凝灰岩類は、在地要素がやや高いと考える（ランクｂ）。

こうした微化石類のランク分けと砂粒のランク分けの組み合わせにより、土器胎土をＡ～Ｅの５段階にランク分けした。

すなわち、微化石類および砂粒が共にａである場合がランクＡ、微化石類または砂粒のいずれかがａの場合がランクＢ、微化石類および砂粒が共にｂの場合がランクＣ、微化石類または砂粒のいずれかがｂの場合がランクＤ、それ以外がランクＥである（第９表）。

ランクＡおよびＢは、在地材料である可能性がかなり高いと考えられるが、考古知見として非在地とされる土器である№３のパレス模倣壺、№７の壺、№22の鉢、№24の壺は、在地材料と判断された。また、考古知見として在地とされる土器である、比較試料の加茂Ｃ遺跡の№46の鉢などはランクＥの非在地材料と判断された。

第５節　おわりに

土器作りは、一般的に微化石類を良好に含むことから、相当良質の粘土層を利用したことが考えられる。遺跡周辺において、こうした土器材料として利用できる地層粘土の分布はある程度限定されることが予想される。また、砂粒もここで見られたような軽石のように特定のテフラであることからその分布も限定される。土器製作地の推定は、こうした材料が示す複数の特徴から推定することが必要であり、地層またはテフラ層といった分布範囲が製作地として定義されるものと考える。

今後、土器材料として利用できる粘土層の広域的な調査が不可欠と考え、こうした粘土や砂粒の特徴と比較検討する事により、土器作りあるいは製作地などについての詳細が明らかになるものと考えている。なお、土器胎土中に混和された軽石などのテフラ起源粒子についてはテフラ同定を行うことで製作地の範囲を定義できる可能性がある。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42,2,73-88.
地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）『増補改訂 地学事典』，平凡社，1612p.
藤根　久（1998）東海地域（伊勢－三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料．第６回東海考古学フォーラム岐阜大会、土器・墓が語る、108-117.
藤根　久・今村美智子（2001）第３節　土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴．「波志江中宿遺跡」．日本道路公団・伊勢崎市・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団、262-277.
藤根　久・今村美智子（2002）3. 甕・壺・鉢の胎土材料．財団法人市原市文化財センター調査報告書第 76 集「釜神遺跡」．市原市・財団法人市原市文化財センター、441-463.
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27,1-20.
車崎正彦・松本　完・藤根　久・菱田　量・古橋美智子（1996）(39) 土器胎土の材料－粘土の起源を中心に－．日本考古学協会第 62 回大会研究発表要旨、153-156.
町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－．東京大学出版会、336p.

第 10 表　胎土分析を行った試料

遺跡	No.	遺構番号	図	番号	遺　物	備　考	肉眼的特徴	遺跡	No.	遺構番号	図	番号	遺　物	備　考	肉眼的特徴
長平台	1	008	26	23	複合口縁壺	非在地		長平台	28	012	20	29	甕	(非在地)	細粒質胎土
	2	009	26	17	パレス模倣壺				29	010	29	4	壺	(非在地)	細粒質胎土
	3	289	135	4	パレス模倣壺	(非在地)	淡赤褐色粒子が特徴的に多い		30	057	76	3	パレス壺	(非在地)	細粒質胎土
	4	202	99	2	大型壺		軽石多く含む		31	288	122	1	壺		軽石多く含む
	5	201	95	2	大型壺		軽石多く含む	根田代	32	混入	152	4	Ｓ字甕	非在地	
	6	289	136	8	二重口縁壺	(非在地)		長平台	33	072	67	3	壺		軽石多く含む
	7	289	136	7	壺	(非在地)			34	022	37	13	高杯		
	8	288	121	7	手焙				35	205	106	6	パレス小片	非在地	
	9	010	29	1	パレス模倣壺	非在地	細粒質胎土		36	014	32	21	Ｓ字甕小片		
	10	遺構外	148	17	パレス模倣壺		細粒質胎土		37	203	100	15	無文壺白い土	非在地	
	11	012	21	14	大型壺		軽石多く含む		38	001	14	15	甕	(在地)	
	12	028	45	26	甑				39	014	32	15	Ｓ字甕		
	13	288	127	23	パレス壺	非在地			40	072	67	5	後期前半甕		
	14	遺構外	148	14	装飾壺				41	205	105	10	内弯口縁大型壺		
	15	遺構外	148	13	装飾壺				42	201	94	2	壺口縁		
	16	288	130	14	パレス壺	非在地			43	014	32	26	口縁内面取鉢		
	17	遺構外	148	15	パレス壺	(非在地)		加茂Ｃ地点	44	方形墓			壺		黄褐色粒子が多い
	18	288	132	6	高杯	非在地			45	方形墓			高杯		褐色粒子含む
	19	288	129	2	壺	非在地	細粒質胎土		46	方形墓			鉢		淡褐色粒子が特徴的に多い
	20	288	131	5	壺	非在地		大山台	47	14号		14	壺		
	21	046	65	10	壺	非在地	赤褐色粒子含む		48	14号		32	甕		
	22	029	47	11	鉢	(非在地)			49	20号		17	壺		
	23	010	30	12	壺	(非在地)			50	49号		1	壺		
	24	205	105	4	壺	(非在地)			51	49号		2	壺		軽石多く含む
	25	046	65	6	鉢		細粒質胎土		52	49号		18	甕		
	26	014	32	23	甕	(非在地)			53	56号		2	壺		褐色粒子含む
	27	012	20	26	壺		赤褐色粒子多く含む		54	66号		6	甕		褐色粒子多く含む

第 11 表　土器胎土中の粘土と砂粒の特徴

遺跡	分析No.	遺構番号	図	番号	遺物種別	粘土の特徴						砂粒の特徴							鉱物の特徴					その他の特徴	分類	在地・非在地	
						種類	放散虫化石	海水種珪藻化石	淡水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	分類	堆積岩類	深成岩類	凝灰岩類	火山岩類	片岩類	テフラ	ジルコン	角閃石類	輝石類	雲母類	植物珪酸体化石			考古所見	ランク
長平台遺跡	1	008	26	3	複合口縁壺	淡水成			△			Ｂｅ		○	△		△		△	◎	△	△	△		Ⅳｃ	非在地	E
	2	009	26	17	パレス模倣壺	淡-海水成		○	△		◎	Ｃｅ	○		△			△	△	△	△		○		Ⅴｂ		B
	3	289	135	12	パレス模倣壺	淡-海水成	△		○		◎	Ｅ			△					△	△		○	肉眼的淡赤褐色粒子が特徴的に多い	Ⅰｂ	(非在地)	B
	4	202	99	2	大型壺	海　成	△	○		△	◎	Ｇｃ	△					◎		◎		△	○	軽石多い	Ⅵａ		A
	5	201	95	2	大型壺	海　成		△			◎	Ｇｃ	△					◎		◎			△	軽石多い	Ⅵａ		A
	6	289	136	8	二重口縁壺	水　成					○	Ｂｃ	△	◎	△			△	△	△		△	△		Ⅶｄ	(非在地)	C
	7	289	136	7	壺	海　成	△				○	Ｂｃ	△	○				△	△	△	△	△	△		Ⅶａ	(非在地)	B
	8	288	121	7	手焙形	海　成		△			◎	Ｃｂ	○	○	△	△		△	△	△	△	△	○	海水種珪藻化石含む粘土塊	Ⅶａ		B
	9	010	29	1	パレス模倣壺	その他						Ｃｂ	○	△			△		△	△	△	◎	△	細粒砂質胎土	Ⅶｅ	非在地	D
	10	遺構外	148	17	パレス模倣壺	水　成					△	Ｃｂ	○	△				△		○	△	△	△		Ⅶｄ		D
	11	012	21	14	大型壺	海　成		△			○	Ｇｃ	△					◎		○	△	△	△	軽石多い	Ⅵａ		B
	12	028	45	26	甕	水　成					○	Ｃｅ	○		△			△	△	○	△	△	△	細粒砂質胎土	Ⅴｄ		D
	13	288	127	23	パレス壺	淡水成			△		△	Ｂ		◎					○			△	○		Ⅱｃ	非在地	E
	14	遺構外	148	14	装飾壺	海　成		△		△	◎	Ｃｂ	○	△								△			Ⅶａ		B
	15	遺構外	148	13	装飾壺	海　成		○		△	○	Ｃｅ	○		△	△		△		△	△		○		Ⅴａ		B
	16	288	130	14	パレス壺	水　成					△	Ｂｃ	△	○					○	△	△	◎	△		Ⅶｄ	非在地	E
	17	遺構外	148	15	パレス壺	水　成					○	Ｃｂ	○	△				△	○	△			○		Ⅶｄ	(非在地)	C
	18	288	132	6	高杯	水　成					△	Ｂｅ		○	△					△			◎	植物珪酸体化石極多産	Ⅳｄ	非在地	E
	19	288	129	2	壺	その他						Ｃｂ	△	△					○	△	△	◎		細粒砂質胎土	Ⅶｅ	非在地	D
	20	288	131	5	壺	その他						Ｂｃ	△	○	△				△	△		◎	△		Ⅶｅ	非在地	E
	21	046	65	10	壺	淡水成			△			－								△			○	細粒シルト質胎土	－	非在地	E
	22	029	47	11	鉢	淡-海水成		△	△	○	◎	Ｃｂ	○	△	△				△	△	△		○		Ⅶｂ	(非在地)	B
	23	010	30	12	壺	水　成					△	Ｂｃ	△	○					△	△	△		△		Ⅶｄ	(非在地)	E
	24	205	105	4	壺	海　成		△			◎	Ｃｂ	○	△	△			△	△	△	△		△	細粒砂質胎土	Ⅶａ	(非在地)	B
	25	046	65	6	鉢	海　成	△	△			◎	Ｃｇ	○					△	△	△	△		○		Ⅱａ		B
	26	014	32	23	甕	水　成					△	Ｃｂ	△	△						△			△		Ⅶｄ	(非在地)	D
	27	012	20	26	壺	淡-海水成	△	○	△	△	◎	Ｃｂ	○	△		△		△		△		△	△	赤褐色粒子含む	Ⅶｂ		B
	28	012	20	29	甕	その他						Ｂｇ		○				△	○	○	△		○		Ⅷｅ	(非在地)	E
	29	010	29	4	壺	その他						Ｃｂ	○	△					○	△	△	◎		細粒砂質胎土	Ⅶｅ	(非在地)	D
	30	057	76	3	パレス壺	その他						Ｂｃ	△	○					○	△	△	◎		細粒砂質胎土	Ⅶｅ	(非在地)	E
	31	288	122	1	壺	海　成	○	○		△	◎	Ｇ						◎		△	△	△	○	軽石多い	Ⅲａ		A
根田代遺跡	32	5号墳混入	152	4	Ｓ字甕	その他						Ｃｂ	○	△					△	△	△		△		Ⅶｅ	非在地	D
長平台遺跡	33	072	67	3	壺	海　成	○	○		△	◎	Ｇ						◎		◎			△	軽石多い	Ⅲａ		A
	34	022	37	13	高杯	淡-海水成		○	△	△	◎	Ｃｅ	○		△			△	△	△	△		○		Ⅴｂ		B
	35	205	106	6	パレス小片	淡水成			△			Ｂｃ	△	○			△		○	△	△	△	○		Ⅶｃ	非在地	E
	36	014	32	21	Ｓ字甕小片	水　成					△	Ｂｃ	△	○						△	△	△	△		Ⅶｄ		E
	37	203	100	15	無文壺白い土	淡水成			△	△	△	Ｃｂ	○	△	△				○	△		△	△	イネ顕珪酸体含む	Ⅶｃ	非在地	D
	38	001	14	15	甕（在地）	海　成	△	○		△	◎	Ｃｂ	○	△	△			△	△	△	△		○		Ⅶａ		B
	39	014	32	15	Ｓ字甕	水　成					○	Ｃｂ	○	△	△					△	△		△		Ⅶｄ		D
	40	072	67	5	後期前半甕	海　成	△	△		△	○	Ｂｇ	△	○	△			○		△			○	軽石含む	Ⅷａ		A
	41	205	105	10	内弯口縁大型壺	海　成	△	△			○	Ｃｂ	○	△				△		△		◎	△		Ⅶａ		B
	42	201	94	2	壺口縁	水　成					△	Ｇｃ	△		△		△	◎		◎	△		△	軽石多い、細粒質胎土	Ⅵｄ		B
	43	014	32	26	口縁内面取鉢	水　成					△	Ｃｂ	○	△	△			△		△	△	△	△	凝灰岩質胎土、イネ顕珪酸体含む	Ⅶｄ		D
加茂遺跡Ｃ地点	44	方形墳墓		1	壺	海　成	△	△			◎	Ｃｂ	○	△						△			△	淡褐色粒子が多い	Ⅶａ		B
	45	方形墳墓		3	高杯	海　成		△			○	Ｂｅ		△	△								△	粘土塊粒子含む	Ⅳａ		B
	46	方形墳墓		2	鉢	水　成					△	Ｂｃ	△	○						△			△	淡褐色粒子が特徴的に多い	Ⅶｄ		E
大山台遺跡	47	14号		14	壺	水　成					△	Ｃｅ	○		△			△		○		△	△	軽石含む	Ⅴｄ		D
	48	14号		32	甕	海　成	△				○	Ｃｂ	○	△						△	△		△		Ⅶａ		B
	49	20号		17	壺	海　成	△	○			○	Ｇ						◎		○				軽石多い	Ⅲａ		A
	50	49号		1	壺	海　成		△			○	Ｇｃ	△			△		◎		△	△	△	△	軽石多い	Ⅵａ		A
	51	49号		2	壺	水　成					△	Ｇｃ	△			△		◎		△				軽石多い	Ⅵｄ		B
	52	49号		18	甕	水　成					◎	Ｃｂ	○	△				△		△	△	△	△	軽石含む	Ⅶｄ		B
	53	56号		2	壺	水　成					○	Ｃｅ	○		△			△		△	△		△	軽石含む	Ⅴｄ		B
	54	66号		6	甕	水　成					△	Ｃｅ	○		△			△		△	△	△	△		Ⅴｄ		D

第 4 章　調査成果のまとめ

第 1 節　検出遺構の変遷

調査区内における最古の人為的痕跡は旧石器時代の石器である。1 区トレンチからは第 2 黒色帯付近の土層からナイフ形 1 点を含む石器が検出されている。遺構外出土石器を含めると、根田代遺跡に見られた石器文化と形状・技法で共通する点も指摘できる（第 2 章第 1 節）。

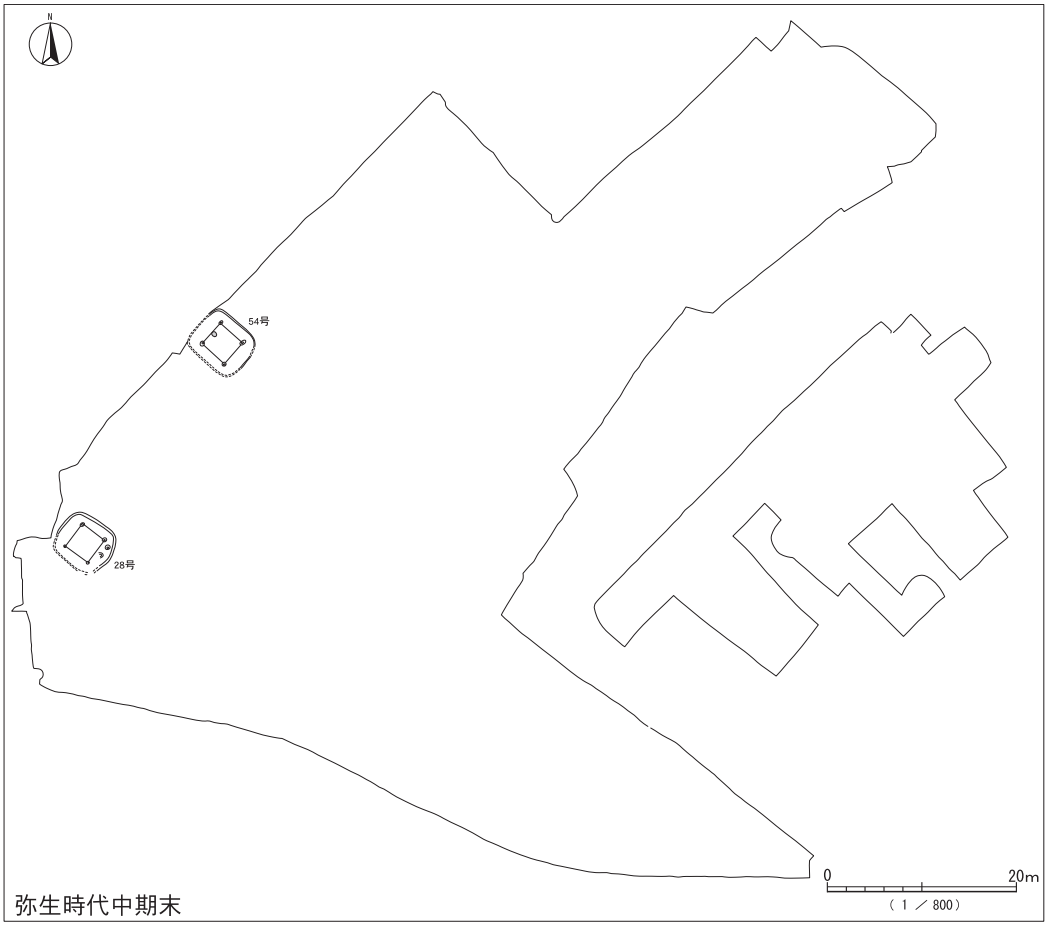
縄文時代前半期には 288 号墓北コーナー周辺のソフトローム上面に礫群が検出されている。この他、遺構はまったく検出されていないものの、各期の土器が少量ずつ出土している。傾向としては、早期前葉・前期後葉・中期中葉の土器が、若干多めに認められる（第 2 章第 4 節）。

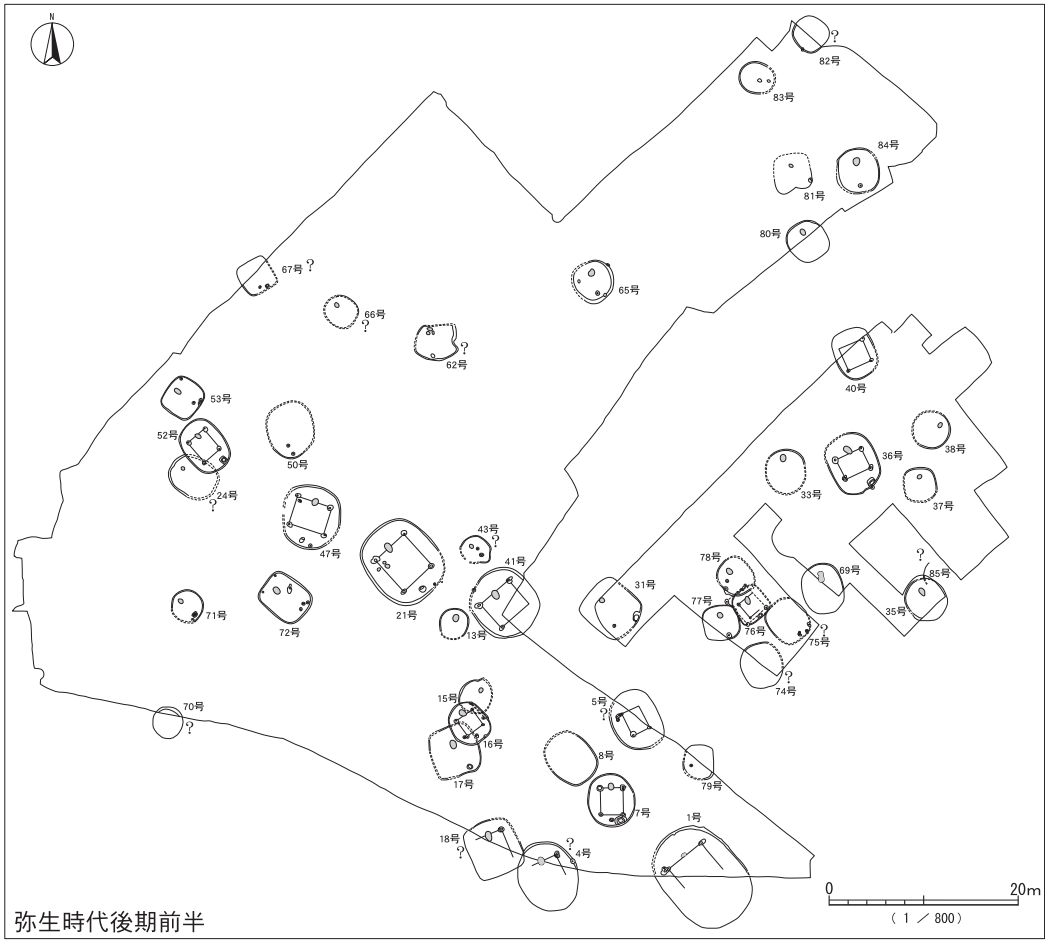
空白期を挟んで宮ノ台式期になると、28 号と 54 号の竪穴住居 2 棟が構築される（第 157 図上）。両遺構とも調査区の西寄りに位置し、御林跡遺跡方面に展開する居住域の一部を構成していた可能性が示唆される。出土遺物には、山形あるいは花綱状の構成を持ち、多段の結節文によって充填される文様の壺が認められ、加えて、底面に刳り込みの加えられる身の深い鉢も存在するので、両遺構とも宮ノ台式でも末葉に位置づけられる。続く弥生時代後期以降の居住域の先触れ的な存在と言えよう。

弥生時代後期前半の久ヶ原式期には、33 棟の竪穴住居が構築される（第 157 図下）。帰属する竪穴住居跡が検出総数 84 棟の 3 分の 1 以上にあたるこの時期は、確認された居住域の最盛期である。また、弥生時代後期中葉には方形周溝墓群が調査区北端に構築され始めるが、これら 3 基は後期前半の竪穴住居跡を切るため、215 号墓の位置以南に多い後期中葉以降の竪穴住居跡に関連する墓域と思われる。201 号墓中心埋葬施設からはガラス玉 14 点とともに帯状円環形銅釧片、周溝内埋葬施設 B と C からはそれぞれガラス玉 16 点と 1 点が出土している。各遺構周溝内からまとまって出土した土器群は、202 号墓→ 201 号墓→ 203 号墓の遺構変遷に基本的に従うと見られ、周溝内埋葬施設で細分すると、（202 号墓中心？→）201 号墓中心→ 201 号墓 C → 201 号墓 B → 201 号墓 A → 201 号墓 D → 203 号墓という先後関係が推定できる。ここで興味深いのは、202 号墓と 201 号墓 B 出土土器に共通する、多段結節文による充填縄文と沈線文による区画という文様構成である。これらは胎土も軽石状粒の多い特徴的なものであり、局地的な意味での非在地の雰囲気を伴う。203 号墓出土の壺に見られる区画文としての山形沈線文も通例とは異なり、また、充填が網目状文であることも同様に少数派である。おそらく、この時期に千倉町健田遺跡出土土器（玉口他 1977）に代表される安房地域の土器型式からもたらされた、諸要素あるいは土器そのものがあったのだろう（大村 2004a）。弥生時代後期後半に帯縄文の区画文が沈線文から結節文に変化する地域的な状況と関係がある現象なのかもしれない。なお、近在の御林跡遺跡南調査区（第 4 図）では、帯状円環形銅釧 5 個を装着した人物の埋葬された方形周溝墓が 2 基あり、遺構の類似した展開過程が認められる（木對 2004）。

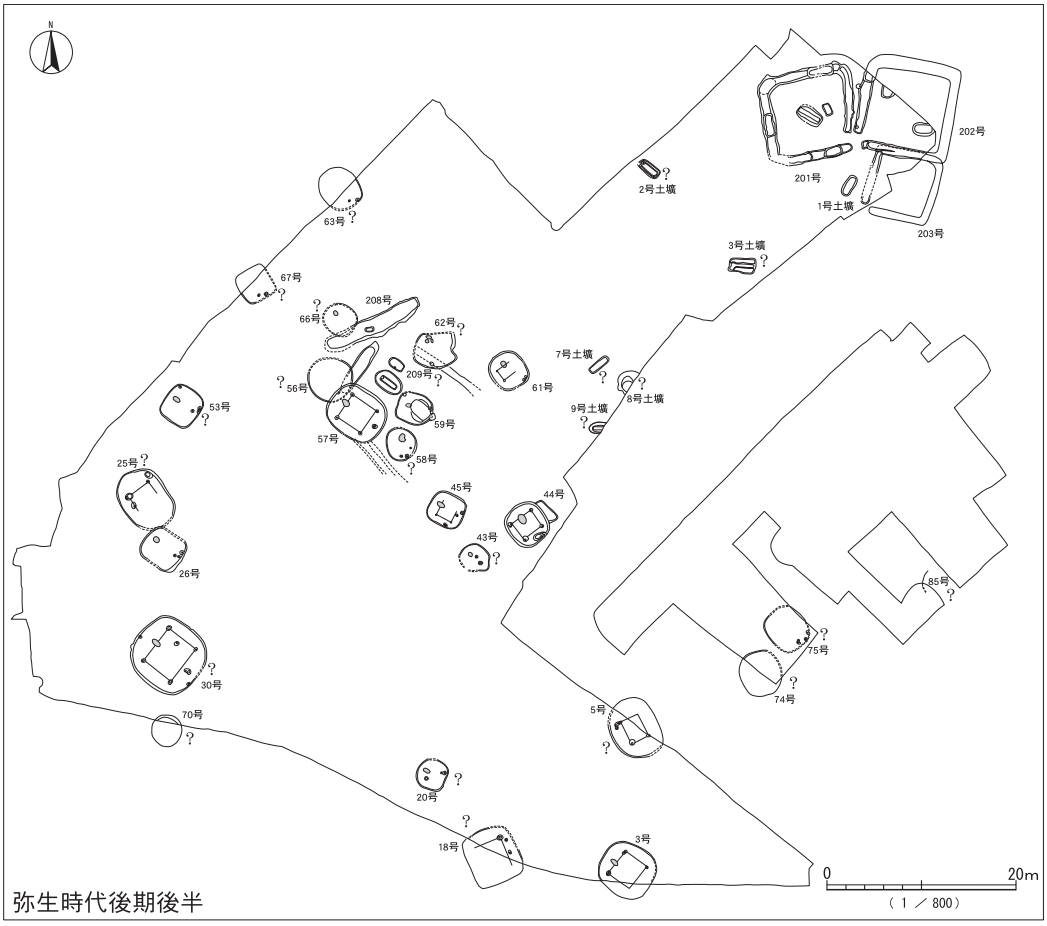
続く弥生時代後期後半の山田橋式期には 14 棟の竪穴住居が構築される（第 158 図上）。ただし、近接した時期の切り合い関係が少なく、細かい変遷は確定しがたい。方形周溝墓群の位置からすれば、この時期の居住域は南の台地縁辺側に重心があったと考えられる。

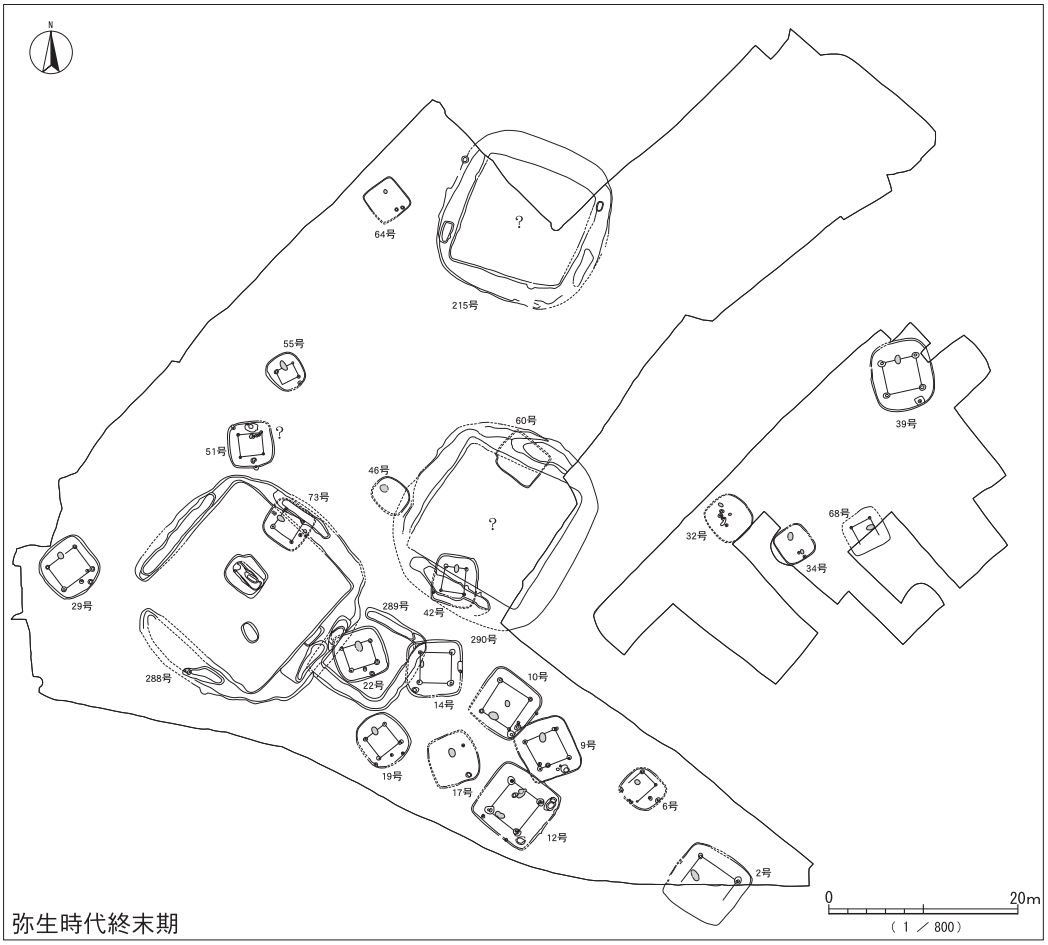
長平台遺跡周辺の弥生時代後期を大局的に見ると、村田川右岸台地上には千原台遺跡群、村田川下流左岸市原台地上には大厩遺跡群・菊間遺跡群、養老川下流右岸の市原台地には国分寺台遺跡群の他に郡本遺跡群・山田橋遺跡群・唐崎台遺跡等、養老川下流左岸の袖ケ浦台地には椎津茶ノ木遺跡・片



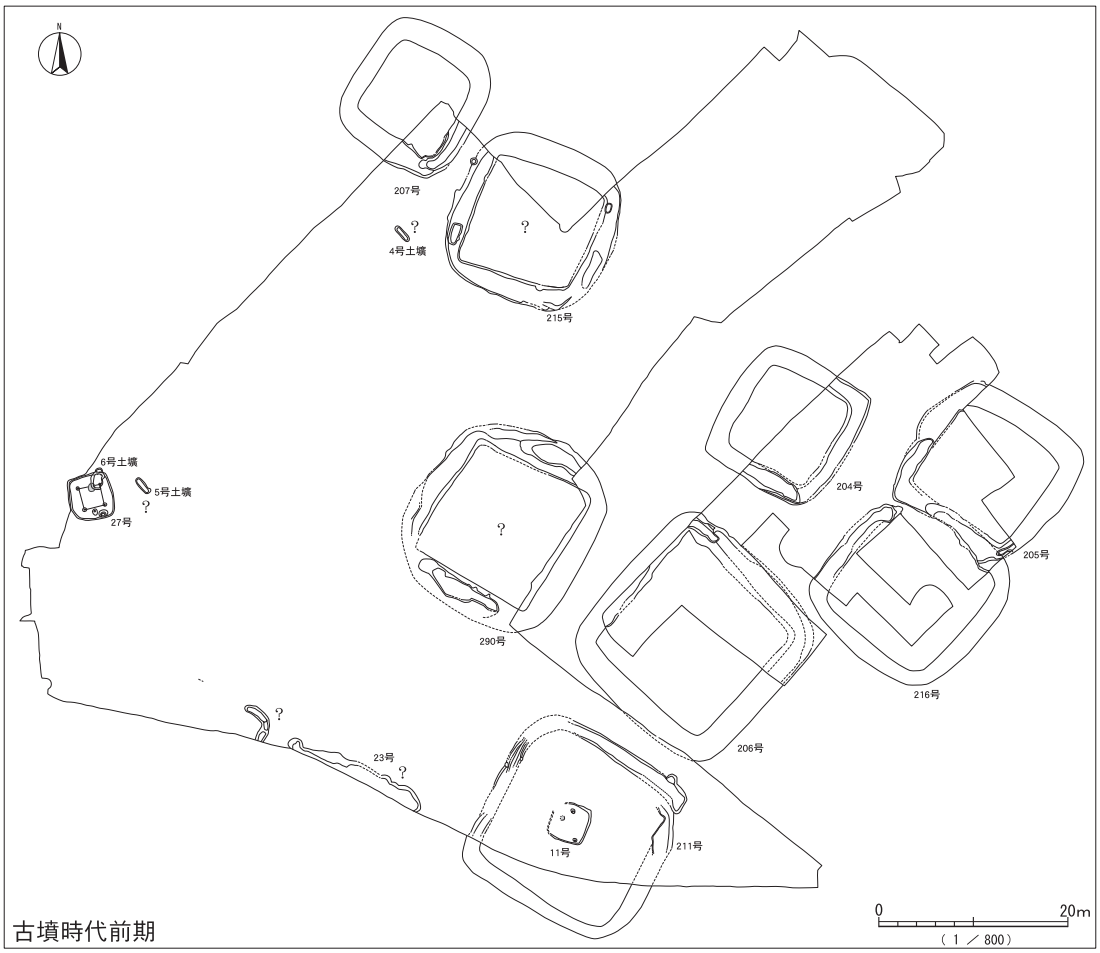


第 157 図　遺構分布変遷図





第 158 図　遺構分布変遷図



第 159 図　遺構分布変遷図

又木遺跡・六孫王原遺跡・釜神遺跡が存在し、それぞれ台地上平坦面に集落が展開している（第 2 図）。傾向としては、宮ノ台式期環濠集落の廃絶前後にかけて、その近在から竪穴住居跡の分布域が拡大するという展開が捉えられている（大村 2005）。長平台遺跡の様相は、宮ノ台式期（弥生時代中期末）に散見される竪穴住居跡が、久ヶ原式期（後期前半）に増加し、弥生時代終末期に向けて漸減する、というものであり、これらもそのような脈絡で残されたものと思われる。竪穴住居跡の変遷（宮ノ台式期→久ヶ原式期→山田橋式期、＋後期不明）を概観すると、環濠集落である台遺跡 B 地点（9 → 19 → 18、+63）とその廃絶に連動して営まれた環濠集落の根田代遺跡（30 → 25 → 19）において、先行して居住域が展開した後、御林跡遺跡（8 → 36 → 10、+40）・長平台遺跡（2 → 33 → 14、+10）へと範囲の拡大が進み、弥生時代終末期（鴨居上ノ台式・TB2 式期）には国分僧寺西辺の中台遺跡へと重心を移すという変遷が見て取れる（大村 2005、木對 2004、半田 2003）。弥生時代中期末において、環濠集落の他にも小規模集落が展開することは指摘されている通りであり、後期に至って面的な増加に拍車のかかる事態についても、環濠集落の持つ凝集性の弛緩が投影されていると見る立場が説得力を持つ（大村 2005）。環濠集落廃絶後も、台遺跡 B 地点・根田代遺跡において後継の居住域が払拭されるわけではなく、後期以後にも居住は認められるが、これは御林跡遺跡・長平台遺跡と展開がおおむね同調しており、結果として遺構が累積された現象と捉えられよう。遺構の継続性という現象と、実際の居住者が抱く連続性の意識とはひとまず分離して解釈した方が良いのかもしれない。

弥生時代終末期には引き続き調査区南側に竪穴住居跡の分布が見られるが、平面形は方形に近づい

た隅円方形が主体となる（第 158 図下）。これらの遺構には、弥生時代終末期前半に築造された 288 号墓に切られるものと、これを避けた位置に構築されるものという区別に従う大まかな変遷が認められる。注目されるのは、288 号墓東側周溝と接し 289 号墓の墳丘下に位置する 22 号竪穴住居跡と、同じく 289 号墓周溝東側で切り合う 14 号竪穴住居跡である。22 号は 9 号と主軸方位が近似しており、出土土器の様相も、屈曲部に稜のない甕や非在地系の高杯の存在など弥生時代終末期前半の特徴を示している。288 号墓の位置からすると、22 号がその築造の際あるいはその直後に機能していたとは考えにくいので、22 号は 288 号墓に先行すると考えるのが妥当である。そうすると、22 号と近似する 9 号は、近い時期に連続的に構築された可能性が推定できるだろう。一方、近辺の竪穴住居跡では、2 号・10 号→ 14 号→ 12 号という古墳時代前期に到る変遷が想定される。10 号では、パレススタイル壺・S 字状口縁台付甕・くの字状口縁甕・内弯脚高杯という東海地方西部由来の土器が主体を占め、在地色を合わせ持つ 2 号との比較が難しい。10 号の S 字状口縁台付甕は口縁外面稜に刺突の加えられる A 類であり、パレススタイル壺は口縁部外面が垂直に近い角度を呈し古相を示す。欠山式・廻間 I 式期後半（赤塚 1997）と並行するものと思われる。また、14 号出土土器には、くの字状口縁の平底甕があり、一見古墳時代前期に位置づけられそうだが、椀形の杯部に水平方向に広がる口縁部を持つ高杯と小型のくの字状口縁台付甕が伴うため、非在地的な産物と想定した方が 289 号墓との先後関係を理解しやすい。胎土分析の結果も、くの字状口縁平底甕の胎土が非在地的であることを示している（第 11 表）。前者の高杯は、千葉市戸張作遺跡 105 号住居跡出土土器（菊池 1998）に類品があり、菊川式新段階の壺と小型のくの字状口縁台付甕が伴出している。菊川式新段階は、欠山式・廻間 I 式との並行関係が想定されており（中嶋 1997）、この壺を元屋敷式・廻間 II 式以前と想定する場合、289 号墓に切られる 14 号出土土器の位置づけが定まるだろう。ただし、同様の高杯は柏市戸張一番割遺跡 13 号・21 号住居址（平岡・井上 1985）や草刈遺跡（高橋 1985）のような杯部の断面形が角張る、近畿地方に起源すると見られる事例と関わる可能性もあり、系統を限定するのは難しい。以上の竪穴住居跡は、9 号が 10 号に切られる可能性のあることを勘案すると、22 号・9 号→ 2 号・10 号→ 14 号→ 12 号という構築順が推定できる。

古墳時代前期に属する竪穴住居跡は僅少である（第 159 図）。弥生時代中期末以来の居住域は規模を縮小し、288 号墓以後、墓域としての土地利用が主体となって継続するようである。当区域では古墳時代中期以後に竪穴住居が営まれることはなく、平安時代に至って 210 号方形周溝状遺構が築かれるまで、明確な土地利用の痕跡は認められない。この期間に耕作地等への土地利用の転換が行われたものと思われる。288 号墓の低い墳丘が開墾されることなく、微地形に埋もれて、現代まで無事だったことからすれば、活発でない遺構分布の示すとおり、居住域としての利用は古墳時代前期で止み、以後は墓域・耕作地としての景観が保たれたと想定できる。長平台遺跡の調査区で追える遺構変遷の終盤は、古代に行われた国分僧寺等の施設に求心的な都市計画とその結果によって規定された側面があるのかもしれない。

第 2 節　弥生時代終末期方形周溝墓と出土遺物

288 号墓副葬品　288 号墓の中心埋葬施設からは、鉄剣 1 振とガラス玉 17 点が検出されている。鉄剣は弥生時代後期以後に副葬品となる事例が増えるもので、終末期に特徴的な存在である（第 12 表）。

第 12 表　千葉県内における弥生時代終末期前後の鉄剣・鉄槍出土遺跡

所在地	遺跡名	遺構番号	遺構種別		伴出品（除土器）	備考	文献
市原市	長平台	288号	方形墓	剣	ガラス玉17		
市原市	草刈H区	211号	土壙墓	剣	ガラス玉25	鹿角装柄付	白井・福田1989、白井1992
市原市	草刈		グリッド	剣		26号方形周溝墓由来か	高橋1985
市原市	加茂C地点		方形墓	剣		方台部東南コーナー付近出土	對馬1976
市原市	神門	3号	前方後円形墓	剣・槍	鉄鏃2・鉇1・ガラス玉103・管玉12		浅利1989
市原市	神門	4号	前方後円形墓	剣・槍	鉄鏃41・鉇1・ガラス玉420+・管玉73+・勾玉3		田中1977
市原市	神門	5号	前方後円形墓	剣	鉄鏃2・ガラス玉6		田中1984
市原市	六孫王原	24号	土壙墓	剣	鉄鏃1・刀子1		半田1997
市原市	牛久	1号	円形墓	槍	銅鏃1	剣の可能性あり	松浦・田中2003
袖ケ浦市	愛宕	4号	方形墓	剣	ガラス玉47		稲葉1996
袖ケ浦市	椿	3号	方形墓	剣・槍	ガラス玉17・管玉2・銅鏃2	大廓式壺	小久貫・高梨2001
袖ケ浦市	西ノ谷下	1号	竪穴住居	剣	鉄鏃?1		諸墨・能城1996
木更津市	高部	32号	前方後方形墓	槍2	鉄鏃1・半肉彫四獣鏡片1		西原2002
木更津市	高部	30号	前方後方形墓	剣・槍	二神二獣鏡片1		西原2002
木更津市	高部	49号	方形墓	剣	鉇1・砥石		西原2002
佐倉市	大崎台B地区	10号	方形墓	剣	鉇1		柿沼他1987
沼南町	石揚	2号	方形墓	剣			太田・安井1994
沼南町	石揚	4号	方形墓	剣	ガラス玉11		太田・安井1994
沼南町	北ノ作	1号	方形墓	剣・刀	鉄鏃3・板状鉄斧2・鉇1・銅鏃1		金子他1959・糸川1993
八千代市	桑橋新田		方形墓	剣	ガラス玉	八千代市郷土博物館展示	山岸他1996
野田市	上三ヶ尾宮前	7号	竪穴住居	剣?			笹森1991

ガラス玉と共に副葬される事例は中部高地・関東地方に多いことが知られており、鉄剣・ガラス玉とも数量面での地理的勾配は、近辺では中部高地に一つの極があることを示している（川越 2000）。木更津市中尾遺跡群（西原 2003）で検出されたという礫床墓の存在や、鉄釧・銅釧の分布も鉄剣・ガラス玉と同様の傾向にあることからすれば（三木他 2001）、いまだ顕在的とは言えないが、中部高地とその周辺地域の文化要素のもたらされる経路が地域社会に埋め込まれていた可能性を推察できよう（大村 2004a）。袖ケ浦市愛宕 4 号墓（稲葉 1996）出土の高杯や、288 号墓出土高杯（第 123 図 10）のように、外面に稜を巡らせずにやや直線的に広がる杯部を持ち、脚部に透孔のない高杯は、中部高地あるいは東海地方東部を含む周辺地域からの影響が発現した事例なのかもしれない。

288 号墓・289 号墓出土土器　288 号墓と 289 号墓の周溝より弥生時代終末期の特徴を示す土器が多く出土している。出土土器は両遺構の築造過程に従って、288 号墓→ 289 号墓という先後関係にある。

288 号墓では、周溝覆土下層に壺と高杯を中心とした土器群があり、破片を含めて大量に土器が出土している。このうち在来系の高杯と壺、搬入品の可能性が高いパレススタイル壺が特に興味深い。

南西側周溝の壺は、単節縄文帯内に沈線による山形文を加え縄文を磨り消す構成の文様を持つ在来系の土器で、伝統的な結節文区画を持ちながらも頸部屈曲が強い（第 127 図 22）。神門 3 号墓（田中 1991b）に類品が認められるが、こちらは細身の体部が古相を呈するものの口縁外面の棒状浮文が沈線に置換され、山形文も構成が崩れている点で、288 号墓例より新しく位置づけられる。また、弥生時代終末期前半の東 1 号墓（持塚 6 号墳）（田中 1984）出土の壺は、単節縄文帯および結節文区画が体部に 2 帯施されるもので、頸部は若干稜が発達し、その上側に多段の結節文が施される。頸部屈曲と施文部の様相からすると、山田橋式の範疇外にあると思われる。比較すると、球形に近い胴部、文様構成が肩に偏している点、刺突の伴う円形浮文という要素において 288 号墓例の方が新相を呈する。

無文化の進んだ在来系の高杯は南西側周溝ブリッジ付近と北コーナーから出土している（第 123 図 10・第 125 図 25）。杯部が椀形を呈し口縁部の肥厚される高杯は、久ヶ原式以来の連続的変化の最終段階にあり、無文化しながら脚部裾に肥厚部の残る南祇園原遺跡例（高橋 2002）、脚部裾の肥厚部を失った 288 号墓北コーナー例（第 125 図 25）、他地域の影響によってか口縁部肥厚部も失った 288 号墓南西側周溝例（第 123 図 10）という理念的な序列が推定できる。

東側周溝出土のパレススタイル壺（第 127 図 23）は胎土・形状ともにまったく非在地的で、伊勢

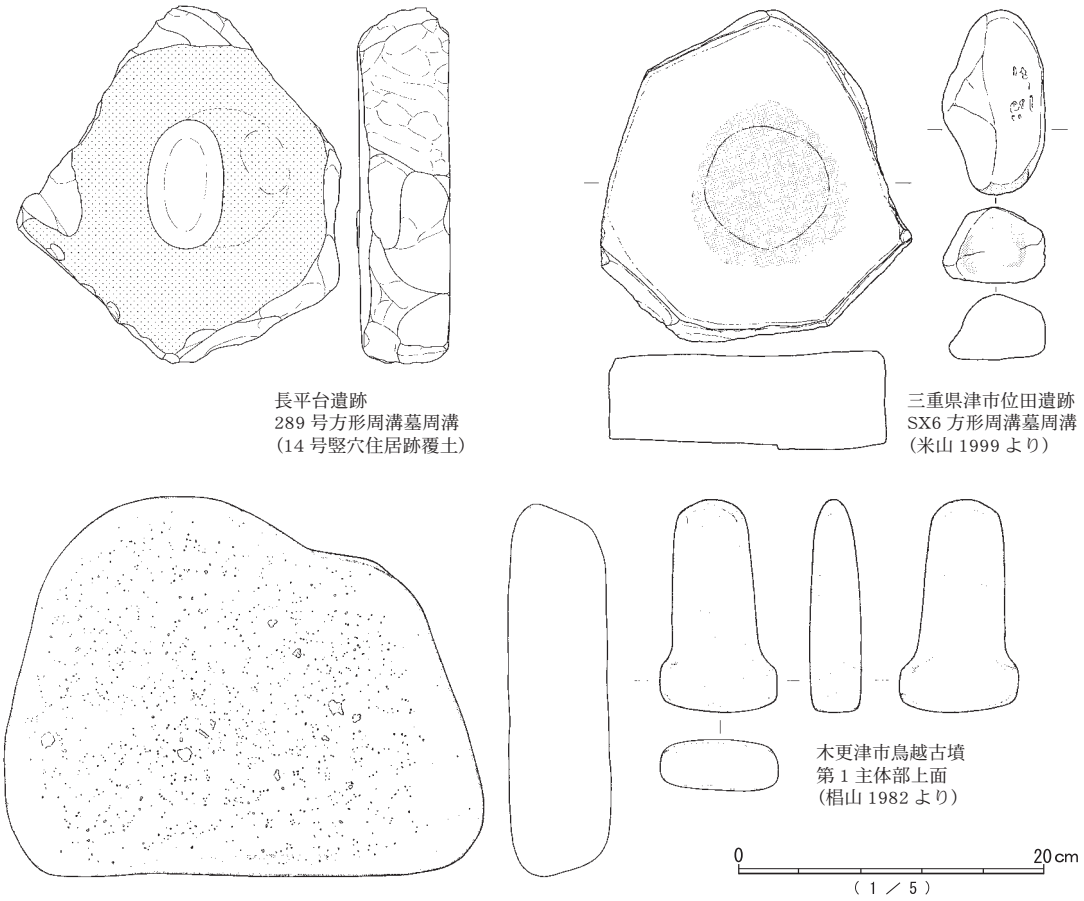
湾地域からの搬入品である可能性が強い。口縁部屈曲が強く、口縁端部外面の幅が広い点から、濃尾地域の編年では廻間Ⅰ式期後半に位置づけられるものと思われる（赤塚他 1997）。

次に、288 号墓出土土器と近在の弥生時代終末期墳墓出土の土器を比較する。まず、隣接する加茂遺跡 C 地点の方形周溝墓出土土器（對馬他 1976b）は、無文精製の異質な土器群で在地系の土器との対比が難しいが、高杯は駿河地域等の東海地方東部の弥生時代終末期の土器に原型を求められる可能性がある（田中 1984、比田井 2004）。高杯には草刈遺跡 A 区 10 号跡出土例（小久貫他 1983）に似た資料があり、頸部屈曲に稜のない在地的な縄文施文壺が伴っているので、弥生時代終末期前半に位置づけられる。東 1 号墓出土土器には、288 号墓より古相を示す壺が含まれるが、遺構平面形が周溝中央にブリッジの掘り残されるものである点は新出の要素となっており（田中 2000）、遺構全体の先後関係は確定しがたい。また、神門 5 号墓出土土器（田中 1984・2000）には、在地的な縄文装飾壺が組成し、肩部文様帯に縦方向の 4 本単位の沈線もしくは櫛描文が施されており、288 号墓北西側周溝出土の壺下半（第 122 図 7）と類似する。他に擬凹線文の口縁部を持つ小型土器と櫛描文の壺という非在地的な土器が伴うが、それぞれ弥生時代終末期の滋賀県高月町小松墳丘墓（黒坂他 2001）に類品および原型と見られる資料があり、その位置づけから、弥生時代終末期前半には遡らないと考えられる。連続する在来的な要素と、異なる系譜の土器群の位置づけを勘案すれば、これまでの指摘どおり 288 号墓が神門 5 号墓に若干先行すると考えられる。なお、小松墳丘墓は前方後方形墓だが、遺跡の位置する湖北地域には庄内式期並行期前半の虎姫町五村遺跡（植野・信里他 1997）等、突出部の伴う円形墓が知られており、多孔鉄鏃が共通して認められる点からも、神門 5 号墓に認められる文化要素の故地として、この地域を視野に入れる必要があると思われる。

289 号墓出土土器には、パレススタイル壺模倣壺・無文二重口縁壺・櫛描文壺がある（第 135・136 図）。それぞれ非在地的な形状をとるが、計画性の窺える出土状況と在地産胎土による製作品があることからすると、葬送儀礼のために用意された器物だったとも思える。模倣の対象となった土器型式も重要だが、その製作契機も無視すべきではないだろう。

当地域の弥生時代終末期鴨居上ノ台式（TB2 式）期は、大略、前半期が欠山式期・廻間Ⅰ式期・菊川式期新段階の後半に対応し、また五領式古段階（TE1 式）の位置づけから、後半がほぼ廻間Ⅱ式期に対応すると考えられる（大村 1994）。ここまでの検討に基づくと、288 号墓築造時期は弥生時代終末期前半の新相にあり、それ以前の所産として加茂遺跡 C 地点方形周溝墓が位置づけられる。289 号墓は、出土土器が外来的な要素の濃いわりに変容を示しており厳密な比定は難しいが、パレススタイル壺模倣壺の祖型となりうる型式が廻間Ⅱ式期前半にあると考え、終末期後半の古相としておきたい。神門 5 号墓との先後関係については、従来の位置づけ通り 288 号墓が先行すると考えられる。

石臼状石製品　289 号墓と 14 号竪穴住居跡の接点から出土した石製品は、板状で両広面が平滑に仕上げられたうえに、片面中央に敲打・圧擦痕が認められ、朱調製用の石臼（市毛 1998）によく似ている（第 160 図）。砥石と並んで出土しており、別用途や転用の可能性もあるが、珍しい事例なので再度触れておきたい。類例には、欠山式期の三重県津市位田遺跡例（米山 1999）、木更津市鳥越古墳出土例（椙山 1980a・b・1982）が挙げられる。石材の厚さは 6cm 強と同程度であり、平滑に仕上げられた板状の形も類似している。後者とは整形された石杵の伴う点で異なるが、長平台遺跡でも帰属不明の礫が多いので、自然石利用の石杵が存在した可能性は否定できない。289 号墓は墳丘が遺存し



第 160 図　朱調製用石臼の類例

ていなかったため埋葬施設との関係は不明であるが、至近での出土は示唆的である。

手焙形土器　288 号墓からは、中心埋葬施設の葬送儀礼に伴う可能性の高い土器が多数検出されている。このうち周溝南西側で検出された土器群には、壺と高杯と共に、ほぼ完形に復元できた手焙形土器 1 個体が含まれている。

手焙形土器は、「火入形土器」（梅原 1922）、「火入れ若しくば手あぶり形とも名附く可き珍奇なる素焼土器」（梅原 1924）とのように認識された当初から、「形の上よりせば火入れの類とすること誤りなかる可く、内に灰ありしと云へば一見実用の器なりしかとも考へられる。されど其の薄手の作りなると、素焼なるの点は仮器と見る推測のより実らしきを思はしめ」る、と推定されており（鳥取県倉吉市三度舞大将塚方形墓；梅原 1922・1924）、以来、実用品というよりは祭祀・儀礼に用いられた器物と考えられている。また、内面に煤の付着を認められる例が少なからずあり、器内に火を点す使用法が想定されている（江谷 1971、岡本 1985 等）。これまでに資料の蓄積が進み、手焙形土器は、弥生時代後期後半に近江地方の鉢が基になって近畿・東海地方西部を中心に製作・使用されるようになり、弥生時代終末期（庄内式並行期）を通して、東北は群馬県（公田東遺跡；下條他 1997）・茨城県（浦房地遺跡；高橋 1998）、南西は佐賀県（久米遺跡；三日月町 1985）まで分布域が拡大し、古墳時代前期（布留式並行期）に至って消滅するという変遷が明らかにされている（高橋 1998）。

房総の手焙形土器は、下総地域 7 遺跡、上総地域 18 遺跡、安房地域 1 遺跡の計 26 遺跡から出土している（第 13 表）。発掘調査の件数と規模もいくらか影響を与えていると思われるが、千葉県ではと

くに東京湾岸上総地域で例数が多い。この地域では弥生時代後期以降に爆発的とも言える居住域の拡大を見せ、その後、弥生時代終末期に外来系土器の伴う遺構が増加するという集落動態の基調を追えるが、例数の多さもある程度これに関係する現象と捉えられる。

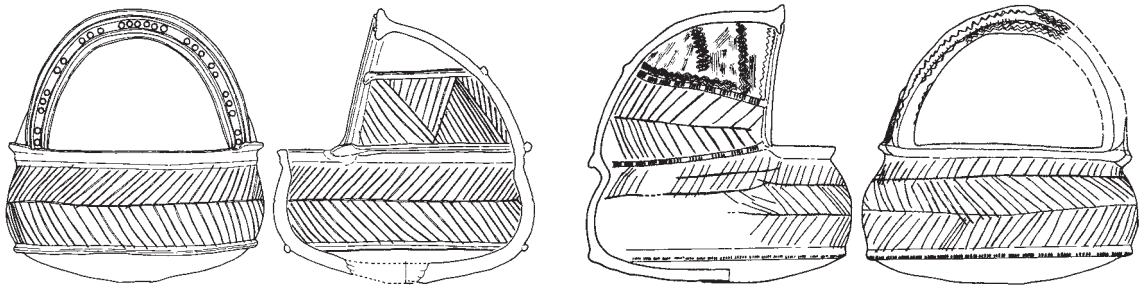
竪穴住居跡床面出土の完存の手焙形土器は穿孔のない場合がほとんどである。これに対し、神門3号墓と高部30号墓では中心埋葬施設上面から焼成後底部穿孔の1個体が検出されており、墳墓での使用における穿孔が特徴として指摘できる。また、基本的に近江地域では覆部端部に円形浮文を施すのに対し、両例は円形刺突文に置換されており、これも特徴の一つに挙げられる。

288号墓の手焙形土器は、覆部端部の拡張が板状部の貼り付けではなく、主に内面側の肥厚によっており、房総では根形台遺跡ⅩⅣ地点2地区SI174例（能城他2002）に次ぐ時期の所産と考えられる。内面に炭化物の付着等、火を点した痕跡を肉眼では確定できないが、他の事例から考えて同様の使用法を推察できる。形状のみを比較すると、覆部終端に付けられる耳の存在から、高部32号墓A土壙上面出土例（西原2002）がより古相を呈するものの、遺構の先後関係は微妙である。根形台遺跡例は、廃絶時に火を受けた竪穴住居跡の床面から、伊勢湾地域に系譜のある土器とともに出土しており、各例とも東海地方西部を中心とした非在地系の土器に伴って流入したと概括できる。

高橋一夫は、手焙形土器の形状は土器型式という視点では捉えにくい動態を示すという重要な指摘を行っているが（高橋2002・2003a）、星久喜遺跡例・神門3号墓例にその好例が見てとれる。というのも、双方の形状・寸法はほぼ同じであり、それは両例が墳墓で使用するために仕立てられたこと

第13表　千葉県内の手焙形土器

所在地	遺跡名	遺構	遺構種別	備考	文献
小見川町	阿玉台北	A地点21号住居跡	竪穴住居　覆土	破片	矢戸他1975
多古町	仲ノ台（D地区）		竪穴住居　床面	完形	荒井1999
佐倉市	大崎台	第116号住居	竪穴住居　床面	完形	柿沼他1985
茂原市	第六天向	第004号跡	竪穴住居　床面	完形	三浦他1988
千葉市	星久喜	2号方形周溝墓	墳墓　墳丘?	報告はC-4グリッド　完形	田川・高橋1984
千葉市	東寺山石神	52号住居址	竪穴住居　床面	完形	沼沢他1977
千葉市	戸張作	第162号住居跡（混入）		破片	菊池1998
市原市	草刈（D区）		竪穴住居		三浦他1988
市原市	長平台	288号墓	方形墓　墳墓　周溝	完形　他1点不確定片あり	
市原市	菊間深道	1トレンチ	不明	破片	高橋1994
市原市	神門	4号墓	墳丘下の竪穴住居　盛土内（包含層）	2点　破片	田中1991b
市原市	神門	3号墓	前方後円形墓　墳墓　墓壙上	完形　焼成後底部穿孔	浅利1989b
市原市	御林跡（北調査区）	混入		破片　神門3号墓例と酷似	整理作業中
市原市	土宇	第115号住居址	竪穴住居　床面	完形	柿沼他1979
袖ケ浦市	根形台（境遺跡）	第16号・第17号住居址	竪穴住居　覆土	破片	小沢1985
袖ケ浦市	根形台（XIV-2地点）	SI174	竪穴住居　床面	完形　焼成後底部穿孔か	能城他2002
袖ケ浦市	山王辺田	2号墓	前方後方形墓　墳墓　周溝	破片	酒巻・伊藤1999
袖ケ浦市	美生（第2地点）	第3号方形周溝墓	方形墓　墳墓　周溝	破片	小高他1998
袖ケ浦市	滝ノ口向台	8号墓	前方後方形墓　墳墓	表採　破片	白井2002
木更津市	鹿島塚A	84号址　119号址	竪穴住居　覆土	2点　破片	岡野1994
木更津市	高部	32号墓	前方後方形墓　墳墓　周溝	完形　焼成後底部穿孔	西原2002
木更津市	高部	30号墓	前方後方形墓　墳墓　墳頂	完形　焼成後底部穿孔	西原2002
木更津市	塚原	47号墳（混入）		破片	小沢2000
木更津市	鶴ヶ岡	J住居址	竪穴住居　覆土	1号墳墳丘下層　破片	酒巻1995
富津市	打越	P23　9U-8　12V-64 13号住居址　16号住居址 19号住居址　210号住居址	ピット・土坑　覆土　　包含層 竪穴住居　覆土	7点（同一個体＝1点）　破片	酒巻1992
千倉町	駒形	第1号住居址	竪穴住居　床面	完形　円筒形土製品が伴出	山上他1982



神門 3 号墓
（浅利 1989b より）

星久喜遺跡　第 2 号方形周溝墓？
（田川・高橋 1984 より）

S=1/5

第 161 図　形状の共通する手焙形土器

に起因すると考えられるからである（第 161 図）。なお、前者はグリッド取り上げとされているが、報告書写真図版（田川・高橋 1984；図版 24）から判断すると、同じくグリッド取り上げ遺物である杯部と脚部の内弯する高杯（同；第 68 図 1・4）とともに、本来、二重口縁壺とセットを構成して第 2 号方形周溝墓付近で出土した可能性が高い。共伴すると見られる直線的な頸部を持つ壺は、比田井克仁により庄内式並行期末に位置づけられているものの（比田井 2004）、高杯の形状からすると若干遡る時期に位置づけられると思われる。櫛描波状文の重ねられる 288 号墓例（第 122 図 7）は、この星久喜遺跡例に影響を与えているようにも見えるが、後者の櫛描波状文と凸帯への刺突文は、セットを構成する可能性の高い二重口縁壺との関連性を重視すべきだろう。神門 3 号墓においても、綾杉文を施される点で手焙形土器と共通する壺が墳丘上で出土しており（浅利 1989b）、墳墓出土例の場合は特に、形状の類似だけでなく製作の次元にも留意する必要があると思われる。出土例数が示す製作機会の少なさを勘案すると、おそらく、寸法や装飾が類似する星久喜遺跡例と神門 3 号墓例は、その製作者の持つ技術の緊密さが看取できるので、時期的に近接することはもちろん、同工品の可能性すら想定できるだろう。整理作業中の御林跡遺跡北調査区では神門 3 号墓例の同工品と見られる手焙形土器覆部端部片が確認されており、手焙形土器の製作と使用の両面において示唆的である。

一方、289 号墓出土土器が示唆するように、手焙形土器を含めた墳墓出土土器は、それを意識して用いた戦略的行為の結果・痕跡であるという側面を無視して評価できない（小橋 1998）。墳墓の厳密な平面形は設計・構築作業者にしか可視的でなく、副葬品も埋葬後は不可視である。このことからすれば、墳墓において何らかの差異を積極的に表示する場には、外表施設しか残されていないと言えるので、そこに関連する遺構と遺物に対しては意図的な操作を考慮した解釈が重要になるだろう。仮に葬送儀礼の道具立てとして用いられた可能性の高い外来系の土器に、アイデンティティ（出自意識・帰属意識）の表示を意図したという側面を認めるならば、表れた違いを時期差ではなく系統差に由来すると認識する方が妥当な場合があると思われる。また、それらの偶有性に注目するならば生前の地域間関係が葬送時に発現したという解釈も排除されるものではないだろう。ただし、製作の次元、行動的・象徴的な側面のいずれにおいても、一回性の出来事としてだけではなく、構造的な脈絡も加味して解釈する姿勢が不可欠だと思われる。居住域の生活痕を累積的な構造として捉えるとすれば、確かに墳墓に残された非日常的な痕跡はその対極にあり出来事的と言えるが、それでも一回性という次元を強調するだけでは充分と言えない。墳墓から出土する外来系土器はその場で行われた葬送という出来事に関係するだけでなく、その関係者の来歴にも結びついていると見るのが自然である。そこに

は被葬者個人に関わる属性だけが反映されているのではなく、一回性と構造性が綯い交ぜになったうえで地域集団の伝統等が重層的に各要素として滲出していると考えられるのである。

弥生時代終末期には、288 号墓・289 号墓のように外面的には「持ち寄り型」に見えるかたちで葬送儀礼の道具立てが揃えられるという現象を少なからず認められるが、それらを遺存させた行いは結果として次代の下地になっているという視点からも捉えられるべきである。古墳時代に下ると、弥生時代における持ち寄り型の葬送儀礼が素地となり、習俗の広域化と生産の専門化が進み、象徴面では形骸化し再解釈が行われる。弥生時代終末期に窺える傾向の先に、このような、墳墓で用いる土製品を限定的に生産する社会が待っているのは周知のことである。各地域で古墳とその葬送儀礼が成立する過程に対して立体的な解釈を行うには、後代の特徴の萌芽を認めようとする遡及的な視点だけではなく、いくつかの選ばれなかった選択肢の存在を指し示す作業も必要とされているように思われる。

引用・参考文献

赤塚次郎他 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集　(財) 愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎他 1997『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 73 集　(財) 愛知県埋蔵文化財センター
浅井和宏 1987「「パレス・スタイル壺」小考」『マージナル』N0.7　愛知考古学談話会
浅利幸一 1989a「千葉県市原市国分寺台遺跡群の調査－古墳時代集落跡を概観して」『MUSEUM ちば』20　千葉県博物館協会
浅利幸一 2003「市原台遺跡群」『千葉県の歴史』資料編　考古 2（弥生・古墳時代）　県史 10　千葉県
市毛　勲 1998『新版　朱の考古学』考古学選書　雄山閣
江谷　寛 1971「手焙形土器の再検討」『古代学研究』第 59 号　古代学研究会
大村　直 1982「前野町式・五領式の再評価」『神谷原Ⅲ』八王子市椚田遺跡調査会
大村　直・菊池健一 1984「久ヶ原式と弥生町式　南関東地方における弥生時代後期の諸様相（予察)」『史館』第 16 号　史館同人
大村　直 1994「戸張一番割遺跡の甕形」『史館』第 25 号　史館同人
大村　直 1997「南関東地方における鉄器の普及過程」『第 4 回鉄器文化研究集会 東日本における鉄器文化の受容と展開 発表要旨集』鉄器文化研究会
大村　直他 2004a『市原市山田橋大山台遺跡』(財) 市原市文化財センター調査報告書第 88 集　(財) 市原市文化財センター
大村　直他 2004b「久ヶ原式・山田橋式の構成原理　東京湾岸地域後期弥生土器型式の特質と移住・物流」『史館』第 33 号　史館同人
緒方雪絵 2002「弥生・古墳時代のガラス玉の基礎的研究　－上総地域の例を中心に－」『土筆』第 6 号　土筆舎
岡本欣子 1985「手焙形土器考」『兵庫史の研究　松岡秀夫傘寿記念論文集』松岡秀夫傘寿記念論文集刊行会
小瀬康行 1987「管切り法によるガラス小玉の成形」『考古学雑誌』第 73 巻第 2 号　日本考古学会
小瀬康行 1997「鋳型によるガラス勾玉の復元と考察」『東京家政学院生活文化博物館年報』第 5 号　東京家政学院生活文化博物館
加藤修司 2000「土器編年案」『千葉県文化財センター　研究紀要』21　(財) 千葉県文化財センター
川越哲志 2000『弥生時代鉄器総覧』東アジア出土鉄器地名表Ⅱ　広島大学文学部考古学研究室
菊池健一 1990「一つの甕から　－弥生時代後期から古墳時代はじめにかけての叩き甕について－」『史館』第 22 号　史館同人
小橋健司 1998「手焙形土製品の研究」『史館』第 30 号　史館同人
小林健二 2000「甲斐の S 字甕を考える」『S 字甕を考える』第 7 回東海考古学フォーラム三重大会
古墳時代時研究会 1997『土器が語る　－関東古墳時代の黎明－』第一法規
財団法人千葉県史料財団 1997『千葉県の自然誌』本編 2　千葉県の大地　県史シリーズ 41　千葉県
白井久美子 1983「市原市長平台遺跡 288・289 号墳出土の土器」『三～四世紀の東国　－揺れ動く謎の時代－』八王子市郷土資料館
白井久美子 1992「草刈遺跡の鉄器二題」『研究連絡誌』第 36 号　(財) 千葉県文化財センター
白井久美子 2002『古墳から見た列島東縁世界の形成』千葉大学考古学研究叢書 2
白井久美子・福田依子 1989「千葉県市原市草刈遺跡出土の小銅鐸」『考古学雑誌』第 75 号第 2 巻　日本考古学会
杉山晋作・安藤鴻基他 1972「千葉県市原市小田部古墳の調査」『古墳時代研究』Ⅰ　古墳時代研究会
杉原重雄・細野　衛・桃木徳博 1976「国分寺台周辺の自然地理」『南向原』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅱ　上総国分寺台遺跡調査団
高橋一夫 1998『手焙形土器の研究』六一書房
高橋一夫 2002「手焙形土器の形と型」『研究紀要』第 17 号　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
高橋一夫 2003a「手焙形土器の性格と型式」『國學院大學考古学資料館紀要　加藤有次先生古稀記念』第 19 輯　國學院大學考古学資料館研究室
高橋一夫 2003b「手焙形土器　－近畿と関東－」『初期古墳と大和の考古学』学生社
田口一郎 1987「パレス・スタイル壺の末裔たち」『欠山式とその前後』研究・報告編　愛知県考古学談話会

田口一郎 2002「金属器・玉類副葬の北関東弥生墳墓」『考古学ジャーナル』N0.491　ニュー・サイエンス社
田中新史 1977「市原市神門４号墳の出現とその系譜」『古代』第 63 号　早稲田考古学会
田中新史 1981「古墳の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』上総国分寺台遺跡調査団
田中新史 1982「古墳の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』上総国分寺台遺跡調査団
田中新史 1983「市原市神門４号墳調査の意義」『三～四世紀の東国　－揺れ動く謎の時代－』八王子市郷土資料館
田中新史 1984「出現期古墳の理解と展望　－東国神門五号墳の調査と関連して－」『古代』第 77 号　早稲田考古学会
田中新史 1991a「神門３・４・５号墳と古墳の出現」『邪馬台国時代の東日本』六興出版
田中新史 2000『上総市原台の光芒』市原古墳群刊行会
田中新史 2002「有段口縁壺の成立と展開　－特化への道程・類別と２地域の分析－」『土筆』第６号　土筆舎
豊島直博 2005『弥生時代の鉄製刀剣』2002（平成 14）年度～ 2004（平成 16）年度科学研究費補助金（若手 B）研究成果報告書（課題番号 14710287）　独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所
中嶋郁夫 1997「東海東部の古式土師器」『静岡県史研究』第 13 号　静岡県
比田井克仁 2001『関東における古墳出現期の変革』雄山閣
比田井克仁 2004『古墳出現期の土器交流とその原理』雄山閣
三木　弘他 2001『平成 13 年度秋季特別展 弥生クロスロード －再考・信濃の農耕社会－』大阪府立弥生文化博物館図録 23　大阪府立弥生文化博物館
米田耕之助 1978「発掘調査の方法」『祇園原貝塚』上総国分寺台発掘調査概要Ⅴ　上総国分寺台発掘調査団

遺跡出典

浅利幸一 1989b「神門３号墳」『市原市文化財センター年報　昭和 62 年度』（財）市原市文化財センター
浅利幸一 2002「市原台遺跡群」『千葉県の歴史』資料編　考古２（弥生・古墳時代）　県史 10　千葉県
浅利幸一他 2003『市原市稲荷台遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅸ　市原市教育委員会
浅利幸一他 2005『市原市加茂遺跡Ａ・Ｂ地点』上総国分寺台遺跡調査報告ⅩⅤ　市原市教育委員会
荒井世志紀 1999「仲ノ台遺跡Ｄ地区」『事業報告Ⅷ　－平成９年度－』（財）香取郡市文化財センター
稲葉理恵 1996『寒沢古墳群・愛宕古墳群・寒沢遺跡・上用瀬遺跡発掘調査報告書』（財）君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 116 集　（財）君津郡市文化財センター
糸川道行 1993『沼南町北ノ作１・２号墳発掘調査報告書』千葉県教育委員会
今井和久 2005『高林三入遺跡 八反田遺跡　東毛幹線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 357 集　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
植野浩三・信里芳紀他 1997『五村遺跡　－いきがいセンター建設に伴う発掘調査報告書－』奈良大学文学部考古学研究室調査報告書第 14 集　奈良大学文学部考古学研究室
梅原末治 1922『鳥取縣下に於ける有史以前の遺跡』鳥取縣史蹟勝地調査報告第一册　鳥取縣
梅原末治 1924『因伯二國に於ける古墳の調査』鳥取縣史蹟勝地調査報告第二册　鳥取縣
太田文雄･安井健一 1994『石揚遺跡　－手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』千葉県文化財センター調査報告第 255 集　（財）千葉県文化財センター
大谷宏幸・白井久美子 2003「ちはら台遺跡群」『千葉県の歴史』資料編　考古２（弥生・古墳時代）　県史 10　千葉県
大村　直他 2005『市原市根田代遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告ⅩⅢ　市原市教育委員会
岡野祐二 1994『－千葉県木更津市－　請西遺跡群Ⅲ　鹿島塚Ａ遺跡』（財）君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 84 集　（財）君津郡市文化財センター
小川浩一・蜂屋孝之 2000『市原市北野原遺跡』（財）市原市文化財センター調査報告書第 68 集　（財）市原市文化財センター
小久貫隆史他 1983『千原台ニュータウンⅡ　草刈遺跡Ａ区（１次調査）　鶴牧古墳群・人形塚』（財）千葉県文化財センター
小久貫隆史・高梨友子 2001『東関東自動車道（千葉・富津）埋蔵文化財発掘調査報告書８　袖ケ浦市椿古墳群』千葉県文化財センター調査報告書第 410 集　（財）千葉県文化財センター
小沢　洋 1985『－千葉県袖ケ浦町－　境遺跡』(財) 君津郡市文化財センター調査報告書第８集　(財) 君津郡市文化財センター
小沢　洋 2000『塚原 47 号墳』千束台遺跡群発掘調査報告書Ⅳ　木更津市教育委員会
忍澤成視他 1999『祇園原貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅴ　市原市教育委員会
小高春雄他 1993『滝ノ口向台遺跡・大作古墳群　－一般県道君津平川線県単道改良（幹線道路網整備）工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－』千葉県文化財センター調査報告書第 232 集　（財）千葉県文化財センター
小高幸男他 1998『－千葉県袖ケ浦市－　美生遺跡群Ⅳ　第２地点』（財）君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 142 集　（財）君津郡市文化財センター
柿沼修平他 1979『土宇』日本文化財研究所
柿沼修平他 1985『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅰ』佐倉市教育委員会
柿沼修平他 1987『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅲ』佐倉市教育委員会
金子浩昌他 1959「千葉県東葛飾郡沼南村片山古墳群の調査」『古代』第 33 号　早稲田大学考古学会
菊池健一 1998『千葉市戸張作遺跡Ⅰ』（財）千葉市文化財調査協会
菊池健一 1999『千葉市戸張作遺跡Ⅱ』（財）千葉市文化財調査協会
木對和紀他 2004『市原市辺田古墳群・御林跡遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告ⅩⅡ　市原市教育委員会
黒坂秀樹他 2001『古保利古墳群　第１次確認調査報告書』高月町埋蔵文化財調査報告書第５集　高月町教育委員会
小橋健司 2000『市原市片又木遺跡Ⅱ』（財）市原市文化財センター調査報告書第 70 集　（財）市原市文化財センター

小橋健司・櫻井敦史他 2004『市原市山倉古墳群』上総国分寺台遺跡調査報告ＸⅠ　市原市教育委員会
小宮山　隆 1996『北村遺跡』長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第 10 集　長坂町教育委員会
酒巻忠史 1992『－千葉県富津市－　打越遺跡・神明山遺跡』（財）君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 64 集　（財）君津郡市文化財センター
酒巻忠史 1995『千葉県木更津市　桜ヶ丘遺跡群発掘調査報告書　－鶴ヶ岡 1 号墳・鶴ヶ岡遺跡・俵ヶ谷遺跡－』木更津市教育委員会
酒巻忠史・伊藤智樹 1999「付編　山王辺田遺跡群」『袖ケ浦市史』資料編 1 原始・古代・中世　袖ケ浦市史編さん委員会
櫻井敦史 2004『市原市片又木遺跡Ⅲ』（財）市原市文化財センター調査報告書第 87 集　（財）市原市文化財センター
笹森一郎 1991『上三ヶ尾宮前』野田市埋蔵文化財調査報告書第 5 冊　野田市教育委員会
下城　正他 1997『槻島川端遺跡・公田東遺跡・公田池尻遺跡　（主）前橋長瀞線道路改築（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 2 集』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第 225 集　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
末武直則他 1986『千葉県佐倉市第 2 ユーカリヶ丘宅地造成地内埋蔵文化財調査報告書　－上座矢橋遺跡－』（財）印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 4 集　（財）印旛郡市文化財センター
椙山林継 1980a「木更津市鳥越古墳の調査」『考古学ジャーナル』No.171　ニュー・サイエンス社
椙山林継 1980b「鳥越古墳の調査（1）」『宇麻具多』創刊号　木更津古代史の会
椙山林継 1982「鳥越古墳の調査（2）」『宇麻具多』第 2 号　木更津古代史の会
鈴木　元他 2004『東町田遺跡』大垣市埋蔵文化財調査報告書第 14 集　大垣市教育委員会
須田　勉他 1975『諏訪台古墳群調査概要』上総国分寺台遺跡調査団
須田　勉他 1980「上総国分寺Ⅰ」『上総国分寺台発掘調査概要』Ⅶ　上総国分寺台遺跡調査団
須田　勉他 1989『蛇谷遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅳ　上総国分寺台遺跡調査団
千田利明他 1980『田川遺跡群　－千葉県木更津市田川遺跡群発掘調査報告書－』田川遺跡群発掘調査会
高橋康男 1985『草刈遺跡』（財）市原市文化財センター調査報告書第 6 集　（財）市原市文化財センター
高橋康男 1994「菊間深道遺跡」『平成 5 年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
高橋康男 2002『市原市向原台・東向原遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅶ　市原市教育委員会
高橋康男・櫻井敦史 2002『市原市南祇園原遺跡・持塚 5 号墳・上神台塚群』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅷ　市原市教育委員会
田川　良・高橋政充 1984「星久喜遺跡発掘調査報告」『千葉市文化財調査報告書』第 8 集　千葉市教育委員会社会教育部文化課
田中新史他 1976『南向原　－古墳・方形周溝墓・住居址の調査－』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅱ　上総国分寺台遺跡調査団
田中新史 1991b『神門 3 号墳出土土器群一括公開』上総国分寺台遺跡群基礎整理成果
玉口時雄他 1977『健田遺跡　－第 2 次調査報告書－』朝夷地区教育委員会
對馬郁夫他 1976a『千葉県市原市宮前遺跡第 1 次・第 2 次調査報告書』平野考古学研究所・市原市教育委員会
對馬郁夫他 1976b『千葉県市原市加茂 C 地点発掘調査報告書』上総国分寺台遺跡調査団
鶴岡英一 2000『平成 11 年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
西原崇浩 2002『高部古墳群Ⅰ　－前期古墳の調査－』千束台遺跡群発掘調査報告書Ⅵ　木更津市教育委員会
西原崇浩 2003「中尾遺跡群」『千葉県の歴史』資料編　考古 2（弥生・古墳時代）　県史 10　千葉県
沼沢　豊他 1977『東寺山石神遺跡』（財）千葉県文化財センター
能城秀喜他 2002『千葉県袖ケ浦市　根形台遺跡Ⅱ　畑地帯総合整備事業（緊急整備型）根形台地区埋蔵文化財調査発掘調査報告書第 2 冊』（財）君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 176 集　（財）君津郡市文化財センター
野部徳秋 1974「弁天山遺跡の発掘調査」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』埼玉県発掘調査報告書第 5 集　埼玉県教育委員会
半田堅三 1997『市原市姉崎六孫王原遺跡』（財）市原市文化財センター調査報告書第 58 集　（財）市原市文化財センター
半田堅三 2003『市原市台遺跡 B 地点』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅹ　市原市教育委員会
半田堅三・白井久美子 1982「長平台遺跡の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』上総国分寺台遺跡調査団
平岡和夫・井上荘之助 1985『戸張一番割遺跡　－千葉県柏市戸張一番割遺跡調査報告書－』柏市教育委員会
平野元三郎・谷島一馬他 1975『天神台遺跡発掘調査概報』上総国分寺台遺跡調査団
藤崎芳樹 1982『市原市番後台・神明台遺跡』（財）千葉県文化財センター
松浦宥一郎・田中　裕 2003「牛久古墳群」『千葉県の歴史』資料編　考古 2（弥生・古墳時代）　県史 10　千葉県
三浦和信他 1988『千葉県茂原市大六天向遺跡』（財）茂原市文化財センター調査報告第 3 集　（財）茂原市文化財センター
三日月町 1985『三日月町史』三日月町史編纂事務局
諸墨知義・能城秀喜 1996『千葉県 袖ケ浦市内遺跡発掘調査報告書　稲荷台遺跡・寒沢遺跡・西ノ谷下遺跡・根形台遺跡』袖ケ浦市教育委員会
安井健一・鶴岡英一他 2005『市原市西広貝塚Ⅱ』上総国分寺台遺跡調査報告ⅩⅣ　市原市教育委員会
矢戸三男他 1975『阿玉台北遺跡』千葉県土地開発公社
山上英誉他 1982『千倉町埋蔵文化財調査報告書Ⅵ　駒形遺跡』健田遺跡関連第 6 次調査　朝夷地区教育委員会
山岸良二他 1996『関東の方形周溝墓』同成社
米田耕之助他 1977『西広貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅲ　上総国分寺台遺跡調査団
米山浩之 1999『一般国道 23 号中勢道路建設に伴う 位田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 115-12　三重県埋蔵文化財センター

写真図版

長平台遺跡の周辺（1961 年）

調査区全景（北東から）

調査区全景（南西から）

図版 2

288 号方形周溝墓（南東から）

289 号方形周溝墓（南から）

1 号・2 号竪穴住居跡（北西から）

1 号・2 号竪穴住居跡（東から）

2 号竪穴住居跡（南から）

2 号竪穴住居跡遺物出土状況（南から）

2 号竪穴住居跡遺物出土状況（北から）

3 号竪穴住居跡（北東から）

3 号竪穴住居跡（北西から）

6 号竪穴住居跡（北西から）

図版 4

7 号竪穴住居跡（南から）

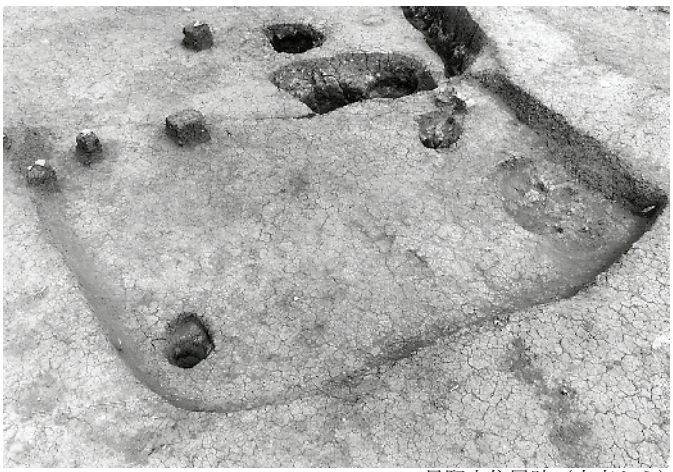
8 号竪穴住居跡（東から）

9 号竪穴住居跡周辺（北から）

9 号竪穴住居跡（東から）

9 号竪穴住居跡（北東から）

10 号竪穴住居跡（北東から）



11 号竪穴住居跡（南東から）

12 号竪穴住居跡（南東から）

14 号竪穴住居跡（東から）

14 号竪穴住居跡遺物出土状況

14 号竪穴住居跡遺物出土状況

14 号竪穴住居跡遺物出土状況

15 号・16 号・17 号・20 号竪穴住居跡（北東から）

19 号竪穴住居跡（北から）

21 号竪穴住居跡（北東から）

21 号竪穴住居跡（南東から）

図版 6

22 号竪穴住居跡・289 号方形周溝墓（南東から）

22 号床面遺物出土状況（壺・高杯）

24 号・25 号竪穴住居跡（南から）

28 号竪穴住居跡周辺（南東から）

29 号竪穴住居跡（南東から）

30 号竪穴住居跡（南東から）

31 号竪穴住居跡（北東から）

32 号竪穴住居跡周辺

33 号竪穴住居跡（西から）

34 号竪穴住居跡（南東から）

35 号竪穴住居跡（南西から）

36 号竪穴住居跡（南東から）

37 号竪穴住居跡（南西から）

39 号竪穴住居跡（東から）

42 号竪穴住居跡（南から）

43 号竪穴住居跡（北東から）

図版 8

44 号竪穴住居跡（南東から）

45 号竪穴住居跡（東から）

46 号竪穴住居跡（北西から）

48 号・49 号竪穴住居・1 号溝硬化面（南東から）

51 号竪穴住居跡（南から）

52 号・53 号竪穴住居跡（南東から）

53 号竪穴住居跡（南東から）

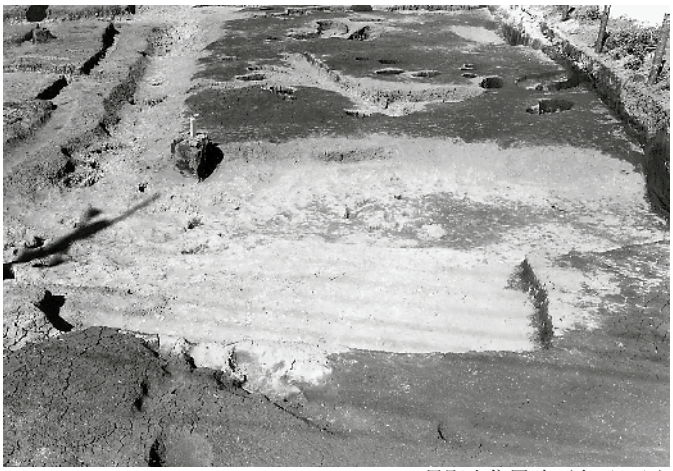
54 号竪穴住居跡（南西から）

55 号竪穴住居跡（北東から）

57 号竪穴住居跡（南東から）

58 号竪穴住居跡（北から）

59 号竪穴住居跡・209 号埋葬施設？（南東から）



60 号竪穴住居跡（南西から）

61 号竪穴住居跡（南東から）

62 号竪穴住居跡周辺（南から）

63 号竪穴住居跡（南から）

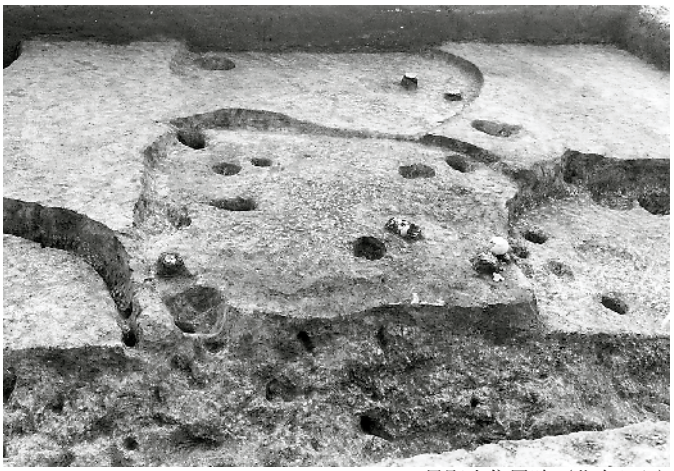
64 号竪穴住居跡（南西から）

65 号竪穴住居跡（南から）

70 号竪穴住居跡（南東から）

72 号竪穴住居跡（288 号墓墳丘下）南東から

76 号竪穴住居跡周辺



76 号竪穴住居跡（北東から）

76 号竪穴住居跡遺物出土状況北西から

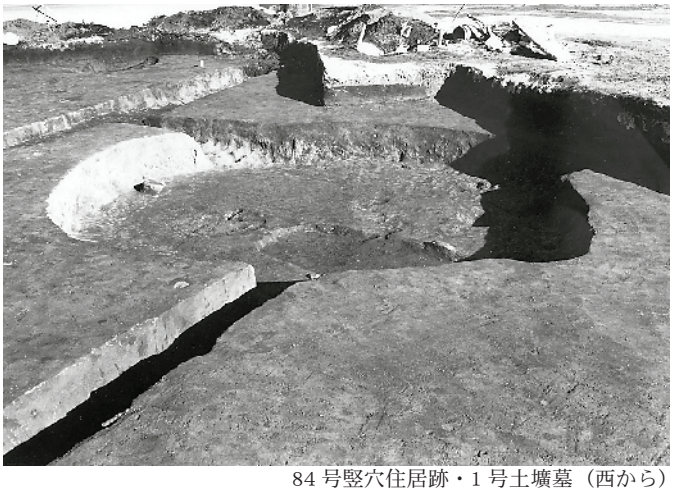
77 号竪穴住居跡

77 号竪穴住居跡（南西から）

77 号竪穴住居跡遺物出土状況（北から）

78 号竪穴住居跡（北東から）

82 号竪穴住居跡（北西から）


84 号竪穴住居跡・1 号土壙墓（西から）

1 号土壙遺物出土状況（南から）

5 号土壙周辺（北東から）

5 号土壙（南東から）

図版 12

201 号方形周溝墓西から

201 号方形周溝墓中央埋葬施設

201 号方形周溝墓方台部（北から）

201 号方形周溝墓中央埋葬施設南から

201 号方形周溝墓中央埋葬施設西から

201 号方形周溝墓南溝東部

201 号方形周溝墓南溝内埋葬施設

201 号方形周溝墓西溝内埋葬施設

201 号方形周溝墓周溝北西コーナー遺物出土状況（墳丘外から）

201 号方形周溝墓周溝北西コーナー遺物出土状況（方台部から）

201 号方形周溝墓南溝内西側埋葬施設遺物出土状況（南から）

201 号方形周溝墓南溝内東側埋葬施設遺物出土状況（南から）

201 号方形周溝墓西溝内埋葬施設（西から）

83 号竪穴住居跡・201 号方形周溝墓北西角遺物出土状況（東から）

201 号・202 号方形周溝墓境界（北から）

84 号周辺（南から）

202 号方形周溝墓（南から）

202 号方形周溝墓南溝遺物出土状況（南から）

202 号方形周溝墓南溝遺物出土状況（東から）

202 号方形周溝墓南溝遺物出土状況（南から）

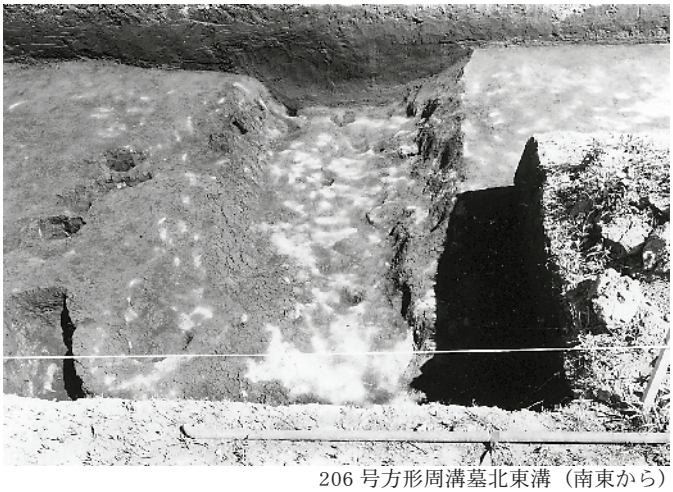
33 号竪穴住居跡・204 号方形周溝墓（南東から）

204 号方形周溝墓（北から）

205 号方形周溝墓南溝（南東から）

205 号・216 号方形周溝墓南溝（北西から）

206 号方形周溝墓（北西から）


206 号方形周溝墓北東溝（南東から）

207 号方形周溝墓（南西から）

209 号方形周溝墓方台部埋葬施設（東から）

209 号方形周溝墓中心埋葬施設（北東から）

290 号方形周溝墓周辺（南から）

215 号方形周溝墓（南から）

215 号方形周溝墓（南東から）

図版 16

36 号竪穴住居跡周辺・216 号墳丘断面？（北西から）

216 号方形周溝墓北コーナー（北東から）

288 号方形周溝墓調査前状況（北東から）

288 号・289 号方形周溝墓調査状況（東から）

288 号方形周溝墓北西辺調査状況

288 号方形周溝墓墳丘（南東から）

288 号方形周溝墓南東辺調査状況

288 号方形周溝墓南東辺壺形土器出土状況

288 号方形周溝墓中心埋葬施設南東から

289 号方形周溝墓（南から）

289 号方形周溝墓北東コーナーパレス壺模倣壺出土状況

289 号方形周溝墓北東コーナーパレス壺模倣壺出土状況

289 号方形周溝墓南東コーナー二重口縁壺出土状況

289 号方形周溝墓南東コーナー二重口縁壺出土状況

289 号方形周溝墓北溝中央小型器台出土状況

210 号方形周溝状遺構（東から）

図版 18

1 号溝跡（南東から）

3 号・4 号溝跡（南から）

旧石器時代調査トレンチ

旧石器時代調査トレンチ

調査風景

調査風景

調査風景

現代の炭窯（西から）

2 号　第 16 図 13

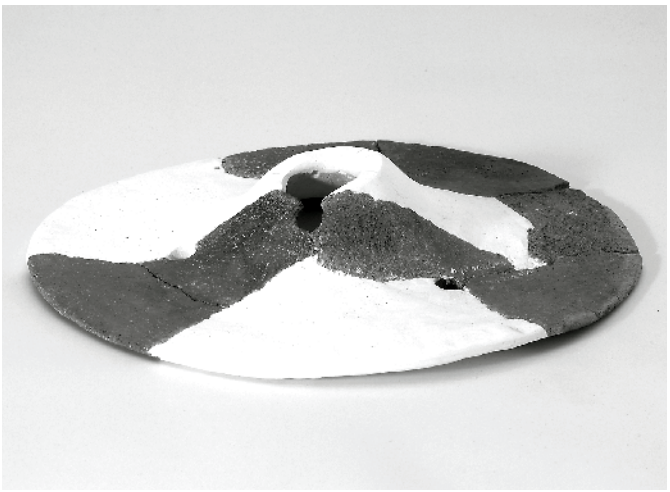
2 号　第 16 図 27

2 号　第 16 図 18

2 号　第 16 図 28

2 号　第 16 図 19

2 号　第 17 図 13



2 号　第 16 図 29

3 号　第 14 図 20

2 号　第 17 図 14

3 号　第 14 図 21

4 号　第 19 図 6

4 号　第 19 図 1

6 号　第 14 図 9

7 号　第 24 図 1

7 号　第 25 図 3

7 号　第 25 図 4

7 号　第 25 図 11

7 号　第 25 図 13

8 号　第 26 図 4

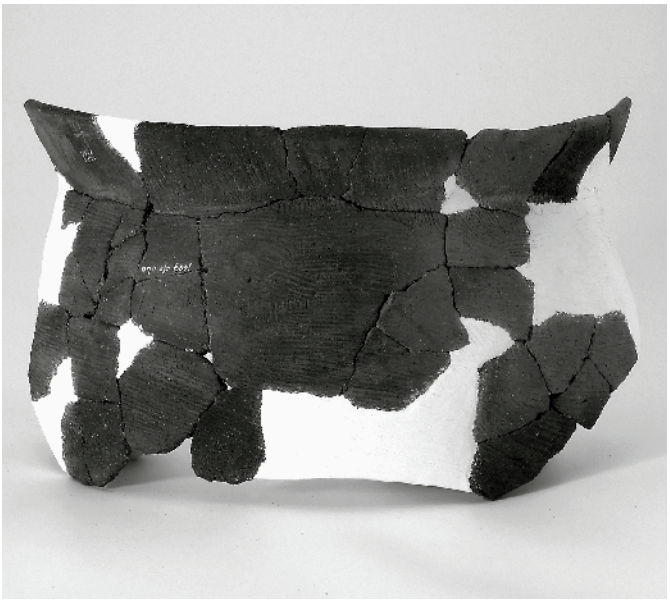
9 号　第 26 図 9

9 号　第 26 図 34

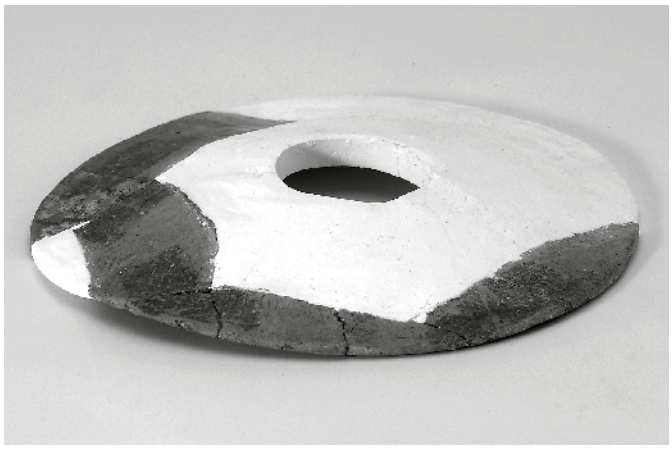
9 号　第 26 図 10

10 号　第 29 図 1

9 号　第 26 図 27



10 号　第 29 図 13



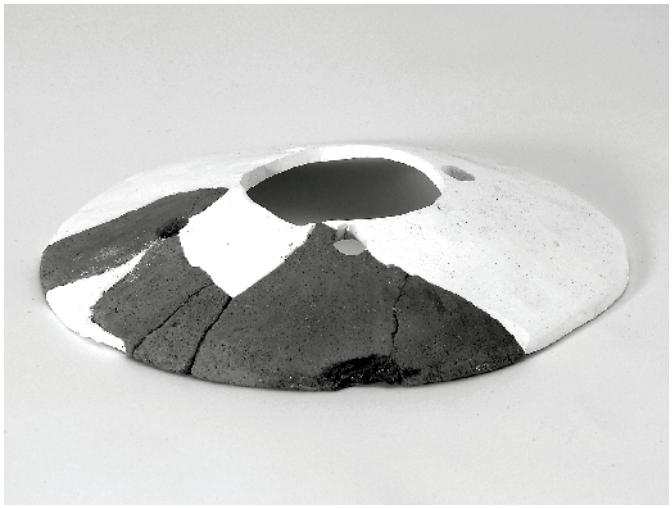
10 号　第 29 図 19

11 号　第 20 図 1

14 号　第 32 図 10

12 号　第 21 図 3

12 号　第 21 図 4



12 号　第 21 図 10

14 号　第 32 図 15

14 号　第 32 図 25

14 号　第 32 図 23

14 号　第 32 図 26

14 号　第 33 図 8

48 号　第 66 図 13

22 号　第 37 図 12

21 号　第 41 図 24

21 号　第 41 図 29

22 号　第 37 図 14

22 号　第 37 図 15

28 号　第 45 図 8

27 号　第 44 図 42

28 号　第 45 図 1

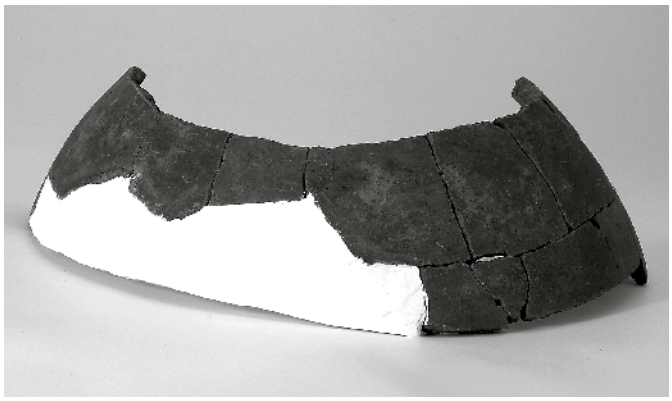
28 号　第 45 図 4

27 号　第 44 図 36

28 号　第 45 図 26

28 号　第 45 図 27

28 号　第 45 図 28



28 号　第 45 図 14

28 号　第 45 図 30

29 号　第 46 図 14

29 号　第 46 図 21

31 号　第 51 図 19

31 号　第 51 図 16

33 号　第 53 図 16

35 号　第 54 図 14

31 号　第 51 図 18

40 号　第 60 図 16

46 号　第 65 図 6

40 号　第 60 図 17

44 号　第 62 図 4

52 号　第 70 図 14

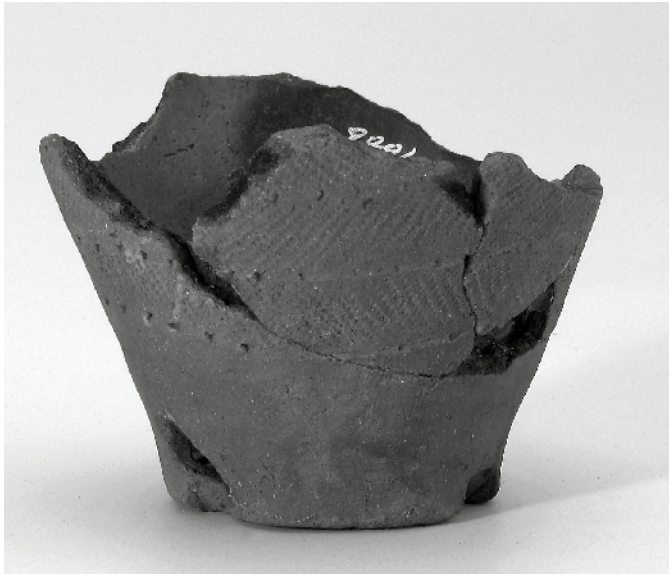
52 号　第 70 図 17

54 号　第 73 図 1

54 号　第 73 図 5

54 号　第 73 図 17

57 号　第 76 図 13



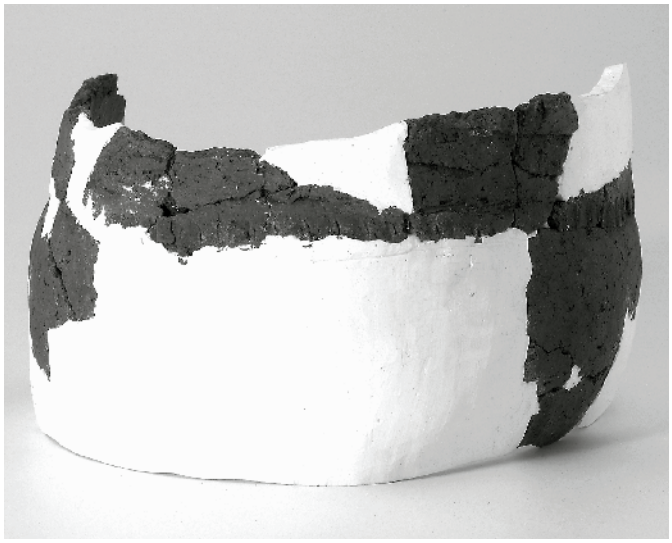
54 号　第 73 図 18

54 号　第 73 図 25

57 号　第 76 図 18

57 号　第 76 図 12

57 号　第 77 図 1



61 号　第 63 図 9

61 号　第 63 図 10

61 号　第 63 図 12

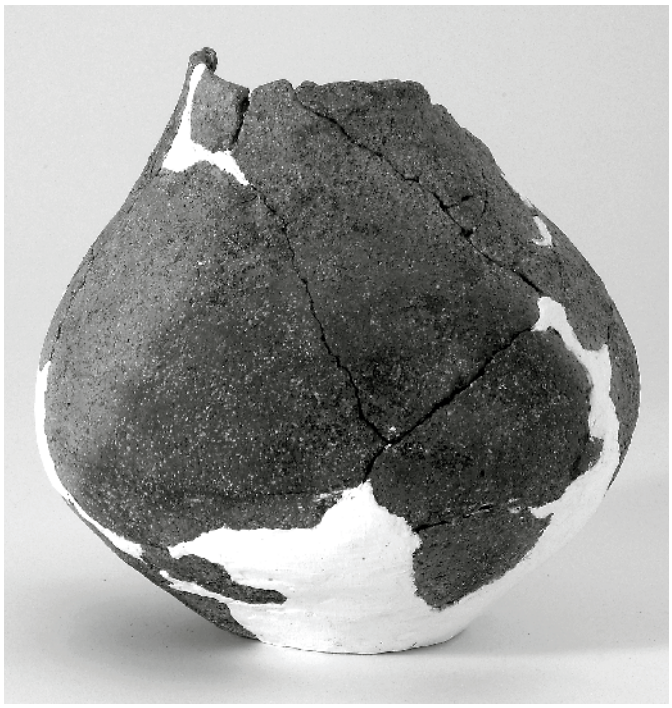
64 号　第 78 図 4

65 号　第 79 図 7

68 号　第 58 図 1

69 号　第 80 図 1

72 号　第 67 図 4



72 号　第 67 図 13

72 号　第 67 図 14

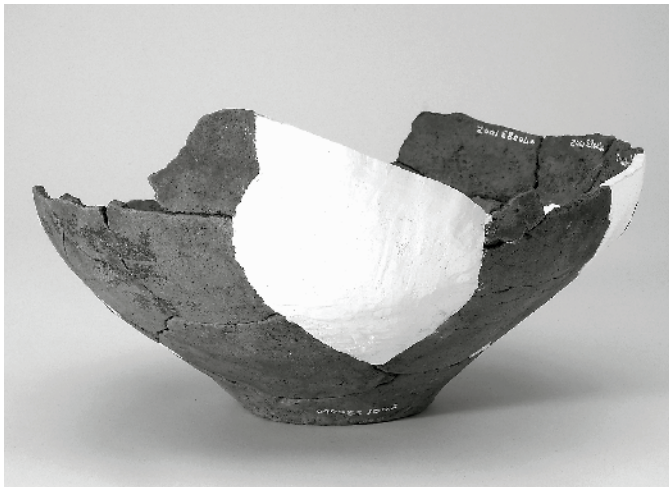
72 号　第 67 図 5

76 号　第 82 図 13

76 号　第 82 図 18

76 号　第 82 図 25

77 号　第 82 図 28



83 号　第 87 図 5

83 号　第 87 図 4

201 号　第 94 図 9

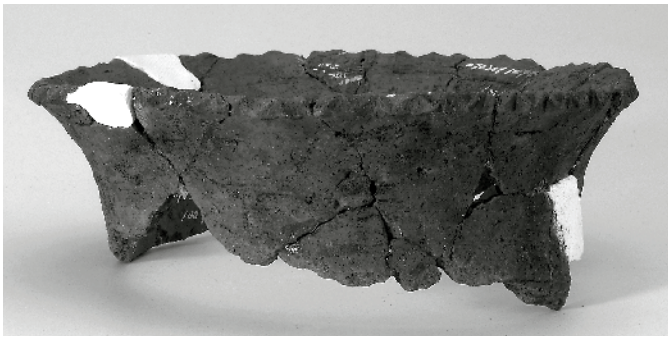
201 号　第 95 図 1

201 号　第 95 図 2

201 号　第 96 図 4

201 号　第 96 図 1

201 号　第 96 図 5



201 号　第 96 図 2

201 号　第 96 図 3

201 号　第 96 図 7

201 号　第 96 図 6

201 号　第 97 図 1

201 号　第 97 図 4

201 号　第 97 図 2

202 号　第 99 図 1

201 号　第 97 図 3

202 号　第 99 図 2

202 号　第 100 図 8

288 号　第 121 図 1

203 号　第 100 図 13

203 号　第 100 図 15

84 号　第 86 図 2

1 号土壙　第 101 図 1

1 号土壙　第 101 図 3

288 号　第 121 図 7

288 号　第 121 図 6

288 号　第 122 図 18

288 号　第 122 図 7

288 号　第 123 図 2

288 号　第 122 図 12

288 号　第 123 図 4

288 号　第 123 図 10

288 号　第 127 図 4

288 号　第 125 図 18

288 号　第 127 図 6

288 号　第 126 図 11

288 号　第 127 図 7

288 号　第 127 図 10

288 号　第 127 図 22

288 号　第 127 図 15

288 号　第 130 図 20

288 号　第 127 図 23

288 号　第 131 図 13

288 号　第 128 図 1

288 号　第 128 図 2

288 号　第 132 図 15

288 号　第 131 図 34

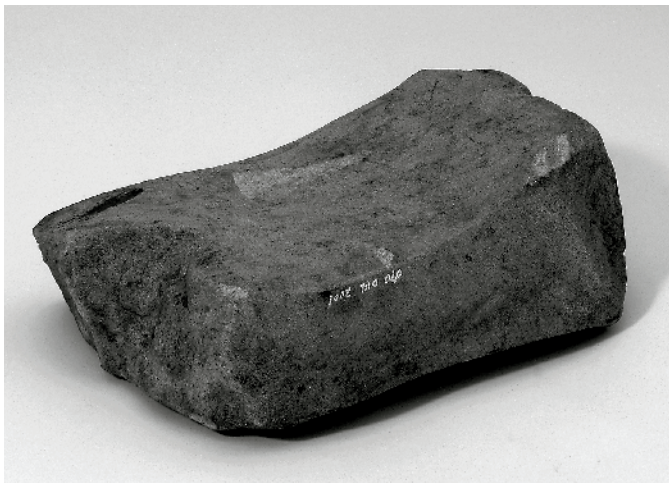
289 号　第 135 図 12

289 号　第 136 図 7

289 号　第 136 図 8

289 号　第 136 図 9

289 号　第 136 図 10

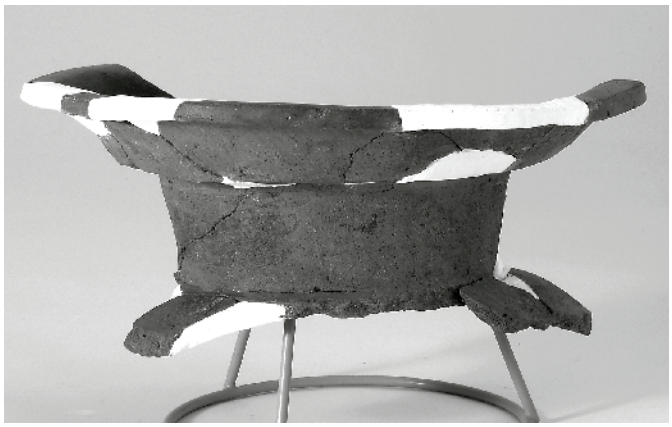


289 号　第 137 図 4

289 号　第 137 図 5

290 号　第 140 図 3

290 号　第 140 図 17



205 号　第 105 図 1

205 号　第 105 図 5

205 号　第 105 図 11

205 号　第 105 図 10

加茂遺跡 C 地点方形周溝墓　鉢

加茂遺跡 C 地点方形周溝墓　高杯

第 148 図　17

加茂遺跡 C 地点方形周溝墓　壺

加茂遺跡 C 地点第 2 号住居址　壺

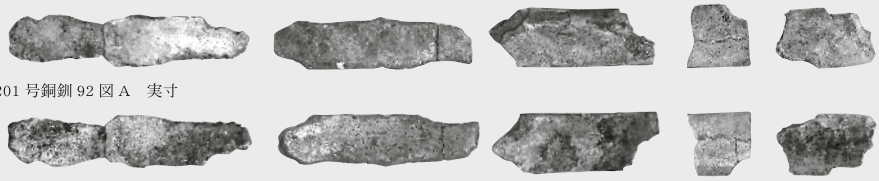
第 149 図 21

第 149 図 20

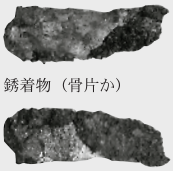
第 149 図 4

第 149 図 26

第 149 図 25

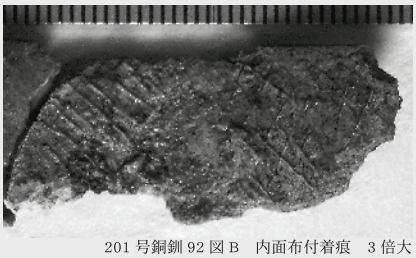


201 号銅釧 92 図 A　実寸



錆着物（骨片か）

201 号銅釧 92 図 B　実寸



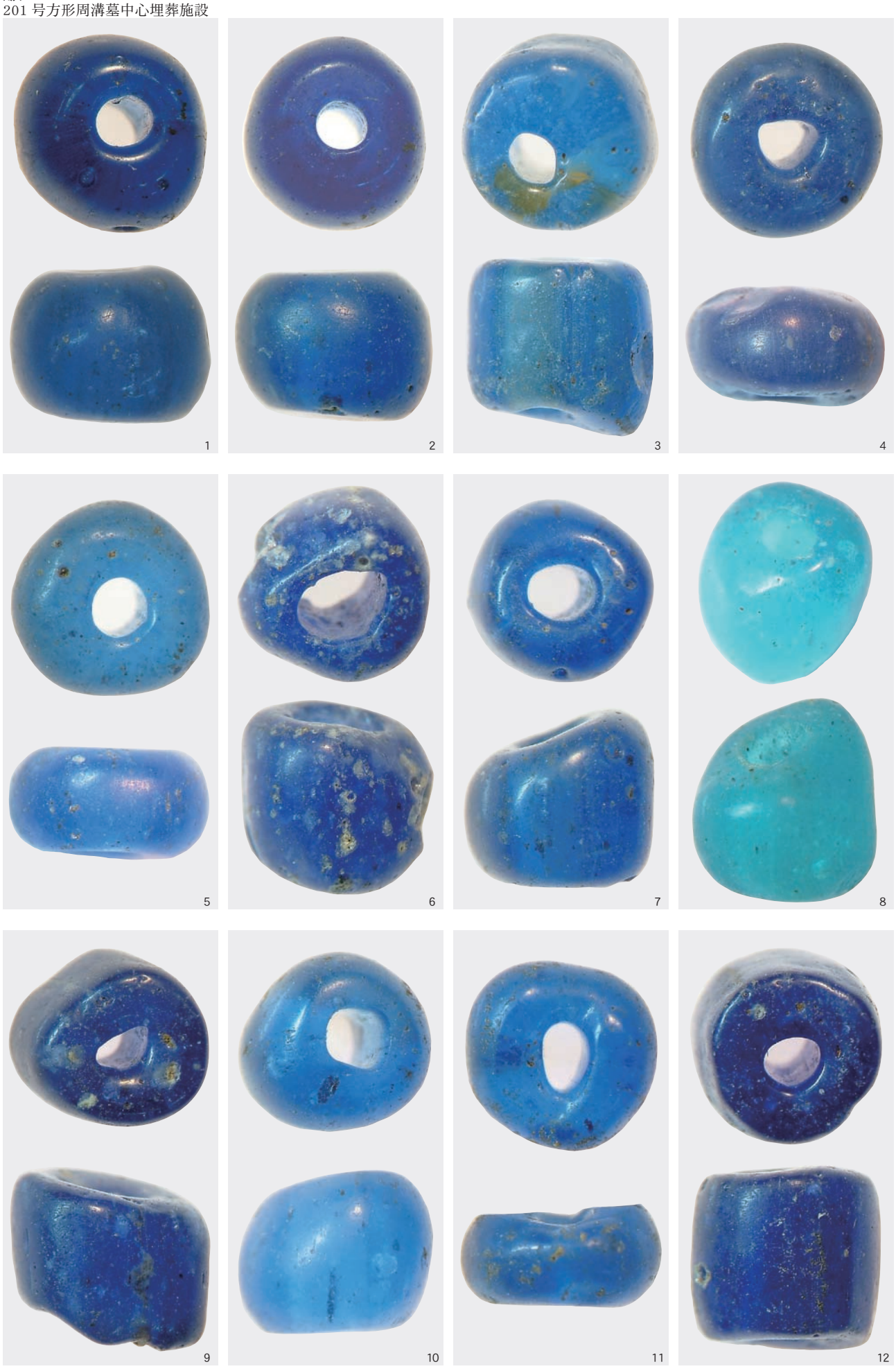
201 号銅釧 92 図 B　内面布付着痕　3 倍大

S=3/2

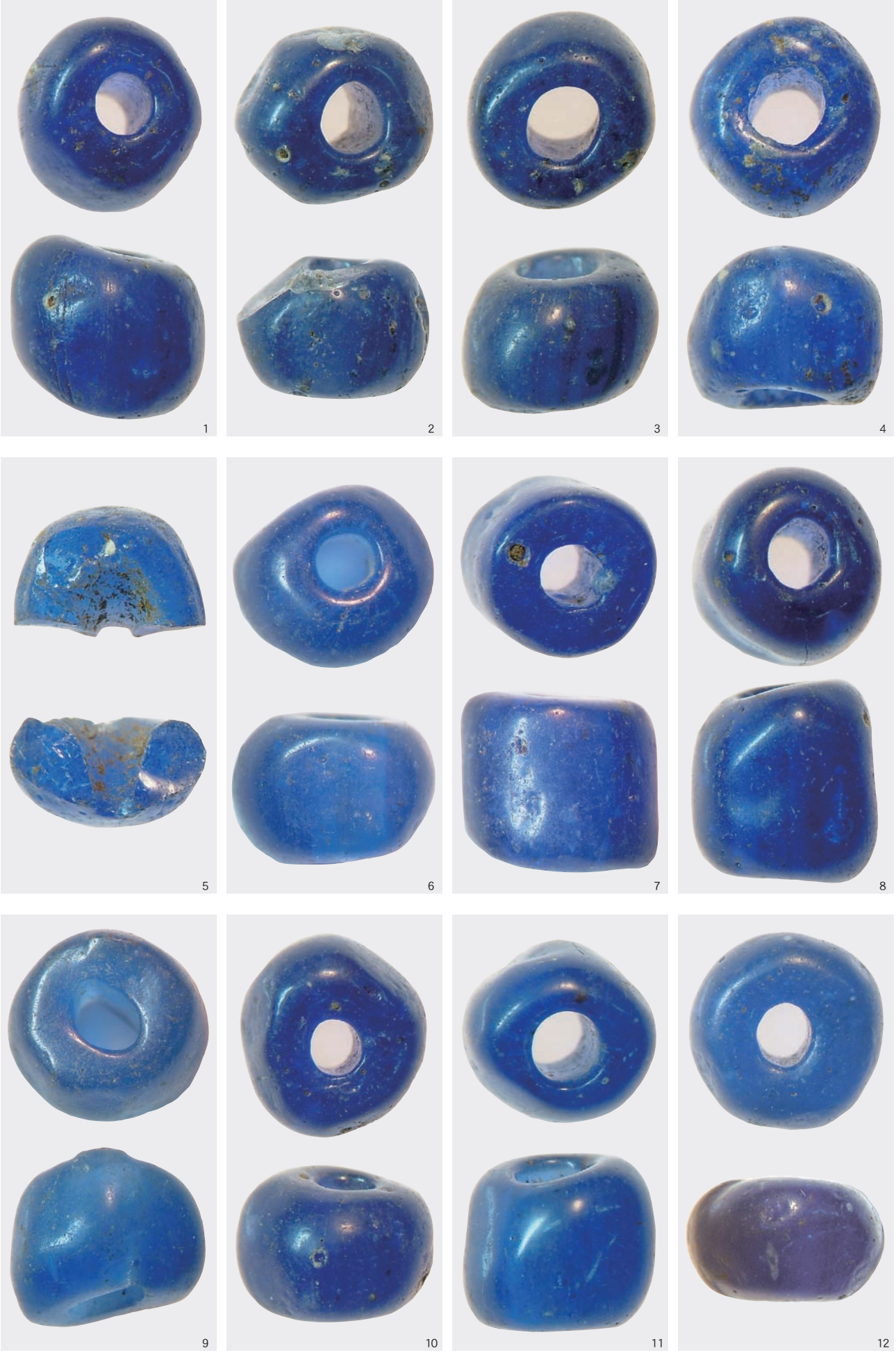
X 線透過写真

288 号 119 図 A　鉄剣　実寸

図版 48
201 号方形周溝墓中心埋葬施設



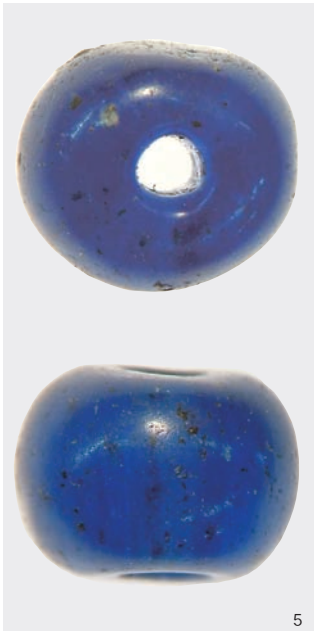
201 号方形周溝墓南溝埋葬施設



図版 50

201 号方形周溝墓南溝西埋葬施設

288 号方形周溝墓中心埋葬施設



8

9

10

11

12

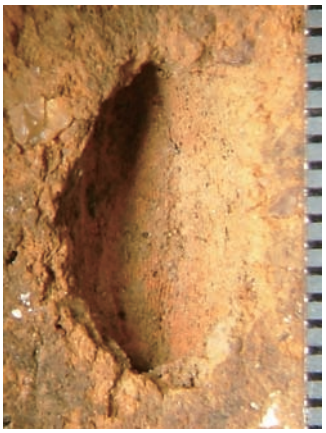
13

14

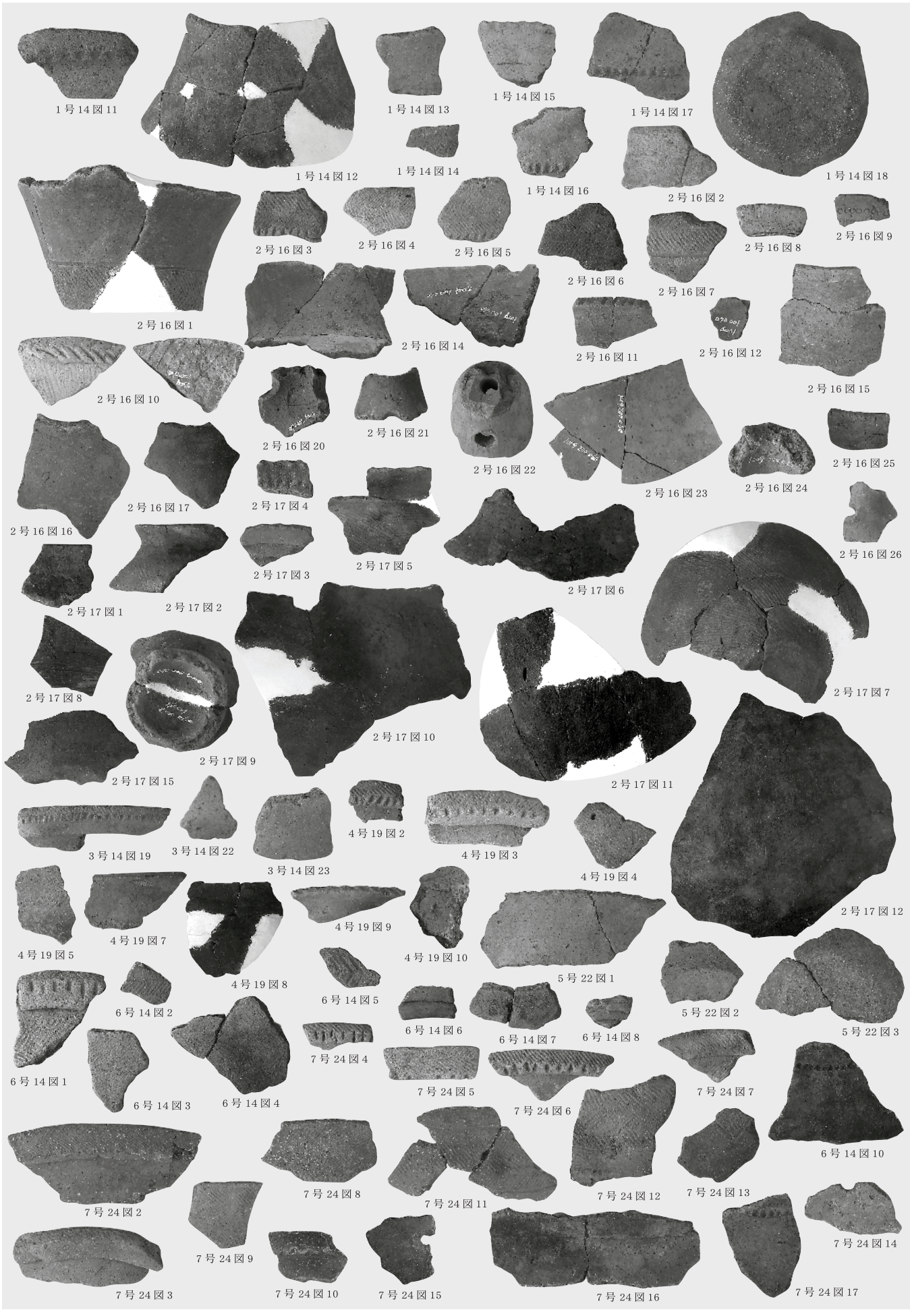
15

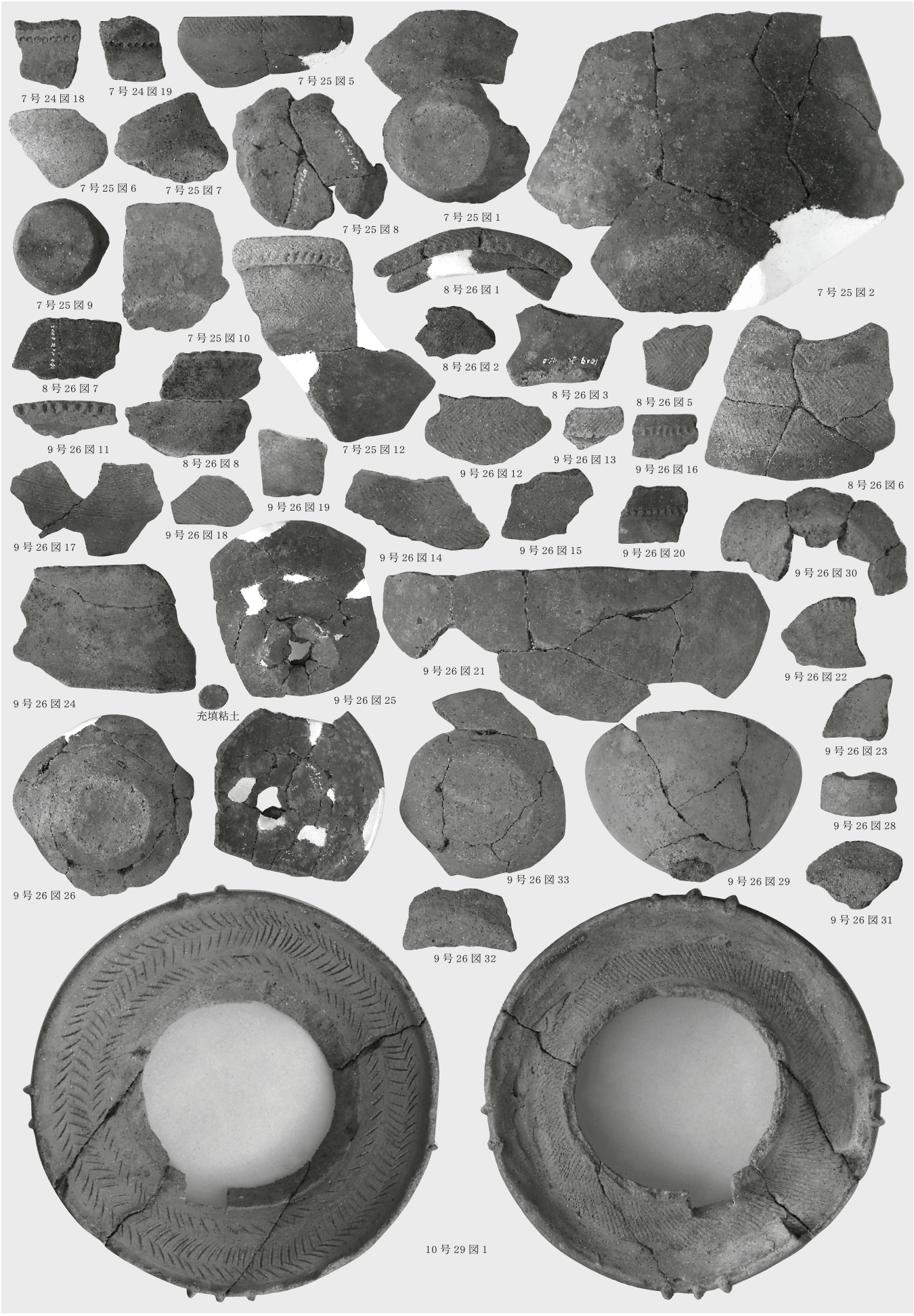
16

17


44 号第 62 図 7　底面籾圧痕

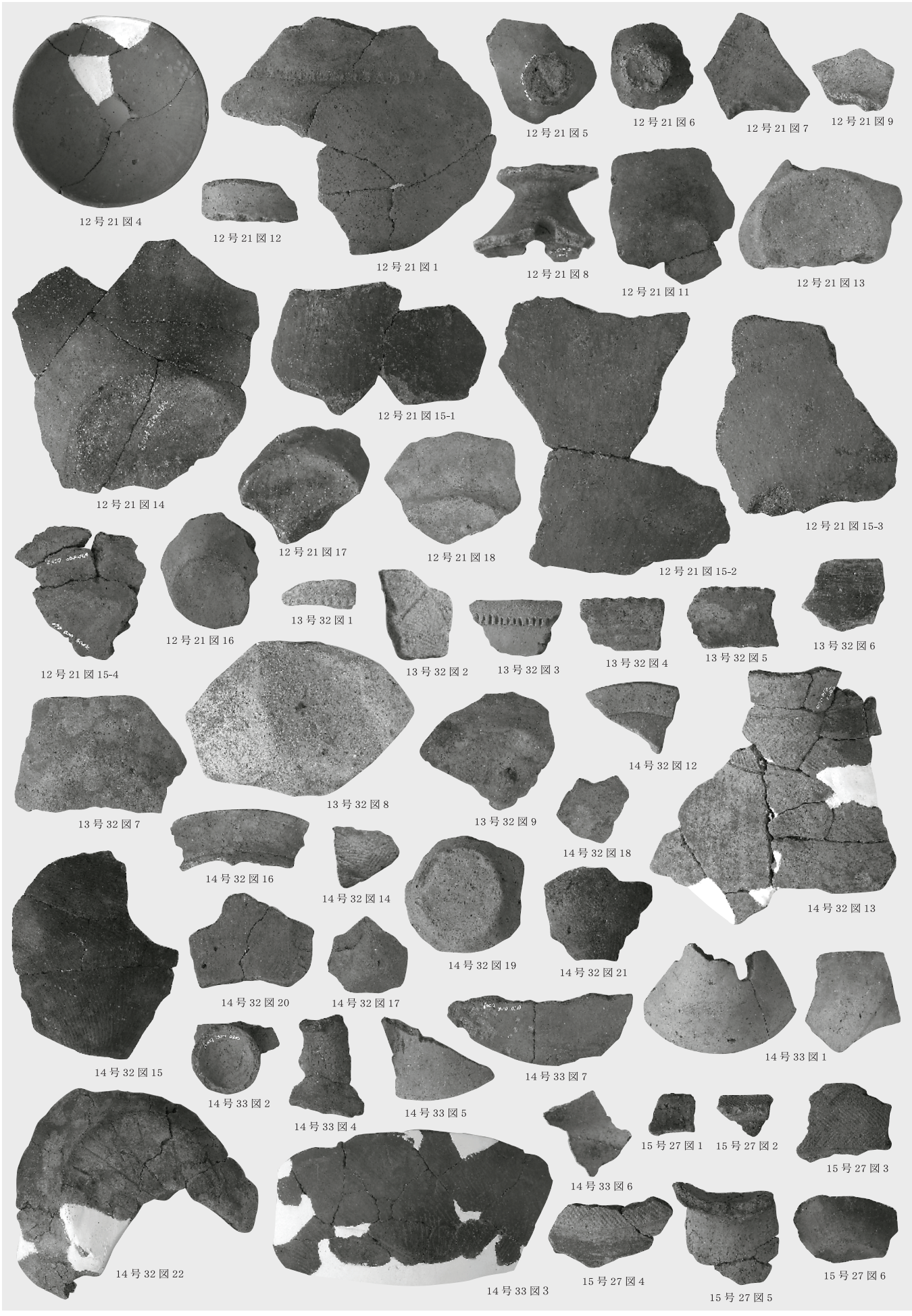
図版 52


1 号 14 図 11
1 号 14 図 12
1 号 14 図 13
1 号 14 図 14
1 号 14 図 15
1 号 14 図 16
1 号 14 図 17
1 号 14 図 18
2 号 16 図 1
2 号 16 図 2
2 号 16 図 3
2 号 16 図 4
2 号 16 図 5
2 号 16 図 6
2 号 16 図 7
2 号 16 図 8
2 号 16 図 9
2 号 16 図 10
2 号 16 図 11
2 号 16 図 12
2 号 16 図 14
2 号 16 図 15
2 号 16 図 16
2 号 16 図 17
2 号 16 図 20
2 号 16 図 21
2 号 16 図 22
2 号 16 図 23
2 号 16 図 24
2 号 16 図 25
2 号 16 図 26
2 号 17 図 1
2 号 17 図 2
2 号 17 図 3
2 号 17 図 4
2 号 17 図 5
2 号 17 図 6
2 号 17 図 7
2 号 17 図 8
2 号 17 図 9
2 号 17 図 10
2 号 17 図 11
2 号 17 図 12
2 号 17 図 15
3 号 14 図 19
3 号 14 図 22
3 号 14 図 23
4 号 19 図 2
4 号 19 図 3
4 号 19 図 4
4 号 19 図 5
4 号 19 図 7
4 号 19 図 8
4 号 19 図 9
4 号 19 図 10
5 号 22 図 1
5 号 22 図 2
5 号 22 図 3
6 号 14 図 1
6 号 14 図 2
6 号 14 図 3
6 号 14 図 4
6 号 14 図 5
6 号 14 図 6
6 号 14 図 7
6 号 14 図 8
6 号 14 図 10
7 号 24 図 2
7 号 24 図 3
7 号 24 図 4
7 号 24 図 5
7 号 24 図 6
7 号 24 図 7
7 号 24 図 8
7 号 24 図 9
7 号 24 図 10
7 号 24 図 11
7 号 24 図 12
7 号 24 図 13
7 号 24 図 14
7 号 24 図 15
7 号 24 図 16
7 号 24 図 17

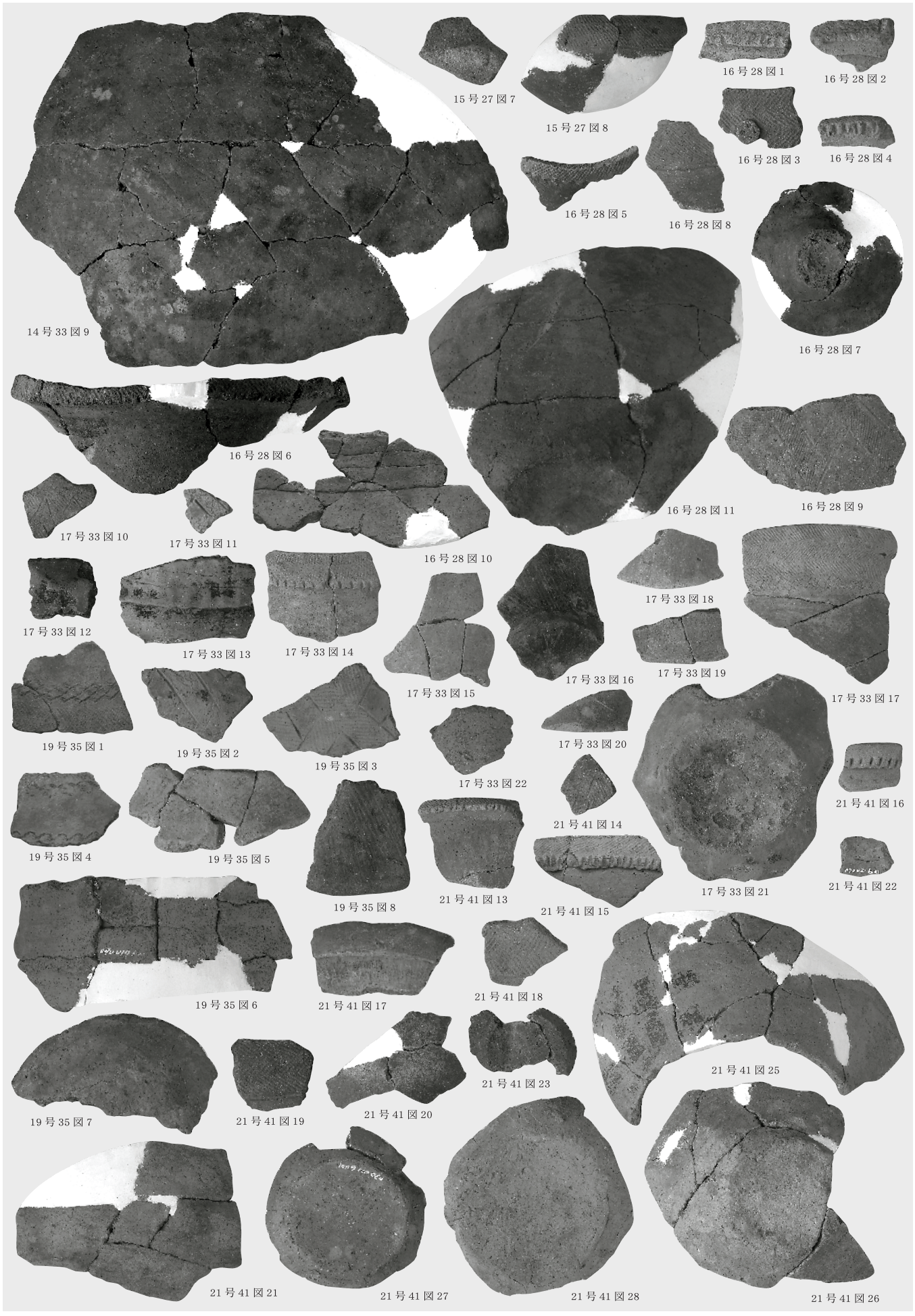

7 号 24 図 18
7 号 24 図 19
7 号 25 図 5
7 号 25 図 6
7 号 25 図 7
7 号 25 図 8
7 号 25 図 1
7 号 25 図 2
7 号 25 図 9
7 号 25 図 10
8 号 26 図 1
8 号 26 図 7
8 号 26 図 2
8 号 26 図 3
8 号 26 図 5
8 号 26 図 6
9 号 26 図 11
8 号 26 図 8
7 号 25 図 12
9 号 26 図 12
9 号 26 図 13
9 号 26 図 16
9 号 26 図 17
9 号 26 図 18
9 号 26 図 19
9 号 26 図 14
9 号 26 図 15
9 号 26 図 20
9 号 26 図 30
9 号 26 図 21
9 号 26 図 22
9 号 26 図 24
9 号 26 図 25
充填粘土
9 号 26 図 23
9 号 26 図 28
9 号 26 図 26
9 号 26 図 33
9 号 26 図 29
9 号 26 図 31
9 号 26 図 32
10 号 29 図 1

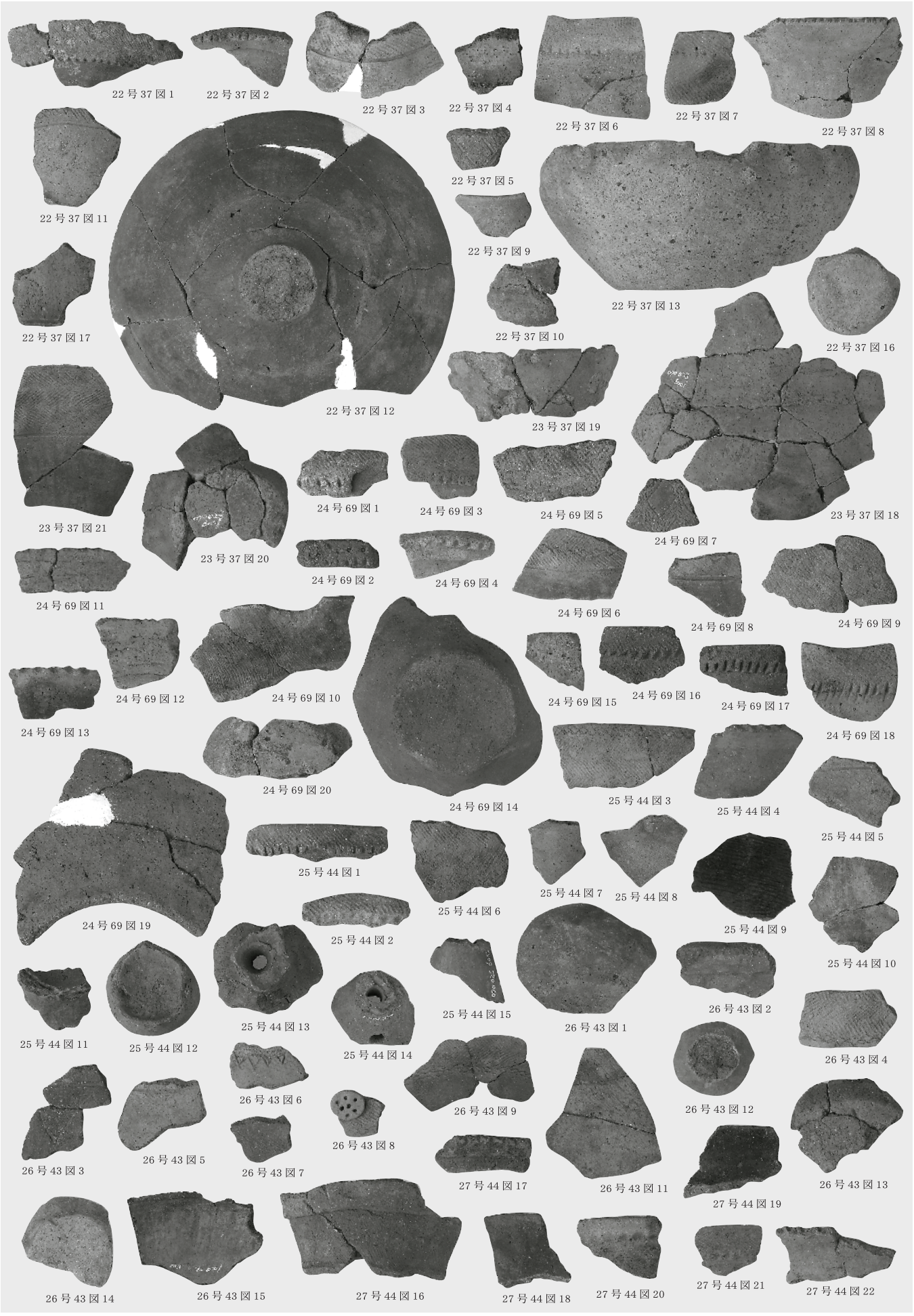
図版 54

10 号 29 図 2
10 号 29 図 3
10 号 29 図 4
10 号 29 図 5
10 号 29 図 6
10 号 29 図 7
10 号 29 図 8
10 号 29 図 9
10 号 29 図 11
10 号 29 図 12
10 号 29 図 14
10 号 29 図 15
10 号 29 図 13 底部
10 号 29 図 10
10 号 29 図 16
10 号 29 図 17
10 号 29 図 18
10 号 29 図 20
10 号 29 図 21
10 号 30 図 1
10 号 30 図 2
10 号 30 図 4
10 号 30 図 5
10 号 30 図 13
10 号 30 図 3
10 号 30 図 6
10 号 30 図 7
10 号 30 図 10
10 号 30 図 11
10 号 30 図 14
10 号 30 図 12
10 号 30 図 8
10 号 30 図 9
11 号 19 図 12
11 号 19 図 13
11 号 19 図 14
11 号 19 図 16
11 号 19 図 17
11 号 19 図 11
11 号 19 図 18
11 号 19 図 19
11 号 19 図 20
11 号 19 図 21
11 号 19 図 22
10 号 30 図 15
11 号 19 図 15
11 号 20 図 3
11 号 20 図 4
11 号 20 図 5
12 号 20 図 9
12 号 20 図 6
12 号 20 図 12
12 号 20 図 13
12 号 20 図 10
11 号 20 図 2
12 号 20 図 11
12 号 20 図 7
12 号 20 図 8
12 号 20 図 14
12 号 20 図 15
12 号 20 図 17
12 号 20 図 18
12 号 20 図 19
12 号 20 図 21
12 号 20 図 16
12 号 20 図 20
12 号 20 図 22
12 号 20 図 23
12 号 20 図 24
12 号 20 図 25
12 号 20 図 26
12 号 20 図 27
12 号 20 図 28
12 号 20 図 29
12 号 20 図 30
12 号 20 図 31
12 号 20 図 32
12 号 21 図 2

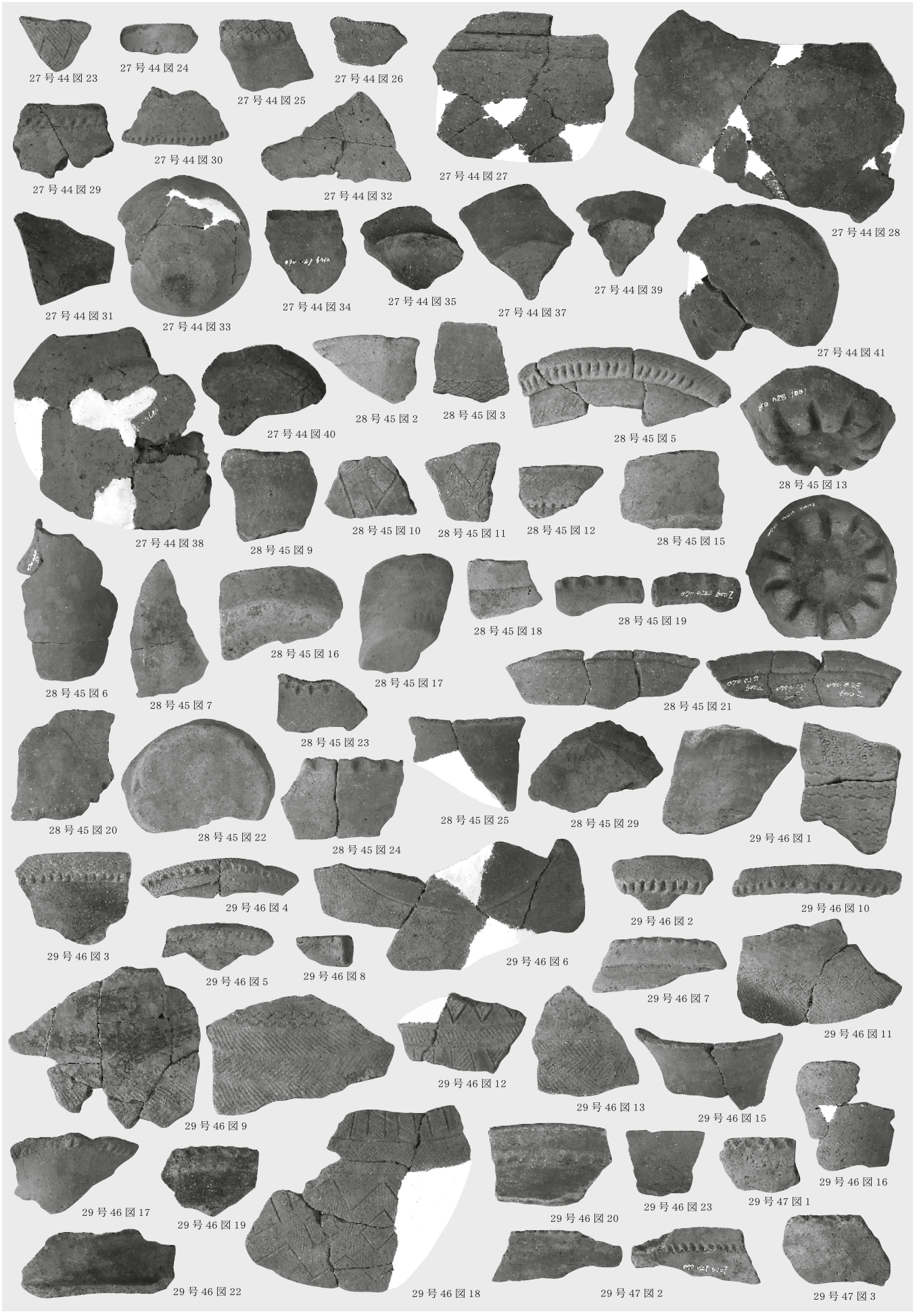

12 号 21 図 4
12 号 21 図 12
12 号 21 図 1
12 号 21 図 5
12 号 21 図 6
12 号 21 図 7
12 号 21 図 9
12 号 21 図 8
12 号 21 図 11
12 号 21 図 13
12 号 21 図 14
12 号 21 図 15-1
12 号 21 図 17
12 号 21 図 18
12 号 21 図 15-2
12 号 21 図 15-3
12 号 21 図 15-4
12 号 21 図 16
13 号 32 図 1
13 号 32 図 2
13 号 32 図 3
13 号 32 図 4
13 号 32 図 5
13 号 32 図 6
13 号 32 図 7
13 号 32 図 8
13 号 32 図 9
14 号 32 図 12
14 号 32 図 18
14 号 32 図 13
14 号 32 図 16
14 号 32 図 14
14 号 32 図 19
14 号 32 図 21
14 号 32 図 15
14 号 32 図 20
14 号 32 図 17
14 号 33 図 1
14 号 33 図 2
14 号 33 図 4
14 号 33 図 5
14 号 33 図 7
15 号 27 図 1
15 号 27 図 2
15 号 27 図 3
14 号 32 図 22
14 号 33 図 3
14 号 33 図 6
15 号 27 図 4
15 号 27 図 5
15 号 27 図 6

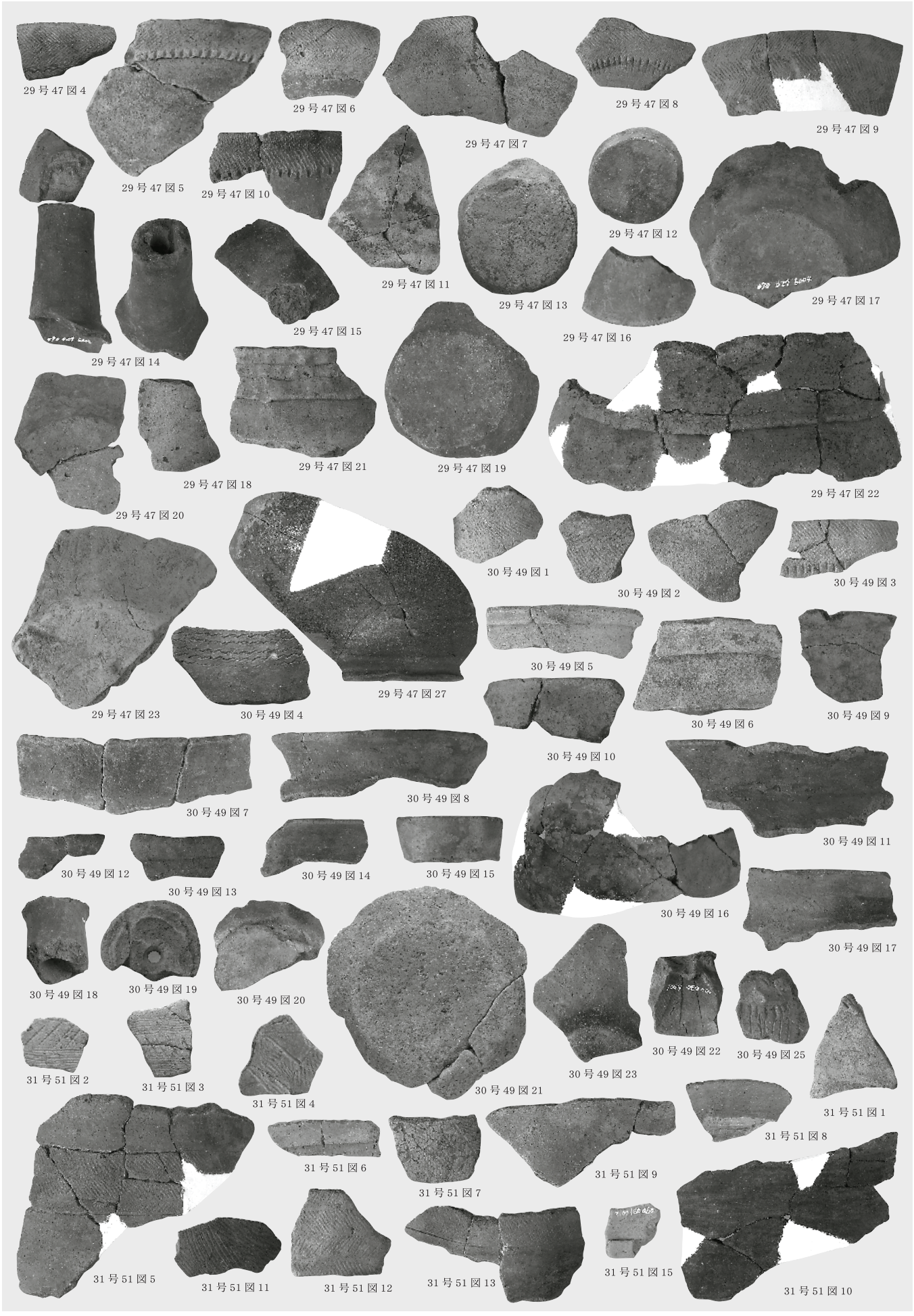
図版 56


14 号 33 図 9
15 号 27 図 7
15 号 27 図 8
16 号 28 図 1
16 号 28 図 2
16 号 28 図 3
16 号 28 図 4
16 号 28 図 5
16 号 28 図 8
16 号 28 図 7
16 号 28 図 6
16 号 28 図 11
16 号 28 図 9
16 号 28 図 10
17 号 33 図 10
17 号 33 図 11
17 号 33 図 12
17 号 33 図 13
17 号 33 図 14
17 号 33 図 15
17 号 33 図 16
17 号 33 図 18
17 号 33 図 19
17 号 33 図 17
19 号 35 図 1
19 号 35 図 2
19 号 35 図 3
17 号 33 図 22
17 号 33 図 20
17 号 33 図 21
21 号 41 図 16
21 号 41 図 14
19 号 35 図 4
19 号 35 図 5
19 号 35 図 8
21 号 41 図 13
21 号 41 図 15
21 号 41 図 22
19 号 35 図 6
21 号 41 図 17
21 号 41 図 18
21 号 41 図 25
19 号 35 図 7
21 号 41 図 19
21 号 41 図 20
21 号 41 図 23
21 号 41 図 21
21 号 41 図 27
21 号 41 図 28
21 号 41 図 26

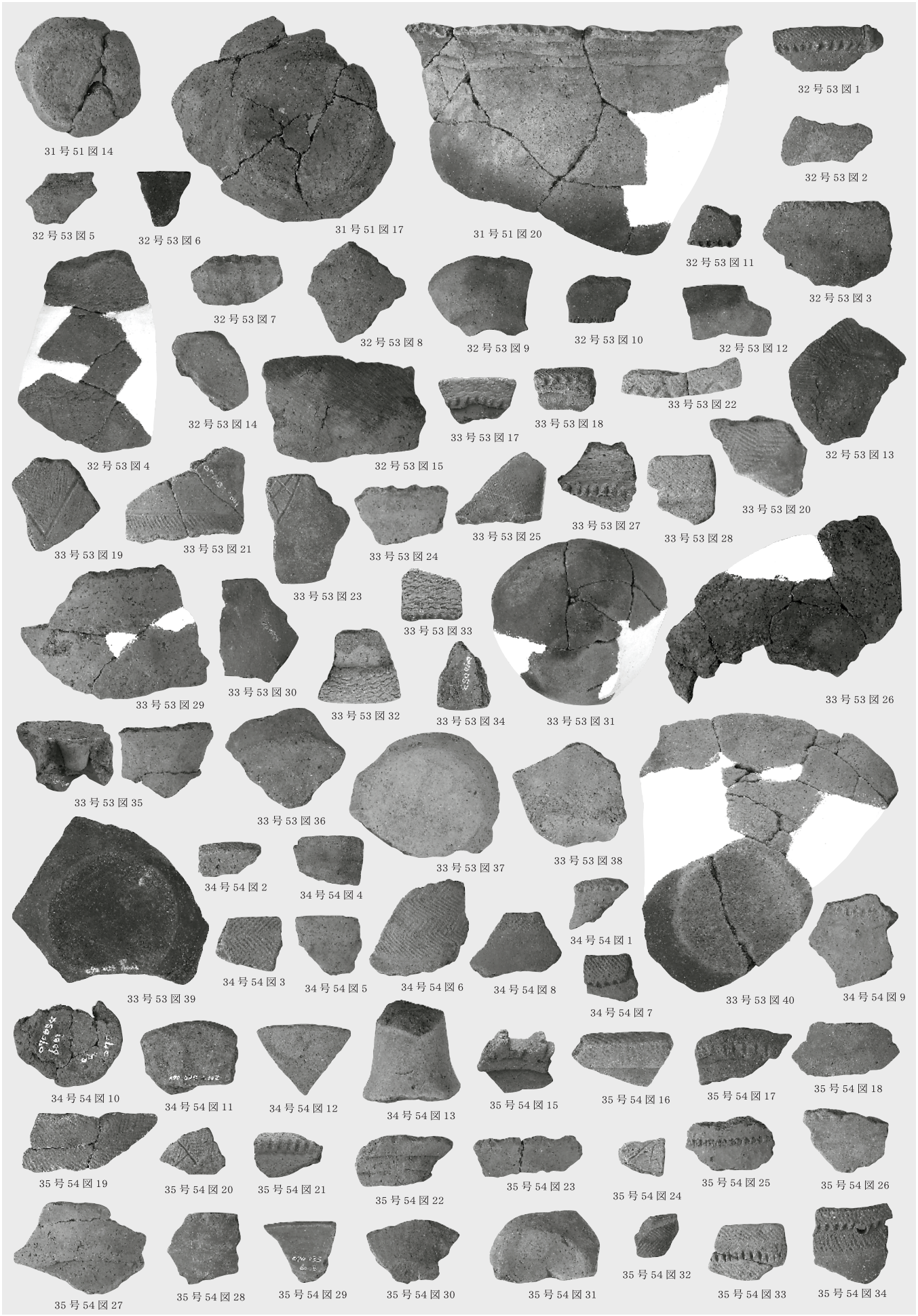

22 号 37 図 1
22 号 37 図 2
22 号 37 図 3
22 号 37 図 4
22 号 37 図 6
22 号 37 図 7
22 号 37 図 8
22 号 37 図 11
22 号 37 図 5
22 号 37 図 9
22 号 37 図 13
22 号 37 図 17
22 号 37 図 10
22 号 37 図 16
22 号 37 図 12
23 号 37 図 19
23 号 37 図 18
23 号 37 図 21
24 号 69 図 1
24 号 69 図 3
24 号 69 図 5
24 号 69 図 7
23 号 37 図 20
24 号 69 図 2
24 号 69 図 4
24 号 69 図 6
24 号 69 図 8
24 号 69 図 9
24 号 69 図 11
24 号 69 図 12
24 号 69 図 10
24 号 69 図 15
24 号 69 図 16
24 号 69 図 17
24 号 69 図 13
24 号 69 図 18
24 号 69 図 20
24 号 69 図 14
25 号 44 図 3
25 号 44 図 4
25 号 44 図 5
24 号 69 図 19
25 号 44 図 1
25 号 44 図 6
25 号 44 図 7
25 号 44 図 8
25 号 44 図 9
25 号 44 図 2
25 号 44 図 10
25 号 44 図 11
25 号 44 図 12
25 号 44 図 13
25 号 44 図 15
26 号 43 図 1
26 号 43 図 2
25 号 44 図 14
26 号 43 図 4
26 号 43 図 6
26 号 43 図 9
26 号 43 図 12
26 号 43 図 3
26 号 43 図 5
26 号 43 図 8
26 号 43 図 11
26 号 43 図 13
26 号 43 図 7
27 号 44 図 17
27 号 44 図 19
26 号 43 図 14
26 号 43 図 15
27 号 44 図 16
27 号 44 図 18
27 号 44 図 20
27 号 44 図 21
27 号 44 図 22

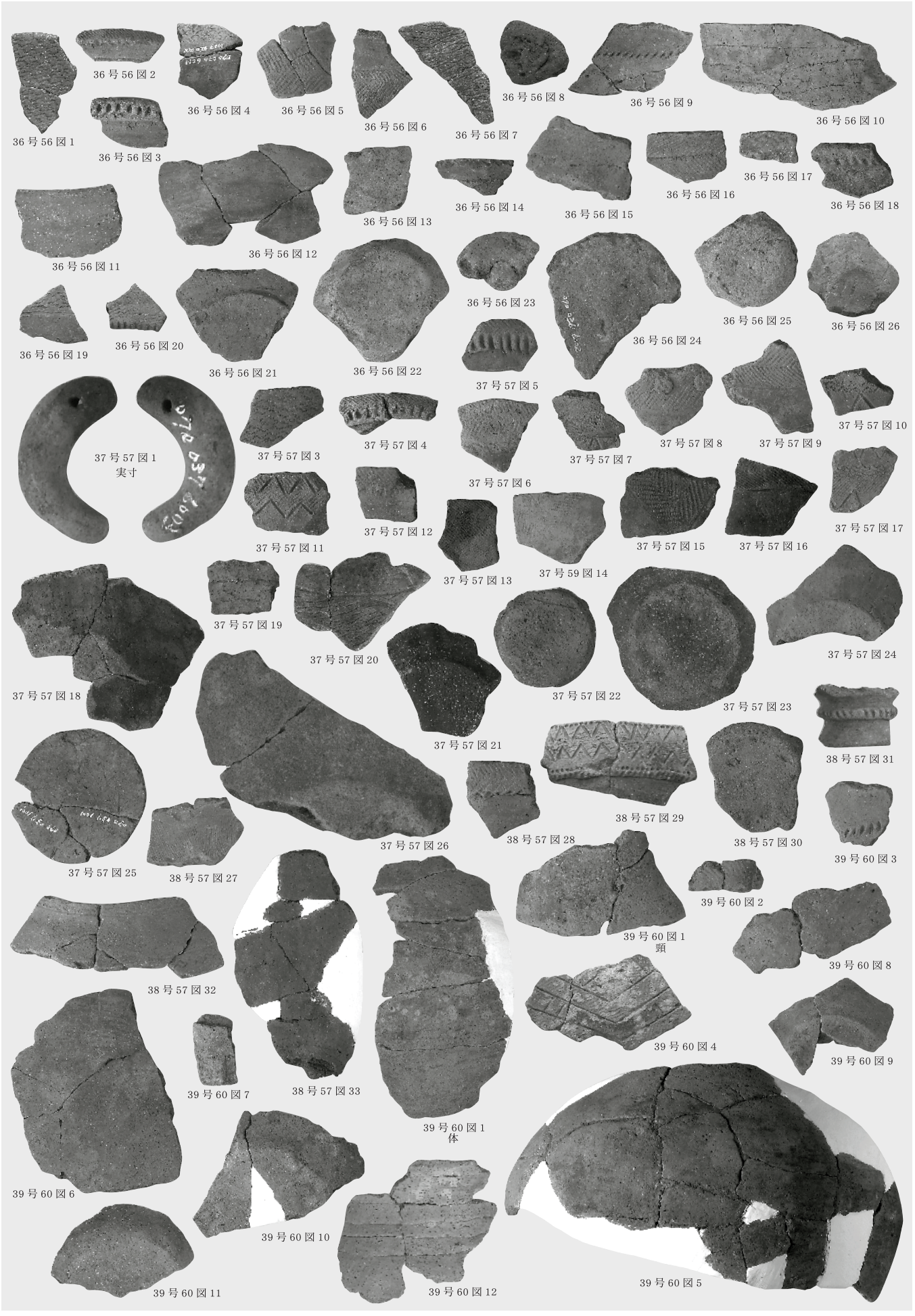
図版 58


27 号 44 図 23
27 号 44 図 24
27 号 44 図 25
27 号 44 図 26
27 号 44 図 27
27 号 44 図 28
27 号 44 図 29
27 号 44 図 30
27 号 44 図 32
27 号 44 図 31
27 号 44 図 33
27 号 44 図 34
27 号 44 図 35
27 号 44 図 37
27 号 44 図 39
27 号 44 図 41
27 号 44 図 38
27 号 44 図 40
28 号 45 図 2
28 号 45 図 3
28 号 45 図 5
28 号 45 図 13
28 号 45 図 9
28 号 45 図 10
28 号 45 図 11
28 号 45 図 12
28 号 45 図 15
28 号 45 図 6
28 号 45 図 7
28 号 45 図 16
28 号 45 図 17
28 号 45 図 18
28 号 45 図 19
28 号 45 図 21
28 号 45 図 23
28 号 45 図 20
28 号 45 図 22
28 号 45 図 24
28 号 45 図 25
28 号 45 図 29
29 号 46 図 1
29 号 46 図 4
29 号 46 図 3
29 号 46 図 6
29 号 46 図 2
29 号 46 図 10
29 号 46 図 5
29 号 46 図 8
29 号 46 図 7
29 号 46 図 11
29 号 46 図 12
29 号 46 図 13
29 号 46 図 15
29 号 46 図 9
29 号 46 図 16
29 号 46 図 17
29 号 46 図 19
29 号 46 図 20
29 号 46 図 23
29 号 47 図 1
29 号 46 図 22
29 号 46 図 18
29 号 47 図 2
29 号 47 図 3

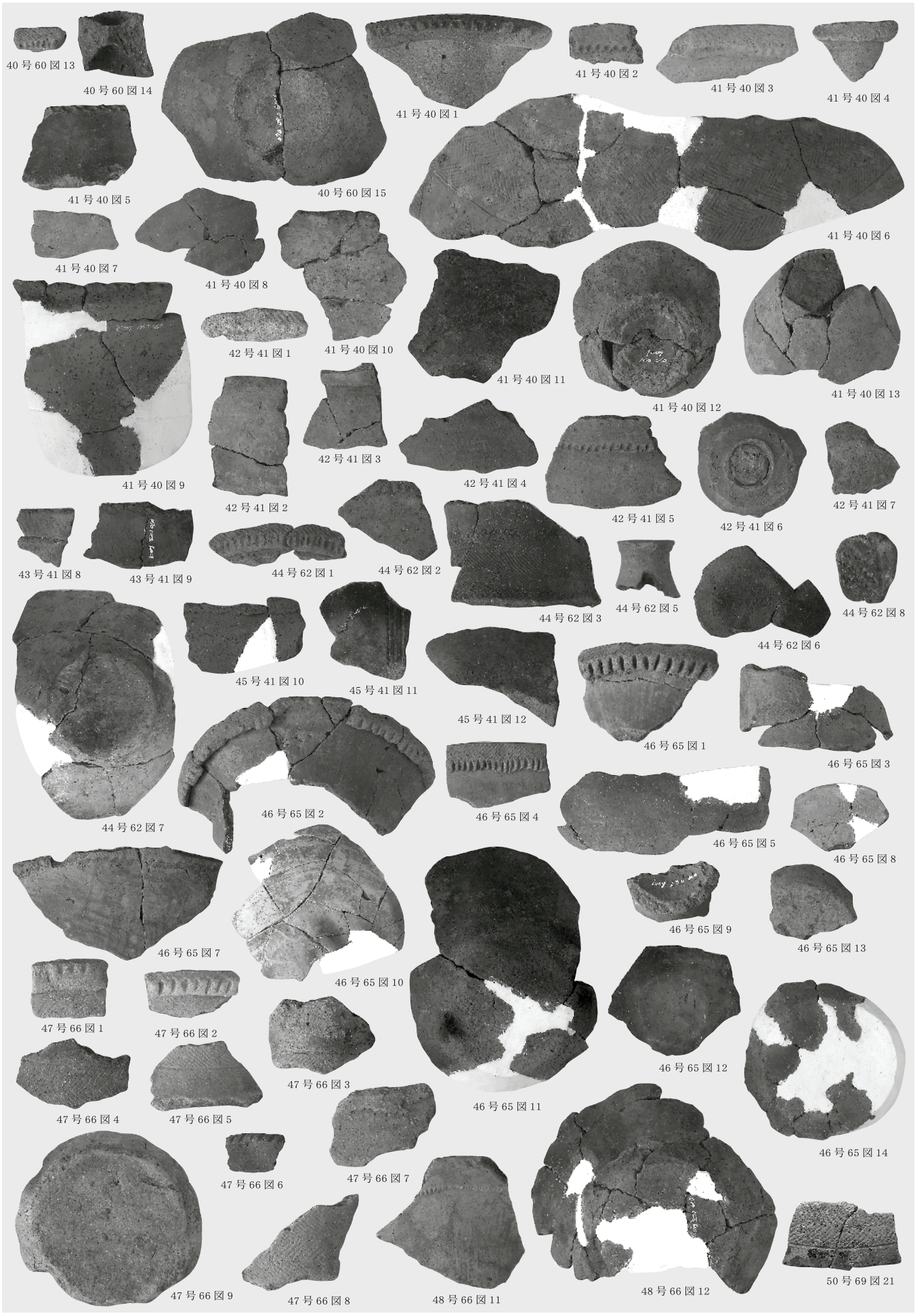

29 号 47 図 4
29 号 47 図 5
29 号 47 図 6
29 号 47 図 7
29 号 47 図 8
29 号 47 図 9
29 号 47 図 10
29 号 47 図 11
29 号 47 図 12
29 号 47 図 13
29 号 47 図 14
29 号 47 図 15
29 号 47 図 16
29 号 47 図 17
29 号 47 図 18
29 号 47 図 19
29 号 47 図 20
29 号 47 図 21
29 号 47 図 22
29 号 47 図 23
29 号 47 図 27
30 号 49 図 1
30 号 49 図 2
30 号 49 図 3
30 号 49 図 4
30 号 49 図 5
30 号 49 図 6
30 号 49 図 7
30 号 49 図 8
30 号 49 図 9
30 号 49 図 10
30 号 49 図 11
30 号 49 図 12
30 号 49 図 13
30 号 49 図 14
30 号 49 図 15
30 号 49 図 16
30 号 49 図 17
30 号 49 図 18
30 号 49 図 19
30 号 49 図 20
30 号 49 図 21
30 号 49 図 22
30 号 49 図 23
30 号 49 図 25
31 号 51 図 1
31 号 51 図 2
31 号 51 図 3
31 号 51 図 4
31 号 51 図 5
31 号 51 図 6
31 号 51 図 7
31 号 51 図 8
31 号 51 図 9
31 号 51 図 10
31 号 51 図 11
31 号 51 図 12
31 号 51 図 13
31 号 51 図 15

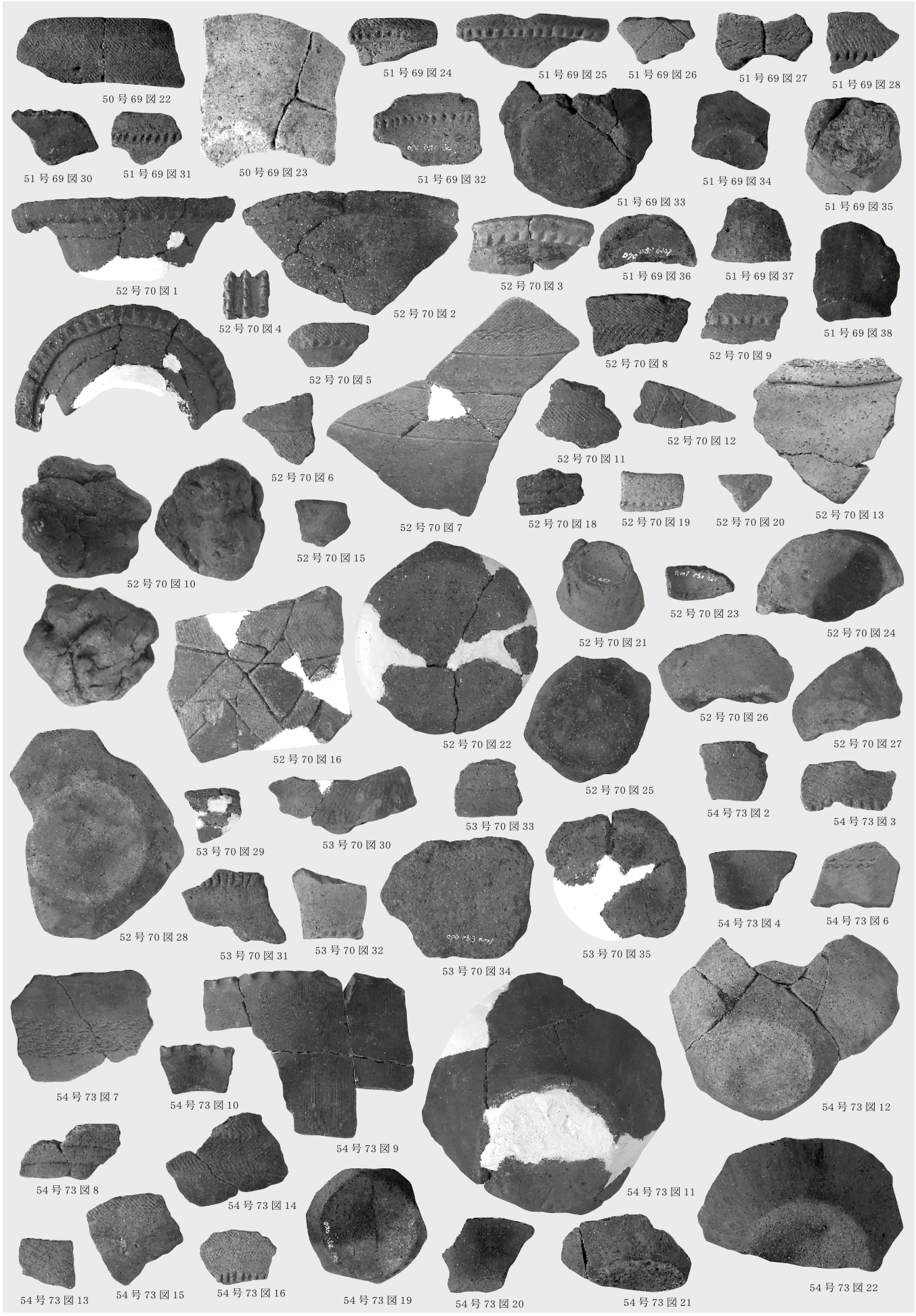
図版 60


31 号 51 図 14
31 号 51 図 17
31 号 51 図 20
32 号 53 図 1
32 号 53 図 2
32 号 53 図 5
32 号 53 図 6
32 号 53 図 11
32 号 53 図 3
32 号 53 図 7
32 号 53 図 8
32 号 53 図 9
32 号 53 図 10
32 号 53 図 12
32 号 53 図 4
32 号 53 図 14
32 号 53 図 15
33 号 53 図 17
33 号 53 図 18
33 号 53 図 22
32 号 53 図 13
33 号 53 図 19
33 号 53 図 21
33 号 53 図 23
33 号 53 図 24
33 号 53 図 25
33 号 53 図 27
33 号 53 図 28
33 号 53 図 20
33 号 53 図 29
33 号 53 図 30
33 号 53 図 33
33 号 53 図 32
33 号 53 図 34
33 号 53 図 31
33 号 53 図 26
33 号 53 図 35
33 号 53 図 36
33 号 53 図 37
33 号 53 図 38
34 号 54 図 2
34 号 54 図 4
34 号 54 図 1
33 号 53 図 39
34 号 54 図 3
34 号 54 図 5
34 号 54 図 6
34 号 54 図 8
34 号 54 図 7
33 号 53 図 40
34 号 54 図 9
34 号 54 図 10
34 号 54 図 11
34 号 54 図 12
34 号 54 図 13
35 号 54 図 15
35 号 54 図 16
35 号 54 図 17
35 号 54 図 18
35 号 54 図 19
35 号 54 図 20
35 号 54 図 21
35 号 54 図 22
35 号 54 図 23
35 号 54 図 24
35 号 54 図 25
35 号 54 図 26
35 号 54 図 27
35 号 54 図 28
35 号 54 図 29
35 号 54 図 30
35 号 54 図 31
35 号 54 図 32
35 号 54 図 33
35 号 54 図 34

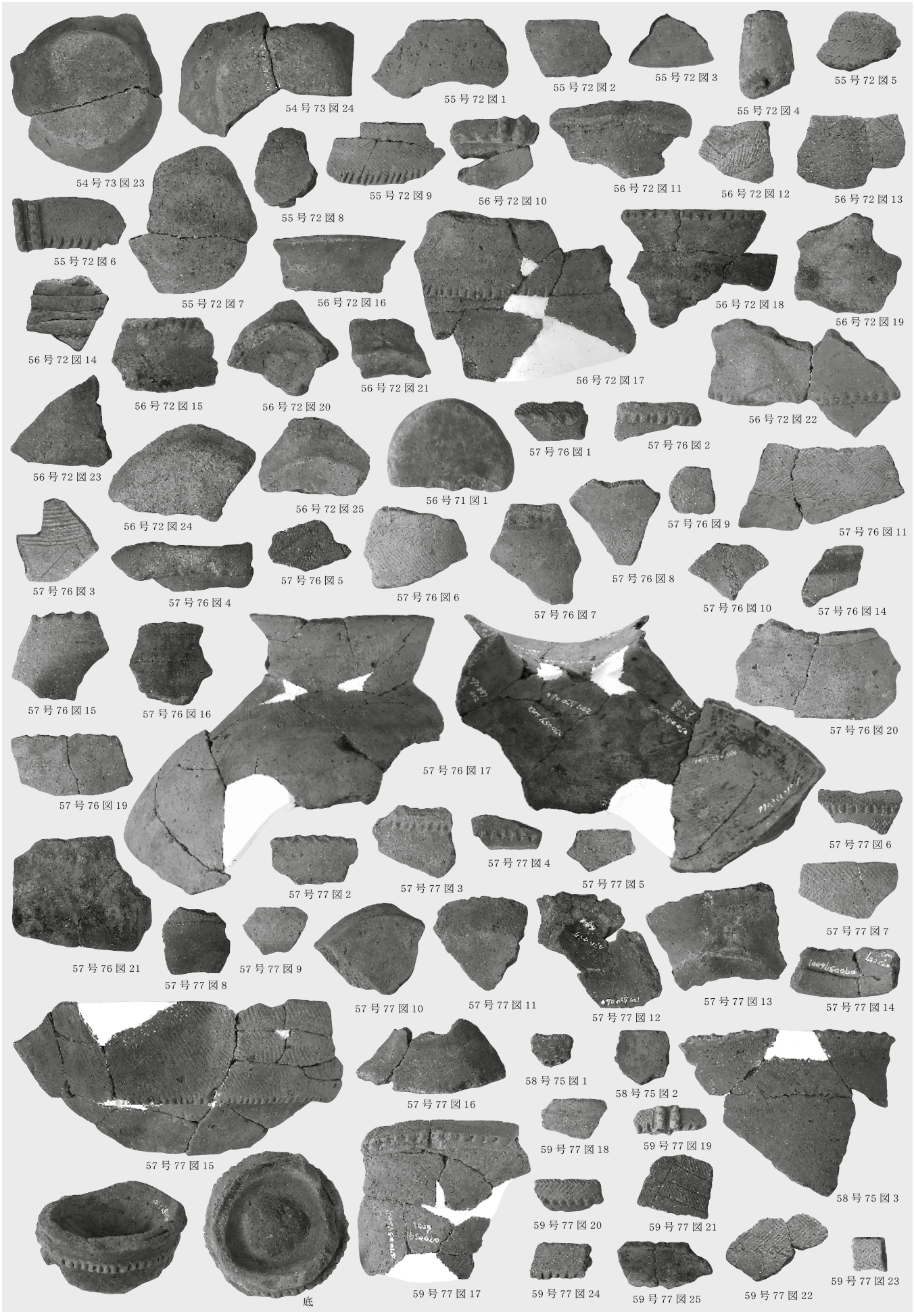

36 号 56 図 1
36 号 56 図 2
36 号 56 図 3
36 号 56 図 4
36 号 56 図 5
36 号 56 図 6
36 号 56 図 7
36 号 56 図 8
36 号 56 図 9
36 号 56 図 10
36 号 56 図 11
36 号 56 図 12
36 号 56 図 13
36 号 56 図 14
36 号 56 図 15
36 号 56 図 16
36 号 56 図 17
36 号 56 図 18
36 号 56 図 19
36 号 56 図 20
36 号 56 図 21
36 号 56 図 22
36 号 56 図 23
36 号 56 図 24
36 号 56 図 25
36 号 56 図 26
37 号 57 図 1
実寸
37 号 57 図 3
37 号 57 図 4
37 号 57 図 5
37 号 57 図 6
37 号 57 図 7
37 号 57 図 8
37 号 57 図 9
37 号 57 図 10
37 号 57 図 11
37 号 57 図 12
37 号 57 図 13
37 号 59 図 14
37 号 57 図 15
37 号 57 図 16
37 号 57 図 17
37 号 57 図 18
37 号 57 図 19
37 号 57 図 20
37 号 57 図 21
37 号 57 図 22
37 号 57 図 23
37 号 57 図 24
37 号 57 図 25
37 号 57 図 26
38 号 57 図 27
38 号 57 図 28
38 号 57 図 29
38 号 57 図 30
38 号 57 図 31
38 号 57 図 32
38 号 57 図 33
39 号 60 図 1
頸
39 号 60 図 1
体
39 号 60 図 2
39 号 60 図 3
39 号 60 図 4
39 号 60 図 5
39 号 60 図 6
39 号 60 図 7
39 号 60 図 8
39 号 60 図 9
39 号 60 図 10
39 号 60 図 11
39 号 60 図 12

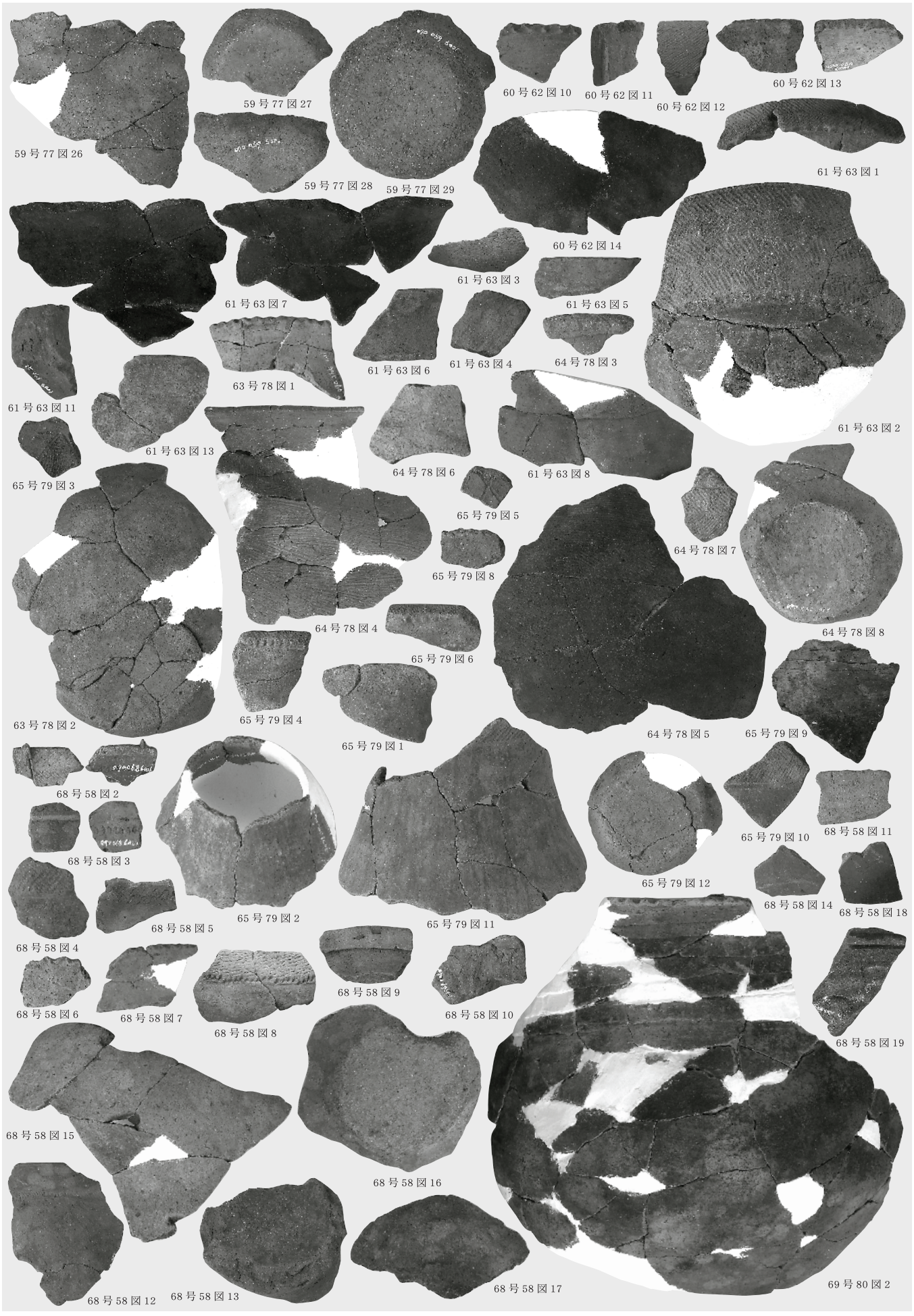
図版 62


40 号 60 図 13
40 号 60 図 14
40 号 60 図 15
41 号 40 図 1
41 号 40 図 2
41 号 40 図 3
41 号 40 図 4
41 号 40 図 5
41 号 40 図 6
41 号 40 図 7
41 号 40 図 8
41 号 40 図 9
41 号 40 図 10
41 号 40 図 11
41 号 40 図 12
41 号 40 図 13
42 号 41 図 1
42 号 41 図 2
42 号 41 図 3
42 号 41 図 4
42 号 41 図 5
42 号 41 図 6
42 号 41 図 7
43 号 41 図 8
43 号 41 図 9
44 号 62 図 1
44 号 62 図 2
44 号 62 図 3
44 号 62 図 5
44 号 62 図 6
44 号 62 図 7
44 号 62 図 8
45 号 41 図 10
45 号 41 図 11
45 号 41 図 12
46 号 65 図 1
46 号 65 図 2
46 号 65 図 3
46 号 65 図 4
46 号 65 図 5
46 号 65 図 7
46 号 65 図 8
46 号 65 図 9
46 号 65 図 10
46 号 65 図 11
46 号 65 図 12
46 号 65 図 13
46 号 65 図 14
47 号 66 図 1
47 号 66 図 2
47 号 66 図 3
47 号 66 図 4
47 号 66 図 5
47 号 66 図 6
47 号 66 図 7
47 号 66 図 8
47 号 66 図 9
48 号 66 図 11
48 号 66 図 12
50 号 69 図 21

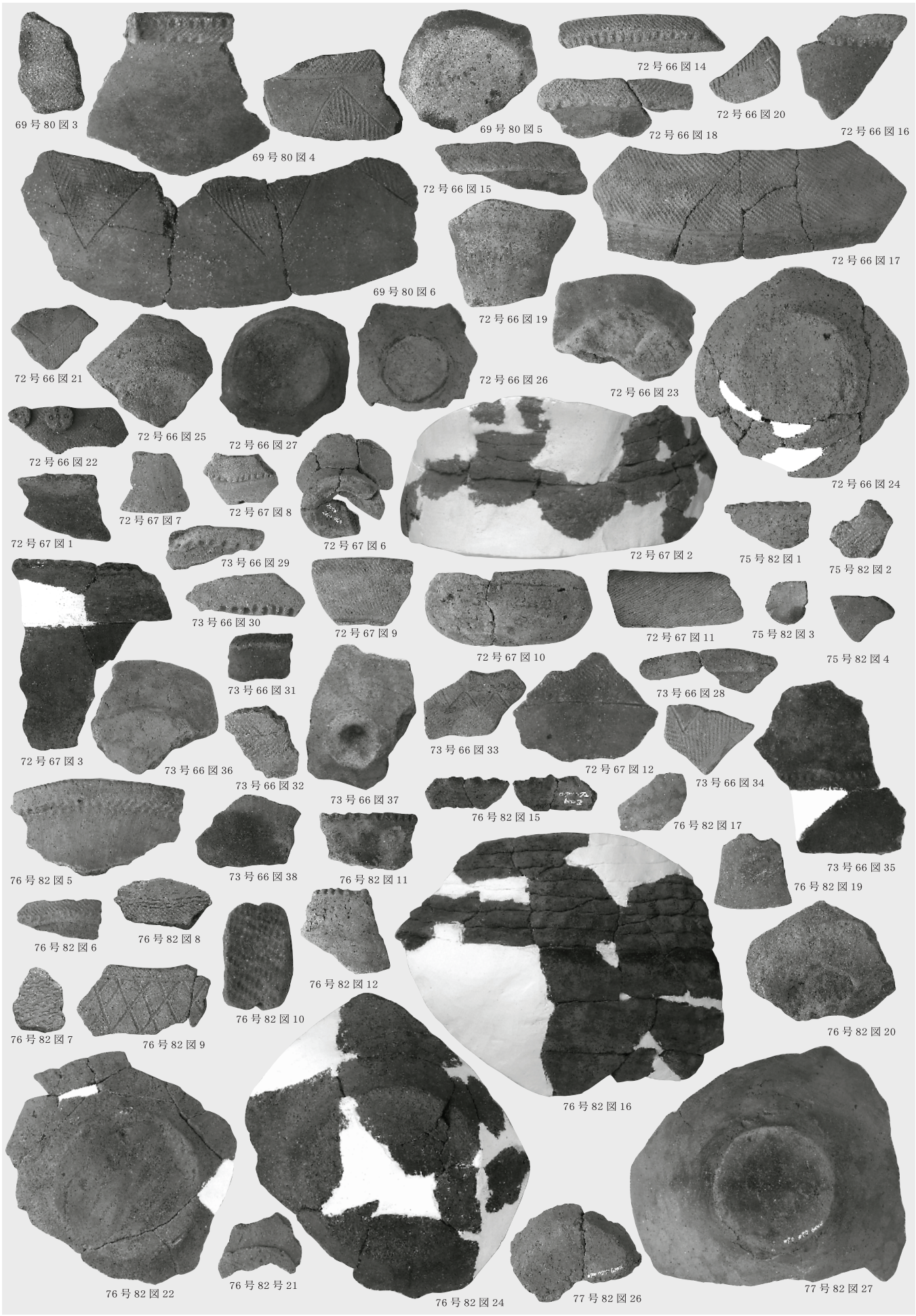

50 号 69 図 22
51 号 69 図 30
51 号 69 図 31
50 号 69 図 23
51 号 69 図 24
51 号 69 図 32
51 号 69 図 25
51 号 69 図 26
51 号 69 図 33
51 号 69 図 27
51 号 69 図 34
51 号 69 図 28
51 号 69 図 35
52 号 70 図 1
52 号 70 図 4
52 号 70 図 2
52 号 70 図 3
51 号 69 図 36
51 号 69 図 37
51 号 69 図 38
52 号 70 図 5
52 号 70 図 8
52 号 70 図 9
52 号 70 図 6
52 号 70 図 7
52 号 70 図 11
52 号 70 図 12
52 号 70 図 13
52 号 70 図 10
52 号 70 図 15
52 号 70 図 18
52 号 70 図 19
52 号 70 図 20
52 号 70 図 21
52 号 70 図 23
52 号 70 図 24
52 号 70 図 16
52 号 70 図 22
52 号 70 図 26
52 号 70 図 27
52 号 70 図 25
54 号 73 図 2
54 号 73 図 3
53 号 70 図 29
53 号 70 図 30
53 号 70 図 33
52 号 70 図 28
53 号 70 図 31
53 号 70 図 32
53 号 70 図 34
53 号 70 図 35
54 号 73 図 4
54 号 73 図 6
54 号 73 図 7
54 号 73 図 10
54 号 73 図 9
54 号 73 図 12
54 号 73 図 8
54 号 73 図 14
54 号 73 図 11
54 号 73 図 13
54 号 73 図 15
54 号 73 図 16
54 号 73 図 19
54 号 73 図 20
54 号 73 図 21
54 号 73 図 22

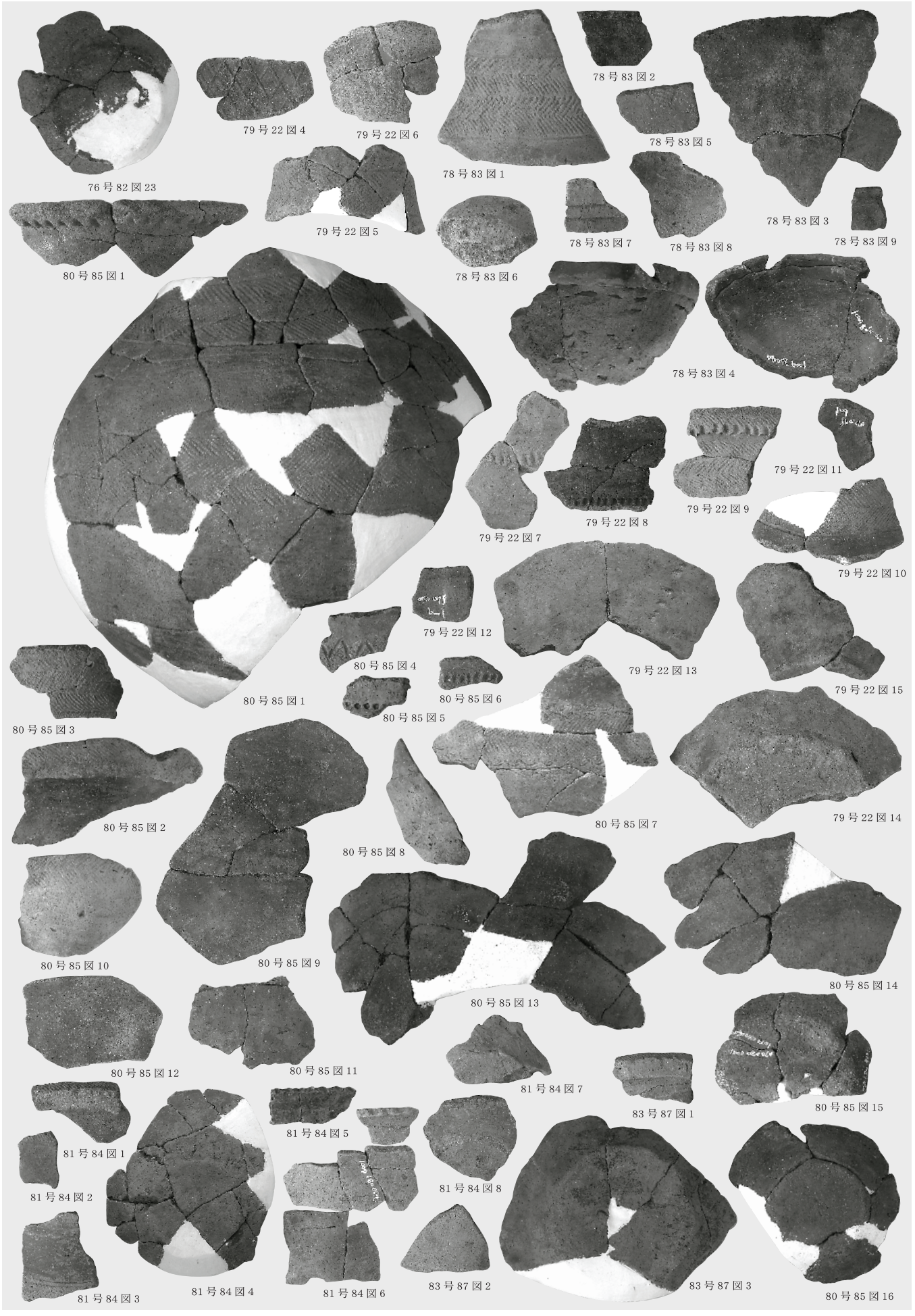
図版 64


54 号 73 図 23
54 号 73 図 24
55 号 72 図 1
55 号 72 図 2
55 号 72 図 3
55 号 72 図 4
55 号 72 図 5
55 号 72 図 6
55 号 72 図 7
55 号 72 図 8
55 号 72 図 9
56 号 72 図 10
56 号 72 図 11
56 号 72 図 12
56 号 72 図 13
56 号 72 図 14
56 号 72 図 15
56 号 72 図 16
56 号 72 図 17
56 号 72 図 18
56 号 72 図 19
56 号 72 図 20
56 号 72 図 21
56 号 72 図 22
56 号 72 図 23
56 号 72 図 24
56 号 72 図 25
56 号 71 図 1
57 号 76 図 1
57 号 76 図 2
57 号 76 図 3
57 号 76 図 4
57 号 76 図 5
57 号 76 図 6
57 号 76 図 7
57 号 76 図 8
57 号 76 図 9
57 号 76 図 10
57 号 76 図 11
57 号 76 図 14
57 号 76 図 15
57 号 76 図 16
57 号 76 図 17
57 号 76 図 19
57 号 76 図 20
57 号 76 図 21
57 号 77 図 2
57 号 77 図 3
57 号 77 図 4
57 号 77 図 5
57 号 77 図 6
57 号 77 図 7
57 号 77 図 8
57 号 77 図 9
57 号 77 図 10
57 号 77 図 11
57 号 77 図 12
57 号 77 図 13
57 号 77 図 14
57 号 77 図 15
57 号 77 図 16
58 号 75 図 1
58 号 75 図 2
58 号 75 図 3
59 号 77 図 17
59 号 77 図 18
59 号 77 図 19
59 号 77 図 20
59 号 77 図 21
59 号 77 図 22
59 号 77 図 23
59 号 77 図 24
59 号 77 図 25
底

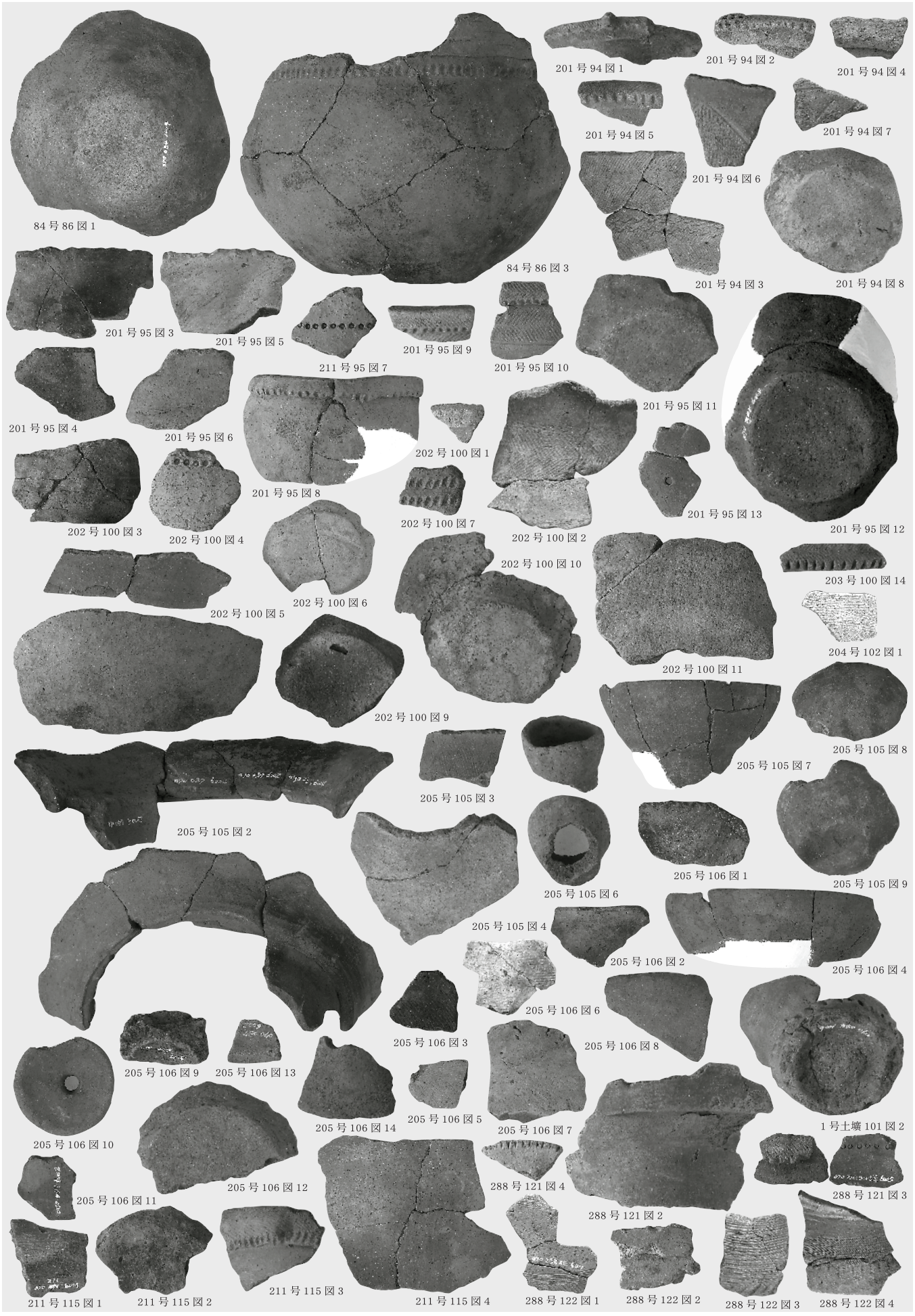

59 号 77 図 26
59 号 77 図 27
59 号 77 図 28
59 号 77 図 29
60 号 62 図 10
60 号 62 図 11
60 号 62 図 12
60 号 62 図 13
61 号 63 図 1
60 号 62 図 14
61 号 63 図 3
61 号 63 図 5
61 号 63 図 7
61 号 63 図 6
61 号 63 図 4
64 号 78 図 3
63 号 78 図 1
61 号 63 図 11
61 号 63 図 13
61 号 63 図 2
64 号 78 図 6
61 号 63 図 8
65 号 79 図 3
65 号 79 図 5
64 号 78 図 7
65 号 79 図 8
64 号 78 図 8
64 号 78 図 4
65 号 79 図 6
63 号 78 図 2
65 号 79 図 4
65 号 79 図 1
64 号 78 図 5
65 号 79 図 9
68 号 58 図 2
68 号 58 図 3
65 号 79 図 2
65 号 79 図 11
65 号 79 図 10
68 号 58 図 11
65 号 79 図 12
68 号 58 図 14
68 号 58 図 18
68 号 58 図 4
68 号 58 図 5
68 号 58 図 6
68 号 58 図 7
68 号 58 図 8
68 号 58 図 9
68 号 58 図 10
68 号 58 図 19
68 号 58 図 15
68 号 58 図 16
68 号 58 図 12
68 号 58 図 13
68 号 58 図 17
69 号 80 図 2

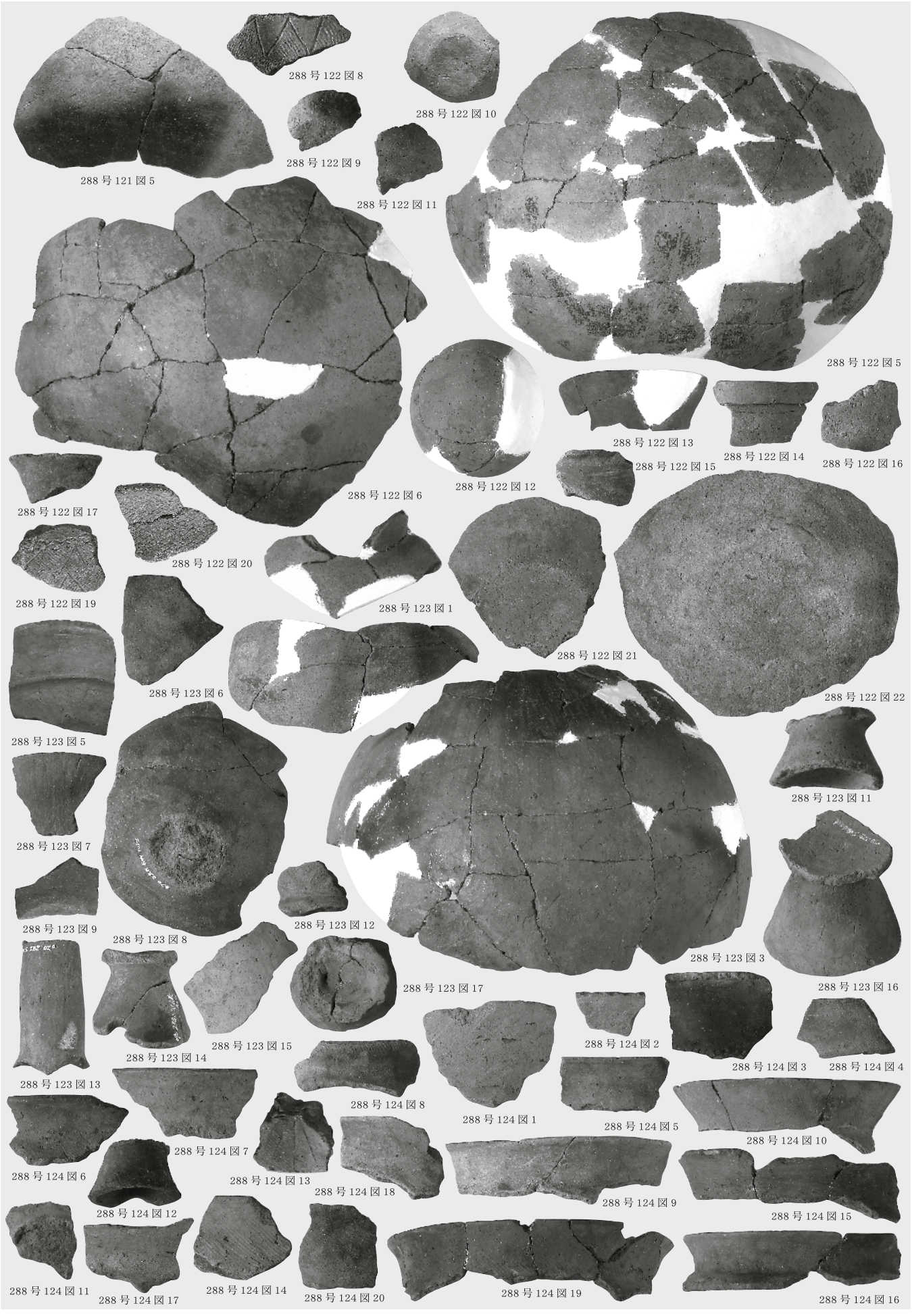
図版 66


69 号 80 図 3
69 号 80 図 4
69 号 80 図 5
72 号 66 図 14
72 号 66 図 18
72 号 66 図 20
72 号 66 図 16
72 号 66 図 15
72 号 66 図 17
69 号 80 図 6
72 号 66 図 19
72 号 66 図 21
72 号 66 図 26
72 号 66 図 23
72 号 66 図 25
72 号 66 図 27
72 号 66 図 22
72 号 66 図 24
72 号 67 図 7
72 号 67 図 8
72 号 67 図 1
72 号 67 図 6
72 号 67 図 2
75 号 82 図 1
75 号 82 図 2
73 号 66 図 29
73 号 66 図 30
72 号 67 図 9
72 号 67 図 10
72 号 67 図 11
75 号 82 図 3
75 号 82 図 4
73 号 66 図 31
73 号 66 図 28
72 号 67 図 3
73 号 66 図 36
73 号 66 図 32
73 号 66 図 37
73 号 66 図 33
72 号 67 図 12
73 号 66 図 34
73 号 66 図 35
76 号 82 図 15
76 号 82 図 17
76 号 82 図 5
73 号 66 図 38
76 号 82 図 11
76 号 82 図 19
76 号 82 図 6
76 号 82 図 8
76 号 82 図 12
76 号 82 図 20
76 号 82 図 7
76 号 82 図 9
76 号 82 図 10
76 号 82 図 16
76 号 82 図 22
76 号 82 号 21
76 号 82 図 24
77 号 82 図 26
77 号 82 図 27

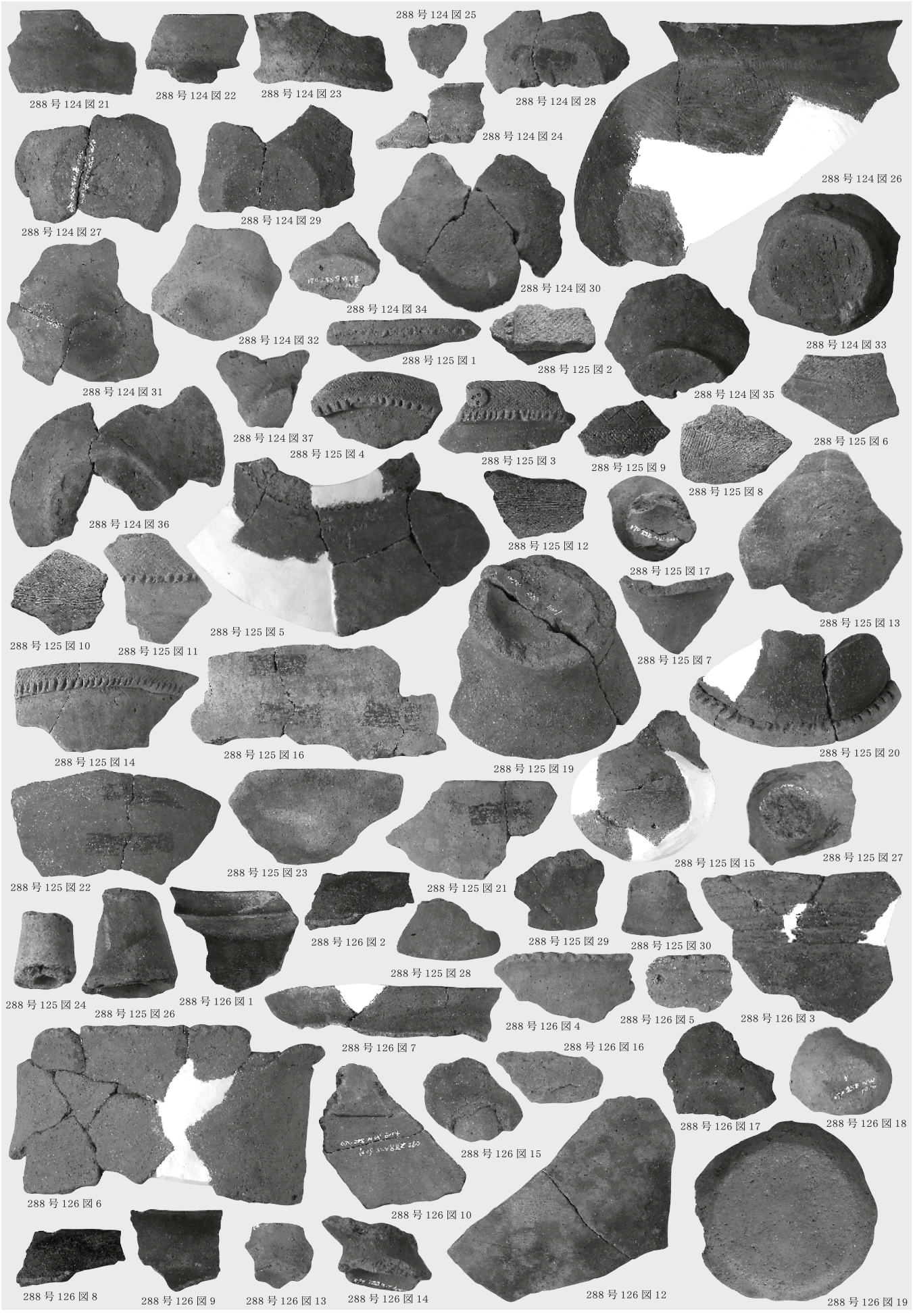

76 号 82 図 23
79 号 22 図 4
79 号 22 図 6
78 号 83 図 1
78 号 83 図 2
78 号 83 図 5
78 号 83 図 3
78 号 83 図 9
79 号 22 図 5
78 号 83 図 7
78 号 83 図 8
80 号 85 図 1
78 号 83 図 6
78 号 83 図 4
79 号 22 図 11
79 号 22 図 7
79 号 22 図 8
79 号 22 図 9
79 号 22 図 10
79 号 22 図 12
79 号 22 図 13
79 号 22 図 15
80 号 85 図 4
80 号 85 図 6
80 号 85 図 5
80 号 85 図 3
80 号 85 図 1
80 号 85 図 2
80 号 85 図 7
79 号 22 図 14
80 号 85 図 8
80 号 85 図 10
80 号 85 図 9
80 号 85 図 13
80 号 85 図 14
80 号 85 図 12
80 号 85 図 11
81 号 84 図 7
83 号 87 図 1
80 号 85 図 15
81 号 84 図 1
81 号 84 図 5
81 号 84 図 2
81 号 84 図 8
81 号 84 図 3
81 号 84 図 4
81 号 84 図 6
83 号 87 図 2
83 号 87 図 3
80 号 85 図 16

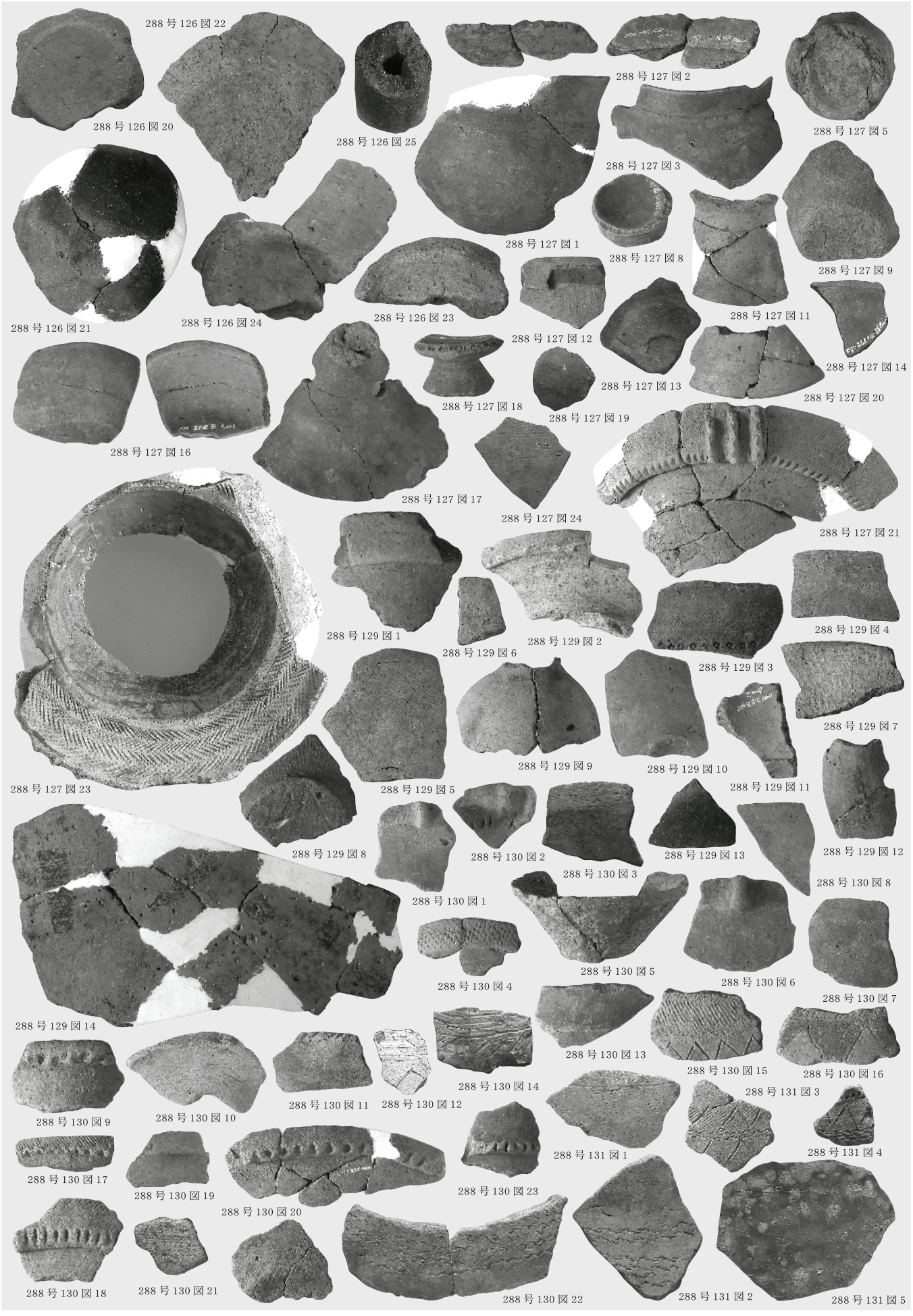
図版 68


84 号 86 図 1
84 号 86 図 3
201 号 94 図 1
201 号 94 図 2
201 号 94 図 4
201 号 94 図 5
201 号 94 図 6
201 号 94 図 7
201 号 94 図 3
201 号 94 図 8
201 号 95 図 3
201 号 95 図 5
211 号 95 図 7
201 号 95 図 9
201 号 95 図 10
201 号 95 図 11
201 号 95 図 4
201 号 95 図 6
202 号 100 図 1
201 号 95 図 8
202 号 100 図 7
202 号 100 図 2
201 号 95 図 13
201 号 95 図 12
202 号 100 図 3
202 号 100 図 4
202 号 100 図 6
202 号 100 図 10
203 号 100 図 14
202 号 100 図 5
204 号 102 図 1
202 号 100 図 11
202 号 100 図 9
205 号 105 図 8
205 号 105 図 7
205 号 105 図 3
205 号 105 図 2
205 号 106 図 1
205 号 105 図 9
205 号 105 図 6
205 号 105 図 4
205 号 106 図 2
205 号 106 図 4
205 号 106 図 6
205 号 106 図 3
205 号 106 図 8
205 号 106 図 9
205 号 106 図 13
1 号土壙 101 図 2
205 号 106 図 14
205 号 106 図 5
205 号 106 図 7
205 号 106 図 10
205 号 106 図 12
288 号 121 図 4
288 号 121 図 3
205 号 106 図 11
288 号 121 図 2
211 号 115 図 1
211 号 115 図 2
211 号 115 図 3
211 号 115 図 4
288 号 122 図 1
288 号 122 図 2
288 号 122 図 3
288 号 122 図 4

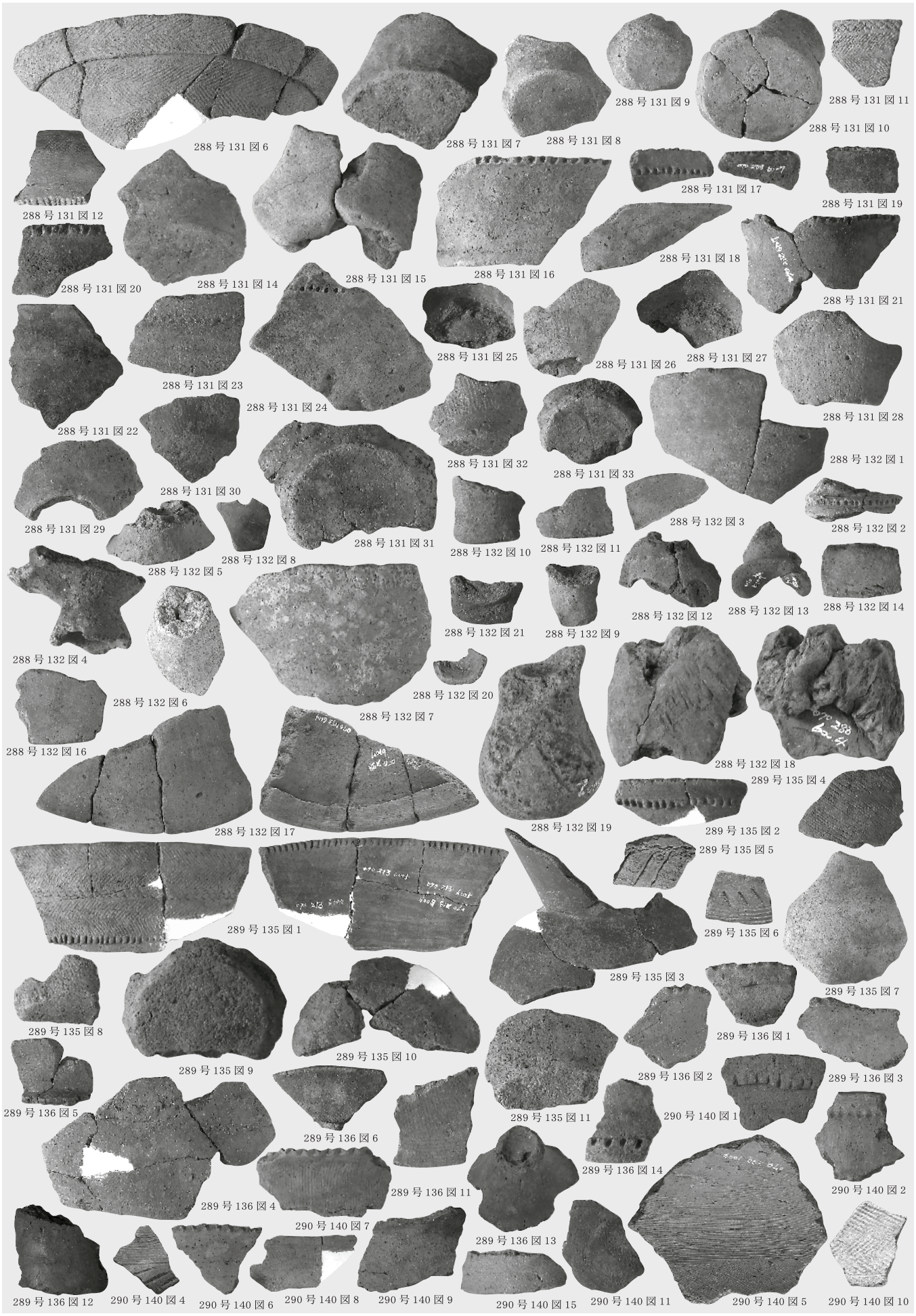

288 号 121 図 5
288 号 122 図 8
288 号 122 図 9
288 号 122 図 10
288 号 122 図 11
288 号 122 図 5
288 号 122 図 6
288 号 122 図 12
288 号 122 図 13
288 号 122 図 14
288 号 122 図 15
288 号 122 図 16
288 号 122 図 17
288 号 122 図 20
288 号 122 図 19
288 号 123 図 1
288 号 122 図 21
288 号 122 図 22
288 号 123 図 6
288 号 123 図 5
288 号 123 図 11
288 号 123 図 7
288 号 123 図 8
288 号 123 図 12
288 号 123 図 3
288 号 123 図 16
288 号 123 図 9
288 号 123 図 17
288 号 123 図 15
288 号 123 図 14
288 号 124 図 2
288 号 124 図 3
288 号 124 図 4
288 号 123 図 13
288 号 124 図 8
288 号 124 図 1
288 号 124 図 5
288 号 124 図 10
288 号 124 図 6
288 号 124 図 7
288 号 124 図 13
288 号 124 図 18
288 号 124 図 9
288 号 124 図 15
288 号 124 図 12
288 号 124 図 11
288 号 124 図 17
288 号 124 図 14
288 号 124 図 20
288 号 124 図 19
288 号 124 図 16

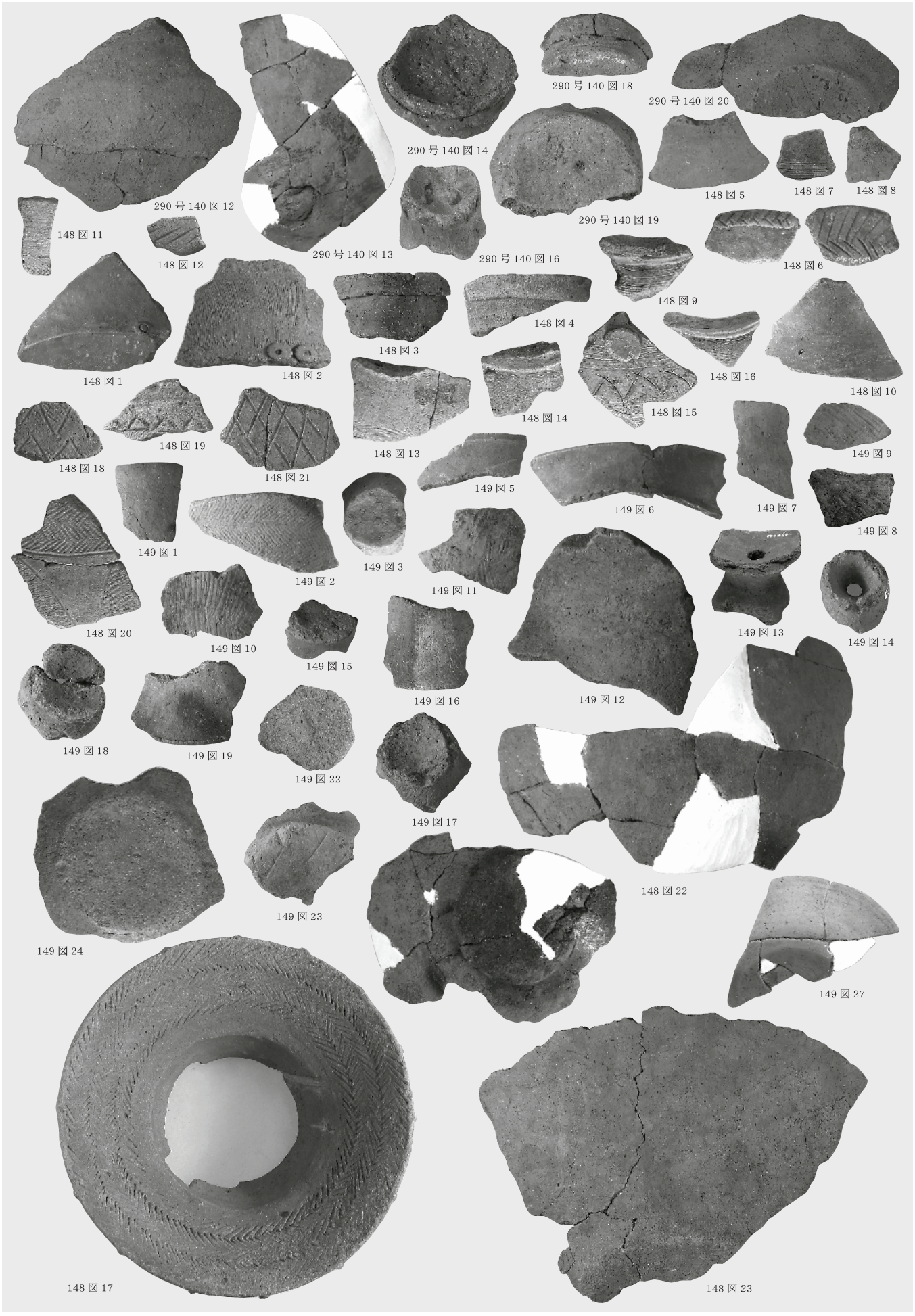
図版 70


288 号 124 図 21
288 号 124 図 22
288 号 124 図 23
288 号 124 図 25
288 号 124 図 28
288 号 124 図 24
288 号 124 図 26
288 号 124 図 27
288 号 124 図 29
288 号 124 図 30
288 号 124 図 34
288 号 124 図 32
288 号 125 図 1
288 号 125 図 2
288 号 124 図 33
288 号 124 図 31
288 号 124 図 35
288 号 125 図 6
288 号 124 図 37
288 号 125 図 4
288 号 125 図 3
288 号 125 図 9
288 号 125 図 8
288 号 124 図 36
288 号 125 図 12
288 号 125 図 17
288 号 125 図 13
288 号 125 図 10
288 号 125 図 11
288 号 125 図 5
288 号 125 図 7
288 号 125 図 14
288 号 125 図 16
288 号 125 図 19
288 号 125 図 20
288 号 125 図 22
288 号 125 図 23
288 号 125 図 21
288 号 125 図 15
288 号 125 図 27
288 号 126 図 2
288 号 125 図 29
288 号 125 図 30
288 号 125 図 24
288 号 125 図 26
288 号 126 図 1
288 号 125 図 28
288 号 126 図 4
288 号 126 図 5
288 号 126 図 3
288 号 126 図 7
288 号 126 図 16
288 号 126 図 6
288 号 126 図 15
288 号 126 図 17
288 号 126 図 18
288 号 126 図 10
288 号 126 図 8
288 号 126 図 9
288 号 126 図 13
288 号 126 図 14
288 号 126 図 12
288 号 126 図 19


288 号 126 図 22
288 号 126 図 20
288 号 126 図 25
288 号 127 図 2
288 号 127 図 5
288 号 127 図 1
288 号 127 図 3
288 号 127 図 8
288 号 127 図 9
288 号 126 図 21
288 号 126 図 24
288 号 126 図 23
288 号 127 図 12
288 号 127 図 11
288 号 127 図 14
288 号 127 図 18
288 号 127 図 19
288 号 127 図 13
288 号 127 図 20
288 号 127 図 16
288 号 127 図 17
288 号 127 図 24
288 号 127 図 21
288 号 127 図 23
288 号 129 図 1
288 号 129 図 6
288 号 129 図 2
288 号 129 図 4
288 号 129 図 3
288 号 129 図 7
288 号 129 図 5
288 号 129 図 9
288 号 129 図 10
288 号 129 図 11
288 号 129 図 8
288 号 130 図 2
288 号 130 図 3
288 号 129 図 13
288 号 129 図 12
288 号 130 図 1
288 号 130 図 8
288 号 129 図 14
288 号 130 図 4
288 号 130 図 5
288 号 130 図 6
288 号 130 図 7
288 号 130 図 13
288 号 130 図 15
288 号 130 図 16
288 号 130 図 14
288 号 131 図 3
288 号 130 図 9
288 号 130 図 10
288 号 130 図 11
288 号 130 図 12
288 号 131 図 1
288 号 131 図 4
288 号 130 図 17
288 号 130 図 19
288 号 130 図 23
288 号 130 図 20
288 号 130 図 18
288 号 130 図 21
288 号 130 図 22
288 号 131 図 2
288 号 131 図 5

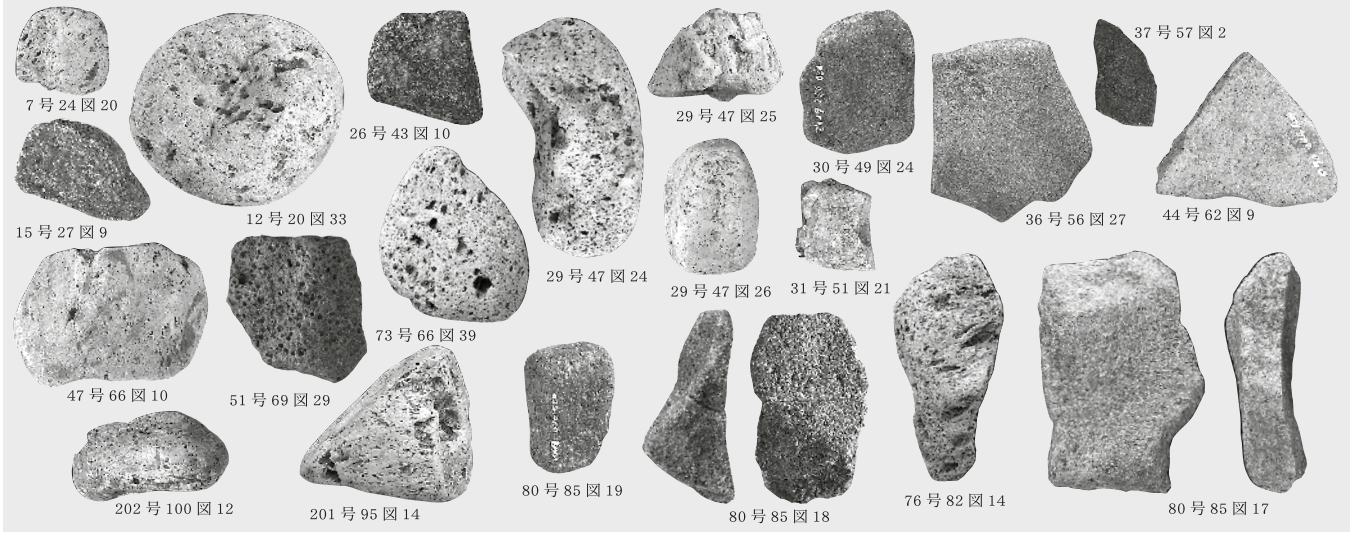
図版 72


288 号 131 図 6
288 号 131 図 7
288 号 131 図 8
288 号 131 図 9
288 号 131 図 10
288 号 131 図 11
288 号 131 図 12
288 号 131 図 14
288 号 131 図 15
288 号 131 図 16
288 号 131 図 17
288 号 131 図 18
288 号 131 図 19
288 号 131 図 20
288 号 131 図 21
288 号 131 図 22
288 号 131 図 23
288 号 131 図 24
288 号 131 図 25
288 号 131 図 26
288 号 131 図 27
288 号 131 図 28
288 号 131 図 29
288 号 131 図 30
288 号 131 図 31
288 号 131 図 32
288 号 131 図 33
288 号 132 図 1
288 号 132 図 2
288 号 132 図 3
288 号 132 図 4
288 号 132 図 5
288 号 132 図 6
288 号 132 図 7
288 号 132 図 8
288 号 132 図 9
288 号 132 図 10
288 号 132 図 11
288 号 132 図 12
288 号 132 図 13
288 号 132 図 14
288 号 132 図 16
288 号 132 図 17
288 号 132 図 18
288 号 132 図 19
288 号 132 図 20
288 号 132 図 21
289 号 135 図 1
289 号 135 図 2
289 号 135 図 3
289 号 135 図 4
289 号 135 図 5
289 号 135 図 6
289 号 135 図 7
289 号 135 図 8
289 号 135 図 9
289 号 135 図 10
289 号 135 図 11
289 号 136 図 1
289 号 136 図 2
289 号 136 図 3
289 号 136 図 4
289 号 136 図 5
289 号 136 図 6
289 号 136 図 11
289 号 136 図 12
289 号 136 図 13
289 号 136 図 14
290 号 140 図 1
290 号 140 図 2
290 号 140 図 4
290 号 140 図 5
290 号 140 図 6
290 号 140 図 7
290 号 140 図 8
290 号 140 図 9
290 号 140 図 10
290 号 140 図 11
290 号 140 図 15


290 号 140 図 12
290 号 140 図 13
290 号 140 図 14
290 号 140 図 18
290 号 140 図 20
290 号 140 図 19
290 号 140 図 16
148 図 11
148 図 12
148 図 5
148 図 7
148 図 8
148 図 6
148 図 9
148 図 4
148 図 3
148 図 1
148 図 2
148 図 16
148 図 10
148 図 14
148 図 15
148 図 18
148 図 19
148 図 21
148 図 13
149 図 9
149 図 5
149 図 6
149 図 7
149 図 8
149 図 1
149 図 2
149 図 3
149 図 11
149 図 20
149 図 10
149 図 15
149 図 16
149 図 12
149 図 13
149 図 14
149 図 18
149 図 19
149 図 22
149 図 17
149 図 24
149 図 23
148 図 22
149 図 27
148 図 17
148 図 23

図版 74

150 図 1
150 図 2
150 図 3
150 図 4
150 図 5
150 図 6
150 図 7
150 図 8
150 図 9
150 図 10
150 図 11
150 図 12
150 図 13
150 図 14
150 図 15
150 図 16
150 図 17
150 図 18
150 図 19
150 図 20
150 図 21
150 図 22
150 図 23
150 図 24
151 図 1
151 図 2
151 図 3
151 図 4
151 図 5
151 図 6
151 図 7
151 図 8
151 図 9
151 図 10
151 図 11
151 図 12
152 図 1
152 図 2
152 図 3
152 図 4
152 図 5
152 図 6
152 図 7
152 図 8
152 図 9


7 号 24 図 20
12 号 20 図 33
15 号 27 図 9
26 号 43 図 10
29 号 47 図 24
29 号 47 図 25
29 号 47 図 26
30 号 49 図 24
31 号 51 図 21
36 号 56 図 27
37 号 57 図 2
44 号 62 図 9
47 号 66 図 10
51 号 69 図 29
73 号 66 図 39
80 号 85 図 19
80 号 85 図 18
76 号 82 図 14
80 号 85 図 17
201 号 95 図 14
202 号 100 図 12

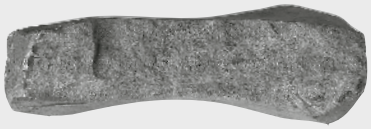
288 号 133 図 1

288 号 133 図 2

288 号 133 図 3

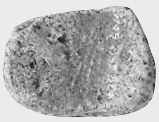
288 号 133 図 4

288 号 133 図 5



288 号 133 図 6

289 号 137 図 1



288 号 133 図 9

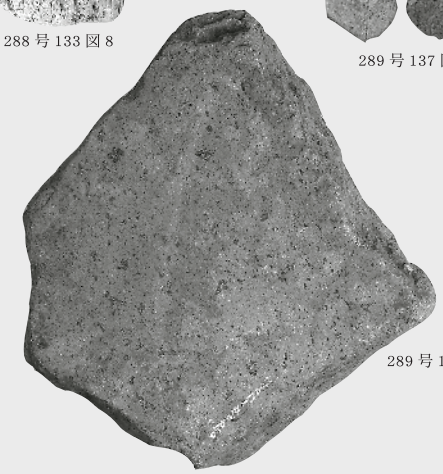
289 号 137 図 4

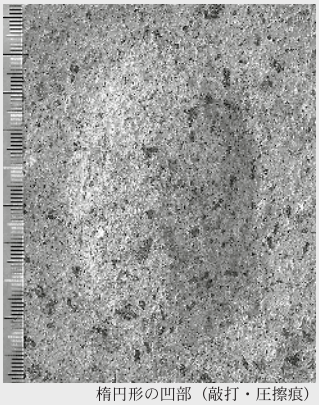
288 号 133 図 7

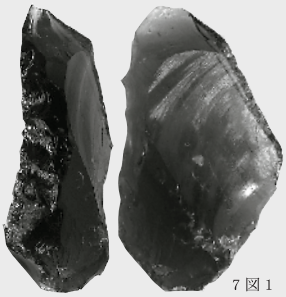
289 号 137 図 2

288 号 133 図 8

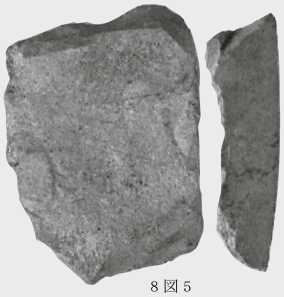
289 号 137 図 3

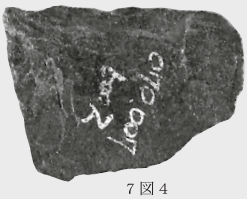

289 号 137 図 5


楕円形の凹部（敲打・圧擦痕）


7 図 1

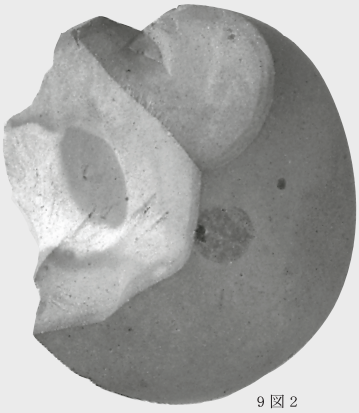
7 図 2


8 図 5


7 図 4

8 図 2

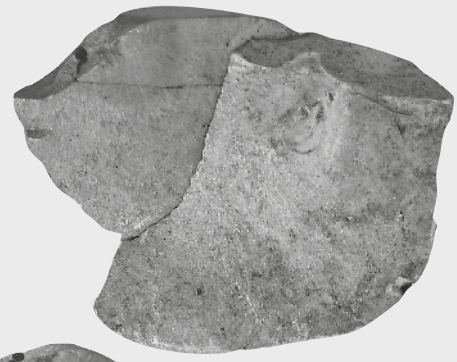
8 図 4


9 図 2

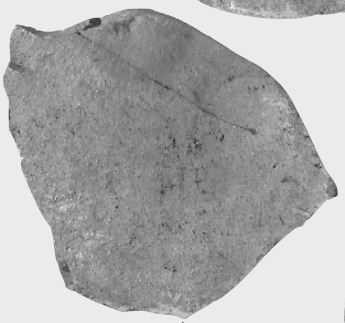
9 図 1

8 図 3

7 図 3



10 図 1(A・B)



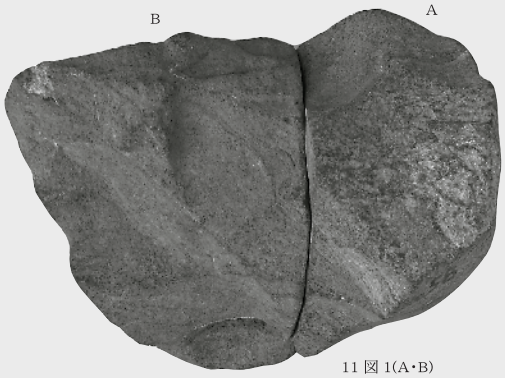
A

B

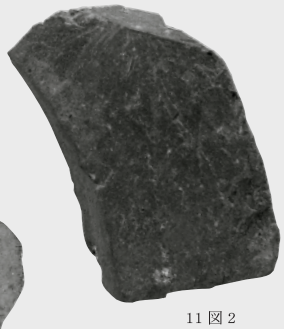
8 図 1

B

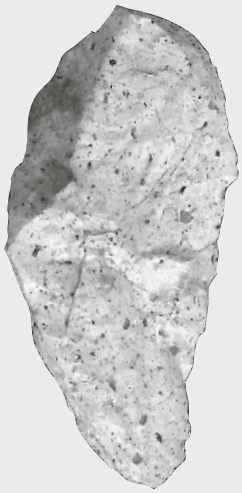
A



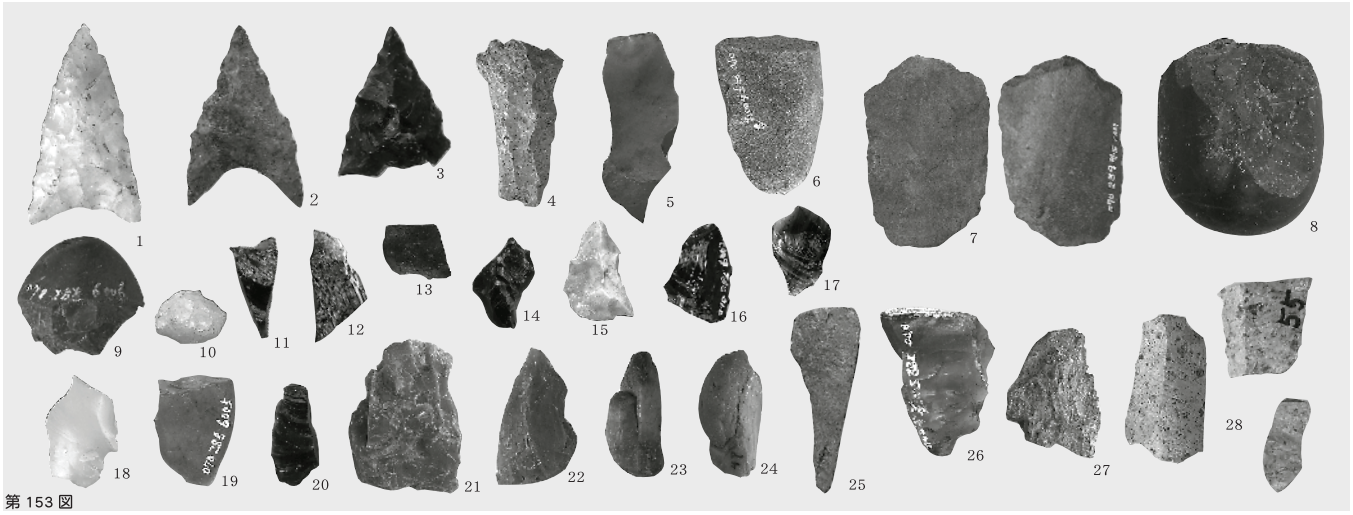
11 図 1(A・B)



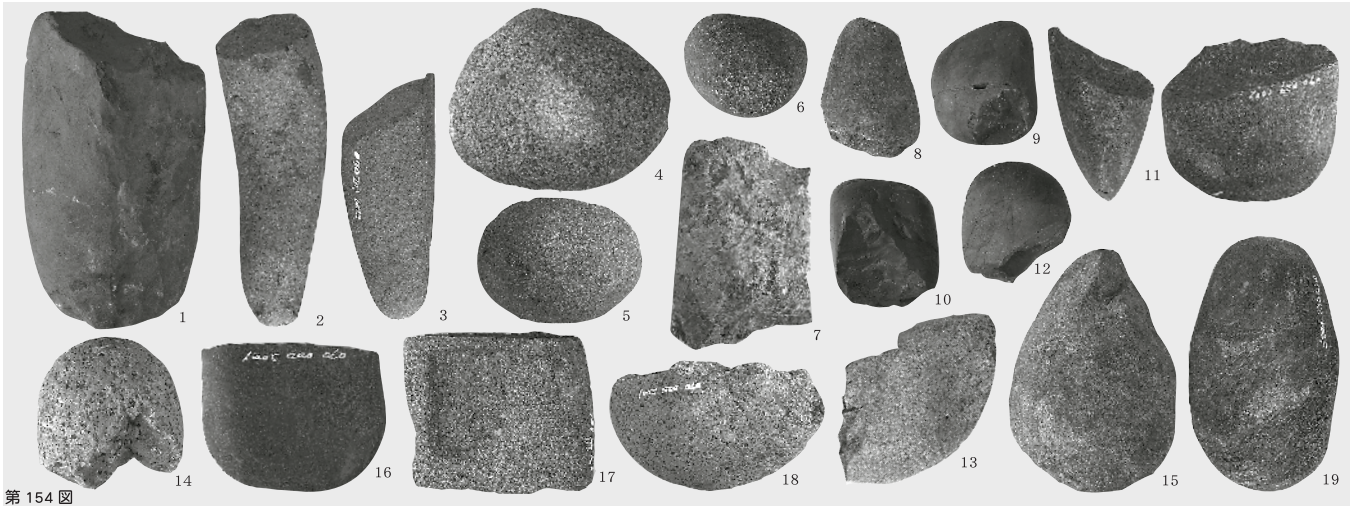
11 図 2



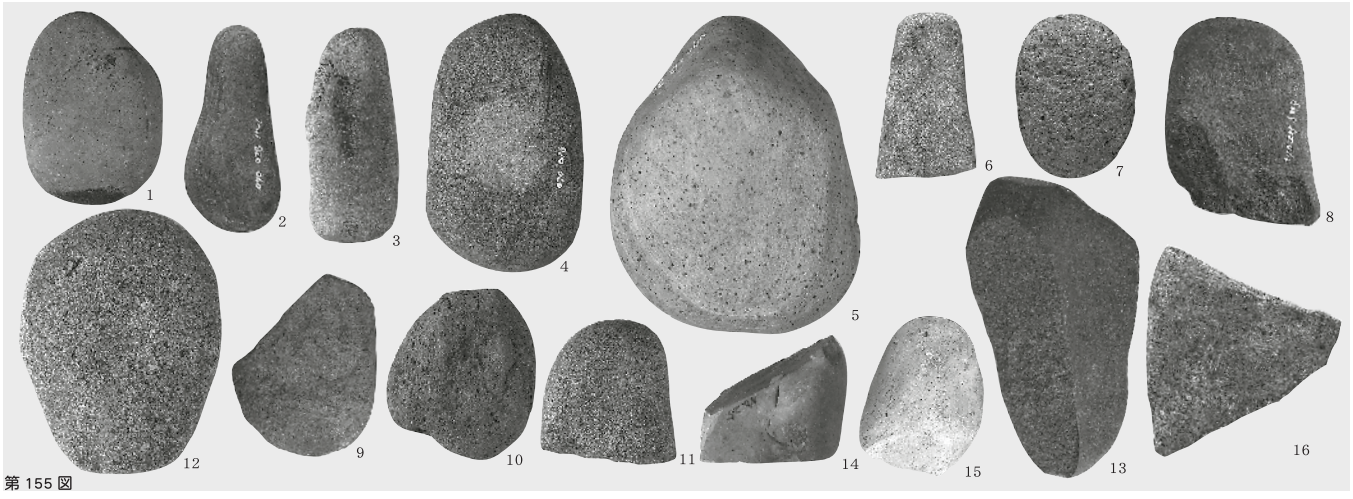
11 図 3



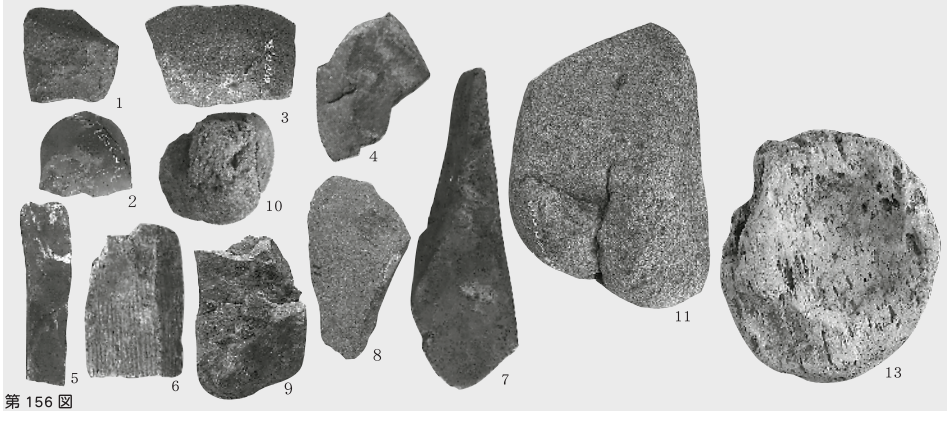
第 153 図



第 154 図

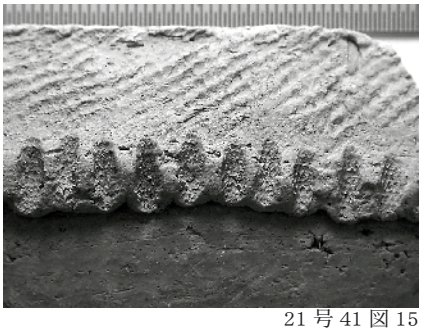


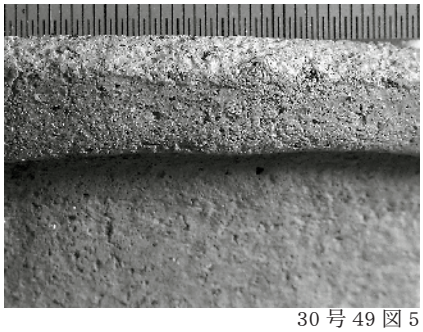
第 155 図

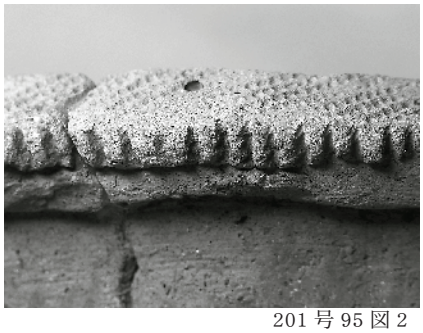


第 156 図

図版 78


21 号 41 図 15


30 号 49 図 5

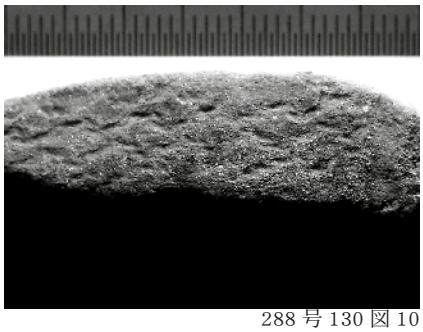

201 号 95 図 2

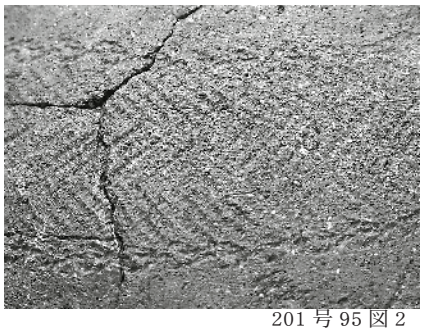
42 号 41 図 1

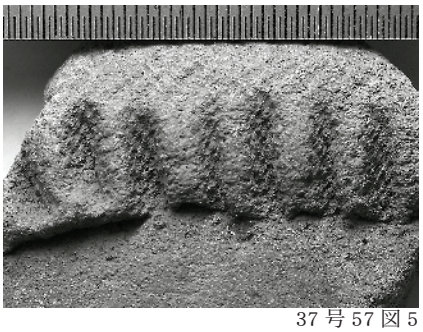
29 号 46 図 4

201 号 95 図 2

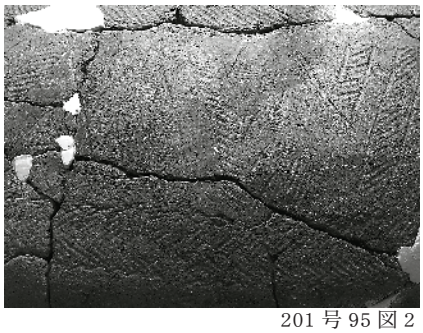
68 号 58 図 8

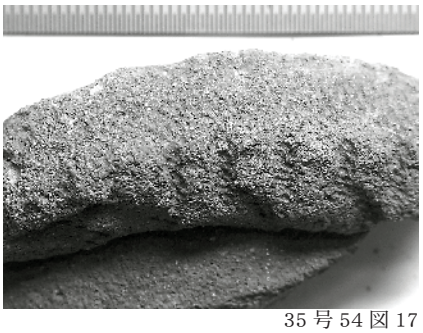

288 号 130 図 10

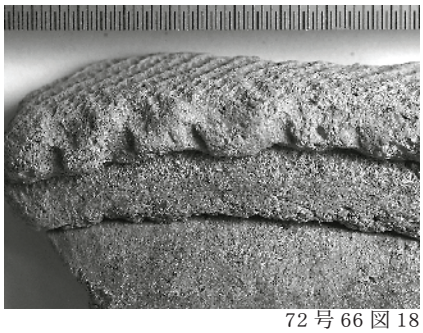

201 号 95 図 2


37 号 57 図 5

32 号 53 図 1

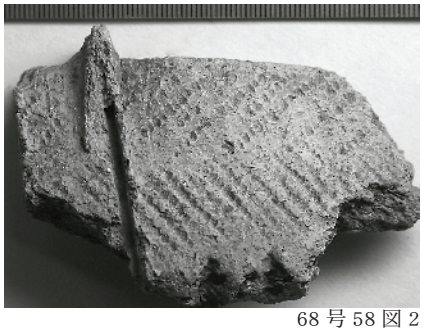

201 号 95 図 2

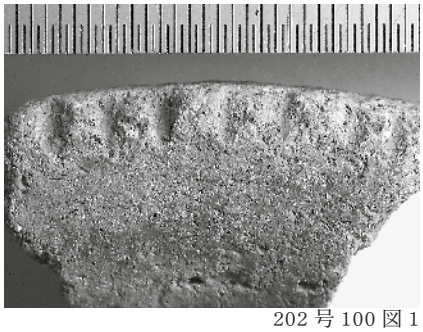

35 号 54 図 17


72 号 66 図 18

27 号 44 図 25

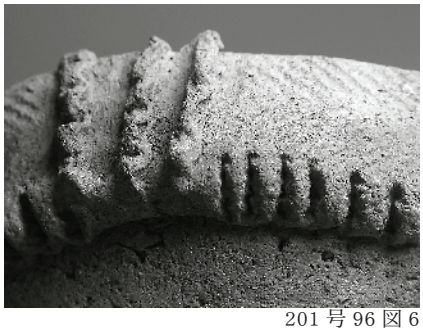
288 号 127 図 21

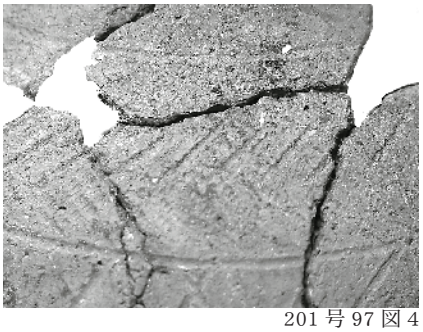

68 号 58 図 2

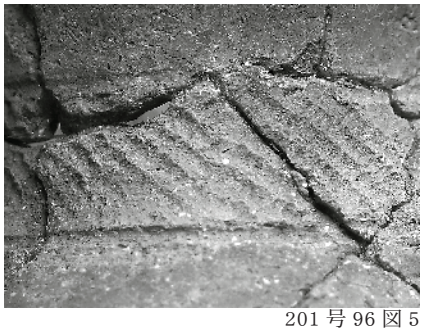

202 号 100 図 1

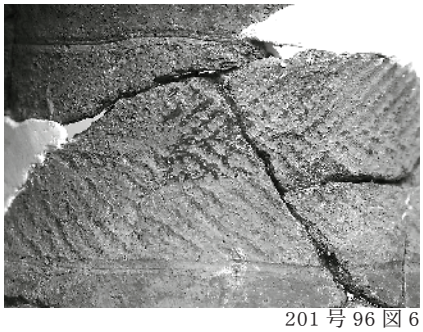
201 号 97 図 4

201 号 96 図 5

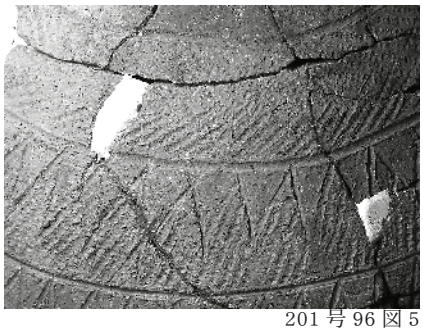

201 号 96 図 6


201 号 97 図 4

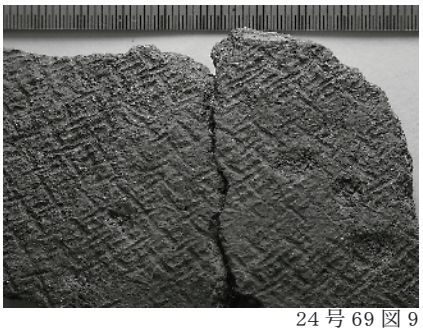

201 号 96 図 5


201 号 96 図 6

201 号 97 図 4

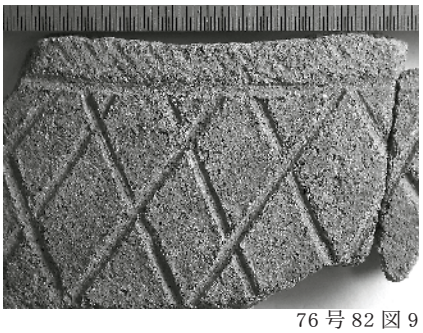

201 号 96 図 5

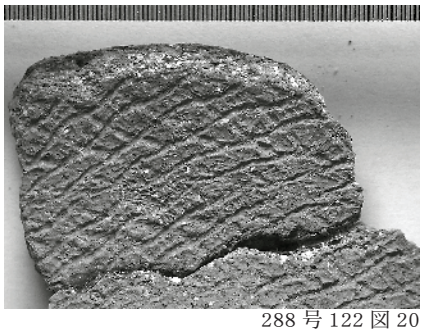
201 号 96 図 6

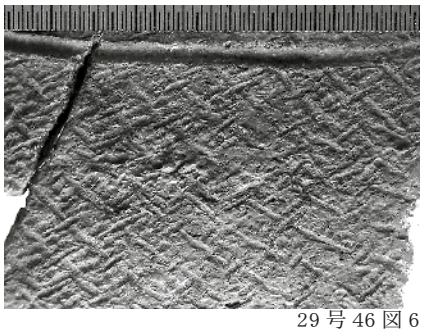

24 号 69 図 9

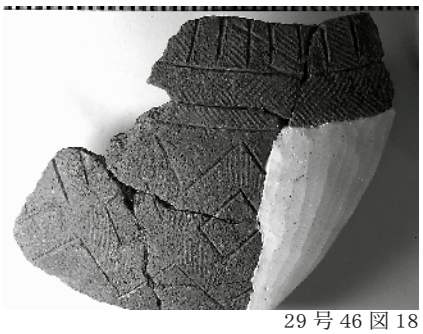
201 号 96 図 5

201 号 96 図 6


76 号 82 図 9


288 号 122 図 20

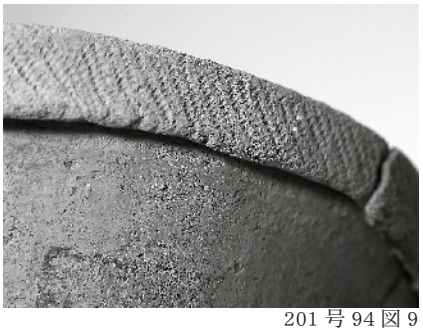

29 号 46 図 6


29 号 46 図 18

36 号 56 図 20

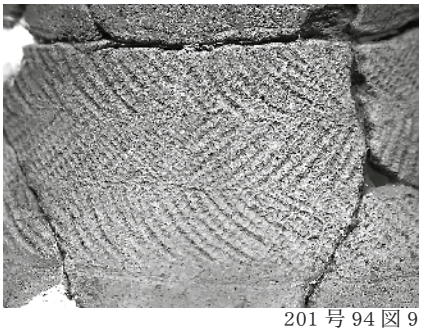
57 号 76 図 10

図版 80


201 号 94 図 9

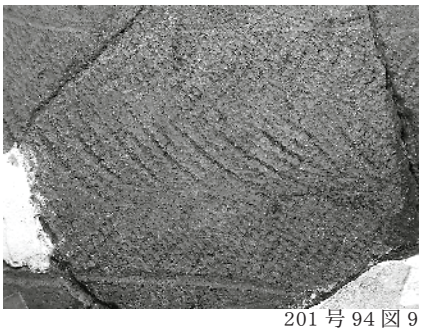
202 号 99 図 1

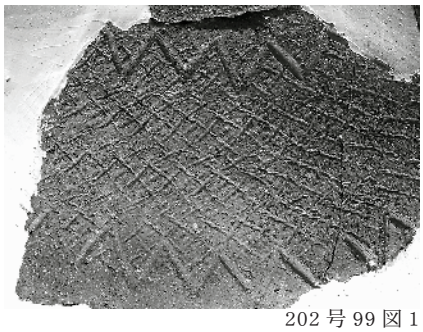
202 号 99 図 2

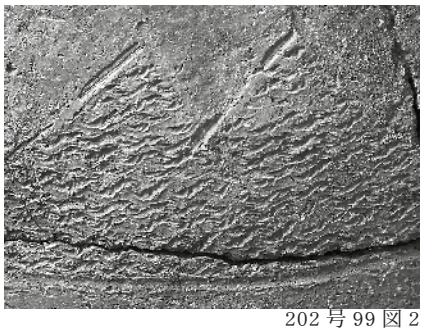

201 号 94 図 9

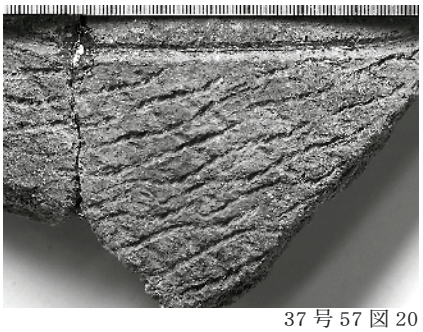
202 号 99 図 1

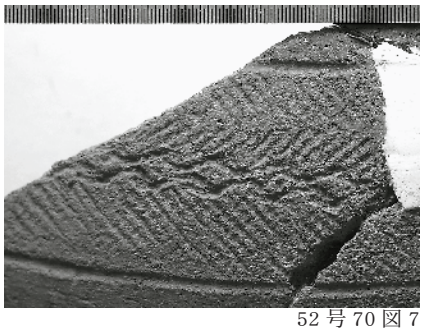
202 号 99 図 2

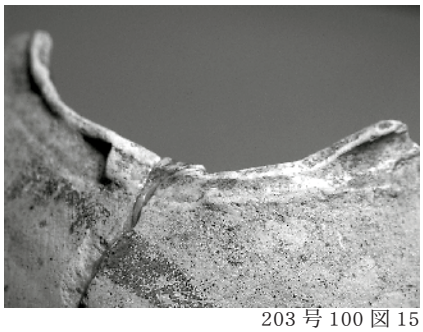

201 号 94 図 9

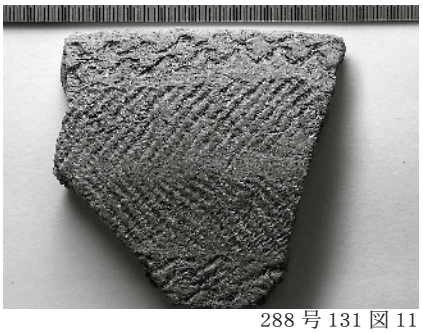

202 号 99 図 1

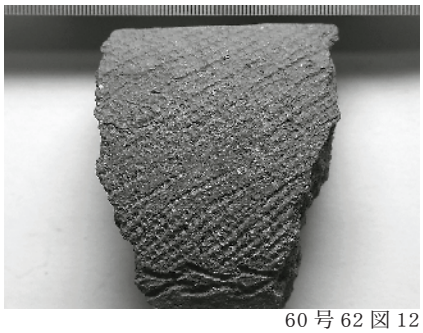

202 号 99 図 2

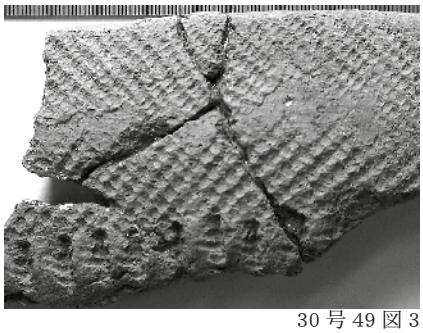

37 号 57 図 20

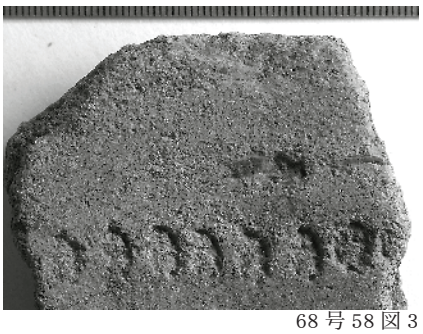

52 号 70 図 7

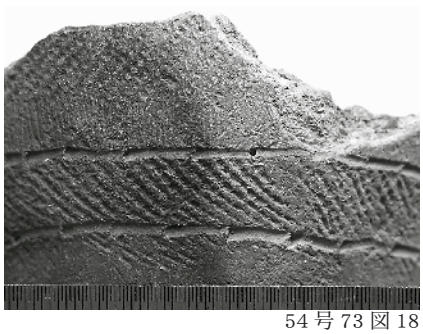

203 号 100 図 15

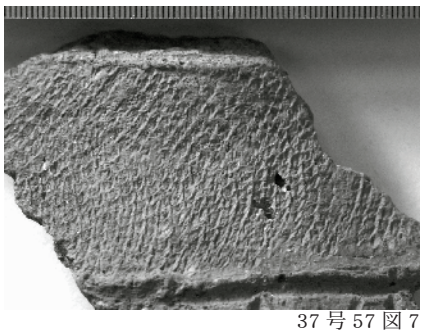

288 号 131 図 11

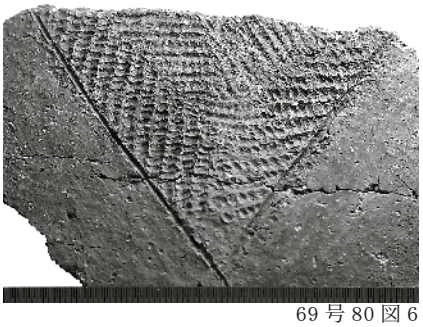

60 号 62 図 12

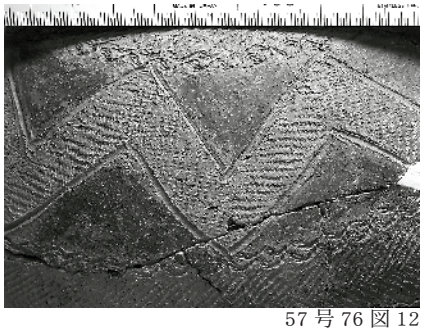

30 号 49 図 3

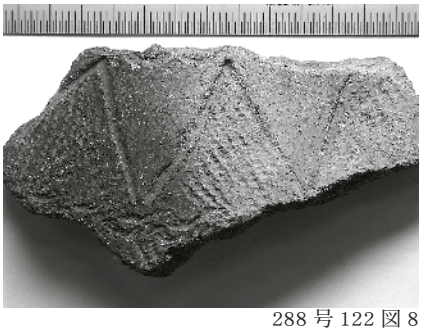

68 号 58 図 3

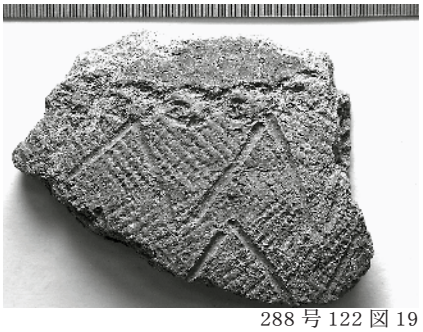

54 号 73 図 18


37 号 57 図 7


69 号 80 図 6

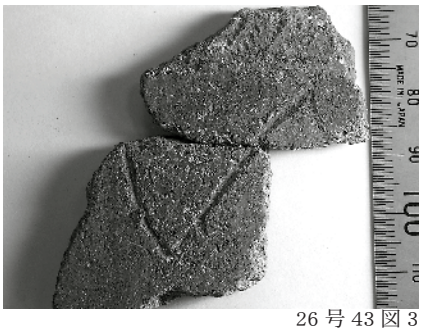

57 号 76 図 12


288 号 122 図 8


288 号 122 図 19

288 号 125 図 9

28 号 45 図 11

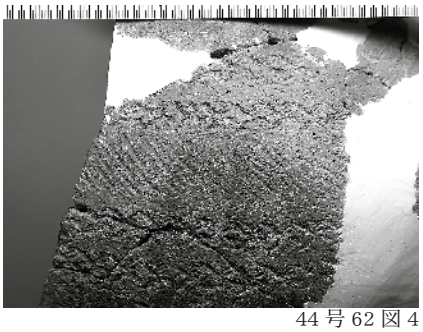

26 号 43 図 3

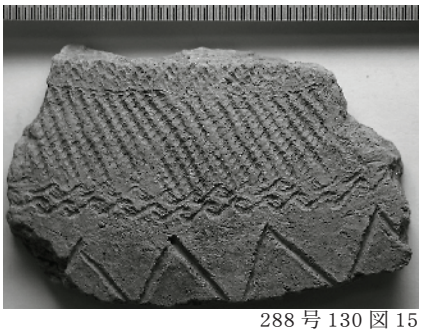
288 号 130 図 16

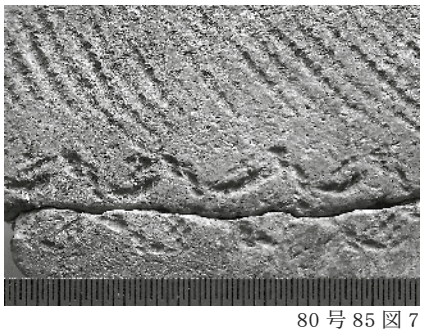
38 号 57 図 29

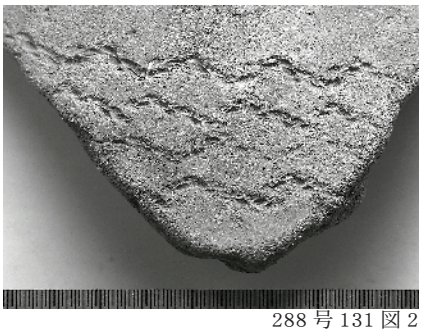
288 号 131 図 4

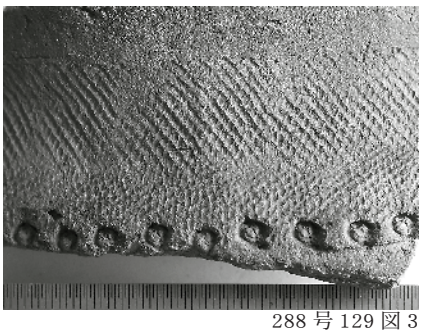
68 号 58 図 5

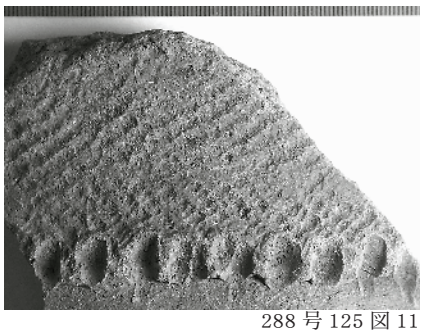

44 号 62 図 4

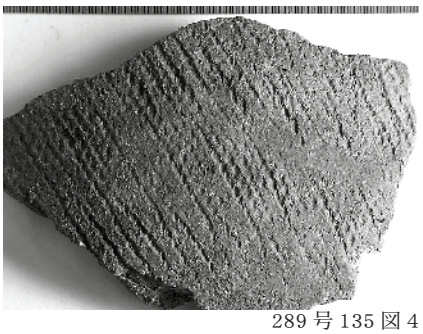

288 号 130 図 15


80 号 85 図 7

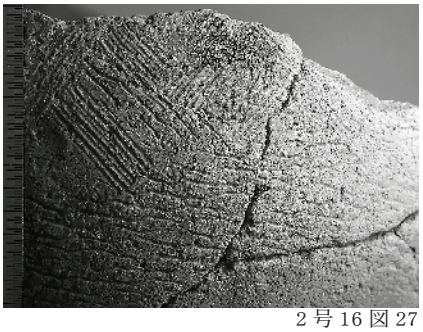

288 号 131 図 2

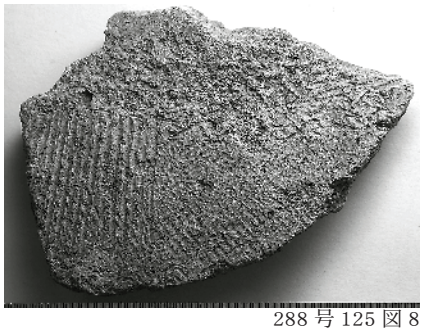

288 号 129 図 3


288 号 125 図 11


289 号 135 図 4

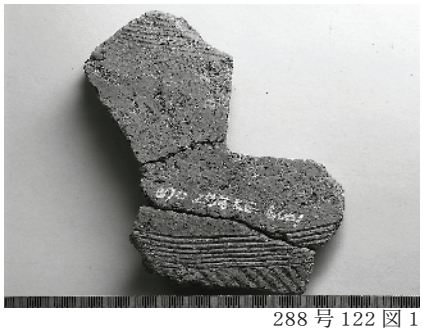
図版 82


2 号 16 図 27

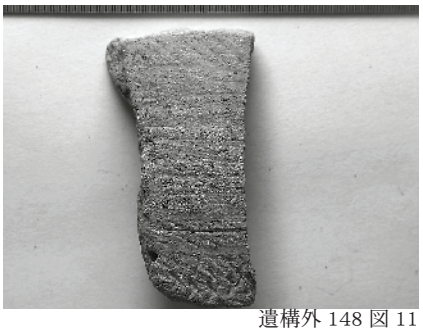

288 号 125 図 8

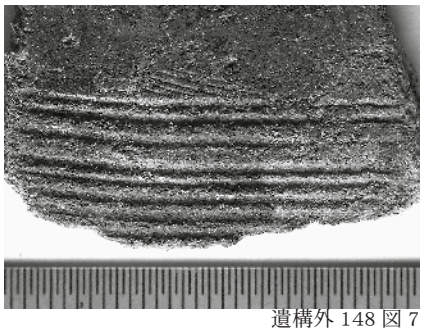
288 号 125 図 10

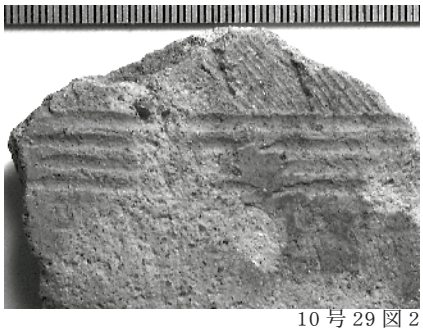
288 号 122 図 7

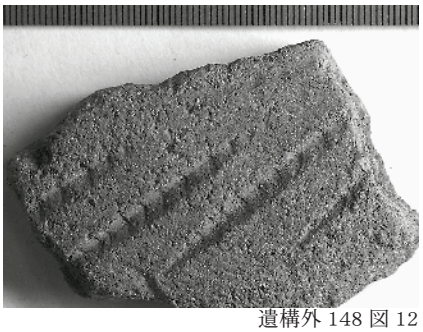

288 号 122 図 1

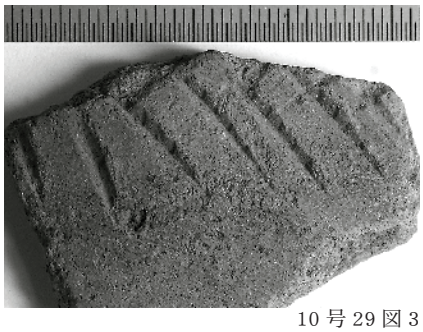
68 号 58 図 1

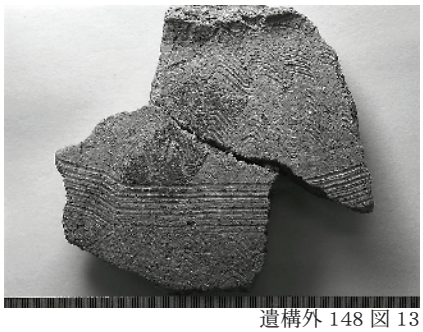

遺構外 148 図 11

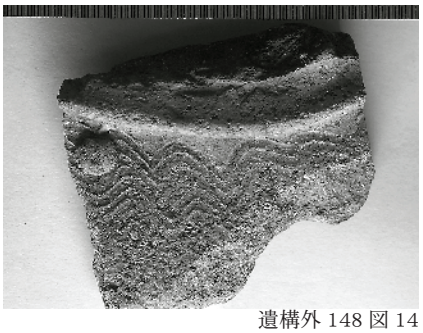

遺構外 148 図 7

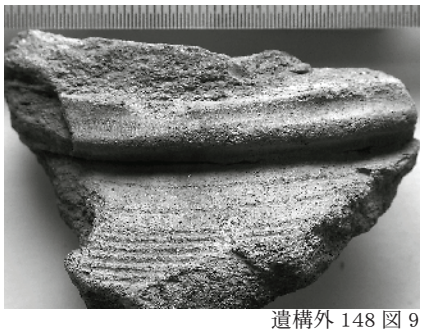

10 号 29 図 2


遺構外 148 図 12

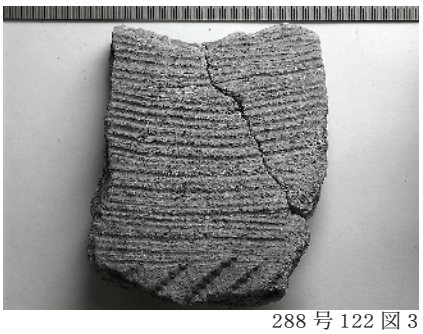

10 号 29 図 3

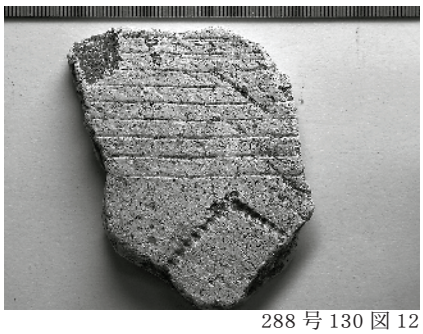

遺構外 148 図 13

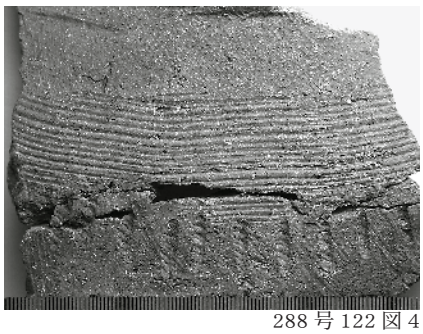

遺構外 148 図 14


遺構外 148 図 9

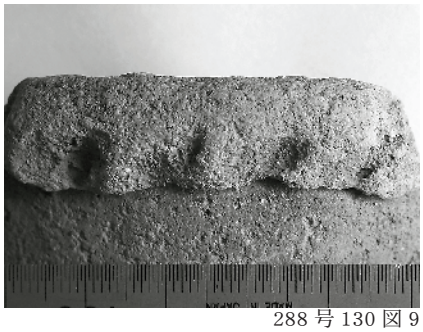
205 号 106 図 5

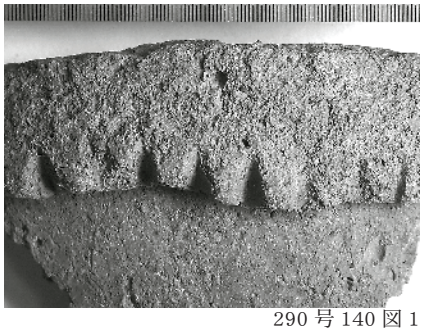

288 号 122 図 3

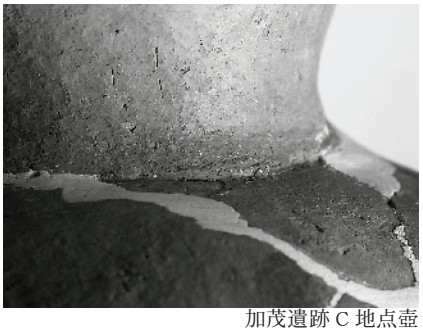

288 号 130 図 12


288 号 122 図 4

288 号 130 図 14

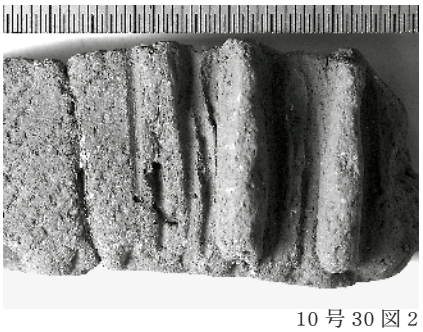

288 号 130 図 9


290 号 140 図 1

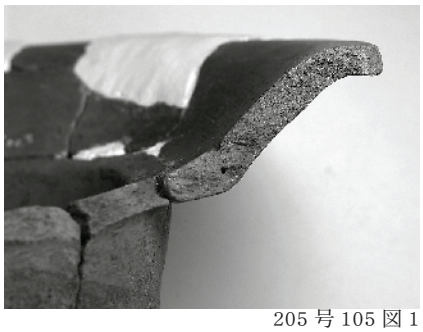

加茂遺跡 C 地点壺

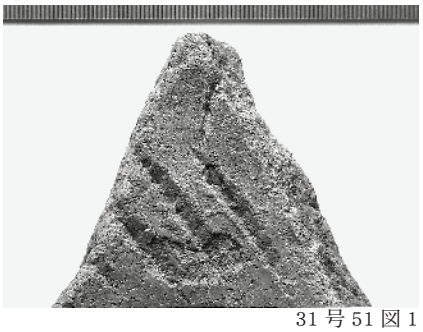
288 号 128 図 2

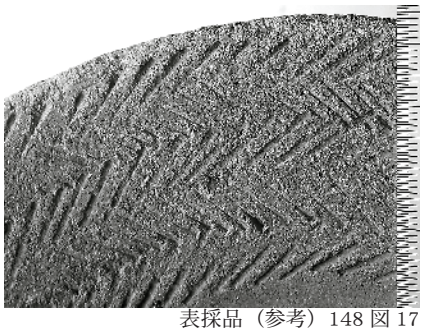
288 号 121 図 3

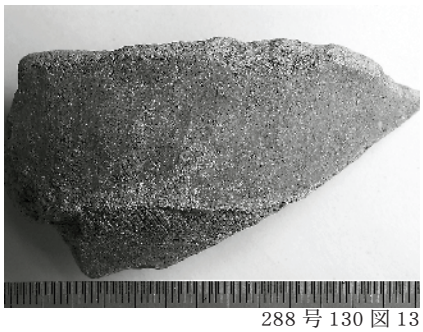

10 号 30 図 2

遺構外 148 図 1

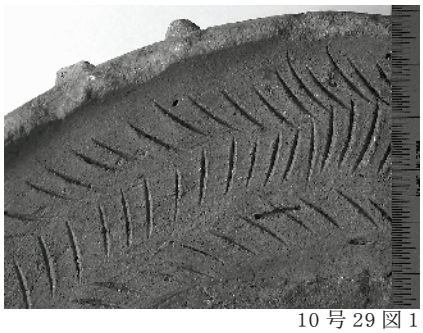

205 号 105 図 1

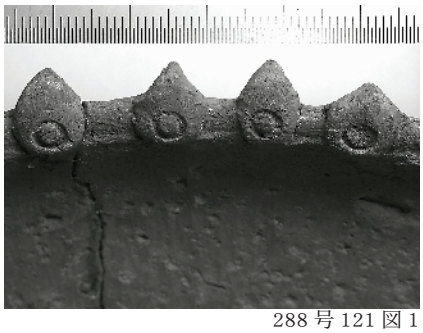

31 号 51 図 1

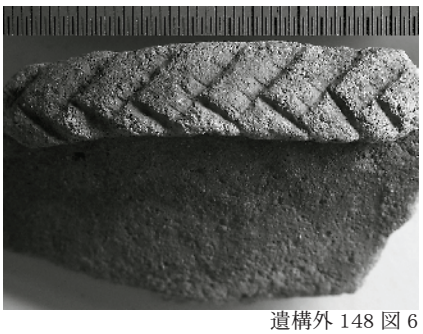

表採品（参考）148 図 17

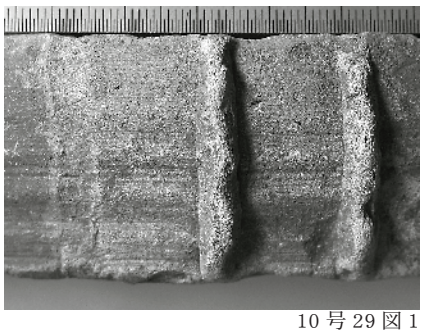

288 号 130 図 13

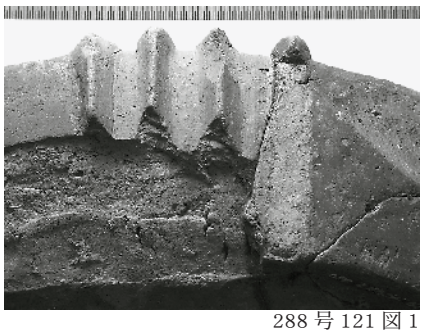
遺構外 148 図 6


10 号 29 図 1

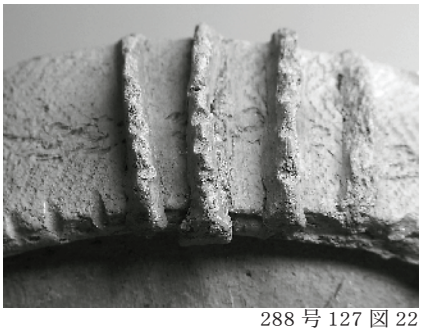

288 号 121 図 1

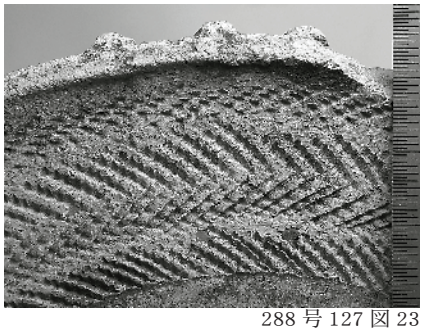

遺構外 148 図 6

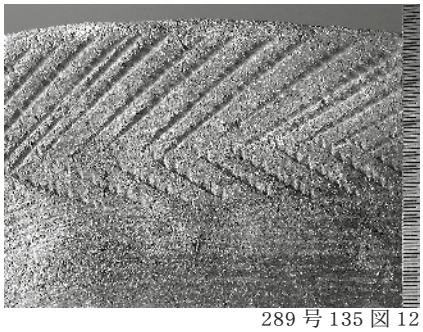

10 号 29 図 1

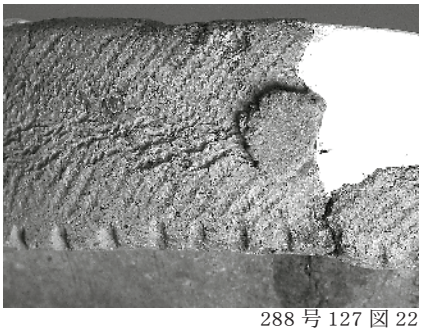

288 号 121 図 1

図版 84

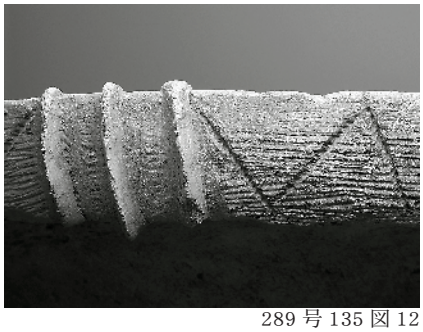

288 号 127 図 22


288 号 127 図 23

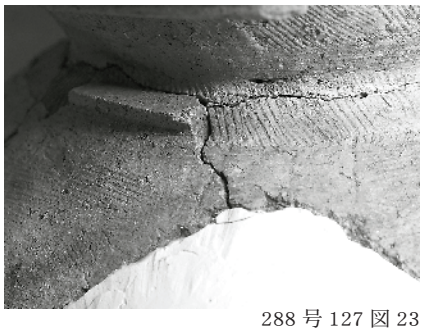

289 号 135 図 12


288 号 127 図 22

288 号 127 図 23

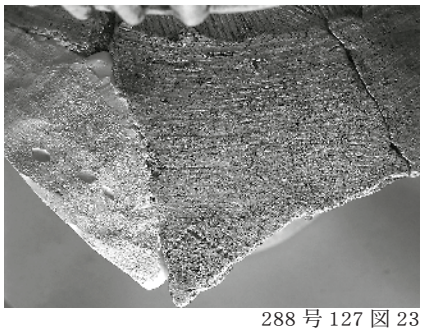

289 号 135 図 12

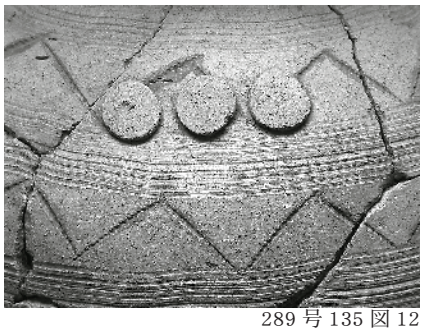
288 号 127 図 22


288 号 127 図 23

289 号 135 図 12

288 号 127 図 22


288 号 127 図 23

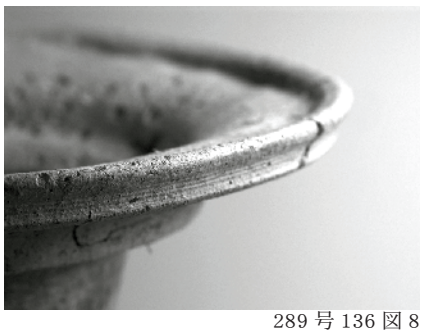

289 号 135 図 12

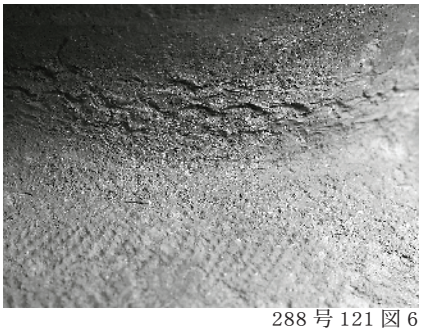
288 号 127 図 22

289 号 136 図 7

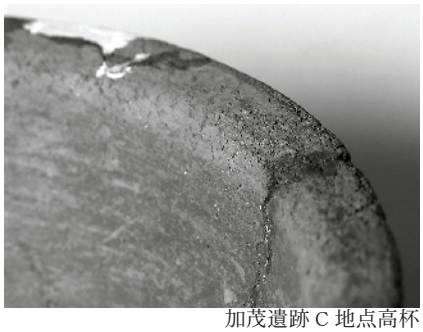
289 号 135 図 12

288 号 131 図 11


289 号 136 図 8

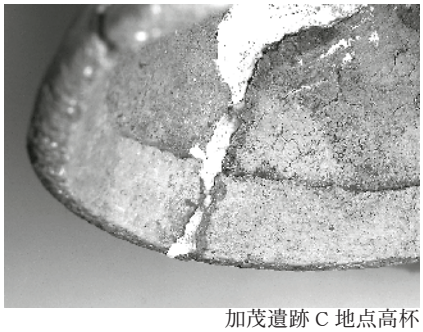

288 号 121 図 6

288 号 121 図 7

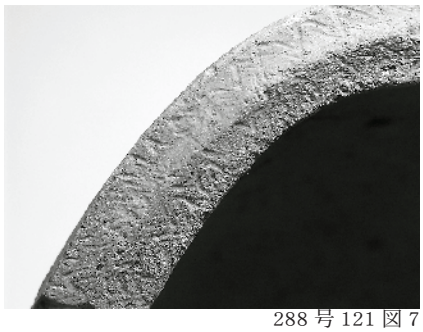

加茂遺跡 C 地点高杯

288 号 121 図 6

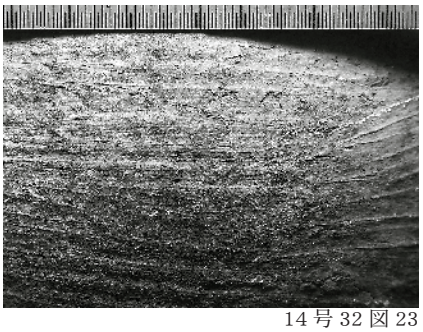
288 号 121 図 7

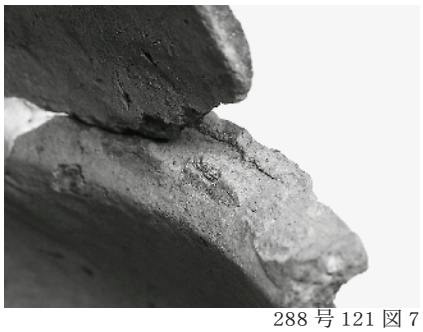

加茂遺跡 C 地点高杯

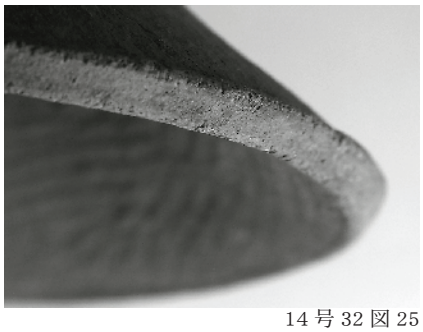
288 号 121 図 6

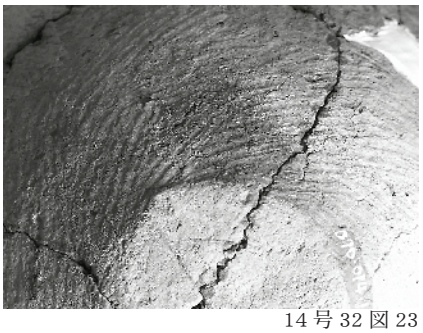

288 号 121 図 7

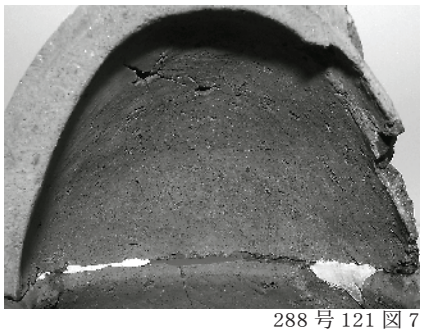
14 号 32 図 25

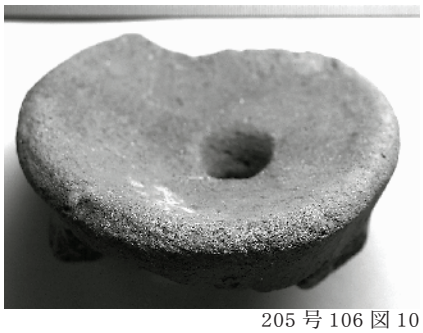

14 号 32 図 23

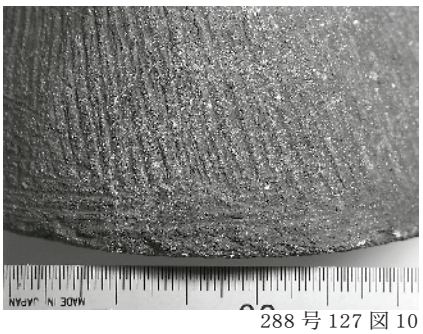

288 号 121 図 7

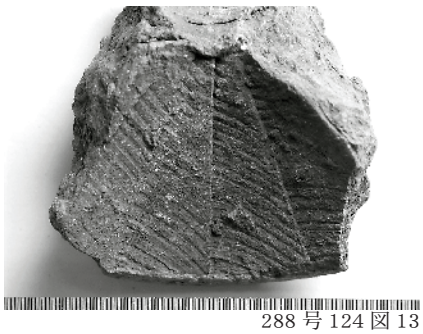

14 号 32 図 25


14 号 32 図 23


288 号 121 図 7

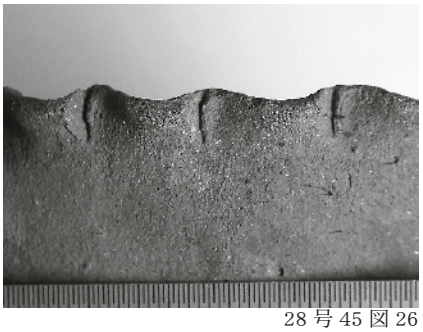

205 号 106 図 10


288 号 127 図 10


288 号 124 図 13

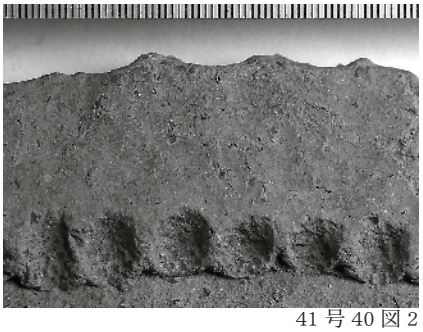
288 号 123 図 13

図版 86

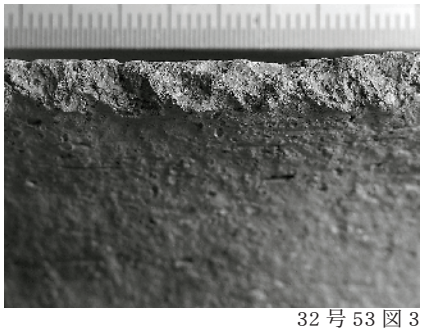

28 号 45 図 26

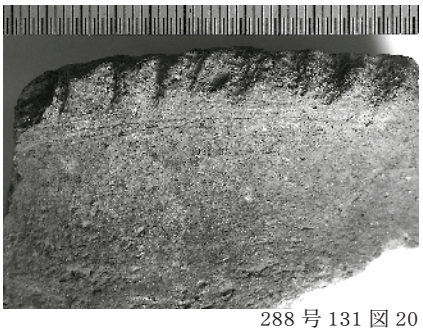
28 号 45 図 19

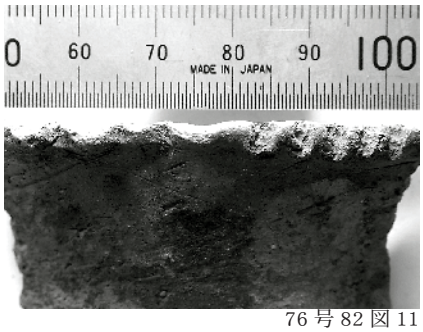
29 号 47 図 2


41 号 40 図 2

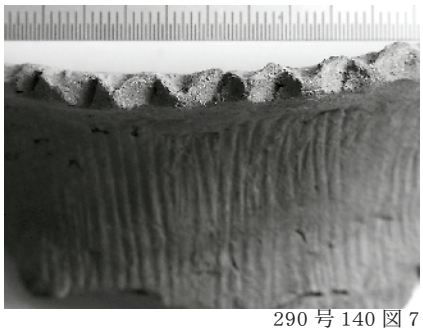
31 号 51 図 20

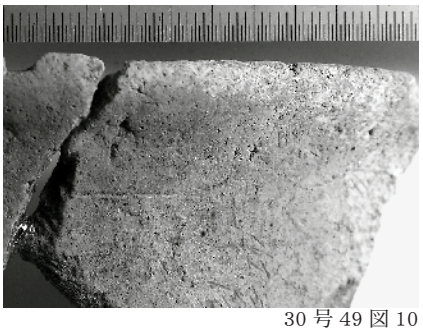

32 号 53 図 3


288 号 131 図 20

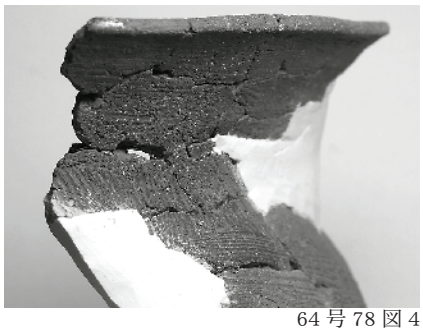


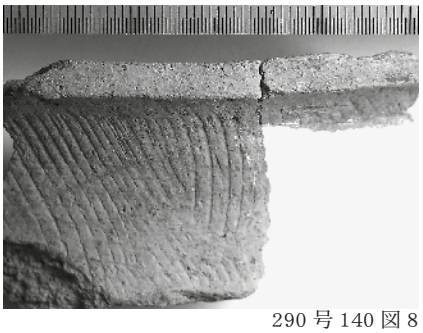
76 号 82 図 11

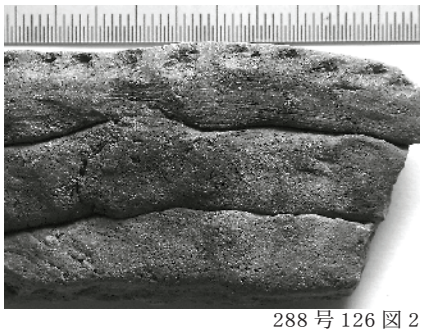

290 号 140 図 7


30 号 49 図 10

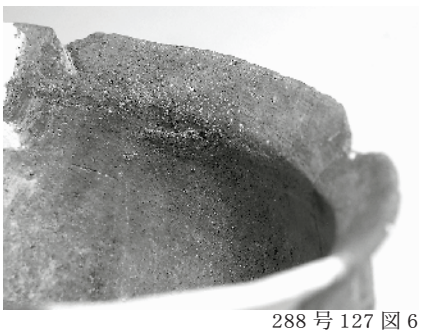
288 号 126 図 11


64 号 78 図 4

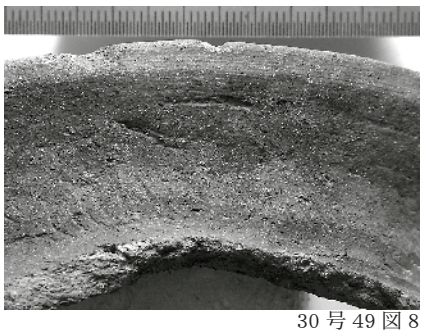

290 号 140 図 8

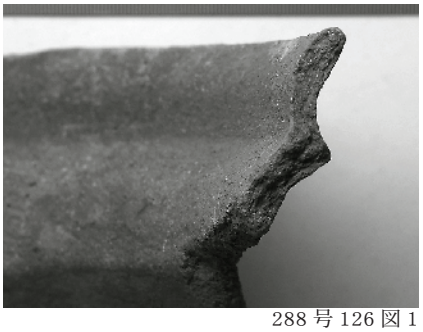

288 号 126 図 2

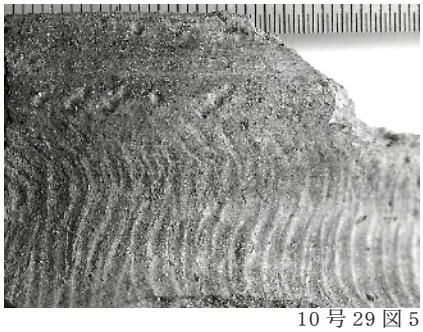
288 号 126 図 9

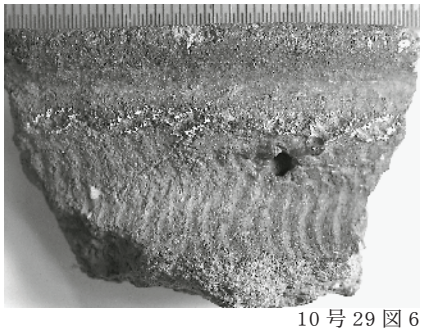

288 号 127 図 6

288 号 127 図 7

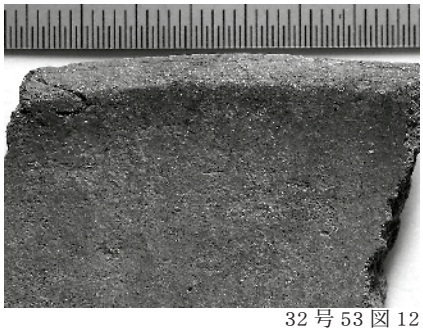

30 号 49 図 8

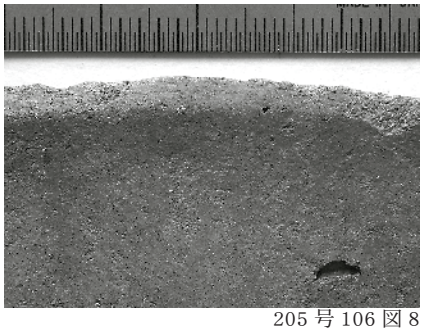

288 号 126 図 1

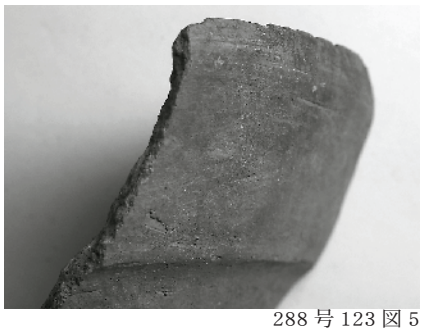

10 号 29 図 5


10 号 29 図 6

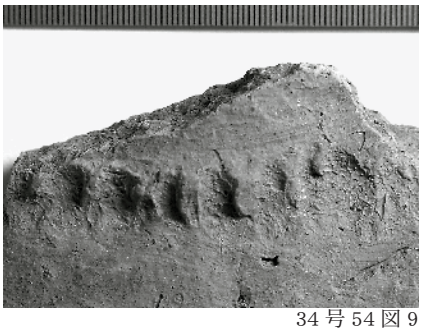
14 号 32 図 15


32 号 53 図 12


205 号 106 図 8

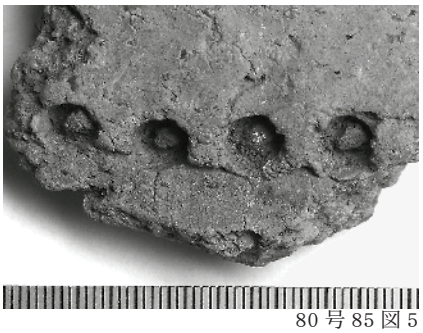

288 号 123 図 5

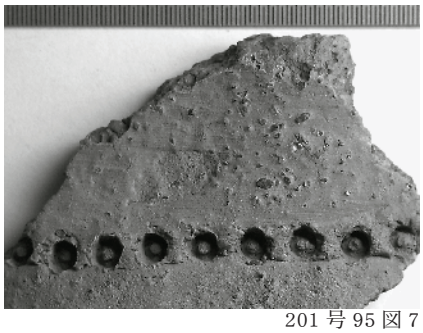
288 号 127 図 16

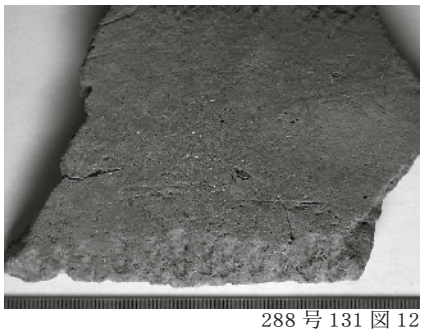

34 号 54 図 9

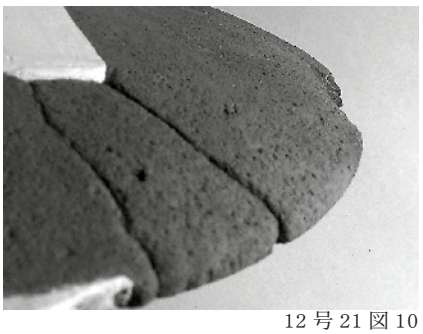
35 号 54 図 25

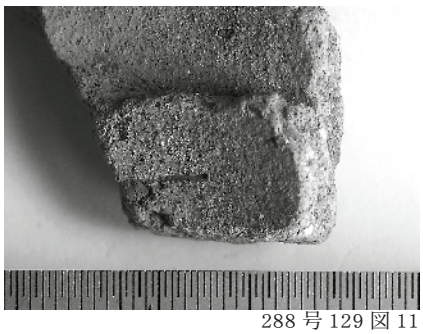
79 号 22 図 8

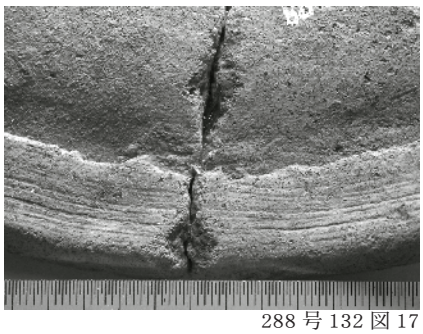

80 号 85 図 5


201 号 95 図 7


288 号 131 図 12


12 号 21 図 10

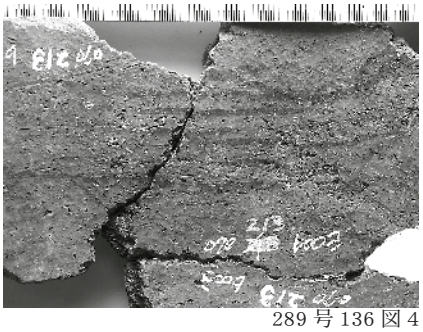

288 号 129 図 11

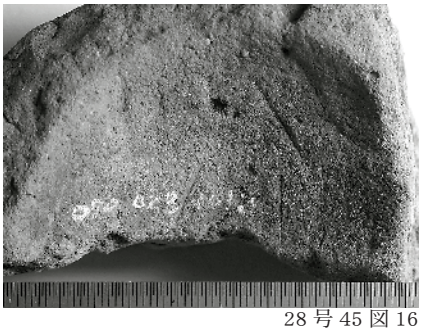

288 号 132 図 17

図版 88

36 号 56 図 10

65 号 79 図 9

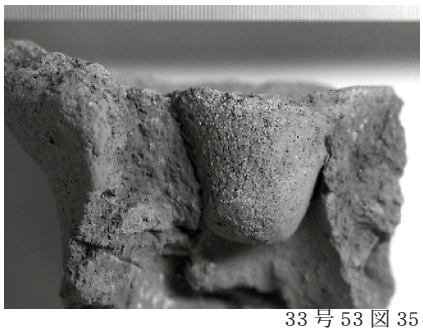

289 号 136 図 4


28 号 45 図 16

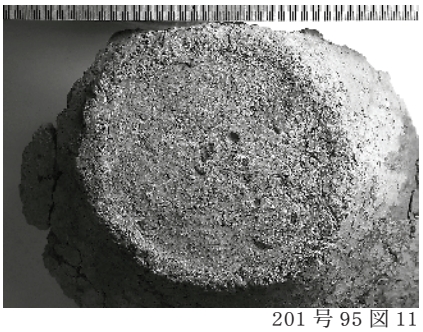
12 号 20 図 32

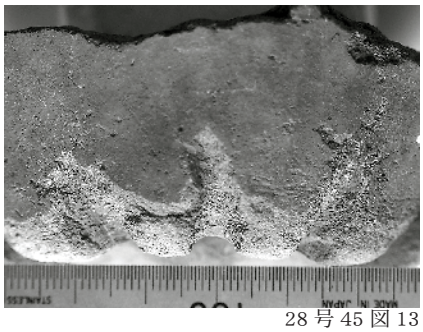
288 号 125 図 26

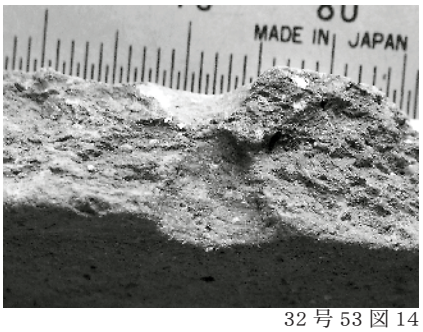
288 号 126 図 15


33 号 53 図 35

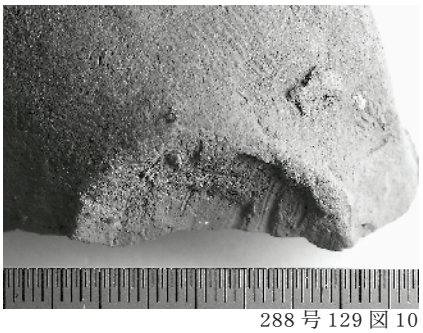
288 号 127 図 18


201 号 95 図 11

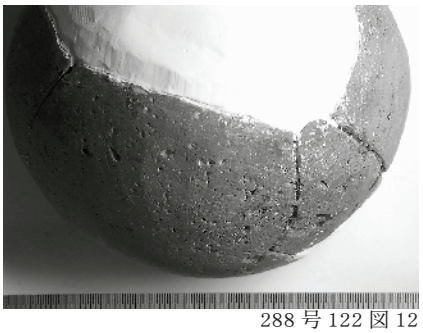

28 号 45 図 13



32 号 53 図 14

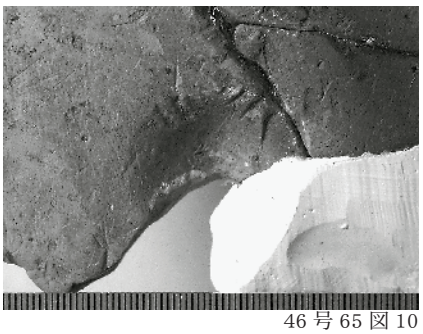

288 号 129 図 10

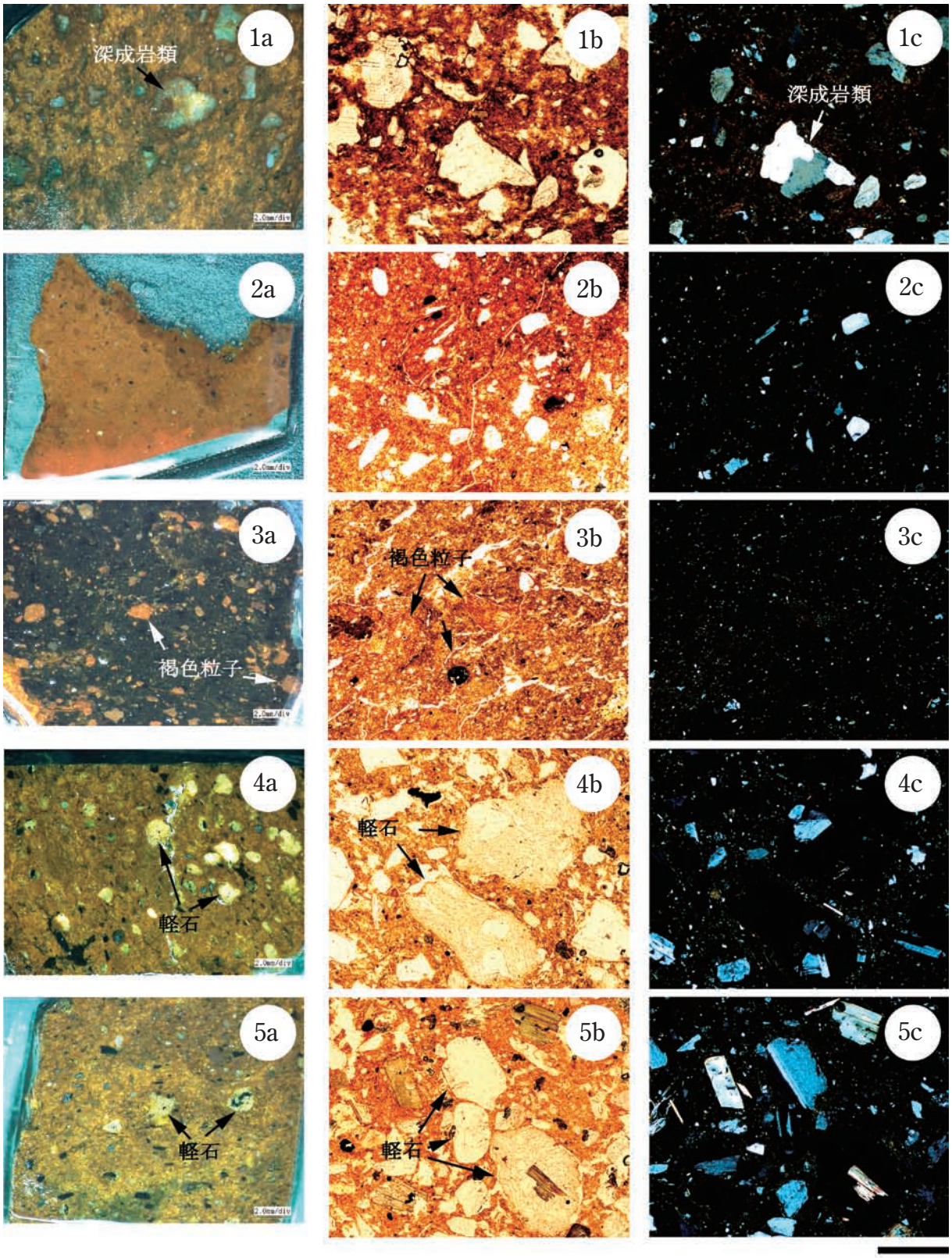
32 号 53 図 13


288 号 122 図 12

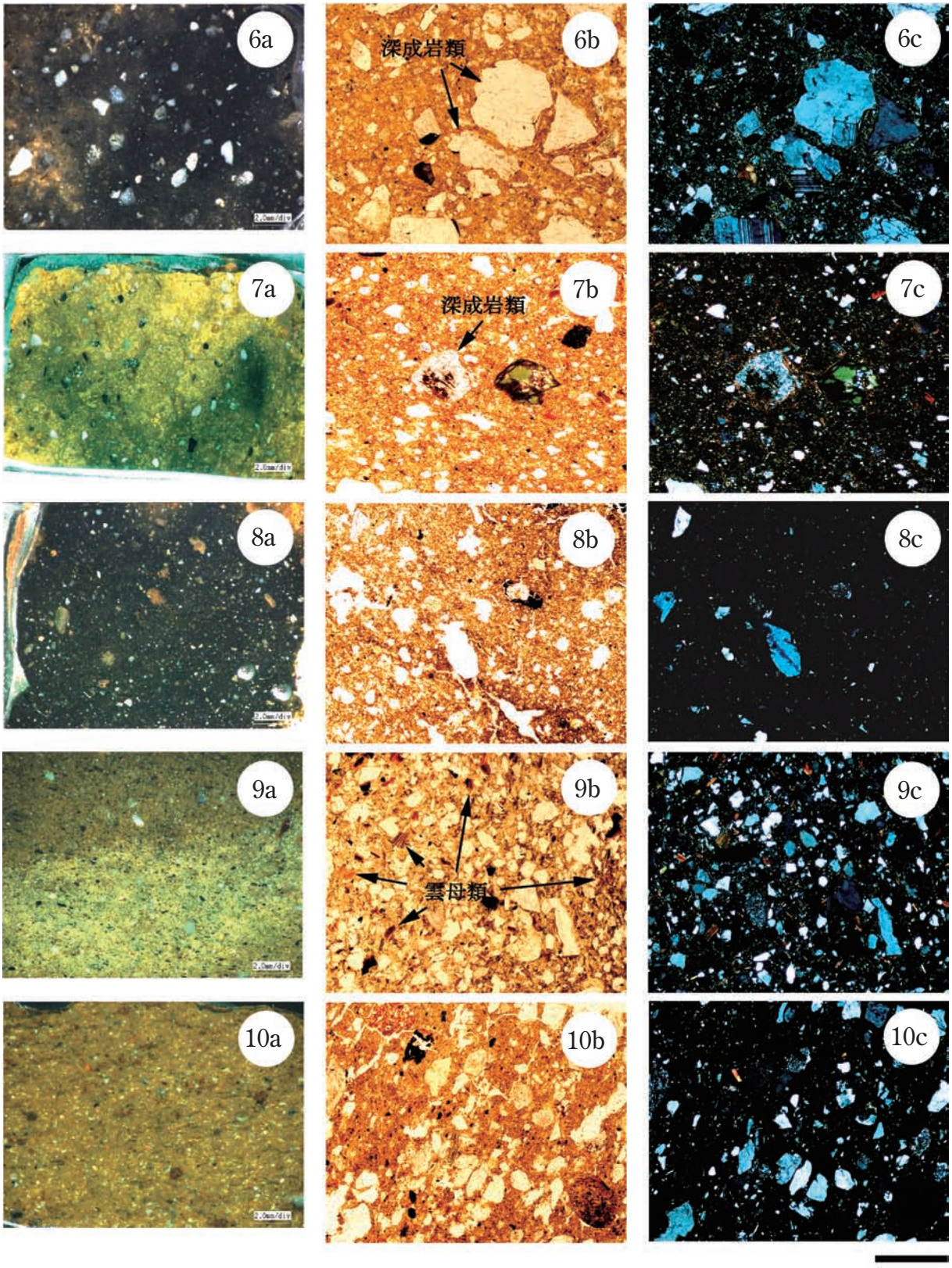
288 号 127 図 13

36 号 56 図 23

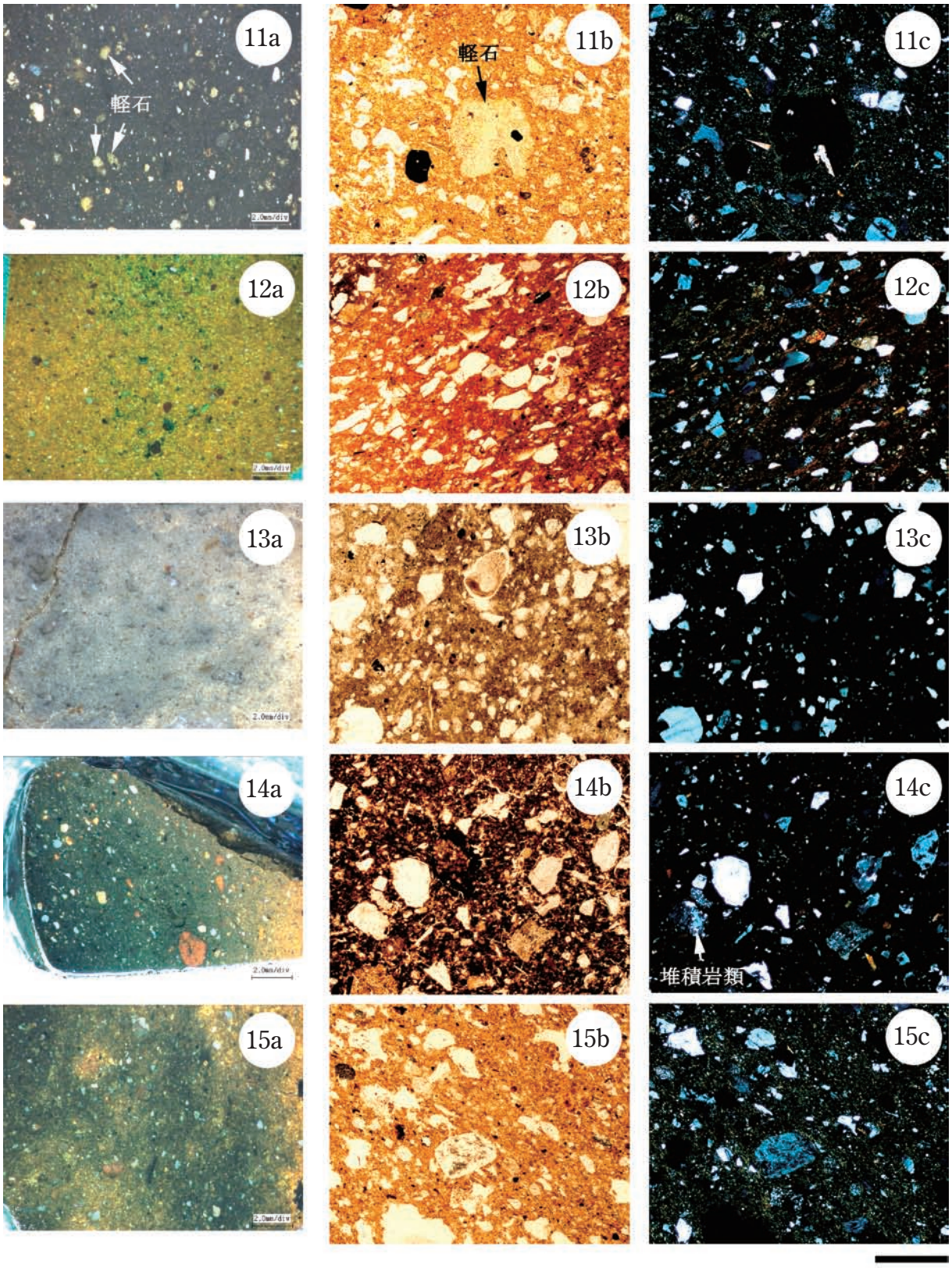

46 号 65 図 10



切断面のマイクロスコープ写真および顕微鏡写真（№は分析№に対応、b と c のスケール 0.5mm）
a. 切断面　b. 開放ニコル　c. 直交ニコル

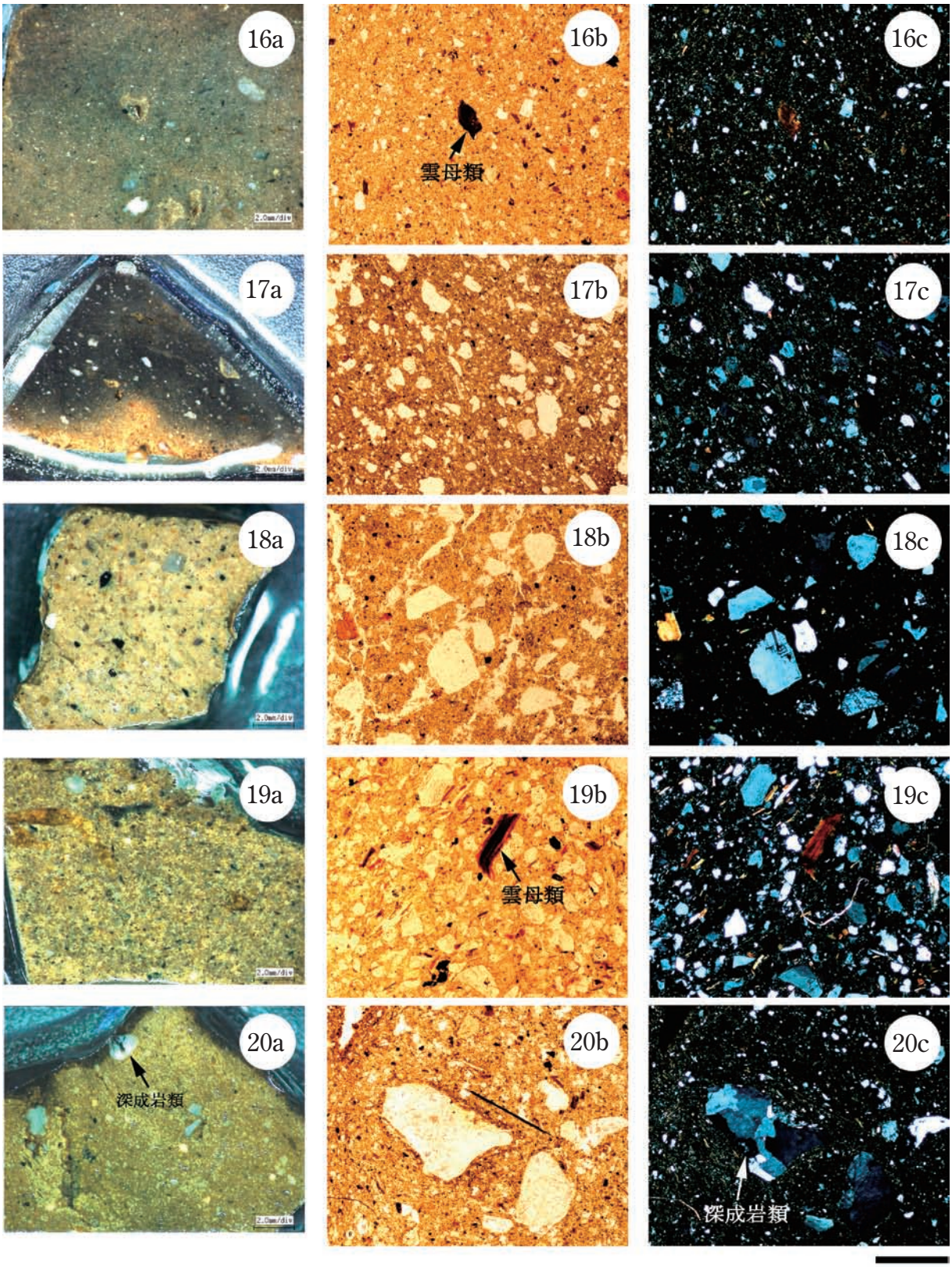


切断面のマイクロスコープ写真および顕微鏡写真（№は分析№に対応、b と c のスケール 0.5mm）
a. 切断面　b. 開放ニコル　c. 直交ニコル

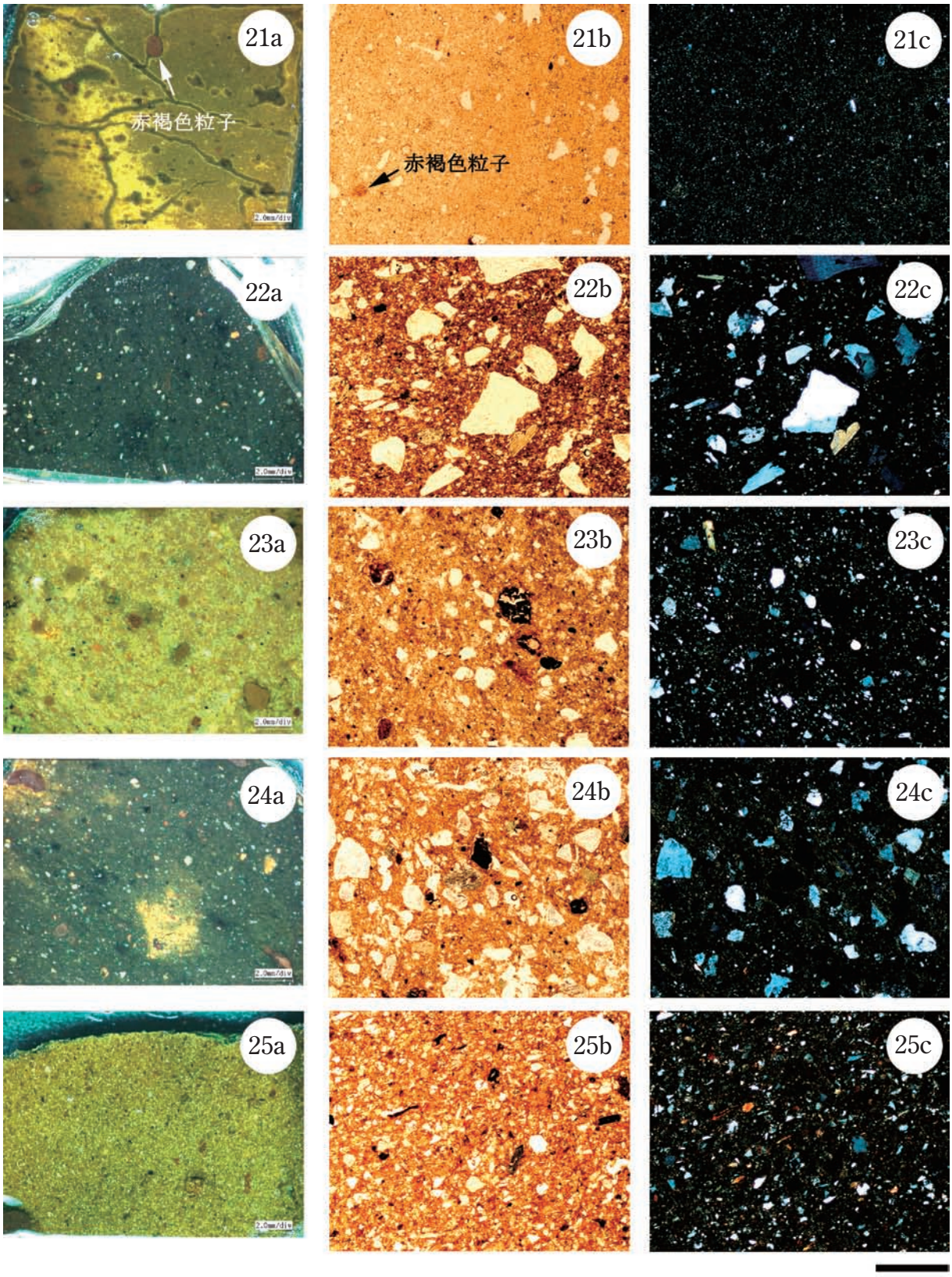


切断面のマイクロスコープ写真および顕微鏡写真（№は分析№に対応、b と c のスケール 0.5mm）
a. 切断面　b. 開放ニコル　c. 直交ニコル

図版 92

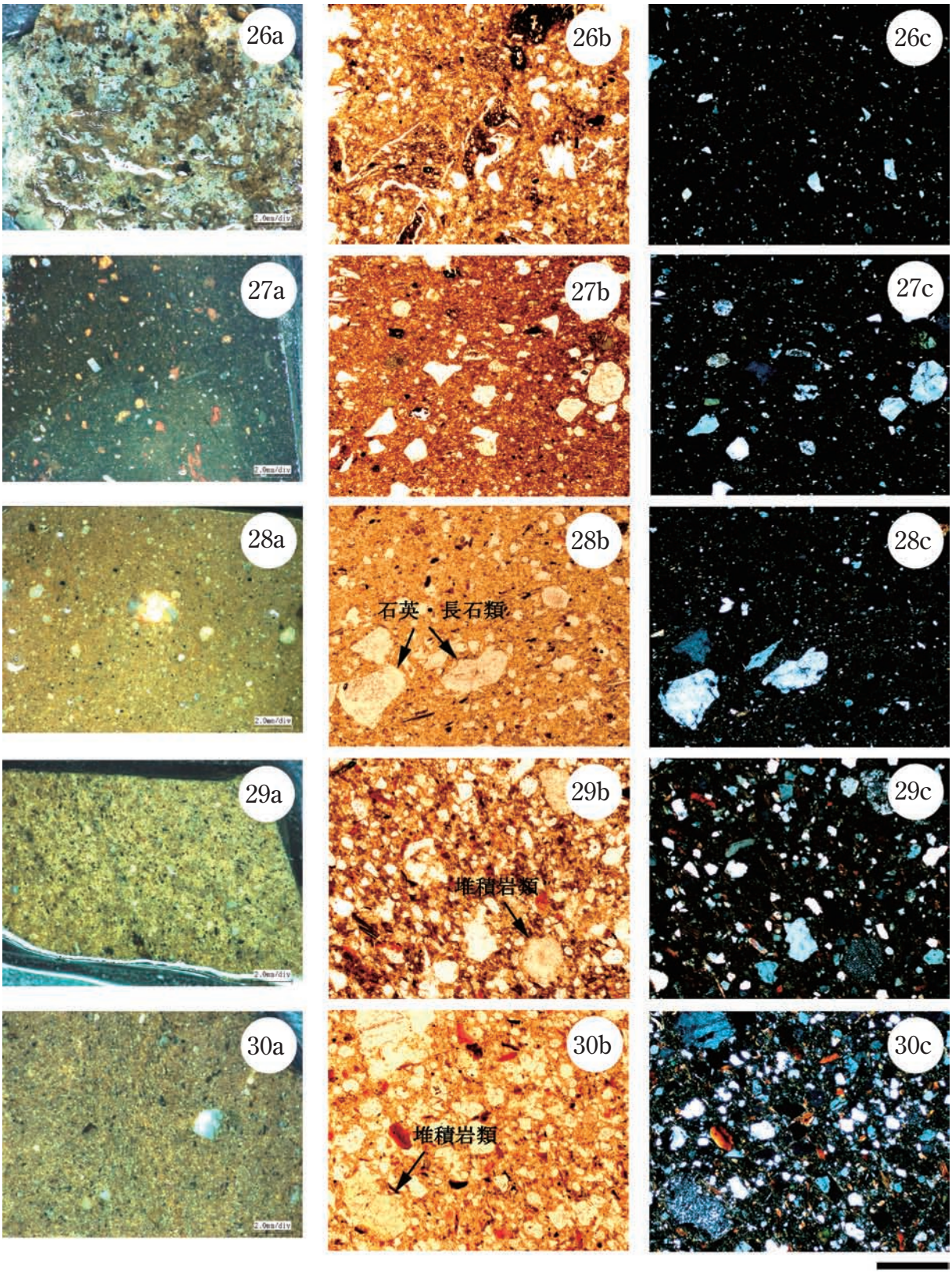


切断面のマイクロスコープ写真および顕微鏡写真（№は分析№に対応、b と c のスケール 0.5mm）
a. 切断面　b. 開放ニコル　c. 直交ニコル

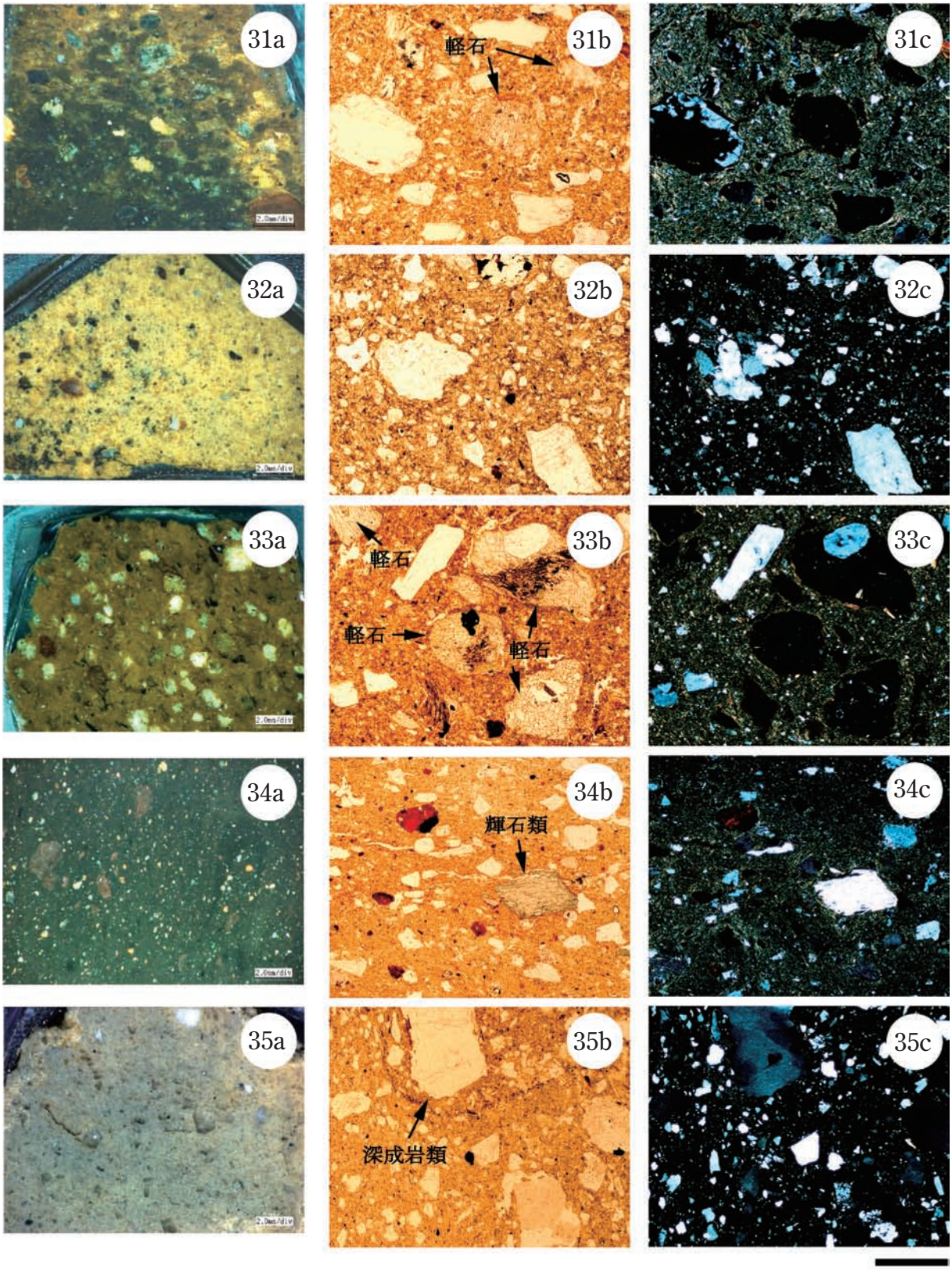


切断面のマイクロスコープ写真および顕微鏡写真（№は分析№に対応、b と c のスケール 0.5mm）
a. 切断面　b. 開放ニコル　c. 直交ニコル

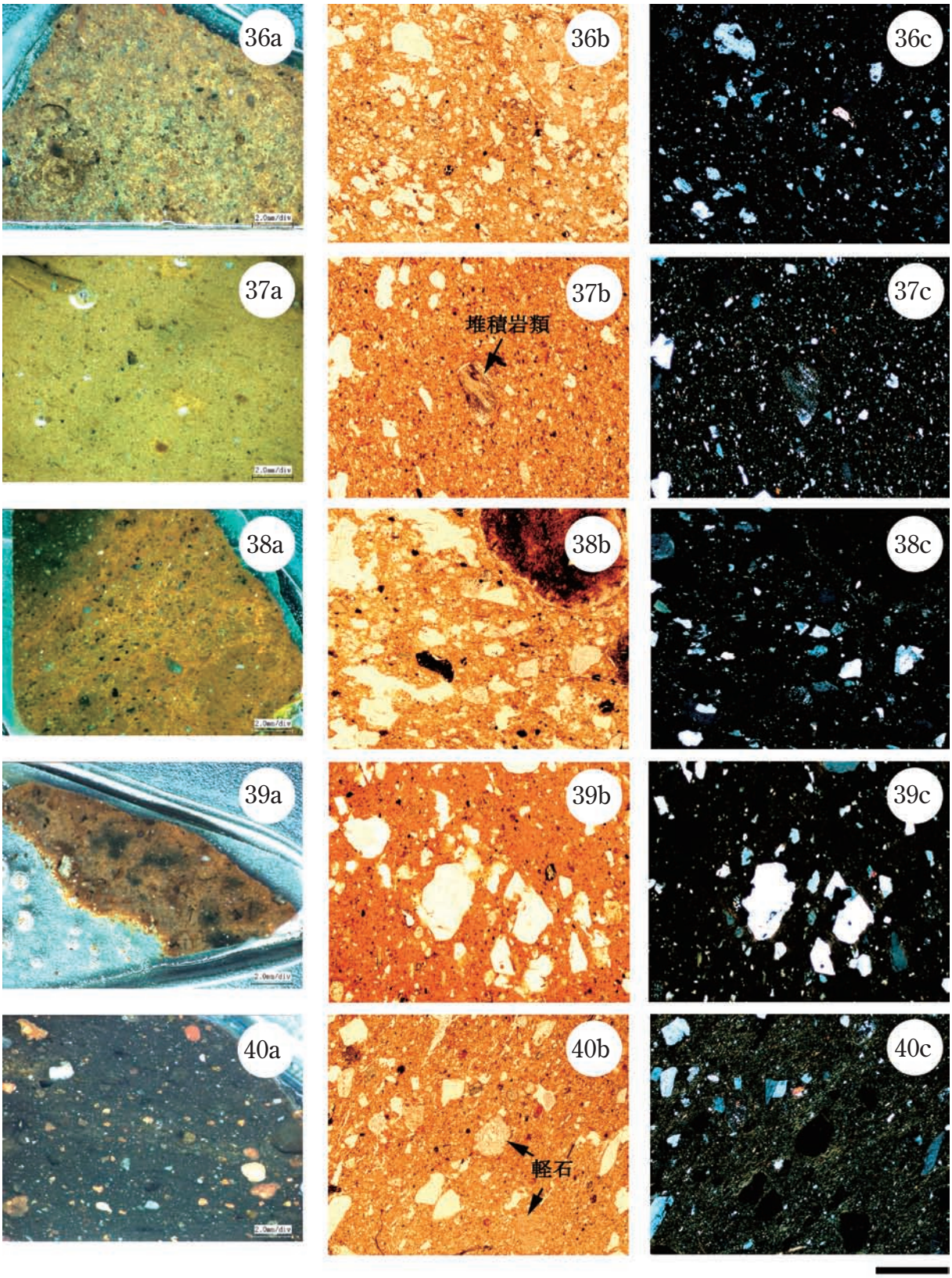
図版 94



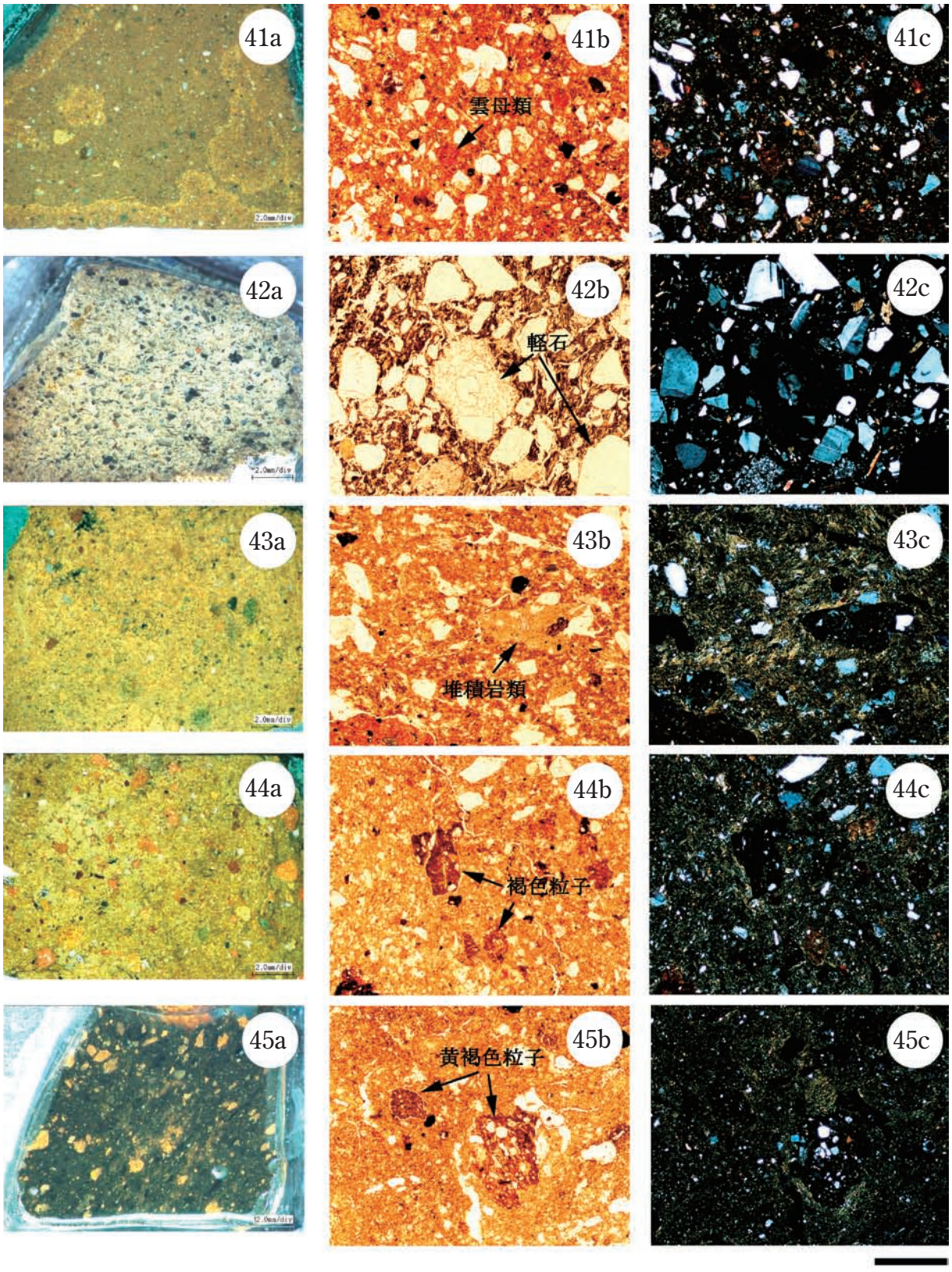
切断面のマイクロスコープ写真および顕微鏡写真（№は分析№に対応、b と c のスケール 0.5mm）
a. 切断面　b. 開放ニコル　c. 直交ニコル



切断面のマイクロスコープ写真および顕微鏡写真（№は分析№に対応、b と c のスケール 0.5mm）
a. 切断面　b. 開放ニコル　c. 直交ニコル

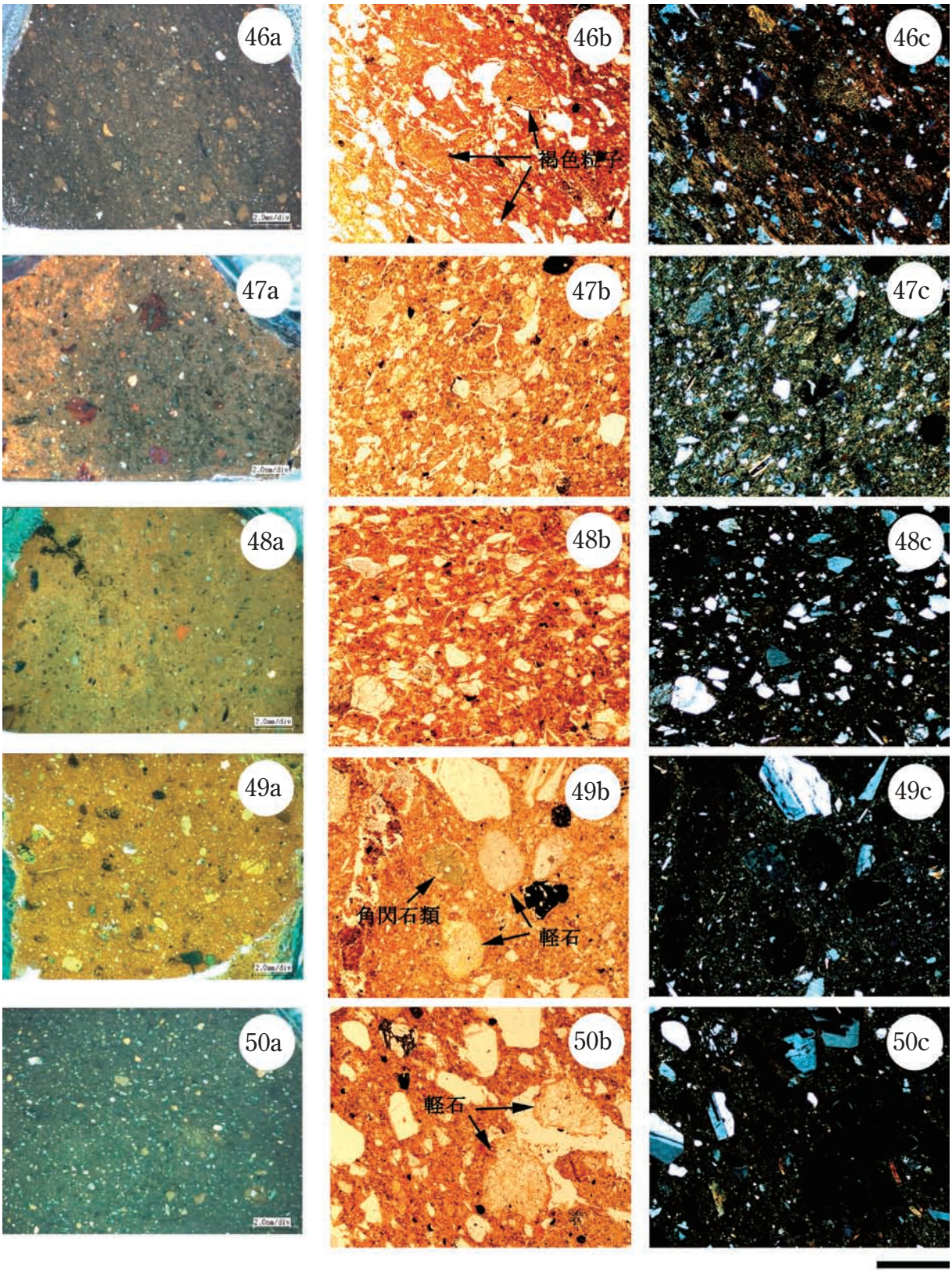


切断面のマイクロスコープ写真および顕微鏡写真（№は分析№に対応、b と c のスケール 0.5mm）
a. 切断面　b. 開放ニコル　c. 直交ニコル

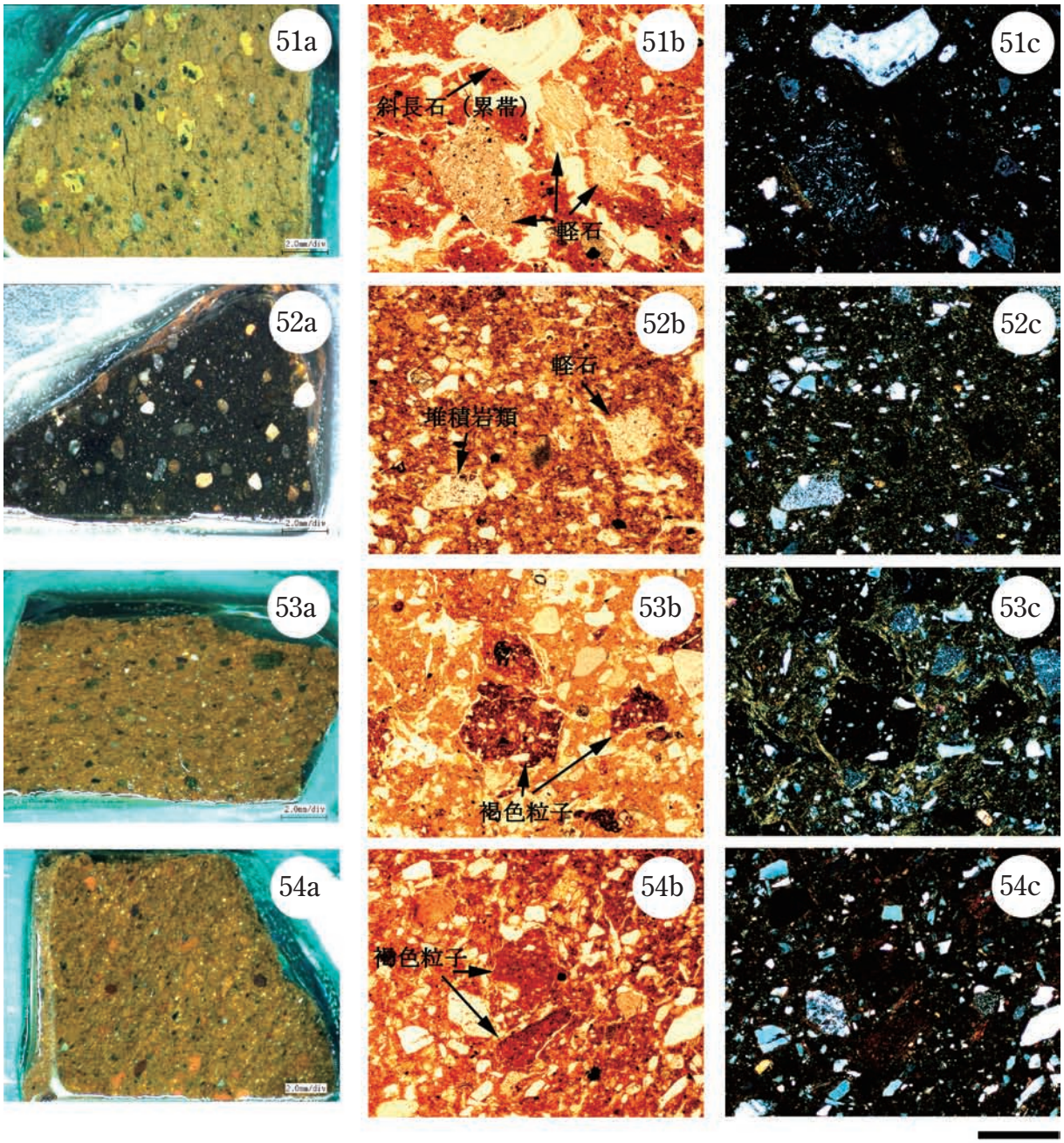


切断面のマイクロスコープ写真および顕微鏡写真（№は分析№に対応、b と c のスケール 0.5mm）
a. 切断面　b. 開放ニコル　c. 直交ニコル

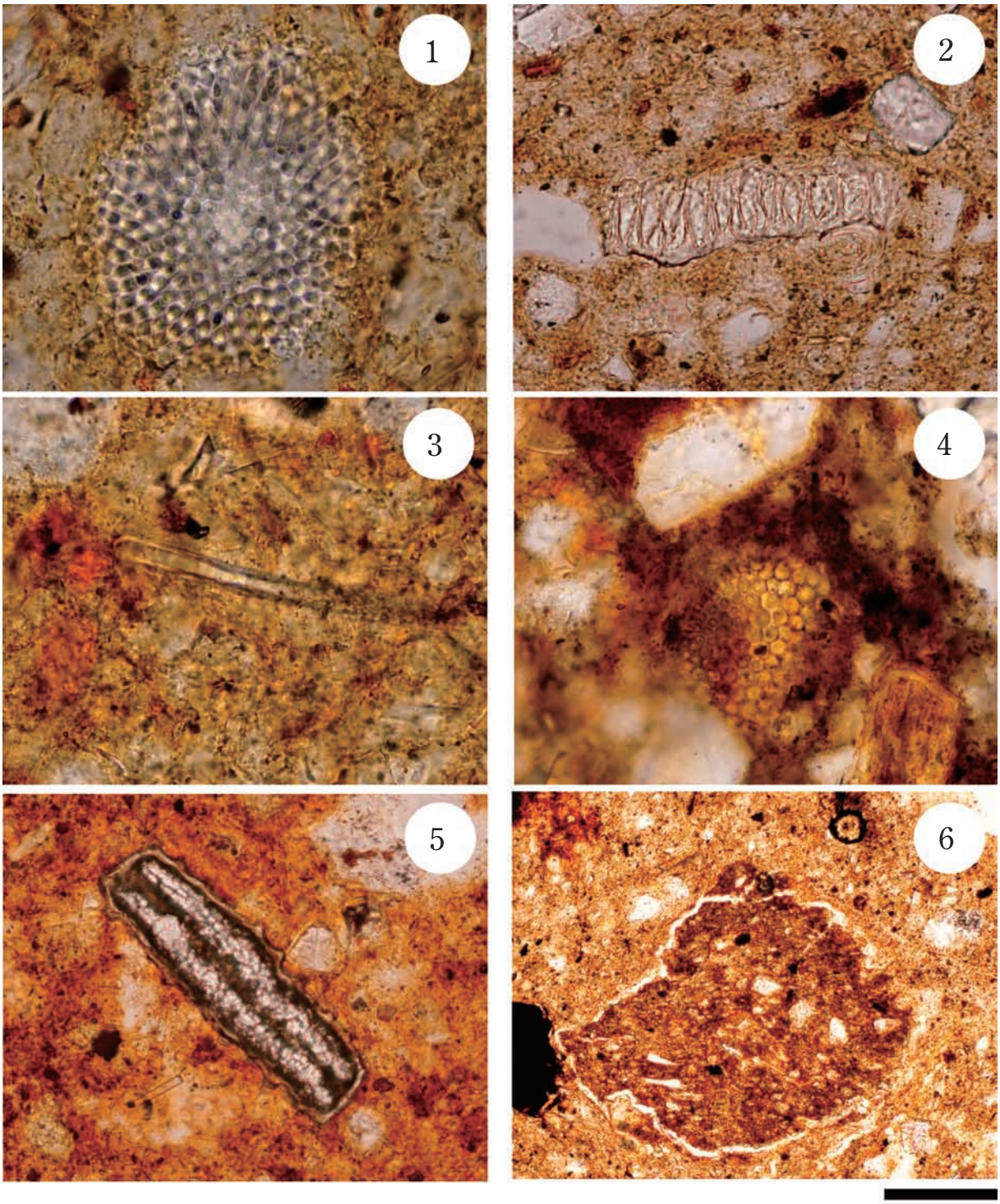
図版 98



切断面のマイクロスコープ写真および顕微鏡写真（№は分析№に対応、b と c のスケール 0.5mm）
a. 切断面　b. 開放ニコル　c. 直交ニコル



切断面のマイクロスコープ写真および顕微鏡写真（№は分析№に対応、b と c のスケール 0.5mm）
a. 切断面　b. 開放ニコル　c. 直交ニコル



胎土中の粒子顕微鏡写真

（スケール；6 が 100 μ m、2・5 が 50 μ m、1・3・4 が 20 μ m）

1. 放散虫化石　分析№ 33　　2. イネ顎珪酸体化石　分析№ 37　　3. 骨針化石　分析№ 33

4. 海水種 *Coscinodiscus* 属 /*Thalassiosira* 属　分析№ 27　　5. 骨針化石　分析№ 2　　6. 粘土粒子　分析№ 45

報 告 書 抄 録

ふりがな	いちはらしちょうべいだいいせき
書名	市原市長平台遺跡
副書名	上総国分寺台遺跡調査報告
巻次	XVI
シリーズ名	財団法人市原市文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第98集
編著者名	小橋健司　安井健一　西野雅人　藤根 久・長友純子（パレオ・ラボ）
編集機関	財団法人市原市文化財センター
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地 Tel 0436（41）7300
発行年月日	2006（平成十八）年2月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ちょうべいだい 長平台遺跡	ちばけんいちはらしそうじゃ 千葉県市原市惣社 2丁目・3丁目他	12219	070	35° 29′ 48″	140° 06′ 50″	19810404 ～19820222	4820	土地区画 整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長平台遺跡	包蔵地 集落跡 古墳	旧石器時代	石器集中1	石器 縄文土器	弥生時代中期末から展開する居住域と、弥生時代後期中葉および弥生時代終末期から古墳時代前期の方形周溝墓群が検出された。 弥生時代後期の方形周溝墓よりガラス玉と銅釧、弥生時代終末期の方形周溝墓からガラス玉と鉄剣が出土した。弥生時代終末期の竪穴住居跡と方形周溝墓からは濃尾地域に系譜の繋がる壺形土器を中心とした非在地系土器が出土した。
		弥生時代中期 弥生時代後期	竪穴住居跡2棟 竪穴住居跡57棟 方形周溝墓3基	弥生土器・石器 銅釧1 ガラス玉31（うち砕片2）	
		弥生時代終末期	竪穴住居跡21棟 方形周溝墓3基	弥生土器・石器 鉄剣1 ガラス玉17	
		古墳時代前期	竪穴住居跡2棟 方形周溝墓13基	土師器	
		平安時代	方形周構状遺構1基	土師器・瓦 中世蔵骨器 寛永通寶	
		近世	土壙墓1		
		時代不明	竪穴住居跡2棟		

上総国分寺台遺跡調査報告XVI
財団法人市原市文化財センター調査報告書第98集

市原市長平台遺跡

2006（平成十八）年2月27日

編 集：財団法人市原市文化財センター

発 行：市原市教育委員会
財団法人市原市文化財センター
〒290-0011 市原市能満1489番地
☎0436-41-7300

印 刷：株式会社ぎょうせい
〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16
☎03-5349-6522㈹